和州葛下郡穴蒸村より掘出したる銅器の銘。木村蒹葭堂の銅器來由私記に曰ふ、「近年和州葛下郡穴蟲村の農夫、地を掘て大甕を得たり、甕破碎して中に一銅器あり、形大なる毬の如く、蓋身を兩分す、身の下に圓足あり、蓋に墓誌銘を小楷にて彫り、其の字鮮明にして句讀すべし、銅器もと鍍金なり、千餘歲を經て本質を變じ、紫綠二色、相交る間に少しく鍍金の色を露はす」云々といへり。此の書は此の墓誌銅器の銘を寫したるものなり。

いなけでんしよ

伊奈家傳書　寫本一卷

農事に關する訓諭奬勵の書付。身枝、家持、屋敷持、田拵、五人組帳前記、檢地條目、其の他等を詳敍せり。伊奈氏は德川幕府時代の關東代官なり。

いなごくさ

螽草　一卷　稻生　正治

婦人の胎敎より、産前産後に於ける攝養一切の事等を記せるものなり。題號は詩經の螽斯の編より取りて命じたりといふ。元祿三年庚午〔二三五〇〕稻生義宣の序あり。

◉稻生正治は慶長十五年庚戌〔二二七〇〕大阪に生る。字は見茂、恒軒と號す。古林見宜に就きて醫を學び、悉く祕訣を受く。業成りて江戶に遊び、新井白石、室鳩巢等に稱せらる。淀侯永井尚征の侍醫となり、延寶六年病みて大阪に歸りぬ。延寶八年庚申〔二三四〇〕七十一歲にて歿せり。

いなごしふ

いなご集　二冊　北村　季吟

著者の俳諧集なり。後西院天皇の明曆二年丙申〔二三一六〕八月五日の編輯にかゝる。

◉北村季吟の傳は『源氏物語湖月抄』の下にあり。

いなだぜんばうちりかうしよう

稻田禪坊地理考證　一卷　僧　洸心

常陸國茨城郡稻田村西念寺の舊事を考證したるもの。同寺はもと淨土眞宗の祖師、錫を留めて道俗を敎化したるところなりといふ。諸書に徵して其の蹟地を考證せり。文久三年癸亥〔二五二三〕九月、黑川春村の序あり。其の文中に、我が友洸心ひじり云云とあれば、同時の人なること知るべし。

いなだひめじんじやえんぎ

稻田姬神社緣起　寫本一卷

常陸國なる稻田姬神社の來歷緣起を記したるものなり。著作の年月詳ならず。

いなばし

因幡志　寫本八卷　安倍　惟親

因幡一州の風土、郡鄕村里の事實、及び古今の沿革、治亂の蹟等を、正史雜書に考索して、記載したるものなり。寬政七年乙卯〔二四五五〕の序あり。

いなばし

因幡志　寫本一卷

因幡志中の神社考にて、大小神社五十座の緣起考證なり。『延喜式』神名帳に載する所の目によりて、抄出考說せり。

いなばしふ

稻葉集　二卷　本居　大平

著者の詠歌。春夏秋冬戀雜に類聚して短歌總數、九百數十首を載せたり。文政七年甲申〔二四八四〕正月の三井高匡の序中に、「年あるあきの千町田ひろく、わせ、おくてとうちまじりて、よなひさかゆるを、稻葉集とみづから名づけおかれたるを」云々といへるは、正しく題號の出所を紹介したるものなるべし。本書或は『稻葉集題詠』といふ。

◉本居大平の傳は『古學要』の下にあり。

ゐなはしろりやうかどうよおんじふいつかそんよろづあらためおぼえがき

猪苗代領河東與三十一箇村萬改覺書　寫本一卷

奧州河沼郡猪苗代領河東與三十一箇村若松よりの行程方位、戶口、牛馬、田畑、原野、年貢、產物、社寺、古城等を記したるものなり。

いなばみんだん

因幡民談　寫本七卷　小泉　友賢

因幡國郡鄕山川圖、法美、八上、智頭、邑美、高草、氣多、岩井、八東、以上八郡の各圖、山名氏時代諸城圖、毛利氏時代諸城圖、豐臣氏時代諸城圖、德川家康時代諸城圖等を揭げ、郡鄕庄保、產物、年貢石高、神社寺院、國主沿革等を記し、古文書を輯め、和歌俳諧等をも錄せり。國主部の條に、寬文十三年癸丑〔二三三三〕洪水の項までを記せり。

◉小泉友賢は因幡國鳥取の人にして、松平吉泰〔池

田氏〕に仕へたりといふ。

いなほさうもくしゆせんなんによりやくづ

稻穗草木種撰男女畧圖　一枚　服部　保則

名の示す如く、稻穗、及び草木の種子の雌雄を圖解したるものなり。宮負佐平の『五穀果實、並に竹の男女考』といふに倣ひて、著せるものなれば、同書と大同小異のものなり。天保六年乙未〔二四九五〕六月の著に係る。

◉服部保則は播磨國明石藩の人にして、武藏國一宮中野神社神官中野春豐の門人なりといふ。

いなむしろ

いなむしろ　二冊　鈴木　淸風

俳句の集なり。年代は明記せざれど、蓋し貞享比〔紀元二千三百四十年代〕のものなるべし。

◉鈴木淸風は俳諧師にして、奧州尾花澤の人なり。本書の外に俳諧一稿、おくれ双六等の著あり。

いなりじんじやかう

稻荷神社考　二卷　前田　夏蔭

稻荷神社に關する考證にして、建社原始、神名釋義並神像、神位次第、奉幣使例祭行幸始、三社舊趾、攝社、五社異傳、命婦社の八項に分ちて、詳確なる考證をなしたり。天保七年丙申〔二四九六〕の松崎復、村田春門の序、藤原豐城の跋あり。

◉前田夏蔭は江戶の人、寬政五年癸丑〔二四五三〕生る。初め垂穗と號し、後鶯園と號し、健助と稱す。清水濱臣に從ひて和學を修め最も考證學に長ぜり。晚年幕府に仕へて蝦夷地取調掛を命ぜられて開墾の事に與かる。元治元年甲子〔二五二四〕八月二十六日、七十二歲にて歿す。

いなりじんじやきひけつ

稻荷神社記祕訣　寫本一卷　羽倉　廣滿

神道家の臆斷によりて稻荷の名義、祭神の事及び狐神と混同したること等を論ぜり。享保十九年甲寅〔二三九四〕九月、人の需に依り、往時の見聞錄を修正して門人に授けたる由奧書に記せり。

◉羽倉廣滿は父祖に繼ぎて伏見稻荷社の祠官たり。生死の年月及び其の經歷を詳にせず。

いなりだいみやうじんえんぎ

稻荷大明神緣起　三卷　松本　爲起

稻荷大神の古緣起を網羅したるもの。成書の來歷に就きては、伴部安崇の奧書中に云へることあり。「右稻荷大明神緣起上中下三卷、垂加靈社之門人、山城國稻荷社司松本爲起、草二稿之一、得二垂加靈社之筆削一以成、予藏二納之於其社一也」云々と。享保十三年戊申〔二三八八〕六月二日記せり。

◉松本爲起は秦氏にて伊豫の松山に住み、味酒佐兵衞と號し、盛に神道を說きたりといふ。著書は別に『神名帳比保古』あり。

いなりだいみやうじんえんぎ

稻荷大明神緣起　寫本一卷

『稻荷流記』を、終始假字書にしたるものにて、更に稻荷の山神祠、文正年中〔二千一百二十年代〕火災後再興に係る勸進狀を添へたり。

いなりちんざゆらいき

稻荷鎭座由來記　寫本一卷

稻荷大明神流記、龍頭太事、命婦事、等を記して稻荷社に關する俗間の由來說を記載せり。『續群書類從』卷三十三に收む。

いなりでん

稻荷傳　寫本一卷　小西　篤好

『神祇拾遺』の說を擧げ、案を加へて稻荷大神の祭禮を述べたるもの。著者の奧書あり、「予寓二于泉州一、講二神代中臣兩書一、諸生請二稻荷傳一、旅中無レ可二徵者一、姑出二囊中所レ著之支辭一、而書二本末一以與レ之、猶待二後世一者也」云々といへり。

◉小西篤好の傳は『農業餘話』の下にあり。

いなりぶつきりやう

稻荷服忌令　寫本一卷

此の書、具には『稻荷社家物忌令』とて、稻荷社に仕ふるもの、死亡、生產、肉食、辛食、同火等に於ける服忌日數を書きつけたるものなり。紙數僅に一枚。『續群書類從』卷八十に收む。

いなりやまえんぎ

稻荷山緣起　寫本一卷

武藏國豐島郡市ヶ谷本村にありて、世俗栗津稻荷といふ神社の緣起なり。太田道灌其の臣栗津氏部と共に山城國稻荷明神の夢告によりて、江戶城を築き、北廓向の岡といふ所に、同稻荷明神を勸請

し、廓內の鎭と祭り、其の後遠山四郞左衞門城代たりし時、此の處に移し祭りし由來を記し、次に唯一神道の說に基きて、稻荷神の伊弉册尊なること、『神社啓蒙』の說によりて、延喜年中、大山祇女倉稻魂土祖神此の三神を修造して稻荷大明神とせしこと、兩部習合の說を引きて稻荷大明神の本地は十一面觀世音なること、其の他靈驗不思議の奇蹟等を記したるものなり。中に寬延三年庚午（二四一〇）十一月廿四日、靈夢を蒙りたる等の事もあり。

いなりやまじふにけいきならびにしぐわ

稻荷山十二景記並詩畫　一卷　荷田信卿

山城稻荷の十二景、三峰翠嶺、祓川櫻花、不凋流泉、平泉矮松、孤樹返景、阪道驟雨、劔嶺蒼苔、杉間宵楓、栗谷急湍、三角明月、新池水禽、重山白雪等の記並に圖なり、自序跋を附す。

◉荷田信卿は子晟と字し、稻荷の祠官なり。

いなりりうのき

稻荷流記　寫本一卷　僧眞雅

稻荷鎭座の由來、龍頭太の事、命婦の事等を述錄したるものなり。弘仁七年丙申（一四七六）弘法大師紀州田邊に於きて異相の老翁に逢ひ、前世誓約の談ありしこと、同十四年四月東寺の南門に再會の時、兩女二子を引率したりし事、荷田氏の先祖、山を弘法大師に讓り、稻荷社建立の事、洛北船岡山の老狐稻荷明神に依賴せしこと、其の他の俗說を載せたり。

◉眞雅は眞言宗の僧侶なり。延曆二十四年乙酉（一四六五）に生れ、九歲にして弘法大師に從て學び、十九歲にして具足戒を受け、淸和天皇の貞觀六年甲申（一五二四）僧正に敍せられ、車に御して皇城に出入することを許さる。元慶三年己亥（一五三九）正月、七十五歲にて入寂す。著書には『觀心寺緣起』の別著あり。

いにしへのふう

いにしへの風　寫本一卷

筆に任せて種々の事を記したる雜書にして、詩歌の事、古書の考等あり。卷首に赤崎楨幹の紀行「古の風」といふを揭ぐ。その記中、楨幹の歌に、「あふげ猶民の草葉に咲のこす、かしこき君のいにしへの風」といへるより、その紀行をいにしへの風と名け、其の紀行を揭げたる本書をも、やがていにしへの風とは名けたるなり。

いぬおふもの

犬追物　寫本一卷

繩の長さ、太さ、打樣等より、犬追物の規定に關する數十項を記述せしものなり。表題の下に、「繩之長」と記したるは、卷頭の一項によりて標目としたるものなるべし。

いぬおふもの

犬追物　寫本四卷

弓馬故實の書にて、犬追物に關する諸則を記せり。第一册に二十六條、第二に五十七條、第三に三十七條、第四に四十三條あり。『弓馬雜集』第十五、十六、十七、十八に收む。

いぬおふもの

犬追物　寫本一卷　畠山政忠

犬追物故實の傳書にて、數十箇條を詳說せり。永正七年庚午（二一七〇）三月五日、上原豐前守に傳ふる所なり。『弓馬諸式』の中に收む。傳者畠山政忠は式部少輔なり。

いぬおふものいてぐそく

犬追物射手具足　寫本一卷　伊藤幸民

犬追物射手の具足に關する故實を說示したるものなり。諸書の說を例擧せり。中御門天皇の享保十二年丁未（二三八七）の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものいてことばしふ

犬追物射手詞集　寫本一卷　伊藤幸民

犬追物射手音語の故實につき、諸說を引用して說示したるものなり。中御門天皇の享保十二年丁未（二三八七）の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものいてのはふ

犬追物射手之法　寫本一卷　伊藤幸民

犬追物射手犬射樣種々の故實につき諸家の說を總合せり。『犬追物射手覺悟集』と內題す。中御門天皇の享保十二年丁未（二三八七）の作。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものいてやしふ

犬追物射手矢集　寫本一卷　伊藤幸民

『犬追物全書』其の他の諸說を擧げて、射手矢に關することを說明せり。享保十二年丁未（二三八七）の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものかいそへのこと

犬追物介副之事　寫本一卷

弓馬故實の書にて、犬追物介副に關する諸式五十五箇條を記したるもの。『弓馬叢集』の中に收む。

いぬおふものきゝがき

犬追物聞書　寫本一卷　小笠原元廣

犬追物の方法故實を論じ、「右此札者、曾祖父美濃入道宗元禪門書置ける事共を、元廣如此書聚に、草安也、當家祕事共也、元廣以自筆書之」と奧書せり。

いぬおふものくずぶくろ

犬追物葛袋　寫本一卷　宗仁

犬追物の矢沙汰に關する口決なり。葛袋といふ事は、小笠原長時、此の卷物を、葛の袋に入れて、常に懷中したりしより名けたりといふ。前に矢沙汰の古歌數十首を揭げたり。天文十八年己酉（二二〇九）正月十八日、著者が碓井二郞三郞といふものへ傳授したるところなり。『續群書類從』六百七十五の卷、武家部第二十一に收む。

◉宗仁は歸本軒と號し、別著に犬追物方、笠懸、萬式大笠懸等の著あり。

いぬおふものくでん

犬追物口傳　寫本一卷　小笠原宗元

犬追物傳書にて、文明六年甲午（二一三四）正月十一日、小笠原美濃入道宗元の奧書あり。『弓馬雜纂』の中に收む。

いぬおふものくでんにつき

犬追物口傳日記　寫本三册　柳原資定

犬追物に關する一切の方法故實を圖說す。今、見るところは、資定自筆の本にして、自記の奧書あり、「此口傳日記者爲當家之祕說、對其人所面授口訣也、雖非可注置、爲所傳之證據大概記之、次第之相傳不可勝計、爭盡紙墨哉、先人曰、非其器、輙莫授之、只深祕之、不令作道之聊爾而已」といへり。

◉柳原資定の事は『袷帷子着用時節』の下にあり。

いぬおふものけんみ

犬追物檢見　寫本一卷　小笠原植盛

犬追物檢見故實に就て、小笠原民部少輔植盛の口授を、後藤但馬守氏豐の聞書したるものなりといふ。天文二十三年甲寅（二二一四）の寫本による。『弓馬雜纂』の中に收む。

いぬおふものけんみしやうぞく

犬追物檢見裝束　寫本一卷　伊藤幸民

犬追物檢見裝束に關する故實を說明す。享保十二年丁未（二三八七）の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものけんみのき

犬追物檢見記　寫本一卷　多賀高忠

犬追物檢見に關する故實の條々を記したるものなり。凡て數十條より成る。奧書に、著者が壬生の官長者へ相傳の物なる由を記せり。『續群書類從』六百七十四の卷、武家部第二十に收む。

◉多賀高忠の傳は『當流聞書』の下にあり。

いぬおふものけんみやさた

犬追物檢見矢沙汰　寫本一卷　伊藤幸民

犬追物極要集以下の諸說を擧げて、檢見矢汰沙に關する故實を說明したるものなり。享保十二年丁未（二三八七）の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものけんみよびつぎ

犬追物檢見呼次　寫本一卷　伊藤幸民

犬追物奧行の時檢見呼次に關する故實を說明す。諸書の說を擧ぐること多し。享保十二年丁未（二三八七）の作。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものごらんのき

犬追物御覽記　一卷　林恕

寛正六年乙酉(二一二五)八月二十二日、將軍慈照院、細川右京太夫勝元の馬場に、犬追物を見物したる時の次第を記したるものなり。萬治三年庚子(二三二〇)五月、春齋の奥書あり、「右一帖忝蒙台命、列供奉之後、候棧敷之末而見之、他日逢薩州家老島津久通、尋其次第、記之爲一卷、以爲家藏者也」と。

◎林恕の傳記は『本朝通鑑』の下にあり。

いぬおふものさうこんしふ

犬追物草根集　寫本　一卷　小笠原持長

主として犬追物矢判定に就きて論じたるものなり。即ち矢の位置を圖して、各說明を附し取捨勝敗を示せり。嘉吉元年辛酉(二一〇一)十二月二十六日の記に係る。『續群書類從』六百七十六の卷、武家部第二十二に收む。

◎小笠原持長の傳は『犬追物集書』の下にあり。

いぬおふものしだい

犬追物次第　寫本　一卷　足利尊氏

犬追物故實にて一名を『騎射祕抄』といひ、卷頭に「當家用此流、信我者可用此流、尊氏御判」と記せり

◎足利尊氏の傳記は『等持院殿百首』の下にあり。

いぬおふものしふしよ

犬追物集書　寫本　一卷　小笠原持長

犬追物故實の書にて、文明十五年癸卯(二一四三)多賀高忠の奥書あり。『弓馬叢集』の中に收む。

◎小笠原持長は、政康の子にして、民部少輔たり。父の職を嗣で、義政の師となり、後入道して淨元と號す。寛政三年辛亥(二一四五一)六月十六日卒せり。年六十七。著書は本書の外に、犬追物事、射儀私記、射御拾遺集、射御持長記、射禮私記、出陣聞書、騎射祕抄、弓馬聞書等あり。

いぬおふものしようぶみやうもく

犬追物勝負名目　寫本　一卷　伊藤幸民

『骨法記』以下の諸說を擧げて、勝負名目を說示したるもの。享保十二年丁未(二三八七)の奥書あり。

◎伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものせいきやう

犬追物勢鏡　寫本　二卷

犬追物の矢沙汰に關する圖解なり。繩張、矢方向等を圖して各故實的說明判斷をなせり。一名『犬追物日記』ともいひて上下二卷より成る。『續群書類從』六百七十五の卷、武家部第二十一に收む。

いぬおふものつけがみにつき

犬追物付紙日記　寫本　一册　多賀高忠

一名『高忠付紙日記』の下に解題せり。

いぬおふものづせつ

犬追物圖說　寫本　一卷　伊勢貞丈

犬追物に關する故實法式を圖解せる書なり。著者は延享元年に、『犬追物類鏡』四卷を著しゝが、其の遺漏と圖畫ならば了解し難き事どもとを、殊にとりいでて圖說したるなり。

◎伊勢貞丈の傳記は、『安齋叢書』の下に見よ。

いぬおふものてくみにつき

犬追物手組日記　寫本　一卷　伊勢貞忠

犬追物興行の時の手組を日記したるものなり。即ち文明十年三月七日、寛政六年八月二十二日、文明十七年三月一日、長享三年八月十三日、永正七年七月七日、同十九日同八年五月二日、大永二年四月二十七日等の記事なり。最後に、「此の日記は、細川殿へ御成の時貞忠調進之」とあり。『續群書類從』六百七十六の卷、武家部第二十二に收む。

いぬおふものてくみのこと

犬追物手組之事　一卷　渡邊半兵衞

犬追物手組配當記なり。後花園天皇の永享七年二月一日、同文安元年九月十一日、同十二日、同十三日、同十四日、同寶德二年九月三日、同三年五月十四日、同享德元年十月十三日、同二年四月七日等の配當手組等を記せり。『輪池叢書』の中に收めらる。

いぬおふものにつき

犬追物日記　寫本　一卷　小笠原政清

犬追物の傳書にて、文明十一年己亥(二一三九)四月二十八日の政清の奥書あり。『弓馬雜纂』の中に收む。

◎小笠原政清の傳は『弓箭纂要』の下にあり。

いぬおふものにつき

犬追物日記　寫本　一卷　伊勢貞賴

犬追物故實の書にて、文明の比小笠原美濃入道越

後より上洛の時、武田大膳大夫馬場にて犬追物興行の記事もあり。『弓馬雜纂』の中に收む。

◎伊勢貞賴の傳記は『宗五大草紙』の下にあり。

いぬおふものにつき

犬追物日記　寫本　一卷　小笠原元長

弓馬故實の書にて、犬追物の圖說なり。文明十五年癸卯(二一四三)九月十八日元長の奥書あり。『弓馬雜集』中に收む。

◎小笠原元長は播磨守と稱し兵部少輔たり。別に犬追物書、鏡外、產書引目之記、磨鏡、矢開事、流鏑馬日記、扇鏡、宗長記、射禮式等の著あり。

いぬおふものにつきしふ

犬追物日記集　寫本　一卷　伊藤幸民

犬追物興行日記の故實につきて、說明したるもの。諸家の說を擧ぐること多し。享保十二年丁未(二三八七)の奥書あり。

◎伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものゝき

犬追物記　一卷　林恕

松平薩摩守光久興行の犬追物の記なり。後光明天皇の正保四年丁亥(二三〇七)七月十三日松平薩摩守光久が、武州八王子に於て興行したる時、將軍家出馬して見たる時の記事なり。蓋し犬追物は、神功皇后三韓を攻伐し給ひし時より始り、騎射練習の業なれば、鎌倉の柳營、京都の幕府、よりくく興行し、三管領四職を初として、武士の家々に祕行せずといふ事なし。信長秀吉の時より一時止みぬれども、其の法は殘つて弓馬の家にあり。德川氏に至りて再び盛なりし由の略歷をも記せり。前後に圖を添へたり。『輪池叢書』十六に收めらる。別に『犬追物御覽記』とて寫本單行のものあり。全く本書の異本なり。

◎林恕の傳記は『本朝通鑑』の下に揭ぐ。

いぬおふものゝこと

犬追物事　寫本　二册　小笠原持長

卷頭「八廻の日記に不入祕事條々事」と記して、第一册の奥書に、應永二十九年壬寅(二〇八二)三月一日、民部少輔小笠原持長、備前入道小笠原輿元と連名にて、「右當流之祕事、條々注置者也、雖然少序如申、此道之祕訣、以口傳爲肝要、楚忽不可有外見、于至目上卷下卷爲一此道之無不祕事云」といひ、第二册の奥に文明十四年壬寅(二一四二)八月二十八日、小笠原元長「此一卷拜見申候得ば、尤可然候于細ども候間、我々如此ことばを添へ申候、末代御所持にて御ように可被立候」といへり。

◎小笠原持長の傳記は『犬追物集書』の下にあり。

いぬおふものゝしき

犬追物之式　寫本　一卷　伊勢貞丈

犬追物に關する故實諸式を考論したるものにて、延享四年丁卯(二四〇七)八月廿八日の作なり。文久元年吉見盛德謄寫書入す。『弓馬祕藏』中に收む。

◎伊勢貞丈の傳記は『安齋叢書』の下にあり。

いぬおふものゝしよ

犬追物書　寫本　一卷　小笠原元長

犬追物射手具足すべきことより、以下數十日を記述せる傳書なり、卷末文明三年辛卯(二一三一)三月二十七日、兵部少輔元長在判の奥書に、亡父備前入道の相傳にて當流の正本たるべきを云へり。

◎小笠原元長のことは『犬追物日記』の下にあり。

いぬおふものゝづ

犬追物圖　十四枚

犬追物執行の順序を圖せしものなり。第一圖は諸般の準備整ひ、騎手下馬して整列する樣、第二圖は檢見先づ場に入る樣等、以下順序を追ひて、終に式畢りて退散するに到るまでの圖にて、處々に其の說明を爲せり。

いぬおふものゝはう

犬追物方　寫本　一卷　宗仁

犬追物に關する故實書なり。四十二帖の中の一部なりといふ。『弓馬祕說』中に收めたり。

◎宗仁のことは『犬追物蒿袋』の下にあり。

いぬおふものゝはう

犬追物方　寫本　三册　春信

犬追物故實集書にて、天文八年己亥(二一九九)春信の華押あり。本書は『萬聞書』と題して、五册に寫傳せるもあり。

いぬおふものばぐしふ

犬追物馬具集　寫本　一卷　伊藤幸民

犬追物興行馬具に就きて、諸家の傳說を總合說示したるものなり。享保十二年丁未(二三八七)の奥

書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものはつくわいにつき

犬追物八囘日記　寫本一卷　伊藤　貞宗

犬追物八囘問說にして、僅二枚に寫す。文明五年癸巳(二一三三)八月の作なり。今見るところは萬延二年吉良盛德の寫本なり。『弓馬秘蹟』中に收む。

◉伊勢貞宗の傳は『伊勢兵庫頭貞宗記』の下にあり

いぬおふものばゞとりはふよう

犬追物馬場取法用　寫本一卷　伊藤　幸民

犬追物起元、並に場所に關する故實諸說を總合したるものなり。卷末に、「右御家流之稽古書部分記說畢、至極之祕書也、努々不可有外見者也。享保十二丁未(二三八七)孟夏上浣日、伊藤甚右衞門幸民、伊藤隼太殿參」と記せり。

◉伊藤幸民は武家故實家にして甚右衞門と稱す。明曆元年乙未(二三一五)の出生にして、本書を著したるは、實に七十二歲なり。著書は此の外に、犬追物射手之法、犬追物射手矢集、犬追物射手詞集、犬追物檢見呼次、犬追物射手具足、犬追物檢見裝束、犬追物弓矢部集、犬追物鞢行縢(ユガケムカバキ)集、犬追物馬具集、犬追物檢見矢沙汰、犬追物勝負名目、犬追物日記集等あり。

いぬおふものひき

犬追物祕記　三卷

犬追物に關する作法故實等を記せるものなり。本書の大部は、養和元年辛丑(一八四一)三浦介義澄、上總介廣常二人より、幕府へ獻上せし犬追物の記、及び同圖より成りて、犬追物の起原、場所取りの事、射手の事、犬の事、弓の事、馬具の事、乘馬の事等、凡て犬追物に關する一切の作法を洩す所なく記したり。著者の名を記さゞれども恐くは右兩人の家傳ならん。享保四年己亥(二三七九)の刊行。

いぬおふものますかゞみ

犬追物益鏡　寫本一卷

犬追物檢見に關する口傳なり。凡そ數十項より成る其の益鏡と名けたる理由は著者の序に云へり。「夫犬追物者、繩四外四八之矢所也。雖然檢見之依覺悟善惡、矢之紛在之、古今最大事中傳物也。去者一疋之犬、三四矢射置、然可捨矢可賞矢分明難記歟。日夜不惰工夫肝要者也。仍名之益鏡」と。『續群書類從』六百七十六の卷、武家部第二十二に收む。

いぬおふものめいきやうのき

犬追物明鏡之記　寫本一卷

犬追物に關する諸事を略說す。文久元年辛酉(二五二一)九月二十七日、吉良盛德再見加朱せり。『弓馬祕蹟』中に收む。

いぬおふものめやす

犬追物目安　一卷　小笠原貞宗

犬追物の禁制を解きて武術の實研に代用せしめんことを願ひ出でたる趣意書なり。能く安に居て危を慮り、治に居て亂を念ふの理を說き、武藝の實踐に犬追物の適せることを論述したるものなり。康永元年壬午(二〇〇二)二月の作、紙數は三枚なり。『群書類從』第四百十六の卷、武家部第十四に收む。

◉小笠原貞宗は信濃の人、永仁二年甲午(一九五四)に生る。幼名を豐松、又、彥五郎といふ。長じて父の後をつぎ信濃守となり、信濃守護に補せらる。元弘の役に高時に應じて官軍に抗し、後歸順して義貞に從ひ、更に反して尊氏に降る。射藝騎乘の術に長ぜり。一時犬追物の禁ぜられたるを、貞宗建言して武藝の練習に要となし再許せらる。其の著書には小笠原家譜、修身錄等あり。又、三儀一統を合著す。後村上天皇の正平五年庚寅(二〇一〇)五十七歲にて歿せり。

いぬおふものやさたうたのしよ

犬追物矢沙汰歌之書　寫本一卷

弓馬故實の書にて、犬追物矢沙汰を歌にて口傳したるものなり。歌例を示せば、「遠近を鞭にくらぶる足つかひ、なわをまたげて矢は左なり」、「遠近をなわのふとさの最中と、はすとのあひを鞭にくらべよ」等の如し。凡て數十首あり。『弓馬雜集』第二十に收む。

いぬおふものゆがけむかばきしふ

犬追物鞢行縢集　寫本一卷　伊藤　幸民

犬追物興行につき、鞢、小手、籠、行縢、沓、等に關する諸家の傳說を擧げたるものなり。享保十二年丁未(二三八七)の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものゆみやぶしふ

犬追物弓矢部集　寫本一卷　伊藤　幸民

犬追物弓矢部に關する故實を集說せり。享保十二年丁未(二三八七)の奧書あり。

◉伊藤幸民の傳は『犬追物馬場取法用』の下にあり

いぬおふものるゐきやう

犬追物類鏡　寫本四卷　伊勢　貞丈

犬追物の故實式法を記したる書なり。卷頭に序說と題して犬追物の起源に關する數說を列ね、終りに、「我が先祖は世々足利將軍に仕へ奉りき。其の代に犬追物盛に行はれて、公私ともに之れを翫びければ、我が先祖も能く其の法式故實に熟しければ、其の事を書き記せる書籍、多く我が家に傳はりけり」云々と云へり。記載の事項は、馬場之部、張行之部、役者之部、射手具足之部、弓矢之部、檢見之部等に大別し、更に之れを細別すること馬場の部に於ては、馬場廣狹之事、繩、小繩之事、竹垣並戶口之事等の如くし、最後に犬追物に關する術語をいろは順に揭げて、語源註釋等を施せり。延享元年甲子(二四〇四)の著述に係る。著者は本書の補遺として、別に『犬追物圖說』一卷を著せり。

◉伊勢貞丈の傳は『安齋叢書』の下にあり。

いぬおふものるゐじゆ

犬追物類聚　寫本六十二卷

犬追物に關する一切の法式故實を、諸家の傳書等によりて類聚したるものなり。六十二卷を五十二冊に作り、更に『犬追物圖』一折を添へたり。

いぬこじ

犬居士　一卷　平泉　鬼貫

著者或る年の旅行記にて、俳句多し。由平、嵐雪、來山、其の他の句あり。自跋あり、元祿三年庚午(二三五〇)京都にて出版す。近年發行の俳諧文庫第十四編『素堂鬼貫全書』の中にも收めたり。

◉平泉鬼貫の傳は『ひとりごと』の下にあり。

いぬざくら

犬櫻　一册　益翁

俳諧の集。兩吟五百韻なり。編輯の年月は詳ならず著者益翁は別に『櫻千句』を著せり。

いぬつくばしふ

犬菟玖玻集　一卷　山崎　宗鑑

俳書の嚆矢なり『俳諧年曆略記』には永正十一年甲戌(二一七四)の編とあり。出版は寬永比なるべし。近年發行の俳諧文庫第二編『芭蕉翁以前俳諧集』上卷にも收めたり。

◉山崎宗鑑は本姓を支那、彌三郎と通稱す。寬正六年乙酉(二一二五)生れ、少時より世の無常に感じ、剃髮して宗鑑と號す、倘一休に尼崎の庵に給事し、其死後庵を山崎に結び和歌連俳を以て自ら樂む。之れより山崎宗鑑と云ふ。その頃宗祇連歌を以て其の名高かりしかば、宗鑑競爭を試みんとしたりしが及ばざるを察し、轉じて俳諧調に力めたりといふ。天文二十二年癸丑(二二一三)十月二日八十九歲にて歿せり。

いぬにつき

犬日記　寫本一卷　武田　元信

犬追物故實の傳書なり。文龜二年壬戌(二一六二)五月十一日元信傳授の奧書あり。『弓馬雜纂』の中に收む。

◉武田元信は若州の人。信親の子にして、彥二郎と稱し、伊豆守大膳大夫と稱す。明應十年辛酉(二一六一)正月、從四位下に敍せられ、父卒するに及びて家を嗣ぎ、また將軍義澄の命によりて、丹後の守護に補せられ、從三位に昇敍せらる。大永元年辛巳(二一八一)十二月薨ぜり。佛國寺に葬りて紹壯と法號す。

いぬにつき

狗日記　寫本一卷　松平　定信

和文體の紀行なり。卽ち安房上總の陣屋を巡視せられたる時の紀行にして、其の體裁は一に紀貫之の土佐日記に倣ひ、和歌なども挿入せり。八犬傳に因みて、「犬日記」とは名付けたるならんといふ。

◉松平定信の傳は『花月草紙』の下にあり。

いぬのとしごじやうらくごゑい

戌年御上洛御詠　寫本一卷

德川家光の詠歌を集めたるものなり。一名を『寬永御上洛道中辱詠』とも云ふ。寬永十一年甲戌(二二九四)六月二十日、家光が加那川の館に渡れる時より、同七月十八日參內せしまでの詠歌を、扈從近侍の士が輯錄したるものなり。各、言葉書を加へて、凡そ二十七首あり。

いぬはりこ

狗張子　七卷　淺井　了意

世の奇事異聞に關する雜話隨筆なり。自序中に、「今古に聞きおぼえし事もあるに、心にのみこめて、思ふ事云はぬも胸ふくるゝ心地して、手なれし狗張子にむかひ、燈火と影とかたりなぐさむも」云云といひ、又、義端といふものゝ序中に、「此の書は了意大德、晩年思を究め、精を研て筆作せる眞蹟にして、是れ實に大德遺訓の形見なるぞや。此の故に今、其の眞蹟一字も改めず、梓にちりばめ世に行ふ」云々とて、著者が若年編集せる「伽婢子」の遺漏を拾集せるものなることを云へり。三保の仙境、守江の海中の亡魂、死して二人となる等の諸項を分ち、凡そ四十餘項あり。元祿三年庚午(二三五〇)正月十五日の作なり。

◉淺井了意の傳は「東海道名所記」の下にあり。

いぬやまめいしよづゑ

犬山名所圖會　寫本二卷　長　足　庵

内に「犬山視聞圖會」と題して、尾張國乾峯、四圍の神社佛閣、芳境美觀を圖したるものにて、今見るところは、其の版下として淨書せるものなるが、後年出版せられざりしものなるべし。從五位藤原在定の序あり、繪畫も長足庵の筆なりといふ。

いねんがうかう

異年號考　一卷　穗積　保

我が古年號に就きて考證說明したるものなり。即ち藤井貞幹の「逸號年表」木村蒹葭堂の「和漢年契」等に基きて、朱雀、白鳳、永昌、白龜、泰平、彌勒、福德、寶壽等の年號を研究したるなり。文化元年甲子(二四六四)の著。

◉穗積保は本書の外に「能書事蹟」四卷を著せり。

ゐのうへかずへのかみおぼえがき

井上主計頭覺書　寫本一卷　松永　良明

一名「道齋聞書」の下に解題せり。

いのうへげんどうひつき

井上玄桐筆記　寫本一卷　井上　玄桐

水戸侯德川光圀が、其の臣藤井紋太夫を能樂興行の際に手誅したる事實始末を、同じ臣玄桐が實見のまゝに記述したるものなり。寬政十年戊午(二四五八)の寫本を、「假修叢書二集」卷二十一に收む。

◉井上玄桐は京都の人にして、初、寺井玄策と稱せり。曲直瀨道三に醫を學び、また筆札を巧にせり。來りて水戸光圀に仕へ、西山の甍後祿を辭して京都に歸り、後公の事實を筆記して、安積老牛に贈れり。三木左太夫の「桃源遺事」はこれに基きたるものなり。

いのうへにつき

井上日記　寫本二十六册

著者の日記なるが、第一卷より第四卷迄を闕き、第五寬政十二年庚申(二四六〇)正月より第九享和元年辛酉(二四六一)十二月までを日次的に記し、第十より、第十七までを闕き、また三十一、四十六等を闕き、第五十四に至りて享和二年壬戌(二四六二)十二月二十九日までを記せり。橫綴本二十六册あり。著者は井上某と記して名を錄せず。

いのうへまさかねおうしんでんき

井上正鐵翁眞傳記　二卷　井上　正鐵(マサカネ)

唯一神道の趣意を、通俗的に問答したるものなり。故に一名を「神道唯一問答」といへり。神道禊教本院長權大講義坂田鐵安の、明治十五年壬午(二五四二)十月の序中に、「此の神道問答書は、我禊派の教祖なる、正鐵大人に、常昔の政府より教導風をたゞれ給へる時、常に門人等に示し給ふ趣を、上下二卷の書に記しつられて、上申し給ひしものなり」云々といへり。同年十一月半紙本二册に發行す。

◉井上正鐵は安東眞鐵の第二子にして、神道禊教の祖なり。父の遺訓に遵つて神道を修め、修行二十六年にして禊教の眞旨を究め斯道を振興せりといふ。たまたま幕府の嫌疑を受け、三宅島に流され、在島七年にして、嘉永二年己酉(二五〇九)二月十八日島に歿せり、年六十。明治十二年遺族等官に請ひて、東京谷中に改葬せり。

ゐのくまくわんぱくき

猪隈關白記　寫本四册　藤原　家實

著者の日記なり。建久八年丁巳(一八五七)より、建暦元年辛未(一八七一)に至る日記にして三十二册のものありといへど、今見る所は四册にして建仁元年辛酉(一八六一)より、承元二年戊辰(一八六八)に至れり。其本ならざること知るべし。猪隈は或は猪熊に作る。此の書はもと、知足院關白の日錄

を「御暦」といふに對して、「殿御暦」といへりとぞ。

◉藤原家實は攝政基通の長子にして諸官を歷て從一位太政大臣に至り、攝政關白となり、三宮に准ぜらる仁治三年壬寅(一九〇二)六十四歲にて薨ず、其の第猪熊町にありしより、世に猪熊關白と稱す。

いはゐじつき

岩井實記　寫本五卷

享保年中稻葉丹後守の江戸屋敷にて、勘定奉行たりし岩井善右衞門を、舊同僚の子赤松源次郞が闇殺したるより、實子岩井善次郞、多年流浪の後、遂に復讐して憗地安堵に至る始末を記したる者也。

いはういつかげん

醫方一家言　寫本一卷　平田　玄忠

醫方に就きて子弟に諭したるものを集錄したるなり。著者嘗て東都に遊びたる時、諸名家の門を叩き、其の熟則規定を斟酌して一家の體裁を定めしより、即ち門人にも其の一方に偏執せざらむことを期して此の一家言ありと。仲景年代、及び引證するところの事績は十八史略に據りて考へ、陰陽論の如きは運氣の說に從ひ、六經六病の如きは傷寒論に從ひ、三陰三陽表裏の如きは佛經例に從ひて之れを布置せり。皆漢文なり。文化十二年乙亥(二四七五)冬十月の序あり。

いはうきげん

醫方紀原　三卷　甲賀　通玄

著者が施治の餘暇、多年纂輯したる切要諸方を分門比類し、一劑毎に精緻なる考證を附したるもの。漢文にて記せり。元文五年庚申(二四〇〇)刊す。

いはうくけつしふ

醫方口訣集　三卷　長澤　道壽

處方百十三種を集錄したるものなり。表紙を開けば「新增愚按口訣集」とあり。道壽嘗て子弟の爲めに醫方口訣集を著したるも、其の徒祕して出さゞりしが、いつしか傳々流落して遂に版本となれり。時に道壽伊州にありて正誤增補す。後、二十餘年を經て淺滅眷魚のものとなれり。更に改正して本書を成す。而して上卷五十一方は道壽の撰びしものにして、中卷六十方は中山三柳の增補に係り、下卷には丸散先生といへるが撰べるもの三十五方と三柳の增補せるもの十八方とを收めたり。更に鼇頭に於て北山友松子の增廣口訣、門人元春甫錄の註釋あり。皆漢文にて記す。延寶九年辛酉(二三四一)の刊本なり。

◉長澤道壽は醫師なり。柳庵、又、丹陽坊賓藥山人と號す。業を曲直瀨正紹、吉田宗恂等に受け業大に成り、遂に人土佐道壽と呼ぶに至れり。著す所、藪醫問答、治例問答等あれど皆門人の編輯に係る。

いはうけいりやう

醫方挈領　寫本一册　丹波　元簡

漢方醫藥の處方效能等を記したるものなり。四君子湯、四物湯、八物湯、五苓散、逍遙散、八味腎氣丸等の二十八項ありて、毎項更に十數種の藥名、處方、效能等を記し、都合五百六十六方を擧げたり。

◉丹波元簡は通稱多紀元簡といふ幕府の醫官なり。寶曆五年乙亥(二四一五)生る。字は廉夫、桂山、又は櫟窓の號あり。强記博識一覽せし所終身忘れず。内外の醫書の醫事に及べる者は之を見ざるは無しといふ。寬政中侍醫に擢でられ、法眼に進み、享和中、旨に忤ひ罷められて、後學を啓迪するを以て己の任とし門徒頗る多し。又力を著作に用ひたり。著はす所、櫟窓類抄素問識、靈樞識、傷寒輯義、脈學輯要、挨穴輯要、綿命傳疑考、痧疹輯要方、觀集方、聿修堂架藏記、聿修堂讀書記、病名纂、本朝經驗方、病名沿革考、奇方類編、聿修堂藏書目錄等數十種あり。文化七年庚午(二四七〇)十二月歿せり、年五十六。

いはうけんき

醫方研幾　三卷　足立　長雋

主として根本病を論じ、合併の病症に及ばず、是れ一病の本性を知れば、合併の病は容易に知ることを得と云ふにあり。而して唯疾病の狀況と、應症の藥劑とを示せり。本書はもと日耳曼アントン、バロン、ハン、ストルクの著にして、和蘭の醫テン、ハーへの譯にかゝりしものを、重譯したるものなれば、各病門共、必ず下に原名を附して、西書を讀むものの參考に供へたり。天保二年辛卯(二四九一)の冬出版せらる。

◉足立長雋は安永五年丙申(二四三六)生れ、世茂と名け無涯と號す。幼より醫を好み足立梅庵、多紀長庵等に就て學び、篠山侯に聘せられて侍醫となる。又吉田長叔に從ひて蘭學を修め、翻譯の業に從ひ、醫術は産科を以つて殊に顯る。仁孝天皇の天保七年丙申(二四九六)十二月二十六日、六十二歲にて歿せり。

いはうさつしふ

醫方撮集　寫本一卷　藤平　元圓

諸醫書より諸病の原因、內外科の療法等を略述せる小册子なり。漢文にて記す。享保十二年丁未〔二三八七〕の末記は寫本の日付なるべし。

いはうせいはん

醫方成範　寫本一卷

種々なる病名と其の處方とを列擧したるものなり。年代詳ならず、著者も「宇多川某」とのみ記して其の名を明にせず。

いはうせんしふひでんせう

醫方選集祕傳抄　寫本二卷

脈論藥性等を說述したるものにて、卷一に五十一目、卷二に三十目あり、二卷一册に作る。今、寬文六年丙午〔二三二六〕沙門伊樋正哲吉信の寫本による

いはうたいせいろんげんかい

醫方大成論諺解　五卷

明の熊宗立が著したる『醫書大全』に悉く片假名を施し、且一句毎に俚言俗語を以て註解を與へたるものなり。享保六年辛丑〔二三八一〕刊本となる。

いはうてきえう

醫方摘要　寫本一册　名古屋玄醫

漢方醫療の處方を記したるものなり。普通科、婦人科、小兒科、外科に關し百三十餘種の處方を列記せり。著作の年月詳ならず。唯だ寬政九年丁巳〔二四五七〕膝寫せし由の奥書あるのみ。

◉名古屋玄醫の傳は『丹水子』の下にあり。

いはうめいかん

醫方明鑑　四卷　曲直瀨玄朔

疾病の種類を分類し、各、投劑の方等を論辯したるものなり。奥書に、門生の需によりて之れを書き記し授與する旨を記せり。元和九年癸亥〔二二八三〕春中澣の撰なりといふ。

◉曲直瀨玄朔の傳は『鑑寶藥性能毒』の下にあり。

ゐはうろく

爲寶錄　寫本一卷

土佐藩將士役職等の人々の嘉言善行の逸事を輯錄したるもの。『土佐國群書類從』第六十二に收む。

いはきけいづ

磐城系圖　寫本一卷

長くも桓武天皇を祖とし、本枝百餘代にして從五位但馬守宣隆（ノブタカ）に至る系圖なり。『續群書類從』百三十九の卷、系圖部第三十四に收む。同卷に同系圖の別本あり。高望王を祖として宣隆の子岩城庄次郎重隆に至る。

いはきさうどうき

岩城騷動記　寫本六卷

奥州岩城平に於ける百姓一揆の始末を記述したるもの。中御門天皇の享保の比、岩城平城主內藤備後守政樹が、國用不足の爲め、領內の課役多端なるより、百姓困窮に堪へず、遂に元文元年丙辰〔二三九六〕九月、一揆徒黨して席旗を押し立てたる終始の記錄なり。

いはきし

磐城誌　寫本四册　鍋田　三善

磐城の地誌にして、目錄には十卷十八條を記し、更に磐城家歷代事實、鳥居家、內藤家、事實の附錄を揭げたれど、今、明治十年修史館の寫本によるに、卷次混亂し、且、附錄二條を佚せり。文政年中の作にして、同九年丙戌〔二四八六〕三月、磐城儒臣神林富有の序あり。

◉鍋田三善の傳は『琉球入貢紀略』の下にあり。

いはきし

磐城誌　寫本一卷

同國の封疆、風俗、郡村、山海川、道路、徑路、間道、古蹟、土產、神社、佛寺、墳塋、人物等の目に就て略記せるものなり。

いはきふどき

磐城風土記　一卷

磐城國略地誌にして、寬文年中の作なり。著者は同國の處士板坂某なりといふ。

いはくらぞうだいじやうだいじんしか、

いはさきくわんゑんいかう

岩崎灌園遺稿　寫本十一卷　岩崎　常正

植物に關する諸說を集成せるものなり。朝鮮人參試効說、藥種說考、杜若考、附子考、木綿樹考、麻黃葉寄生品考說、重修鎭江府志物產部抄錄、本草小識

其の他十九項、凡て二十七項を揭げたり。但し悉く灌園の著述にはあらず。もと同人の藏書寫本數十卷を合綴したるものにして、遺稿の名ありといへども、中には同氏の單に抄錄したるものあり、他人の著述を門人が筆記したるものあり、漢書もありて、系統的のものにはあらず。

◉岩崎常正は灌園と號す。通稱は源藏。天明六年丙午〔二四四六〕六月二十六日東都に生る。少壯より植物學を好み、小野蘭山の門に入り、本草書を講じ、喜多村槐園等と友とし善し。最も寫生に巧なりき。本草圖譜九十餘卷を著はし、植物二千餘種を圖說し、文政十三年之れを幕府に獻ぜり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕正月二十九日病を得て歿す、年五十七。著す所に救荒本草通解、本草綱目通解、救綱外編、草木育種、武江產物志、日光山草木圖、江戸近隣圖、本草圖譜、及び遺稿等あり。

いはしみづうたあはせ

石淸水歌合　寫本一卷

元久元年甲子〔一八六四〕十月の歌合なり。

いはしみづえんぎ

石淸水緣起　寫本二卷

石淸水八幡宮の緣起に關することを幾條にも分けて書き付けたるものなり。仲哀天皇の崩御、神功皇后備後海にての御危難、門司の關にて老翁の不思議、三韓の降伏、皇后新羅國に碑石を殘し給ふ事、應神天皇の御降誕、宇佐八幡宮の御造立、和氣淸麿の事、行教和尚神託に依て八幡宮を男山へ遷すこと、其の他を略記し、每章圖繪を挿入せり。永享五年癸丑〔二〇九三〕孟夏二十一日、征夷大將軍左大臣右近衞大將源朝臣奉納の由奥書にあり。

いはしみづしくわんけいづ

石淸水祠官系圖　寫本一卷

神武天皇を第一祖として、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元の各天皇を經、本枝數百代を經て、望之、貫之、有友、友則、勝延、承均等に至る石淸水祠官の系圖。延寶九年辛酉〔二三四一〕九月望の奥書に、本石淸水八幡宮祠官系圖は前の別當田中法印要淸の家の藏本より謄寫せる由を記せり。『續群書類從』卷百六十九の上中下三册に收む。

いはしみづじんげんせうふろく

石淸水尋源鈔附錄　寫本二卷　藤原　光信

石淸水八幡宮の本社、末社に關する雜事を輯錄したるものなり。同宮社佛堂の事、神領の事、官員の事、八鄕神社の事、御朱印の事、正法寺古文書の事、及び享保二十年乙卯〔二三九五〕より、寬保元年辛酉〔二四〇一〕まで神官と正法寺との爭論並に和談狀數十通、寬政二年京都町奉行の尋問に答へたる書、文化五年戊辰〔二四六八〕社員と正法寺と爭論したる時內濟取換證文等を集載せり。其の年代も、略、察すべし。

いはしみづはうじやうゑのき

石淸水放生會記　寫本一卷　卜部　兼治

明德四年癸酉〔二〇五三〕八月十五日、石淸水八幡宮放生會の記事なり。

いはしみづはちまんぐうえんぎ

石淸水八幡宮緣起　寫本一卷

石淸水八幡宮鎭座に關する緣起を記せるものなり。先づ行教和尚が筑紫參向の條より、京都男山垂蹟の事を記し、猶、御生體の事、放生會の事をも記せり。表紙に、「延寶九年九月初旬、就二上野常照院一求二得彼學頭淩雲院僧正之藏本一而贈二絹五匹一以謝焉」とあり。

いはしみづはちまんぐうかいさんえんぎ

石淸水八幡宮開山緣起　一卷

城州綴喜郡鳩嶺石淸水八幡宮の開山緣起を通俗振假名付に記したる僅々三枚の版本なり。此の緣起版行は同開山堂に藏する所なりと記せり。

いはしみづはちまんぐうごこくじえんぎ

石淸水八幡宮護國寺緣起　寫本一卷

八幡宮護國寺の緣起由來を記述したるものなり。明應二年癸丑〔二一五三〕の奥書に、「此の記錄は、冷泉院の敕筆たりと雖、治承四年燒失し、多年愁歎する所なり。俗別當紀則吉舊記を集めて、之れを註し奉るものなり」とあり。

いはしみづはちまんぐうごこくじりやくき

石淸水八幡宮護國寺略記　一卷　僧　行教

三所大菩薩の顯現に畏みて、宇佐八幡大神を石淸水山に奉戴したる事を敍記したるもの也。傳燈大

いはしみ

師の漢文にて記せるもの。紙數三枚あり。貞觀五年癸未〔一五二三〕正月十五日建立、座主大安寺傳燈大法師位行教の著。『群書類從』第十四の卷に收めたり。
◉行教は有名の知識なり。武內宿禰の後といふ。大安寺の住僧たりき。貞觀元慶比の人なり。

いはしみづはちまんぐうしゆつぎよならびにごにふらくき
石清水八幡宮出御並御入洛記　本寫一卷
石清水八幡の出御入洛に關する記事にて、後堀河天皇の時、及び後宇多天皇の弘安二年己卯〔一九三九〕との祭式記事なり。著者は詳ならざれども、釋增朝といふもの〻、正德二年壬辰〔二三七二〕の奥書あり。

いはしみづはちまんぐうだいゑ
石清水八幡宮大會　本寫一卷
靈元天皇の延寶七年己未〔二三三九〕八月、石清水放生會の記事なり。

いはしみづはちまんぐうまひしやうぞくくわんじんちやう
石清水八幡宮舞裝束勸進帳　本寫一卷　僧　成圓
舞裝束勸進帳なること名の示すが如し。原書は尊圓親王の筆なりといふ。本書は其の模本なり。

いはしみづふだんねんぶつえんぎ
石清水不斷念佛緣起　一卷　大江　匡房
石清水社遷座の前に於て、行敎の不斷念佛以後結緣不少等の緣起を略述したるものなり。漢文にて記し紙數僅に二枚なり。延久二年庚戌〔一七三〇〕十月成る。『群書類從』第四百二十七の卷に收む。
◉大江匡房の傳は『江家次第』の下に揭ぐ。

いはしみづまつしやき
石清水末社記　本寫一卷
京石清水八幡宮末社の由來記なり。祠官伊久金の奥書あれど、年代詳ならず。『續群書類從』卷三十一にも收めたり。

いはしみづりんじさいごさいこうき
石清水臨時祭御再興記　本寫一卷
文化十年癸酉〔二四七三〕三月十五日、石清水八幡宮の臨時祭再興行の詳記なり。末に同十一年十一月二十二日の宣命〔大內記聰長朝臣作進〕をも擧ぐ。

いはしみづりんじさいしだい
石清水臨時祭次第　本寫一卷
文化十年癸酉〔二四七三〕三月十五日石清水八幡宮の臨時祭の記錄なり。

いはしみづりんじさいのづ
石清水臨時祭圖　本寫一卷
文化十年癸酉〔二四七三〕三月十五日再興の、石清水臨時祭の順序方法等を詳細に圖示したるものなり。今、天保十四年癸卯〔二五〇三〕の寫本による。

いはしみづわかみやうたあはせ
石清水若宮謌合　本寫一卷
寬喜四年壬辰〔一八九二〕三月二十五日、河上霞、暮山花、社頭懷の題にて、定家、家光、家隆、俊成女、成實、其の他の五十一番歌合なり。諸家の奥書あり。

いばせう
醫馬抄　本寫一卷
弓馬故實の書にて、病馬の療藥法を說明す。『弓馬叢集』の中に收む。

いはつきおほをかくんぎやうじやうき
岩槻大岡君行狀記　一卷
大岡忠光の行狀記にして、林信言が撰びし碑文、家人山縣昌貞が撰びし墓誌をも合刊せり。忠光は惇信院の時、寵を蒙むり、近習より列侯にまで昇進し、武藏國岩槻の城主となり、忠誠の名ありし人なり。本書は其の間の行狀を記せるものゆゑ、殊に岩槻の二字を冠したるものなるべし。

いはつゝじ
岩つゝじ　二卷　北村　季吟
古今和歌集を初め、代々の歌集其の他物語草雙子などより男子同士の戀歌數十首を集め一々その出處を示せり。題號は最初に擧げたる『古今集』の「思ひ出るときはの山の岩つゝじ、いはねばこそあれ戀しきものを」の歌より、取りたるものなるべし。本書は、延寶四年丙辰〔二三三六〕の八月十五夜、つれづれなるまゝに撰集せしよし、季吟の自序に云へり。正德三年癸未〔二三七三〕三月、京都にて刊行せり。太田南畝の『みそのや』に收む。
◉北村季吟の傳は『源氏物語湖月抄』の下に揭ぐ。

いはでものき
以波傳毛之記　一卷　瀧澤　馬琴
山東京傳の傳記なり。著者は京傳に深交ありしが、京傳の歿後、彼れと文墨の交りありし某に依賴せられて、此の書を記し與ふる旨、序文に見えたり。京傳の家系より、性行、著作等に至る迄、細大漏さず記載し、馬琴との交際の樣など歷々見るべし。蓋し本書に馬琴の作なりと明記せざるは、特に祕したるものなるべし。京傳の死文化十三年にして、本書の序文に、己卯の冬記すよしあれば、本書は、仁孝天皇の文政二年己卯〔二四七九〕の作なるべし。此の書に滿遺一卷あり。京傳の机塚の記事を載す。
◉瀧澤馬琴の傳は『南總里見八犬傳』の下にあり。

いはのけいづ
石野系圖　本寫一卷
村上源氏堀河七條の系圖なり。卽ち正二位堀河頭大納言定房を祖として、本枝數十代を經て、慶長十七年に死去したる義利に至る。『續群書類從』百三十七の卷、系圖部第三十二に收む。

いはひのしよ
祝の書　本寫一卷　伊勢　貞丈
祝の法式に關して記述したるもの。明和元年甲申〔二四二四〕十二月、貞丈奥書して曰く、「右幾箇以下の祝の法式は、古傳の書に記してありと雖、其の詳なることは口授にあり。因つて貞敦に、口授の趣を殘さず傳授して、書き記さしむ。此の書成りて、始より終まで點檢するに、聊も相違の事なし。後來の鑑たるべし」と。以て本書の成立を知るべし。
◉伊勢貞丈の傳記は『安齋叢書』の下にあり。

いはぶちやわしふ
岩淵夜話集　本寫一卷　大道寺友山
德川家康生涯の事歷を記述せる假字文の隨筆なり。凡そ六十六項より成る。天文二十一年壬子〔二二一二〕家康の誕生より、其の生立、出世、軍事、及び家庭に就ての雜事逸話等を年序的に記錄したるものなり。家康が一生間に於ける公私の生活狀を見るべし。『岩淵夜話』と名けしは、武藏の國岩淵の宿に、一人の强記翁あり。著者、其の翁に就きて本書の材料を聞き書きしたるより、名けたりとなん。著述の年月詳ならず。
◉大道寺友山は、山城伏見の人。名は重祐、通稱は孫九郞、友山また知足庵等の號あり。小畑景憲、北條氏長、遠山信景、大原德、山鹿高祐等に學び、兵學に精通し、壯年に及び淺野家に寄寓し、又會津侯の客となり。晚に越前侯の招きに應じ、賓位を以て厚遇せらる。著書は岩淵夜話の外、落穗集、大將傳、五臣論、友山漫書等あり。遺稿亦多し。享保十五年庚戌〔二三九〇〕九十二歲にて歿す。

いはぶちやわべつしふ
岩淵夜話別集　本寫一卷　大道寺友山
德川家康の記事に係る『岩淵夜話集』の增補別集なり。詳しくは同書の下に解題せり。

いはまつかけいふろく
岩松家系附錄　本寫一卷　新井　君美
上野國新田郡なる新田義重の後裔岩松氏の與廢盛衰等を記述したるものなり。岩松氏の臣、橫瀨雅樂介逆謀を企て其の主岩松昌純を殺せること、岩松氏の記錄文書灰燼に歸する事、橫瀨詐僞を以て家を興す事、岩松滿次郞沈淪せること、其の他の顚末を詳記せり。
◉新井君美の傳記は『折たく柴の記』の下に揭ぐ。

いはまつけいづ
岩松系圖　本寫一卷
此の書は岩松家の系圖に附錄序說したるものにて、同家は新田氏の嫡流を受け、足利氏の血統を兼ねて、一百世、其の族の爲めに大宗たる事を論記したるものなり。明治八年內務省寫して十一枚の一冊子とす。

いはまつもんじよ
岩松文書　本寫三卷
新田義重より岩松治部大輔直國に至る代々の文書を集めたるもの。蓋し岩松は新田家の支族なり。大炊介義兼が嫡女、足利遠江守義純が室、石清水八幡を勸請せし地に松ありし故、家號とせりといふ。此の書最初、保元二年近衞右大臣基實の下文を始とし、享德四年に至る代々の讓狀、及び鎌倉將軍瑞泉寺基氏、大休寺直義、京都將軍等持院尊氏、寶篋院義詮等の內書下文より、其の他種々なる古文書を集錄したるものなり。何人の編集せるかを知らず。

いはまのみづ
岩間之水　本寫一卷　谷　柄明

寛政年中佐渡奉行の部下なる廣間役岩間半左衛門の事歴を記述したるものなり。寛政三年辛亥〔二四五一〕著者の奥書あり。

◉谷柄明は江戸の人にして佐渡奉行組頭をつとめたり。著書は別に「いが栗」あり。

いはまのみづゆらい

岩間之水由來　寫本一卷

孝悌、力田等、世教的有益の事實を記せるものなり。原本は丹波國天田郡梅谷村衣川九郎左衛門の藏するところなりといふ。享和二年壬戌〔二四六二〕の著に係る。

いはみをんなずゐなう

石見女髄腦　寫本一卷

石見女式の祕書なり。源義知が跋に曰く、「嘗て聞く濱成、喜撰、孫姫、石見女等の式あり。之れを四式と號す。蓋し石見女式闕たり。而して世に三式を見るのみ。或人此の本を篋底に祕して出さず、強て請ひ校正を加へ、粗、成書をなす」云々と、其の來歷を見るべし。

いはみぐわいき

石見外記　寫本四卷　中川　顯允

石見國の地誌なり。石見國の地形より、國名、郡鄕、國高、國治、年中節序等より、あらゆる地誌的事項を網羅輯成す。文政三年庚辰〔二四八〇〕の自序、同十年丁亥〔二四八七〕江州朽木谷世襲主源綱泰の序あり。四卷二册に寫傳す。

◉中川顯允は石州濱田の藩臣にして、公修と稱す。

いはみこくぐんかう

石見國郡考　寫本一卷　藤井　宗雄

山陰道石見國の建國沿革を考證したるもの。慶應元年乙丑〔二五二五〕閏五月二十五日の編にかゝる。石見國鄕名考を附錄して、各郡鄕の變遷由來を證徵す。

いはみのくにぎんざんもんじよ

石見國銀山文書　寫本一卷

慶長六年辛丑〔二二六一〕以下、石州銀山に關する舊記を編輯したるものなり。

いはみのくにづ

石見國圖　寫本一鋪

東南は出雲、安藝、周防、長門に隣り、西北は一帶海を以て堺とせる圖にて、郡界、道路、銀山、領地等を區別し、海中には大小諸島を示したり。

いはみのくにひとまろしやそのほかゑづ

石見國人丸社其外繪圖　寫本一軸

石見國高角山人丸神社に納めたる人丸童形の像に、從者の像を加へ、且同社の本社、拜殿、繪馬堂、鳥居、石燈籠等を圖したるものなり。

いはみぶゆうでん

岩見武勇傳　四卷

筑前小早川家の臣、岩見重太郎といふもの、同藩の士廣瀨軍藏を討果す復讐始末を主と記したる實錄なり。重太郎の幼時より、諸國修行中の事、一家の異變、復讐の始末より、後、薄田隼人正と改名し、大阪陣に秀頼方に從ひて勇名を顯し、遂に譽田山に於て討死を遂げしまでを、數十回に分ち記せり。明治十八年月耕の畫を挿み、繪本實錄として活版一册に作るあり。

いはみやへむぐら

石見八重葎　寫本十三册　石田　春律

石見の國なる、歷史的事實、地理的事項に關することゝ、及び同國銀山の事等を記述したるものなり。文化十三年丙子〔二四七六〕の自序あり。

いはむらじやうのき

岩村城記　寫本一卷

美濃國惠那郡岩村城の記にて、故城主加藤次郎藤原景光、其の子景廉の傳を揭げ、景廉、惠那郡遠山庄に居城を構へ、之れを霧城と名く。其の子景村遠山を稱する始末、岩村城剏築に關する說等を揭げたり。

いはむらふし

巖邑府志　寫本四卷　首藤　元震

美濃國惠那郡巖邑城に關する沿革、地理等を記したるものにて、最初國名の義、惠那郡の境界、領主遠山氏歷代の事、岩村年譜元龜三年壬申〔二二三二〕より、寬延元年戊辰〔二四〇八〕に至れるもの。城地、要害、土產、風俗、山川、社寺等を記載せり。寬延四年辛未〔二四一一〕の自跋あり。

◉首藤元震は美濃國惠那郡岩村の人にして字を士發といへり。

いはむろぶざゑもんいつけん

岩室武左衛門一件　寫本一卷

岩室武左衛門は秋田安房守が家人にて、由井正雪の陰謀露顯の際、駿府にて討手の先を爭ひ、正雪が書き置を取り出だせし健氣者なり。一旦主人の勘氣を受けて流浪し、後、安房守病死のことを聞いて追腹切らんとせしを、同藩松浦某利害を說きて其の死を止めし一條を記述せり。

いはやのさうし

岩屋能草紙　寫本一卷

一種の戀愛小說。淸和天皇の御代、三條堀河に住む堀河中納言これたか卿といへると、志ら河の姬宮といへるとを主公として、種々の關係顚末をおもしろく物したるものなり。『續群書類從』卷五百〇七、物語部第七に收む。

いはやほんえんぎ

石窟本緣記　寫本一卷

寺社に關する緣起を集めたるもの。卽ち石屋本緣の事、大辨財天所化の事、岡崎宮妙見の事、付り宮前石室の事、一字金輪の事、高倉岩屋祕儀の事、地鎭祭物等の事、多賀宮坂下鏡鋭の事、高野山一雙鳥の事等を記せり。著者は兩部神道派の僧侶なるべし。奥書に、永保二年壬戌〔一七四二〕二月八日、常明寺別當性順と云ふもの書寫したる由を記せり。

いはやものがたり

岩屋物語　寫本一卷

雅文にて書きたる物語にして、淸和天皇の御代に、堀河中納言家成と云ふ人の女才色すぐれたるが、繼母の爲めに明石の海中に沈められんとせしを、漁夫に救はれて岩屋に住み、後、京に歸りて世に出づる趣向なり。

いはんていかうしやくぎ

西說醫範提綱釋義　三卷　宇田川玄眞

『醫範提綱』の各章を註釋したるもの。著者嘗て師の講席に侍して筆記したる大略を抄し、假名字に寫したるなり。文化二年乙丑〔二四六五〕刊行す。

◉宇田川玄眞は蘭法醫。榛齋と號す。明和七年庚寅〔二四三〇〕伊勢に生る。幼より醫を好み、江戸に出で、宇田川玄隨の門に入り大槻玄澤の敎を受く。寬政九年玄隨の歿後、親戚朋友の議によりて宇田川家を繼ぐ。是より著書翻譯等あり。醫範提綱、和蘭藥鏡、遠西名物考等あり。天保五年甲午〔二四九四〕十二月六十六歲にて歿せり。

いひたくおなりのき

飯尾宅御成記　一卷　三善　數連

將軍足利義政が飯尾肥前守之種の邸宅に臨める時の記事なり。道中、供廻り、進物、其の他を詳しく記錄したるもの。著者の奧書に、「於二飯尾肥前守之種宅一御成事〔寬正七年二月二十五日〕爲二後證一注-記之者也」と記せり。卽ち寬正七年丙戌〔二一二六〕二月二十七日、神山掃部助三善數連の記せるところなり。『群書類從』第四百九の卷、武家部十に收む。

いひをつねふさこもんじよ

飯尾常房古文書　一軸　飯尾　常房

飯尾六左衛門常房が書翰にて、古筆了佐の鑒定あり。前端闕文す。書は鳥養流の草書なり。

◉飯尾常房は通稱を六左衛門といふ。筆札に巧にして、室町將軍の書史たり。兼ねて和歌に巧なりきといふ。

いひなりやまきつねのせつ

飯成山狐說　寫本一卷　安　輝

山背國飯成山の緣起なり。初め古史によりて其の由來を說き、最後に、「今山背國飯成山なる大神なり。天下の狐を使ひて、富を主り、驗を司り給ふ。能く災を拂ひ、又、邪妖を拂ひ給ふ」といへり。正德六年丙申〔二三七六〕の著なり。寫本數枚にして、『輪池叢書』第三十五册の內に收めらる。

いひはんきやうぶんけんろく

夷匪犯境聞見錄　六卷

維新前嘉永安政間の外交に關することを記し、また書類を輯錄したるものなり。安政四年丁巳〔二五一七〕出版。明倫堂の藏梓にかゝる。

いひふじ

飯富士　一卷　風　狀

俳諧連歌の集なり。著者漫遊の時、知人と留途別往來の折々俳諧し連歌したるものを、對者のと共に編輯したるものなり。寬延元年戊辰〔二四〇八〕某の序あり。

いびやうりやうかん

醫病兩鑑　二卷　竹中　岐山

諸書によりて、醫家の德義的要項を論述したるものなり。詞を換へて云へば、醫家を敎戒したる條項なり。下卷を醫病問答と稱して、三十三種の問答を擧ぐ。全編漢文なり。貞享三年丙寅〔二三四六〕二月、大野徹周卿の序、元祿六年癸酉〔二三五三〕九月、男竹中厚通伯の序あり。

いぶきおろし

氣吹颪　二卷　平田　篤胤

神道に關する講話を筆錄せしものなり。門人小島元吉、千本松吉の序に、「去し文化の十年ごろ、人々の需に依りて、口づから講聞せられ、或は記しても見せ給へる物なるが、此のたび人々の願ひに依りて、斯く上木して初學の人々に見する事と爲れり、」とあり。例の俗言俚語を以つて書き綴られたれども、儒釋二敎を排斥し、神道の一敎を主張せし、氏の意見を伺ひ知るべし。

◉平田篤胤の傳は『古史傳』の下に揭ぐ。

いぶきのやかしふ

氣吹廼舍歌集　寫本一卷　平田　篤胤

著者の詠歌數百篇を輯めたるもの。「日向の國人大神貫道の淤能碁呂島日記なる圖をわがなしへ子なる百川篤則に寫させて、つらつら見つゝ言擧しつるうた七首」より、「爐邊の閑談といふことを長歌に」に至れり。

◉平田篤胤の傳は『古史傳』の下にあり。

いぶきのやちよせんしよもく

伊吹能舍著撰書目　一卷　國友恒足

平田篤胤翁の著書目錄なり。伊吹能舍は篤胤の號なるより名とせり。『古史成文』より、『古道大意』に至る七十八種の書目、卷數を擧げ、刻否を記して、更に各書に其の解題を附したり。末に編者國友恒足、河内盛征の附言あり。曰く、「右は師の三十未滿の時より、六十三歲になられたる今年までに草稿成りて、なほ次々訂正を加へ、世に著さむとせらる書等なるが、中に世に有り來し書どもを、校正せられしもあり、猶此の外に稿成りたるもの數十部ありて、都ては百部に餘れど、其の中に閫外不出と定めて、子孫に遺し傳へむとせらるゝ物等も數あるを、爰には其の目を出さず。其は別に著述書目集と名けて、委曲に記せるもの一卷あり。就いて見るべし。なほも草案なものして片成なる物はいと多かるを、其は稿成るに從ひて追々に其の目を出すべくなむ」といへり。天保九年戊戌〔二四九八〕八月、河內盛征と共に編するところなり。最後に門人の著書にして篤胤の校閱にかゝるもの二十六種を列載したり。

いぶきのやぶんしふ

氣吹廼屋文集　寫本三卷　平田　篤胤

著者の歌文集なり。上中の二卷には文章四十四篇を收め、下卷に載するところは悉く和歌なり。其の數凡そ數百首あり。

◉平田篤胤の傳は『古史傳』の下にあり。

いぶきものがたり

伊吹物語　寫本四卷

關原合戰を主として、三成、秀吉等に關する物語なり。石田三成近江國を領知せるより、伊吹とは書名せるなり。第一卷太閤秀吉一代の概略、第二卷朝鮮渡海人數引擧、北の政所及び淀君等の事、第三卷大阪老臣不和の事、第四卷增田長盛、石田三成會議の事より、三成大阪を退去すること等に至る。凡て十項より成れり。家康年譜及び關原始末記等に基きて作りたるものなりといふ。

いふくせいぎへん

衣服正儀編　一册

諸經論に徵し、僧家の服制を說明したるものにて、卷末に其の圖をも揭げたり。編年詳ならず。

いふくりやう

衣服令　寫本一卷

皇太子禮服、親王禮服、諸王禮服、諸臣禮服、朝服、制服、服色、內親王禮服、女王禮服、內命婦禮服、朝服、制服、武官禮服、朝服、以上十四條に就て集解を加へたるものなり。漢文にて註す。明治九年內務省の寫本による。

いぶしうりんろんじゆつきしき

異部宗輪論述記私記　寫本二卷　僧　海應

唐僧窺基〔慈恩〕が著せし『異部宗輪論述記』を註解せしものなり。釋迦滅後百有餘年に、印度の小乘佛敎二部に分裂し、更に各支派を生じ、四百年頃に至りては、其の數二十部に及べり。其の二十部の本末分派の年時と宗義の異同大要とを敍述せしものを、印度世友の『異部宗輪論』とし、之れを註釋せしものを窺基の『述記』とす。今此の『私記』は更に窺基の『述記』を註解したるものなり。

◉海應は眞言宗智積院の名僧なり。明和八年辛卯〔二四三一〕に生る。九歲にして出家し、十七歲の時京都智積院に往き、英範僧正に侍すること五年、其の誨に依て大和を遊歷し、諸宗の學者に就て、俱舍唯識華嚴天台等の宗義を傳習し、更に歸りて復多年眞言の宗義を苦學し、俱舍の一門最も其の名あり。仁孝天皇の文政十二年己丑〔二四八九〕の六月遂に智山の化主に進み、其の年九月權僧正に補す。同天保四年癸巳〔二四九三〕十一月、享年六十三にて入寂せり。著す所、本書の外、論義私記十卷、唯識私記五卷等あり。

いぶしうりんろんじゆつきもくろん

異部宗輪論述記目論　寫本五卷　僧　榮天

印度なる世友の『異部宗輪論』を註釋したる窺基の『異部宗輪論述記』の末疏なり。寬政三年辛亥〔二四五一〕二月擱筆す。

◉榮天は大和豐山〔眞言宗に屬す〕の學僧にして、太丁と稱す。文化前後頃の人なるべし。未だ其の傳記を詳にせざれども、著書には、本書の外に、『起信論講義』五卷あり。

いぶんろく

異聞錄　寫本一卷

一家の異聞雜記錄なり。主として書畫器跡の鑑定等に關することを記せり。寬政九年丁巳〔二四五七〕九月以下の雜錄に係る。『輪池叢書』中に收めらる小册子なり。

いへさきさきやうごげんぶくごゐき

家祥卿御元服御位記　寫本一卷

德川家祥〔後家定〕の元服に關する記錄なり。文政十一年二月二十七日。從二位に敍せられ、權大納言に任せられたる宣命、及び同年四月勅使廣橋胤定、甘露寺國長院使日野資愛等に、將軍及び家祥等の對顏應接せし樣を錄せり。

いへただにつき

家忠日記　寫本六册　松平　家忠

著者の見聞日曆なり。正親町天皇の天正五年丁丑〔二二三七〕の十月に始りて、後陽成天皇の文祿三年甲午〔二二五四〕の八月に至る凡そ十八年間の記事。片言隻語、悉く實錄に係れば、當時列國の情狀、諸將の動靜、幕府の經營等、其の梗槪を知ることを得べし。

◉松平家忠は弘治元年乙卯〔二二一五〕に生れ、主殿助と稱す。世々德川氏に仕ふ。曾て父忠定參河深溝に任せしより、深溝松平と稱せり。武藏國忍城を賜り、埼玉郡の內一萬石を領し、後、下總國香取郡上代に移さる。後、家康に撰ばれて伏見城を守り、豐臣秀秋の率ゐる十萬の兵と戰つて討死す。時に慶長五年庚子〔二二六〇〕齡四十六なりき。

いへただにつきぞうほつゐか

家忠日記增補追加　寫本二十五卷　松平　忠冬

祖父家忠の日記を增補追加せしものなり。固、家忠の日記といへるは、正親町天皇の天正五年丁丑〔二二三七〕より、後陽成天皇の文祿三年甲午〔二二五四〕にいたるまでの日記にして、此の書は家忠の日記中、德川家康の事績、諸士成功の事等に關せるものを抄出し、其の說を增加敷衍して、上は後柏原天皇の永正八年辛未〔二一七一〕より、下は後水尾天皇の元和二年丙申〔二二七六〕にいたれり。其の中、後陽成天皇の文祿三年甲午〔二二五四〕までを『家忠日記增補』と題し、同慶長元年庚子〔二二六〇〕より末を『家忠日記追加』と題せり。

◉松平忠冬は、家忠の孫にして、與右衛門尉と稱す。慶安三年庚寅〔二三一〇〕出でて幕府に仕へ、累に登庸せられ、書院番組頭江戶町奉行等に上り、遂に世子德松の傅となり、元祿十年丁丑〔二三五七〕致仕し、後五年、七十九歲にて歿せり。著すところ、本書の外に東武實錄四十一卷あり。幕府の命に依り、二代將軍の事實を記錄したるものなり。

いへつなこうのき

家綱公之記　寫本三册

德川四代將軍たる家綱が、寬永十八年辛巳〔二三〇一〕八月三日出生したる時、三家、家門、諸大名等より、祝儀獻品の目錄を始とし、家綱山王社參詣行列の次第、元服作法の次第、萬治二年正月の儀式より、延寶八年庚申〔二三四〇〕の事までを略記す。

いへなりあそんけうたあはせ

家成朝臣家歌合　寫本一卷

長承四年〔保延元年一七九五〕の歌合にして、基俊、顯仲の判にかゝる

いへなりこうごじつき

家齊公御實記 本寫一卷 新見 正路

德川十一代將軍家齊が、機職以後の事どもを記述したるものにて、卷末に「右御實記は伊賀守新見正路の自記なりといふ。文政十二年〔二四八九〕五月御目付より、大阪町奉行に移さる」と證明せり。

いへのきしよけいかう

家記所繫考 本寫一册 荷田 在滿

家記類の所係の年代、及び記者の名を記したるもの。著者の序に、「凡諸記一卷以上存ニ在今世ニ者已見未見並擧レ之、雖ニ其名及文出ニ諸書ニ而不レ聞ニ存ニ在今世ニ者皆不レ載、凡記錄三人毎部註ニ其姓名一其未レ詳者闕レ之、其所レ繫御宇隨レ見、註レ之、未レ見者闕レ之」と云へるにて、本書の性質を概知すべし。集錄の年代を記さず。

◉荷田在滿の傳は「羽倉考」の下に見よ。

いへのさかえ

家の榮 一卷 友柳軒不扃

一種の俳句を編集したるものにて、めでたき事を詠みたる句をのみ拾ひ集めたるなれば「家の榮」と題したるなり。明和四年丁亥〔二四二七〕刊行す。

いへのぶこうごへきしよ

家宣公御壁書 本寫一卷 德川 家宣

著者が座右の箴言に、遺訓の書を併せたるものなり。前者は終りに「右十六箇條者文昭院殿源家宣公御壁書也」とありて、十六條總て「心」と云ふ字を冠せしめたり。例せば「心に我慢ある時は愛敬を失ふ」、「心にかざり有る時は僞を思ふ、かざりなきときは僞なし」等の如し。遺訓の方は家宣が易簀の際、世子鍋松に遺しゝものにして、其の大意は東照宮以下先代の恩を忘るゝ事なく、幼君をたすくべき事、又は已れの遺骸は增上寺に葬らしめよなどあり。正德二年壬辰〔二三七二〕十月に記ししものなり。此の遺言は其の實新井白石の代草するところなりといふ。

◉德川家宣は家重の第一子にして、德川六代の將軍なり。寬文二年壬寅〔二三二二〕四月二十五日生れ、四十三歲の時綱吉將軍の世嗣となる。寶永六年五月征夷大將軍に拜す。職にありて弊政を改革すること多く、文武の研究、明倫の奬勵にも功績あり。正德二年壬辰〔二三七二〕十月十四日五十一歲にて薨す。芝增上寺に葬り敎謚を文照院と號す。

いへばぐさ

いへば草 五卷 田中 元陳

天地神明の事より、人事百般に渉りて、感じたる事どもを、多く道德的方面より論じたる隨筆。毎項、必ず「云へばいふ」の五文字を冠せしむ。題號もこれよりつけたり。書中、菱川風の插畫あり、享保二十年乙卯〔二三九五〕の著述にして、元文二年丁巳〔二三九七〕の刊行に係る。

いへみつきやうのき

家光卿記 本寫一册 德川 家光

德川三代將軍家光の日記にして、十月十七日より、十一月三十日までの日附の下に、毎日の出來事を記したるものなり。年代を知る能はざるは惜むべし。但し當時幕府内の事情を知る參考となるべし。

◉德川家光は德川三代將軍なり。慶長九年甲辰〔二二六四〕七月十七日江戸城に生る。在職中治績あり、又政務の餘暇茶道を小堀政一等に受け、畫を狩野探幽に學ぶ。正保四年丁亥〔二三〇七〕四月二十日、四十四歲にて薨す。五月二日遺命によりて日光山に葬る。同十七日敕して大猷院と謚し、正一位太政大臣を贈らる。

いへやすこうくわんとうごにふこくごちぎやうわり

家康公關東御入國御知行割 本寫一卷

德川家康の分限帳。天正十八年七月、小田原の北條氏滅亡の後家康が關東八箇國を得て之れを其の家士に分與せし時の石高地名等を列擧せるものなり。井伊兵部太輔直政の「十二萬石〔上州箕輪後移同國高崎城〕」を首として、高木善次郎正次の千石〔武州之内〕に至る迄、凡そ八十名を記せり。

いへやすこうごねんぷ

家康公御年譜 本寫五卷 德川 義直

德川家康の天文十一年壬寅〔二二〇二〕の誕生より、元和三年丁巳〔二二七七〕日光山の遷葬に至るまでの詳細年譜なり。即ち第一卷は天文十一年より天正二年に至り、第二卷は天正三年より同十二年に至り、第三卷は同十三年より慶長四年に至り、第四卷は同五年より同十五年に至り、第五卷は同十六年より元和三年に至る年譜なり。正保三年丙戌〔二三〇六〕四月十七日義直の漢文自序、及び寬文九年己酉〔二三二九〕藩士河野通國の跋あり。五

卷一册の大本に寫傳す。或は單に「御年譜」また「神君御年譜」と題して寫傳せるもあり。

◉德川義直は家康の第九子。慶長十一年松平家忠の嗣となり、元服して義利と名け、從四位下に敍し右兵衞督に任じ、同十二年封を尾張に轉ず。夫れより諸官を經て元和三年權中納言に任ぜられ、從三位に進み、名を義直と改め、寬永三年權大納言正三位に敍任せらる。生平聖敎を學び儒術を信じ、聖廟を立て、經籍を貯ふる等文物上の功多し。慶安三年庚寅〔二三一〇〕五月、年五十一にて薨ぜり。

いへやすこうごゆゐじやうひやくかでう

家康公御遺狀百箇條 本寫一卷

本書は「御遺狀百箇條」の下に解題せり。

いへんとめきろく

異變留記錄 本寫一卷

番人取扱の辻番頭取の心得等、詳細に記述し、且建替修覆等に關することをも記したるものなり。櫻町天皇の元文年中〔紀元二千三百九十年代〕に定めし留書なりといふ。

いへんとりはからひがたこゝろえ

異變取計方心得 本寫一卷

門前にて旗本衆喧嘩したる時、旗本衆處外者打捨の時、屋敷前に手負、行倒、病人、また捨子、迷子ありたる時、その外とも變異の事件ありたる時の諸内定を記したるものにて、卷末に「文政二己卯〔二四七九〕七月、後藤基幸より借用、御目付羽太左京へ問合校合之上、同八月廿二寫永井直常」とあり。

いほのしをり

いほの枝折 本寫一卷 猪苗代兼載

連歌修業上の要件三十餘條を記述せる傳書なり。長享三年己酉〔二一四九〕著者雜談のまゝに書記して古市某に與へたるものと見ゆ、享祿二年、天文十七年等諸家寫傳の奥書もあり。

◉猪苗代兼載の傳記は「兼載雜談」の下にあり。

いほりのき

庵之記 一册 澤 露川

俳句の集にて、寶永四年丁亥〔二三六七〕京都にて出版したるものなり。

澤露川は芭蕉門の俳人にして、月窓居士の別號あり。伊賀より出でて尾張名古屋に住し、藤屋市郎右衞門と稱す。芭蕉の殁後、支考獨り俳壇に擅にして師の功を沒せんとするを惡み、盛に攻擊せり。著書は本書の外に不斷梅、玉曲集、西國油、北國油、菊しん、二人行脚、赤裸、船くら集、田植塚、小漉紙集、此原集等あり。

いほんおちぼしふ

異本落穗集 本寫十五卷 大道寺友山

落穗集と同書にて、只卷次の相違せるのみ。落穗集の二卷を合して一卷となしたり。

◉大道寺友山の傳は「岩淵夜話集」の下にあり。

いほんかいだい

異本開題 二卷 僧 空海

眞言宗の見解に據りて、金剛般若波羅密經、理趣經、金光明最勝王經、及び、妙法蓮華經等の題目及び本文の大意を解説したるものなり。撰述の年時を記さゞれども、各種同時の撰述に非ざるは勿論なり。寶永三年丙戌〔二三六六〕の版行に係る。

◉空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下に在り。

いほんこうあんれいせつ

異本弘安禮節 本寫二十卷

一名「中家實錄」の下に解題せり。

いほんこりやうかう

異本古量考 一卷

古斗の考證をなしたるものなり。其の種十四あり。別に十二種を載せたるものあるより、之れを異本といふ。

いほんさんかしふ

異本山家集 本寫一卷

僧西行の原本と順序分量等に多少の相違あり。此の書には彼の書に見えざるものも數多入れり。而して彼れは刊本にして、此れは寫本、彼れは二卷にして、此れは一卷なり。山家集のことは、該書名の下に見るべし。

いほんしゆぎよくしふ

異本拾玉集 本寫二卷

僧慈圓の詠歌等を編輯したる拾玉集の異本なり。詳しくは元本解題の下に見るべし。

いほんそがものがたり

異本曾我物語 十卷

建久四年癸丑〔一八五三〕五月、源頼朝富士野に獵せる時、伊東祐成其の弟時致と、工藤祐經の舍に入りて、父の仇を復したる始末を記したるものなり。文化四年丁卯〔二四六七〕釋日堯の跋に曰く、「此の書や世に稱する所、重須本曾我物語是れなり。今世行るゝ所の國字曾我物語と大同小異なり。其の撰も亦何人の手に成るかを知らず。古昔足利氏の衰世、天下四分五裂、戰國鬪爭の時、當山十世日殿聖人、繕寫して篋に藏す。兵火を恐るゝが爲に敢て出し示さず。時に天文二十三年なり。其の後世定り、天下昇平の時に當つて、水府義公聞くところあるを以て、重須本曾我物語を見んことを請ふ。之れを以て奉持して水藩に至る。公歡び見て卒業の後、謝儀として花押一部を賜ふ。天文二十三年より今に至つて經年凡そ二百五十餘年なり」云々と。屋代弘賢は、序して「此本は駿河國富士郡北山村〔古名重須〕多賀富士山本門寺に傳へしものなり」といへり

いほんちよせいだん

異本椿生譚　五卷　月下亭東漁

一種の仇討話なれども事實らしきところ見えず。著者三日間の作なりといふ。挿畫多くして、讀むところ少し。仕組は、一劍の紛失より、種々の事を惹起し、遂に椿生花園の讐を報い、「劍方他就歸ニ侯家」といふ條に終れり。

いほんどうばうごゑん

異本洞房語園　三卷　庄司勝富

江戸吉原町の開祖庄司甚左衞門の六代の孫勝富が其の家傳を編輯したるものなり。即ち古の遊女白拍子の事、元和の頃までなば遊女數奇を嗜みし事、京都江戸遊女の名目の事、吉原開基の事等より、大門口御高札の事、新吉原の圖、辻駕籠の事等七十一項に分けて記述せり。編者は其の自序中に云へり。「我がすむ里は往し慶長元和より以來、三たび所をかへ、三たび名を改め、既に百餘年を經て、實錄微言あり、又、巷說笑語多し。古き諺に曰く、鹿着の山は獵師知り、魚着の浦は網人知るといへば、予が子孫をして爲に此の里の來由と昔物語をも知らせんと、猥に筆を採て此の一册を綴り、始に燕石私集と標題しけるを、同邑の同志、其乙、之れを閱して燕石の名もことごとし、唯洞房語園とせよといひしまゝ之れに隨ふと云附」とあり、其の趣意を知るべし。享保五年庚子〔二三八〇〕の著なり。本書には類似本いと多ければ殊に異本とは名けたり。『洞房語園異本考異』と名くるものとは同物なり。

◉庄司勝富は西田屋又右衞門と稱し、其の第一祖庄司甚左衞門以來累世吉原町の名主なり。文章、俳諧等にも趣味を有したりきといふ。

いほんなんばせんき

異本難波戰記　寫本　七卷

難波戰記の別本なれば、元本の下に詳解せり。

いほんはうりやくかんき

異本保曆間記　一卷

原本「保曆間記」の下に詳解せり。

いほんほんてうしよじやくもくろくせう

異本本朝書籍目錄抄　寫本　一卷

本邦書籍中、書目の異なるものを類別列擧したるものなり。神事、帝記、政要、公事、詩家、陰陽、雜雜、和歌諸家名記等にわけて凡そ三四百編を擧げたり。

いほんみかはき

異本三河記　寫本　一卷

家康の事業に關する記錄なり。其の遠祖源頼義のことより筆を起して、大阪落城後の景況に至りて筆を擱く。もと大阪渡邊丹後守所藏の「三河記」は別に「官本三河記」とも云ひて、記錄中の隨一と信ぜられたるが、本書はそれと全く同じく、而かも其の渡邊本よりも古く、寛文十年庚戌〔二三三〇〕寫本と見ゆれば、右の外にも尙當時「三河記」と稱せしものありしより、異本の字は冠したるなるべしといふ。

いまをぶんこしよじやくもくろく

今尾文庫書籍目錄　寫本　一卷

神書佛書、箱入、小本、唐本等の文庫用的區別を以て和漢書數百部を擧げたる古書目錄なり。

いまかゞみ

今鏡　十卷

「大鏡」の後を受け繼ぎて、帝紀公卿傳及びそれに附隨せる種々の史談逸話等を記したるものなり。大鏡は文德天皇より後一條天皇の萬壽三年までの紀、藤原冬嗣より藤原道長までの傳を書き、本書は、後一條天皇以下高倉天皇までの紀、道長の子頼通以下基房に至る傳を系とし、大鏡に連續して自ら一體の歷史を成せり。本書は一名を「續世繼」とも、また「小鏡」とも云へり。本名「今鏡」と名けたるは、『白氏文集』なる百錬鏡の「鑒古鑒今不鑒容」とある詞によりて付けたるにて、序文にも、「古をかゞみ、今をかゞみるなどいふことにてあるに、古もあまりなり。今鏡とやいはまし。又なさくしげなる程よりも、年の積しもおらず、みめもさゝやかなるに、小鏡とやつけまし」とあり。『小鏡』は『大鏡』に對してつけ、『大鏡』を『世繼物語』と云へるより、『續世繼』と云へるなり。高倉天皇の嘉應元年己丑〔一八二九〕の作なる由、黑川春村の考證あり。曰く、「此の書を作り出でしは、嘉應庚寅と序文に見えて論なけれど、實は前年の春などの程より書き初められしなるべし。其の徵は、第八はらから〴〵の御子の卷に、「宰相中將家政と聞えし御女、待賢門院におはしましけるも、鳥羽院の御子生み奉り給へりし、吉田の齋宮と申しき。それも失せ給ひて、八九年にもやなり侍りぬらむ」とあるにて知らる。此の齋宮は鳥羽院第三の皇女にて應保元年十月三日薨去の由、一代要記に見えたり。應保元年より九年の後は、即ち嘉應元年にあたれり」と此の說從ふべきに似たり。著者に就きては先輩とりどりに論ぜり。黑川春村は「水鏡」の作者中山內府忠親なるべしといひ、屋代弘賢は源內大臣通親なるべしといふ。後の說やゝ確かなるやうなれども姑く疑として存す。本書は「國史大系」の十七卷にも收めたり。該書は、流布本を原とし、前田家所藏の本、淸水濱臣本、小山田與淸本、及び小中村博士本等を以て增訂を加へ、傍、史籍集覽本、關根正直氏の今鏡校本、及び今鏡證註、榮華物語等を參考したりと云ふ。

註釋書には關根氏の「今鏡證註」三卷〔二册〕あり。原書の字句を順序的に摘揭して、詳細に解釋考證せり。殊に卷首に、いろは分け索引を附し、頭首に標目を記して本文『校定今鏡』の丁數行數を示し最後に系圖を添へたる親切の註釋書なり。

いまがはうぢざねゑいさう

今川氏眞詠草　寫本　一卷　今川氏眞

名の如く著者の詠歌を集めたるもの。卷首に天正三年乙亥とあり。末に天明六年六月十七日武州江戸城歌合といふを附錄とせり。寛永十三年丙子〔二二九六〕烏丸光廣の跋あり。

◉今川氏眞は義元の子なり。天文七年戊戌〔二一九八〕に生る。永祿二年己未〔二二一九〕桶狹間の戰に父義元の死せし後、不行績又失政多く士民夙に離心を懷くにいたり、終に武田信玄の爲めに亡ぼされ、北條德川織田等に漂寓し、慶長十九年甲寅〔二二七四〕十二月、七十七歲にて江戸に卒せり。

いまがはおほさうし

今川大雙紙　二卷　今川了俊

弓馬其の他の式體作法に就きて詳說したるものなり。即ち、弓法次第の事、鷹の式體の事、太刀等に付て式體の事、躾式體の事、陣具に付て式法の事、衣類に付て式法の事、馬に付て式法の事、酒に付て式法の事、鞠の式法の事、食物の式法の事、歌道の事等の大綱を更に數十目に分ちて其の式法を詳述せり。『群書類從』第四百十二の卷上下、即ち武家部第十三に收む。

◉今川了俊の傳は『今川壁書』の下に揭ぐ。

いまがはき

今川記　寫本　四卷　齋藤道齋

一名「富麓記」〔ふの部〕の下に解題せり。

いまがはけいづ

今川系圖　寫本　一卷

今川家の祖、國氏基氏より、品川內膳高如、品川主馬高寬、大炊御門經敦室に至るまでの系圖なり。『續群書類從』卷百十六、系圖部第十一に收む。

いまがはけこもんじよ

今川家古文書　寫本　一軸

今川家の古文書を綴合したるものにて、最初に永正六年己巳〔二一六九〕九月二十六日、氏親より、寶樹院へ宛てたる書付あり。

いまがはけぶんげんちやう

今川家分限帳　寫本　一卷

駿河國今川氏諸家中の石高分限を記載したる者也

いまがはけりやくき

今川家略記　寫本　一卷

今川氏累代の略傳記なり。今川範國より、範氏、泰範、範政、範忠、義忠、氏親、氏輝、義元、氏眞に至る十代間の事績略傳等を記述せり。

いまがはでふ

今川帖　一卷　今川了俊

今川壁書と異名同物なり。故に詳しくは同書の下

に解題せり。

いまがはどうもうかい

今川童蒙解　三卷　蕪栗軒狸臍

今川了俊が其の弟仲秋に與へたる庭訓書を註解したるものなり。「不レ知二文道一而武道終不レ得二勝利一事」、「好二鵜鷹逍遥一樂二無益殺生一事」「小科罷不レ遂二糺明一令レ行二死罪一事」等の原文を日用の德義禮法に應用して辨解註釋したるものなり。寶暦四年甲戌(二四一四)仲春の作なり。本文に脱漏あり。本書は、蕪栗軒狸臍といふもの年八十餘にして著し童蒙の教としたりといへど、其の本名詳ならず。

いまがはへきしよ

今川壁書　一卷　今川　了俊

今川了俊が、其の弟仲秋を訓誡したるものなり。日常の道德作法に關すること、二十三箇條より成り、各條適實懇到なり。一名を『今川帖』ともいふ。後水尾天皇の元和、寛永の頃より、一時は兒童必讀の書とさへ定められて、行はれたり。後世、伊勢貞丈、本書を解釋して『今川壁書解』といへるものあり。別に解題す。

◉今川了俊は剃髪後の名なり。初め今川貞世といふ。上總介範國の二子。左京亮伊豫守となり、正四位の下に敍せらる。正平十四年己亥(二〇一九)足利義詮に從つて吉野を犯し、其の後、屢、官軍に抗したることありき。建德二年辛亥(二〇三一)足利義滿に鎭西探題を命ぜられ、是れよりまた菊池氏等と戰ふ。後年義滿の爲めに疑はれ藤澤に退隱したりしが、尋で其の罪を赦さる。是れより讀書を事とし、今川大雙紙、嚴島詣日記、九州合戰記、言塵集抄、落書鈔、落書露題、難太平記等を著せり。應永の末年(二千〇七十年代)歿す。享年詳ならず。

いまがはへきしよかい

今川壁書解　寫一卷　伊勢　貞丈

今川了俊が其の弟仲秋を訓戒したる『今川壁書』の解説なり。貞丈武士子弟の教訓書として、逐條親切なる解釋を施したるなり。安永五年丙申(二四三六)三月二十八日の奥書あり。

◉伊勢貞丈の傳は『安齋叢書』の下にあり。

いまがはれうしゆんしよさつれい

今川了俊書札禮　寫一卷　今川　了俊

書札に關する口傳書なり。即ち書札、文箱、諸家和歌、屏風障子、色紙、けさう文、女房文書、男句、歌道の流、そらたき、硯紙、女房胸の守、管絃具足、連歌執筆の事等以上十四項に關して種々説明せり。『續群書類從』七百〇二の卷、武家部第四十八に收む。

◉今川了俊の傳は『今川壁書』の下にあり。

いまがはれうしゆんわかどころへふしんのでうでう

今川了俊和歌所へ不審條々　一卷　今川　了俊

和歌所へ向て歌詞、詠法等を糺したる歌學書なり。最初歌詞の事に就きて論辯し、次に、「珍しく見え候古歌」とて、後鳥羽院、定家卿、衣笠内大臣、後賴朝臣、俊成卿、其の他十數家の歌、凡て五十八首を擧げ、次に歌詞二十餘の例を掲げ、次に頓阿の歌其他を引例して歌體歌語等を論じたるものなり。一名を「二言抄」と稱す。應永十年癸未(二〇六三)正月の著作なり。『群書類從』卷二百九十六、和歌部第百五十一、雜十六に收む。

◉今川了俊の傳記は『今川壁書』の下にあり。

いまどみやげをんなさいぎやう

今戸土産女西行　三卷　瀧澤　馬琴

上中下三編六回に、女西行褒不二の經歷浮沈を骨子として作り成せる小説なり。文政十一年戊子(二四八八)の自序あり。

◉瀧澤馬琴の傳は『南總里見八犬傳』の下にあり。

いまみやくさ

今宮草　一卷　小西　來山

著者の俳文俳句等の集なり。享保十九年甲寅(二三九四)門人無名園古道、古梅園長江、金英舍梅七等、其の遺稿を集めたるものなり。著者晩年攝南今宮村に移住したりし時の作を主と集めたるなり。

◉小西來山は泉州堺の人。(小西行長の後裔といふ)幼にして父母を喪ひ、大阪に出でて親戚に養はる。性敏活にして、讀書を好む。俳人前川由平、西山宗因等の門に學び、年未だ二十に滿たざるに、巳に調宗として知らる。長井家久、高橋文十、村井古道、井上布門等の俳人皆其の門より出づ。十萬里堂、湛翁等の俳號あり。「來山は生れたとがで死ぬるなり。それで恨みも何もかもなし」の辭世を遺し、中御門天皇の享保元年丙申(二三七六)十月三日歿せり、年六十二。(或はいふ六十三と)逢坂山一心寺に葬れり。

いまみやしんぢう

今宮心中　一卷　近松門左衞門

心中に關する一種の世話物淨瑠璃なり。即ち二郎兵衞、おさきを中心として作り成せり。

◉近松門左衞門の傳は『國姓爺合戰』の下に掲ぐ。

いまものがたり

今物語　一卷　藤原　信實

信實の雜話を集めたる和文の隨筆なり。文覺上人の歌の事、紫式部が地獄に落ちたるよし人の夢に見えたる事、小侍從が子の法橋實賢狂歌詠みて法眼になりたること。其の他當時傳流の雜話を文章的に綴りたるものなり。本書はもと二十七册ありしこと仁和寺書目には見えたれど、傳存せるところは僅に此の一卷なり。『群書類從』卷四百八十三、雜部第三十八に收む。

◉藤原信實は和歌と畫とを以て著る。高倉天皇の治承元年丁酉(一八三七)に生る。定家卿の異父兄なり。其の歌の撰集に入れるもの多し。畫は藤原光長(土佐四世)の風を慕ひ其妙を得たり。遺蹟の著名なるものには、榮花物語、歌仙殘缺、三十六歌仙卷物、歌仙人物上ヶ疊殘缺、建保中殿御會圖、人丸色紙並手持料紙、普賢十羅刹女、住吉玉津島神影、天滿宮御影、定家卿肖像、大黑天、北野神寶天神緣起等あり。文永二年乙丑(一九二五)十二月歿せり、年八十九。

いまやうすがた

時世粧　六册　松江　維舟

俳諧の集にて、寛文十二年壬子(二三三二)三月上旬の編輯にかゝる。

◉松江維舟の傳記は『犬子集』の下にあり。

いみづがは

射水川　一册　十丈

著者の俳句集にて、元祿十四年辛巳(二三六一)京都俳諧書肆井筒屋より出版す。著者十丈は越中の俳人なれど、今その詳傳を得ず。

いみやうぶんるゐせう

異名分類抄　四卷　入江　昌喜

諸事物の異名、別稱等を分類して記載し、詞人の便用に供したるものなり。天地、時節、神祇、人倫、器材、衣食、魚貝鳥獸、草木等に分類して、各、諸書に考へ諸説に照して、異名別稱等を掲出せり。其の中には同代の異名のみならず、古今名を異にせるものをも紹介せり。天明三年癸卯(二四四三)の著にして、寛政六年甲寅(二四五四)の刊行なり。

◉入江昌喜は和學者なり。享保七年壬寅(二三八二)生る。白澤老人と號し、幽遠窟と稱す。幼より國書の研究に志ありしかど、商家に生れて、文學に從事すること能はず。二十餘歳の頃始めて學に從ひ、精研すること十餘年其の名都下に布くに至れり。寛政七年乙卯(二四五八)妙法院親王の令旨により『萬葉類葉抄』を補著す。親王之れを嘉奬して特に序を給ひき。寛政十二年八月、七十九歳にて歿せり。著書は、本書の外に仁德天皇傳、竹取物語補註、萬葉類聚抄、同補闕、同師説、榮花採葉、遊手書考存疑、和田津海、青陽唱和、久保之取蛇尾、本朝地名考、幽遠隨筆等あり。

いもゐさんばうゑ

芋井三寶記　寫六卷　滋野　貞融

善光寺由來緣起を記したるものにて、本來二十四卷なるを、今は麻績白卷より、黑田枕卷に至る六卷を三册に合本せり。天保十一年庚子(二五〇〇)春三月の編なり。

◉滋野貞融の傳記は『天ノ八衢』の下に掲ぐ。

いものしもんじよ

鑄物師文書　寫一卷

天文二十二年癸丑(二二一三)以來の、鑄物師に關する舊記を編輯したるものなり。

いもひやくちん

いも百珍　一卷　珍古樓主人

甘藷の品類、調理方等を記載せるものなり。卷首に甘藷集説を掲げ、中には甘藷の調理法、凡て百餘品を集錄せり。文化十三年丙子(二四七六)の出版。

いもんきくわん

醫門闚觀　一卷　關口　本貞

醫道及び本劑の事に就きて簡單に説明したるものなり。文政八年乙酉(二四八五)の刊本に係る。

ゐやうじせきかう

渭陽事蹟考　寫一卷

尾張國名古屋四方口々地勢の險易防戰の要害得失等を論じたるものにて、古來有名の戰例に就きて

評論せり。兵學者流の編なるべし。

いやひこしやりやくき

伊夜彦社畧記　寫本 一卷

越後國蒲原郡櫻井鄕、伊夜比古神社の來歷緣起を記したるものなり。

いよ

醫餘　三卷　尾臺　良作

古書中より醫に關する言辭を抄錄せしものなり。命數、養生、疾病、治術の四編に分ち、周書漢史より諸子百家に至る凡そ五十二種の古書に就き、其の中に散在して醫に關係せる言辭をば大抵抄錄せざるなく、間々評語を加へ箋註を附して、其の意の存する所を闡明せり。文久二年壬戌〔二五二二〕の喜多村直寬、鹽谷世弘の序、及び淺田惟常、黑田惟孝の跋あり。其の翌年の刊行に係る。

◉尾臺良作は江戶日本橋大工町に住したり。

いよう

醫賸　三卷　多紀　元簡

醫論、處方、療法等に關する漢文の隨筆なり。其の材料は主として古書、古言を引用せり。附錄ありて、蓐原、居蘇、吸毒石等を考證す。文化六年己巳〔二四六九〕なる多紀元胤の跋あり。

◉多紀元簡の傳は「醫方契領」の下に見るべし。

いよのくにじゆんくわいき

伊豫國巡囘記　寫本 四冊

第一册に安知生、西泉、檜木、坂元、玉之江、石田の諸村。第二册に兎野山村、黑瀨山、前大保木山。第三册に中奧山、西之川山、東之川山、周敷村。第四册に氷見村を揭げ、地理を悉し、圖を示す。現本は版下の心にて淨書したるものなり。

いよのくにまつやまじやうのづ

伊豫國松山城之圖　寫本 一折

同城內地圖にて、寺院、町名、丁境、邸宅、門戶、番所等を記せり。曲尺三分を十間に準じて作れり。延寶五年丁巳〔二三三七〕作の大繪圖に基き、文政十一年戊子〔二四八八〕春三月模製するところなりといふ。今見るところは吉村春峰が、慶應四年二月松山陣中に寫したるものなり。

いよのくにみしまじんじやおほはふりけき

伊豫國三島神社大祝家記　寫本 一卷

同社記及び大祝家の年譜的記錄なり。今見る所は六十一枚に寫して、其の以後闕文せり。

いよみしまえんぎ

伊豫三島緣起　寫本 一卷

伊豫國越智郡なる三島大山神社の古緣起なり。附錄として、康和、嘉承、治承、元久、安貞、正和、元弘、延武、延元、觀應、正平、延文、貞治、應永年間等の古書簡を輯載せり。「續群書類從」卷七十六に收めたる「伊豫三島明神緣起」と同物なり。

いらくさんしでんしんろく

伊洛三子傳心錄　三卷　保科　正之

宋の楊龜山、羅豫章、李延年、以上三子の文集、語錄、問答等の中より、性理說に關せる文辭を抄錄せしものなり。寬文十二年壬子〔二三三二〕林恕の序、同九年山崎嘉の序、及び跋あり。

◉保科正之の傳は「會津風土記」の下にあり。

いらんし

猗蘭子　三卷　本多　忠統

西土の子書に擬へて一家の志を述べたるもの。猗蘭は著者の一號、故に名とせり。中御門天皇の享保二十年乙卯〔二三九五〕服部元喬の序あり。此の編の參考たるべきものは、ま〻「猗蘭臺集三稿」に見えたり。本書は「猗蘭臺集」七卷、同二稿五卷、同三稿五卷〔いづれも後に解題せり〕と合したる二十卷の中なり。

◉本多忠統は猗蘭と號し大乾と字す。初の名は駒之助、晚年拙翁と號す。藤原姓を省して滕とす。元祿四年近江膳所に生れ、享保四年九月大番頭となり、同十年六月若年寄に進む。少にして徂徠に從學し、儒學に通じ、文詩を善くす。又書畫に長ぜり。古言錄、猗蘭子、及、文集等の著あり。寶曆七年丁丑〔二四一七〕二月二十九日、六十七歲にて卒す。

いらんだいしふ

猗蘭臺集　七卷　本多　忠統

著者の詩文を集めたるものなり。猗蘭臺は著者の一號、故に書名とせり。首卷より第三卷に至るまで詩を收め、第四卷より第七卷に至るまで文を輯めたり。享保十七年壬子〔二三九二〕服部元喬、越智正珪、守煥明等の序あり。

◉本多忠統の傳は「猗蘭子」の下にあり。

いらんだいしふさんかう

猗蘭臺集三稿　五卷　本多　忠統

著者が詩文集の第三編なり。〔初編は本書の前に、二編は本書の後に解題せり〕猗蘭臺は著者の一號、故に名とす。第一卷より第三卷までに詩を、第四卷第五卷に文を收めたり。

◉本多忠統の傳は「猗蘭子」の下にあり。

いらんだいしふにかう

猗蘭臺集二稿　五卷　本多　忠統

著者詩文集の第二編なり。〔本集、及び三稿は本書の前に解題せり〕猗蘭臺は著者の別號、故に名とせり。第一卷より第三卷までに詩を集め、第四卷第五卷には文を收む。文中、平安に在留せる時の道の記「西記」といふもあり。

◉本多忠統の傳は「猗蘭子」の下にあり。

いりちんぎよく

作畚撰種 衣裏珍玉　一卷

草木の雌雄を圖解せしものなり。著作の材料として龜田某の「作畚寶圖」宮貫定雄の「草木撰種錄」の二書を參考したるより、作畚撰種の冠詞を用ひたるなり。文政十二年己丑〔二四八九〕八月の著に係る。著者は「臨池庵清潔正義」と署名せり。

いりむこしふ

入聟集　一册　喜田村立以

著者の俳諧の集なり。編輯の年時は明記なくて知りがたし。

◉喜田村立以は別に「長かもじ」一册の著書あり。

いりやくせう

醫畧抄　一卷　丹波　雅忠

治療方劑の書なり。病源を極め、治療を施し、方劑を投ずること等數十項を記載せり。白河天皇の永保元年辛酉〔一七四一〕の撰に係り、寬政八年丙辰〔二四五六〕十二月版刻す。

◉丹波雅忠は、治安元年辛酉〔一六八一〕生れ、祖父の業を繼ぎ、醫學得業生たり。長元八年醫學博士となり、永承中掃部頭に任ぜらる。永保中丹波介となり、應德中權守に遷り、典藥頭右衞門佐に至る。高麗王妃の疾ありて聘し來りし時、大江匡房が「雙魚猶難ㇾ達二鳳池之浪一扁鵲豈得ㇾ入二鷄林之雲一」の名話は、此の雅忠のことなりとぞ。寬治二年戊辰〔一七四八〕六十八歲にて歿せり。

いれうしうはうきくたいせい

醫療衆方規矩大成　一卷

所有病症を網羅して、更に投藥施療の方法を研究指示したるものなり。卽ち先づ病名を數十門に分ち、更に數千の處方を示して、實に衆方大成の名に背かざるなり。舊版は明和六年己丑〔二四二九〕の刊行にして、更に寬政十二年庚申〔二四六〇〕に改刻せられたり。

いれうせいし

醫療正始　二十一卷　伊藤　玄朴

固と、獨逸人晁斯骨の著なるを、和蘭人漢越而實幾の譯したりしものを、更に翻譯したるものにて、醫療諸事を論じ、醫院の類案を附せり。天保六年乙未〔二四九五〕版本となる。

◉伊東玄朴は佐賀の人にて、幕府に仕へ、江戶下谷和泉橋通に住したり。

いれうてびきぐさ

醫療手引草　七卷　加藤　謙齋

種々病理を說き、其の方劑を列擧したるものなり。著者が平素讀書の上に、又實驗の上に得たるものを蒐錄せるなり。寶曆年間の作にして、明和九年壬辰〔二四三二〕再刻す。本書の參考には「醫療手引草別錄」あり。次に解題す。

◉加藤謙齋は寬文九年己酉〔二三二九〕三河國飯西郡に生れ、名を忠實、字を衞愚、別號を烏巢道人と云ふ。淺見絅齋を師として京師に留學すること久しく、又稻若水に隨つて本草學を修め元祿年中途に醫となる。其の著は本書の外に、醫者雀、病家示訓、鎌倉實記等あり。享保九年甲辰〔二三八四〕孟春五十六歲にて卒す。

いれうてびきぐさじやうへん

醫療手引草上編　二卷　加藤　謙齋

專ら古法によりて病理藥法等を說明したるものなり。本書は寶曆年間の作を、更に男加藤玄順懿之の校補、及び越後の同門人尾崎正蔵の校正を加へて明和三年丙戌〔二四二六〕開版したるものなり。

◉加藤謙齋の傳は「醫療手引草」の下にあり。

いれうてびきぐさべつろく

醫療手引草別錄　四卷　加藤　謙齋

同じく病理を說き方劑を集めたるものなり。平素讀書上に又經驗上に得たるものを蒐錄して初學者に便せるなり。安永六年丁酉(二四三七)刊行す。
◉加藤謙齋の傳は「醫療手引草」の下にあり。

いろいろのきゝがき

色々の聞書　寫本一卷

弓馬軍術に關する諸種の故實聞書なり。「弓馬集書」の中に收めたり。

いろすぎはら

色杉原　二册　神戸　友琴

俳句の集なり。編年を明記せざれど、元祿年中の作なるべし。著者神戸友琴は加賀の俳諧師なり。

いろのちぐさ

色のちぐさ　一卷　田中　訥言

裝束の色目を圖示列載せる書なり。延喜式、縫殿寮彈正式、及び令、國史中に、見えたる染色の大略より、諸抄に記したる色目に至るまでを網羅し、殊に重ねは表裏を並列して、終りに四季、時節等に關して用ふべき色と、忌むべき色とを擧げたり。文政元年戊寅(二四七八)の著なり。
◉田中訥言は平安の畫家、名を痴、字を虎頭、大孝齋と號す。古畫の研究に從事して、其の格を詳にせり。殊に衣冠の人物、宮殿の模寫等に巧なりき。晩年盲となり舌を嚙みて死せり。時に文政六年癸未(二四八三)三月二十一日なりき。享年詳ならず。

いろはうたじやしやうべん

伊呂波歌邪正辨　三卷

日蓮宗徒の所論を辨破したるものにして、諸宗行道乃至師檀入獄等の四十八題を設け、其の意をいろは歌に表し、更にその歌意を敷演說明せし一の通俗的宗論の書なり。緒言には、日蓮の傳記、日蓮宗徒の確執、及び他宗徒と閱諍の由來を敍述し、日蓮、淨土、及び其他の宗教家が參考に資すべき節少からず。仁孝天皇の天保十三年壬寅(二五〇二)三月の著作に係る。著者の名を闕くと雖も恐くは淨土宗徒の手に成りしものならむ。

いろはおんくんでん

以呂波音訓傳　五卷　僧　慧眼

いろはの字源發音を論じ、また其の語源をも說きたるものなり。字源は、毎字梵字より出でたりと論ぜり。序あり、「斯書其大意云、吾東方遂古之初、已有文字之兆、而其兆者髣髴西域文字之意耳、而年紀悠邈、間有其遺者不足徵也、至於弘法大師、括聲音之要作伊呂波、蓋取諸梵字省略其體」といふ。明和九年壬辰(二四三二)源廣淵の序、僧長賢の跋あり。同年平安に出版す。

いろはきゝがき

以呂波聞書　寫本一卷　僧　日音

以呂波四十七字を佛教によりて解釋したるものなり。卷首に「王代記」とて歷代の御謚號を揭げ、次に以呂波の作者を論じ、さて次に註解せるなり。最初御謚號の所に後柏原院を今上皇帝とせるを見れば永正頃(二千百六七十年代)の著なるべし。
◉日音は、本書題號の下に、「本妙寺圓林坊日音」とあり。日蓮宗の僧なるべし。

いろはくでん

伊呂波口傳　寫本一卷　藤原　長親

一名「以呂波之傳」の下に解題せり。

いろはくんぎ

以呂波訓義　寫本一卷　多田　義俊

別著「以呂波聲母傳」の字訓を、更に擴張して種々雜多の言語の意義等を解釋せり。
◉多田義俊の傳記は「遊和草」の下に揭ぐ。

いろはけんもん

以呂波見聞　寫本一卷

いろは作者のこと、又、いろは歌の意義等を說明したるものなり。

いろはじかうろく

以呂波字考錄　二卷　僧　全長

以呂波四十七文字の註解考證なり。即ち每字の下に、萬葉集、古事記、日本紀、舊事記等の文字を揭げて引證とし、更に「書史會要」の以呂波文字、又、梵字の以呂波文字等をも附して揭げたり。元文元年丙辰(二三九六)の自序、及び坂井周道の序あり。
◉全長の傳は「顯淨土傳戒論私記」の下にあり。

いろはじべん

以呂波字辨　寫本一卷　岡谷　勿齋

いろは假名の字體より始め、假名遣法等までを論じたるものなり。總目を擧ぐれば、いろはの字體の誤を正す、片假名の字體、假名遣大概、三重韻假名

遣傳、朝鮮假名字、唐音、唐以呂波、以呂波大意、京都言葉の輕重、童蒙指南等なり。延享三年丙寅(二四〇六)十月の編輯にかゝる。

いろはしやうじへん

以呂波正字編　寫本一卷

文字の起原、平假名の字源、片假名の字源、いろは歌の意義等を說明したるものにて、享保二年丁酉(二三七七)の書寫にかゝる。

いろはしやく

以呂波釋　一卷　僧　覺鑁(カクバン)

一名「以呂波祕釋」の下に解題せり。

いろはしやくもん

以呂波釋文　一卷　僧　覺鑁

一名「以呂波祕釋」の下に解題したり。

いろはしやくもん

伊呂波釋文　一册　龜田　長興

いろは各字の正俗を論じ、點畫を正し、其の出所を論明したるものなり。卷首に國字考を揭げ、卷末に音類假名字考を載す。文政六年癸未(二四八三)の著にして、同年十二月の刊行なり。
◉龜田長興の傳記は「善身堂文集」の下に揭ぐ。

いろはじるゐせう

伊呂波字類抄　寫本三卷　橘　忠兼

いろは四十八字に分ちて種々の詞を集めたる字書なり。集めたる詞は凡て漢字にて、片假名を付したり。各字を更に天象、地儀、人倫其の他に分ち、中には往々註解を加へたるものあり。奧書あり、「自天養比至于治承三十餘年、補綴無隙、部類如舊、更加星點、紕繆雖多、愚昧難直、學者每見可撮改之。抑誂貫士有成入道、嗣字少少加朱點、爲要文不迷也。件人之學、杏壇之風、忽入桑門之日、稽古有勤、其說不信哉、乃爲後見之不審、粗所注付也。內膳典膳橘忠兼撰」といふ。卷數には、尙、二卷、四卷、十卷のものありといへど、漸次內容の增補に隨つて增したるものなるべし。

いろはせいぼでん

以呂波聲母傳　寫本一卷　多田　義俊

いろは四十七文字は悉く發音の根源なる由を論じたるものなり。以は息にかゝる訓なりといふが如く、種々詞の出所などを論じたり。更にいろは訓義等に就て同人の著したる「いろは訓義」あり。前に解題す。
◉多田義俊の傳記は「遊和草」の下に揭ぐ。

いろはせう

いろは抄　寫本一卷

いろはに關する考論。いろは作者異說の事、涅槃經四句之文配當之事、日本文字有無之論、剖語連語、母聲の論、字體語釋、眞名假名、天竺文字のおこり、大唐文字の興り、出雲假名、天竺の伊の字の事、日本の伊の字の事、への字、との字、おの字、れの字、つの字、けの字、えの字、すの字、音便の事、片假名おこりの事、かな返しの事、かなづかひの事等の目あり。年代作者共に詳ならず。

いろはたんげんせう

伊呂波探玄抄　寫本一卷

いろは歌に關する考證なり。即ち片假名の起り、平假名四十七字の眞字、悉曇五十字母等を擧げて對照せり。太田南畝の「みそのや」に收めらる。

いろはちうかい

以呂波註解　一卷　僧　元暐

いろは四十八字の意義を漢字にて解釋せしものなり。其の自序に曰く「傳言、以呂波者三人之所作也。色香散者勤操之所作也。其後從祚築明神有夢想祕歌二首、而我世誰常、乃至不醉者弘法之所作也。竟留京宇傳敎之所添也。」といひ、又卷首に「舊傳、以呂波因涅槃經四句偈作之者也。色香散者諸行無常也。我世誰常者是生滅法也。有爲奧山今日超者生滅滅已也。淺夢不見不醉寂滅爲樂也」と記るせり。貞享二年乙丑(二三四五)八月の自序なり。

いろはでん

伊呂波傳　寫本一卷

いろは歌の註脚なり。初めにこのいろは歌は空海、勤操兩人の合作なるよしを云ひ、次にいろは歌四句の意味を略解せり。太田南畝の「みそのや」に收めらる。

いろはでん

以呂波傳　寫本一卷　佐々木文山

いろはの作者、歌意、字源等を考述したるものな

り。蓋し宇都宮由的の「以呂波傳」に多少の增訂を加へたるものなり。享保元年丙申〔二三七六〕の作。太田覃の「三十幅」第二にも收めたり。本書は別に、「佐文山本以呂波傳」と題して行はるゝもあり。
◉佐々木文山は書家なり。名は臥龍、通稱百助、墨華堂と號す。兄池庵は書を以て幕府に仕へ、文山また高松侯に仕ふ。書家の名當時に著る。享保二十年乙卯〔二三九五〕五月七日、年七十七にて歿せり。

いろはでん

以呂波傳 寫本一卷 宇都宮由的

いろはは勸操、空海の合作なりと論述し、いろは歌四句の意義を註解し、いろは假名源字の事を考說したるものなり。此の書は別に「宇都宮由的以呂波傳」と題し行はるゝものあり。
◉宇都宮由的の傳は「日本人物史」の下にあり。

いろはでんじゆ

伊呂波傳受 寫本一卷 多田義俊

いろはの語源を說明したるものにて、「右之一卷深祕にして不許他見の書なり。門人の外不出之」と奥書せり。
◉多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

いろはでんじゆ

伊路葉傳受 寫本一卷 藤原長親

一名「以呂波之傳」の下に解題せり。

いろはでんじゆ

以呂波傳授 寫本一卷

悉曇にもとづきていろは四十七字を作りたる由を論じたるものなり。種々奥書あれどたしかならず、恐くは後世の僞作なるべし。

いろはてんりせう

伊呂波天理抄 二卷 僧 良鑁

いろはを眞言の教義にあてゝ考證記述したるものなり。卽ち上卷には題號、製作年時、作者、大意、天竺文字、支那文字、日本文字等の事を論述し、下卷には、此の伊呂波歌を例の涅槃經四句の偈文に對配して、一々、字句の意義を解釋せり。其の解釋餘りに神祕的宗教的に傾くの嫌なきに非ずと雖、這種の研究には參考たるべし。延寶五年丁巳〔二三三七〕の著作に係る。
◎良鑁は眞言宗の僧なり。

いろはどうもうせう

以呂波童蒙抄 寫本三卷 僧 盛典

いろはを眞言の教義に附會して註釋したるものにて、まゝ舊事本紀、大成經などを引用せり。寬保三年癸亥〔二四〇三〕の撰なり。
◉盛典は眞言宗の僧なり。本書の外に、悉曇字記指南鈔玄談、聖道衣料編、簾蓋初心口傳鈔、九界反紐相傳和解、新增頭鏡易解大全等を著せり。

いろはのでん

以呂波之傳 寫本一卷 藤原長親

いろは文字の字源に就きて考論したるもの。別名を雲耕伊呂波口傳また伊路葉傳受といふ。
◉藤原長親の傳は「源氏小鏡」の下にあり。

いろはのでんき

色波之傳記 寫本一卷

いろはの作者、いろはの意義、拾樣いろは等を記す。漢文の體に作れり。慶長十九年甲寅〔二二七四〕書寫の奥書あり。

いろはひしやく

以呂波祕釋 一卷 僧 覺鑁

最初「因假名釋自在」として、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」の偈句に徵して、いろは歌全編を解釋したるものなり。別著「密嚴諸祕釋」卷八に收めたる「以呂波略釋」の摘抄なりといふ。別名を以呂波釋、また以呂波文ともいへり。
◉覺鑁は紀伊國那賀郡山崎莊、西坂本村の長方なる一乘山根來寺の開山なり。正覺房と稱し、童名を千歲といひき。柏原帝の後裔太宰小貳純朝の末葉肥前國府知津の莊總追捕使伊佐平次兼元の嫡男なりといへり。康治二年癸亥〔一八〇三〕十二月、四十九歲にて入寂す。

いろはぶんこ

いろは文庫 五十四卷 爲永春水

赤穗義士復讎の顚末を潤色敷衍したる小說なり。著者はこの書に冠するに正史實傳の四字を以てし、間々義士の書簡をも挿入したれども、全編の結構は著者の架空にて、文章體裁は勿論、書中の人名地名に至るまで、假借のものを用ひたり。挿畫は溪齋英泉の筆に成り、初編の出版は天保七年丙申〔二四九六〕にして、以下年を逐うて刊行し、第五十四

卷に至りたれども遂に完らずしてやみぬ。
◉爲永春水は寬政二年庚戌〔二四五〇〕江戶に生る。初め辨慶橋に住し、後牛島に移り、又下谷池ノ端に轉す。書籍の仲買を業とせしが、性、稗史小說を好み、暇あれば誦讀せり。最初講談師の門に入り、出でて式亭三馬の弟子となり、狂訓亭三鶯と號して晩年阿古義物語後輯を補へり。後、又去つて二代目楚滿人となりしが、到るところ、意を得る能はす。遂に獨立の志を決し、爲永春水と稱して人情本作者となりたり。阿古義物語後輯が風俗壞亂を以て官の罰するところとなり、悉く絕版せられたるより、春水怏々として娛ます、日夜痛飮し、終に病を發し、天保十三年壬寅〔二五〇二〕七月二十三日五十四歲にて歿せり。著書三十二種あり、卽ち本書の外に、阿古義物語後輯、春色梅曆、梅見船、明烏後日の正夢、園の雪花の魁、貞操婦女八賢誌、八百萬神樂の太鼓、風俗女西遊記、戲場小錄長壁譚、花鳥風月、日本水滸傳、歸咲古鄉錦繪、浦島太郎珠の家土產、繫馬七勇婦傳、蝶衡鎌倉模樣、尼子九牛七國士傳初編、笠松峠戀の昔車、永對談語、梅花春水、八幡鐘、手鞠唄昔物語、大內興隆十杉傳、篠塚太郎英勇話、荒川武勇傳、新田功臣錄拾遺、紫の總絲、辨慶傳敵討湊の曙、好文士傳、なろち太郎物語、蒔捻ふくろ等なり。

いろはへいぜいしよくもつやうじやうべんらん

いろは平生食物養生便覽 一卷

動物穀菜に關し、利害を說きたるものなり。全編いろは分に順序して、動植物の種類凡そ五百餘種をとりいでて、其の利害を辨じ、人の養生に便したるものなり。文化十五年戊寅〔二四七八〕五月出版。

いろはべんもうせう

以呂波便蒙抄 寫本一卷 僧 良翁

いろはに關する論註なり。大意、總括圖釋名、字體、京字の事、以呂波歌の事、んむの事、片假字の事、作者の事、大師眞蹟の事等を論註せり。文政十年丁亥〔二四八七〕の撰。
◉良翁は上野國高崎延養寺密乘良翁とあり。

いろはほんげん

以呂波本源 寫本一卷

いろはの假名、片假名、作者、字源等の事を考述したるものなり。

いろはもんべん

以呂波問辨 一卷 僧 諦忍（ダイニン）

いろはの作者、神代に文字ありきといふ事、日文の事、支那文字のはじめの事、萬葉假名の事、雲州神門郡神門寺にありといふ弘法大師眞蹟のいろはの事、片かなの事、日本の音と梵字の音との事、日本語と梵語と通用の事、つゞりかたの事、いろはの字源の事、片かなの字源の事、ひふみの意味等の目につきて考述せり。支那の古文字、篆籀の類十二種を附錄とせり。寶曆十三年癸未〔二四二三〕の作。同十四年京都にて發行す。
◉諦忍の傳は「大光普照集」の下にあり。

いろはりやくしやく

以呂波略釋 一卷 僧 覺鑁（カクバン）

いろは歌の意義を略釋したるものなり。これまた一名を伊呂波釋文、また伊呂波祕釋といふ。

いろはわけさうもくなよせ

いろは分草木名寄 寫本二卷

草木の名稱をいろは分けに列擧したるものなり。一卷には草の種類凡そ二千數百、一卷には木の種類凡そ一千數百を、何れも其の名のいろは順に列擧せり。各種假名と漢字とを以て二樣に記し、普通の讀者に便したり。

いろはわけちんしよろく

以呂波分珍書錄 二卷

某一家の藏書目錄なり。書名をいろは順に列れ、揭出せる書目凡そ數百あり、いづれの藏書、いつの編輯といふことを知らず。

いろはわなんせう

色葉和難抄 寫本十卷

古今の歌集中より、其の歌詞の難澁なるものを摘出し、以呂波順に排して解釋考證したるものなり。其の序中にも「いそのかみ古きことばの中に、吳竹のおぼつかなきふしぶし多かるを、萬葉集より始めて金葉千載詞花にいたるまで、以呂波につけて序でをたて、之れを尋ね集ることをなせり」云々とあり。慈鎭和尚の作と傳ふれど、契沖の說として其の然らざる故由を「年山打聞」にも揭げたれば、今は未詳に附す。

いろめるゐじゆせう

色目類聚抄 寫本一卷 經逸

中右記、明月記、康富記、葉黃記、建內記、以下三長記に至る三十九種の記錄に依て衣服の色目を部類したる大判四十枚の古冊なり。編纂者經逸は當時權大納言たり。

ゐんがい

韻　槩　寫本一卷　荻生　茂卿

音韻に就き、諸書を引て十數則を論述す。漢文にて記せり。末に韵母通韵圖、五七音相通圖、字母和讀漢吳淸濁圖等あり。享保九年甲辰(二三八四)八月と末記す。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園祕錄」の下にあり。

ゐんがいべつき

韻槩別記　寫本一卷　荻生　茂卿

宮徵角商羽に分ちて內外轉法を圖表したるもの。卷末に「右通韻之圖、內外總十有一轉、以約彼二百有七之韵、苟欲旦暮千歲比肩千里、非假道於此、不可得而庶幾已、嗟我身後、爲我爲十觿之宇府者、愉快如何、初學幸亟照」と記せり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園祕錄」の下にあり。

ゐんがくせふけいせつゐんさんえう

韻學捷徑切韻纂要　寫本二卷　服部　恒齋

音韻を論じ、反切法を辨じ、悉曇音の事等を論述す

ゐんがくていはん

韻學提凡　一卷　大槻　淸準

韻學の大要を論じたるものにて、韻學題辭、原旨、審製、宣用、明翻の目につき漢文にて論述す。別著韻學啓蒙と並べ見ば、更に其の意を得べし。天保七年丙申(二四九六)八月の自序あり。

◉大槻淸準の傳記は「鯨史稿」の下にあり。

ゐんがくひてん

韻學祕典　五卷　藤原　肅

韻學に關する論述なり。一卷を纂集とす、菅玄同の補ふところなり。元和七年辛酉(二二八一)玄同の跋に曰く「按ずるに、先師惺窩公、慶長丙午(二二六六)を以て東山に遊び、長嘯子に謁す、長嘯子一日談じて九弄反紐法に及ぶ、晤語未だ日あらず、先生淺野幸長の懇對に因て、將に紀府に赴んとす、已に長嘯子に別る、因て九弄圖解を爲り、以て長嘯子に示す、是れ其の草稿なり、然れども、反切歸納附圖は、予が新に增す所を以て幼學者をして其の法に疑ふ事毋らしむるのみ」云々といへり。

◉藤原肅の傳は「惺窩文集」の下にあり。

いんかんろん

殷鑒論　寫本一卷　古賀　煜

我が政教の質に傾けると、唐の政教文に過ぐるとを比較對論したる漢文にして、十編連綴せり。今、「崇聖論」と併せて寫傳するものを見る。

◉古賀煜の傳記は「建元彙編」の下に掲ぐ。

ゐんきやういかいせいちようこく

韻鏡易解改正重刻　五卷　僧　盛典

別名「新增韻鏡易解大全」の下に解題せり。

ゐんきやうかいれん

韻鏡開奩　六卷　僧　宥朔

韻鏡を註解したるものなり。奩は字典に「藏香之器、一曰鏡匣」とあり、これらの意にて開奩とは名けたるなるべし。寛永四年丁卯(二二八七)の自跋ありて、同年刊行せらる。

ゐんきやうかう

韻鏡攷　寫本一卷　岡本　保孝

韻鏡の根元沿革等を、諸書を引きて考證し、末に、享祿本、永祿本、慶長十三年本、寛永五年本、寛永十八年本、寛永二十一年本、正保本、慶安本、明曆本、萬治本、寛文二年本、寛文三年本、寛文十一年本、天和本、貞享二年本、貞享四年本、元祿六年本、元祿九年本、元祿十年本、元祿十二年本、元祿十四年本、享保元年本、享保十一年本、寛保本、延享本、安永本等二十六種を擧げて其體裁等を記す。抑「韻鏡」は支那の古書にして、文字の平上去入の四聲、脣舌牙齒喉半舌半齒の七音、輕淸重濁の音義を辨じたるものにて、其の傳來は知る可らず。張麟之の序に「此書其用也博、來也遠、不可得指名其人、故鄭先生但言梵僧傳之、華僧續之而巳」云々とあり。吾が國に入りては最も類本註釋多し。次々に掲ぐべし。

◉岡本保孝は勘右衞門また縫殿助と稱し、況齋、拙誠堂等の號あり。幕府の儒員にして、漢學は狩谷望之、日尾荊山、國學は淸水濱臣等に學べり。明治の初め昌平大學中博士となる。著書二百餘種あり、別に「岡本保孝著述目錄」の一冊あり、明治十一年戊寅(二五三八)四月、年八十二にて歿す。

ゐんきやうかんばつしふ

韻鏡看抜集　寫本二卷

韻鏡諸註書より拔抄したるものにて、寛永二年乙丑(二二八五)の校合本。古寫本貴重書として、東京帝國大學圖書館に保存せり。

ゐんきやうこおんせいづ

韻鏡古音正圖　二卷　源　正長

韻鏡の古音を圖標したるもの。安永二年癸巳(二四三三)有馬正邦の跋に曰く「制字之始、其法有六、象形、會意、諧聲、指事、轉註、假借是也、統之者韻也、分爲平仄四韻、又內外分爲八韻、猶易有八卦、則韻鏡其書也、盛起乎漢魏、其時古音存者十之三四、故韻門區別、異音紛々、非再磨之、不能見其瑩」云々とて古音正圖學の要を述べたり。

◉源正長は子長と字し、東海と號す。

ゐんきやうしうちうひでんせう

諸說辨斷韻鏡袖中祕傳鈔　八卷　毛利　貞齋

韻鏡を解註し、諸說を是非して假名文に記せるもの。別に三卷「韻鏡名乘字大成」として名乘字を擧げたり。共に正德五年乙未(二三七五)の作なり。

◉毛利貞齋の傳は「四書俚諺鈔」の下にあり。

ゐんきやうじし

韻鏡字子　三卷

韻鏡の字々を聲音によりて指標し解義を附したるものなり。寛文三年癸卯(二三二三)出版す。

ゐんきやうしやちうせう

韻鏡遮中鈔　三卷

韻鏡を講說したるものなれど、著者と出版の年月とを詳にせず。

ゐんきやうしよせうたいせい

韻鏡諸抄大成　七卷　馬場　信武

韻鏡に關する諸家の說を集錄註解したるもの。寶永二年乙酉(二三六五)の自序あり、同年刊行す。

◉馬場信武の傳は「初學天文指南」の下にあり。

ゐんきやうづかいかうもく

韻鏡圖解綱目　三卷　僧　尊慧

韻鏡を講說圖解したるものなり。元祿十五年壬午(二三六二)佐守默の序あり。

◉尊慧は武藏の人にして理玄と號す。

ゐんきやうはつき

韻鏡發揮　一卷　大澤　賛

舊本韻鏡を删存攷定したるものにて、天保十三年壬寅(二五〇二)の自序を附す。

◉大澤賛の傳は「字音假字用格辨誤」の下にあり。

ゐんきやうもんだふせう

韻鏡問答鈔　一卷

本書の由來より始めて、音韻に關する書中一切の事を、片假名交り文にて問答體に作りたるもの也。

いんきよはうげん

隱居放言　七卷　阿部　喜任

第一卷には金石、第二卷には草類、第三卷には木類、第四卷には蟲豸類、第五卷には魚類、第六卷には鳥類、第七卷には獸類を說明詳解せる博物書なり。弘化年中の編。

◉阿部喜任は光格天皇の文化二年乙丑(二四六五)江戶に生る。櫟齋、又巴菽園と號し、本草の學に精通せり。明治三年庚午(二五三〇)十月二十日六十六歲にて歿せり。

ゐんぐうはいれいぶるゐ

院宮拜禮部類　寫本一卷

大府記(延久五年癸丑(一七三三)正月一日院拜禮の記)以下數多の記錄により、多年の拜禮を部類したるものなり。院宮拜禮他日例、停止儀、私第拜禮儀、私第拜禮兩儀、私第拜禮二日三日儀、私第拜禮停止儀等をも類集し、大本一册に寫傳す。

いんけんそがものがたり

隱顯曾我物語　二卷

延久年中源賴朝の臣、工藤祐經を、父河津三郎の敵として、富士の狩に隨行を機とし、曾我十郎祐成、弟五郎時致の兩人が、首尾克く本意を遂げしまでの始終を詳記したるものなり。明治十八年活版一册に作る。

ゐんがうさだめぶるゐき

院號定部類記　寫本一卷

院號定の事につきて、諸家の舊記、弘安、玉德、應永、永仁、正安、德治、延慶等の日記より部類したるものなり。

いんざんき

印山記　寫本一巻

松平隆信の一代記にして、同族松浦丹後守との確執を始とし、近隣諸族との小爭鬪を略記せしものなり。末に後陽成天皇の慶長四年己亥〔二二五九〕三月、隆信年七十二にて卒し、其の嫡男鎮信、追福のため一字の佛刹を建立して、印山寺尊勝院と號せしより、寺號によりて此の書を印山記と名けたるよしを記せり。編纂者及びその年月日等は、記載なくて知る由なし。

いんしうしちやうがふき

隱州視聽合記　寫本四巻

隱岐國の地誌にて、第一巻に國の方位、領主歴代の事實、第二巻以下に各郡の事項を記せり。著者の氏名は著さゞれど、寛文七年丁未〔二三二七〕の自序あり。同丁未の年、官命によりて彼の島に渡り、全島を巡見して、老農遺叟の所傳を得、水邨、山郭、靈社、古寺の所在を寫せる由を漢文にて記せり。四巻一冊に寫傳す。

いんしき

印識　寫本四巻

古昔の印影を模寫したるもの。第一巻には、御璽、及び諸官寮司の宮印、第二巻には、各國郡司の宮印、古名家の印、土中堀出の古印、第三巻には、有名なる古社寺、及び古名僧の印、第四巻には、古社寺等の印鈕印櫃の模影を掲げ、圖下に各其の年代を記せり。

いんしきえうはふ

陰式要法　十五巻　朝枝　幸運

女子の作法、注意、技藝等に關することを説明したるものなり。即ち、產所、百二十日祝儀次第、眉作、節供、書札、酌並飲酒法、加用服食法、つみ物、縫物並寸法、髮置、渡諸取並披露納、萬仕付、祝言の事三條共以上十五項を十五巻に分ち一冊に作る。天和二年壬戌〔二三四二〕の作なり。

いんじやうならびにたつしかきとめ

印狀並達書留　寫本一冊

幕府評定書より引繼ぎて内閣文庫に保存せるものにして、安永九年庚子〔二四四〇〕のものに係る。

いんしやうびかう

印章備考　寫本三巻　榊原　玄輔

漢土歴代の印章に就き、論究考證したるものなり。古印纂置より、印章雜識に至るまで凡そ十九編に分ちて論證し、其の參考材料たりし引用書は凡て九十餘種なり。

◉榊原玄輔は紀州侯の儒官なり。明暦二年丙申〔二三一六〕に生る。字は希翊、篁洲と號す。少うして奇氣あり。京都に遊び、木下順庵に從ひて學ぶ。順庵の幕府に擢用せられて江戶に出づるや、玄輔再びその門に遊び、學問大に進み、順庵の薦を以て紀侯の儒官となれり。新井白石、雨森芳洲、室鳩巣皆其の親交なり。晩年好みて歴朝制度の沿革を研究し諸學諸藝殆ど通曉せざるものなし。著す所、本書の外大明律諺解、古文前集諺解大成、易學啓蒙諺解、老子經諺解大成、增補仄韻礎、書言俗解、詩法授幼抄、增續詩法授幼抄、山谷詩集註抄、榊庵談苑、發字訓解、縮印章備考等あり。寶永三年丙戌〔二三六六〕正月三日、五十一歳にて歿せり。

いんしよくだん

飲食談　寫本一巻　鹽田　修三

飲食、衞生等に關する説話なり。古人の飲食を節し、情慾を減じ、起居を愼める養生の法等を說き、凡て九項に分けて攝生法を詳論せり。

いんしよふどき

引書風土記　寫本一巻　今井　似閑

別名「引用風土記」の下に解題せり。

いんしろん

淫祀論　寫本一冊　近藤　芳樹

正社淫祀の區別より、淫祀の由來沿革を述べ、終に淫祀の除かざる可からざる所以を論じ、藩侯毛利氏の下問に應じて建議したるものなりといふ。天保十四年癸卯〔二五〇三〕の筆記に係る。

◉近藤芳樹は歌人なり。かねて文章を善くす。享和元年辛酉〔二四六一〕に生る。周防の人、毛利家に仕へたり。初め晋一郞と稱し、又田中芳樹といひき。屋號を寄居（ガウナ）といふ。本居大平、村田春門、山田以文等に就きて學ぶ。其の著すところは、本書の外に、大祓執中抄、標註令義解校本、標註職原抄校本、源語奧旨、和歌類題風月集、滿風集、陸路廼記、寄居歌談、寄居文集、類題雲間の若菜、征韓起源、大江匡房傳、婚禮考、冠禮考、十符菅薦、古風三體考、居牛考、

牛乳考、正統論、櫻梅日記、一君一民辨等あり。明治十三年庚辰〔二五四〇〕二月廿九日八十歳にて歿す。

いんぜんせいえう

飲膳正要　寫本二巻

食物の品類を圖說詳載したるものなり。天曆三年己酉〔一六〇九〕の撰なるよしを記す。撰者は「忽思慧」と記名せり。

ゐんぜんせうそくうつし

院宣消息寫　寫本一巻

元應二年庚申〔一九八〇〕嘉元二年甲辰〔一九六四〕建武四年丁丑〔一九九七〕貞和二年丙戌〔二〇〇六〕正安元年己亥〔一九五九〕其の他二三の院宣消息を輯め寫したるものなり。

いんぜんてきえう

飲膳摘要　一巻　小野　職博

配膳調理上の諸注意を記述したるもの。穀物、諸肉、菜實、野菜等の諸種を、いろは順に類別し、每種假名書を以て其の效用、禁忌等を示し、兼て救急の單方をも附錄せり。文化元年甲子〔二四六四〕世に出づ。蘭山歿後文化十四年に至り、其の孫蕙畝といふもの、校正再版したりしが、天保五年火災に罹り、舊版凡て燒失せるを以て、更に校正、補遺し、天保七年丙申〔二四九六〕發行したるものを「增補飲膳摘要」といふ。

◉小野職博は名高き本草家なり。享保十四年己酉〔二三八九〕に生る。字は以文、衆芳軒、朽匏子、蘭山等の號あり。京都の人なり。松岡恕庵に從ひて本草の學を受け夙夜孜々として勉強すること數十年一日の如く、遠近名を聞いて門に至るもの甚だ多し。性、最も强記、人に接する溫恭にして切實、言語低小、言ふ事能はざるもの丶如し。寛政十一年年七十一、幕府の召に應じ、擧げられて、醫官となり、自ら本草を躋壽館に講じ、人をして藥草を採集せしめ内外の草木、蟲魚、玉石、土塊一として採集せざるは無く、悉皆、標本に供ふ。著す所、本書の外に、本草綱目記聞、救荒本草啓蒙、本草啓蒙、廣參說、本草綱目辨誤、格物徵、松軒愚筆、衆芳軒雜錄等あり。文化七年庚午〔二四七〇〕正月に歿せり、年八十二。

いんだらまう

因陀羅網　十五巻　僧　空誓

佛教に關する名目數千條を五十音に分ち、其の出所の書目、卷數、紙數等を指示し、讀書家の搜索に便せしものなり。然れども、指示する所の書、多くは碎書にして、古典に遡らず。故に以て徵とするに足らざるもの間々あり。

◉空誓は眞宗本願寺の僧にして、江戶築地子院妙延寺第二世の住持なり。博識洽聞にして、寛文延寶の頃宗學勃興の時に當り、著作に從事して力を宗徒の開導に盡せり。元祿五年壬申〔二三五二〕十一月三日、九十歳にて逝く、著書數部あり。

いんづ

印圖　二巻

眞言宗三密行の一なる印契の作法を圖示したるものなり。三密行とは手に印契を結び、口に眞言陀羅尼を誦し、意に入定觀念する事なり。本書上卷を金剛部、下卷を胎藏部とし、圖の數凡そ六百餘あり。著者及び年代を記さず。

いんとくたいへいき

陰德太平記　八十一巻　香川　正矩

關西諸家の興廢、武將の優劣等を集錄せし軍記なり。後土御門天皇の文明年中より、後陽成天皇の慶長年中に至る、凡そ百十餘年間、京畿に在りては、足利、細川、三吉、織田、荒木、羽柴等の事。中國に在りては、大內、毛利、尼子、陶、吉川、小早川等の事。四國九州に在りては、大友、龍造寺、長曾我部、秋月、加藤の事等を記したり。此の書は、業、半にして正矩卒せしにより、次男僧堯眞が、父正矩の志をつぎ、其の功を華へしものなり。寛文五年乙巳〔二三二五〕宇都宮三近、及び元祿八年乙亥〔二三五五〕堯眞の序、中御門天皇の正德二年壬辰〔二三七二〕沙門景眞の跋あり。

いんとくはんえいくわうき

隱德繁榮廣記　寫本十五巻

德川家の諸式例に關する記錄なり。延享二年乙丑〔二四〇五〕八月有德院〔吉宗〕、淳信院〔家重〕に政務を讓りし時の獻上物の事を始として、代替りの際の規式、祝儀、將軍宣下終りし時、伊勢日光へ代參、及び賜物の事、傳奏の公家衆參向の事、攝家、親王家、門跡等より進物の事、將軍家より公家衆へ賜物の事、諸大名への賜物、祝儀能樂の事等を詳記したるものなり。

いんどざうし

印度藏志　寫本十巻　平田　篤胤

佛教の教理、及び其の歴史等に就きて考證論述したるもの。卽ち「伊吹能舍著撰書目」に、「此の書は謂はゆる一切經藏を探索して、天竺國の風土國初より、婆羅門の敎方、また釋迦一代の本說、佛道を作爲したる所以、及び諸佛經一部も釋迦の傳へたる眞の物なく、悉く後人の依託なる所以、また其の道漢土を經て、皇國に傳はり十宗に分れたる所以、おの〳〵その宗旨の本意を。博く佛法の經論に徵して論はれたる書なり」とあるが如し。卷數もとは二十五卷、或は三十卷にも及ぶべき豫定なりしも、成功せずして已みたるなり。出來して今、存するは、一卷より三卷まで印度國俗品、四卷より八卷まで大千世界品、二十一卷より二十二卷まで印度傳通品にて、その前後は闕けたり。さて國俗品は其の初に、「此の品三編の本文は、總て玄弉比丘が西域記、第二卷なる說の印度藏を見るに、先づ早く知らでは有るまじき條々を摭ひ集めて、解き辨ふるに便宜く別に次第を立て載せたり」とあるが如く、世界品は、「此の品凡て五卷の本文は長阿含世記經を採り、其の餘の三阿含に往々世界の事を記せる說ども、また起世經、起世因本經、樓炭經、立世阿毘曇論などは、世紀經の異本異譯なれば、考へ合せて拔萃し、其の腐々しき妄說どもは總て載せず。されど其の由は其の節々に辨へつ。」とあるが如し。又二十一卷なる傳通品の初には、「此の品には佛滅後百有餘年より、第四百年に至る間は、唯小乘のみ流行せるが、其の間に次々異部起りて、大衆部破れて九部となり、上座部破れて十一部と成れる其の差別を論ひ、また因に其の間々に有りし事の心得べき事どもを註し辨へたり」と記し、二十二卷には、「此品には佛滅後第四百年初より、第五百年中に至る間に、健駄羅國の迦膩色迦王と云ひしが、說一切有部の古說を結集せる事、かつ次々に謂はゆる小乘の諸經論ども、六足、發智、大毘婆沙、四阿含などの出來し時代、また其の經論どもに就て心得べき要事を因々に考へ註せるなり」とあり。これらにて其の大略を知るべし。體裁は各品とも同じくまづ經文の一節を擧げ、それにつきて他の關係せる事の善惡邪正を辯論したるものなり。これを著したるは文政九年の頃にて、天保十一年庚子〔二五〇〇〕十一月、永平寺禹隣叟鎭德寺梵巖の漢文の序あり。
⊙平田篤胤の傳記は「古史傳」の下に揭ぐ。

いんどぞうしりやくぜんしふ

印度藏志略前集　二冊　矢野玄道(ハルミチ)

平田篤胤の「印度藏志」を節略したるものなり。卷初に、「此れは師大人の、外國等にも古る事の餘り有りやと覔通して、古る事の餘り有りと引き來て成し擧られし本編は、甚(イト)浩博精妙に過ぎたる節の多有(オホカレ)ば、未熟の輩のふと打ち見ては、要領を得難(エガテ)にすなるが、殊惜(クチヲシ)ければ、皆人の心の固とも成る可き大旨を、好き程に節略出(ツヅメ)」云々と云へるにて、成書の趣意を知るべし。印度の宗敎風俗等を、佛敎及び婆羅門敎の諸經論に徵して、記述したれば印度の歷史其の他の事情を知るに必要なる參考書なり。
⊙矢野玄道は平田篤胤の門人なり。篤胤歿後「古史傳」の補正は皆此の人の手に成れり。又昌平黌に入りて、漢學を古賀侗庵に受く。久しく京都に在りて伴信友等と往來し、縉紳家社寺等に出入して、古書古典を講究し發明する所多し。明治元年神祇官に出仕し、後大學中博士に任じ、從六位に敍し、宮內省に召されて、御系譜編纂に從事し、十七年圖書寮御用掛に補せらる。明治二十年五月年六十五にて鄕里大洲に歿す。著書頗る多し。本書の外、神典翼、皇典翼、續日本後紀私記、文德實錄私記、日本逸史私記、神功皇后御傳記、應神天皇御傳記、正保野史、神仙記傳、護王神御傳記、釋日本紀私記、三代實錄私記、天覆畏言、玉矛物語、大道の知るべ、逸記・古文藻、ふひがたり、麻生のふた草、ふきのくがたち、掃妖蓁語等なり。

いんどしえふかうしよう

印度紙葉考證　寫本一卷　僧　行智

印度紙の事を論す。紙葉總論、多羅と貝多羅と二種の異を辨ず、多羅樹形狀並に產地、多羅梵文並に翻名、貝多樹形狀並に所在、貝多羅名狀附菩提樹名義、南印度貝多樹、漢人の貝多といふは多羅を誤る事、貝多羅といふ花樹ある事、此國にてばいたらえうと呼ぶ樹の事、念珠に造る菩提子並に花樹に同名ある事、印度筆硯等の目に就て詳記し、椰樹榕樹辨疑を附錄す。文政初年の稿を失して、さらに天保三年壬辰〔二四九二〕十一月初八日編成せる由自敍に見えたり。
⊙僧行智の傳記は「悉曇字記眞釋」の下にあり。

ゐんのうたあはせ

院歌合　寫本一卷

元久二年乙丑〔一八六五〕六月の歌合なり。

いんばうにつたうき

允彭入唐記　一卷　允彭

遣唐專使、允彭の入唐日記なり。卽ち寶德三年辛未〔二一一一〕十月二十六日、京を辭して旅途に上り、同享德三年甲戌〔二一一四〕七月十三日、長門國馬關に着したるまでの日記なり。日附の下に每日の行程、雜件を記せり。

いんばぬまかいほつさんかう

印旛沼開發參考　寫本一卷　立川小平

總州印旛沼開墾に關する意見書なること名の示すが如し。同事業の國益上放棄すべからざるを諷したる大平歎を揭げ、又同沼開發記、水揚仕方等、いづれも該沼開墾の急務を切論せり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕の著作なり。

いんばぬまほりわりもんべん

印旛沼堀割問辨　寫本一卷　佐藤信淵(ノブヒロ)

總州印旛沼開墾の必要利益等を極論したるものなり。印旛沼を內洋に開通する時は、第一常野總三國を始め、奧羽地方の米穀諸產物を、那珂湊、平潟湊等より、石崎を經て、鉾田に達し、江戶に速運するの便利あると、第二開墾の土場にて、內洋中の干潟を埋立つる時は、鹽田として年々數十萬俵の食鹽を產出すべきこと、第三鹽濱既に成れば川浚等の泥土を以て、漸く干潟を埋め立つべきにより、內洋中にも亦新田成り、印旛沼と共に米穀の生產を得べきこと等を、國家經濟上の三大益として論ぜり。天保六年乙未〔二四九五〕の著なるべし。
⊙佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

いんばんひけつしふ

印判祕訣集　一卷　僧　盛典

名字判形花押の事につきて、考記したるもの。寛保三年癸亥〔二四〇三〕發行す。
⊙盛典の傳は「以呂波童蒙鈔」の下にあり。

いんぴろく

隱祕錄　寫本四卷

大岡越前守裁判事件の記錄にして、中御門天皇の享保年間、大岡忠相が町奉行たりし時、市中よりの論訴、裁許の次第數件を集錄したるものなり。世に流布せる「大岡忠相記」と異名同物なり。

ゐんふたぎ

韵塞　一冊　森川許六

著者の俳文、及び同門、門弟等との連句俳句等を輯む。元祿九年丙子〔二三五六〕の編なり。但下半は李由が編したるものといふ。近年發行の俳諧文庫第五編「許六全集」中にも收む。
⊙森川許六の傳は「風俗文選」の下にあり。

ゐんぷたんじゆ

韵府探珠　一卷　松雲館主人

「佩文韵府」中より、押韵を摘出して、詩學者の爲めに一冊子となしたるものなり。光格天皇の文化七年庚午〔二四七〇〕夏五月、滄浪石川漁の序あり、編者の囑に應じて撰ぶところの敍なり。

いんみやうえうらん

因明要覽　一卷　僧　大備

印度論理學、卽ち因明學の要領を示せるものにして、三十六箇條あり。門を分ち類を集め初學の便に供せり。寶曆十四年甲申〔二四二四〕の著作に係る。
⊙大備は雲州の人なり。

いんみやうかいきやう

因明海鏡　寫本一卷　僧　快道

瑜伽論、顯揚論、對法論、佛地論、掌珍論等の佛敎書より、印度論理學、卽ち因明學に關係せる文を拔集せしものなり。以上諸書の因明學の解釋を檢尋するに當り、一々原書を披くの勞を省き、因明學に於ける良參考書たり。
⊙快道の傳記は「倶舍論法義」の下に揭ぐ。

いんみやうけんだいし

因明犬大支　一冊　僧　慧徵

國語を以て因明の大意を譯述したるものなり。孝明天皇の嘉永七年甲寅〔二五一四〕刊行す。

いんみやうさんじふさんくわほんさはふ

因明三十三過本作法　一卷

因明、卽ち印度論理法に於ける三十三種過誤の規則を簡略に記述せるものなり。此の書の末疏なる「纂解」に、「於二此文一缺二撰號〔著者名〕一科一或云木院林懷朿」見二明證一」と云へり。而して本書の記す所、往々因明の論規に背ける由は先輩も既に之れを許せり。

いんみやうさんじふさんくわほんさはふさんげ

因明三十三過本作法纂解　三卷　僧　慧晃

「因明三十三過本作法」を解釋したるものにして、天和四年甲子(一六八四)の著述に係る。而して更に因明諸鈔の文を集めて、本書を註釋したる快進の「講要」五卷ありて寫本流傳せり。

◎慧晃は山城國槙岡に住ず。

いんみやうさんじふさんくわほんさはふさんげこかう

因明三十三過本作法纂解攷攻　三卷

僧　快道

慧晃の著せる「本作法纂解」の誤謬三百餘條を擧げて彈糺せしものにして、卷首には因明論法の大要を示せり。寛政四年壬子(一七九二)の刊行に係る。

◎快道の傳は「俱舍論法衆」の下にあり。

いんみやうさんじふさんくわほんさはふしふしやく

因明三十三過本作法輯釋　四卷

僧　悅仙

「因明三十三過本作法」の註釋書にして、慧晃の「因明三十三過本作法纂解」と、原本を同じくせるものなれば、彼此照して互に發明する所多かるべし。著作の年代を記さず。元祿十三年庚辰(一七〇〇)に刊行せり。

◎悅仙は東濃の人にして、法相宗の僧なり。

いんみやうしさうろんしき

因明四相違私記　四卷　僧　眞興

唐の窺基(慈恩)の著、「因明入正理論疏」の四相違因の條下の文を註釋して、廣く問答を設けたる書なり。四相違因とは因明論法に於て、「因に十四種の過誤ある中、後の四種を四相違因と名け、因明學者の最も解し難しとする所なり。南部興福寺仲算の弟子、一條天皇の頃の人なり。唯識因明の學に精しく唯識觀を成したりと云ふ。平生の行爲眞率にして邊幅を修めず。後人其の德を貴んで呼ぶに名を以てせず子島の先德と云へり。

いんみやうしさうろんりやくちうしやく

因明四相違略註釋　三卷

僧　源信

因明論法中の四相違因の事を論辯解釋したるものなり。其の解釋詳明にして因明學者に便益を與ふること頗る大なりとす。

◎源信の傳記は「往生要集」の下にあり。

いんみやうしやうりもんろんしんしよ

因明正理門論新疏　四卷

僧　寶雲

印度陳那の著して「因明正理門論」を註釋したるものにして、天保年間の梓行に係る。陳那は「因明入正理論」の著者なる天主の師にして、倶に印度因明論家の巨擘なり。

◎寶雲は眞宗本願寺末の僧にして、筑前國白井村長源寺に住持せり。烏水と號し、才學奇拔、嗣藻宮贍、性相の學を以て天下に橫行し、他宗の學者も亦皆襟を歛めて之を避けたりと云ふ。嘗て自ら謂らく、南都北嶺の學侶は、皆嬰兒のみ齒するに足らずと。以て其の抱負の大なるを知るべし。著者頗る多く、弘化四年丁未(一八四七)七月六日に歿せり。

いんみやうしやうりろんくわちう

因明入正理論科註　一卷

僧　無相

因明入正理論に科註を加へたるものにて、廣說を省き、煩文を略して大義を明瞭ならしむ。天明六年丙午(一七八六)の作なりといふ。自跋及び文化二年乙丑(一八〇五)毀山本願院住僧容倫の序あり。

◎無相の傳記は「連歌茶談前編」の下にあり。

いんみやうにつしやうりろんしやうらがき

因明入正理論疏裏書　六卷

僧　明詮

印度論理學、卽ち因明學に關する書にして、「因明入正理論疏」の註釋なり。「因明入正理論疏」は唐の窺基(慈恩)が印度天主論師の「因明入正理論」を註解したるものにして和漢因明學者の好指針とする所なり。後人之れを名けて「因明大疏」と稱せり。本書はこの「因明大疏」を註釋したるものにして、初は原疏中難解の箇處に就き、其の卷軸の裏面に註

解を記し置きたるを、後人が別錄して「裏書」と名けたるものならむといふ。

◎明詮は南都元興寺の僧にして法相宗に屬す。十五歲にして出家し、唯識及び因明の學に精通し、名譽頗る高し。眞親十年戊子(一五二八)五月十六日、八十歲にて入寂せり。

いんみやうにつしやうりろんしよすゐげんき

因明入正理論疏瑞源記　八卷

僧　鳳潭

唐慈恩の著「因明大疏」の註釋にして、全部殆ど皆、藏後の「因明大疏抄」の拔抄なり。寶永元年甲申(一七〇四)に、當時寫傳の古書脫誤多かりしを、其の儘載錄上梓したれば、同八年に至りて再治せり。然るに、又其の後、享保三年戊戌(一七一八)に上野の賢猷が「瑞源記正文」一卷を著して本書の誤脫を修正しければ、記者竊に改補したる所ありきと云ふ。現行の本卽ち是なり。

◎鳳潭は眞華の僧にして、初め天台宗に屬し、後、華嚴宗に入れり。各宗の敎理は大概研究せざるなく、德川三百年間の僧家中に博覽宏記を以て其の名著し。書を著して眞言、禪、淨土、日蓮等の各宗を抗擊し、自ら華嚴宗の再興を以て任じ、遂に寶永四年丁亥(一七〇七)浪華に華嚴寺を創立し、幕府に請願して華嚴宗獨立の公許を得るに至る。元文四年己未(一七三九)八十八歲にて入寂す。著作頗る多く、本書の外に華嚴五敎章匡眞鈔、起信論義記幻虎錄、天台四敎儀集註增暉記、疑註俱舍論頌疏、其の他凡て五十餘部ありといへり。何れも敎義の發展に務めたり。

いんみやうにつしやうりろんしよ

因明入正理論疏明燈鈔　十二卷

僧　善珠

唐の窺基(慈恩)の著「因明入正理論疏」の註釋なり。卽ち慈恩の「唯識論述記」の文、淄州慧沼の入正理論義斷、同纂要等の解、文軌、定賓元曉等の釋を取て直に自己の註釋に供し原名を存せず。故に讀者、資益する所ありと雖も、亦簡ぶ所なかるべからず。天應元年辛酉(一七八一)著者五十九歲の作。

◎善珠は法相宗の高僧にして南都興福寺の學匠なり。芝助に從つて唯識因明等を習ひ、學德俱に時衆に秀でたり。元正天皇養老七年癸亥(一三八三)に生る。幼時性魯鈍、深く自勵まして勉學怠ることなく、酷暑に逢ひ、頭腫れ熟瓜の如しと雖も、敢へて扇せざりしと云ふ。延曆十六年丁丑(一七九七)四月、七十五歲にて入寂。著述甚だ多く別に目錄あり。

いんみやうにつしやうりろんしよやうざせう

因明入正理論疏量議鈔　十二卷

僧　快道

唐の慈恩が著しし「因明入正理論疏」の眞義を闡明し、廣く其の註釋書の是非得失を批評したるものなり。以て斯學の龜鑑、學者の指針とすべし。

◎快道の傳記は「俱舍論法義」の下に揭ぐ。

いんみやうにつしやうりろんぞくせん

因明入正理論俗詮　一卷

僧　義範

印度天主論師が著し「因明入正理論」を俗解したるものなり。文辭卑俚なりと雖も、義理に於て發明せる所多し。中御門天皇の正德三年癸巳(一七一三)八月の刊行に係る。

いんみやうほんさはふせう

因明本作法抄　三卷

僧　賴長

「固明三十三過本作法」を假字交り文もて平易に註釋したるものなり。慧晃の「固明三十三過本作法再釋」と原本を同じくせるものなれば、讀者須らく彼此對照すべきなり。永祿八年乙丑(一五六五)の著作に係る。

◎賴長は紀州根來寺に在りし眞言宗の僧にして、玄音坊と號す。安房國の人なり。

ねんみやはいれいぶるる

院宮拜禮部類　冊一卷

院宮拜禮の事を、諸家の記錄中より、部類抄集したるものなり。

いんようふざき

引用風土記　冊一卷　今井　似閑

「萬葉綠」卷十八を單行したるにて、諸書に引用せるところの風土記文を、各國分けに順序して三十二國、新添二國ともに其の目を列擧せり。「逸風土記」と稱するものと同物なり。

◎今井似閑の傳記は「萬葉綠」の下に揭げたり。

う

ういうひき

烏有祕記　冊五卷

家康以下將軍家代々の言行、及び諸臣外樣の家の雜事を記したるものなり。第一卷は保元平治の合戰に、人倫の亂れし事より、水戶賴房公の事に至り、第二卷は尾張光友卿の事より、水戶光圀卿の事に至り、第三卷は尾張中將忠吉卿の事より、土井大炊頭利勝の事に至り、第四卷は土井利勝名言の事より、永野右衞門太夫忠春の事に至り、第五卷は越後殿家臣小栗美作、荻田主馬等の事より、纖田家入洛の北禁垣荒廢の事に至る。凡そ二百三十八項より成れり。

うをざさきうぢやうしよ

植崎氏上書　冊一卷　植崎九八郎

政治上の意見を陳べし建白書なり。天明七年丁未(一七八七)白川侯が幕府の執政たりし時に建言したるものなりと云ふ。

◎植崎九八郎は小普請組永井監物の支配にして、後に家臣小栗美作、荻田主馬等の事に坐せられ、文化四年丁卯(一八〇七)八月、植崎九八郎封事」の下にあり。

うをかぶみ

魚鑑　二卷　武井　周作

魚類介類の產所效用等を擧げ、國字に註分して、順次其の產地效用等を記したるなり。天保二年辛卯(一八三一)版行す。

うをかひのうどくひんぶつづかう

魚貝能毒品物圖考　一卷　青苔園

魚貝等の能毒を辨晰圖說したるものなり。嘉永二年己酉(一八四九)出版す。

◎青苔園のことは「筆中市鑑」の下にあり。

うをつりてびきだね

魚釣手引種　一卷　城東漁夫

東都近邊なる河海の釣樣に關する方法諸注意等を記述したるもの。嘉永四年辛亥(一八五一)發行す。

うがいいかう

鳥涯遺稿　一卷　松本　愿

著者の詩文遺稿なり。文化七年庚午(一八一〇)古賀煜の序文、加藤畿の跋文あり。

◎松本愿は上州高崎侯の臣なり。天明五年乙巳(一七八五)に生れ、子恭と字し、烏涯と號し、九右衞門と通稱す。學を古賀精里に受け最も詩文を善くす。文化七年庚午(一八一〇)三十六にて歿す。

うかがひのうへをうしやみけつもの

伺の上膳寫未決物　冊十二册

弘化三年丙午(一八四六)より、安政二年乙卯(一八五五)に至る裁判書類にて、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せるものなり。

うかがひまうしわたし

伺申渡　冊六十六册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる書類にして、寬政九年丁巳(一七九七)より、慶應二年丙寅(一八六六)に至れり。

うかがひものもくろく

伺物目錄　冊二册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、文久三年癸亥(一八六三)より、元治二年乙丑(一八六五)に至る。

うかひじものがたり

鵜飼寺物語　五卷

日蓮上人の一代記やうの讀本小說なり。あらゆる俗說怪說を並べ、種々奇妙不可思議の綺說を挿みたり。全編五卷を一册に版行せり。

うき

右記　一卷　北院御室

佛說に基きて道德行義の事を說き訓誡の爲に作りたるものなり。卽ち、「童形等消息の事」といふ項の下に、坐作、進退、飮食、嗜好、遊興、修學、辭令に關する雜件を網羅し、「若甲乙消息事」と云ふ項の下に、主として佛事奉行の諸式諸法を說き、併せて修學練心、及び日用の諸訓誡を記せり。著者の訓誡書「左記」といふを加へ、三部相並で「群書類從」四百四十四の卷釋家部二十に收めたり。文永二年乙丑(一二六五)鳩瀨御所に於て隆澄といへる人の寫本の奧書、及び建武四年丁丑(一三三七)應永十六年己丑(一四〇九)等諸家の奧書ありて、內閣文庫に特別書として藏せり。

◎北院御室の傳記は「左記」の下にあり。

うきくさ

浮草　一册　季範

著者の俳句集なり。貞享五年戊辰(一六八八)の編述にかゝる。著者季範は俳人にして、別に「如月」の著あり。

うきくさのあと

萍の跡　二卷　僧　立綱

文學、地誌、歷史、言語等に關する考說なり。古書、傳說、實見等によりて證明す。文化十四年丁丑(一八一七)五月の自序あり。眠雲舍本間游清の序、及び評註あり。二種續紀聞」と題して行はるゝもあり。

◎立綱は僧侶なり。大寂庵と號す近江彥根の人にして、江戶深川に住せり。國學を以て聞ゆ。海量の門人なり。著はす所伊勢物語昨非抄、國學正辨、三哲小傳、まのゝ草、浮草廻徐留倍、さらく日記、萍跡紀聞、玉插頭、和讀喫得錄、眞字めさまし草、眞字應問錄等あり。文政七年甲申(一八二四)四月朔日六十二にて寂す。

うきくさのよるべ

浮草廻徐留倍　一卷　僧　立綱

著者の家集なり。天保七年丙申(一八三六)の江澤講修の序、北條時隣の奧書あり。嘉永元年戊申(一八五〇)の刊行に係る。

◎立綱の傳記は「萍の跡」に見るべし。

うきくものがたり

浮雲物語　一卷

大閤秀吉の生涯を一種の物語に寫し出でたり。卷末に「大閤うち位もなき人の、かやうに成あがり、後は鴨國の大明神と申けり。世の中かくさだめなきことにて、うき雲をもふみ玉へる。物語の名をもさてこそうきぐしとはなづけ申けるとぞ」といへり。寬文元年辛丑(一六六一)九月の版行に係る。文章頗すべし。

うきていづみのかみやけあそんよしいへぞうさん

宇喜多和泉守三宅朝臣能家像贊　冊一卷　僧　九峰

既に名の顯せる如く三宅能家の履歷逸事等を漢文

にて記したるもの。大永四年甲申〔二一八四〕秋八月の作。『續群書類從』卷百九十二傳部十四に收む。
◉九峰は宗成と字す。

うきだけぶんげんちやう
浮田家分限帳　本寫 一卷
浮田秀家一家中の詳細分限を記したるものなり。但し慶長五年庚子〔二二六〇〕春の調査に係ると云ふ。『續群書類從』七百十の卷武家部五十六にあり。

うきにんぎやうすゐちうだん
浮人形水中談　四卷　於田　福平
龍宮界の奇蹟に關する讀本小說なり。其の題目を云へば、底拔井戸、鐵拐の仙術、恒河の大敵、三伊の破鏡、磁石の奇妙、婆利女繁昌宮、腹中の酒蟲、疱瘡の神、入聟の始、位あらそひ、義經清朝の祖、富士山出現、金銀飽滿、信心の間違、藪七右衞門由來、早友祭禮の時刻等にして、天明五年乙巳〔二四四五〕正月印行す。

うきやうのたいふかしふ
右京大夫家集　二卷　右京　大夫
歌文の集なり。此の中の過半は『扶桑拾葉集』にも入れられたり。本集は主として著者が晩年大原にすみし頃の文を集めたるなり。群書類從本『建禮門院右京大夫集』とは自ら別物なり。
◉右京大夫は建禮門院の女房。歌文を以て當時に知られたり。別著に『建禮門院右京大夫集』あり。

うきよゑすがたろくまいべうぶ
浮世繪姿六枚屏風　六卷　柳亭　種彥
此の小說は、西洋紀元一千八百四十年〔我が天保十一年にして紀元二千五百年〕澳太利に於て譯せられ、其の譯本、吾が日本へも一本傳れりとぞ。蓋し日本小說の西洋に譯せられしものゝ第一なるべし。
◉柳亭種彥の傳は『修紫田舍源氏』の下にあり。

うきよゑるゐかう
浮世繪類考　一卷　山東　京傳
有名なる浮世繪師の略傳逸話等を集錄す。世に行はるゝものは、多くは笹屋邦教の名にて京傳の原著に、寛政年中に邦教の著したる附錄、原名『古今大和繪浮世始系』と同享和年間に京傳の作りたる『追考』とを加へ、曲亭三馬更に書入したるものなり。之れを增補したるものには、無名翁可候〔天保四年の作〕、齋藤月岑〔弘化元年の作〕、關根只誠〔慶應三年の作〕、龍田舍秋錦〔明治元年の作〕等あり。又、浮世繪の歷史には、關場忠武〔明治二十四年の著〕の『浮世繪編年史』あり。
◉山東京傳の傳は『小說浮牡丹』の下に揭ぐ。

うきよごうし
浮世ごうし　四卷　木鶴　散人
文學道德の事につきて論述したるものなり。或は根本的に其の理を說き、或は例を引きて實際を示し、或は諺を解し、俗語を譯する等專ら修學、立志、道德の爲にせるなり。書名の由來は、自序中に、「かかる事の世に多き、其の數擧てつくし難きを、一つ二つと書き集めて、四の卷となりぬ。いかに號けんと思ふ側に、東武人ありて京攝の俚言に倣ひ、浮世こうしと戯れしを、いと興じて、見る人の笑はんこともはゞからず、漫に題し侍りぬ」と云へり。安永五年丙申〔二四三六〕の作なり。

うきよどこ
柳髮新話 浮世床　六卷　式亭　三馬
『浮世風呂』の續編として作りたる滑稽小說にて、三編各上下卷に作れり。話說の舞臺を床屋〔理髮店〕に取れるを以て名づく。文化八年辛未〔二四七一〕皐月十日の自序あり。明治十九年活版一冊に作りて發行せり。
◉式亭三馬の傳は『阿古義物語』の下にあり。

うきよなぎなた
浮世長刀　一冊　一　興
著者の俳諧集にして、寛文元年辛丑〔二三二一〕編輯したるものなり。

うきよぶろ
浮世風呂　八卷　式亭　三馬
滑稽小說にて、三馬の作中、最も有名なるものなり。馬琴の八犬傳、種彥の田舍源氏、一九の膝栗毛と共に、本邦の四大奇書とさへ稱せらる。『戯曲小說通志』には、本書を評して、「此の書、故に奇を設け、人の笑を求むるものにあらず、然れども諧謔百出、妙想橫生、一たび之れを繙くときは、鄙丈夫も頤を解き、腹を抱へざるはなし。而して野鄙に流れず、猥褻に陷らざるは、三馬が特絕の手腕たる所以にして、斯道の泰斗と稱せられしも之れを以てなり」といへり。文化六年己巳〔二四六九〕の作。明治に至り、活刷に附して行へるものあり。

◉式亭三馬の傳は『阿古義物語』の下にあり。

うきよものがたり
浮世物語　本寫 三卷
何と定めたることなく、うき世の雜事によりて作り成せる物語なり。先づ浮世といふ事うき世ばうなりだち、博奕いけん、けいせいぐるひいけんの事等上卷に十五、中卷に十八、下卷に十九、凡て五十二項皆今は昔といふ句を以てかき出せり。延寶九年辛酉〔二三四一〕三月の著。

うぐひすかう
宇久比須考　二卷　千葉　直胤
うぐひすに關する諸種の考證なり。上卷は鶯の說附鶯と、うぐひすは異なりといふ事より、老うぐひすを蟲くひといふ事に至る十三條より成り、下卷はうぐひすのかひこのなかの杜鵑の說より、鶯とうぐひすの異名に至る十三條、凡て二十六條和漢の古書百五十九部を參照して考證せり。尙追加するに、百千鳥考八箇條を以てせり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕春の作。
◉千葉直胤は塙保己一の門人にして江戸の和學者なりき。

うぐひすかひやうくでんしよ
鶯飼樣口傳書　本寫 二卷　鼓腹堂山人
鶯の飼養に關する諸件を述べたるもの。鶯の巣を見出すことを始として、鶯の飼養法、鶯の治病法、鳥籠、器具の事等、詳細に圖を揭げて記述せり。嘉永年間の作なり。

うぐひすぶえ
鶯笛　五冊　中島　隨流
俳諧の集なり。寛文十三年癸丑〔二三三三〕二月編輯する所にかゝる。
◉中島隨流は京師の人なり。山本西武の門人にして、廻文水車、破邪顯正、雀子集、百千鳥、二ッ盃等の著あり。寶永五年戊子〔二三六八〕二月十一日、八十歲にて卒す。

うくわいき
宇槐記　本寫 二十冊　藤原　賴長
著者の日記『台記』のことなり。詳しくは同書の下に解題す。

うくわいきせう
宇槐記抄　本寫 三冊　三條西公條
藤原賴長の日記『台記』〔宇槐記とも云ふ〕を抄したるものなり。奧書に永正十四年丁丑〔二一七七〕十二月九日の手抄なる由を記す。
◉三條西公條の傳は『稱名院集』の下にあり。

うくわいざつせう
宇槐雜抄　本寫 一冊　三條西公條
藤原賴長の日記『台記』〔宇槐記ともいふ〕の諸儀式に關することを抄錄したるものなり。卽ち崇德天皇の保延三年の豐明節會、近衞天皇の仁平元年の敍位、崇德の保延二年の請印政、同二年三年の臨時祭、同二年の賀茂祭、大原祭上卿、同二年三年の行幸、同二年の拜賀、同二年三年の法事、同五年の親王宣下、同二年の藏人敍爵、近衞の仁平二年觸穢請暇等を揭載せり。『續群書類從』卷四百五十一、雜部第六に收む。
◉三條西公條の傳記は『稱名院集』の下に出す。

うけいづ
羽形圖　本寫 一卷
各種の矢に用ふべきあらゆる羽形を圖したるものにて、卷末にその故實十五條を擧げたり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕寫本の捺印あり。

うげつものがたり
雨月物語　五卷　上田　秋成
著者の和文物語書なり。卷一に白峯、菊花の約。卷二に淺茅ヶ宿、夢應の鯉魚。卷三に佛法僧、吉備津の釜。卷四に蛇性の婬。卷五に靑頭巾、貧福論等を收む。五卷三冊に出版す。
◉上田秋成の傳は『癡語通』の下にあり。

うけらがはな
うけらが花　五卷　橘　千蔭
著者の歌文集第二編なり。著者の歌集はこれよりさきに編輯せるものあり。故に二編とはいへり。享和二年の春より文化四年の彌生の比までのものを歌に文にかきあつめて門人等の版行せるものなりといふ。歌幾千、文幾十を載せたり。文政五年壬午〔二四八二〕八月なる越智千園が跋あり。
◉橘千蔭は芳宜園、耳梨山人等の號あり。和學者にして歌を善くす。享保十九年甲寅〔二三九四〕江戸に生る。町奉行大岡越前守に仕へて與力たり。加茂

眞淵に師事して和學を精研し、當時に知られたり。著はす所は、本書の外に萬葉集略解、萬葉新採百首、行かひふり、香取日記、大歌所御歌記、月並消、新百人一首、息古今序考等あり。文化五年戊辰〔二四六八〕九月二日、年七十五にて歿す。

うさいがくわ
迂齋學話　寫本一卷　稲葉　正義
經義學術の事に就て論述したる隨筆なり。著者其の門人等に講述したる學話を筆錄したるなり。迂齋は著者の別號、故に書名に冠す。尙齋語錄、直方學談を合せて一卷となせり。
◉稲葉正義は山崎派の儒者にして、肥前唐津侯に仕へたり。貞享元年甲子〔二三四四〕江戶に生れ、十左衛門と稱し、迂齋と號す。淺見絅齋の門人、伴部安崇、赤井直義等と經義を講究し、後、佐藤直方に師事し、其の薦を以て唐津侯に仕へたり。其の編著したるものには和書集、續和書集、文集、續集、別集、雜稿等あり。寶曆十年庚辰〔二四二〇〕十一月、七十七歲にて江戶に歿す。

うさいせんせいがくわせうりやく
迂齋先生學話抄略　一卷　稲葉　正義
前掲「迂齋學話」中より、經義に關する談話を抄出刊行したるものなり。次の「迂齋先生語錄抄略」とは多少の異同あり。
◉稲葉正義の傳は「迂齋學話」の下に出す。

うさいせんせいごろくせうりやく
迂齋先生語錄抄略　一卷　稲葉　正義
前に解題したる迂齋學話の中より、下の條々を抄出版行したるものなり。論孟讀法、學者當以論語孟子條、凡看文字條、學者須將論語中條、凡看語孟條、論孟只剩讀著條、或問且將語孟條、孔子言語條、學者先讀條、讀論語孟子條、論語序說、論語卷頭、餘論等なり。今假名交り文俗語にて記す。餘論の末筆に桃園天皇の寬延三年庚午〔二四一〇〕此の章を講ずる由を記せり。
◉稲葉正義の傳記は「迂齋學話」の下にあり。

うさき
宇左記　寫本二十册　藤原　賴長
著者の日記「台記」のことなり。詳しくは同書名の下に解題す。

うさぎはいかい
うさぎはいかい　二册　野々口立圃
著者の俳諧集なり。編輯の年月は明記せざれど、承應明曆頃のものなるべし。
◉野々口立圃の傳記は「なさな源氏」の下にあり。

うさなつけき
宇佐名附記　寫本一册
豐後國宇佐八幡宮の緣起由來事績の大要を記したるものなり。

うさのみやえんぎ
宇佐宮緣起　寫本一册
豐後國宇佐八幡宮の來歷緣起を記したること書名の示せるが如し。

うさのみやかしひのみやほうへいしだい
宇佐宮香椎宮奉幣次第　寫本一卷
九州の宇佐、香椎兩宮に於ける延享元年甲子〔二四〇四〕奉幣使の始末を記す。

うしうあきたいなむしよけのはふ
羽州秋田蝗除法　寫本一卷　長岐七左衛門
稲蟲驅除法を記したるもの。天明年間の筆記なり。明治十六年農區視察員米山俊信之を越羽農區報告書中に收めたり。
◉長岐七左衛門は秋田縣下北秋田郡七日市村の人なりといふ。

うしうしちじふごはふき
有宗七十五法記　三卷　僧　宗禎
佛敎小乘二十部中薩婆多部の宗義の初步に供したる書なり。「有宗」とは、卽ち薩婆多〔說一切有と譯す〕部にして有形無形の萬物を分析して「七十五法」となし、其の實體恒有なりと談ず。本書は七十五法の名義。及び有宗所談の要領を摘出略解したるものなり。享保十三年戊申〔二三八八〕の記述に係り同十五年庚戌に冠註を加へて上木せり。
◉宗禎は伊勢桑名尾野山の僧にして禎山と字す。

うしおふものかうしよ
牛追物考書　寫本一卷　伊勢　貞丈
牛追物の由來より、方法故實等を考記す。後桃園天皇の安永四年乙未〔二四三五〕九月三日の作。「司馬祕藏」中に收めたり。

◉伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

うしかひ
牛飼　五册　幽山亭燕石
著者の俳諧集なり。萬治元年戊戌〔二三一八〕五月の編にかゝる。著者幽山亭燕石の傳は詳ならず。

うしくぼのき
牛窪記　寫本二卷
三河國寶飯郡牛久保莊なる牛窪城の來歷卽ち一色刑部少輔の此に城を構へし事、牧野出羽守保成繼で此の城を守る事等より、信長牛窪城に泊る事、家康牛窪城を照政に與ふる事等に至る二十餘項より成る。「續群書類從」卷六百、合戰部第三十に收む。

うしくぼみつだんき
牛窪密談記　寫本一册
三河國牛窪城主牧野氏の祖先の事を雜記せるものなり。同所に在る神社寺院の寄附狀、及び緣起由緒書等、牧野家の事績に關せるものを雜記せり。著者年代共に詳ならずと雖も天明元年辛丑〔二四四一〕に增上寺中の僧龍道が作れる圓光大師由來記を載せたるを見れば、近代に集錄せしものなるべし。

うしごめいちがやごもんぐわいはらまちへんのづ
牛込市ケ谷御門外原町邊圖　一折　村上　吾雄
諸屋敷、丁目、社寺の位置區域を明記す。嘉永四年辛亥〔二五一一〕近吾堂の版にかゝる。
◉村上吾雄の傳は「南本所竪川邊圖」の下にあり。

うしごめかでん
牛込家傳　寫本一卷　牛込　重恭
本名「古諺記」に從つて「こ」の部に解題せり。

うしゆのき
雨珠記　寫本一卷　淑　文
伏見天皇の正應四年辛卯〔一九五一〕三月十九日紀伊州海部郡由良莊に寶珠降下し、そを同地鷲峯寺に安置したりといふ漢文の記事なり。「續群書類從」卷三百五十八、文筆部第四十二に收む。著者淑文は紀國造と肩書せり。

うしれうぢてうはふき
牛療治調法記　一卷
牛病に關する治療法を記述したるもの。相牛法、病牛治療法、鍼灸術施行法、及び藥劑調合法等とあらゆる和漢の諸書より輯錄し、病牛の圖式等を掲げて解說せり。寶曆六年丙子〔二四一六〕七月京都丁子屋九郎右衛門の版行に係る。

うしろすがた
後樣姿　一册　池西　言水
著者が京師にて編輯したる俳諧の集なり。松江維舟の「時世粧」に倣ひて編輯したるものなるべしといへり。
◉池西言水の傳記は「東日記」の下に揭ぐ。

うしろひも
背紐　一卷
謎語隱語百數十條を揭げ、併せて其の解をも附したるもの。享保十三年戊申〔二三八八〕の版本なり。前に未の歲五月なる以求子の序は、その前年の作なるべし。著者は上坂寀と記せり。

うしんあんししふ
雨新菴詩集　二卷　僧　敬雄
著者の詩集。雨新庵は其の號をとりて冠したるもの。明和二年乙酉〔二四二五〕釋大潮の序文、及び江村綬の序文あり。同三年刊行するところなり。著者敬雄の傳は詳ならず。

うすもみぢ
薄紅葉　五卷
諸種の戀歌を集めて骨子とし、他の物語を皮肉としてつゞき物語に仕組たるものなり。一のまめ男ありて、おそめといふ妙齡の女に文を遣しゝより、遂に夫婦となりし始末に作れり。戀歌の作法を問はれたるより、多くの戀歌をぬきいで、其の前後に物語を添へ、解釋を附して作りたるなり。其の名につきては「薄紅葉と申すは、やうやういろにいづると申すこころにて、むすめたちのもてあそびに、うたの心のしれるやうにつれのことばにてかきたるものにて」云々と云へり。處々に繪あり。享保七年壬寅〔二三八二〕正月の出版。

うすゆきものがたり
うすゆき物語　二卷
繪入戀愛小說なり。文書の往復に歌を詠み入れたるもの多し。延寶八年庚申〔二三四〇〕の出版なり。

うせうしげつなき

右少史重綱記　寫本一巻　重綱

觀應三年壬辰(二〇一二)八月、後光嚴天皇の踐祚の次第を記したる當時の記錄なり。著者重綱は右少史たり、其の詳傳を得ず。

うせつのとも

雨雪の友　寫本三巻　田中政忠

慶長、元祿間に於ける將士の物語、及び雜事等を集錄したるもの。著者に自序あり。曰く、「むかし今の咄を友とせんがために古老の物語、又はさまざまの書籍に見えし事ども彼是疑はしきを除き正しきを求めてひとつにあつめ、時代の遠近もあとさきに、たゞ予が雨雪の友とするを以て名けし」云々と、記事文體亦見るべし。

うそうかんわ

雨窓閑話　一巻

古今の雜話を集めたる隨筆なり。織田信長答衛の事、秀吉奥方の素性、本多風斐、一里塚始、細川侯和歌の事、曾呂利が事、古代の質素並小倉色紙の事、感情の發句の事、國府寺術の事等三十餘條ありて、毎條の終りには、必ず勸誡の言を附記せり。嘉永四年辛亥(二五一一)河田興の序、小林至靜の跋あり。今、其の一節を抄出せんに。曰く、「玆書舊題曰二白川夜話一傳以爲二樂翁源公所一レ作。質二之桑名藩田内翁一翁曰公素無二此作一世之所レ傳者非也」云々と。

うたあはせ

歌合　寫本百八十五巻

朝廷、及び諸家にて催せる古歌合類を叢書したるものにて、百五十八種あり。各種其の特稱の下に解題すれど、便宜上、今、見るところの諸種を列擧す。卽、亭子院歌合、京極御息所廿二番歌合、內裏歌合、天德四年三月三十日歌合、內裏歌合、野宮十番歌合、女四宮歌合、內裏歌合、內裏歌合、內裏二十番歌合、麗景殿歌合、御堂七番歌合、三條太政大臣前栽合、義忠朝臣歌合、上東門院十番菊合、宇治殿三十講十番歌合、弘徽殿女御十番歌合、一品內親王家歌合、弘徽殿女御歌合、殿上根合、十五番歌合、祐子內親王家歌合、殿上根合、正子內親王三番造紙合、麗景殿女御十番歌合、弘徽殿女御歌合、皇后宮春秋十番歌合、從二位親子家草子合、郁芳門院前栽合、郁芳門院菖蒲根合、合基朝臣歌合、內裏十五番歌合、內裏後番歌合、內裏歌合、內裏歌合、四條宮歌合、太皇大后宮歌合、皇后宮十五番扇合、郁芳門院十番根合、高陽院七番歌合、郁芳門院十番前栽合、國信卿家歌合、俊忠朝臣家歌合、師賴卿家歌合、實行卿家歌合、或所歌合、鳥羽殿前栽合、實家卿家歌合、內大臣家歌合、內大臣家歌合、關白家歌合、無動寺歌合、廣田社歌合、顯輔朝臣家歌合、家成朝臣家歌合、家成朝臣家歌合、或所歌合、奈良花林院歌合、平經盛朝臣家歌合、住吉社歌合、法住寺殿殿上歌合、新羅社歌合、別雷社歌合、治承二年八月歌合、賀茂社歌合、後京極家歌合、北野歌合、後京極家歌合、左大將家歌合、左大將家歌合、左大將家歌合、新宮歌合、影供歌合、內裏歌合、左大將家歌合、影供歌合、御室撰歌合、左大將家歌合、城南寺歌合、影供歌合、內裏歌合、內裏歌合、新宮歌合、影供歌合、內裏歌合、內裏歌合、內裏歌合、新宮歌合、影供隱名歌合、石淸水若宮歌合、石淸水社歌合、土御門內大臣家影供歌合、影供歌合、影供歌合、新宮撰歌合、影供歌合、內裏歌合、老若歌合、新宮撰歌合、內裏歌合、影供歌合、五十番歌合、戀十五首歌合、八幡歌合、仙洞影供歌合、和歌所歌合、建仁三年歌合、內裏歌合、石淸水歌合、春日社歌合、院歌合、北野社歌合、北野社歌合、高陽院歌合、鴨御祖社歌合、和歌所歌合、卿相侍臣歌合、卿相侍臣嫉妬歌合、住吉社歌合、內裏歌合、五題歌合、建保歌合、松尾社歌合、內裏歌合、建保歌合、仙洞歌合、三題歌合、仙洞歌合、亂歌合、內裏歌合、內裏歌合、秋十五題亂歌合、內裏歌合、名所撰歌合、月卿雲客歌合、建保歌合、仙洞歌合、和歌所歌合、八幡宮撰歌合、建保歌合、內裏歌合、撰歌合、月卿雲客歌合、內裏百番歌合、四十五番歌合、四十二番歌合、北野宮歌合、內裏歌合、前關白家歌合、內裏歌合三題、內裏歌合、內裏歌合、四十番歌合、內裏歌合、內裏歌合、內裏五題歌合、內裏歌合、建保七年歌合、建保七年歌合、內裏歌合、內裏六題歌合、八幡宮歌合、鴨社歌合、賀茂社歌合、內裏歌合、日吉社歌合、內裏五題歌合、內裏五題歌合、春日社歌合、住吉社歌合、粟田宮歌合、撰御歌合、石淸水若宮歌合、攝政家歌合、三十三番歌合、石淸水社五題歌合、五十番歌合、遠島御歌合、河合社歌合、日吉社歌合、仙洞百三十番歌合、仙洞影供歌合、三十六人歌合、新名所歌合、新玉津島社歌合等なり。

うたあはせもくろく

謌合目錄　寫本一巻

延喜十三年壬申(一五七二)の亭子院歌合より始め、寛永年中三條西實條公の列にかゝる職人盡歌合に至る二百餘目を擧げ、末に元久元年甲子(一八六四)より、文明十五年癸卯(二一四三)に至る詩歌合の目錄十一を揭げたり、小冊子に寫せり。

うたあんぎやふところすゞり

歌行脚懷硯　四巻　八文字舍自笑

歌行脚に仕組める八文字舍小說也。卷の一は十首の歌はよみのくだらぬ白子が魂、證據にとる艷文かきさがす兩人が巧、其の手と此の手かしはゝ心の二おもて。卷の二は歌人の育より宇治の片折戶、かざり具足はおどしてみる親仁の强異見、色に出花の茶屋狂ひは花香大尾。第三は眞綿に針金讒延しかける鼻毛の嘘、君の盃おさへてあひのあいのふすま、鎌倉から口上をのべられたゞがにんの命。第四は勸學院の雀は轉てみせる忠の一字、狂氣とて笹の葉に死出の旅すがた、善惡は二佛の中間か青道心。桃園天皇の寶曆十一年辛巳(二四二一)春の作なり。

◉八文字舍自笑は寛文六年丙午(二三一六)京都に生る。通稱を安藤八左衞門といふ。享保以後、江島其磧、多田南嶺等に依りて多くの浮世草紙を著し其の名聲を博したり。本書亦八文字屋自露との合作に拘る。今、其の一世間の著書を擧れば、野傾色孖、諸藝袖日記、世間世帶氣、世間長者容氣、風流御伽曾我、分里艷行脚、風流鑓將軍、傾城玉子酒、浮世親人形、女非人綴錦、富士淺間裾野櫻、當流曾我高名松、風流東海硯、風流軍配團扇、蔵德五葉松、榮花金夢合、風流庭訓往來、風流東鑑、都鳥妻戀笛、本多善光倭丹前、歌行脚懷硯等以上二十餘種あり。延享二年乙丑(二四〇五)八十歲にて歿す。

うだいき

右大記　寫本一巻　平時範

白河天皇の承曆元年丁巳(一七三七)より、堀河天皇の康和元年己卯(一七五九)に至る日記なり。別に本記中より、改元定記だけを抄出して、同名を附したる寫本もあり。

◉平時範は尾張守定家の子にして、官、右大辨たり。平案餘技として書を善くせり。天仁元年戊子(一七六八)出家して定恵と法號し、同二年二月十日入寂す。

うたきかしふ

歌城歌集　四巻　小林歌城(ウタキ)

著者の歌集なり。春夏秋冬戀雜追加等にて千餘首あり。嘉永二年己酉(二五〇九)暢月出版す。涙華稜崎彌の序文あり。

◉小林歌城は將軍家旗下の世臣にして名を元雄、子駿と字し、琵琶堂、雪衣道、四不出齋等の號あり。通稱を小林田兵衞といひ。家の號を奈倍志古園といふ。始め長野美波留に學び、後、鈴迺舍の門に入り遂に和學者として知らる。著書は別に「桂園一枝拾遺評」一卷あり。文久元年壬戌(二五二二)二月八日八十歲(或はいふ八十五歲と)にて歿せり。

うたゝねざうし

轉寢草紙　寫本一巻

轉寢の夢に基きて組み立てたる一の和文物語なり。編年詳ならず。「續群書類從」卷五百〇八、物語部第八に收めたり。

うたゝねのめざまし

假寢之目覺　寫本一巻

亞米利加へ御返翰存意序文と題し、當年の外交に關して存意の大略を述べたるものなり。孝明天皇の嘉永六年癸丑(二五一三)三月の作にかゝる。「祕籍叢書」の中に收めたり。

うたづかえんぎ

歌塚緣起　寫本一巻　森本宗範

大和國添上郡櫟本鄕治道山柿本寺歌塚の緣起由來を考徵記述したるものにて、享保八年癸卯(二三八三)三月十八日の作。末に柿本寺會和歌寫を揭ぐ。

◉森本宗範は大和國城下郡大木村の隱士にして、墨流齋と號せり。別著に「和陽皇都廟陵記」あり。

うだてんわうじき

宇多天皇事記　二十巻　塙保己一

宇多天皇の御事績を記したるものにて、「史料」第一卷より第二卷に至る。時代は仁和三年丁未(一五四七)八月より起りて、寛平八年丙辰(一五五六)六月に訖る。明治十七年五月塙忠韶活字六冊に出版。

◉塙保己一の傳記は「群書類從」の下にあり。

うだてんわうじつろく

宇多天皇實錄　三巻　林道春

宇多天皇御一代の實錄なり。第一卷には仁和四年戊申(一五四八)より寛平四年壬子(一五五二)に至り、第二卷には寛平五年癸丑より同七年乙卯に至り、第三卷には同八年丙子より同九年丁巳(一五五五

七〕に至るまでの史實を漢文にて記したる編年體の正史なり。著作の年月を記さず。

◉林道春の傳記は『羅山文集』の下に掲ぐ。

うたにつき

歌日記　一卷　大國　隆正

歌學に關する隨筆。其の目を擧ぐれば、やまと歌、自督、六義、眞字序假字序、假字のいできはじめ、からのうたにもかくぞあるべき、わきがたかりけらし、六歌仙、いできにけり、喜撰法師の歌、初心、てにをは語格、題、うたよむたとへ、うたの道、うたのいつはり、いはひのうた、名所武藏野、吉野山、たれこめて、年內立春舊年立春、やまぶき、すがるなく、しのぶぐさ、あさがほ吉更、まくらことばうたまくら、あしびきのかなたこなたひさかたの中ひさかたの光、ことばのうつり、たとへことば、わくらば、しろたへ、かとにほひと、みやび、古歌集、後世可笑、異體、隆正のよみうた等なり。天保五年甲午〔二四九四〕十月の自序あり。

◉大國隆正の傳は『學運論』の下にあり。

うだのゐんおんくわんぢやうき

宇多院御灌頂記　寫本一卷

宇多院が醍醐天皇の延喜元年辛酉〔一五六一〕十二月三日、東寺西院に於て、戒師大僧都益信より御受戒の記事にして、旨と同御式の事を記せり。

うだはふし

宇陀法師　一册　森川　許六

俳諧の式法に關する諸條を記述したるものなり。俳諧選集法、當流活法、發句切字の事、以下其の目多し。元祿十五年壬午〔二三六二〕李由と共に編する所なり。近年發行の俳諧文庫第五編『許六全集』中にも收む。

◉森川許六の傳は『風俗文選』の下にあり。

うたひゑほん

謠曲畫誌　十卷　中村　平吾

謠曲の意を圖したるものにて、享保十七年壬子〔二三九二〕の自序、同年橘有税の序あり。

◉中村平吾の傳は『俗字節用指南車』の下にあり。

うたひしよりうなよせ

謠諸流名寄　寫本一卷

觀世、寶生、金春、金剛、喜多諸流謠曲の題名數百を集めしものなり。今內務省の寫本による。

うたひのせう

謠抄　二十卷　林　道春

謠曲百番を集めて註釋したるもの。其の百番は即ち下の如し。高砂、朝長、井筒、鞍馬天狗、百萬、鐵輪、兼平、芭蕉、道成寺、龍田、吳服、女郎花、松風、安宅、昭君、志賀、大原御幸、關寺小町、天鼓、誓願寺、項羽、花筐、浮舟、春日龍神、遊行柳、蟻通、東岸居士、富士大鼓、野宮、葵上、白樂天、木曾、熊谷、通小町、安達原、道明寺、杜若、楊貴妃、紅葉狩、善知鳥(ウタフ)、難波、清經、檜垣、小鹽、鵜飼、松蟲、三井寺、鸚鵡小町、卒都婆小町、當麻、玉井、賴政、千手重衡、阿漕、自然居士、羽衣、實盛、小督、善界、班女、矢卓鴨、短册忠度、夕顏、俊寛、雲林院、葛城、藤戸、江口、西行櫻、柏崎、老松、通盛、軒端梅、景清、櫻川、三輪、船橋、采女、姨捨、檀風、鵜羽、盛久、定家、鵺、二人靜、蟬丸、籠大鼓、佛原、錦木、融、養老、八島、源氏供養、山姥、角田川、放生川、田村、梅枝、殺生石、張良等なり。

◉林道春の傳は『羅山文集』の下にあり。

うたひのぞうせう

諷增抄　十二卷　加藤　槃齋

謠の註釋なり。高砂、盛久、江口、大原御幸、あこぎ、養老、賴政、東北、百萬、自然居士、老松、通盛、千手重衡、二人靜、殺生石、以上十五番を註し、首卷には、大意、謠の起り、謠の字謠の字の註、催馬樂のこと、中樂の事、申樂を能といふ事、能作者目錄の事等を記せり。寬文元年辛丑〔二三二一〕の自序中に「謠といふものは、童よりうたへども、其の心知れる人なし、此の謠釋をなして見んと思ひて、古抄を見れば、こころあまり、詞足らず、さるゆゑ、所々書き入れて、遺迎院にて、十番あまりも讀みしに、障り有て、止めしまゝにて今年までありしに、板にえりなんとある故に、古抄に詞を增して、謠の增抄と名け」云々といへり。

◉加藤槃齋の傳は『伊勢物語初冠』の下にあり。

うたひほん

謠本　寫本八册

龍田、あつもり、夕がほ、羽法師、うたふ以下凡て四十番を抄出したるものなり。何人か自ら好むところを撰抄したるなるべし。此の種の寫本甚だ多し。

うたふくろ　六冊　富士谷御杖

うたまくらあきのねざめ

歌枕秋の寢覺　二卷　有賀　長伯

初學作歌の案內手引書なり。即ちまづ歌題を分類し、各題の下に歌詞、熟語等を集輯し、各、註釋を施し、例證を引きて應用自在なるやうに作られたり。蓋し、「和歌に詠める名所は萬葉集よりはじめて世世の撰集、家々の集に至るまで數を知らず。之れを輯めたる書、又多し。然あらめど筑波根の、このもかのもを分けて思ひ入るにはさはらぬ物から、端山、繁山、こと繁くて早覽し難く、依りて初學の爲に、山は山、海は海と分ちて各〻其の類をよせ、あるは其の所によせある詞、あるは詠みなれたる景物、とりなれたる本歌などをしるす。又、とりなれたる本歌も聞えぬは證歌ともなりぬべき歌もひく。さて未勘國の名所は故あれば之れを除きて全部一冊なづけて歌枕秋の寢覺といふ。凡そ和歌のならひ、知らぬさかひ見ぬ唐土の末まで、心の到らずと云ふことなし。古き歌にも、遙かなる唐土までも行くものは、などあれば、秋の夜の長きをかこつ、寢覺にも、ゆくなき心のしるべともなりねかしと思ふこと爾り」と、著者の序あり。以て其の趣意を知るべし。大體を五十題に分類せり。初學の參考には、麓の塵、布留の山ふみ等と合せ見るべきなり。

◉有賀長伯は京師の人、以敬齋と號す。寬文元年辛丑〔二三二一〕に生る。稍、長じて平間長雅の門に學び、苦學數年、業大に進み終に一家を成し、歌人を以て名を著す。其の著書は本書の外初學和歌式、和歌八重垣、和歌八重垣分類、歌林雜木抄、濱の眞砂、和歌二葉草、和歌麓の塵、世々のしなり、同追加、源氏學故、長伯集等あり。何れも世に行れて殊に歌學社會を稗益せり。元文二年丁巳〔二三九七〕六月二日、年七十七にて歿せり。

うたまくらなよせ

歌枕名寄　三十八卷　僧　澄月

日本全國の名所にかゝる和歌を、萬葉以下の撰集より類集したるものなり。畿內部十六卷、東海部五卷、東山部七卷、北陸部一卷、山陰部一卷、山陽部二卷、南海部二卷、西海部二卷、未勘國部二卷、以下三十八卷、總目錄一册を添へ三十六册に版行す。著者の端書あれど、年代を記さず、僧消滴が萬治二年己亥〔二三一九〕の奧書あり、自ら校訂せる由を記す。

◉澄月の傳記は『澄月千首』の下にあり。

うだめいしよき

宇陀名所記　寫本一卷

大和國宇陀郡中の名勝古蹟凡四十八條を擧げ、每條下に所在、事蹟、來由等を記したるものなり。卷中殊に中山神社每年祭禮の定日、神輿供奉の次第、行列人員等を詳記せるは、同社に關係あるものゝ私稿なるべし。卷末に「享保七壬寅〔二三八二〕四月二十四日、豐山柳之端爲當分書寫畢」と記し、名を蹙意と傍書せり。蓋し蹙意は本書の作者にして、兩部神道家なるべきか。暫く疑を存す。

うちうぎん　雨中吟

うちうべんためちかき

右中辨爲親記　寫本一卷　藤原　爲親

久壽二年乙亥〔一八一五〕十月、十一月、十二月中の日錄なり。所々殘闕、蠧害の儘に、元治元年甲子〔二五二四〕寫傳したるものを見る。

うちうもんだふ

雨中問答　五卷　西村　遠里

人名事實を假借して作りたる物語隨筆にして、烏有と九々老右衞門との問答より成り、凡て二十五條あり。自序に「むなしき名を藉て問答をもふけひとつ心を種として問つ答つ」と云へり。安永五年丙申〔二四三六〕の著述に係る。

◉西村遠里は安永時代の人にして京都の和學者なり。池邊清眞の門に入りて天文暦數に通ず。別著に『數度宵談』あり。

うぢがうめいしよのき

宇治鄕名所記　寫本一卷

山城國宇治郡宇治鄕なる名所の記なり。栗駒山大神宮、琵琶天神、正法寺、眞修院、鞍掛神、御陵山、直行寺、桃の井以下數十目を記す。明治十年內務省御用掛の寫本したるものなり。

うちかけすがた

袿姿　寫本四册　伊藤　信德

著者の俳句の集なり。東山天皇の元祿五年壬申〔二三五二〕卯月中旬の編輯にかゝる。

◉伊藤信德は京師の俳人にして、新町夷川に住せり。初の名は宗宥、通稱は助左衞門、梨柹園また竹丈子等の號あり。松永貞德の門人にして、師に許されて、號に德の字を用ふ。翁歿して山本西武、高瀨梅盛等に學び、江戸に往來して、松尾芭蕉と交あり。「雨の日や門提げて行く杜若」の句を芭蕉に賞せしことあり。著書は此の外に、七百五十韻、浮世糵、白重、江戸三吟、五戲言等あり。元祿十一年戊寅〔二三五八〕十月十三日歿す、歲六十六。或はいふ、享保七年壬寅〔二三八二〕十一月十一日歿せりと。

うぢきうき

菟道舊記　寫本二卷

山城國菟道の地誌なり。菟道の名義、菟道の都、平等院の事等以下山川古蹟社寺等の事を考記せり。

うちぎゝしふ

打聞集　寫本二卷

「古今打聞」と內題して、上卷に四十餘首を例解し、下卷に二十餘首の詞を解す。今見るところは、永享十年戊午〔二〇九八〕五月二十二日の寫本なり。

うちぐもりど

打曇砥　一册

俳諧の集。宗因の卷頭にて、季吟の序、秋風の跋あり。天和二年壬戌〔二三四二〕七月の編にかゝる。

うぢさとき

氏鄕記　三卷

蒲生氏鄕の事績を記したる實錄なり。初に蒲生家の由來より說き起して、父祖の略歷を敍し、次に氏鄕幼時の事より、織田豐臣二氏に歷仕し、秀吉より會津百萬石を拜領せし等の軍事上の經歷を詳記し、終に筆を氏鄕逝去、子孫繁榮の事に止めたり。

うぢさときかう

氏鄕紀行　一卷　蒲生氏鄕

一名「蒲生氏鄕紀行」として「か」の部に解題せり。

うぢさとべつき

氏鄕別記　寫本一卷　威應子

蒲生氏鄕の事績を、年序によりて、記載したるものにして、卷首に序、系圖等を揭ぐ。明治八年內務省の謄寫する所による。

うぢさんじんいさう

菟道山人遺草　寫本三卷　平澤元愷

著者の漢文集。卷一に「會約」より「與横田俊明書」に至る二十餘編。卷二に「馭風樓印譜序」より「蘇張優劣編」に至る二十餘編。卷三に「峨眉紀行」より「祭國子祭酒林先生文」に至る二十餘編を收めたり。本書は一名を「漫遊草」といふ。

◉平澤元愷の傳記は「華陽皮相」の下にあり。

うぢしふいものがたり

宇治拾遺物語　十五卷

古今世間の雜事を書き集めたるものなり。其の性質、及び來由に就ては普通刊本の序に云へり。「世に宇治大納言といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年高うなりては暑さをわび、暇を申して、五月より八月までは平等院一切經藏の南の山際の南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。髻を結び分けて、をかしげなる姿にて、筵を板にしきて涼み居侍りて、大なる團扇をもてあふがせなどして、往來の者、高き卑しきをいはず呼び集め、むかし物語をせさせて、我はうちにそひ伏して、語るにしたがひて大なる草紙にかゝれけり。天竺の事もあり、大唐のこともあり、日本の事もあり。それがうちに貴き事もあり、あはれなる事もあり、きたなき事もあり、少々はそら物語もあり、利口なる事もあり、さま〴〵やう〳〵なり。世の人これを興じ見る。十五帖なり。その正本は傳はりて、侍從俊貞といひし人のもとにぞありける。いかになりにけるにか、後にさかしき人々書き入れたる間物語おほくなれり。大納言より後の事、書き入れたる本もあるにこそ。さるほどに今の世に、又物語書き入れたる出で來たれり。大納言の物語に漏れたるを拾ひあつめ、又その後の事などかき集めたるなるべし。名を宇治拾遺の物語といふ。宇治に遺りたるを拾ふとつけたるにや、又侍從を拾遺といへば宇治拾遺物語といへるにや、差別しりがたし。おぼつかなし。」と、およそ百九十四項よりなれり。年代も定かならねど、思ふに八九百年前のものなるべし。本書は「國史大系」の第十七卷にも收めたり。該書は流布板本を原とし、經濟雜誌社所藏本、及び宇治拾遺物語私註等を以て增訂を加へ、傍ら今昔物語を參考したりといふ。

うぢじんしふせう

菟道蓴拾抄　寫本二册　谷村正長

山城國宇治離宮明神三所の記なり。二社は菟道稚郞子尊を祭りたると、瓊々杵尊とにして、一は宇治の縣主擬田彥命を祭りたる縣明神なり。以上三社の由來、及び末社の緣起、年中行事、其の他神主祝部禰宜の家系等まで詳しく記せり。佛說によること多く、信じ難き點も少からず。

うぢだいなごんものがたり

宇治大納言物語　三卷

宇治拾遺物語に倣ひて、作りたるものなり。本名を小世繼といふ。「紫文要領」に「宇治大納言物語とて、今あるものは僞作にて、眞の隆國卿の物語にはあらず。後の人、名をかりて作れるものと見えたり」といへり。

うちでぐひ

打出杭　寫本一卷

井澤節の「武士訓」中の刀劔の說を評論せしものなり。題號の趣意は、自跋に、「此の書を打出杭と名付くること、頃日、我友の方へ越前より來る客あり、之れを見て此の評は是非我を立つる心とも見えず、唯出る杭を打ちたるものなりと云ふ由を傳へ聞き、幸と思ひ即ち書の名となすものなり」といへるにて知るべし。享保八年癸卯〔二三八三〕に記す所なり。

うちでのこづち

うちでの小づち　八册　荻野安靜

本名「如意寶珠」の下に解題せり。

うちでのはまのにつき

打出の濱の日記　寫本一册　烏丸光榮（ミツヒデ）

和文體の紀行なり。烏丸大納言光榮卿延享三年丙寅〔二四〇六〕三月二十七日京都を立ち東海道を經て江戶に至り、更に東山道を廻りて同五月十四日京都に歸着せし間の日記なり。文中多くの歌を挿みて文もまた妙なり。中に四月十五日より五月三日までの分脫漏せるは惜むべし。翌四年三月八日烏丸家より借寫せし旨、速水房常の奧書あり。

◉烏丸光榮の傳記は「榮葉和歌集」の下に揭ぐ。

うぢどのさんじつかうじふばんうたあはせ

宇治殿三十講十番歌合　寫本一卷

長元八年乙亥〔一六九五〕五月十六日催の十番歌合なり。

うぢのみちしるべ

兎道農道志類邊　寫本一卷

伏見宇治にかゝれる名所舊蹟を擧げて、一々其の來歷等を記し、凡て七十二箇所を擧げたり。明和七年庚寅〔二四三〇〕同地見物の時の紀行なり。卷末に、松下亭空我と記せるが、編者なるや如何。

うぢはふし

宇治法師　一册　片六

著者の俳句集。元祿十五年壬午〔二三六二〕京都井筒屋庄兵衛出版せり。著者片六は俳人にして、江州彥根の產なり。

うぢべつげふわか

宇治別業和歌　寫本一卷

高倉天皇の嘉應年中〔紀元千八百三十年代〕冬日宇治の別業に陪して詠歌したる諸家の歌數十首なり。治部少輔藤原兼光此の歌集に序せり。

うぢみゆきのき

宇治御幸記　寫本一卷

後深草天皇の寶治二年戊申〔一九〇八〕十月宇治行幸の日記なり。

うぢみゆきのきつけたりけいぢんき

宇治御幸記附繼塵記　寫本一卷

後深草天皇の宇治行幸の日記にして、事は寶治二年戊申〔一九〇八〕十月にあり。「繼塵記」は花園天皇の應長元年辛亥〔一九七一〕三月より、後醍醐天皇の元亨元年辛酉〔一九八一〕正月に至る十一年間石淸水、北野等の神社へ行幸の事を記しゝものなり。

うちものあんふはふ

打物案譜法　寫本一卷

太鼓打物口傳の書。天福元年癸巳〔一八九三〕、文治元年丁巳〔一九七七〕、寬延二年己巳〔二四〇九〕等の寫本奧書あり。

うちものかんえうせう

打物簡要抄　寫本二卷　狛葛榮

壹鼓、三鼓、鞨鼓、大鼓、鉦鼓等の打方拍子等の故實を記す。著者の奧書、及、寶永元年甲申〔二三六四〕大秦昌隆寫本の奧書等あり。

◉狛葛榮は、宿禰と稱し、從五位下左近衞將監兼豐後守たり。

うちやくべんたうれうしらべ

打役辨當料調　寫本一册

弘化五年戊申〔二五〇八〕の調書にして、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せるものなり。

うづきまで

卯月まで　一册　定直

俳句集にて、貞享二年乙丑(二三四五)卯月の作なり。如泉の「葉櫻や卯月を京の風情かな」の句あり。

◉定直は備前岡山の俳人にして芳室軒と號す。本書の外に、五箇國、せとの曙、朧月夜の著あり。

うつしうまのこと

移馬之事　写本一巻

諸書諸記錄中より、移馬に關する記事を抄出したるものにて、各出所書名卷題等を記し、僅か四枚に寫傳せり。

うつのみやかうらいきぢんものがたり

宇都宮高麗歸陣物語　写本一巻　宇都宮國綱

侍從宇都宮彌三郎國綱、故あつて國郡居城等を召し上げられ、備前浮田中納言に預けられたりしが、慶長三年戊戌(二二五八)征韓の命を受けて渡韓し、後歸國して始終の事實を物語したるものなり。末に「慶長三年戊戌極月二十日」と記せるは歸朝の日なるべく、記事によれば、元和以後に記したるものなるべし。その事は伴信友の奥書にもいへり。

◉宇都宮國綱は小字を彌三郎といひ、三郎左衛門下野守と稱す。天正十五年丁亥(二二四七)七月、關白羽柴秀吉、島津氏を征伐したる時、國綱、岡本正親を遣して、捷を兵庫に賀せしむ。秀吉喜びて、正親に本領下野の隱屋三千三百餘石を與へたり。後、家運に變遷あり、小田原北條氏と成を行ひ、また秀吉方に屬せり。慶長元年、秀吉國綱の領邑常野二州十八萬石の地を檢點せしめたるに、族領三十萬石を押領せることを發見し、城邑を沒して備前に流し、翌二年朝鮮に遣し、功を以て其の罪を贖ふべしと命ぜられ、士卒を募り、小西行長に隷して軍功ありたるも、たまたま秀吉の薨去ありて、其の志を遂げざりしといふ。慶長十七年丁未(二二六七)十二月卒せり。心翁淨安大昌院と法號す。

うつのみやき

宇都宮記　写本一巻

永祿二年己未(二二一九)四月、上杉謙信の手に屬して、常州小田城主讃岐守氏治と合戰したる宇都宮氏家の事績を略記したるものなり。

うつのみやけいづ

宇都宮系圖　写本一巻

元祖正二位關白右太臣、卽ち粟田關白道兼より、後西院天皇の寛文四年甲辰(二三二四)四月二日、六十七歳を以て常陸に卒したる、宇都宮彌三郎義綱の孫、彌三郎宏綱、彌四郎隙綱に至る數十代の系圖なり。本書に大職冠鎌足を祖とせる別本あり。ともに「續群書類從」卷百五十二系圖部第四十七に收めらる。

うつのみやこがねのしみづ

宇都宮金淸水　写本十巻

宇都宮奥平家復讐の物語なり。初め奥平內藏丞、同姓隼人と喧嘩の末に自害し、遺族は宇都宮を退去せしが、其の後終に內藏丞の子源八郎が、親戚夏目外記、奥平傳藏と共に父の仇を復し、一旦流罪に處せられ、直に赦免せられし始末を作り話にものしたるなり。

うつのみやじやうしゆだいだいき

宇都宮城主代々記　写本一巻　細川守義

下野國河內郡なる宇都宮城の代々、卽、第一代天台座主二品親王宗圓より、第三十五代戸田因幡守に至るまでの事績の大略を記せり。

◉細川守義は下野國鹿沼の鍛冶職なり。別に「宇都宮明神緣起」を著す。

うつのみやだいみやうじんだいだいきずゐのこと

宇都宮大明神代々奇瑞之事　一巻

朱雀院の御宇、平將門追討の時、藤原秀鄉同社の司僧等に命じて調伏を祈念し、神劍を得て凶徒卽時に滅亡したりと云ふ奇瑞を最初として、同御宇源義家が安倍貞任征伐に就て祈念せる時の奇瑞、高倉院の御宇源賴朝祈精して平氏を滅したること、龜山院の御宇兩度異賊蜂起の時調伏を祈精せられたる事等を記す。「群書類從」第二十四の卷にあり。

うつのみやみやうじんえんぎ

宇都宮明神緣起　写本一巻　細川守義

「野州河內郡宇都宮日光大明神緣起」と題して同神の緣起を略記し、更に宇都宮古來の事歷を略記す。

◉細川守義の事は「宇都宮城主代々記」の下にあり

うつのみやみやうじんるゐしよ

宇津宮明神類書　写本一巻

下野國宇都宮大明神の神事其の他に關する記錄也

うつのみやゆてきいろはでん

宇都宮由的以呂波傳　写本一巻　宇都宮由的

本書は「以呂波傳」の題下に解題せり。佐々木文山の家に傳へて、文山の「以呂波傳」と區別するため、此れには「宇都宮由的」を冠し、彼れには「佐文山本」を冠したるなり。

うつのみやりうたかのしよ

宇津宮流鷹之書　写本十二巻

下野國宇都宮流鷹の祕書なり。鷹式法より、諏訪明神流蛛治方極祕書の目に至る十二卷二册に寫傳す。

うつぼのしだい

空穗之次第　一巻　武田元信

空穗に關する儀例法則等を說明圖解したるものなり。其の目次は、うつぼに馬のはらごもりの皮をかけたる事もあり。靫に矢をさすべき次第の事。空穗に矢を六さゝぬ事、靫のみに神頭さすべき事。神頭一さして靫をもさす。等凡て十七條より成る。奥書に、「右此一卷者雖爲當家代々祕傳、萬一爲失念記置也。尤可祕事者也如件」とあり。時は後柏原天皇の永正二年乙丑(二一六五)正月なり。「群書類從」第四百十九の卷に收む。

◉武田元信の傳は「犬日記」の下にあり。

うつぼのしよ

靫書　写本一巻

弓馬故實の書にて、靫の諸式四十八條を說明す。「弓馬雜集」第九にあり。

うつぼものがたり

宇津保物語　二十巻

我が國最古の續き物語なり。年經るまゝに卷の名も卷の次第も變更し、前後したるものと見えたるを、本居宣長「玉かつま」に、「宇津保物語、今の世の板本は卷の名たがへるあり、其の次第もみだれて讀み續け難し、爰に田中道麿が古き善本に據りて正したり」とて下の如くせり。卽ち「第一俊蔭、第二藤原君、第三藤たゞこそ、第四梅の花がさ、第五嵯峨の院、第六吹上の上、第七吹上の下、第八祭のつかひ、第九菊の宴、第十あて宮、第十一初秋、第十二たづのむら鳥、第十三藏びらき上、第十四藏びらき中、第十五藏びらき下、第十六樓の上の上、第十七樓の上の下、第十八國ゆづりの上、第十九國ゆづりの中、第二十國ゆづりの下」と記せり。而して、本物語の古きことは、「源氏物語」繪合の卷に、「たけとりのおきなに、うつぼのとしかげの卷をあはせて」云々といひ、「枕草紙」にも、「物語は住吉、うつぼの類」云々といへるによりても其の古きものなることを知るべし。

うつぼものがたりたまごと

空穗物語玉琴　二巻　細井貞雄

空穗物語の註釋。此の物語の註釋は古來いと稀なるに此の書は叮嚀親切に解釋を施して、殆ど遺憾なきものと謂ふべし。一書の體裁は、自序に、「はやうよりみだれにたるとば、卷々のついで、年立、系圖、大旨などをものし侍らん、其のたらはぬはまたこそくはへ侍らめ」とある如く、すべての物語り文にそれぞれ書樣のけぢめあること、源氏物語と對照して別ある事、物語に四種あること、この物語によりて源氏物語を作り出せし證明、この物語十五卷の大旨、この物語の年序、物語中人物の系圖等を委しく書き記したれば、「空物語」を讀む人の爲には無二の案內者たるべし。劈頭に「よきひとの手をだにふれよ玉琴の、ことゝのはぬしらべなからも」と云へる歌を揭げたり。題意をこの歌に寓せしならん。文化十二年乙亥(二四七五)の刊行。此の書、元、五卷あるを初二卷のみ刊行せしが如し。

◉細井貞雄は字を昌岡といひ、詞花堂と號す、江戸の歌人なり。安永元年壬辰(二四三二)に生れ。山本正臣、本居宣長等に從學し、歌を善くし、又姓氏の學に精し。著す所に、神曆考、姓氏考、姓序考、五十音考、三代實錄補遺、太古冠服考、職位考、地名類聚、及び本書空穗物語玉琴、空穗物語玉松、源氏物語玉椿等あり。文政六年癸未(二四八三)九月二日、五十二歳にて病歿す。

うつぼものがたりとしかげのまき

宇津保物語俊蔭卷　三巻

宇津保物語第一の一卷を拔き出でたるものなり。「源氏物語」繪合の卷に、「たけとりのおきなに、うつほのとしかげの卷をあはせて」云々といへるを見て、或る好事家の此の卷を特に摘出刊刻したるものなるべしといふ。

うづまさうしまつりゑまき

太秦牛祭畫卷　一巻

太秦廣隆寺に古來行はれたる牛祭の繪卷なり。應永九年壬午〔二〇六二〕の書寫なる由にて、同年惠心院源信僧都の祭文をも掲げたり。文化十四年丁丑〔二四七七〕岸本由豆流の校正發行する所なり。

うづみび

埋火　寫本一卷

見聞せし事、又は思附きし事どもを書き集めし漫錄にして、德川義直の事に關せる事實談其の多きを占めたり。奥書に寶永三年丙戌〔二三六六〕九月に之を記しゝよし載せたれど、著者の名を記さず。

うづらごろも

鶉衣　十四卷　横井也有

著者が一生の俳文を編纂したるものなり。著者の歿後、蜀山人等の鑑賞を受けて漸次發行したるものなり。近年發行の俳諧文庫第六編『也有全集』中にも收めたり。

◉横井也有は尾張名古屋藩の重臣にして、孫左衛門と稱す。夙に俳諧を好み、退隱して巴靜の門人となる。或はいふ師なしと、又いふ巴人の門人なりと。半掃庵、蘿隱等は其の俳號なり。著書は本書の外に、浦の海、野父談、小皮籠、蘿葉集等あり。天明三年癸卯〔二四四三〕六月六日〔或はいふ十六日〕歿す、年八十二。

うつれうしげんかい

尉繚子諺解　寫本二册

支那の子書『尉繚子』を片假名交り文にて講解したるものなり。尉繚子は齊國の人にして、此の書は兵法の書なり。天官、兵談、制談、戰威、攻權、守權、十二陵、武議、將理、原官、治本、戰權、重刑令、伍制令、分塞令、束伍令、經卒令、勒卒令、將令、踵軍令、兵敎、兵令等の諸編に分ち論ず。

うつれうしばうせん

尉繚子旁詮　二卷　田代政輔

支那の子書『尉繚子』に旁註を施して、武家子弟の爲にせしものなり。慶應二年丙寅〔二五二六〕の著。

◉田代政輔の傳は『司馬法旁詮』の下にあり。

うとうやすかたちうぎでん

善知安方忠義傳　十八卷　松亭金水

平將門、藤原純友の叛逆に關する時代小說なり。善知安方とは將門の臣、公連の子なり。公連が將門の謀反を諫めて死せし後、安方、亦將門の子良門を諫めて自殺し、魂魄化して鳥となり、猶、君の叛逆を諫めて止まざりきと云ふ。此の書善知安方の忠義を表すを骨子とせるが故に、この題號あり。編初八卷は山東京傳の作にして、文化二年乙丑〔二四六五〕に成り、後編十卷は松亭金水の補修にして嘉永二年己酉〔二五〇九〕に成り、同安政七年庚申〔二五二〇〕に刊行したるものなり。

◉松亭金水の傳は『松亭漫筆』の下にあり。

うなゐはなりべん

宇那爲波奈理辨　一卷　前田夏蔭

「うなゐはなり」といふ詞の研究にて、該語は男女に通用したる由を論ぜり。最初本書撰定の由來を消息文に記す。天保三年壬辰〔二四九二〕九月の作。

◉前田夏蔭の傳は『稻荷神社考』の下にあり。

うなゐはなりべんべん

宇那爲波奈理辨々　一卷

前田夏蔭の『宇那爲波奈理辨』の說を辯駁したるものにて、「うなゐはなり」は、女子にのみ用ひたる詞なりと論じたり。末に「かくいふは常葉居のあるじ源閑雄にもの學ぶ源氏の女」とあり。天保三年壬辰〔二四九二〕十月の作。

うなゐはなりべんべんせいぎ

宇那爲放辨々正僞　寫本二卷　源照古

『宇那爲波奈理辨々』の說を評駁して、『宇那爲波奈理辨』を助け、「うなゐはなり」は男女に通用したるものなりと斷じたる書なり。天保四年癸巳〔二四九三〕四月の作にかかる。

うなゐはなりもんだふ

宇奈爲婆那理問答　二卷

『宇那爲波奈理辨』と、『宇那爲波奈理辨々』とを合刻したるものなり。天保七年丙申〔二四九六〕七月、坂本浩然の序あり。

うのはなぞのまんぴつ

卯花園漫筆　寫本五卷　石上宣續

諸書の中より、行儀、學藝、其の他人の心得になるべき事を抄錄したる隨筆なり。文化六年己巳〔二四六九〕の自序あり。

◉石上宣續は卯花園と號す。本書の外に『仰細園漫錄』をも著せり。

うのまね

鵜のまね　一札　山札

著者の俳諧の書なり。編述の年時は詳ならず。

うのもとすゑ

鵜の本末　寫本一卷

『愚秘抄』の乾を『鵜の本末』といふ。今見るところは天明二年壬寅〔二四四二〕清原春岑の寫本なり。

うはうしうはくせきによするしよ

雨芳洲寄二白石一書　寫本一卷　雨森芳洲

對馬の藩士雨森芳洲が新井白石に贈りし書柬なり。朝鮮より歸朝の後、對馬より贈りしものにして、渡海の時颶風に逢ひて漂流せし事、朝鮮にて白石の評判ありし事、自作の詩に添削を乞ふ事等を記せり。白石と芳洲とは共に木下順庵の門下同學の士なり。

◉雨森芳洲の傳は『橘窓茶話』の下にあり。

うはごころ

うはごゝろ　寫本一卷　山本信有

君相の心得べき、政道、德義、修學等の要件を記述したるものにて、思ふに其の君主へ捧げたるものなるべし。姓名の下に上の字を附したり。

◉山本信有の傳記は『作文率』の下にあり。

うばたまれいめうしふ

烏羽玉靈妙集　寫本一卷　世尊寺行成

筆法の奥儀を漢文にて敍述し一家獨得の書法を詳論せり。萬壽元年甲子〔一六八四〕三月二十八日、著者權大納言行成卿の記せるものなり。天正十六年三月十七日梵舜といへるが三條西家の藏本を借りて寫したりといへる本により解題せり。

◉世尊寺行成は藤原姓、天祿三年壬申〔一六三二〕に生る。右近衛少將義孝の長子にして祖父伊尹の養子となる。官、累進して參議侍從となり、皇太后宮權太夫を兼ね、兵部卿となり、權中納言に任ぜらる。正二位に敍せられ、大宰權帥を兼ね、權大納言となり、按察使を兼ぬ、性直實にして才藝あり。最も書を善くし當時に冠絕せり。敕を奉じて書するもの多し。長保中外祖源保光の舊宅を以て、世尊寺を延つ、故に此の名あり。其の書法を傳へて世尊寺家樣と云ふ。著書には烏羽玉靈妙集の外、權記、東宮年中行事等あり。万壽四年丁卯〔一六八七〕五十六歳にて薨す。

うはんしゅつさんかう

宇藩出產考　寫本六卷　田原明章

植物金石等の名稱、原山、產地、性質、效用等を詳記したるものなり。伊豫宇和島藩領內の出產物中、著者が採藥せるところの品類を、草部、木部、礦石部の三に類別して記せるなり。安政五年戊午〔二五一八〕八月の作と見ゆ。

うひまなび

うひまなび　三卷　賀茂眞淵

百人一首の註釋なり。最初に讀人各個の略傳を揭げ、次に歌を詳密に註釋せり。天明元年辛丑〔二四四一〕の著なり。

◉賀茂眞淵の傳は『冠辭考』の下にあり。

うひまなびまんえふてい

初學萬葉梯　一卷　賀茂眞淵

古歌の調の事、女の歌の事、萬葉集は解しがたき書にはあらざる事、古言の解釋の事等、同集初學者の案內たるべき事どもを說明したるものなり。明和二年乙酉〔二四二五〕の編にかかる。

◉賀茂眞淵の傳は『冠辭考』の下にあり。

うひやまぶみ

うひ山踏　一卷　本居宣長

初學の者に修學の方法を叮嚀に敎訓せし書なり。全編二段に分れ、初の數紙に、先づ其の大要を概說し、後の數十紙に於て更に前意を反覆敷衍して平易叮嚀に、初學者に修學の方針を指示せり。且く、其の中の數項を擧ぐれば、學問に種々あること、志の立て樣、學問は神道を主とすべきこと、國史をみかくべきこと、漢籍をも交へ讀むべきこと、古歌をよく學ぶべきこと等あり。是れ唯一斑に過ぎず。寬政十年戊午〔二四五八〕十月の記述に係る。

◉本居宣長の傳記は『古事記傳』の下にあり。

うぶゐどのてうせんとかいざつかう

右武衞殿朝鮮渡海雜稿　寫本一卷

天正五年丁丑〔二二三七〕官命を奉じて兵庫津を發し、赤馬關を經、對州を過ぎりて朝鮮に至り、同七

年歸朝するまでの略日記なり。唱和詩及び往復狀の寫等あり。

うぶすなしやこでんせう

産須那社古傳抄　一卷　六人部是香（ムトベコレカ）

我國各地の産須那社の由來を、古傳に考證したるものにて、安政四年丁巳〔二五一七〕八月に記するところなり。

⊙六人部是香の傳記は『龍田考』の下に掲ぐ。

うぶやひきめ

産屋蟇目　寫本一卷

弓馬故實の書にて、産屋蟇目故實四十五條を略說記述したるものなり。『弓馬雜集』第七にあり。

うへすぎけいづ

上杉系圖　寫本一卷

大織冠鎌足を元祖として本枝系數十代に至る。本書に別本三種あり。共に『續群書類從』第百五十三、百五十四の卷系圖部四十八、四十九に收む。

うへすぎけしやうしれつでん

上杉家將士列傳　寫本三卷

越後上杉氏に關する記錄にして『北越軍記』の脫漏を補ひたるものなり。初二卷は上杉家の列傳を載せて、末に謙信、景勝の事を略記し、下卷には信濃河中島五ヶ度合戰の次第を記せり。『北越軍記』には寬永二十年癸未〔二三〇三〕九月の洛東隱士雪庵の自序あれども、本書には序跋等なし、恐くは同人の補修せしものならん。

うへすぎこもんじよ

上杉古文書　寫本十六冊

上杉家の古文書、百餘通五十七卷を編輯したるものなり。元弘四年甲戌〔一九九四〕二月五日足利直義が、上杉左近藏人に宛てたる一書より、直江兼續の書に至る。今見るところの書は、本文を悉く清書して、華押は一々切り貼りにせり。

うへすぎてるとらちうしんじやう

上杉輝虎注進狀　一卷　上杉　輝虎

管領上杉輝虎が武田信玄と信州河中島に合戰したる實況を大館伊豫守にまで注進したるものなり。凡そ十八項に分けて合戰の最初より、最後の首實檢、賞罰の事まで簡略に其の要を記す。永祿五年壬戌〔二二二二〕九月十五日認むる所なり。

⊙上杉輝虎は享祿三年庚寅〔二一九〇〕に生る。越後の人長尾爲景の第三子にして本名を景虎といひ、後謙信と云ふ。性淸廉にして、且つ信を重んじ、又兵戰に長ず。晩年越後越中能登佐渡等を合せ、又加賀飛驒上野越前を分ち領す。天正六年戊寅〔二二三八〕三月、四十九歲にて卒す。

うへすぎのりざね

上杉憲實記　寫本一卷

永享十一年己未〔二〇九九〕管領上杉憲實持氏を義敎に愬へて義敎綸命を承て之れを討し遂に永安寺に自害せしめ春王安王日光に遁れしより、後に憲實京都に注進し、義敎綸命を受けて關八州は勿論奥羽諸國の軍兵を催して結城の城を攻め春王安王女裝して逃れ出で、憲實に生捕られ、途に上京の途中金蓮寺に於て殺害せらる等の記なり。『續群書類從』卷五百七十六、合戰部第六に收む。

うへすぎもんだふ

上杉問答　寫本一卷　釣雪　老人

綸旨等規式事、爲武家被進公家門跡御書事、等を始めとし、凡て二十五箇條の問題に對して說明したるもの。永正二年乙丑〔二一六五〕十一月九日の某の奥書に、齋藤越前入道淨玄が越後國上杉の所望に依て題二十五箇を與へて之れを問ふ云々の由を記す。『續群書類從』卷九百三十四雜部第八十四に收めたり。

うへだぐんき

上田軍記　寫本二卷

上卷に天正十三年乙酉〔二二四五〕に於ける、信州上田合戰の始末を記し、下卷に慶長五年庚子〔二二六〇〕後の上田陣起の事、以下同所の合戰事實を記し、二卷一冊に寫傳す。寶曆二年壬申〔二四一二〕某の奥書あり。

うへつふみ

上　記　寫本四十一冊

我が神代文字を輯集類例したるものなり。編者の自序の末に、「神の御代の眞假名もて寫させたるは、上なき御たからなれば、家の子等に傳へて、淸き雲の上は、今は濁りに穢れたる、黑雲の覆ひ重れども、奴はこれ神代の古事をまねびて、天津日つぎを、齋きまつるべくも覺えはんべれば、やつがやか

らの人ども、此文をよみてよと書き散したるのみおもほゆ。大織冠鎌足公十九代之後胤從四位侍從大友左近將監藤原朝臣能直、大友利根治部大炊輔藤原親秀」とあり。貞應二年癸未〔一八八三〕三月、德永帶刀左衞門時直以下凡て七人の執筆するところとして、明治九年內務省に謄寫す。按ずるに本書は豐後の人吉良義風の僞作にして、六百年以前の編述に擬したるものなりと云ふ。

うへのしうやものがたり

上野終夜物語　寫本一卷

國初より近代に至る因緣物語に擬して作りたる書にして、事實として取るべきものなし。卷末に「大森信濃守武州江戶東叡山終夜物語、延寶九年辛酉五月」と記せり。延寶九年は靈元天皇の御宇にして紀元二千三百四十一年なり。

うべふならびにづ

郁子譜並圖　寫本一卷

近江の國產なる郁子に關する譜圖にして、初にこの國より朝廷へ每年貢進の故事を略記し、次に郁子の圖解、及び考證を示せり。本草學者の參考たるべし。太田南畝の『みそのや』に收めらる。

うまかひしようこかう

宇合稱呼攷　寫本一卷　村田　春海（ハルミ）

藤原宇合を『續日本紀』の舊點に「のきあひ」とよみ、『水鏡』に「うかふ」とよみ、縣居の『萬葉考』に「うまかひ」とよみたる等を總合考證したるものなり。著者は「うまかひ」を正しと論斷せり。寬政五年癸丑〔二四五三〕三月六日の著。

⊙村田春海の傳記は『作文通弊』の下にあり。

うまくちむけひせう

馬口向祕抄　寫本一卷

「馬當流五方口向拔書口傳の祕抄」と內題して馬の口向調馴に關する傳書なり。

うまごはうくちむけひせう

馬五方口向祕抄　寫本一卷

馬口の調馴に關する傳書なり。五方とは、上の上口、上の中口、上の下口、及び中の口、下の口をいふ。但、詳しくは口の向方を上中下の三に分ち、更に各を上中下に分ち、凡て九品とするなり。

うまにつき

馬日記　寫本一卷

諸記錄中より、馬に關する事を抄出略記したるものなり。東寺寶輪院古文書中より得る所なる由の奥書あり。

うまにはのり

馬庭乘　寫本一卷　萩野　康清

弓馬故實の書にて庭乘の諸式を記す。天文十八年己酉〔二二〇九〕八月十一日、萩野屋彌六康清より小島與吉へ傳書するところなり。『弓馬叢集』の中に收む。

⊙萩野康清の傳は『一流手綱口傳書』の下にあり。

うまのしよ

馬　書　寫本一卷　今村市兵衞

弓馬故實の書にて、內外馬に關すること數十條を假名書にす。卷末に、「右者御本之內馬之所之分、書面之通和ヶ差上申候以上、今村市兵衞」とあり、『弓馬雜纂』の中に收む。

うまのしよ

馬　書　寫本一卷

專ら悍馬の癖を治する方法を記す。各、其の惡癖に對する直し方二十七種を圖示せるなり。『弓馬集書』の中に收む。

うまのしよ

馬　書　寫本一卷　三上　兵庫

馭馬の法を記す。將軍家の召れに應じて記したるもの丶由奥書にあり、永正十六年己卯〔二一七九〕享祿四年辛卯〔二一九一〕等寫本の奥書あり。『弓馬集書』の中に收む。

⊙三上兵庫は、入道して宗由と號せり。

うまのしよ

馬　書　寫本一卷　小笠原成孝

馬術書にて、旨と口むき手綱の故實を記せり。卷末に「口むきの次第大略思ひ出で候を、註し進上申所也文明十二年〔二一四〇〕正月日、宮內大輔成孝」とあり。『弓馬集書』の中に收む。

うまのなあはせかい

馬名合解　一卷　本居　大平

古傳の馬の名合といふ歌卷十番の歌を解釋したるものなり。著者の序言にも、此の歌卷はいづくいか

なる家に傳りつるものといふことを知らず、源順の家にてもてあそびたる歌合なるべしといへり。文化十年癸酉［二四七三］七月八日註解し、同十三年出版す。
◉本居大平の傳記は『古學要』の下に掲ぐ。

うまのないししふ
馬内侍集　寫本一册　馬内侍
著者の歌集。最初「さかりありてちらまくいかにをしまゝし、心のどけき春の花哉」より、「とゝめても何にかはせん濱千鳥、ふりぬる跡はなみに消えつつ」に至る、凡て二百十二首あり。『續群書類從』卷四百四十九、和歌部第八十四に收む。
◉馬内侍は中古三十六歌仙の一なり。右馬權頭源時明の女一條院皇后の女房たり。正曆元年庚寅［一六五〇］本宮掌侍となる。生死の年代詳ならず。

うまひやくしゆ
馬百首　寫本一卷　嘯山
馬を詠じたる和歌集なり。著者が種々なる馬につきて詠みいでたる歌百首を收む。卷首には「詠馬百首」とも記せり。著者嘯山の姓名傳記詳ならず。

うまひやくせう
馬祕藥抄　寫本一卷
乘馬の飼養、藥療、正癖等の諸方を記したる傳書にて、『弓馬集書』の中に收む。

うまみをかじんじやきうき
馬見岡神社舊記　寫本一卷　紀　壽信
近江國蒲生上郡鎭守日野牧馬見岡大宮の由來舊記なり。諸家の記、及、天慶、寬政、文化等の碑面をも圖せり。文政元年戊寅［二四七八］十一月、神主紀壽信、祝部大神清秀の編輯するところなり。

うまやくはう
馬藥方　寫本一卷
馬の目の藥、馬病出る時えと等より、腎臟の煩、かさの藥等に至る九十六條を說明せり。『弓馬叢集』の中に收む。

うまれうぢ
馬療治　寫本一册　富田又左衞門
馬疾療法を記し、馬醫唐人療治書付、陳采若、沈大成、馬療治方書付を附載す。富田又左衞門より、幸助といふ者に讓りたるものゝ由なれど、其の年代と傳記とを得ず。

うまれうぢのしよ
馬療治之書　寫本一卷
弓馬故實の書にて、馬の諸病に於ける適藥方を記したるものなり。『弓馬叢集』の中に收む。著者は粟屋加賀守と記せり。

うみかゞみさるだひこ
海鏡猿田彥　寫本九册　立羽　不角
俳諧發句の材料として特に作りたる相模國の地誌なり。然れども地理、歷史の上に參考として取るべき事實少からず。
◉立羽不角は江戶の俳人なり。寬文二年壬寅［二三二二］に生れ、岡村不卜の門人となり、松月堂、虛々齋、南々舍等の號あり。元祿中法橋に敍せられ、享保中法眼に進めらる。寶曆三年癸酉［二四一三］六月、年九十二にて歿す。

うみづじやうでんづ
海津城傳圖　寫本一鋪
信濃國埴科郡なる海津城［後世松代城］の本丸、二の丸、を始め、四方搦手、門々の內外、溝池の深淺、堤塘、石垣、其の他等を詳しく圖出す。該城は天文二十二年癸丑［二二一三］八月、築きたるものにて、山本勘助晴幸の繩張なる由をも圖外に記せり。軍學者が要害備立等を傳授するために作りしものか。傳の字の義もこれに基きしものなるべし。

うみのさち
海の幸　二卷　堺　龍水
魚介百數十種の圖に彩色を施しゝものなり。此の書、一名『若海魚鱗貝譜』と云ひ、元俳句を題せん爲にせしものなれば別に解說を附せず。寶曆十二年壬午［二四二二］に著す所なり。

うめくさ
埋草　寫本五卷　正法寺成安
著者の俳諧集にして、五卷一册に寫傳せり。編作の年代を記さず。

うめさはうぢしよざうこもんじよ
梅澤氏所藏古文書　寫本九卷
肥前唐津領に傳ふるところなりといふ。嘉曆元年七月法樂寺釋迦院の內、麥地子免許の狀一通、建武四年七月四日小山館乙妻原にて島津大隅彌三郞忠政戰功の目安書一通、觀應二年十二月廿五日松浦相知藥孫十郞榮地宛行證書一通、康曆三年二月五日島津佐京亮へ下河邊莊渠橋卿宛行證文一通、應永三年六月二十五日島津左京高政忠節によつて讚州の徒中乞所の狀一通、小笠原長棟が梅澤彥四郞に與ふる感狀一通、上杉輝虎梅澤兵庫助に與ふる感狀一通、佐野昌綱が同人に與ふる感狀一通、また同人に與ふるもの一通以上九通の古文書なり。

うめのうし
梅能牛　一卷　一浮齋
芭蕉、素堂の兩磐梅花の韻に諸家の句を拾集して成せる一の發句集なり。延寶七年己未［二三三九］奉納の百韻の筆頭芭蕉の「此の梅に牛も初音と鳴つべし」の句によりて書名とせり。延享四年丁卯［二四〇七］一浮齋の自跋あり。

うめのみやしやき
梅宮社記　寫本一卷
山城國葛野郡梅宮神社の緣起由來を詳載したるものなり。

うめわかごんげんごえんぎ
梅若權現御緣起　寫本三卷
武藏木母寺［もと梅若寺］梅若權現の緣起にて、京都北白川の少將惟房の子梅若丸の生立より、武藏隅田川に來りて客死するまでの事を記せり。奥書あり、「此の寺の緣起破壞に及び、詎闕文詞正しからざる故、安藤對馬守重治再興して、詎工能書に命じ、緣起三卷に寫生當寺主典海へ寄進して、永く此の寺の什物となす。神は敬によつて威を增すの謂歟。于時延寶七曆己未［二三三九］彌生中旬」と記せり。三卷一册に寫傳す。

うめわかまるいちだいき
新畫圖入梅若丸一代記　五卷　江島屋其磧
梅若丸を骨子にして作りなせる物語なり。自笑と共に編するところ。天明八年戊申［二四四八］正月某の序あり、同年大阪書肆に出版す。
◉江島屋其磧の傳記は『其磧諸國物語』の下に揭げたり。

うもれぎ
埋木　一册　北村季吟
著者の俳諧集にて、延寶元年癸丑［二三三三］霜月編輯したるものなり。
◉北村季吟の傳は『源氏物語湖月抄』の下にあり。

うよくげんにんろん
羽翼原人論　一卷　僧　圓通
唐の圭峯禪師宗密が著しゝ『原人論』に略解を附したるものなり。『原人論』は唐の韓退之が「原人」の一編に於て論する所、猶理を盡さゝる所ありとて、佛敎上の見解を以て、人類の本源を論究したるものなり。本書は略註を附して原本を解するの補助に供す。是れ羽翼の二字を冠する所以なり。文政七年甲申［二四八七］の著作に係る。
◉圓通の傳は『佛國曆象編』の下に在り。

うらがきじんでん
近世浦賀畸人傳　一卷　樋口　有柳
相州浦賀なる篤厚者、風狂者、豪邁者、滑稽者二十餘人を傳したるものなり。著者の友交せる人々なりといふ。文政十一年戊子［二四八八］の自序、無人老人の序、同十二年大窪詩佛の序、十一年南紀垣內定の跋あり。著者樋口有柳は陶亭と號す。いま其の詳傳を得がたし。

うらかはかいぼくいつけん
浦河開牧一件　寫本二卷
北海道日高國浦河郡開牧に關する公文類を輯錄したるものなり。安政年間より、慶應年間にわたりて記せり。同郡村山谷兒次郞といふものゝ藏本に係るといふ。

うらかみうきだりやうけのき
浦上宇喜多兩家記　寫本一卷
最初に備前佐伯天神山浦上氏の事を略記し、次に宇喜多家の事を詳敍せり。宇喜多和泉守能家が傑の勢を始めとし、能家直家が近隣を攻め取り、遂に二備播作を押領せしことより、秀忠に至りて豐臣太閤に從へること、慶長年間石田三成に與して、豆州八丈島に遠流せられし事等を記し、尙幾多の附載あり。

うらかみけいづ
浦上系圖　寫本一卷

元祖紀伊守倭文より二十餘代の末、宗家、宗景に至る。『續群書類從』百六十八系圖部第六十三に收む。

うらさむらねんぢうぎやうじ

浦佐村年中行事　寫本一卷

卷頭に「松平龜五郎御預所、越後國魚沼郡浦佐組浦佐村年中行事土山藤右衛門江坂孫三郎」と記して、正月より十二月に至る同村の年中風俗を書せり。右兩人は本書の編者なるか如何。

うらしまこのでん

浦島子傳　寫本一卷　木下　順庵

浦島子の略傳にして、漢文に作れり。東山天皇の元祿十一年戊寅(二三五八)三月に書ける順庵の奥書に曰く、「右浦島子傳不ㇾ知二何人所ㇾ作、其文華靡無二檢束一、想夫古之搢紳家學二白香山一而失二於俗一者也。而傳寫年久、其間誤字闕文、往々有ㇾ不ㇾ可二讀而通一焉、餘暇日反復考訂、誤者正ㇾ之、闕者補ㇾ之、爲二一篇文字一也、蓋取二其事之本二萬葉歌詞一而有ㇾ可ㇾ傳者上爾。文之巧拙不ㇾ在ㇾ所ㇾ論云」と。本書には著者の名を記さゞれど、此の奥書に依り其の補訂者を以て暫く本書の著者とす。

◉木下順庵の傳は『錦里文集』の下に掲ぐ。

うらのしほかひ

浦のしほかひ　寫本一卷　京極　高門

一名『走湯(ハシリユ)行記』の下に解題せり。

うらのしほかひしふい

浦のしほ貝拾遺　一冊　熊谷　直好

著者の歌集『浦のしほ貝初編』に遺れたるものを、同門茂之等の更に編輯したるものなり。之れには陸奥介景恒が、安政三年丙辰(二五一六)八月の序あり。初編と共に明治十三年翻刻せらる。

◉熊谷直好の傳は『浦のしほ貝初編』(次に解題せる)下にあり。

うらのしほかひしよへん

浦のしほ貝初篇　一冊　熊谷　直好

著者の詠歌中より幾千を拔きいでたるものなり。弘化二年乙巳(二五〇五)九月に於て、門人三井宗之等が編輯せる所、明治十三年十月翻刊せり。

◉熊谷直好は大阪の國學者なり。天明二年壬寅(二四四二)周防岩國に生れ、初の名を信賢、又、助左衛門と稱す。香川景樹に就て學ぶ。梁塵後抄、法曹至要抄註釋等の著あり。孝明天皇の文久二年壬戌(二五二二)歳八十一にて歿す。

うらべいせつかう

卜部異說考　寫本二冊

卜部家の異說誤傳等に就きて辯論し、併せて神道に關する數十件を記述したるものなり。卜部家の說に、大織冠の御子意美麻呂、中臣氏に復し、其の子清麿大中臣に改め、清麿より四世比真麿卜部の姓を賜はりしより、代々今に至れるやうにいへるを、契沖が、大中臣は兒屋根の命より出で、卜部は忍見命より傳り、兩氏各、其の祖を別にすと辯じ、以下龜卜の事、伊伎是雄の事、八幡殿の事、神祇官圖の事、神道相傳口傳の事、勸請の事、神人一理の事、神體の事、奥義の事等凡そ數十の件を論述せり。

うらべけんかうのでん

卜部兼好傳　寫本一卷

最初に家の系譜を掲げ、次に普通の略傳を述べ、まま兼好の詠歌をも入れ、更に諸書諸家の論を掲げ、最後に伊賀國國見山麓、田奈保村にありといふ。兼好の石碑をも圖示せり、年代著者詳ならず。唯卷尾に正德二年壬辰(二三七二)菊月中旬寫得たる由を記せり。

うらべさたぶみ

卜部沙汰文　寫本一卷

卜部兼俱の奉幣使に關する沙汰文なり。『神境紀談』に曰く、「正保四年八月に奉幣使御再興あるべしとの御沙汰ある時、又卜部氏幣使に列して神事を勤むべきの旨願ひ申すに依り、祭主友忠朝臣より、吉田の事仔細ありて中古より度々の奉幣にも就き申さゞるの由を申す、同九月に至りて祭主より吉田參考の事攝政殿へ申し達せしかば今度は相止らるゝの旨重て告知あり。同じく十一月に至りて又神宮傳奏より、吉田の事につき、面々の所存、攝政殿聞召し届けらるべしとて、宮司並に兩宮禰宜二十人の使者を召登されて所存を聞召るゝに祭主申分に異ることなしとて、卽ち使者等を遣し下されて、重て御沙汰に及ばず」云々とあり。本書は此の時の記錄なり。

うらべしけいづ

卜部氏系圖　寫本一卷

元祖闕子大連より、數十代を經たる卜部兼俱の孫卜部兼隆に至る。『續群書類從』第百七十九の卷、系圖部七十四に收む。

うらみかんわ

裏見寒話　六卷

甲斐國の地理書にして、城郭、社閣、山河、府郡、所蹟、產風等に分ち記せり。卷首に甲斐國總高總村數四郡九筋二十四關を揭げ、時候人氣の異同等より記し、追加一卷、附錄一卷、都合七卷を、五冊に版行せり。寶曆二年壬申(二四一二)米椒堂仙丞の序あり。曰く「享保甲辰の冬、愚父鵄鼠子、錦城の衞士に擧げられ、甲陽の府下にいたり、恩賜の宅地に移りて、葛の葉やうらみて寒し甲斐のふじと嘯吟して、居を占むる事三十年、常に見及び聞及びし國中の事績來由など、書記せし反故を、ちりぢりにならむは悔むべしと、兒萬華黿息に命ぜられて、そこかしこ取集むれば、何所となく一帙となりぬ。彼くすの葉の言葉にすがり、書號となし、卽ち裏見寒話と題す」といへり。

うらみのすけ

うらみのすけ　二卷

觀音利生記やうの讀本小說なり。葛の恨の介、夢の浮世の介、松の緑の介、君を思の介、半天の戀の介などの好色家を作り出で、恨の介の忠に扇を結ぶ。

うらぼんきやうしよゑこつうこんき

盂蘭盆經疏會古通今記　二卷　僧　普觀

唐の僧宗密が著せし『盂蘭盆經疏』を更に註解したるものにして、會古通今とは、古今の異說を取舍調和するの謂なり。僧元照の作なる『盂蘭盆經疏新記』が、亦『盂蘭盆經疏』を註解したるものなることは、既に『盂蘭盆經疏新記愚聞鈔』の下に記したり。今この『會古通今記』を讀まん者、須らく彼れをも對照參考すべきなり。萬治三年庚子(二三二〇)に刊行せり。

◉普觀は華嚴宗の僧にして、光嚴無際大師と號す。本書の外、『法界無差別論疏頷要鈔』二卷等の著あり。生死の年月詳ならず。

うらぼんきやうしよしんきぐもんせう

盂蘭盆經疏新記愚聞鈔　八冊　僧　敬山

『佛說盂蘭盆經』の註釋書なり。釋迦佛の弟子目連尊者、孝心甚だ深し。亡母の餓鬼道中に在るを觀、佛に白して法を求め、母の苦惱を救へり。釋迦卽ち目連の請に因て諸弟子の爲に父母の恩の至て重きことと、孝道の百行の至要たる事とを說きたるが、卽ち『盂蘭盆經』なり。唐の沙門宗密この經を演義して『盂蘭盆經疏』を作り、更に之れを複註せしものを唐元照律師の『盂蘭盆經疏新記』とす。今揭ぐる所の『愚聞鈔』は元照の『新記』を更に解釋したるものなり。凡べて原文を出したるを以て本書を繙けば、經と疏と新記との全文に接することを得、且又、『父母恩重經』等と併せ讀みて佛經孝道の訓誡を窺ふべく、本邦盆會の由來をも知ることを得べし。本書は靈元天皇の延寶六年戊午(二三三八)の作なり。

◉敬山は洛東六波羅密寺の住僧なり。

うらぼんきやうしよしんきぢきだん

盂蘭盆經疏新記直談　十五卷　僧　了意

『佛說盂蘭盆經』を註釋せし『盂蘭盆經疏新記』を更に複註したるものなる本經、及び『新記』の事は、前項『盂蘭盆經疏新記愚聞鈔』の下に於て既に記したれば、就て見るべし。今此の『直談』は假字交り文にて通俗を旨としたれども、元、法談唱導の用に供したるものなれば、原本の文句に因みて、種々の因緣故事等を引援し、徒に繁雜冗長に流れて、却て原書の意義を解するに困ましむるは、此の著者の手に成れる他の著書に於けると同例の短所なり。延寶六年戊午(二三三八)四月の著作に係る。

◉了意は眞宗の僧にして京都の人なり。本書の外、大原談義句解、順々鈔註解、蓬戸雜譚鈔、聖德太子傳鼓吹、新語園、三國法林樵譚、往生拾因直譚等の著あり。何れも法談唱導の爲めに作りしものなり。

うらぼんきやうしよしんきへうしせう

盂蘭盆經疏新記標指鈔　五卷　僧　單阿

『佛說盂蘭盆經』を註釋せし『盂蘭盆經疏新記』を更に註解したるものなることは、前二書と異なること無く、殊に此の『標指鈔』と、上の『愚聞鈔』とは、體裁亦大に同じく、此れは彼れより解說簡略なり。『盂蘭盆經疏新記』の註釋書としては、吾人此の二書を推さゞるを得ず。天和元年辛酉(二三四一)の著作に係れり。

◉單阿は白學とも云ひ、淨土宗の僧にして、江州湖

北の人なり。未だ其の傳を詳にせずと雖、洛東獅子ヶ谷忍澂の跋文に、「單阿法師は余之社友也」と云へり。忍澂は淨土宗の名僧にして、正德元年辛卯〔二三七一〕に卒せし人なれば單阿の地位と年代と亦以て推知すべし。

うらんぼんはふしきりやくげ
盂蘭盆法式略解　一卷　僧　玄阿

佛敎に行はるゝ盂蘭盆會の作法儀式を解説したるものなり。初めに印度支那日本に於ける盆會の起原、盆供養の節時の事を敍述し、次に『盂蘭盆法式』の原文に略解を附したり。『盂蘭盆法式』は、未だ其の作者を詳にせざれども、古來相傳はれるものにして、勸請三寶、歎佛咒願、歸依三寶、變食神咒、七佛誦號、彌陀神咒、施食發願、散飯之偈の八段に分ち、各佛前に敬白すべき偈文を擧げたり。今此の略解は、貞享五年戊辰〔二三四八〕の著述刊行に係る。

⊙玄阿は禪宗の僧にして、大和國今邑西光敎寺に住せしと云ふ。其の著す所、本書の外に『淨土考原錄』等あり。

うりんえうせう
羽林要抄　寫本一卷　藤原　公種

諸家の記錄により、古來の雨儀行幸御輿雨皮の事を抄選したるものなり。著者の奥書あり、曰く「文永二年〔一九二五〕正月上旬之比、雨院御參籠八幡宮、京中冷然之間、徒眠蓬屋、獨勤棘府、仍所聞及之口傳、所見及之書記等、抄出之、又下官勤仕之時之儀、其時資氏朝臣之所爲等、同書入之、多加今案、後見可嘲、不可出閫外者也」と。以下諸家の奥書多し。

本書或は『羽林祕抄』として行へるもあり。

⊙藤原公種は、從四位上行、右近衛權中將、兼相模介たり。

うりんひせう
羽林祕抄　寫本一卷　藤原　公種

前揭『羽林要抄』の別名にて該題下に解題せり。

うりんるゐえふせう
羽林類葉抄　寫本二卷

武官扈從の式を記せるものなり。種々の記錄中より抄出して分類せり。

うわごほりきうき
宇和郡舊記　寫本四卷

伊豫國宇和郡の舊記錄なり。大名城主の系圖、履歷、石高、分限より、社寺の緣起、古文書等を詳しく記述せり。同國地理歷史の研究には好資料たるべし。

うんうせう
雲雨鈔　寫本一卷　僧　凝然

佛敎の三藏中、戒律の部に關して記述したる書なり。即ち、律藏の結集、及び部數を始め、律部の隨一なる四分律の部屬、法門、傳來、註解、流派、本邦三處の戒壇の同異、大小二乘の戒律の關係等を、簡明なる漢文もて問答體に記したるものなり。著作の年代未だ詳ならず。

⊙凝然の傳は『八宗綱要抄』の下に在り。

うんえふわかしふ
雲葉和歌集　寫本十卷

家持、人丸、家隆等より、後嵯峨院の時代に至る和歌八百七十四首を撰輯したるものなり。第一卷は春の上、第二春の中、第三春の下、第四夏、第五秋の上、第六秋の中、第七秋の下、第八冬、第九賀、第十卷羇旅と類別せり。

うんえんりやくでん
雲烟略傳　二卷　清宮（セイミヤ）　秀堅

諸家の傳記にして、池野霞樵、野呂介石、長町竹石、劒雲泉、田能村竹田、浦上春琴、中林竹洞、岡田半江、渡邊華山、椿々山、高久靄厓、英一蝶、谷文晁、立原杏所、圓山應擧、松村月溪、等以上十六名の傳記を擧げ、各傳尾に伴蒿蹊、安積艮齋、賴山陽、柴野栗山等諸名家の略評を附記したり。文久二年壬戌〔二五二二〕三月の川田甕江の序、安政六年己未〔二五一九〕五月の自序あり。

⊙清宮秀堅は文化六年己巳〔二四六九〕下總國香取郡佐原村に生る。通稱を利右衛門といひ棠陰、又、繼浦漁者と號す。幼より學を好み、父滄洲の遺書を讀み、又、本居宣長、賴山陽等の書を見て頗る其の學識に敬服す。著す所下總舊事考、新撰年表、古學小傳、近古詩鈔、北總詩誌、下總國圖等あり。明治十二年己卯〔二五三九〕七十一歲にて歿す。

うんかくぶんしふ
芸閣文集　十卷　千葉　玄之

著者の詩文を集めたるもの。其の雅號を以て書名に冠す。後安永五年丙申〔二四三六〕稻垣長章の序、同六年丁酉の關脩齡、藤原公享の序、飯室昌栩の跋あり。

⊙千葉玄之は享保十一年丙午〔二三八六〕に生れ、茂右衛門と通稱し、子玄と字し、芸閣と號す。初め熊本の儒、秋山玉山に從學し、遂に詞藻家を以て知らる。寶曆年中古河侯に仕へて優遇を受けしも後讒の爲めに致仕し、駒込に寓して多くの子弟を敎授し、井上金峨、細井平洲等と同しと稱せられ、寬政四年壬子〔二四五二〕十一月六十六歲にて歿す。

うんかしふ
雲霞集　寫本三卷

大坪流馬の書二十冊の中にして「上卷に八十四條、中卷に百三十二條、下卷に十五條。馬術一切の故實を記せり。各卷の奥書に「右大坪一流之十三册堅雖爲祕事依懇望令授與畢戊戌九月日」とあり。そは大坪流馬の書の全數なるべし。

うんがんじじつけいごけうづ
雲岩寺十境五橋圖　一卷　僧　子錬

下野國那須山なる東山雲岩寺の十境五橋を圖し、當寺の來歷を記述したるものなり。十境とは、瑳瓏岩、水分石、飛雪亭、玉几峯、鉢盂峯、龍雲洞、十梅林、海岸閣、竹林塔、千丈岩等にて、五橋とは瑞雲橋、獨木橋、瓜瓞橋、涅逅橋、梅船橋なり。享保十二年丁未〔二三八七〕の作なり。

⊙子錬は妙德禪寺十三世の末流なり。享保十二年丁未〔二三八七〕勸化を乞ひし時、此の圖を作りて販行したりといふ。

うんきしせう
運氣私鈔　寫本一卷

「運記」中より、六氣、二十八宿、納音成敗、千德符、天符其の他等を抄出圖示したるものなり。

うんぎよくわかしふ
雲玉和歌集　寫本一册

古來諸家の詠歌數百首を撰出して評釋したるものなり。自家の詠歌も多し。永正十一年甲戌〔二一七四〕四月六日自らの奥書あり。編者はたゞ衲叟と署名するのみ。

うんきんずゐひつ
雲錦隨筆　四卷　曉　鐘成

著者の見聞せし雜話を集錄せしものなり。舊説俗話、社寺の緣起其の他の雜事の隨筆にして考證多し。先づ木國の御綱葉韮全圖、武藏野の孟韮全圖、職人盡歌の校合等より、最後に至りて阿波國行基庵の來由、鴻儒の名家亜松永貞德の傳に至る凡て百〇七項あり。古器故實等に就ては處々挿畫あり。文久元年辛酉〔二五二一〕六月の序あり。同二年新刻す。

⊙曉鐘成は大阪の著述家なり。本名は木村明啓、彌四郎と稱し蒹葭堂と號す。狂名を曉の鐘成又は鹿の舍眞萩と云ふ。放縱にして生産を事とせず戯作を以て樂みとす。寬政五年癸丑〔二四五三〕に生れ、萬延元年庚申〔二五二〇〕の十二月十九日丹波福知山に死す。時に年六十八。著書には蒹葭堂雜錄、小倉百首類題話、朝比奈巡島記續編、芝縮國一覧、同雜劇集、靈獸奇談〔一名犬の草紙〕前田百戯通、百人一首玉庫、猿著聞集、金比羅參詣名所圖繪、天保山名所圖繪、滑稽漫畫、猪著聞集等あり。

うんげいきさん
雲霓機纂　一卷

得水農具圖纂なり。年、旱天に際したれば、旱を凌ぎ、凶を免るゝ法を敎へんとして著したるものなり。因て雲霓と名付たりといふ。桔橰作、升降龍、懸泉車、吸水竊弃流車、等の得水機關を精寫せり。元祿年中の作なり。

うんこんし
雲根志　十六卷　木内　小繁

國内各地に產する有名の玉石を網羅し、内外古今の書に考徵して註釋説明したるものなり。前編五卷、後編五卷、三編六卷より成る。前編には湖上石話と冠し、三編には諸國石話と冠す。明和九年壬辰〔二四三二〕の自序、安永二年癸巳〔二四三三〕三月、蒹葭堂の序あり。第三編六卷の末に、享和元年辛酉〔二四六一〕藤井元藺の跋あり。

⊙木内小繁の傳記は『識石日錄』の下にあり。

うんざいづしよ
運材圖書　寫本二卷　富田　禮彦

維新前幕府の御用材といへるを、飛驒國益田郡各村より、材木運漕の方法を詳説圖示す。上卷は益田郡の山中より伐り出したるを益田川に谷出しして川下をなし、同郡下原村中綱場までの運漕法を揭げ、下卷は美濃國に出でゝ遂に同國下麻生村湊に至るに畢れり。嘉永七年甲寅〔二五一四〕山崎弘泰、市村成章、廣瀨旭莊等の序あり。明治十五年孫富田銀一郎謄寫したるものなり。

◉宮田禮彥は飛驒の人にして、伊勢に住し、荏名大秀の門人たり。和卿と字し、節齋と號す。著書は本書の外に、十八社考、宮我圖會、三郡沿革、飛驒後風土記、詩歌集等ありたれど、皆寫本に屬して、蠹魚の害を蒙れるもの多しといふ。

うんざうひさく

韞藏祕策 寫本四卷 伊勢 貞丈

著者の雜錄隨筆なり。凡例に、「此の書は予若年の頃より書籍を好み、普く諸所を遊歷して其の先々名家の傳文、並に所々の雜談、或は珍說奇話を聞く毎に記して、此の祕策三卷附錄一卷を作る」とあるにて、本書の概要を知るべし。安永八年己亥〔二四三九〕の自序あり。

◉伊勢貞丈の傳記は『安齋叢書』の下に見るべし。

うんざうろく

韞藏錄 寫本四十八卷 佐藤 直方

著者の遺稿を稻葉正信の編輯したるものなり。其の序に曰く、「或人有レ問二於予一曰、佐藤先生之書其門人各藏レ家而未三嘗傳二於人一、蓋慨二其間有二未定說及記者之誤一也。然予今悉取成レ編何。予應レ之曰、此非レ雖レ語予之所三以成二此編一者無レ他、慕二先生一之深也。予之慕二先生一也猶三孝子慈孫之慕二其祖考一也。孝子慈孫之慕二祖考一也有二遺蹟一求レ之有二遺器一聚レ之其何有レ所レ擇乎。予之慕二先生一亦如レ此耳。以レ故苟有レ歷二先生之手一則雖二一片之楮、數行之文字一不レ忍二敢棄一レ之、豈又擇二其論之是不是與二其說之定未定一乎。此編所以レ造也。雖レ然述亦何庶與二衆人一而以レ誤二後學一之爲哉。於レ是乎名以二韞藏一謹祕二匣中一云レ爾。既以二此答一、或人又告レ之曰、其所レ謂謬誤者概章句文義之細而已。至二若夫大段氣象一則知者須レ得二之言外一豈憚二記者之誤一乎。豈有レ加二損於先生一乎。學者或不レ察二於此一徒爲二文字所一レ傳而致二疑於先生一則雖二程朱之書一亦何無レ疑哉。且以二一二定書一推二及其餘一乃被二記者之誤一者自可レ見也。其亦識レ之」と。寶曆二年壬申〔二四一二〕の編なり。

◉佐藤直方の傳は『道學標的』の下にあり。

うんしうせうそこ

雲州消息 三卷 藤原 明衡

著者の消息文を集めたるもの。著者出雲守たりし故此の名あり。卷上本末、卷中本末、卷下本末と分ちて凡そ二百章餘を載す。文章最も簡明。讀者は著者の文筆を知るの外、當年時文の一斑を知るに足る。『群書類從』卷百三十八、消息部第一に收む。

◉藤原明衡の傳は『新猿樂記』の下にあり。

うんしうひのかはかみてんえんき

雲州樋河上天淵記 寫本一卷

出雲國仁多郡三津鄕樋河上なる天淵の記なり。天淵は素盞嗚尊の大蛇を斬り給ひしといふ古地なり。本書其の事實を記し、亦天叢雲劍の傳授の事を記せり。享保三年戊戌〔二三七八〕寫本の奧書あり。

うんしうまつえづ

雲州松江圖 寫本一鋪

出雲國松江の地圖。東は吉島、西北は松崎を限りたる圖にて、松江城の本丸、二丸、三丸、諸屋敷、道路社寺等を圖したり。

うんしつずゐひつ

雲室隨筆 一卷 僧 雲室

著者の知友、當時の學者畫人等の言行を記せる隨筆なり。記事質實にして虛飾なし。當時の文學社會の風彩の一斑を知るに足るべし。筆記の年月を記さず。安政六年己未〔二五一九〕七月、著者晚年の友たりし小田敬の息に借寫せし由、或人の奧書あり。

◉雲室は眞宗西本願寺末の僧なり。寶曆七年丁丑〔二四一七〕に生る。名は了軌、字は公軌、雲室は其の號なり。好んで詩を作り又畫を善くす。最も老莊の學を好み、老君解意、莊叟得意、等の著あり。

うんじやうえもんしふ

雲上衣紋集 寫本一卷

雲上人の着用せる裝束衣紋の圖、及び其の染色等を詳細に記載したるものなり。例には、主に、後西院天皇の寬文年中着御のものをひけり。

うんじやうえもんのづ

雲上衣紋圖 寫本一卷

雲上人の衣紋の模樣を畫きたるものなり。卽ち黃櫨染の御袍、麴塵御袍、後西院御袍を始め、親王、攝家、公卿等の着用すべき袍、襲、單、表袴、奴袴、直衣、小直引、半尻、女房裝束、狩衣、將軍家御祝儀裝束等の紋模樣を畫き、地合色目寸法等を附記したる珍重なる書なり。

うんじやうめいかんりやく

雲上銘鑑略 寫本一卷

雲上貴族の略表なり。親王家、宮門跡、攝家門跡、攝家、華族、大臣家、閑院家、花山院家、中御門家、日野家、其の他十數家の各員數、及び當主の名等を列記せしものにして、寬政七年乙卯〔二四五五〕の現在を示す。

うんじやうめいらんたいぜん

雲上明覽大全 二卷

帝室、皇族、公卿等の世系、氏族、紋所等を記述したるもの。其の序に曰く、「此書也集二帝王錄、紹運錄、大系圖等諸書一要二其煩一而約レ之。凡宗藩之所レ分氏族之所レ出、世系門地繼述而不レ紊、類聚而不レ淆、可レ謂レ得二其要一者上矣」云々と。天保八年丁酉〔二四九七〕季秋之れを作れり。編者詳ならず。恐くは書肆の作ならん。

うんじやうりやくかん

雲上略鑑 寫本一卷

元龜二年辛未〔二二三一〕御降誕の後陽成天皇より、中御門天皇の皇子皇女に至る御歷代の系譜を掲げまつれるものなり。

うんづせう

雲圖抄 寫本二卷 藤原 朝隆

年中公事の圖抄なり。上卷は正月より十二月までを記して各繪圖を附せり。下卷には內侍所御神樂、五節等の事を記す。永曆元年庚辰〔一八二〇〕藤原爲親、及び嘉應二年庚寅〔一八三〇〕藤原親雅の奧書あり。本書或は星雲圖抄といふ。

◉藤原朝隆は有職家にして、時に大納言たり。著書は本書の外に、仙洞年中行事あり。

うんぴやうざつし

雲萍雜誌 四卷 柳澤 里恭

著者が積年の隨聞漫錄を撮取補訂して成せるものなり。蘼蕪堂主人恭の序中に、「其平生隨レ聞所レ錄、積レ年重レ日二十餘卷、多是勸懲之話說也。手澤之本、遂爲二予藏弆一。頃、中井某者撮二其旨要一補二其缺略一題曰二雲萍一。予曾每二閑暇一寓レ目如レ對二其人一焉」と云へり。其の出來を知るべし。天保十四年癸卯〔二五〇三〕刊行す。

◉柳澤里恭は淇園、竹溪、又、玉桂等の號あり。通稱を權大夫といふ。大和國郡山藩の老臣なり。性磊落にして交際を好み、才文武を兼ねて諸技に通ず。最も繪畫を善くし、元明の古蹟を模寫し、切磋研究遂に一家を爲す。寶曆八年戊寅〔二四一八〕九月歿す。享年未だ詳ならず。

うんぽいろはしふ

運歩色葉集 寫本四卷

いろはの順に、諸種の言語を輯集したる辭彙なり。詞には漢語及び國語ありて最も普通の類語より撰集せり。第一は以より利に、第二は奴より久に、第三は屋より由に、第四は兒より須に至る。往々漢文にて短註を加へたるもあり。末に魚鳥獸蟲花木草花等の名詞を列擧せり。文中によれば、天文十七年戊申〔二二〇八〕の作なること知らる。

うんやうし

雲陽志 寫本二十五册 黑澤 長尙

出雲國の地誌。島根郡松江府城を先として、島根、意宇、能儀、大原、仁多、秋鹿、楯縫、出雲、神門、飯石の十郡を分ち、各村里に依て、名所、舊蹟、神社、佛閣等を雜載す。原元琪といふもの、序に據れば、「先君綱近、黑澤長顯、齋藤豐仙をして、雲志を輯錄せしむ。未だ就ずして卒す。時に享保丁酉〔二三七七〕なり。嗣宣澄襲て黑澤長尙に命じてこれを撰しむ」といへり。

◉黑澤長尙は出雲國島根郡松江の人にして、松平出羽守宣澄に仕へたり。

うんゆうこうろく

雲遊後錄 三卷 關 赤城

著者の漢文に物せる紀行文集なり。北陸紀行に始りて、中山道紀行に終る。凡そ數十編あり。光格天皇の享和元年辛酉〔二四六一〕の序跋を附して同年新鐫す。

うんゆうぶんゐ

雲遊文蔚 五卷 僧 大任

第一卷に發江戶經東海道至伊勢紀行、金明谿記、行者巖記、鳳來寺記、豐河記、勢中遊記。第二卷に伊勢經伊賀至山城紀行、笠置山記、南都戒壇院佛蹟若遊摩寺說、遊金峯記、紀野山經和歌浦至和泉紀行。第三卷、四卷、五卷に信遊經左海至大阪紀行詩及雜文等を輯錄せり。自序及び寬政十二年庚申〔二四六〇〕源忠道の序、享和元年辛酉僧智賢の序、根經世の跋等あり。

◉大任は江戶瑞泉寺の住職にして、瑞庵と號したり。

ゑ

ゑいえふわかしふ
榮葉和歌集　寫本九卷　烏丸　光榮

著者の家集。榮葉の名は敕によりて號けたる由、光祖の眞字の跋に見えたり。最初に四季、戀、雜と順序して、奥に百首を撰定す。

◉烏丸光榮は歌人なり。姓は藤原氏、左中辨宣定の子なり。夙に才學を以て諸職に昇轉し、遂に内大臣に至れり。

ゑいかいつたい
詠歌一體　一卷 ・ 冷泉　爲家

詠歌に關する諸般の注意を述べたるもの。例へば此の頃人の詠み出したらん言葉、さらさらよむべからず。二物の歌好みよむべからず。詩の心好みよむべからず。造立華飾の言葉よむべからず。古き歌の風情をとるは見苦しきことなり等。凡そ三十項ばかり、例を引きて其の瑕疵を指摘せり。大永二年壬午〔二一八二〕なる僧堯空の奥書あり。曰く、「此小册馳二惡筆一與二齋藤宗甫一。宗甫者知己四十年來。而今予衰老不レ知二旦暮一。他日爲陳蹟披之者、須レ令二哀憐一而巳」と。『群書類從』卷二百九十二、和歌部第百四十七に收む。

◉冷泉爲家の傳記は『續後撰和歌集』の下に出づ。

えいがくえうき
叡岳要記　寫本二卷

叡山開基以來の事實を記載したるものなり。卽ち上下二卷に分ち、上卷には、傳教大師官符等の事、十六院の事、延暦寺緣起寺號の宣旨、唐土の天台山、文殊堂、經藏、神宮寺等の事を記し、下卷には、釋迦堂、西塔院、慈惠大師、智證大師、弘法大師、義眞和尚等の事を載す。

ゑいがせんしゆ
榮雅千首　寫本二卷　飛鳥井雅親

著者の詠歌にて、卽ち春の歌二百、夏の歌一百、秋の歌二百、冬の歌一百、戀の歌二百、雜の歌二百首等凡て千題千首より成る。『續群書類從』卷三百七十八九の二卷、和歌部第十四に收む。

◉飛鳥井雅親の傳は『亞槐和歌集』の下に出づ。

ゑいかたいがいせう
詠歌大概抄　二卷　細川　幽齋

詠歌の法則注意等を記したるもの。成書の由來に就きて奥書に云へるは、「久我亞相此の抄を講ずべきの由仰られしを、憚りなきにしもあらねば、いなび申せしに、強て度々になりしかば、尊命背き難く、三光院内府、先年御講釋の時の聞書、箱の底に取り置しをえらび出でてかたのやうにかき集め、二册となし侍りぬ」と。天正十六年戊子〔二二四八〕の作なり。

◉細川幽齋の傳は『伊勢物語闕疑抄』の下にあり。

ゑいかたいほん
詠歌大本　寫本五卷

詠歌上要用なる諸件の注意を記したるものなり。廣澤長孝より、門人風觀齋長雅に傳へたる詠歌法の口傳等ありて、間々近代の名歌を引例とす。

ゑいかのたいがい
詠歌之大概　寫本一卷　藤原　定家

作歌法の大略を記述す。當時後鳥羽院の御子尊快親王、卽ち梶井宮より詠歌の法を諮問せられたるにより、本書を作り奉れりとなり。先づ人情と歌との關係等より說き起し、歌の意、歌の形等に及び、深く其の理を說き、廣く其の實を示し、他家他流とも比較對照して、一家特獨の流義を發揮す。

◉藤原定家の傳記は『拾遺愚草』の下に揭ぐ。

ゑいきうぐわんねんのき
永久元年記　一卷

鳥羽天皇の永久元年癸巳〔一七七三〕閏三月二十日より、同年六月十八日に至る朝廷の略記事なり。『群書類從』卷四百五十三、雜部第八に收む。

ゑいきうにねんしらかはみだうくやうき
永久二年白河御堂供養記　寫本一卷

鳥羽天皇の永久二年甲午〔一七七四〕白河御堂に於て供養ありし時の記事なることは名の示すが如し。『續群書類從』七百八十一の卷、釋家部第六十六にあり。

ゑいきうよねんひやくしゆ
永久四年百首　一卷

永久四年丙申〔一七七六〕十二月廿日の會に行へるものなり。一名を「次郞百首」とも號す。作者は源顯仲、藤原仲實、源忠房、源兼昌、皇后宮女房常陸、六條院女房大進等にして、四季戀雜凡て數百首より成る。『群書類從』卷百六十八、和歌部第廿三に收む。

ゑいきうよねんろくでうさいしやうさねゆきけうたあはせ
永久四年六條宰相實行家歌合　一卷

永久四年丙申〔一七七六〕六月四日南六條泉亭に於て行ひたる歌合なり。歌人は俊賴、實能、家信、爲忠、兼能、浦風、仲實、雅定、顯輔、道經、其の他等、都合十五番より成る。『群書類從』卷百八十二に收む。

ゑいきやうらいごばんちやう
永享以來御番帳　一卷

後花園天皇の永享より、後土御門天皇の文正文明年間に至る、將軍相伴供衆の順番帳なり。『群書類從』卷五百十一、雜部第六十六に收む。

ゑいきやうき
永享記　寫本一卷

後花園天皇の永享八年丙辰〔二〇九六〕の頃より、同長祿元年丁丑〔二一一七〕頃に及べる戰記なり。公方管領不和の事、三浦介逆心の事、持氏鎌倉へ歸る事附鎌倉合戰の事、持氏出家並滋直以下自害の事、持氏滿貞最期の事、憲實出家の事、結城籠城の事、村岡合戰の事、結城落城の事、成氏の事、堀越御所下向の事、京都軍の事、古河城の事等の目より成る。『續群書類從』卷五百七十五、合戰部第五にあり。

ゑいきやうぎやうかうのき
永享行幸記　一卷

後花園天皇の永享年中に、普廣院御所へ行幸あらせられたる時の詳細記事なり。御道筋を始めとして供奉、諸式、還御のことを記せり。

ゑいきやうくねんじふぐわつにじふいちにちぎやうかうき
永享九年十月廿一日行幸記　寫本一卷

後花園天皇の永享九年丁巳〔二〇九七〕十月二十一日御方違の爲め室町亭へ行幸ありし時の記事。『續群書類從』卷八十四、帝王部第三にあり。

ゑいきやうぐわんねんげくうやまぐちまつりのき
永享元年外宮山口祭記　寫本一卷

後花園天皇の永享元年己酉〔二〇八九〕十一月二十日に於ける外宮山口祭の記事なる事名の如くなれど、以下同二年三年と順次八年二月九日の祭禮記事までを揭げたり。『續群書類從』卷九、神祇部第九に收む。

ゑいきやうこうき
永享後記　寫本一卷

永享の末、關東將軍管領の不和より、遂に持氏義久滅亡、春王安王日光に逃るゝより、以下康正元年乙亥〔二一一五〕十月、岡部羽繼原合戰の顚末等、「永享記」につぎて物したる軍記なり。『續群書類從』卷五百七十六、合戰部第六に入る。

ゑいきやうじふいちねんまんだらぐき
永享十一年曼荼羅供記　寫本一卷

後花園天皇の永享十一年己未〔二〇九九〕十月十九日、後小松院七回の聖忌にて、安樂光院に曼荼羅法會を行せられたる時の雜記なり。『續群書類從』卷七百六十五の卷、釋家部第五十に收めたり。

ゑいきやうじふにねんじんぐうぶつきりやう
永享十二年神宮服忌令　寫本一卷

後花園天皇の永享十二年庚申〔二一〇〇〕に定めたる大神宮の服忌令なること名の如し。僅に三枚、『續群書類從』卷八十に收めたり。

ゑいきやうじふにねんまんだらぐざつき
永享十二年曼荼羅供雜記　寫本一卷

永享十二年庚申〔二一〇〇〕七月二十日、普院稱光院十三回の聖忌にて、法事を安樂光院に行せらる。本書は其の雜事を記錄したるものなり。『續群書類從』卷七百六十六、釋家部第五十一に收む。

ゑいきやうじふねんいはしみづはうじやうゑのき
永享十年石淸水放生會記　寫本一卷　中原　康富

永享十年戊午〔二〇九八〕八月十五日、將軍石淸水八幡宮へ參詣の時の記事なり。『續群書類從』卷三十二に收む。

◉中原康富の傳は『康富記』の下にあり。

ゑいきやうにねんだいじやうゑのき

永享二年大嘗會記　寫本　一卷　中原　康富

後花園天皇の永享二年庚戌〔二〇九〇〕十一月十八日より、同二十二日までに行はれたる大嘗會の儀式、及び其れに附隨せる雜件まで詳に記載したるものなり。

◉中原康富の傳は『康富記』の下にあり。

ゑいきやうよねんいはしみづぎやうかうぎやうれつ

永享四年石淸水行幸行列　寫本　一卷

後花園天皇の永享四年壬子〔二〇九二〕三月二十三日、行幸の供奉人數其の他等を記錄したるものなり。『續群書類從』卷八十四、帝王部第三にあり。

ゑいきやうろくねんごしちにちごしゆほふき

永享六年後七日御修法記　寫本　一卷

後花園天皇の永享六年癸丑〔二〇九四〕禪信僧正後七日の修法ありし時の記事なること名の示すが如し。『續群書類從』七百廿二の卷、釋家部第七にあり。

ゑいきよくさうしようしだい

郢曲相承次第　寫本　一卷

宇多天皇第八の皇子式部卿敦實親王を、源家音曲の元祖として、參議有賴に至る系統なり。『續群書類從』卷五百三十三、管絃部第七にあり。

ゑいきよくせう

郢曲抄　一卷

郢曲音樂のことにつきて辨說したるもの。神樂、今樣、催馬樂、足柄、片下、田歌等と比量して、其の音律聲調等のことを云へり。『群書類從』第三百五十の卷、管絃部第十に收む。

ゑいきよくせんえう

郢曲撰要　寫本　十八卷　僧　明空

郢曲の集『當道宴曲集』五卷、『宴曲抄』三卷、『眞曲抄』一卷、『究百集』一卷を合集したるものなり。總論に曰く、「夫れ當道の郢曲は、幼童の口にすさび、萬人の耳にさへぎる類、樣々多しと雖も、愚老が撰び集むる曲、凡て其の軸十卷を定め、其の歌百の數を極む。此の中二十餘首は愚作の外なり。卽ち其の作者の名字をたどるたどる記す。是れ或は貴命により、或はうたゝ聞き及ぶところ耳にとゞまり、故ある品をさきとして、部部の弄び、巻の說をも嫌はざれば、定めてあやまりもあり、本說も覺束なく浮けること多くして後のそしり遁れ難かるべし」云々と。而して集むるところの曲中、各作者の名を擧げ、著者調曲の事を記せり。正安三年辛丑〔一九六一〕八月上旬の撰。

◉明空は後伏見院の御宇の人、詳傳は知り難し。

ゑいきよくひせう

郢曲祕抄　寫本　一卷

郢曲書中より、小忌に關する事を抄出圖說したる僅三枚の寫本なり。

ゑいきんりつ

律令衞禁律　一卷

法律制度の書なり。明和四年丁亥〔二四二七〕阿波國美馬郡の人源元寬の校正するところなり。其の詞によれば、淡海藤文忠の撰にて、僅に十四條存せる由なり。

ゑいぐわせんく

榮華千句　一册

俳諧千句集なり。何人が何時編輯したるかを詳にせず。

ゑいぐわものがたり

榮花物語　四十一卷

宇多天皇の寬平年間より、堀河天皇の寬治六年壬申〔一七五二〕に至る、凡そ二百餘年間の雜史なり。就中御堂關白藤原道長の榮華を主として筆記せるより、「榮花物語」とは名付たる物なるらし。物語といへども、伊勢物語、源氏物語と異りて、全く當時の事績を記したる一の事實史なり。明曆二年丙申〔二三一六〕刊行せらる。本書の著者に就きては或は赤染衞門といひ、或は藤原爲業といへれど、何れも定かならず。賀茂眞淵は、後人が其の時の日記など集めて書きたりしものならんと云へり。四十一卷の中一卷は目錄系圖等なり。本書は『國史大系』の第十五卷にも收めたり。該書は、大澤淸臣氏校本小中村淸矩氏校本及び帝國圖書館本、史籍集覽本等を以て、活字本に增訂を加へたるものといふ。但し第二十五卷以下は校合の機會を得で僅に史籍集覽本を參考したるに過ぎずといへり。又、近年和田英松、佐藤球兩氏の『榮華物語詳解』あり。字句文意を解說すること詳明なり。唯一の參考書たるべし。

ゑいぐわものがたりかう

榮花物語考　寫本　一卷　安藤　爲章

榮花物語の作者に就きて考究したるものなり。卷首に曰く、「作者を赤染衞門といひ傳へて誰も疑はず。或本に目錄系圖一卷を添へて、其の端に赤染衞門之れを記すとあり、今、精しく全書を讀み、且、赤染家集紫式部日記など考へ合するに、決して赤染が撰にあらず。思ふに堀河院より後の男子の手に出でて、古き實錄又は赤染紫以下諸才女の日記家集などより拔き集め、女の筆にして、かく作れるものと見ゆ」云々とて、幾多の例を引きて考證せり。

◉安藤爲章の傳記は『年山紀聞』の下に出す。

ゑいぐわものがたりけいづ

榮花物語系圖　寫本　一卷

榮華物語中にある人物を列擧して、皆朱線を以て系圖關係を示し、更に原書の所在をも示したるものなり。卷末に奥書あり。「此物語のうちに、其の名あまた侍れど、そよそれとしらでも聞ゆるはもらしぬ。おろかなる女のしいだせる事なれば、こうせいの口をあはせがたきのみ」といへり。其の女人の作なること知るべし。

ゑいぐわものがたりばつすゐ

榮花物語拔萃　九卷

榮花物語の或る節々を拔出したるものなり。服部南郭の父延歌師某の物したるものなりといふ。其の跋に、「卷毎におかしきふし、又、世のためしにもと思ふところぐを書き集めて座右にし侍りぬ。心をとりて詞を改むるに非ず。うたがひ御賀などは卷ながらに載するものならじ」云々と云へり。首卷には系圖を揭げたり。

ゑいぐわものがたりもくろく

榮華物語目錄　寫本　一卷

榮華物語の第一月宴、第二花山、第三樣々の悅、第四みはてぬ夢、第五浦々の別、第六かゝやく藤壺、第七鳥部野、第八初花、第九岩陰、第十日陰の鬘、第十一つぼみ花、第十二玉の村菊、第十三木綿四手、第十四淺綠、第十五疑、第十六本の雫、第十七音樂、第十八玉臺、第十九御着裳、第二十御賀、第二十一後悔大將、第二十二鳥舞、第二十三駒競、第二十四若枝、第二十五峯月、第二十六楚王夢、第二十七衣珠、第二十八若水、第二十九玉飾、第三十鶴林、第三十一殿上花見、第三十二歌合、第三十三きるはわびし、第三十四暁待星、第三十五蛛振舞、第三十六根合、第三十七煙後、第三十八松のしづへ、第三十九布引瀧、第四十紫野、以上の綱の下に尚幾多の數目を擧げたり。

ゑいぐわよつぎをとこ

榮花世繼男　五卷

一人の男が女護島に渡りて遭遇せる種々の經歷を述べたり。淫猥にして讀むべからず。安永二年癸巳〔二四三三〕に刊行せり。

ゑいざんでんくわうろく

瑩山傳光錄　三卷　僧　瑩山

能登國總持寺の開祖瑩山和尙の法語を編輯したるもの。正安二年庚子〔一九六〇〕以後の說演に係り、釋迦より第五十二祖永平懷弉和尙に至るまでの禪家各祖の敎語を擧げて、更に其の幽旨を發揮し、各祖の德行を贊揚せり。永平寺の開祖道元禪師の『正法眼藏』と相對すべき禪林の珍籍なり。

◉瑩山の傳記は『坐禪用心記』の下にあり。

ゑいし

詠史　一卷　羽倉　用九

秦漢以下の人物を詠じたる百餘首の詩集なり。末に文久二年壬戌〔二五二二〕北越笠松謙の評あり。

◉羽倉用九の傳記は『簡堂叢書』の下にあり。

ゑいしかしふ

詠史歌集　二卷　長澤　伴雄

史蹟、人物を詠じたる歌集なり。嘉永五年壬子〔二五一二〕無名氏の序あり。同六年に刊行す。

◉長澤伴雄の傳は『挫夷本論』の下にあり。

ゑいじつき

永日記　寫本　一册

慶長以來の武士の美談を記したるものなり。「永日記」と號したる所以は、卷首に、此の書は永井日向守直淸の筆記なる故、永日記と號せる由を記せり。文中に據れば永井直淸の談話を他人の筆記せしものと思はる。

ゑいしひやくぜつ

詠史百絕　一卷　小林　至靜

題名の如く、史傳を詠じたる絶句詩集なり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕林皝の序、同十四年、佐久間啓の序、川田剛の跋あり。

ゑいしやういらいぐうじひきつけ
永正以來宮司引付　寫本一卷

後柏原天皇の永正〔紀元二千百六十年代〕以來、正親町天皇の天正〔二千二百三十年代〕年間に至る伊勢太神宮に於ける時々の記事なり。『續群書類從』卷二十三、神祇部第二十三に收む。

ゑいしやうき
永昌記　寫本十卷　藤原爲隆

朝廷の式會、廷臣の參觀等に關する日記にして、第一卷には堀川天皇の長治二年乙酉〔一七六五〕正月、第二卷は長治三年丙戌四月、第三卷は嘉承元年丙戌〔一七六六〕七月、第四卷は同年十二月、第五卷は二年四月、第六卷は天永元年庚寅〔一七七〇〕三月、第七卷は同二年の七月、及び十月、保安三年壬寅〔一七八二〕十二月、第八卷は天治元年甲辰〔一七八四〕四五六の三箇月、第九卷は大治元年丙午〔一七八六〕一二三の三箇月、第十卷は同四年七月、及び閏七月の日記を載せたり、卷によりて、文安元年甲子〔二一〇四〕寫、或は承安二年壬辰〔一八三二〕寫等の奧書あり。

⦿藤原爲隆は參議爲房の子、延久二年庚戌〔一七三〇〕に生る。性硯直にして器宇最も偶儻なり、白河堀河兩帝に仕へて功あり。遂に參議となり、左大辨となり、從三位に敍せらる。大治五年庚戌〔一八九〇〕年六十一にて歿す。

ゑいしやうき
永正記　寫本二卷

假服、觸穢、禁忌、火物等の神事に關する制規を記したるもの。上卷には內外親族假服事、夫婦假服有無事、閏月禁忌事、觸穢日數事、籠僧等禁忌事、喪家事、掘墓穢事、生産穢事、雜穢三十二箇條、忌火物事、其の他十數項あり。下卷には「神明遺敕並朝家惡草及兩宮規範往昔之例當時之儀」凡そ百二十箇條を擧ぐ。以て本書の概略を知るに足るべし。永正十年癸酉〔二一七三〕二月九日、古來相傳の記錄を增註せしものなるが故に、「永正記」と名くるよし奧書に見ゆ。

ゑいしやうきやうかあはせ
永正狂歌合　一卷

後柏原天皇の永正五年戊辰〔二一六八〕正月二日に於ける狂歌合なり。都合左右十番より成る。『群書類從』卷五百〇四、雜部第五十九に收む。

ゑいしやうくねんわかみやごげんぶくき
永正九年若宮御元服記　寫本一卷　中原師象

後柏原天皇の永正九年壬申〔二一七二〕四月二十六日若宮〔後奈良院〕御元服當日の次第を詳記したるものなり。奧書に、「右永正御元服記一卷者、中原師象朝臣之筆、持明院基春卿奧書也」とあり。『續群書類從』卷二百九十六、公事部第四十九に收む。

ゑいしやうごねんしやうぐんせんげしだい
永正五年將軍宣下次第　寫本一卷

後柏原天皇の永正五年戊辰〔二一六八〕今年大內義興、義植を奉じて京師に入り、義植復將軍となる。本書は當時の宣下次第を記したり。『續群書類從』六百五十七の卷、武家部第三にあり。

ゑいしやうしちねんき
永正七年記　寫本一卷

後柏原天皇の永正七年庚午〔二一七〇〕の正月二十五日より、同十月九日に至る略日記なり。朝廷に關すること、諸國武將に關する事等を記す。記者の名を缺きたれども、恐くは醍醐院門跡の徒の記しゝものならんといふ。『續群書類從』卷八百六十八、雜部第十八にあり。

ゑいしやうじふごねんちうだうくやうのき
永正十五年中堂供養記　一卷

後柏原天皇の永正十五年戊寅〔二一七八〕延暦寺中堂に於ける供養式のことを最も詳しく記したるなり。『群書類從』卷四百四十一、釋家部第十七に收む。

ゑいしやうじふはちねんかうやさんせうしつのき
永正十八年高野山燒失記　一卷

名の如く後柏原天皇の永正十八年辛巳〔二一八一〕二月十二日同山の燒失したる景況を漢文にて記したるもの。『群書類從』卷四百四十二、釋家部第十八にあり。

ゑいしようごねんさんじふばんうたあはせ
永承五年三十番歌合　寫本一卷

永承五年庚寅〔一七一〇〕六月五日賀陽院一宮祐子

內親王の御方に於て、和歌合せあり、關白賴通男女各六人を分ち、櫻、郭公、鹿の題にてよめる三十番歌合なり。寛正二年辛巳〔二一二一〕七月十八日東常緣の寫本奧書、その他の奧書あり。

ゑいしようぶかん
榮松武鑑　寫本三十卷

松平家忠に關する記錄なり。卷首に松平略系を揭げ、永正三年丙寅〔二一六六〕清康誕生より德川家創業の事績を編年體に記し、第一卷より第二十五卷迄は全く松平與右衛門忠冬が增補追加せし家忠日記と同じく却りて節約せし所あり。第二十六卷元和二年丙辰〔二二七六〕六月より第三十卷まで記述の體例前と同じけれども體例稍劣れる所あり。記述も亦簡に失せり。然れども採るべき節少からず。

ゑいしようろくねんじしんしあはせ
永承六年侍臣詩合　一卷

後冷泉天皇、永承六年辛卯〔一七一一〕三月二十七日、侍臣八人に命じて詩を作らしむ。律詩八首より成る。作者は師基、經信、資經、正家、憲房、師家、隆俊、資仲等。『群書類從』卷百三十四に收む。

ゑいじよはふしんわうき
永助法親王記　寫本一卷　永助法親王

應永八年辛巳〔二〇六一〕十月、同九年五月、同十年正月の日記なり。

ゑいせいひえうせう
衛生祕要鈔　寫本一卷　藤原公衡

部契、居處、臥起、眼目、言語、沐浴、服用、厨膳、月食禁、夜食禁、不多食物、合食禁、酒德、酒失、醉後禁、酒合禁、房內大體、交換名目、和志、臨御、還精、施寫、擇女、惡女相、用少女、不用一女、不交接成病、交接日時、房內禁日、房內雜忌、雜禁。以上三十一目に就き和漢の諸書を引き漢文にて說明す。正應元年戊子〔一九四八〕八月七日の記にかゝる。『續群書類從』卷九百、雜部第五十にあり。

⦿藤原公衡の傳は「管見記」の下にあり。

ゑいたいばしきようじじつき
永代橋凶事實記　寫本一卷

文化四年丁卯〔二四六七〕八月十九日、江戸永代橋の陷落に關する記錄にして、當時深川八幡祭禮の模樣、陷落の模樣、罹災者の統計、罹災者の身分姓名、罹災者に就ての雜話數十條を記せり。本書の成れるは其の翌年なり。

えいちうにんじやうき
營中刄傷記　寫本一卷

幕府營中に起りたる刄傷事件の始末を記せり。記す所、凡て七件あり。寛永五年戊辰〔二二八八〕八月十日、御目付豐島信甫が、老中井上正就を殺害せし事件を始として、天明四年甲辰〔二四四四〕三月二十四日、佐野正言が若年寄田沼意知を負傷せしめし事件に終れり。其の他追加に文政六年癸未〔二四八三〕四月二十二日、松平外記刄傷の件、外一條あり。何れも一件裁決の申渡書、其の他の記錄を出して其の情狀を詳にせり。寛政七年乙卯〔二四五五〕九月の大塚重文の序ありて、本書は其の師たる人の所記なるよし言ひぬれども其の氏名を記さず。

ゑいぢにねんしんごんゐんごしゆはふき
永治二年眞言院御修法記　寫本一卷

崇德天皇の永治二年壬戌〔一八〇二〕御修法の記事『續群書類從』七百二十一の卷、釋家部第六に收む。

ゑいちやうにねんとうたふひがしだにうたあはせ
永長二年東塔東谷歌合　一卷

堀河天皇の永長二年丁丑〔一七五七〕に於ける十二番の歌合なり。題は苗代、水雞、照射、擣衣、鷹狩、神樂等。『群書類從』卷百八十二に收む。

ゑいとくぎやうかうき
永德行幸記　寫本一卷

永德三年癸亥〔二〇四三〕足利義滿が室町の第に後圓融天皇の行幸あらせられし時の記事なり。寛永三年丙寅〔二二八六〕源通村の奧書に曰く、「官庫本を申し出し、卒に筆を馳らす。其の後燈下に於て一校し了る。件の御本上卷一册なり。求出すに隨ひて書き續くべきなり」と。官庫本とは後柏原院の御宸筆なり。林鵞峯曰く、「此の一帖稀に之れを見る然れども下卷足らず遺念少からず」と。

ゑいとくぐわんねんむろまちていみゆきしいか
永德元年室町亭幸詩歌　寫本一卷

北朝後圓融天皇の永德元年辛酉〔二〇四一〕三月十五日、室町亭に行幸ましまして、文武の英傑に詔して詩歌の華筵を開かせらる。關白藤原師嗣以下十數名の詠ずるところ十數首を載せたるものなり。

「續群書類從」卷四百廿三和歌部第五十七にあり。

ゑいとくごじやうゐぶるゐ
永德御讓位部類　寫本一卷

北朝の永德二年壬戌〔二〇四二〕四月、後圓融天皇の、後小松天皇に讓位あらせられし時の諸記錄を集む。頁賢、兼治、實時等の記中より抄出部類したるものなり。

ゑいとくじやうゐのき
永德讓位記　寫本一卷　僧　良賢

永德二年壬戌〔二〇四二〕後圓融天皇が、後小松天皇に御讓位ありし時の記なり。

◉頁賢のことは「白毫寺緣起」の下にあり。

ゑいとくにねんかすがしやせうしつのき
永德二年春日社燒失記　寫本一卷　春雄

北朝後圓融天皇の永德二年壬戌〔二〇四二〕正月二十三日、春日社燒失の記事より、後小松天皇の至德四年の遷宮迄の大略なり。同年八月三日記す。「續群書類從」卷三十五に收む。

◉春雄は若宮常住なる神殿守なりしといふ。

えいとせうろく
營莵小錄　寫本一卷

著者の和文隨筆なり。世の雜事を評論せるもの多し。文章は簡潔にして銳利なり。

ゑいにんごそくゐようと
永仁御卽位用途　一卷　安倍　親景

一名「永仁御卽位錄」の下に解題せり。彼れは單行の寫傳本、此れは「群書類從」卷九十二、公事部第十四に收むる所なり。

ゑいにんごそくゐろく
永仁御卽位錄　寫本一卷　安倍　親景

永仁六年戊戌〔一九五八〕七月、皇太子胤仁親王〔後に後伏見天皇〕が、伏見天皇の御禪を受けて、卽位し給ひたる時の注進狀なり。同年八月十五日の記にかゝる。慶長十五年庚戌〔二二七〇〕中原職忠の奧書あり。「群書類從」卷九十二、公事部第十四には「永仁御卽位用途」として揭げたり。

◉安倍親景は、當時出納左衞門少尉兼中宮屬たり。

ゑいにんごねんうたあはせ
永仁五年歌合　寫本一卷

一名「永仁五年八月十五夜歌合」の下に解題せり。彼れは群書類從本、此れは單行の寫傳本なり。

ゑいにんごねんたうざさんじふばんうたあはせ
永仁五年當座三十番歌合　一卷

伏見天皇の永仁五年丁酉〔一九五七〕の歌合なり。春日秋日、春月秋月、春風秋風、春雲秋雲、春雨秋雨、春煙秋煙、春曉秋曉、春朝秋朝、春夕秋夕、春夜秋夜。夏山冬山、夏川冬川、夏野冬野、夏岡冬岡、夏杜冬杜、夏浦冬浦、夏江冬江、夏里冬里、夏池冬池、夏庭冬庭。戀鐘、雜鐘、戀玉雜玉、戀衣雜衣、戀枕雜枕、戀莚雜莚、戀鏡雜鏡、戀燈雜燈、戀書雜書、戀船雜船、戀車雜車、等以上三十番より成る「群書類從」卷二百〇四に收む。

ゑいにんごねんはちぐわつじふごやうたあはせ
永仁五年八月十五夜歌合　一卷

伏見天皇の永仁五年丁酉〔一九五七〕八月十五日、寄月秋、寄月戀、寄月雜に就き、藤原爲成、兼行其の他の二十四番歌合。衆議判なり。「群書類從」卷二百〇四、和歌部第五十九に收む。本書は「永仁五年歌合」また「十五夜歌合」等の名にて寫傳單行せるものあり。

ゑいにんさんねんいせしんめいしよゑうたあはせ
永仁三年伊勢新名所繪歌合　一卷

櫻木里、藤波里、泉水森、河邊里、岩波里、岡本里、打越濱、關河、三津湊、大沼橋等に就き讀みたる八十番歌合にして前權大納言爲世の判するところなり。「群書類從」卷二百〇四に收む。

ゑいひやくしゆわか
詠百首和歌　寫本一卷　飛鳥井榮雅

春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀十首、雜二十首より成る。文明十一年己亥〔二一三九〕八月二十四日と末記あり。紀州玉津島の法樂百首なるべきか。

◉飛鳥井榮雅の傳記は「亞槐和歌集」の下に揭ぐ。

ゑいふくめんざんくわうろく
永福面山廣錄　二十六卷　僧　瑞芳

著者の法語遺稿を嗣法門人慧琳、祖量等の編纂したるものなり。禪完語、室印語、龍溪語、永福語、少佛事、拈古、頌古、普說、詩、偈、話贊、諸銘、序跋、考、說、辨、祭文、傳疏、號偈、歌等にて、年譜を添へ、牛庵和尙の後序あり。安永六年丁酉〔二四三七〕版行。

◉瑞芳の傳は「正法眼藏涉典錄」の下にあり。

ゑいふくもんゐんうたあはせ
永福門院歌合　寫本一卷

嘉元三年乙巳〔一九六五〕正月四日、當座二十番歌合なり。一名「嘉元三年歌合」といふ。

ゑいふくもんゐんひやくばんうたあはせ
永福門院百番歌合　一卷

「春とだに思ひもあへぬ今朝の朝け、山の霞ははやたちにけり」より、「手すさびにつけなく墨も行末は、誰かあはれと水莖の跡」に至る百番なり。「群書類從」卷二百二十一、和歌部第七十六にあり。

ゑいぶつかゐ
詠物茄彙　二卷　幸田　光隆

詠物詩集にて、上卷に五言古詩、七言古詩、五言律、五言排律。下卷に七言律、五言絕句、七言絕句、總計二百四十三首皆物品を題として詠出したるものなり。男光享の編輯する所にして、安永九年庚子〔二四四〇〕片猷の序、同八年細合離の序あり。

ゑいへいかうそぎやうじやうき
永平高祖行狀記　二卷　僧　珍牛

越前永平寺の開祖道元禪師の誕生より示寂に至るまで、一代化導の有樣を、圖を入れ俗言を以て記せり。文化五年戊辰〔二四六八〕の著なり。

ゑいへいかうそざぜんぎ
永平高祖坐禪儀　一卷　僧　道元

著者が山城國宇治の興聖寺に住山中、安身調息等、坐禪に關する工夫要儀を述べたるものなり。全文七百四十三字の短文なれど、其の意深長にして、又三根に通じ易し。

◉道元の傳記は「正法眼藏」の下にあり。

ゑいへいかくん
永平家訓　二卷　僧　道元

永平廣錄中より拔出せる訓誡にて、發心出家訓、佛祖正宗訓、諦信因果訓、通途修正訓、棟辨邪見訓、正傳三昧訓、格外玄旨訓、知恩報恩訓の八章より成る。元文三年戊午〔二三九八〕僧瑞芳の編輯するところなり。

◉道元の傳記は「正法眼藏」の下にあり。

ゑいへいくわうろく
永平廣錄　十卷　僧　道元

著者の垂範教訓の、興聖寺、大佛寺、永平寺に於ける語錄を蒐集したるものにて、卷一に興聖寺語錄を收め、卷二に大佛寺語錄を收め、卷三以下卷十までに永平寺語錄を收めたり。皆一宗の尊崇するところなり。

◉道元の傳は「正法眼藏」の下にあり。

ゑいへいげんわじやうじゆご
永平元和尙頌古　一卷　僧　道元

永平廣錄中の偈頌を別行したるものにて、曹洞宗永平寺の開祖道元禪師の偈頌を集めたるものなり。卽ち支那禪門古德の教語を揭げ、之れに對する道元禪師の贊偈を擧げたり。通計九十則、頌百〇二首、皆是れ禪機活躍、禪家の眞面目を道破せるものならざるはなし。本書は侍者詮慧等の編集せしものより抄出して仁孝天皇の文政十年丁亥〔二四八七〕正月に印刻せしなり。「縮刷藏經」霜帙第八に收めらる。

◉道元の傳は「正法眼藏」の下にあり。

えいへいじちじしんき
永平寺知事清規　一卷　僧　道元

此の書は「永平道元禪師清規」の一部なり。知事は寺中の職事にして、淸規は服務規律の意なるべし。卽ち叢林の重役六知事を敎へたるなり。寬元四年丙午〔一九〇六〕夏六月十五日の作述に係る。

◉僧道元の傳記は「正法眼藏」の下にあり。

ゑいへいしよそがくだうようじんしふ
永平初祖學道用心集　一卷　僧　道元

本邦曹洞宗の初祖永平寺道元禪師法孫の爲參禪學道に就ての敎訓書なり。第一可發菩提心事、第二見聞正法必可修習事、第三佛道必依行可證入事、第四用有所得心不可修佛法事、第五參禪學道可求正師事、第六參禪可知事、第七修行佛法欣求出離人須參禪事、第八禪僧行履事、第九可向道修行事、第十直下承當事等以上十章より成れり、禪學修行上の金科なり。延文二年丁酉年開版す。

◉道元の傳記は『正法眼藏』の下にあり。

ゑいへいせうしんき
永平小清規　三卷　僧　宏振
佛祖の威儀、行持等を記したるもの、入事、祖翠、上堂、日々勤行、佛祖忌日行法、茶禮、僧衆、進退に關すること等の規則を納叙し、及び合掌法、問訊法、揖法、互跪法、長跪法、禮拜法、諷誦法、經行法、濾水法、淨髮法、入浴法、用手巾、嚼楊枝並洗面法、登厠並洗淨法等佛祖の威儀に關するものを錄す。文化二年乙丑〔二四六五〕八月の版。著者宏振は越前永平寺の住職なり。

ゑいへいぜんじきねんろく
永平禪師紀年錄　一卷　僧　因光
曹洞宗祖道元禪師の誕辰より、發心出家、研學修行のこと、宋に入て天童山如淨禪師に參學問法したること、朝に歸て一宗を開きたること等より、其の入滅に至るまでの行狀を詳記す。延寶六年戊午〔二三三八〕孟春版す。著者因光は越前永平寺の住職なるが今、其の詳傳を得ず。

ゑいへいだうげんぜんじしんき
永平道元禪師清規　二卷　僧　道元
法孫の爲めに訓誡せるものにて、典座教訓、辨道法、赴粥飯法、衆寮清規、對大已法、知事清規等の章より成る。而して典座教訓は典座の一職、衆僧の調食に關する事を教へ、辨道法は撥禪參玄の衲僧に參學の作法を示し、赴粥飯法は衆僧の爲食に就き信施を重じ自他觀念すべきを說き、衆寮清規は古教照心の道場に於ける規則を述べ、對大已法は衲僧修行中の法臘を重じ上座を尊ぶべきを云ひ、知事清規は叢林の重役六知事を敎へたるものなり。寛元四年丙午〔一九〇六〕六月十五日の作。寛文七年丁未〔二三二七〕永平光紹禪師の刻するところ磨滅して今、世に流布するものは寛政六年甲寅〔二四五四〕永平宏振師の再版にかゝるものなり。
◉道元の傳記は『正法眼藏』の下にあり。

ゑいぼこうへん
永慕後編　二卷　熊坂　邦
前編〔本書の次に解題す〕に繼ぎて諸家寄贈の詩を集めたるものなり。享和元年辛酉〔二四六一〕の自序あり。
◉熊坂邦の傳記は、次の『永慕編』を見るべし。

ゑいぼへん
永慕編　一卷　熊坂　邦
撰者の父定昭の詩を主とし、一家の詩を集めたるものにして、定昭の行狀墓碣銘等をも載せたり。永慕と名くる所以知るべし。〔本書に後編あり。前に解題す。〕天明八年戊申〔二四四八〕赤松鴻の序、同七年丁未の自序あり。
◉熊坂邦は元文四年己未〔二三九九〕に生る。奧州伊達高子村の人、字は子彥、台州と號す。享和三年癸亥〔二四六三〕年六十五にて歿せり。

ゑいほんざう
詠本草　寫本　一册
動植物を圖解したるものにして、其の數凡て四十八品あり。年代、著者共に詳ならず。

ゑいまんにねんちうぐうのすけしげいへあそんけうたあはせ
永萬二年中宮亮重家朝臣家歌合　一卷
二條天皇の永萬二年丙戌〔一八二六〕花、郭公、月、雪、戀の題につき、實國、隆季、以下二十餘名の歌合なり。『群書類從』卷百八十五にあり。

えいめいろく
英明錄　寫本　十卷
德川八代將軍有德院吉宗の一代言行を詳記したるもの。學德、武備、放鷹、技藝等の事、善行嘉言等を詳記せり。十卷十册に寫傳す。

ゑいりのうかくわんかう
繪入農家貫行　二卷　篋　豐昌
後に解題せる『農家貫行』を繪入本に作りたるものなり。元文元年丙辰〔二三九六〕の著にかゝる。
◉篋豐昌の傳は『農家貫行』の下にあり。

ゑいりやくぐわんねんきよすけあそんうたあはせ
永曆元年清輔朝臣歌合　一卷
永曆元年庚辰〔一八二〇〕七月、太皇太后宮大進清輔朝臣の家に行へる歌合なり。歌人は清輔、俊惠、雅重、顯照、惡盛、空仁、家基、敦賴、太輔、師光、資隆、賴輔、公朝、祐盛等にして、題は露二、梅四、櫻二、時鳥二、織女五、月四、紅葉二、雪二、戀六、述懷

六より成る。『群書類從』卷百八十四に收む。

ゑいろくいらいだいじき
永祿以來大事記　寫本　一卷　林　恕
永祿元年戊午〔二二一八〕三好長慶、松永久秀反を謀り、將軍義輝、管領晴元沒落して江州朽木村に入れることより、明曆四年戊戌〔二三一八〕二月二十八日、松平隱岐守定行、永井信濃守尙政等、許を得て致仕する事に至る略記事なり。明曆四年三月朔日の奧書に、「右一册、因二稻葉美濃守正則求一而、自二永祿元年一至二今年一可二百年一之間、抄二出事績之大者一以贈レ之」とあり。『續群書類從』卷八百六十二、雜部十二に收む。
◉林恕の傳は『本朝通鑑』の下にあり。

ゑいろくいらいねんだいき
永祿以來年代記　寫本　一卷
正親町天皇の永祿五年壬戌〔二二二二〕三月より、同天皇の天正十三年乙酉〔二二四五〕十一月二十九日に至る略記なり。『續群書類從』卷八百六十二雜部第十二に收む。

ゑいろくおぼえがき
永祿覺書　寫本　一卷　長谷小兵衞
德川家康、及び其の家臣に關する記錄なり。初に家忠日記を引き、久野氏知行高、永祿十一年戊辰〔二二二八〕家康より、久野氏に與へし書附等を記し、「長谷小兵衞撰」之」とあり。次に「權現樣濱松御在城記」と題して家康一代の經歷を略記し、延寶八年庚申〔二三四〇〕までの年記をも記し、次に「遠州へ始て御進發の覺」と題し、甲斐信濃を自領となせし事どもを記せり。

ゑいろくき
永祿記　一卷
正親町天皇の永祿年中に於ける將軍家、管領、其の外天下に權威を奮ふ人々の事を拔截したるものなり。『群書類從』卷三百七十八、合戰部第十に收む。

ゑいろくぐわんねんまんだらぐざつき
永祿元年曼荼羅供雜記　寫本　一卷
正親町天皇の永祿元年戊午〔二二一八〕四月七日、後柏原院三回の聖忌にて、般舟三昧院に曼荼羅法會を行れたる時の雜記なり。『續群書類從』七百六十六の卷、釋家部第五十一にあり。

ゑいろくごねんいちじようだにきよくすゐのえんしいか
永祿五年一乘谷曲水宴詩歌　寫本　一卷
正親町天皇の永祿五年壬戌〔二二二二〕八月二十一日、一乘谷に於て曲水宴を開きたる時の詩歌三十餘首を載せたるもの。『續群書類從』卷四百二十二、和歌部第五十七にあり。

ゑいろくさいじき
永祿細事記　寫本　三卷
足利十四代幕府源義照の時の日記にして、永祿十一年戊寅〔二三五八〕正月十一日より、同十二年己巳十一月十三日までの幕府の大小事を記す。『假修叢書二集』卷十八、十九、二十に收む。

ゑいろくじふねんおうたひはじめのちやう
永祿十年御謠初之帳　寫本　一册
正親町天皇の永祿十年丁卯〔二二二七〕行はれたる御謠初めのことを記したるものなり。諸大名諸役人、肩衣を脫きて猿樂者に與へし人々の姓名を記し、且、肩衣にかへて與へたる靑銅の額を夫々記す。

ゑいろくろくねんしよやくにんづけ
永祿六年諸役人附　一卷
正親町天皇の永祿六年癸亥〔二二二三〕中、御供衆、御部屋衆、申次、外樣詰衆以下等の役割を記したるもの『群書類從』卷五百十一、雜部六十六にも收む。

ゑいろくろくねんせんく
永祿六年千句　寫本　一卷　里村　紹巴
永祿六年癸亥〔二二二三〕十二月、紹巴三十九歲の時の獨吟千句の連歌なり。
◉里村紹巴の傳は『源氏物語紹巴抄』の下にあり。

ゑいろくろくねんはちぐわつじふごやさんしゆうたあはせ
永祿六年八月十五夜三首歌合　一卷
永祿六年癸亥〔二二二三〕の歌合なり。月前松風、湖上月明、月前雁、等に就きてよめるもの二十一番より成れり。判者日野大納言の書き添へあり。『群書類從』卷二百十二にあり。

ゑいろくろくねんゆゐまゑにつき
永祿六年維摩會日記　寫本　一卷

永祿六年癸亥〔二二二三〕十二月二十一日より維摩會を行ひし時の日記なり。『續群書類從』七百二十三の卷、釋家部第八にあり。

ゐいわたいじやうゑき

永和大嘗會記　寫本一卷　二條　良基

後圓融天皇の永和年中大嘗會を行はせられたる時の記事なり。一名を『御禊記』といふは卷首に、永和元年十月二十八日、鴨川の御禊のことを載せたるによる。『群書類從』卷九十五、公事部十七にもあり

◉二條良基の傳は、『菟玖波集』の下に出す。

ゐいわにねんけちえんくわんちやうき

永和二年結緣灌頂記　寫本一卷

北朝後圓融天皇の永和二年丙辰六月七日、光嚴院十三回聖忌に方りて、伏見大光明寺に結緣の灌頂を行ふ。本書は其の時の雜記なり。最書に灌頂の由來古例等を說けり。『續群書類從』七百五十五の卷、釋家部第四十に收む。

えうがくしゐんぞくへん

幼學詩韻續編　一卷　林　士諫

初學詩作に供へたる書にて、春夏秋冬に分ち、題を設けて、各韻字を擧げたり。上總の人、大前仲文〔杉と稱す〕と共に編したるものなり。文化十一年甲戌〔二四七四〕因是道人の序あり。同年發行す。

◉林士諫は近江の人にして、名を襲といふ。

えうがくてい

幼學梯　一卷　三上　是菴

初學者の注意を記し、五常、四端、七情、五倫等を略說したる大字十餘枚の册子なり。慶應二年丙寅〔二五二六〕石黑直諒の跋あり、全編同人の筆蹟を版刻したるなり。

えうきやうべんしねんちうぎやうじ

要僅辨志年中行事　寫本二卷

安永、天明、寛政、享和、文化年間に於ける幕府年中の儀式等を雜記せるものなり。要を擧ぐれば、本丸出仕年中行事、西丸出仕の事、祖廟社參の事、諸門通行の制規、官位早進の次弟、諸家規則、諸大名門構の制限等の事數十條あり。文化九年壬申〔二四七二〕九月の自序あれども、其の氏名を記さず。

えうきよくこせう

謠曲古鈔　二十册

古謠曲を集めて、註釋したるもの。卽ち羽衣、かきつばた、槿、誓願寺、當麻、猩、三輪、龍田、小鹽、雲林院、かつらき、うの羽、矢卓鴨、右近、邯鄲、皇帝、軒端梅、うれめ、千手重衡、やうきひ、二人靜、鞍馬天狗、せかい、大會、殺生石、山姥、熊野、まつかぜ、源氏供養、井筒、佛原、たむら、朝長、通もり、淸つれ、舟辨慶、融、をみなへし、小督、張良、蟻通、道成寺、あをひのうへ、鐵輪、あたちか原、紅葉狩、櫻川、百萬、かしは崎、すみ田川、三井寺、せき寺小町、檜垣、おはすて、鸚鵡こまち、大はら御幸、昭君、項羽、ぬゑ、うかひ、春日龍神、阿漕、天鼓、藤戸、自然居士、東岸居士、たかさこ、志賀、なには、玉井、吳服、木賊、かげきよ、安宅、もりひさ、しゆむくはん、道明寺、西行櫻、遊行柳、梅枝、富士太鼓、うとう、錦木、まつむし、通小まち、ふなばし、江口、ゆふ顏、野宮、芭蕉、ていか、卒都婆小町、班女、花筐、籠太鼓、うきふね、老まつ、はく樂天、放生川、ゆみ八幡、養老、等の百番なり。二十册に版行すれど、何時何人の編輯發行したるかを詳にせず。

えうきよくしふえふせう

謠曲拾葉抄　二十卷　犬井　貞恕

觀世流謠曲凡て百一番の註釋なり。本書には惠南の凡例あり、曰く、「此の謠曲拾葉抄は、花咲三世の老師一張軒犬井貞恕撰し置れしを、予も時々筆を加へしを、老師死後に此の抄を予に傳へて猶再び其の功をとぐべき由堅く約しける。予此の抄に筆を染むること四十餘年、多くの祕事、家々の記錄等を借り集め、然らざるは學者に尋ね問ひて、以て漸く首尾せるものか」云々と。寛保元年辛酉〔二四〇一〕空華庵忍鎧の序あり。版刻は明和九年壬辰〔二四三二〕四月なり。

◉犬井貞恕の傳は『あだち千句』の下にあり。

えうくんほさのこゝろえ

幼君輔佐の心得　一册　稲葉　正義

幼君輔佐の心得を記したる敎訓書にして、君臣の分定まれる事、君を仁道に導くべき事、學問を勸むる事、善良な傅保を從へしむる事、保養に注意する事、武術を勸むる事等を懇々縷說せり。櫻町天皇の元文元年丙辰〔二三九六〕十二月にしるす所にして、後桃園天皇の安永九年庚子〔二四四〇〕の刊行にかかる。

◉稲葉正義の傳は『迂齋學話』の下にあり。

えうくんもりそだてのき

幼君守育記　寫本一卷

君相敎養の事を論說したるものなり。先づ分に相應せる敎育の必要を論じ、侍從職員を撰び、侍從規則を設け、年齡を逐うて飮食起臥より、文武政法の事に至るまで、具に其の敎育法を記したり。

えうごかしよ

幼悟家書　五卷　日比　正甫

卷一に德行類、究理類、陰類。卷二、三に辨惑論。卷四に順逆論。卷五に辨惑論とし、末に警戒として、讀書戒、名利戒、旅心戒、自反戒、愼獨戒等を附す。皆片假名文にて記す。貞享三年丙寅〔二三四六〕の自序中に、「少年より學に志すと雖も、善師なく、藏書なければ、其の道に至る事能はず、日ごろ朋友と切磋する所の論說を記しおけるものを、一二抄出して子弟に示す」といへり。元祿五年壬申〔二三五二〕版行す。

えうせきたうざうき

沃瘠鬪諍記　寫本一卷

寶曆八年戊寅〔二四一八〕土佐國安喜郡安喜浦なる鄕士黑岩只助と、小原太山兵衛との果し合ひ始末を記したるものなり。卷末に評して「沃土之民不材淫也、瘠土之民莫不嚮義勞也今度黑岩只助、小原太山兵衛兩人始終之働見實此語感信ス」とあり。『土佐國群書類從』第六十四に收む。

えうばひごくしふ

要馬祕極集　寫本六卷

騎馬の術を記し、かねて療馬の法を示したるものなり。間々圖畫を挿入して觀覽に便せり。貞享五年戊辰〔二三四八〕の著なり。

えうりやく

要略　寫本二卷

武家故實の書にして、安永二年癸巳〔二四三三〕二月の序あれど、其の人を詳にせず。卷末には「右小笠原流業術者、多賀先生相傳也、品形立振舞等、蒐增書記穴賢」と記せり。

えきいつへん

亦一篇　寫本一卷　木本　成理

神器中神鏡を主に考說したるなり。山崎垂加が『藩事支義』の第四、第五、第九の卷中、三種の奥義に預る文義を取つて一書とし、四五九抄と名けて三種傳授の前に授けたるものなるを、後、自玉翁が此の名に改めたりといふ。卷末に「右一書成て亦一篇と號く、其の意抄文の要を採れり、坂政實學側して、成理が論定に終ふと言ふ」とあり。

えきがくけいもうげんかいたいせい

易學啓蒙諺解大成　寫本四卷　榊原　玄輔

朱子の『易學啓蒙』を註解せしものなり。啓蒙の事は「朱子年譜」に「先生遂推ニ羲文之意ニ作ニ周易本義ニ又慨ニ學者未ニ明ニ厥旨ニ乃作ニ啓蒙四編ニ其編目以ニ本圖書ニ原卦畫ニ明著策ニ考變占ニ爲ニ次、蓋破ニ古今諸儒之失ニ而易經始還ニ其舊ニ」と云へり。本書は國語を以て平易に、詳明に解釋したるものなり。天和二年壬戌〔二三四二〕冬の自記奥書あり。同四年甲子正月の刊行に係る。

◉榊原玄輔の傳記は『印章備考』の下に揭ぐ。

えきがくけいもうさいかうひつき

易學啓蒙再攷筆記　寫本三卷

性理學の徒が『易學啓蒙』の解釋をなしゝものを集めたるなり。第一册は、卷端に「易學啓蒙筆記」と標して、三宅尙齋、木村重遠の說をあげ、第二册は卷端に「易學啓蒙續筆記」と標して、再、三宅尙齋の考を出し、第三册は中村惕齋が講述の筆記にして卷端に「易學啓蒙再攷筆記」と題せり。この本、序跋なく、又、編輯者の名を記さず。

えきがくけいもうしかう

易學啓蒙私考　寫本一卷　林　恕

易學啓蒙の字句に就きて論說私考を加へたるものにて、全部一册に寫せり。寛文元年辛丑〔二三二一〕季冬三日の作。

◉林恕の傳記は『本朝通鑑』の下にあり。

えきがくけいもうひつき

易學啓蒙筆記　寫本四卷　三宅　重固

朱子の『易學啓蒙』を講述せしものにて、木村重遠の說を擧げたるところ多し。

◉三宅重固の傳は『小學筆記』の下にあり。

えきがくげんかい

易學諺解　二卷　佐久間順正

周易の理を通俗に解したるものなり。安政二年乙

卯〔二五一五〕吉田篤政の序あり。同年刊刻す。

えきがくせうせん

易學小筌　一卷　新井　祐登

取竹判斷の書にて、一家の判斷應用を主とせる易解俗譯の冊子なり。首註ありて細かに例解す。寶暦四年甲戌〔二四一四〕春の著。

◉新井祐登の傳は「古易一家言」の下に出す。

えきがくせつちう

易學折中　一卷　井上　純卿

易學に關して朱熹、王陽明の說をあげ、伊藤仁齋、物徂徠の說をも附し、理非を折中したる大論文なり。寶暦十四年甲申〔二四二四〕の自序あり。

◉井上純卿は名を立元といひ、金峨、考槃翁、柳塘閑人等の號あり。江戸の儒者なり。享保十八年癸丑〔二三九三〕に生る。最初川熊峰に就て伊藤仁齋の學を修め、又井上蘭臺に從て物徂徠の學を研究し、之れより更に一機軸を出して一派を立つ。即ち訓詁は漢唐を取捨し、義理は宋明を折衷し、詩文も亦大に比較撰擇して所謂折衷學を創す。江都の學之れより一變せり。其の門には原狂齋、岡四溟、下田芳澤、龜田鵬齋、篠本竹堂、吉田篁墩、菅東海、尾崎稱齋等の名士を出し、著には、周易箋考、尙書疑字編、論語集說、孝經集說、辨徵錄、正錄、讀學則三禮斷、霞城講義、病間長語、易學辨疑、毛詩選說、左傳兼說、經義緒言、經義折衷、學庸古義、師辨、問答錄、考槃堂漫錄、金峨吟草、金峨文集等の夥書を著す。天明四年甲辰〔二四四四〕六月十六日、年五十二にて病歿す。

えきがくはつき

易學發揮　木活八卷　土肥　貫雅

易象に就きて說論したるもの。卷一に天文、地理、時候、古人。卷二に人倫、鳥獸類。卷三に肢體、器財。卷四に光彩、食服、生植、方位、數量。卷五に事態。卷六に事態、形容。卷七に虛字。卷八に復用、占辭とを說き、卷首に義則十五條、卦名六十四條を揭ぐ。三冊に寫傳するものと、八冊に寫傳するものとあり。本書は「易象發揮」と題して行へるもあり。

◉土肥貫雅は鹿鳴と號す。因州の人なれど、江戸に出でて專ら易說を唱導す。其の著す所は本書の外に、易說示蒙、易經韻字句讀考、易學要領、易話、易經俚解、易象辨疑、周易龍象解、易學手引草等あり。文化十年癸酉〔二四七三〕二月十三日、年七十餘にて歿す。

えきがくべんぎ

易學辨疑　一卷　井上　純卿

易學の義理を辨釋せしものなり。明和四年丁亥〔二四二七〕の自序に先師熊峯川に從ひ啓蒙を講ずるを聞くに、啓蒙の本經に於て盡さゞることを知り、諸家の說を考へ合せてこの記を作るよし云へり。以て本書の由來を知るべし。

◉井上純卿の傳は「易學折中」の下にあり。

えききやう

易經　七卷　溪　世尊

易經を假名文に細解したるものにて、「經典餘師」の一なり。文化十四年丁丑〔二四七七〕溪世尊の題序あり。

◉溪世尊の傳記は「經典餘師」の下にあり。

えききろく

亦奇錄　三卷　小原　忠寬

著者東上の紀行文なり。其の序に曰く、「慶應二年丙寅春三月、余奉命將祗役於江戸邸。野藤陰煥亦被召、澤埜筑間二生從焉。菱海鷗碕智竹洲爲則有遊奥之松島之意。乃拉而偕東。會桃嵩禪師赴尾之名古屋。亦約同上程。抑余赴江戸已十三度。然未嘗有一關風流韵事者。但此行拉一時文友數名而往。雖時閲乎多故。同歷觀東海山川不亦奇乎。因語諸子曰、更番輪記此行以誌一時之奇遊何如。僉曰是亦奇哉。仍名此編曰亦奇錄」と、實に鐵心藤陰海鷗竹洲等の合編なり。大沼沈山、南摩羽峯其他の諸家の評言を加へたり。編中讀むべき文字多し。慶應三年版行す。

◉小原忠寬は美濃大垣藩の家老なり。文化十四年丁丑〔二四七七〕に生る。鐵心と號し又是水醉逸と號す。維新の際藩主を助けて畫策するところ多し。大垣藩が順逆を誤らざりしは一に鐵心の功による。明治の始參與に任じ會計官判事となり、後大垣藩大參事となる。明治五年壬申〔二五三二〕年五十六にて卒す。

えきげん

易原　一卷　皆川　愿

周易彖爻の辭の原由を研究せしものなり。天明六年丙午〔二四四六〕の自序に「愿、かつて易六十四卦彖爻の辭のよつて出る所を考究するに、みな名辭の象にしてその言悉く辭象に出る」云々と云へり、

その說を漢字に記し、圖解をもあらはせり。

◉皆川愿の傳は「淇園文集」の下に揭出す。

えきさんいさう

棭山遺草　二卷　卷　棭山

著者の消息草書十二月帖なり。桂洲、海屋等の題字あり、慶應二年丙寅〔二五二六〕の書なり。著者の末記。桂洲の跋等あり。其の中に、此の書は棭山花街の翠樓にあり、妓をして墨を磨らしめて造る所なる由あり。

◉卷棭山は書家菱湖の男にして、また書を善くせり。通稱柳輔、名を之紀、字を百里といひ、棭山、鷗洲等の號あり。明治二年己巳〔二五二九〕九月二十五日、四十六歲にて歿す。江戸淺草海雲寺に葬る。

えきしやうはつき

易象發揮　木活八卷　土肥　貫雅

本書易象發揮は、一に「易學發揮」として行はるゝものあり。解題は同書名の下に揭げたり

◉土肥貫雅の傳記は「易學發揮」の下にあり。

えきすゐれんべいろく

易水連袂錄　木活十卷

元祿年間淺野吉良兩家の滅亡、遺臣の復讐、妻子の流浪等に至る顚末を記したるものなり。卷一當時將軍家の治世より、卷七本所吉良殿屋舖破壞御拂の事に至り、卷八に落書、卷九に淺野家の系圖、卷十に吉良家の系圖を揭げたり。十卷十冊に寫傳す。卷端に元祿十六年癸未〔二三六三〕作者の自序あれど、其の姓名を記さず。

えきせん

易雋　六卷　河田　孝成

周易の全文を揭げ、自註を下せしものなり。別錄には古書に出でたる易の辭、左傳に載せたる卦兆を出して自他の註を施せり。寶暦十二年壬午〔二四二二〕の自序あり。此の書は「周易雋註」の標題によりて、同書名の下に詳解せり。

◉河田孝成の傳は「周易雋註」の下にあり。

えきぜんしふ

易然集　木活一卷

禁裏御屛風の詩歌の集なり。孔子、廬山瀑布、楊貴妃、赤壁、陶淵明、黃河、老子、楓橋、唐堯、渭濱等の歌題、菅家、吉野山、聖德太子、天橋立、弘法大師、須磨浦、道風、神泉苑、晴明、武藏野等の詩題に就きて、後水尾院、後西院帝、近衞基熙、照光院道晃親王、飛鳥井雅章、日野弘資、烏丸光雄、中院通茂、白川雅喬王等の作詠したるものにて、易然の題號は、後水尾院の敕號なりといふ。蓋し漢土の題を和歌に詠み、本邦の題を漢詩に作りたるより、「孟子」離婁篇の「易地則皆然」といふ句に據らせ給ひたるなるべし。寬文十二年壬子〔二三三二〕の冬、作るところなり。

えきちへいしろく

易地聘使錄　文化　寫三十冊　脇坂　安董

文化八年辛未〔二四七一〕の春、韓國信使來聘の時、著者幕府より受聘副使の命を受け、聘事總裁を兼ねて對州に應接し、易地の議に終始せし總ての日記錄なり。其の百餘卷中より、更に精を拔きて撰定せる草稿なり。文化十一年甲戌〔二四七四〕四月の自序捺印あり。三十冊に淨寫す。

◉脇坂安董は德川幕府の老職なり。淡路守と稱し、聰敏にして膽略あり。將軍家齊に仕へて寺社奉行となり、谷中延命院住僧の隱惡を摘發して嚴正なる判決を下し、又其後三十年出石仙石氏の獄起るや、權貴を憚らず公明なる判斷を爲し、遂に功によりて老中に進みたり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕二月七日歿す、年六十餘歲なりきといふ。

えきでんしかい

易傳私解　木活五卷　澁井　孝德

子夏の「易傳」に基きて、淺介補足したるものにて、安永二年癸巳〔二四三三〕五月五日の自序あり。

◉澁井孝德の傳は「國史」の下にあり。

えきでんづかい

易傳圖解　一卷　和田　絅

子夏の「易傳」を圖解せるものなり。序跋なし。著作の年代詳ならず。

◉和田絅は出雲の儒學者にして、別に大學啓、論語便蒙鈔、中庸集解、書經訓蒙等を著せり。

えきよくよかう

易翼餘考　木活五卷　林　恕

易經の說卦、序卦、雜卦の三卦に就き、和漢諸家の所釋に參して考論したるものなり。往年作るところの「繫辭考」に次げる意にて、「易翼餘考」とはいへり。延寶六年戊午〔二三三八〕の自序あり。

◉林恕の傳記は『本朝通鑑』の下にあり。

えきりんせつよう

易林節用　二巻　易　林

時候、官位、人倫、肢體、氣形、草木その他に分類して、數多の名詞熟字類を輯集したるものなり。慶長二年丁酉〔二二五七〕易林といふもの古本を訂したる由の奥書あり。

えきろはつたつろく

驛路八達錄　寫本十五巻　貴田　元親

八とは五畿七道をいひ、達とは海陸山川舟車の至る所、人馬の通ずる所たる達道を云へるものにて、山川險夷、通路里程等を主として、兵要に便したる一種の統計的地誌なり。著者二十年來の研究によりて、天和二年壬戌〔二三四二〕の秋成れるものなる由、同三年癸亥五月朔日門人の序あり。

ゑぐちあひひさごのつる

畫口合瓢之蔓　三巻　雲和亭湖龍

畫の上に種々の詞をもぢり合するを畫口合といふ。此の書はこの種の口合をあまた集めたるものなり。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕小竹老人の序、及び曉鐘成の序並に自跋あり、畫は松川半山の筆作。

ゑざうしひやうばんき

繪草紙評判記　寫本一巻　宇　鱗

繪草紙を、芝居評に傚ひて、品定したるものなり。跋あり、曰く「稗官小説、可以補史、街談巷議、可以觀情、辛丑春、都下書肆、新刻稗史者、凡八家、四十有七種、百二十有八卷、友人宇鱗氏、爲之批評、滑稽入冷、瑕瑜不掩、余受而讀之、以代春宵一刻之談、盍稗史之有月旦、自宇鱗氏始、四方山人題」と。横本に寫せり。

ゑしんゐんげんしんそうづぎやうじつ

惠心院源信僧都行實　一巻　僧　恕哲

本朝天台宗の名僧、延暦寺惠心院源信僧都の傳記なり。博く諸傳を參覽して以て一部を成せり。文辭繁冗にして敍事の稍序を失するは惜むべし、享保三年戊戌〔二三七八〕四月の作なり。

◉恕哲は白道と號し、大和國當麻郷苴福寺村阿日寺の住僧なり。

ゑしんゐんざうわしよもくろく

惠心院藏和書目錄　寫本一巻

比叡山横川惠心院の藏書目錄にして、「百練抄」以下「闘太曆」に至る和雜書五十三部を舉げ、書名と卷數とを記す。

えぞいつきこうはいき

蝦夷一揆興廢記　寫本六巻

蝦夷地の風俗と、寛文九年己酉〔二三二九〕蝦夷沙具沙といふもの一揆を起したる始末とを記したるものなり。江戸神田邊の隱士水野金藏といふもの序を見るに、一揆の當時、松前討手中に加りし、通辨勘右衛門といふもの、談話を、其の友人の筆記したりしを、綠を求めて借寫したる由なり。六巻二册に寫傳せり。

えぞいつけん

蝦夷一件　寫本一巻

最初松前氏の系圖として、信廣より矩廣に至る九代間の大略を記し、度數、風土、天明三年癸卯〔二四四三〕外國船が松前の西海に見えたる事、寛政元年己酉〔二四四九〕東蝦夷くなしり島騒動のときの取扱方書上書面の事などを詳記す。

えぞえんかくかう

蝦夷沿革考　寫本二巻　山田　連

蝦夷地の沿革に就きて詳細に考論明證したるものなり。全編漢文にて記し、上下二卷を一册に寫傳したり。著者山田連は平安の人にして、子叔と字す。今其の詳傳を得ず。

えぞおくしまづ

蝦夷奥島圖　寫本一舗　菊地　惣內

圖端に記して、「此の繪圖は、らしよあ島、長夷共に相尋れ、かむちやつけ迄、島續き渡海の遠近等、凋量仕候、凡里程を入御覽候ために御座候間、蝦夷地方の儀、分間をつけ、島々間をのべ申候」といひて、一々諸島間の里程を記せり。

えぞかうていき

蝦夷行程記　二巻　阿部　喜任

蝦夷內地の行路里程を記し、港灣、漁場、物產、風俗等の記事をも加へたり。安政三年丙辰〔二五一六〕刊行す。

◉阿部喜任の傳記は『隱居放言』の下にあり。

えぞき

蝦夷記　寫本二巻　關　修齡

蝦夷の地形、土質、人情、風俗、生活、物產等を詳細に記述したるものなり。通辨勘右衛門といふもの、其の他の人の見覺え等によりて寫し出でたるものなりといふ。安永二年癸巳〔二四三三〕の編なり。享和元年辛酉〔二四六一〕七月の傳寫なりと記せるのみにて他の年月なし。

◉關修齡の傳は「巡海錄」の下にあり。

えぞきかう

蝦夷紀行　寫本三巻　谷　元旦

寛政十一年己未〔二四五九〕春、幕命を受け、松平信濃守及び監司以下八百餘人、蝦夷に渡りたる時、著者また圖畫の役を帶びて、彼の地に入り、其の國風、人物、山水、器用、產物等を寫生したることあり。上卷は三月二十四日江戸を發して、四月二十二日松前城下に達したるまで、中卷は四月二十八日同旅館を立ちて、六月二十二日まで、下卷は七月四日より九月二十七日江戸に歸着するまでの日記なり。日數百八十一日、寫す所草木三百、海草十七、奇勝圖百十六、器百、獸十三、禽三十一、貝類三十、器物百十、人物七十二、都合八百十三あり。

◉谷元旦は江戸の人にして、後に島田氏に養はれ、松平相模守齊邦に仕ふ。

えぞきもん

蝦夷紀聞　五巻

蝦夷支配の事に關する書類を集錄したるものなり。公文、逵書、申渡書、屆書、申出書、其の他等凡そ百二十三通を揭ぐ。文化四年丁卯〔二四六七〕中の事に限る。

えぞこくじんぶつふつきのづ

蝦夷國人物服器之圖　寫本一册

蝦夷の人物、衣服、武器、其の他共凡て二十五の彩色圖を掲げ、各其の原名、寸法、効用等の說明を附せり。惜むらくは年代の明かならざるを。

えぞこくふうぞくにんじやうのさた

蝦夷國風俗人情の沙汰　寫本三巻　本多　利明

蝦夷の風俗人情より、山川、動植の事、殖產、工業、測量等の事に關し、實地檢查したる結果を草したるものなり。蝦夷開拓の歷史には必要の書なり。

◉本多利明の傳は「西域物語」の下にあり。

えぞさうし

蝦夷草紙　寫本三巻　最上　常矩

蝦夷に關する百般の事を記述せるもの。凡例十五則の內に、人情、風俗、支配等のことを述べ、本文に入りて、松前總論、狼煙、私大、越年役、鯡魚を占ふ事、鯡獵を祈る事、耕作せざる事、新發田畑、牛馬、鹽竈なき事、神、地境、諸島の形、大河、おむしや、對面の禮、山谷、酒宴器物、氷海、飼赤熊の熊禮、獸蹄、物を問ふ事、ツクナイ、手習、歌の文句、斐姿、漁獵、疾病、言語、產物等、凡て三十條項に就て記述せり。本文三卷の外更に附錄二卷ありて、以外の事項を記せり。

◉最上常矩の傳は「度量衡說統」の下にあり。

えぞさうもくづ

蝦夷草木圖　寫本一帖

蝦夷地產草木幾十種の着色圖本なり。光格天皇の寛政年間、仁孝天皇の文政年間に於ける栗本昌臧の跋あり。

えぞさうらんき

蝦夷騷亂記　寫本一巻

文化年中、外國船、我が蝦夷地へ渡來せる時の照會始末を記せり。末に文化十年癸酉〔二四七三〕九月二十六日、吟味役よりの諭書を掲げたり。「蝦夷文化錄」と併せ見るべし。

えぞさんわしふ

蝦夷三話集　寫本三巻　鹽見　利次

上卷を「蝦夷騷擾記」、中卷を「巡周蝦夷祕談」、下卷を「蝦夷故談」と名けて、寛政元年己酉〔二四四九〕のくなしり騷動の始末、其の他の雜事を記せり。寛政元年の自序、同翌年の自跋等あり。

◉鹽見利次は松平相模守に仕ふ。叔工と字し、幸左衛門と稱せり。

えぞし

蝦夷志　寫本一巻　新井　君美

卷首に蝦夷の事の國史及び支那書等に見えたるを序列し、嘉吉三年癸亥〔二一〇三〕松前氏の祖源信廣の蝦夷地を定めたる事を述べ、蝦夷の地圖を掲げ、次に蝦夷志の本條に入りて形勝、山川、風俗、土

産等を詳記細註せり。享保五年庚子〔二三八〇〕の自序あり。

◉新井君美の傳記は『折たく柴の記』の下にあり。

えぞしふい

蝦夷拾遺　寫本一卷　本多　利明

蝦夷の開發を主張したるものにて、風俗人情の事より、蝦夷の事を論ぜる諸家の書翰雜話等を輯錄したるものなり。寬政元年己酉〔二四四九〕十一月の編なり。別書山口高品等の『蝦夷拾遺』五卷とは自ら異なれり。

◉本多利明の傳記は『西域物語』の下にあり。

えぞしふい

蝦夷拾遺　寫本五卷　山口　高品

蝦夷地の乾坤、時候、人倫、肢體、衣服、飲食、鳥獸、魚貝、草木、藥品、器物、鎧、笠弓矢舟帆、楫碇、琴鼓、數量、言語等を詳述したるものなり。天明五年乙巳〔二四四五〕春二月、幕府の命を受けて、同地を巡檢し、二年を經て研究し了へたる事項を記述したるものなりといふ。同行の人々は、山口高品〔鐵五郎と稱す〕、菴原宣方〔彌六と稱す〕、佐藤行信〔玄六郎と稱す〕、皆川秀道〔沖右衞門と稱す〕、靑島政敎〔俊藏と稱す〕等にて、以上五人なりき。本書はこれら人々の協同編纂したるものか。孰れも普請役なり。五卷三册に寫傳せり。

えぞじやうようしふ

蝦夷常用集　寫本八册

蝦夷人常用の衣服、耕具、織具、家屋、其の他の實狀を圖說したるものなり。圖は繪具を用ひて、書畫共に最も鄭重に寫出せり。

えぞじゆんけんろく

蝦夷巡見錄　寫本一册

蝦夷の地理大概、人物產物、雜說蝦夷語、赤人並山丹人の說等を記せり。天明二年壬寅〔二四四二〕六月の作。『蒹葭堂藏書』とあり。此の人の作か、如何。

えぞじゆんけんろく

蝦夷巡見錄　寫本五卷

第一卷、二卷に蝦夷の地理を記し、第三卷に人物土產等を記し、第四卷に雜說及び土語を揭げ、第五卷を別卷として、赤人並に山丹人の說を載せたり。天明六年丙午〔二四四六〕某の序あり。

えぞじゆんらんひつき

蝦夷巡覽筆記　寫本五册　高橋　寬光

蝦夷地の道路、山河、風俗、人情、產物、言語、凡て同地に關する地理的事項を、精確に詳記したるものなり。寬政九年丁巳〔二四五七〕、公命を受け、下國季船、南條信忠、牧田由師と、四人同乘して彼の地を巡覽し、其の目擊したる所を旨として、記載したるものなりといふ。

えぞぜんづ

蝦夷全圖　一鋪　林　子平

東は獵虎島及び諸島を限り、西は、てうむ島を限り、南は奥州の地を限り、北は加模西葛杜加を限りとしたる一國の全圖にして、『三國通覽圖說』と同時の作なり。

◉林子平の傳記は『海國兵談』の下にあり。

えぞたいもん

蝦夷對問　寫本一卷

蝦夷の風俗土產等の事につきて、對問したること十五條あり。對辭は一格を下げて記せり。書體を案ずるに、上官の問に對して答へたるものゝ如し。

えぞだんわき

蝦夷談話記　寫本五卷

蝦夷の地理風俗に關する雜事を、雜記したるものにて、部類を立てず、地圖人物圖等を添へて六册に寫せり。圖傍に元文三年戊午〔二三九八〕寫本の由を記す。

えぞちゑづ

蝦夷地繪圖　寫本一鋪

蝦夷松前の全圖にて、松前、江差、箱館、のつち等は朱を以て分ち、交易所、村落等は墨の符を以て示す。

えぞちしよはつき

蝦夷地初發記　寫本一卷　桂川　甫周

蝦夷に關する雜記なり。寬政四年壬子〔二四五二〕御目付村上大學、石川六右衞門、御徒目付後藤十次郞、村田兵右衞門、松田十左衞門、岩瀨直右衞門、其の他の松前へ派遣を命ぜられて行きたる時の雜記を集錄したるものなり。附錄には『漂民御覽之記』あり。そは吾が邦人大黑屋幸太夫、及び磯吉といふもの、過る天明二年漂流して露西亞に行き、其の女

帝に見えたるが、前年蝦夷まで送り返されたるものを、吹上物見前に於て幕官の問答したる顚末を記したるものなり。

◉桂川甫周は江戶の醫なり。名を國瑞、號を月池と云ふ。寶曆元年辛未〔二四一一〕に生る。父祖以來醫を以て幕府に仕へ、安永六年侍醫となり、天明三年法眼に敍せらる。其の譯述する所は和蘭藥選、海上備要方、外科大成、瑞竹堂經驗方、露西亞志、露西亞略記等あり。又大槻玄澤と萬國圖說を共譯す。文化六年己巳〔二四六九〕六月二十一日、五十九歲にて病歿せり。

えぞちぜんづ

蝦夷地全圖　寫本二鋪　近藤　守重

東は蝦夷に屬する數十の諸島、西は唐太より山丹に至り、南は津輕南部の境界より、北は松前箱館西蝦夷東蝦夷に及べる細圖なり。

◉近藤守重の傳記は『右文故事』の下にあり。

えぞちづ

蝦夷地圖　寫本一鋪

本蝦夷地、からふと、くなしり、ゑとろふ、うるうつ、ちもしり、其の他諸島の圖、山丹、滿洲、露西亞方角略圖等なり。圖端に松前圖を揭ぐ。天明六年丙午〔二四四六〕御普請役山口高品、以下四名の氏名を記せり。『蝦夷拾遺』の附圖ならんか。

えぞちとりあつかひどめ

蝦夷地取扱留　寫本一卷

蝦夷の行政に就きての記錄なり。『享和二年戌年より丑年迄御備米の儀に付書留』といふ項より、『行器夷人へ賣直段』といふ項に至る總て廿五項あり。

えぞちとりはからひじやうしん

蝦夷地取計上申　寫本一卷

蝦夷の境界交易等の事に就て、河尻肥後守と荒尾但馬守とが露西亞人と交涉したる始末書に意見を添へて上申したる書なり。末に『辰二月』と記す。

えぞちふうぞくかきあげ

蝦夷地風俗書上　寫本一卷

『正德五年〔二三七五〕松前志摩守差出候書付』と題せる一編と、『追而差出候書付』と題せる一編とを併せたるものなり。其の一には夷人に總頭なき事、郡縣國境の辨別なき事、夷人の言語、國の寒暖、花木禽鳥、文字、交易、產業、家作、衣服、神佛等の事を雜記し、其の二には地の廣狹より耕作、金銀、漁獵等の事、土人義經及び鍬形の甲を尊べる事、土人に氏姓のなき事等を雜記す。一名『近事奇觀』といふ。

えぞちほくきよくしゆつちどならびにえんかいりていき

蝦夷地北極出地度並沿海里程記　寫本一卷　伊能　忠敬

蝦夷諸島の測量里程に關する表册にして更に沿海里程をも附記す。

◉伊能忠敬の傳は『大日本沿海實測錄』の下にあり

えぞちみこみしよひしよ

蝦夷地見込書祕書　寫本一卷　堀　利熙

蝦夷の境界、取締等に就ての意見上申書數通を集めたり。何れも實地見聞の上記しゝ所なれば、彼地の情狀を述ぶること詳なり。嘉永七年甲寅〔二五一四〕八月頃の筆記に係る。

◉堀利熙は織部正と稱す。幕府の士伊豆守利堅が子なり。文政元年戊寅〔二四七八〕に生る。嘉永中米艦浦賀に來りし時邊海防禦の事に參判せり。後箱館奉行となり蝦夷一島を開拓し道路を修め舟楫を通ずる等功勞頗る多し。明年神奈川奉行を兼れ、後普露士と通商交盟を約するに當りて利熙其の任に當る。事を以て安藤信正と合はず屠腹して死す行年四十三。時に萬延元年庚申〔二五二〇〕なり。

えぞちろしあさくこくたうせつかいづ

蝦夷地魯齊亞屬國島接界圖　寫本一鋪　間　重富

蝦夷北界露西亞境界の略圖にて、方向度數等をも示せり。

◉間重富の傳は『天地二球用法評說』の下にあり。

えぞとうざいかうしやう

蝦夷東西考證　寫本二卷　前田　夏蔭

東西蝦夷の地理、名稱、道程、沿革、風俗等を考證せるものにして、上卷は西蝦夷の部、下卷は東蝦夷の部なり。嘉永七年甲寅〔二五一四〕二月の撰に係る。

◉前田夏蔭の傳記は『稻荷神社考』の下にあり。

えぞねんだいき

蝦夷年代記　一卷　松浦武四郎

蝦夷地に關する年代表にして、神武紀元の始より、

慶應三年丁卯(二五二七)に至れり。同年冬の記錄。
◉松浦武四郎(或は竹四郎又多氣志樓と書く)は尼張名古屋の人なり。幕命を奉じて蝦夷に入る著す所の紀行數部、北蝦夷日誌、十勝日誌、西海雜志、石狩日誌等あり。明治十七八年の交歿す。

えぞのしまぶみ
蝦夷の島踏　寫本三卷　藤原　芳麿
和文體の蝦夷巡檢日記なり。享和元年辛酉(二四六一)二月信濃守忠明、左近將監忠房等と共に官命を帶びて蝦夷地を巡見せし時の日記にして、二月二十五日に江戸を發足し、東山道を經て蝦夷に至り、十月十日故都に歸り、其の間二百二十二日を經たりといふ。日々の記事は、優雅なる和文に和歌さへ交へ記し、各地の名勝風俗、古器、動植物等は彩色せる畫圖を挿入し、且つ又、卷末には寛政八、九年に蝦夷へ漂着せし外船の圖をも附記せり、考古家、地理家の參考に供すべき節多し。巡覽の年の十月十二日に書き畢りしものを文化十一年甲戌(二四七四)十月更に訂正せるよし奥書に見ゆ。題號は文化十二年乙亥二月の著者の男芳高の序に「我うしの彼のえぞの千しまふみ盡されしほどの日記」とあるより取りて後日に名づけしものなり。「おくのみちくさ」として一卷に寫傳せるもあり。
◉藤原芳麿は和學者にして稲居氏たり。

えぞぶつさんし
蝦夷物產誌　寫本二卷
蝦夷地の物產を網羅して一々其の方言釋名を附し、更に他の本草書類を參照して各其の種類効用等を辨明したるものなり。

えぞふどき
蝦夷風土記　寫本一卷　新山　質
景行天皇の時より、永正十一年甲戌(二一七四)に至る蝦夷の沿革より、算數の項に至るまで地誌的事項を記すこと二十九條に及べり。但目錄に據れば、此の書乾坤二卷より成りて、坤の卷には譯語、人物圖、蝦夷寇變等を載せたる趣なるが、乾卷のみにて中止したるか將、坤卷を逸したるか詳ならず。
◉新山質は攝津の人なり。

えぞふどき
蝦夷風土記　寫本二折
蝦夷地の風俗を彩色圖して、各略說を加へたるもの。最初に山川草木を圖し、人物風俗に及べり。見るべきもの多し。

えぞぶんくわろく
蝦夷文化錄　寫本一卷
文化中、外國船の渡來したる始末を筆記したるものなり。「蝦夷騷亂記」と併せ見るべし。

えぞまつまへからす
蝦夷松前烏　寫本五卷
第一卷に松前卅中の靈地に高札等の事以下凡て五項。第二卷に山々より木を出す事以下凡て七項。第三卷に大魚、珍數魚ある事より風俗等に至る凡て五項。第四卷に松前領主、夷人目見の事以下凡て六項。第五卷に熊膽膃肭臍の事より、蝦夷土產の事に至る凡て八項を記せり。明和元年甲申(二四二四)旭溪山人(平賀國倫)の序あり。

ゑそらごと
繪空言　寫本一冊　荒木　加友
著者の俳諧集なり。其の編述の年代詳ならざれど、寛文前のものなるべし。
◉荒木加友の傳記は「伊勢踊」の下にあり。

えぞりだん
蝦夷俚談　寫本一卷
一名「北海隨筆」の題下に解題し揭げたり。

えぞりやくせつ
蝦夷略說　寫本一卷　林　子平
蝦夷の地理、風俗、習慣、その他の事を、略記す。卷末に「右蝦夷略說、仙台林士平所述也」とあり、士平は子平の事なるべし。
◉林子平の傳記は「海國兵談」の下にあり。

ゑたかはらものゆうぢよやゆゐしよ
穢多河原者遊女屋由緒　寫本一卷
穢多、河原物、遊女屋等の由緒傳來を記したるものなり。穢多由緒は其の祖攝津國より鎌倉へ下りて總統を命ぜられし事より、又河原者は堺町葺屋町木挽町三芝居起立沿革等を記し、遊女屋は新吉原開基の事、廓中の法式、町卷の名、遊女高尾の文等を志るしたり。いづれも中御門天皇の享保年中の作を合集したるもの丶如し。就中穢多由緒は享保四年と同十年とに記錄奉呈せしもの、河原由緒享

保十年中山出雲守大岡越前守より、大久保佐渡守へ遊女屋のも同十年に記錄奉呈せしものなり。

ゑたひにんおしおきすぢとりあつかひがた
穢多非人御仕置筋取扱方　寫本一册
幕府評定所より引繼ぎたるものにして、享和元年辛酉(二四六一)のものたり。內閣文庫に保存せり。

ゑちごいちゑんし
越後一圓誌　一折　三木　光齋
大日本全圖の內にして、越後一國の詳細地誌なり。彩色を以て城下、宿驛、關所、同奥野、新田、神佛、郡村、山河を記し、別に里程を表とす。
◉三木光齋の事は「奥州一圓志」の下にあり。

ゑちごかうふでん
越後孝婦傳　寫本一卷　杉　原
越後國三島郡出雲崎尼瀨町の大工作太夫が妻、姑に孝を盡しゝ事を記したるもの。漢文にて記す。

ゑちごきだいぜん
越後記大全　寫本二十卷
黄門秀康の由緒より、越後守父子歸參、家再興の事に至る六十條項を記す。二十卷五册に寫傳す。

ゑちごぐんき
越後軍記　十二卷　白　雲　子
長尾景虎の素生より、其の一生間の事實を敍し、後景勝上杉氏を繼ぎて、武田勝賴の妹と結婚し、其の國を治むるまでを記す。元祿十五年壬午(二三六二)の自序を附して、此の歲出版す。

ゑちごさうどうこんげんき
越後騷動根元記　寫本二卷
越後中將光長の老臣、小栗美作正矩が家門の列に加へられて、寵遇に誇り威を逞くせしより、國中の騷動に及び、遂に天和に至り、正矩父子刑罰の事に至る始末を記したるものなり。

ゑちごじやうづ
越後城圖　寫本一舖
松平越後守光長が、頸城郡なる高田城に在りし時の圖なるべし、同城の形勢、及び城下各屋敷、各姓名、各知行高等を記し、圖端に「此城慶長十七年壬子(二二七二)松平上總介忠輝新築、松平陸奥守繩張、元和九年癸亥(二二八三)松平越後守光長公在城」と書せり。

ゑちごしりやく
越後志略　寫本三卷
越後國各郡の名所舊蹟社寺その他の地誌的雜事を記載せり。表紙に冢耕といふ人の評あり、「此書未詳何人之所著、余所閱六通、有詳略不同、誤謬頗多」云々といへり。

ゑちごなよせ
越後名寄　寫本三十一卷　丸山　元純
越後國に關する事物の名目を分類列記考說したるものなり。國郡庄等の名より、人倫、雜事、城下に至る數十目に分つ。一に「越後名錄」といふ。寶曆六年丙子(二四一六)の自序あり。卅一卷廿五册に寫す。
◉丸山元純は越後國寺泊浦の人にて巨陳と稱す。

ゑちごなよせさんぽ
越後名寄參補　寫本三十二卷　秦　檍丸(アハギマロ)
丸山元純の「越後名寄」に參補したるものにて、補の字を揭げて原文と區別せり。古人の名所和歌及び神社の事等を集めて一卷となし、都合三十二卷、十六册に寫傳せり。別に「越後國名所志」として傳ふるもの本書と同物なり。
◉秦檍丸のことは「鎌倉勝槩圖」の下にあり。

ゑちごのくにおつはうじえんぎ
越後國乙寶寺緣起　寫本一卷
乙寶寺の繪緣起なり。卷末「詞書正二位行權中納言兼春宮大夫臣源朝臣、于時貞和三年(二〇〇五)八月日」と記し、また「繪所正五位下行加賀守藤原伊久書之」とあり。「續群書類從」卷八百十五、釋家部第百に收む。

ゑちごのくにぜんづふろく
越後國全圖附錄　寫本七卷　三輪　長泰
元祿年中、越後の四侯稲葉、牧野、溝口、榊原等の作りたる「越後國全圖」といふに追附したるものなり。別に圖繪一帖を添ふ。享和年中の作なり。著者三輪長泰は越後國の人。

ゑちごのくにたかだじやうづ
越後國高田城圖　寫本一舖

城廓市街の境界區別、且諸家の屋敷社寺等を彩別す。文化四年丁卯〔二四六七〕片岡直亮の寫したるものなり。

ゑちごのくにづ
越後國圖 寫本一舖
東、猿ヶ城山の邊を限り、西、中村、笹口等の海岸を限り、南、加治川を限り、北、根屋、府屋の海岸を限りたる圖にて、城所、陣所、地名、社寺、山川、丘陵等を記し、更に統計的事項を圖端に掲げたり。

ゑちごのくにみちすぢもくろく
越後國道筋目錄 寫本一軸
越後國より近江國に至る十箇國の道順道程を目錄したるものなり。

ゑちごのくにめいしようし
越後國名勝志 寫本九卷 秦 檍丸(アハギマロ)
別名『越後名寄參補』と異名同書なり。改名は盜し後人の所業なるべし。見るところ九卷二册のみにして、十卷以下を闕けるも、九卷中既に參補と異ならざる故、是れまた同じく秦檍丸の作と見て可なるべし。因て該姓名を著者の下に署名す。
◉秦檍丸のことは『鎌倉勝槩圖』の下にあり。

ゑちごぶんげんちやう
越後分限帳 寫本一卷
越後高田家中の分限高を列記したるものなり。弘化二年乙巳〔二五〇五〕松井平藏の寫本するところなり。横本小册子に作る。

ゑちごみやげ
越後土產 二卷 紀 興之
越後一國の風土物產を列載す。山川古蹟等は間々略圖を加へ、物產は相撲番附に模擬して列記す。元治元年甲子〔二五二四〕の出版にかゝる。著者紀興之は會津の人なり。

ゑちごめいろく
越後名錄 寫本三十一卷 丸山 元純
一名『越後名寄』の下に解題せり。

ゑちぜんくわうもんねんぷ
越前黃門年譜 寫本二卷
越前黃門秀康が、天正二年甲戌〔二二三四〕四月八日遠江國產見村に出誕して、慶長十二年丁未〔二二六七〕閏四月四日薨去するまでの年譜なり。

ゑちぜんけおぼえがき
越前家覺書 寫本一卷 安藤七郎右衞門
天正二年甲戌〔二二三四〕秀康の出生より、元和三年丁巳〔二二七七〕忠直江戶より越前に歸るまでを記す。享保十六年辛亥〔二三九一〕馬場太郎右衞門の奧書あり。
◉安藤七郎右衞門は松平越後守の浪人なりといふ

ゑちぜんけぶんげんちやう
越前家分限帳 寫本一卷
慶長十五年庚戌〔二二七〇〕二月改正するところにして、忠直の時のものなり、當時七十萬石を領し、家士の總高五十四萬八千五百四十八石、萬石以上十一人、千石以下七十九人を記せり、本書は、同家中侍分限帳、越後高田格式役附給帳等を合編す。

ゑちぜんこくちうむらむらなよせりやうしゆき
越前國中村々名寄領主記 寫本一卷
足羽北郡、吉田郡、丹生北郡、今南東郡、今南西郡、今北東郡、南中條郡、坂南郡、坂北郡、大野郡、敦賀郡等に分ち、各郡高村高を記し、天平勝寶元年己丑〔一四〇九〕より、延寶八年庚申〔二三四〇〕までの領主五十七名を擧ぐ。人數改めの條に、元文元年丙辰〔二三九六〕の四月改を記せり。

ゑちぜんこじやうせき
越前古城蹟 寫本一卷 明石藤太夫
『越前國城蹟記』と同じく、國中の御所、城、舘、屋敷、斥候、陣取、御茶屋等の蹟を擧げて、氏名里程等を記せり。但し『越前國城蹟記』に比すれば、其の擧ぐる所至て少し。卷末に「七郡之古城蹟總括の數三百十六箇所」と記したるは古記の數なるべし。享保五年庚子〔二三八〇〕鯖江領主間宮氏の命によりて編輯したるものなりといふ。

ゑちぜんこめいかう
越前古名考 寫本一卷 坂埜 一藏
越前國の村高、國圖、國守、城蹟、寺院等の大略を記し、神社、戶口、山野、河海、產物等も其の一斑を擧げたり。著者年來、同國地志の大成を企て集むる所の材料中より、殊に拔抄して本書を成せりといふ。寬政十三年辛酉〔二四六一〕の自序、文化七年庚午〔二四七〇〕澁潴田剛の序あり。

ゑちぜんちづ
越前地圖 寫本一舖
今立、今南東、今南西、今北東、丹生、丹生北、足羽、足羽南、足羽北、吉田、坂井、坂南、坂北、大野、南條、南條仲、敦賀寺等の郡を分ち、福井、丸岡、大野、勝山、小濱、郡上、天王、丸山、鯖江、白崎、高柳、酒井、小林、狹山、幸若等の領を分ちたる着色圖なり。

ゑちぜんのくにがうちやう
越前國鄉帳 寫本一卷 松平兵部大輔
元祿十四年辛巳〔二三六一〕八月、越前國郡鄉石高の帳なり。村數一千五百四十一箇村にして、石高六十八萬四千二百七十一石八斗〇九合六勺を郡村別に列載す。

ゑちぜんのくにじやうせきき
越前國城蹟記 寫本一卷
國中御所蹟、城蹟、館蹟、屋敷蹟、陣取蹟等を列載して、氏名、里程、方位若くは幅員間數等を記せり。其の數を云へば、足羽郡に五十三所、吉田郡に十五、丹生郡に三十七、今立郡に三十一、南條郡に二十一、坂井郡に二十五、大野郡に二十九、敦賀郡に九等なり。

ゑちぜんひでやすきやうきふちやう
越前秀康卿給帳 寫本一卷
黃門秀康の家中諸士の分限帳にして、總高寺社を除て四百五十七人、六十八萬五千九百四十七石九斗七升五合と記せり。

ゑちぜんぶんげんちやう
越前分限帳 寫本一卷
慶長十五年庚戌〔二二七〇〕二月書上の越前〔後福井に改む〕の分限記なり。

ゑちぜんめいしようし
越前名勝志 寫本三卷 竹內 壽庵
越前各郡の山川海嶽、神社、佛閣、城池、戰場、郡縣、村落、古今の名號、稱呼等に至るまでを考記せる地誌なり。元文年中〔二千三百九十年代〕平泉春庵の序あり。著者竹內壽庵は芳契子と號す。

ゑちぜんめいしよしなんさう
越前名所指南草 寫本二卷 僧 祐可
越前諸名所を、古書古歌等に探りて一々考證したるものなり。文政五年壬午〔二四八二〕の自序、同年妻木直の序、天保十一年庚子〔二五〇〇〕高野進の跋あり。

ゑつごくき
越獄記 寫本二卷
延寶年中松平越後守光長の時、家老小栗美作の私曲より起りて、家中騷動に及びたる顚末を記したるものなり。

ゑつこくぐわいき
越國外記 寫本三卷
越前國主の變遷を記す。中納言秀康越前國へ入部してより、宰相忠直の不行績により、配流せられし始末を記し、其の後天和年間〔二千三百四十年代〕に至りて家士の騷動ありしことまでを記せり。

ゑつさんせうき
越杉小記 寫本一卷
越後上杉謙信、及び景勝の事績を記す。謙信の生出より慶安五年壬辰〔二三一二〕に至れり。卷首に越後の浪人大井田監物、後越前黃門秀康卿に御使番にて奉公したる人の作なりといふ。

えつざんぜんじごろく
悅山禪師語錄 四卷 僧 悅山
卷頭に「悅山禪師住攝津州南岳山舍利禪寺語錄」と題して、卷の一に上堂。卷の二に小參、示衆、頌古、機緣、法語。卷の三に佛祖讚、題跋、銘、行實。卷の四に序、記、書啓、祭文、疏、引、小佛事を輯め、末に谷雲集詩偈を附す。嗣法門人元密等の編輯するところなり。延寶五年丁巳〔二三三七〕華藏南源派合十の序、及び丁卯の歲高泉の序あり。
◉悅山のことは『因明卅三過本作法糾釋』の下にあり。

ゑつしうたかたがうぶんげんちやう
越州高田鄉分限帳 寫本一卷
寬永元年甲子〔二二八四〕越前忠昌の蹟を繼ぎたる後、光長越後高田に移りし時の分限帳なり。

ゑつしうたかたきふちやう
越州高田給帳 寫本一卷
越後守光長の高田二十六萬石を領したる時のもの

ゑつじんくわんきうろく
越人關弓錄　寫本二卷　増島　固

古書畫、古器物等に關する筆錄なり。著者諸友と毎月輪次に珍珠會をなして古書畫等の展玩をせる日、其の會に於て聞き得たるものを筆錄せりと。

◉増島固の傳は『讀易小言』の下に出す。

ゑつそうやわ
越叟夜話　寫本一卷

黃門秀康の事を主と記し、忠眞、忠昌の事に及び、光長越後高田を領する事に終る凡そ三十一條問答體に記せり。

ゑつちうき
越中記　寫本一卷　澤村　大學

細川三齋が、一生の忠節次第を記す、秀吉時代の忠節と家康に仕へての忠節とに分ち、年代を追うてこれを記せり。記して清巖和尚へ贈るところなり。『細川忠興記』また『澤村大學書』といふものと大同小異の書なり。

◉澤村大學のことは『澤村大學書』の下にあり。

ゑつちうきうじき
越中舊事記　寫本五卷

越中の名所、舊蹟、故事、古名人等の事を詳細記載したるものなり。五卷二冊に寫傳す。一名『越中志』とあり。

ゑつちうし
越中志　寫本五卷

一名『越中舊事記』の下に解題せり。

ゑつちうたてやまのづ
越中立山圖　寫本一鋪

新川郡なる立山權現の本社、末社、攝社等の諸堂、及び山中村落、木石等を圖し、圖端に登山里程等を記せり。

ゑつちうほんぱふじほけきやうりやくえんぎ
越中本法寺法華經略緣記　寫本一卷　僧　日遙

越中國婦負郡黒瀨谷なる長松山本法寺に於ける法華不可思議の緣起なり。卽ち嘉曆年中放生津の浦に、夜々靈光ありしを、浦人探り求めて、釋迦の靈鷲山に說きたる法華經二十八品二處三會說法開導圖貌を得たりといふ次第を記せり。嘉曆元年丙寅〔一九八六〕より、四百三十七年にあたるといふ。寶曆十二年壬午〔二四二二〕四月に作りたるものなり。

◉日遙は法華宗の僧にして、知光院の住僧なり。

ゑつとかさんしうし
越登賀三州志　寫本二十一卷　富田　景周

本書は分ちて鞬櫜餘光、來因槩覽の二とす。鞬櫜餘光十五卷は、越登賀の三國に關する事實を網羅したるものにて、上は永延元年丁亥〔一六四七〕より、下は萬治元年戊戌〔二三一八〕に至る、凡そ六百七十年。帝王十七代の事歷、百五十七條を掲げたり。これを本紀とす。來因槩六卷覽は神代以來、當時に至るまでの、三國に於ける治亂を主として、卽位、改元、將軍補任等の事を雜載せり。引用する所最も博く稗史野乘に及べり。寛政十年戊午〔二四五八〕の自序及び進書表あり。文化十年癸酉〔二四七三〕國主より幕府に進獻したるものなり。

◉富田景周は大賓と字し越後と稱す。金澤の臣にして、其の先は九郎右衞門とて、越前朝倉家に仕へたり。劍法家なり。其の孫治部左衞門また父祖の業を繼て富田流に妙を得、後に前田家に仕ふといふ。

ゑつぱんざつき
越藩雜記　寫本一卷

越前越後兩藩の記錄にして、天正年代より、明和の比に及べり。各家の典故事實等をも雜記せり。

ゑつはんしふいろく
越藩拾遺錄　寫本三卷　村田　氏春

越前國の起り並に加賀、能登を分る事より、丹波長秀北庄在城以來、城主代々の事歷等を記し、次に三國の湊、往還、山川、社寺、墳墓、產物等を揭げたり。寛保二年壬戌〔二四〇二〕伊藤元基の序あり。

◉村田氏春は越前の人にして、もと明石なりしが、出て村田氏を繼ぎ、心を學に注ぎ、本州の名區勝蹟の正史に漏るゝものを拾集して、此の書を成したりといふ。

ゑつはんやくにんなまへちやう
越藩役人名前帳　寫本一卷

越後高田德川家の役人、小栗美作、萩田主馬、岡島壹岐、片山主水、本多七左衞門、本多監物、渥美久兵衞の七大將以下諸役人の名を列載して、各其の知

行高を頭書せり。

えつもくせう
悅目抄　一卷　藤原　基俊

詠歌上に要用なる假名遣ひ、其の他の諸注意を記す。物をかなに書くやう、書き違へて惡かるべき假名の事、上に書かざる假名、下に書かざる假字の事、歌を詠む心得、題の歌の事、病を去るべき事、歌に數多體ある事、古歌を取る事、禁忌を去るべき事、歌につきたる雜談等の事を記述せり。著者の奥書に曰く、「右祕書は愚老以二一身才一所二註置一也」と。又正安元年己亥〔一九五九〕二月七日なる僞世の起請文あり。本書は一名を『和歌心撰集』又『更科記』とも云へり。

◉藤原基俊は歌學者なり。右大臣俊家の子にして文學あり。夙に和歌を好み、長じて自ら一家を成せり。官は從五位下左衞門の佐たり。保延四年戊午〔一七九八〕剃髮して覺舜と號す。著す所は悅目抄の外に新三十六歌仙、新撰朗詠鈔等あり。皆行る。

えどあんないじゆんけんづかん
江戸案內巡見圖鑑　一折　石川　流宣

寶永五年戊子〔二三六八〕日本橋書林山口屋の出版にして、城の內外繪圖を入れたる案內名所圖なり。

◉石川流宣のことは『日本圖』の下にあり。

えどうちめぐり
江戸內めぐり　一卷　本多　月樂

武藏國二十一郡の名、江戸方角見量圖、町中通安見、日本橋より諸方への道程、社寺略緣起、所付以呂波寄、諸大名屋舖付、六阿彌陀、御城年中行事、總年中行事、江戸名所以呂波寄、府外諸方への道程等を簡略に記したるものなり。延享三年丙寅〔二四〇六〕の自序中に、「此徒書紙屑にかい捨てしを、稻村茱取り集めて、江戸不知案內の一助になんと、梓にちりばめんと請ふに任せて、江戸內めぐりと名く」といふ。

◉本多月樂は安勝子と號す。別著に『御伽夜話』四卷あり。

えどうみないぐわいえんかいちづ
江戸海內外沿海地圖　寫本三鋪

東海道線は荏原郡品川驛より駿河府中までを圖し、中山道線は本鄕追分より厥驛までを圖し、日光道中は千住驛より草加驛に至り、東方は下總國葛飾郡より常陸國鹿島郡に至るまでを圖し、三鋪連續して江戸內外の沿海地理を明にせり。

えどゑづ
江戸繪圖　五折

江戸の地圖にして、第一折御曲輪一圖を、寬文十年庚戌〔二三三〇〕十二月版行し、第二折深川、本庄、淺草を、同十一年卯月。第三折淺草、下谷、上野、谷中、湯島、本鄕、小石川、駒込、染井等を、同十一年霜月。第四折小日向、牛込、市ヶ谷、四谷、高田、大久保、內藤宿等を、同十二年閏六月。第五折赤阪、青山、麻布、澁谷、白銀、三田、芝、高輪邊までを同十三年二月に版刻す。序例に訴訟を以て版行せる故他に類版なき由を云へり。

えどおほとみしふ
江戸大富集　一卷

江戸各所の富圝の掛高、札數、札料等を記せるものにして。卷末には富圝の表數種を載せたり。文政十二年己丑〔二四八九〕の刊行なり。

えどがはどほりかはよけいりひくみあはせ
江戸川通川除圦樋組合　寫本一卷

江戸川通行德領、小金領、庄內領、川除圦樋の組合村名より、各組領分の石高を記し、東西川邊の諸領諸村を列擧し、卷尾に、諸領組合の村數、大概を擧げ、凡そ三百八十四箇村程を記せり。

えどきんざいしよめいしふ
江戸近在所名集　寫本一册　鶴海　一漁

江戸を主として、湯島より神奈川に至る間百餘所、戸塚より下東海道及び京大阪伏見に至る所々の地名を出せる發句を集載したるものなり。硯學文旅といふものゝ序に據れば、曾て著したる古今俳諧の發句地名を出せるものを拔萃して、版にしたるを、更に其の中より拔萃して此の書を成せる由也。

◉鶴海一漁は江戸の俳諧點者なり。別に『後編所名集』の著あり。

えどくわんやく
江戸官鑰　寫本三卷

內に『江戸官鑰祕鑑』と題して、江戸の雜事を記載せり。例せば、町人脇差帶する譯の事、芝車町牛町

の事、並に牛の數、牛の價の事、淺草三十三間堂濫觴の事等以下數十項あり。

えどこゑづふろく

江戸古繪圖附錄 寫本一卷

「慶長年中江戸古繪圖」の附錄として單行す。內藤若狹守淸次より、大久保石見守長安に至る五十二名の氏名を錄し、其の首に各略譜を記したるもの。

えどごてんのづ

江戸御殿之圖 寫本一折

江戸城廓殿の內外を最も詳細に彩圖したるものなり。座每間每を明記し、外縁內庭一として細示せざるはなし。

えどごほんまるおほおくごてんむきづ

江戸御本丸大御奥御殿向圖 寫本一折

江戸本丸奥御殿向圖の最も精密なる分間圖なり。今見るところは文久三年癸亥〔二五二三〕橘實成の寫本するところなり。

えどさんぎん

江戸三吟 一冊 伊藤信德

信章桃靑及び信德の三吟俳諧にて、延寶六年戊午〔二三三八〕三月中旬の編にかゝる。

◉伊藤信德の傳は「雛姿」の下にあり。

えどし

江戸志 十一卷 近藤義休

卷一武藏國名義より始めて、種々の沿革變遷を記し、卷尾城北世繼稻荷より牛込御門、城艮〔丑寅〕三河町より觀音坂までを記し。卷二は淺草今戸橋、新鳥越、山谷、小塚原、千住。卷三は湯島、本江、上野、下谷。卷四は谷中、駒込、染井、平塚、川口。卷五に小石川、巣鴨、板橋。卷六に芝、三田、品川、鈴森、矢口。卷七に赤阪、靑山、澁谷、世田ヶ谷、麻布、白銀、目黑。卷八に市ヶ谷、大久保、四ツ谷、中野、代々木、武藏野。卷九に牛込、高田。卷十に小日向、目白。卷十一に深川、猿江、本所、中の鄕、柳島、龜戸、小梅に終れり。本書は體裁を「江戸砂子」に擬りたるものなるべけれど、記すること最も詳細にして、考證また確實なり。十一卷六册に版行せり。

◉近藤義休は江戸旗下の士にして金八郎と稱す。題して「東武懷山子輯著歷積校正」と記せり。

えどしけいづ

江戸氏系圖 寫本一卷 谷田部彥六

先祖田原藤太藤原秀鄕より出でて本名那珂を、中途江戸と改め、後水戸と改む。元祿十年丁丑〔二三五七〕二月二日卒去せる水戸平兵衞朝榮の子、水戸市之進朝張〔越前家に仕ふ〕までの系譜を記せり。

◉谷田部彥六は名を通諦(ミチナガ)といふ。水戸の彫刻師なり。〔謂はゆる水戸彫の中興〕初、功阿彌の門に入り、後利壽の弟子たり。

えどじしやちやう

江都寺社帳 寫本一卷

江戸中の寺社を、淸水御門內、小川町、駿河臺、柳原以下數十地名によりて、列擧したるものなり。各社寺共、其の地領、宗派、在所等を明記す。寶曆年間の古蹟寺社帳改正を記せるもの多くして）其の後の年代を見ず。

えどしゆくいつけん

江戸宿一件 寫本二册

幕府評定所より引繼ぎたる書類にして、內閣文庫に保存せり。天保二年辛卯〔二四九一〕のものたり。

えどしよくくわんへう

江戸職官表 寫本一卷

慶長五年庚子〔二二六〇〕以下、延享二年乙丑〔二四〇五〕に至る江戸の諸職官を表に記したるもの也。

えどしよくにんうたあはせ

江戸職人歌合 二卷

江戸職人五十種を撰びたる二十五番歌合なり。文化二年乙丑〔二四六五〕七月十日江戸淺草寺に於て催されたるを磯部千貝といふもの閲したりといふ。同五年伊豫藤原泰周の序あり。石原正明奥書を附せり。按ずるに、同人の作歟。

えどしんみち

江戸新道 一册 池西言水

檀林派の俳諧を主として集めたるものなり。延寶六年戊午〔二三三八〕八月の撰。近年發行の俳諧文庫第三編「芭蕉以前俳諧集」下卷中にも收めたり。

◉池西言水の傳は「東日記」の下にあり。

えどすゞめ

江戸雀 十二卷 菱川師宣

江戸の地理書にて、第一卷御城の始並に年中規式の事、大手口屋敷付等を記し、第二卷麴町、番町、駿河臺、第三卷町中案內者、第四卷日本橋より金杉まで、第五卷大芝、第六卷赤坂、四谷、市ヶ谷、第七卷牛込、第八卷小石川、第九卷神田、第十卷淺草、第十一、十二卷に本庄を記せり。書中明曆火災の事を詳記せれば、其の後の編述なること知るべし。自序あれど年代を記さず。

◉菱川師宣の傳記は「異形仙人繪本」の下にあり。

えどすゞめ

江戸爵 三卷 山崎景貫

江戸名所の狂詩五十餘種に狂歌の題詠を附せしものなり。天明六年丙午〔二四四六〕の刊行。著者は「朱樂館主人」の狂名を記せり。

◉山崎景貫は狂歌師朱樂管江の事にて、朱樂館主人と號す。牛込二十騎町に住みて幕府の先手與力たり。和漢の學に通じ狂歌を以て聞ゆ。著書に大抵御覽、狂歌大體等あり。光格天皇の寬政十年戊午〔二四五八〕歿せり。

えどすなご

江戸砂子 八卷 菊岡沾涼

江戸の名所溫故誌なり。著者が凡例の一節を擧げて、本書の組織を示さん。「凡編集の序次、新古に拘らず御城を以て始とす。首卷は先武陽の大意を論じ、次に御城を始として御外曲輪の內に終る。第二は江城の東淺草橋場に始め、下谷千住に終る。第三は江城の艮、湯島、谷中に始め、駒込、小石川に終る。第四は江城の乾、牛込、四谷に始め、赤坂、澁谷に終る。第五は江城の南、芝西久保に始め、品川目黑に終る。第六は河東、深川、本所に始め、龜井戸、隅田川、眞間に終る」と。而して各條神社佛閣舊蹟の來歷、及び方角等を記せり。享保十七年壬子〔二三九二〕の原撰にして、明和七年庚寅〔二四三〇〕に恆足軒之れを再校增補して、同九年壬辰に刊行す。

◉菊岡沾涼は俳人なり。初の名は房行、通稱は藤右衞門といふ。崔下庵とも號せり。俳句を芳賀一晶に學び、後、內藤露沾に學びて沾凉と改む。櫻町天皇の延享四年丁卯〔二四〇七〕六十餘にして歿す。

えどせいえう

江戸政要 寫本一卷

江戸市中の民政取扱の諸制度を記せるものにして、梵杭建替の事、質田畑出入の事、返納米の事等より、制札高札の事、火消寄場の事、振舞膳部御定の事等に至る、凡て三十五箇條あり。大抵寬永、寶永、元祿、寬文年間の事に屬す。

えどそうがのこ

江戸惣鹿子 七卷

江戸の地誌にて、卷一に江戸略圖、諸大名屋敷付、居城、海陸遠近付、御老中、御側御用人、若年寄、御側衆、寺社奉行、御留守居年寄、火消御番の氏名等を記し、卷二に坂、堀、池、瀧、井水、山、石、谷、川、原、岡、窪、森、橋、時鐘、渡、淵、野、礒、島、堤、土手、馬場、的場、塚等の名を寄せ、卷三以下に御城年中行事、神社佛閣年中行事其の他の地誌的雜事を記載す。一書の體裁「京羽二重」に倣ひて部僅なること多しといへども、材料を集むること多し。元祿二年己巳〔二三四九〕の自跋及び松月堂不角の序あり。著者の姓名を著さゞれど、「江戸總鹿子名所大全」に據れば、藤田某の作なることを知る。

えどそうがのこめいしよたいぜん

再版增補 江戸惣鹿子名所大全 七卷 奥村玉華子

江戸の地誌なり。元祿三年庚午〔二三五〇〕の秋、藤田某の作れる「江戸惣鹿子」の、年を經舊梓磨滅せるによりて、字を改め、版を新にし、材料を增訂して、此の編を成せりといふ。神社類聚、寺院類聚、諸所靈佛類聚、分類名所舊蹟、名所古蹟町々小路、小名、江都年中行事業等を記せり。寬政四年辛未〔二四一二〕の自跋ありて、十二支の十二册に附卷一册を添へ横本に印成す。

えどちりひろひ

江戸塵拾 寫本二卷 芝蘭室主人

江戸の神社故蹟を記しゝものなり。明和四年丁亥〔二四二七〕の自序に、「江戸砂子の塵をひろひ、上下ふたまきの册子となす」云々と云へり。

えどづかんかうもく

江戸圖鑑綱目 二卷 石川俊之

江戸の地誌、地圖にして、上卷には江戸町內の異名、神社佛閣、諸商人諸藝者の住所等を記し、下卷は、社寺、及び諸侯幕臣等邸宅の地圖なり。其外藩主の名、所領石高、邸宅所在の町名等を記せる表を添へたり。元祿二年己巳〔二三四九〕の編なり。

◉石川俊之の傳は「日本圖」の下にあり。

えどにつき

江戸日記　三卷　高山　正之

高山彦九郎の江戸日記帳を版刻したるものなり。表題を『高山仲繩遺墨』といふ。寛政元年己酉〔二四四九〕冬十月三日に始り、同十一月二十二日に終る。凡そ五十日間の直筆日記なり。東京栗子還の識せるものを版刻したるものなりといふ。諸家の序跋等あり明治四年辛未〔二五三一〕版行す。

◉高山正之は彦九郎と稱し、仲繩と號す。上野國新田郡細谷村に生る。年十三甫めて『太平記』を讀みて建武中興の忠臣、中途にして斃れたるを視、慨然として憤る。長ずるに隨て奇節あり、議論慷慨、忠誠人を動す。常に四方を周遊して文武の賢豪と交る。晩年筑後に遊び久留米藩士森嘉膳〔一に宮川嘉膳といふ〕の宅に自殺す。人、其の所以を詳にせず。時に寛政五年癸丑〔二四五三〕、年四十餘なりきと。

えどはいかいあはせ

江戸俳諧合　二册　榎本　其角

杉風と共に編輯したるものにて、桃青の判あり。東山天皇の元祿中〔二千三百五十年代〕の編にかゝる。

◉榎本其角の傳記は『句兄弟』の下にあり。

えどはうがくあんけんづ

江戸方角安見圖　二卷

上卷は第一品川口より、第三十九染飯に至り、下卷は第一巣鴨關口より、第三十九永代島築地に至り、凡て七十八圖、圖毎に東西南北を印せり。靈元天皇の延寶七年己未〔二三三九〕二卷二册に發行す。

えどはうがくあんけんづかん

江戸方角安見圖鑑　二卷　表紙屋市郎兵衛

江戸の地理を詳細に彩圖して、大册子に作りたるものなり。從來の大繪圖の大にして、隘き處にて見るべからず、さりとて細書したるものは讀むに難く、且また折目遂に破損することあるより、普通の書册體に作り、執覽、閲覽、搜索等の便を謀れるなり。靈元天皇の延寶七年己未〔二三三九〕三月の自序凡例等を附し、翌八年大本二册に版行す。

◉表紙屋市郎兵衛は江戸淺草橋通り瓦町にて表紙業たり。地圖類を發行せしこと多し。

えどはうがくめいしよづゑ

江戸方角名所杖　二卷　又玄齋南可

簡單なる江戸名所の獨案內なり。此の書、もと、童兒の手習に用ひし『江戸方角』の下に、其の來歷を記し、童蒙をして、江戸名所の方角を知らしめん爲に作れり。慶應二年丙寅〔二五二六〕に新刻す。

えどばうきんづ

江戸傍近圖　木版一舖　古川　辰

城を中央として、其の四面十二支を掲げて全圖の方角を示す。東は本所より起りて利根川に及び、西は內藤新宿より、芝崎村芋窪新田に至り、南は品川より荏原郡界に至り、北は瀧野村より蓮沼村中臺村に至り、圖中各村の高付風土等を記せり。寛政年中、幕府の命を受けて、近郊を巡り、神社寺院古蹟等を搜索したる時作りたるものなり。

◉古川辰の傳記は『東遊雜記』の下にあり。

えどはつぴやくゐん

江戸八百韵　一册　竹內　幽山

言水、素堂、一鐵、如流、安昌、青雲、泰徳等の連句を集めたるものにて、延寶六年戊午〔二三三八〕三月の版なり。近年發行の俳諧文庫第三編『芭蕉翁以前俳諧集』下卷中にも收めたり。

◉竹內幽山は江戸の俳人にして、本町河岸に住せり。松江維舟の門人にして、高野丁々軒と號す。句あり「花をふんでたゞうらめしき鐘の聲」といふ。元祿年中藤堂侯に仕へて竹內爲入と稱し、伊勢久居に歿せり。

えどはなし

江戸咄　七卷

江戸に關する雜話筆錄なり。武藏國の故事、御城の方角、大名小名の屋形、江戸御城の由來、其の他寺社市街等の緣起盛衰等、史傳俗說によりて書記せるものなり。

えどはんじやうき

江戸繁昌記　九卷　寺門　良

天保年間江戸市中の光景を記す。相撲、吉原戲場、千人會、淺草寺、楊花等數十の綱につきて、其の繁昌隆盛なる樣を記せり。全編漢文に物して文章亦讀むべし。天保二年辛卯〔二四九一〕五月の著。

◉寺門良は江戸の儒者なり。寛政八年丙辰〔二四五六〕に生る。字は士溫、靜軒と號す。性磊落にして清貧を甘んず。『江戸繁昌記』を著すを以て法憲に觸れ、復た儒として立つことを得ず、後新潟に寓せり。著述には江戸繁昌記の外、新潟繁昌記、靜軒一家言、靜軒漫筆、江頭百詠、靜軒文鈔等あり。明治元年戊辰〔二五二八〕二月二十四日、七十三にて歿す。

えどぶけんゑづ

江戸分間繪圖　一折

當時毎月改正の繪圖にして、藍染北居沾涼の圖するところなり。此の書は延享五年戊辰〔二四〇八〕の版なり。江戸日本橋若菜屋小兵衛の藏版に係る。

えどぶしこんげんき

江戸節根元記　二卷　柳　雅

河東一流の根元を旨と述べたるが、兼れて關東に起れる他の諸曲のことをも敍し、其の來歷、故事等を詳にせり。天明文化間の作なるべし。著者の傳詳ならざれど、恐くは其の當時の人ならん。

えどべんけい

江戸辨慶　一册　池西　言水

檀林派の俳句を主と撰集したるものにて、延寶八年庚申〔二三四〇〕成る。近來發行の俳諧文庫第三編『芭蕉翁以前俳諧集』下卷中にも收む。

◉池西言水の傳は『東日記』の下にあり。

えどまちかゞみ

江戸町鑑　一卷

御關所付り町奉行並に組與力同心氏名、兩國橋の火消、江戸方角付町火消以呂波付、江戸町火消組合纏付、本所深川方角町火消纏付、總町名主付、名主組合付、坂、堀其の他の地名等を記し、日本橋より諸方への道程を示す。本書は寶曆中に坂本某の増補したるものなりといふ。一卷二册に發行す。

えどまちかゞみ

萬世江戸町鑑　二卷

江戸町內の雜記にして、記載の事項を略擧すれば、町奉行の紋並に道具等、町內の與力同心等、火消組、町々名主組合、町々支配附等あり。又首書には同名町類聚、屋敷町小名、橋名寄等あり。文化十五年戊寅〔二四七八〕に刊行せり。

えどむらさき

江戸紫　一册　野々口立圃

著者の俳諧集なり。編輯の年月を記載せず。

◉野々口立圃の傳記は『をさな源氏』の下にあり。

えどめいしようし

江戸名勝志　三卷　藤原　之廉

上卷に總論、大概圖等を掲げ、貝原益軒の『京都めぐり』に傚ひて、東北方初一日より、南方第十二日に至る見物順に記し、中卷に考異辨正三十餘條、『江戸鹿子』、『江戸砂子』の誤を正し、下卷に寺院略記部を掲げたり。凡例に「凡江府の地名、其の大なるもの三十二を掲げて綱領とし、零碎なるものは六百許、事を其の下に附し、條目とす。其の註解は諸書を參考して、皆的實分明なるものを纂集す」といへり。延享三年丙寅〔二四〇六〕の自序あり。三卷三册に發行す。

◉藤原之廉は南陽子と號す。

えどめいしよき

江戸名所記　七卷

卷第一に武藏國名義より、新堀村七面明神に至る十五條。卷二に駒込村吉祥寺より、淺草誓願寺に至る十五條。卷三に神田天澤寺より、深川泉養寺付り神明に至る十四條。卷四に本所回向院より、芝增上寺に至る七條。卷五に瑠璃山遍照寺より、池上本門寺に至る十條。卷六に目黑不動より、小石川極樂の井に至る十條。卷七に小石川傳通院より傾城町吉原に至る九條。凡て八十條を記載す。寛文二年壬寅〔二三二二〕京師に印行したるものにて、頗る疎漏の作なれど、當時の風俗圖等は見るべきもの多し。

えどめいしよづゑ

江戸名所圖會　一卷　十返舍一九

江戸名所の滑稽畫に狂歌を題したるもの。畫は著者の自筆、歌は著者、及び友人のを集めたるなり。文化十年癸酉〔二四七三〕に刊行せり。

◉十返舍一九の傳記は『道中膝栗毛』の下にあり。

えどめいしよづゑ

江戸名所圖會　七卷　齋藤　幸雄

詳細なる江戸の繪入地誌なり。北斗七星の位置に配當して、全部を七部七卷に分ち、江戸町內の神社佛閣名所古蹟は、一も洩すことなく、數多の繪畫を挿み、古奇を引き、詳細平易に解說せり。此の書は、編者の孫なる齋藤幸成〔月岑〕の端書に「此の書は、祖父〔齋藤幸雄〕が寛政中の編にして、父縣麻呂〔齋藤幸孝〕が删補、文化に至て成り、文政の今に至て

上梓の功を終りぬ。凡そ年序を經ること三十有餘年」といへる如く父子三世を經て完成したるものなれば、其の詳細なること知るべし。天保三年壬辰〔二四九二〕松平冠山同癸巳年、龜田長梓、片岡寛光の序、及、光格天皇の寛政十二年庚申〔二四六〇〕の自序あり。文政三年庚辰〔二四八〇〕上梓の事を始め十五年を經天保七年丙申〔二四九六〕に至りて全部七卷二十冊の刻刊成れり。
◉齋藤幸雄は通稱を市左衞門といひ、秋濤軒、長秋等の號あり、神田雉子町の里正たり。寛政十一年己未〔二四五九〕六十三にて歿す。

えどめいしよはなごよみ
江戸名所花暦　三卷
江戸近郊の花月に著名なる地名、其の故事來歷等を圖畫を挿入して記せり。綱を春夏秋冬の四に分ち、目を春の部は黄鸝、梅、椿、櫻、梨、欵冬、菫、櫻草。夏の部は、藤、躑躅、郭公、牡丹、楞、杜若、卯の花、盧橘、水鷄、合歡木、螢、蓮、納凉。秋の部は、牽牛花、七草、萩、月、蟲、菊、紅葉。冬の部は、寒菊、水仙、寒梅、山茶花、枇杷、茶の花、楠、松、枯野、千鳥、雪等の四十に分ちたり。岡島某の著。文政十年丁亥〔二四八七〕刊行す。

えどめいしよばなし
增補 **江戸名所咄**　六卷
武藏國の事、御城の方角並大名小名の屋形、江戸御城の由來、內廓外廓の御門並知足院、日本橋より北の方の町等より數十目に分ち、江戸の雜事を圖入に綴りたる地理書なり。六卷四册に版す。何時何人の作なるかを詳にせず。

えどよりにつくわうざんまでいつすぢ
從江戸日光山迄五筋　寫本一卷
書名の著す如く、千住通、岩淵通、板橋通、壬生通、宇都宮通の五筋を彩色圖して、里程、道筋の休泊所、城主、寺院、領主、地頭等を記せり。

えどよりまつまへまでのかうていき
自江戸松前迄之行程記　寫本二卷
江戸より松前に至る行程を記し、道筋の地理的事績を概記せり。

えどわうばくぜんさつき
江戸黄檗禪刹記　寫本五卷　不輕居士
江戸中なる黄檗派の寺院を網羅して、各由來、緣起、住職及び其の略傳、檀越墳墓等を略記し、碑文詩偈和歌俳諧等を舉げたり。卷首に隱元以下二十八代眞白和尙に至る二十八代間の歷代を表示し禪刹支派を系圖せり。文政十年丁亥〔二四八七〕十一月の自序あり。

えどわかしふ
江戸和歌集　二卷　蜂屋光世
歌集なり。文久三年癸亥〔二五二三〕の自序、同二年壬戌の井上文雄、橫山由淸の跋あり。
◉蜂屋光世は武家の人にして、源氏を稱せり。文學は小山田與淸の門人にて、著書は之れよりさき、『大江戸倭歌集』六卷を著せり。

えどわらべ
江戸童　三册
地誌『京羽二重』『江戸鹿子』等に倣ひて作りたる江戸の地誌。江戸方角略圖より、坂、堀、池、瀧、井水以下馬場的場、其他の名寄、社寺の年中行事等より、あらゆる地誌的事項を記し、遂に江戸八景、諸師諸藝諸職名匠諸商人等の事に及び巨細に雜集せり。著者を詳にせず。卷數を分たず三册に印行す。

えどわりゑづ
江戸割繪圖　八鋪　瀨名貞雄
番町の繪圖一鋪、瀨貞雄と、依爲賈との合著にして寶曆五年乙亥〔二四一五〕刻する所なり。永田町繪圖一鋪瀨貞雄の著すところにて同九年の刻。本所深川の繪圖一鋪書肆出雲寺和泉の藏版にて、同十一年の刻。駿河臺小川町の圖一鋪依爲賈の作、明和元年甲申〔二四二四〕の刻。下谷淺草の繪圖一鋪瀨貞雄と吉田知流との合著にて、同四年の刻。濱町神田日本橋北の繪圖一鋪、瀨貞雄と川伯豐との合著、同七年春の刻。本鄉、谷中、丸山、小石川の繪圖一鋪、鼎峩の作、同年夏の刻。築地八丁堀、日本橋南の繪圖一鋪鼎峩の作、安永四年乙未〔二四三五〕の版刻にかゝる。本圖は蓋し最初瀨名貞雄の發企によりて、同志間にて順次編輯したるものなるべし。
◉瀨名貞雄は江戸の人にして、源五郞と稱し、狐阡翁と號す。幼より武家故實を研究し、また慶元以來の事實に精しく博識の有職家を以て稱せられたり。德川幕府に仕へ、寛政中小普請より、右筆組頭となる。著書は本書の外に、室町殿一禮記、關東補

任記、稱謂考、殿上故實附記、關東行賞錄、武家職掌分類、將軍宣下異同考。武家名目抄、落翰譜續編、今川家式、十二月故事、射術問答、手留記、二十種祕書、十種祕書、四季問答、內外書遺筆記、兩流系譜、瀨田德復記、狐阡翁雜記等あり。寛政八年丙辰〔二四五六〕十月四日、八十一にて歿す。四ッ谷南寺町妙光寺に葬れり。

えのこしふ
犬子集　五卷　松江維舟
貞門の諸俳人重賴、立圃、西武、卜養、德元、望一、玄札等の作、及び上古の俳諧を網羅したるものにて、發句一千五百餘、附句千句餘あり。寛永十年癸酉〔二二九三〕の作なり。『犬子集』の名は、山崎宗鑑の『犬筑波集』を慕ひての名なり。「犬子」また「狗猧」とも書せり。近年發行の俳諧文庫第三編『芭蕉翁以前俳諧集』下卷にも收めたり。
◉松江維舟は雲州松江の人にして、京都に住せる俳人なり。名を重賴、通稱を大文字屋治右衞門といふ。維舟は剃髮後の號なり。松永貞德の門人にて、毛吹草、時世粧、浮世長刀、懷子、溜池、阿こぎ、大井川、乳母、佐夜中山、武藏野等の著あり。延寶八年庚申〔二三四〇〕六月下旬、七十四にて歿す。

えのしまおほざうし
江島大草子　二卷　僧因靜
相州江の島の地誌にして、上卷に鐵島涌出付鳥居諸堂、二王門、鐘樓、神庫、岩屋、本宮、岩本院、御朱院等の事より、上の宮創建付神門鐘樓、其の他の事を記し、下卷に島の入口鳥居より圓可寺まで十六箇所の事其の他產物を記し、僧傳を揭ぐる等稍詳なり。寶曆四年甲戌〔二四一四〕の自序に、「名江島大草子、以對鎌倉大草子也、登鎌倉山者、必涉于此、涉于江島者、必登于彼、繇此得名焉」といふ。僧眞海の跋もあり。
◉因靜のことは『東渡筆談』の下にあり。

えのしまかまくらあんないき
江島鎌倉案內記　二卷　葛郛
本書舊題『山東遊覽志』と稱したるを、書肆の改題したるなりといふ。從つて解題は『山東遊覽志』の下にせり。

えのしまのづ
江之島圖　一鋪
相州鎌倉郡なる江之島圖なり。山を金龜山といふ。一山の宮社、坊院、鐘樓、護摩堂、小宮末社の鳥居、石磴、池泉、巖石及び山麓の傳舍茶店に至るまで悉く圖出せり。

ゑはうのかゞみ
惠方の鏡　一卷
種々の譬喩を以て、教戒を寓意せる隨筆なり。元祿六年癸酉〔二三五二〕出版す。

ゑはうのかゞみぐさ
惠方のかゞみ草　一卷
夢合の書なり。むしくらひ念佛、らく馬の咺、須磨明石、蝦と蟹の事、茶と酒のかん等の面しろき夢話を書き載せ、狂歌繪圖等を入れたり。元祿六年癸酉〔二三五二〕の出版。

えひめのおもかげ
愛媛面影　五卷　半井梧庵
伊豫國の地誌にして、沿革變遷古記等より、各郡村社寺名蹟等繪圖を入れて詳說す。卷一に宇摩、新居、周布、桑村。卷二に越智、野間。卷三に風早、和氣、溫泉。卷四に久米、伊豫、浮穴、喜多。卷五に宇和郡を揭ぐ。慶應二年丙寅〔二五二六〕七月五日の自序、同犬塚圭水の序、同三年男平野榮の序等あり。
◉半井梧庵は伊豫今治の人にして、法橋たり。著書は本書の外に、古事記傳略、玉鉾百首解演義、歌格類選、續歌格類選、鄙のてふり、同後編等あり。

えびらのこと
箙之事　寫本一卷
『伊勢弓馬叢書』中の一書にして、箙を彩色圖說したる五枚の册子なり。永正元年甲子〔二一六四〕十月淸運の奥書あり。

えびらのしよ
箙之書　寫本一卷　伊勢貞丈
箙の各部分につきて詳解圖說したるものなり。明和二年乙酉〔二四二五〕十月廿四日貞丈の著、文久元年吉良盛德、寫本書入せり。『弓馬祕藏』中に收む。
◉伊勢貞丈の傳記は『安齋叢書』の下にあり。

ゑふぐ
衞府具　寫本一卷　藤原冬良
衞府具の故實を記す。奥書あり、曰く「左金吾基春

卿の所望に依りて禿筆を下し訖ぬ、永正十年(二一七三)孟冬從一位在判」と。その他二三の奥書あり。
◉藤原冬良の傳は「官位令」の下にあり。

えふくわうき
葉黄記 本寫 五卷 葉室 定嗣
寛元寶治の頃の朝廷の儀式、廷臣の參覲等に關する記錄なり。著者の官中納言(唐名黄門)たりしより、姓の一字と併せて「葉黄記」の書名を撰べり。第一卷には歴仁元年戊戌(一八九八)六月二十三日、親王出家に就て定嗣卿の記、寛元四年丙午(一九〇六)正月より三月までの日記等を載せ、第二卷には同年四月より六月までの日記、第三卷には同年七月より十二月までの日記、第四卷には同五年丁未正月より四月までの日記、第五卷には寶治元年丁未(一九〇七)五月より九月までの日記を載せ、少しく同三年の記事にも及べり。
◉葉室定嗣は正三位にして中納言たり。本書の外に「寛元御譲位記」一卷の著あり。五世の孫光資、南朝に仕へ斷絶せり。

ゑふくわんしやうぞくせう
衞府官裝束抄 本寫 一卷
裝束事、官なりたる悦の次第、行幸供奉事、行幸供奉次第、列次第、御即供奉事、大嘗會供奉事、内侍所御行、五節大歌召人事、警固作法、檢非違使加茂祭渡事、隨身次第、臨時祭行幸舞人、賀茂祭使事、御幸供奉事。以上の數條を記せり。卷端卷末共に闕文に屬し、正和三年(一九七四)十二月六日と末記す。「續群書類從」卷三百十三、裝束部第三にあり。單行本は「衞府裝束抄」と表題せり。

ゑふざつろく
衞府雜錄 本寫 一卷 荷田 在滿
番所の事以下衞府の雜事を筆錄せり。凡そ十篇に分つ。
◉荷田在滿の傳は「羽倉考」の下にあり。

ゑふしやうぞく
衞府裝束 本寫 一卷
衞府裝束、衞府長裝束抄、九條禪閤腋行說、淺浮抄、諸鞍日記等を輯めたり。各書夫々の奥書あり。

ゑふしやうぞくせう
衞府裝束抄 本寫 一卷
本書は續群書類從本によりて、「衞府官裝束抄」の下に解題せり。

ゑふながしやうぞくせう
衞府長裝束抄 本寫 一卷
宿徳服の事。小直衣の事、内衣直垂の事、切付の事、手綱の事、泥障の事、異文袍の事、其の他の數項を記し、末に儉約條々を擧げたり。「續群書類從」卷三百十三、裝束部第三に收む。別に「衞府長裝束記」として單行せるもあり。

えぼくしふ
衣幞集 本寫 一卷 僧 覺洲
僧尼の衣服座具等の律制を記したるものなり。四分律、五分律、十誦律、僧祇律等の諸部の律書及び西域記、南海寄歸傳等の諸書の文を引き、更に著者が其の梵音譯語寸法色彩形狀等を詳細に考證解說したるものなり。卷尾に「享保十二歲丁未(二三八七)之舍霜月摩統無漏山華嚴道場覺洲鳩撰」とあり
◉覺洲は眞言宗の僧なり。

えぼしばこ
烏帽子箱 四册 喜田村立以
俳諧を集めたるもの。編輯發行の年月は詳ならず。
◉喜田村立以のことは「入聟集」の下にあり。

ゑほんあさかやま
繪本淺香山 一卷 西川 祐信
元文四年己未(二三九九)出版の婦人畫集なり。祐信が同種の繪本には、倘、繪本答話鑑三、繪本喩草三、繪本玉かづら二、繪本清水池三、繪本池の心三、繪本勇者鑑三、繪本和泉川三、繪本艤覺種三、繪本女貞木三、繪本部草紙三、繪本筆津花三、繪本河名艸二、繪本徒然草三、繪本双の岡一、繪本都鳥三、繪本三幅對三、繪本倭比事十、繪本圖貨三、繪本必用三、繪本十寸院三、此の外、女中風俗玉鑑二、光林道知逸三、美女雛形三、雛形染色山、雛形音羽瀧、雛形立田川等あり。
◉西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんあづまみやげ
繪本東土產 四十卷 山東 京傳
江戸近邊古今の雜話を圖出したるものにて。享和元年辛酉(二四六一)以後の編なり。
◉山東京傳は「小說浮牡丹」の下に傳す。

ゑほんあつめぐさ
繪本集草 四十四册
種々の黄表紙(滑稽小話)類を收集合成して、一の叢書としたるものなり。

ゑほんいさなぐさ
繪本勇名草 三卷 寺井 尙房
素盞嗚尊、神功皇后以下三十二人の武勇者を圖したるもの。寶曆十一年辛巳(二四二一)岡孟雅の序、同年刊行。
◉寺井尙房は浪華の畫工なり。

ゑほんいふくひながたもやう
繪本衣服雛形模樣 三卷
衣服の模樣繪雛形、凡て百六十四種あり、毎種その名を記す。享保十三年戊申(二三八八)第三册を發行す。畫者は万字軒中村丹次郎、橘守國等なり。

ゑほんえどざくら
繪本江戸櫻 一卷
江戸の名所を彩圖して、上に各所の大略を記す。享和三年癸亥(二四六三)十返舍一九の序あり。

ゑほんえどみやげ
繪本江戸土產 十卷
江戸各地の名所を圖繪し、その傍に同所の大略を細書す、繪は彩色を以て作り、初編より十編に至る。

ゑほんえどむらさき
繪本江戸紫 一折 宇田川豐廣
江戸八景を彩畫す。江戸八景とは、上野晩鐘、日本橋晴嵐、愛宕秋月、兩國夕照、吉原落雁、佃島歸帆、待乳山夜雨、三圍暮雪等なり。式亭三馬これが序を成せり。
◉宇田川豐廣(宇田川を或は歌川に作る)は江戸の人にして、一柳齋(或は一龍齋に作る)と號し、藤次郎と通稱す。歌川豐春に就て浮世繪を學び、遂に此の技に長じ、寛政の末年より筆を草雙紙の繪に執る。長編の挿畫は豐廣に始れりといふ。また摺繪、一枚摺等をも畫く。文化十一年甲戌(二四七四)五月二十三日歿す、年五十六。

ゑほんをぐらやま
繪本小倉山 三卷 西川 祐信
小倉百人一首の歌を列ね、畫繪を加へたり。醉墨子の序あり、寛延二年己巳(二四〇九)出版す。
◉西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんおとなあそび
繪本大人遊 三卷
當世大人の滑稽遊戲四十餘を集め圖したるものにて、作者は兵三子、畫者は畑山山人とあり。寛政四年壬子(二四五二)山東京傳の序あり。

ゑほんをんなざつしよ
繪本女雜書 五卷
婦女の注意すべき事共を圖出したるものにして。圖上に詳しく說明せり。卷一を相生之部、卷二を天笠之部、卷三を干支之部、卷四を月日之部、卷五を時兒之部とし、寛政十三年辛酉(二四六一)版行。

ゑほんかうきやう
繪本孝經 一卷 北尾 政美
孝經の本文に平かなを附し、諸釋をも加へ、更に自筆の畫を挿入して子女の讀本としたるものなり。
◉北尾政美は江戸の人にして、鍬形三次郎と稱し、又杉翠、蕙齋、紹眞等の號あり、北尾重政に學びて、又浮世繪に名あり。諸職人雛形の繪手本を作り大に世に行はる。後松平越前侯の藩士となり、薙髮して鍬形紹眞と稱し、出版の畫を止む。文政七年甲申(二四八四)三月歿す、享年未だ詳ならず。

ゑほんかうきやう
繪本孝經 二卷 高井 伴寛
孝經全文を、假名文に講解し、北齋の手により、吾が古談、彼の故事等を圖して童蒙に便せり。天保五年甲午(二四九四)の自序あり。
◉高井伴寛の傳記は「孝子教鈔解」の下にあり。

ゑほんかうみやうつるぎ
繪本高名劒 一卷
細川頼春、金子家忠、秩父重忠、野木頼云、和泉忠平、覡明、瓜生判官の母、以上名士の軍功彩圖なり、上に當時の略記を揭ぐ。編年編者等詳ならず。

ゑほんくさにしき
繪本草錦 二卷 北尾 辰宣
和漢の人物、草木、鳥獸等美人の像、軍人の像等を墨寫す。寶曆十四年甲申(二四二四)泊舟の序あり、同年發行す。

◉北尾辰宣は浪華の畫家にして雪北齋と號す。

ゑほんくふうのにしき

繪本工夫之錦　一卷　船山輔之

大抵盈朒圭𡓳術或は平算に於ける問題の集錄なれども、毎丁挿繪を加へ、設問の法大に興味あり。寛政十一年己未〔二四五九〕出版す。

◉船山輔之は喜一と稱す、初め喜左衞門と曰ふ、仙臺の藩士なり。數學を同藩人戸板保佑に受け、後山路主住の門人と爲る。

ゑほんくわうこくめいしよ

繪本皇國名所　一卷　石川雅望

本邦諸方の名所名所を彩色畫したるもの。その序中に「此草子は北溪子の筆のあとゝか」云々と。

◉石川雅望の傳は「雅言集覽」の下にあり。

ゑほんけうかせん

繪本敎歌筌　一卷　梅月弘昭軒

狂歌を集め、端書を加へて、圖出したるもの。寛政三年辛亥〔二四五一〕の出版なり。

ゑほんこまがだけ

繪本高麗嶽　三卷　南仙笑楚滿人

和漢の故事によりて名馬の圖畫を集む。其の上に乘馬者の由來軍功等を記す。畫圖は北尾重政の手に成る。享和二年壬戌〔二四六二〕神田五郎作の序あり。同年出版す。

◉南仙笑楚滿人〔楠彦太郎〕の傳は「裕斐寧古手屋」の下にあり。

ゑほんこんれいてびきぐさ

繪本婚禮手引草　三卷　白井鳥醉

有職武家などの、婚儀に關する諸般の始末を詳記圖示したるものなり。明和六年己丑〔二四二九〕の序あり、同年大本三册に刊行す。

◉白井鳥醉は上總國埴生郡地引村の豪家にして、名は信興、喜左衞門と稱し、牧羊、後露柱等の號あり。江戸に出でて俳諧を長谷部柳居に學びて、後松露庵二世を嗣ぐ。著書は本書の外に、「稻ふれ」あり、明和六年己丑〔二四二九〕四月四日歿す、享年未だ詳ならず。

ゑほんこんれいみちしるべ

繪本婚禮道志るべ　一卷　堀田連山

婚禮の次第を、彩色畫に圖したるもの。文化十年癸酉〔二四七三〕出版す。著者堀田連山は畫工なり。今その詳傳を得ず。

ゑほんさんくわいきよう

繪本簒怪興　一卷　桂川中良

諸方俗傳の妖怪談を圖繪略說す。畫は北尾政美の手に成り、寛政二年庚戌〔二四五〇〕腹唐秋人の序あり、同三年版行す。

◉桂川中良の傳は「桂林漫錄」の下にあり。

ゑほんしのうこうしやう

繪本士農工商　三卷

士の巻、農の巻、工商の巻と分ちて、各其の境界の數種を圖す。年代筆者詳ならず。

ゑほんしのぶぐさ

繪本忍婦草　三卷　西川祐信

兼好の徒然草の文を揭げて、其の下に繪畫を加ふ。稱して「徒然草後編」といへり。寛延二年己巳〔二四〇九〕の自序あり。

◉西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんじやうじやうおんのじ

繪本上々御乃字　横本一卷　菱川師宣

延寶六年戊午〔二三三八〕の上梓にかゝる繪本小說なり。文化三年丙寅〔二四六六〕寫して「輪池叢書」第二十三にあり。

◉菱川師宣の傳は「異形仙人繪本」の下にあり。

ゑほんしやはうぶくろ

繪本寫寶袋　十卷　橘守國

和歌三神之圖、公家束帶衣冠之圖、吉備大臣之像、源氏繪旋陳子誹之圖以下百數十條を圖し、其の畫法をも記して初學の模本にも充てたるものなり。享保五年庚子〔二三八〇〕の自序あり。

◉橘守國の傳は「扶桑畫譜」の下にあり。

ゑほんじんめいちやう

繪本神名帳　三卷　茂義堂主人

福の神、歩行神、唐かみ、臆病かみ、仕切かみ、卷かみ、立花の眞持髮、その他にてかみ、しん等の名のつくものを集め、滑稽畫を附して、標頭に解を附す。寶暦七年丁丑〔二四一七〕の版なり。

ゑほんせきのものくらべ

繪本世吉農物競　一卷　谷素外

四十二物諍の題にならひ、四十四對の題を設けて、俳句を集め、詞書を添へて、畫工浦線館をなして圖出せしめたるものなり。寛政五年癸丑〔二四五三〕の自序あり。

◉谷素外の傳は「龍の宮津子」の下にあり。

ゑほんぞくおとなあそび

繪本續大人遊　三卷

前編に漏れたる大人の遊戯を拾集して圖したるもの。寛政五年癸丑〔二四五三〕三津瀰人の序あり。

ゑほんぞくぶたいあふぎ

繪本續舞臺扇　二卷　勝川春章

春章、文調二畫工の手に成れる似顏圖なり。安永七年戊戌〔二四三八〕伊水逸民の序あり。同年出版す。

◉勝川春章は一に宮川祐助と稱し、旭朗齋、西爾等の號あり、藩谷に學で浮世繪を善くし、俳優の肖像、五人男、武家繪等に巧なり。寛政四年壬子〔二四五二〕十二月八日歿す、淺草西福寺に葬れり。

ゑほんたかうぢくんこうき

繪本尊氏勳功記　五卷

足利尊氏一生の武功を主として、元弘建武の軍譚を小說體に書き成せるものなり。繪畫を主として、詞は上に細書せり。畫は蕙齋の筆なり。寛政十二年庚申〔二四六〇〕曲亭馬琴の序あり。

ゑほんたからのつゞれ

蠶養　調合　畫本寶能縷　一卷　勝川春章

婦人養蠶の次第を彩圖したるものにて畫の上に養蠶の方法をも記せり。畫は北尾重政の手に畫せられたるもの其半を占む。天明六年丙午〔二四四六〕東莞居北鄰田夬の序あり、此の歲出版す。

◉勝川春章の傳は「繪本續舞臺扇」の下にあり。

ゑほんたのしみぐさ

繪本多能志美種　三卷　谷素外

文雅の雜話、雜詠を圖出したるものなり。寛政八年丙辰〔二四五六〕の自序あり。

◉谷素外の傳は「龍の宮津子」の下にあり。

ゑほんちうきやう

繪本忠經　一卷　高井伴寛

忠經の本文に假名を附し、講釋を加へ、北齋の手に成る繪を挿入したり。

◉高井伴寛の傳は「孝子敎鈔解」の下にあり。

ゑほんちとせやま

繪本千歲山　三卷　西川祐信

和歌に俚諺を交へて、畫きたるものなり。支同の序あり。明和四年丁亥〔二四二七〕版行す。

◉西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんちやうせいいくまんざい

繪本長生幾萬歲　五卷

無限の大福者、無限の長壽者等の談に畫を加へたる物語書なり。

ゑほんちよみぐさ

繪本千代見草　三卷　西川祐信

歷代敕撰集中の歌を撰出して、その事實を圖出したるものなり。元文五年庚申〔二四〇〇〕洛陽文花堂の序あり、同年出版す。

◉西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんつうぞくさんごくさく

繪本通俗三國策　一卷　毛利貞齋

「三國策」を和解したるものにて、元祿十七年甲申〔二三六四〕の自序あり。明治十九年活版に附す。

◉毛利貞齋の傳記は「四書俚諺鈔」の下にあり。

ゑほんつうはうし

繪本通寶志　十卷　橘守國

四時農業、播州𩵋子濱、趕網漁之圖、騎射之圖以下百餘の雜繪なり。享保十四年己酉〔二三八九〕發行、安永八年己亥〔二四三九〕再刻す。

◉橘守國の傳は「扶桑畫譜」の下にあり。

ゑほんつきぬいづみ

繪本つきぬ泉　二卷

酒癖の種類を擧げて圖畫し略說したるもの。矜、吞殺、居達、理屈、管卷、笑、泣、呼出、大氣、大悅、爲強、怒憋、要介、愼怒、爽晴、睡眠、多言、自惚、淫亂、宿酒等の上戸を分ち記し、畫は法橋玉山の手に寫さる。光格天皇の寛政八年丙辰〔二四五六〕蜩蝸軒魚麿の序あり。

ゑほんづくわ
畫本圖貨　三卷　中路　定年
古今畫者の名畫を模寫したるもの。自序あり、享保十六年辛亥(一三九一)の出版。

ゑほんつゞれのにしき
復讐　繪本繻褸錦　三卷　一芳
大和國非人敵討の次第を圖說したるものにて、享和元年辛酉(一四六一)浪華漁翁の序あり。

ゑほんていきんわらい
繪本庭訓往來　三卷　月痴　老人
支那法印の作といふ「庭訓往來」の本文を掲げて、書中の事柄を繪圖に寫したるものなり。六樹園石川雅望の序、文政十一年戊子(一四八八)橘廬山の跋あり。

ゑほんときつぐさ
繪本時津草　一卷
草花三十九種を圖し、每圖其の彩色法を附記して、畫學階梯の書としたるものなり。天保二年辛卯(一四九一)の刊行にかゝる。

ゑほんときはぐさ
繪本常盤草　三卷　西川　祐信
源氏物語、伊勢物語中の人物畫、その他を畫して畫學者の模本に充てたるものなり。享保十五年庚戌(一三九〇)の自序あり。
◎西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんなごなつさうし
繪本常夏草紙　一卷　瀧澤　馬琴
文化七年庚午(一四七〇)の自序を附したる十二回の續き小說なり。明治十九年活刷一册に作る。
◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

ゑほんなごのやま
繪本常農山　五卷　竹原　信繁
諷諫のある狂歌を集め、其の意を圖出したるものなり。寛政五年癸丑(一四五三)出版す。
◎竹原信繁は京都の畫家にして、春朝齋と號せり。秋里籬島と交りて、幾內及び諸州の名勝を圖會せるもの多し。「四天王寺伽藍圖」も其の筆く所なり。

ゑほんにじふしかう
繪本廿四孝　一卷
廿四孝の事實を彩圖して頭に其の略記を掲げたり。

ゑほんねんだいき
繪本年代記　五卷　秋里　籬島
神代の最初より、人皇第四十九代光仁天皇の御代までの年代記なり。圖出するところの畫は法橋西村中和の手に成る。享和二年壬戌(一四二二)出版す。
◎秋里籬島の傳は「近江名所圖繪」の下にあり。

ゑほんのやまぐさ
繪本野山草　五卷　橘　保國
本書は「繪本野山草」によりて、「の」の部に解題す。

ゑほんはなしやましな
繪本噺山科　二卷
種々の雜話を集錄圖出したるものなり。田鶴丸の序あり、編輯年月詳ならず。

ゑほんはなのみさをり
繪本花農絲　二卷　石川　豐信
種々教訓的短句を掲げて畫を添ふ。浪華秀帝子の跋なり。寛曆十三年癸未(一四二三)出版。
◎石川豐信は六樹園の父にして、江戸小傳馬町に住し旅人宿を業とし、雅屋七兵衛と通稱す。四村重長に就て浮世繪を學び、男女の風俗、紅繪一枚摺等を畫けり。天明五年乙巳(一四四五)五月二十五日、七十五歳にて歿す、淺草黑船町正覺寺に葬る。

ゑほんはるのわかば
繪本春和歌葉　三卷
千秋庵三陀羅法師その他の和歌狂歌等を集め、其の下に歌中の事を圖したる者。淺黃裏成の序あり。

ゑほんひのでまひづる
繪本日出舞鶴　五卷
種々の輕口雜話を掲げたる繪本なり。臥仙嶺が戊子の年の序あり。

ゑほんふくじゆさう
繪本福壽草　五卷　大岡　春川
草花百四十種の形狀を圖して、其の上に名稱及び古人の詠歌を附したるものなり。福壽草は元日草の名あるより、花の魁なるを採りて本書に名としたりといふ。元文二年丁巳(一三九七)の刊行。
◎大岡春川は大阪の人。狩野派の畫家にして、春卜の養子たり。名を市政といひ、法橋に叙せらる。

ゑほんぶたいあふぎ
繪本舞臺扇　三卷　勝川　春章
江戸名優の似顏圖なり。東雅の序あり。文調の筆も交れり。
◎勝川春章は「繪本緞舞臺扇」の下に傳せり。

ゑほんふるかゞみ
畫本ふる鏡　三卷　國　直
種々の古事を記したる繪本なり。卷一に鎌倉山のつちほり、むさし野の撫子。卷二に屋島浦のとりかぶと、信太杜の葛葉、內野のすまひぐさ。卷三に高野奥の菊慈、芳野路の落椎等の目なり。仁孝天皇の天保九年戊戌(一四九八)櫻井蛙麿の序あり。著者國直は畫工なり。

ゑほんぶわうぐんだん
畫本武王軍談　五卷
周武王の軍譚を綴りたるもの。畫は北尾紅翠齋の手に成る。光格天皇の寛政十三年辛酉(一四六一)曲亭馬琴の序あり。

ゑほんまんざいらく
畫本萬歲樂　五卷
武將の序、龍宮の圖、その他種々滑稽の圖を列記したるもの。寛政九年丁巳(一四五七)の版なり。

ゑほんみたてかひづくし
繪本見立貝盡　三卷　竹杖　爲輔
當時の狂歌師三十六人の貝に關する狂歌を集めたるもの。圖を加へ又其說明を附す。天明三年癸卯(一四四三)出版せり。著者竹杖爲輔は天竺老人と號す。

ゑほんみちのてびき
畫本道のてびき　二卷　思恩堂非得
教訓的狂歌俚諺等を集めて圖示したるもの。畫は丹羽桃溪の手に成る。文政五年壬午(一四八二)の自序あり、同六年出版す。

ゑほんみつわぐさ
繪本三津輪艸　三卷　西川　祐信
繪本常盤艸、繪本千代見草、等に續きて出せる繪草紙。寶曆八年戊寅(一四一八)西川祐尹の序あり。
◎西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下に出づ。

ゑほんめでたくさふらふ
繪本目出度候　二卷　流光齋女圭
教訓的狂歌を集めたる繪本なり。享和三年癸亥(一四六三)出版す。

ゑほんやそうぢがは
繪本八十宇治川　一卷　耕書堂主人
武將繪畫なり。上に勇戰の年月場所及び當時の始末を略記す。往々武將傳以外のものも交る。寛政二年庚戌(一四五〇)伯藥橋南宿屋主人の序あり。

ゑほんやまとびじ
繪本倭比事　十卷　西川　祐信
山水、草木、人物、禽獸、その他を繪圖し、各故事略傳を記せり。卷十を畫法彩色卷と稱して、畫圖精古、筆勢應物、畫圖運動、可守古法、繪草筆、大畫小畫異、人形繪面體書樣、和畫之事、畫圖可去俗、畫圖廣可盡類、彩色之法、ドウサ引、油煙墨、繪刷毛、杤筆、唐紙並烏子、繪絹好惡の事等を論述す。元文三年戊午(一三九八)の自序、享保二十年乙卯(一三九五)岩松道朝の序あり、寛保二年壬戌(一四〇二)の出版なり。
◎西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ゑほんやまとぶんこ
繪本倭文庫　三十卷　西川　祐信
南嶺、三近子等の俚諺雜話等を集めて、西川祐信、

下河邊拾水等の手に圖したるものにて、享保以來年々續刊したるものなり。
◉西川祐信の傳は『祐信畫鑑』の下にあり。

ゑほんゆうしやぐるま
繪本勇者車　十卷
神代以來勇士の姿を畫して、神社佛閣等に掲げたりしを模寫して、傳を附したるものなり。素盞嗚尊、日本武尊等より、足利、北條の比に及ぶ。寛政六年甲寅〔二四五四〕乞童人の序によれば、寶永年中編輯上梓したりしを、舊版磨滅の爲め、下河邊某に托して舊に依て新に畫せしむる由なり。

ゑもんぐいくん
衣文愚意訓　寫本一卷
衣冠着用の故實次第等を記述したるものなり。

ゑもんるゐれいひろく
衞門類例祕錄　寫本一卷
江戸諸門番、諸役員、諸役僧等の乘物、提灯、若類、諸道具等の諸誌目印を彩圖して、其の故を記す。五十六條あり。別に幕府の評定所より引續きて内閣に保存せるものあり。同じく『衞門類例祕錄』の名にて、十五冊あり、享保年度より、天保年度のものを集めたるなり。

ゑんいしよちきもん
遠夷處置紀聞　寫本一卷　楊井　士溫
文化五年戊辰〔二四六八〕英船入浦に際して其の處置に關することを集錄したるものなり。
◉楊井士溫は長門の人なり。

えんゑんきやうくしふ
莚猿狂句集　一卷
二代目、五代目、七代目市川團十郎の狂歌狂句を集めたるものなり。處々繪畫を挿入せり。二代目團十郎は通稱を成田屋重兵衞といひ、俳名を三升といひ後、柏筵と改む。五代目團十郎は俳名を三升又は白猿といふ。七代目團十郎は五代目團十郎の孫にして同じく三升白猿と號す。是れ等によりて莚猿の名は與へたるものなるべし。天保二年辛卯〔二四九一〕秋版行せり。

ゑんおうぜんじぎやうじやう
圓應禪師行狀　寫本一卷　僧　一絲
正應三年庚寅〔一九五〇〕五月十五日生れたる江州永源寺開山圓應禪師の行狀記なり。漢文にて記す。編者一絲は該永源寺の住僧なり。寛永二十一年甲申〔二三〇四〕これを編輯す。『續群書類從』卷二百三十五、傳部第四十七に收む。
◉一絲の傳は『一絲和尚夜話』の下にあり。

えんかいいぶん
沿海異聞　寫本一卷　太田　覃
卷首に『大日本國の屬島北蝦夷の風土草稿』と題して、風土人物人事器械、産物、方言、蝦夷地の濫觴等を記し、本多利明の記述數條をも附載し、寛政元年己酉〔二四四九〕くなしり騷動に關する書類をも載せたり。
◉太田覃の傳記は『南畝叢書』の下に掲ぐ。

えんかいにつし
東奥沿海日誌　寫本二卷　松浦武四郎
東奥の沿海に於ける民俗、風土、物産等の事を記せり。著作の年代は孝明天皇の安政萬延のころなるべしといふ。
◉松浦武四郎の傳は『蝦夷年代記』の下に出づ。

えんかきだん
煙霞奇談　四卷　西村　白鳥
市井の雜談を集錄せるものなり。無間の鐘付夜啼石、大衆鐘掛付曾我兄弟墓、辨慶手蹟、晃明手蹟、仲哀天皇並神功皇后陵等以下凡て四十數項より成れり。明和七年庚寅〔二四三〇〕秋九月作。四卷一冊に刊行す。

えんかくちづせつ
國郡縣置徵古公武沿革地圖說　一折　山崎　美成
我が太古以來の沿革地圖に、更に說明を附したる大折本なり。圖は神武天皇登極圖、景行天皇東西征定圖、神功皇后攝政元年征韓圖、推古天皇二十六年圖、齊明天皇六年圖、元正天皇養老四年圖、淳和天皇天長元年國名全定圖、承平天慶公武沿革圖、保元平治鬪爭沿革圖、元曆元年公武沿革圖、延元二年兩朝並立圖、元中九年南北盛衰圖、應仁元年東西干戈圖、永正六年兩營二川分爭圖、弘治二年列國割據圖、永祿十一年足利更替圖、天正五年雄傑爭衡圖、天正十年平氏全盛圖、天正十四年豐臣征遼圖、元和元年四海一統萬代鞏基圖等なり。天保十五年甲辰

〔二五〇四〕九月編者の序あり、同秋刻成、春日五平次藤原信興の藏版なり。
◉山崎美成の傳記は『書家便覽』の下にあり。

えんがくづきやう
延嶽圖經　一卷
日蓮宗の靈場、甲州身延山の順路全景の細圖なり。卷首に高祖大師の影像、詠歌等を掲げ、末に寢輸綸旨等を載せたり。

えんかもんだふ
椽下問答　寫本一卷
當時幕府政道可否を諷論したる假名書なり。著者年五十に及び、始めて日蓮上人の古蹟池上本門寺に詣で、堂上に息へる折しも、椽下に老少二人ありて、近年の江戸火災の因果を基とし、種々幕政の如何を問答せるを竊聽せるさまに作りなせる隨筆也

えんきうよねんけたのみやうたあはせ
延久四年氣多宮歌合　一卷
延久四年壬子〔一七三二〕三月十九日、國司通宗朝臣、氣多宮社頭に於て合したるものとて、通宗、成元、國元、源緣、行宗等の詠みたる、松、榊、鶯、鹿、櫻、紅葉、卯花、雪、郭公、千鳥の十首より成る。『群書類從』卷百八十二、和歌部第三十七に收む。

えんぎぎよき
延喜御記　寫本一冊　醍醐天皇
醍醐天皇の御宸記なり。一に『醍醐御日記』とも云ふ。中津廣眠西宮抄、西宮記、同裏書、小野宮年中行事、年中行事祕抄、北山抄、權記、小右記、古記、扶桑略記、御遊抄、御産部類記、親王元服部類記、撰集祕記、花鳥餘情、河海抄、珍愚抄、祈雨日記、醍醐寺初度具書、東寺要集、東寶記等、古書二十餘部に採錄する所。即ち延喜二年壬戌〔一五六二〕より延長七年己丑〔一五八九〕に至る凡そ二十八年間の記事を拾集年敘したるものなり。されど中間往々闕漏あるは遺憾とする所なり。
◉醍醐天皇は第六十代の皇帝なり。仁和元年乙巳〔一五四五〕降誕あらせられ、御名を敦仁と云ふ。宇多帝の禪を受けて位に即き、在位二十二年にして位を皇太子寛明親王に讓りて崩じ給ふ。時に延長八年庚寅〔一五九〇〕寶齡四十六。

えんぎしき
延喜式　五十卷　藤原　時平
朝廷年中の儀式、百官臨時の作法、其の他各國の定例などを詳に記錄せるものなり。伊藤長胤の『制度通』には律、令、格、式の四科を辨じて「式は百官の官府にて行ふ次第作法、官によりて類したるものなり。今の延喜式の體即是なり」と云へり。本書の成れる由來は初め醍醐帝左大臣藤原時平に命じて此の書を編輯せしめられしに、其の業を終へずして死せるより、其の弟忠平等更に命を受けて其の緒を續ぎ、十餘年を經て竣功せるものなり。この事忠平等の序に見えたり。今の刊本に就きては慶安元年林道春の跋に因ふ。「中原季庵校正の本五十卷の中第十三卷闕けたるを以て、尾張德川氏の本に據りて刻するものなり」と。正保四年丁亥〔二三〇七〕淸原賢忠の跋あり。明曆三年丁酉〔二三一七〕の刊行。本書は『國史大系』の第十三卷にも收めたり。該書は、流布の版本を原とし、雲州家校本、井上賴圀翁所藏校本、其の他の諸本に據りて校訂標註を加へ、傍ら類聚三代格、政事要略、令集解、貞觀儀式、六國史、類聚和名抄、其の他の諸書を參考し、殊に卷首の歷運記は、雲州家校本の說に從ひて之を除き、別に雲州家本考異七なる和名考異を附載せりといふ。
◉藤原時平は關白基經の子なり。清和天皇の貞觀十三年辛卯〔一五三一〕に生る。宇多、醍醐の兩帝に仕へて官布衣の極に至る。醍醐天皇の延喜九年己巳〔一五六九〕三十九歲にて薨じ、正一位太政大臣を贈らる。

えんぎしき
延喜式　六十卷
『延喜式』へ考異七卷と附錄三卷とを附したるもの。松平出羽守齊恒の校刻せるものなり。仁孝天皇の文政十一年戊子〔二四八八〕男齊貴の序文あり。

えんぎしきこうじかい
延喜式工事解　三卷　春田　永年
延喜式第四十九卷の工事兵庫寮の部を註釋したるものにして、兵庫器械等の制度、及び作法等を詳しく記せり。著者の凡例中に、「製作の巧拙精粗、工趣の得失雅俗は、筆端の能く述ぶる所に非ず。故に此の書、唯工材物料の所用を詳にして器械の古制を審察することを要とす」と云へり。文化三年丙寅〔二四六六〕に刊行し、其の子元長の跋あり。此の書、實は淸水濱臣の輔助に成れり。
◉春田永年は字を靜甫、又は甲端と云ひ、平由と號

せり。蕃府の函人なり。

えんぎしきしやうぞくせう

延喜式裝束抄　寫本一巻

延喜式中の裝束の事を抄錄したるものなり。

えんぎしきのりとかい

延喜式祝詞解　寫本五冊　賀茂　眞淵

延喜式の祝詞に註解を施したるものなり。著者の凡例に曰く、「余が先師荷田大人、國朝の學の大家にして、古今の書の大本を辨じ、古語の精微を極むるに、皆微とすることありて敎ふ。然れども余未だ此の祝詞の敎を聞かず。他書に開ける所を推して解するのみ。故に解中に先師の敎と云ふことを別に擧げず。擧げざるも又既に大本の部より出たれは、私に似て私ならざるなり。若又聞くことあるも後に古書を考ふるに中らざるなば、聞取らざるあり。將先師の意なり。夫れ學は天下の學なり。區々として家傳を唱ふることは爲さず」云々と。この書は盜し祝詞考の稿本なるべし。兩書の間に異の點多し。延享三年丙寅(二四〇六)の著にかゝる。

◉賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に揭ぐ。

えんぎしきめいぶつるゐさん

延喜式名物類纂　寫本一巻

延喜式中にある物名の分類索引なり。全體を五十音分にして一々その出所丁數を指示す。

えんぎじふさんねんていじゐんのうたあはせ

延喜十三年亭子院歌合　一巻

延喜十三年癸酉(一五七三)三月十三日行はれたる歌合なり。讀人には御製、兼覽王、伊勢、貫之、躬恒、興風、是則、友則にして、歌は初春、季春、夏、戀、各二十首づゝより成る。「群書類從」卷百八十、和歌部第三十五に收む。

えんぎじふさんねんやうぜいゐんのうたあはせ

延喜十三年陽成院歌合　一巻

延喜十三年癸酉(一五七三)九月九日の歌合、「惜秋意」の題を詠みたるもの四十餘首より成る。「群書類從」卷百八十、和歌部第三十五に收む。

えんぎじふろくねんしちぐわつなぬかていじゐんうしんむしんのうた

延喜十六年七月七日亭子院有心無心歌　一巻

最初に、「殿上人ども、心ある心なき、撰り出んと云ふことある頃、七月七日に、かうしんのこの、うしむ、と思はる人々、七夕合の後、思ふらんことを題にて、ひのうちに讀みつゝあはせける」とて、同題の歌都合二十六首より成り、「群書類從」卷百八十、和歌部第三十五に收めらる。

ゑんきやう

圓鏡　寫本二十巻

療馬の書にて、藥法治術を記す。其の序中に「諸の脈また諸の病、生死の病、總じて安驥集にさま〲記すと雖も、不覺にしてこれを察し難し、平仲國子孫に於て、此の道智惠をすて、學を修め、直に至るべきやうに、書記すを以て圓鏡とす」云々といふ。

えんきやうかんしやうわ

延享韓使唱和　寫本一巻　林　信充

延享五年戊辰(二四〇八)五月二十四日、大學頭林信充、圖書頭林信言、淺草本願寺に於て、韓使三人と會見し、筆語唱和したるものを編輯したるなり。

◉林信充の傳は「孝子十五郎傳」の下にあり。

えんきやうはつかうひろく

延享八講祕錄　七巻

延享二年乙丑(二四〇五)德川家に執行せる八講式の記事なり。八講とは延暦十五年丙子(一四五六)に僧勤操の始て修行せしものにして、一日に朝座夕座とて二度に法華經二卷を講じ、八度五日にて一部八卷を講了するを云ふ。延享二年は家康の百三十回忌に當れるを以て德川家に於て三月十三日より、五日間この法會を執行したりしが、本書の前五巻は一日を一卷とし、毎日の式を記し、後二卷は式前後の書附、拜領物、式中諸道具の圖等を載せたり。附錄三卷あり。亦、當時の書付、拜領物、舞樂の次第、儒官より出せし詩文等を集錄せり。

えんきやうよねんごじやうゐしだい

延享四年御讓位次第　寫本一巻

櫻町天皇の御讓位に關することを記せるものなり。延享四年丁卯(二四〇七)五月位を桃園天皇に讓り給へる時の記錄なり。

えんきやうらいへいのき

延享來聘之記　寫本二巻

櫻町天皇の延享五年戊辰(二四〇八)朝鮮聘使の來朝に就ての記錄にして、來聘使一行の人員、接待の模樣、朝鮮國王と德川家重と贈答の文書、相互の獻品等を詳細に記錄せり。仁孝天皇の文政十一年戊子(二四八八)之れを寫せし由奧書あれども、記者詳ならず。

えんきやうろく

延享錄　寫本十三冊

延享元年甲子(二四〇四)正月より、同四年丁卯(二四〇七)十二月までの政治日錄なり。

えんぎやくじゆつ

鹽逆述　寫本十二巻

種々の達書、屆書、私書等を編輯したるものなり。水野越前守殿より松平甲斐守へ御達書、ゑびすや木店より書狀、升屋の書狀、大阪御日付代より屆、松平甲州屆、遠江守御屆、以下數百項あり。更に三卷の附錄あり。天保八年丁酉(二四九七)冬十二月四日の寫本に據る。

えんきよぐうひつ

燕居偶筆　寫本一巻

政治上の所感を記したる假字文の隨筆にして、政治の要務、人君の心得、臣下の心得當時の施政等を論ぜり。德川時代に記せしものたるは勿論なれども、序跋等無ければ記者及び著作の年月共に知ること能はず。

えんきよくしふ

宴曲集　寫本五巻

卷の一四季部、卷の二賀部付神祇部、卷の三戀部、卷の四雜部上付無常、卷の五雜部下、以上宴曲數十を集めたり。「續群書類從」卷五百五十四、遊戲部第四に收む。

えんきよくせう

宴曲鈔　寫本三巻

郢曲の集にして、上卷に十首、中卷に十一首、下卷に九首、都合三十首を收めたり。

えんきよくばつすゐ

宴曲拔萃　寫本一巻

宴曲抄萃の樂書にて、永享八年丙辰(二〇九六)坂口左京亮平成幸九十歲口閲の奧書あり。

ゑんぎんしふ

猿吟集　寫本一巻　通　恕

著者の詩集なり。律詩絕句等を收む。「續群書類從」卷三百二十八、文筆部第十二に收む。著者通恕は惟忠と字す。

ゑんきんしよしき

遠近諸士記　寫本二十巻

慶長以來の諸家略譜なり。武將孝子等の事實をも併擧す。二十卷五冊に傳寫す。

えんくわうこくしぎやうだうき

延光國師行道記　寫本一巻

周防國に生れたる延光國師の傳記。漢文にて記せり。「續群書類從」卷二百卅九、傳部第五十に收む。

ゑんくわうだいしいせきにじふごかしよあんないき

圓光大師遺蹟二十五箇所案內記　一巻　僧　靈澤

作州、攝州、紀州、和州、城州等に散在せる僧源空(法然上人)の遺蹟を案內し、且其の途中の名所、巨刹其の他等を註して巡拜者の便に供す。明和元年甲申(二四二四)僧契忍の跋、寶暦十二年壬午(二四二二)僧契潤、圓澄等の序あり。

◉靈澤は洛陽放光山の住僧なりきといふ。

ゑんくわうだいしゑことばでん

圓光大師繪詞傳　四十八巻

圓光大師の繪傳。卷首には「法然上人行狀畫圖」と題せり。現在の刊本は、畫は洛北報恩寺の前住古磵にして、書は洛西林觀雲竹の筆なり。「好古小錄」には、「圓光大師繪詞四十八卷、畫光信、書當時公卿集書」とあり。

ゑんくわうだいしごひやくごじふねんぎよきづろく

圓光大師五百五十年御忌圖錄　一巻

一名「華頂山大法會圖」の下に解題せり。

ゑんくわうだいしでん

圓光大師傳　四十八巻

僧源空(法然上人)一生の事歷を、假名書繪入に記敍したるものなり。四十八卷二十四冊に作れり。

ゑんくわうだいしべつでん

圓光大師別傳　三巻　僧　珂然

本朝淨土宗開祖源空上人の傳記。卽ち元祿十年丁丑〔二三五七〕三月に著したる「吉水實錄」の中より「上人本紀」を別出したるものなり。

◉到然の傳は「正字通作者辨竝緣起」の下にあり。

えんけいにねんおかたがへぎやうかうざつじ

延慶二年御方違行幸雜事　寫本一卷

花園天皇の延慶二年己酉〔一九六九〕十二月十七日、御方角避に於ける御裝束、隨身、御馬其の他の雜事を記錄したるものなり。「續群書類從」卷八十四、帝王部第三に收む。

えんけいにねんだいじやうゑみそぎのき

延慶二年大嘗會御禊記　一卷　長基

一名「長基記」の下に解題せり。彼は寫傳の單行本にして此は「群書類從」卷九十三、公事部第十五に收めたるものなり。

えんけいにねんはちまんみゆきのき

延慶二年八幡御幸記　寫本一卷

花園天皇の延慶二年己酉〔一九六九〕五月十七日石淸水八幡宮に御幸の記事。「續群書類從」卷八十六、帝王部第五にあり。

えんけいよねんしんゐんひめみやみゆきはじめのき

延慶四年新院姬宮御幸始記　一卷

花園天皇の延慶四年辛亥〔一九七一〕三月二十五日、新院後伏見姬宮の御行始記事なり。供奉、行路、行列等を記す。「群書類從」卷五百二十八、雜部第八十三に收む。

ゑんごくおんぶきるゐ

遠國御武器類　寫本三十卷

弘化二年乙巳〔二五〇五〕各國の武器を、代官奉行等よりの書上によりて輯錄したるものなり。別に一册目錄あり、都合三十一册に寫す。

ゑんさう

園草　寫本一卷　飛鳥井雅俊

著者が家集の殘闕なり。後柏原天皇の大永〔二千百八十年代〕の頃一二年間の詠歌にかゝる。

◉飛鳥井雅俊のことは「八代集手爾波」の下にあり。

ゑんさうじつろく

遠相實錄　寫本三卷

天明四年甲辰〔二四四四〕三月廿四日、新御番佐野善左衞門政言といふもの、若年寄田沼山城守意知に双傷に及べる始末を記す。附錄に密書祕錄と題して、父意行に仰せ下られたる台命の科目を揭げたり。同意行嘗て遠州相良の城主たりしより遠相を書名とせるなり。同八年の記なり。

えんさうしやうわしふ

煙草唱和集　二卷　木下元喬

安積覺、今井順、榊原玄輔等の唱和せし煙草の詩を集め、小註を加へたる書にして、一名を「流霞唱和集」と云ふ。宗卿の序及び元祿十年丁丑〔二三五七〕の自跋あり。石蘊子記する所の煙草條一篇を附す。

◉木下元喬は道圓といひ菊所と號す。江戶の儒者なり。享保元年丙申〔二三七六〕十二月廿七日歿す。

えんざんさんだいざうもくろく

綠山三大藏目錄　寫本三册　僧隨天

江戶三綠山增上寺に藏せる、大乘三藏錄、大乘對法藏、續入藏等の詳細目錄なり。三藏の異同を對辨して通校に便ずる爲めに作れり。大本三册に寫傳す。延享五年戊辰〔二四〇八〕の自序あり。寶曆十三年癸未〔二四二三〕綠山四十六世大僧正某の序あり

◉隨天は江戶增上寺の知識なり。

ゑんしうかするざいかきあげうつし

遠州可睡齋書上寫　寫本一卷

遠江國周智郡なる可睡齋の沿革等。寶曆七年丁丑〔二四一七〕九月の書上なり。

ゑんしうかはさきまちごにんぐみしようもんちやう

遠州川崎町五人組證文帳　寫本一卷

延享二年乙丑〔二四〇五〕に定めたる、川崎町五人組の規約書なり。

ゑんしうせんくづけ

遠舟千句附　一册　遠舟

著者の俳諧集なり。延寶八年庚申〔二三四〇〕六月の作にかゝる。

◉遠舟のことは「難波辨慶」の下にあり。

えんしうそうしよ

假修叢書　寫本三十卷

卷一、二に大君主行錄。卷三に義公遺事。卷四に義公行實。卷五、六、七に西山遺事。卷八に西山遺事附錄。卷九、十、十一、十二に銀黃遺事。卷十三、十四に西山遺聞。卷十五に吉備烈公遺事。卷十六、十七、十八に菅利家卿語話。卷十九に雜誌。卷二十に虎猴雜談。卷二十一に大祖創業志。卷二十二に白川侯存寄書。卷二十三、二十四に明君白川夜話。卷二十五、二十六に仰景錄。卷二十七に熊澤伯繼列傳。卷二十八に二老略傳。卷二十九、三十に妙海語を收輯す。三十卷三十册に寫傳せり。

えんしうそうしよにしふ

假修叢書二集　寫本二十四卷

此の第二集には記錄のみを收輯す。卷一、二、三に九戶記。卷四、五に上杉謙信記。卷六に高月院由緖書。卷七、八、九に御祕藏寶記。卷十、十一、十二に淺川傳右衞門記。卷十三、十四に忠淸記。卷十五、十六、十七に元親記。卷十八、十九、二十に永祿細事記。卷二十一に井上玄桐筆記。卷二十二に小夜聞書。卷二十三に白川夜船夢物語。卷二十四に田沼御仕置書付を收めたり。二十四卷二十四册に寫傳す。

ゑんしうみかたがはらかつせんてかゞみ

遠州味方ヶ原合戰手鑑　寫本一卷

元龜三年壬申〔二二三二〕十二月二十二日、武田信玄、遠州より三河に討出で、濱松城外を燒きて三方ヶ原に陣せる時、德川家康討向ひて敗戰に及びたる始末を記載す。

ゑんしうみかたがはらかつせんのづ

遠州味方ヶ原合戰之圖　寫本一折

元龜三年壬申〔二二三二〕十二月二十二日、德川家康と、武田信玄と、遠州味方ヶ原に於て合戰の時兩方諸將士の陣取位置を圖示したる明細小圖なり。

ゑんしうみかたがはらごかつせんのき

遠州三方ヶ原御合戰記　寫本一卷

元龜三年壬申〔二二三二〕十二月二十二日、武田信玄と、德川家康と、遠州三方ヶ原に於て合戰したる始末を筆記したるものにて十五枚に寫傳す。

ゑんじやうじどのるゐじゆせう

圓成寺殿類聚抄　寫本一卷

永德元年辛酉〔二〇四一〕七月十一日の注進にかゝる纓緌色目略書なり。卷端に御厨子所預紀宗國の家記中より二條を抄揭す。本文圖面共凡て六枚の寫本なり。

ゑんじゆあんけいちうぎやうじつ

圓珠庵契冲行實　寫本一卷　安藤爲章

契冲阿闍梨の傳記。漢文にて記せり。元祿十五年壬午〔二三六二〕正月十一日作。「中古叢書」第百〇九に收む。

◉安藤爲章の傳は「年山紀聞」の下にあり。

ゑんじゆあんざつき

圓珠庵雜記　一卷　僧契冲

文學、言語、書籍等に關する考證雜記なり。賀茂眞淵、本居宣長等の頭書あり。尙卷末に、「こは寶曆八年の秋の末に、人の得させしを見るに、なかしきものなれば、中に思ふ事あるにはかく筆を加へたり、このごろしらたみにてふしながら書きつけ侍れば、ことのとゝのほらざるべし眞淵」と記せり。躬弦の序、文化九年壬申〔二四七二〕平由豆流安田躬弦等の序あり。

◉契冲の傳は「萬葉代匠記」の下にあり。

えんじゆさつえう

延壽撮要　一卷　曲直瀨玄朔

養生節制の要を摘述したるものなり。言行編にて言語、動作、喜怒、視聽其の他の事を說き、房事編にて一切の房事、謹愼、制節の事を云ひ、飮食編にて飮食に關する諸注意を述べたり。慶長四年己亥〔二二五九〕の作なり。

◉曲直瀨玄朔の傳は「嶽寶藥性能毒」の下にあり。

えんじゆるゐえう

延壽類要　二卷　竹田昭慶

長生延壽の道、營養攝生の法に關する醫書なり。養性調氣、行壯修用、行壯制禁の三編に於て、日暮の寢寐、起居、動靜、行步の間、皆攝養延年之道あることを云ひ、服食用捨の編に於て詳しく飮食の可否を論し、房中損益の編に於て壽夭損益求嗣法等を述べ、五編總て調護の極理を說きたるものなり。康正二年丙子〔二一一六〕昭慶の作なるを、三百三十年を經、十代の孫竹田公豐、天明六年丙午〔二四四六〕より翌七年に亙りて校正再版したるものなり。和氣成美、吉田宗恂の序、及び自序等あり。

◉竹田昭慶は名醫竹田昌慶の子なり。昌慶は應安年中明に航して醫術を研究して歸りたるものな

り。昭慶は其の第三子なれど、今其傳を詳にせず。

えんしようきかう

鹽松紀行 一卷 僧 古梁

文化二年乙丑(一八〇五)八月、邊資美、浦世傑、松文藻、菅智義の四人と鹽竈、松島を遊覽したる時の紀行なり。松島の風景を觀て歸路に就くに終れり。末に「先遊道觀」と題して、菅智義の寫生したる松島諸景の圖を收め、最後に「松島遊觀」の詩二三十首を掲げたり。

◎古梁のことは「南山外集」の下にあり。

えんしよくたいへいき

厭蝕太平記 卅三十卷

慶長十九年甲寅(一六一四)大阪一亂の事を記し、專ら眞田幸村、後藤基次、長曾我部元親、木村重成等の武勇を記したるものなり。三十卷五册に寫す。

えんしんろく

延申錄 卅一卷

延寶八年庚申(一六八〇)正月一日より、同年十二月晦日に至る一年間の日記なり。全編江戸幕府內外の役向儀式向に關する日記にして、元文三年戊午(一七三八)百八十餘枚に寫傳す。歷史の參考に資すべきものなり。

ゑんせいいはうめいぶつかう

遠西醫方名物考 四十五卷

宇田川榛齋

西洋醫書に據りて、其の藥品、方劑、製煉諸術の名物にして、古今歷驗して、試效著しく、日用切實のものを擇び、一々假名交り文にて辯說したるものなり。二十餘種の洋書を引用參考して、各論皆原書を示せり。文政五年壬午(一八二二)男榕庵の校補出版せるものにて、其の意見を附する條には「榕按」の二字を揭げて本文と區別せり。末の九卷は「醫方名物考補遺」と表題して合せ行ふ。

◎宇田川榛齋の傳は「西醫範提綱釋義」の下に揭ぐ

ゑんせいきりやく

遠西紀略 四卷 大槻 西磐

西洋古來の歷史なり。各國の治亂興廢、英雄偉績の大概を、漢文にて記す。盜し夙に西洋の事情を知らんと欲し、洋學者に就き譯書を參考して本書を成せり。安政二年乙卯(一八五五)自らの凡例、同年鏡谷宕陰の序あり、四卷二册に版行す。

◎大槻西磐は仙臺山目村の人なり。名を清顯、字を清臣と稱し、家世々一鄕の名家たり。夙に江戸に出で、昌平黌に寓し、日夜研究して、經史に涉り、文章に精し、また洋學者に就き、また譯書に據りて、略其の事情に通ぜり。後、小川街に塾を開き門人日に盛なり。然れども、不幸歲に遇ひ、年僅かに四十にして歿す。時に安政四年丁巳(一八五七)二月二十四日なり。親族大槻清崇等、葬事を預り、湯島麟祥院に葬る。

ゑんせいくわんしやうづせつ

遠西觀象圖說 三卷 吉雄 俊藏

理學入式

天體地球に關する西洋の說に基きて天體天象等の大要を述べたる前著「西說觀象經」を圖說したるものなり。著者の口授を門人草野養準が筆記するところにして、文政六年癸未(一八二三)尾張藩秦鼎の序、同藩松藩高津豫の跋等あり。

◎吉雄俊藏のことは「西說觀象經」の下にあり。

えんせきさつし

燕石雜志 六卷 瀧澤 馬琴

和漢の雜事に就き數百年前なる史傳の事より、近世の瑣談に至るまで隨思隨筆したるものなり。全編六册八十餘項より成る。文化六年己巳(一八〇九)春三月上巳の作なり。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

えんせきじつしゆ

燕石十種 卅六十卷 岩本 蛙麿

小說演劇其の他に關して、種々の雜說遺文等を拾集せる叢書なり。著者の端書に曰く、昔もろこしに燕石を玉として十襲を珍藏せしものありとか、予十ばかりの年よりはかなき浮世草雙子のたぐひを好みて、今二十に及び既に十年の間に得る所の書若干の卷、其の中殊に奇とするもの歷世の敗にあへり。之れを輯錄して後の遺忘にも備へ、且談柄にもせばやとて、帳中に祕し、獨、撫玉と愛玩するは彼のしれものに等しからん。故に十襲の通音をとりて此書の題號とす」と云へり。以て著者の趣旨のあるところ及び其の題號の出所をも知るべし。第一輯には高尾考、遊女考、猿樂傳記、江戸眞砂六十帖以下十種毎卷一種を揭げ十卷を一輯とし、

都合六輯より成る。天保七年丙申(一八三六)の作。

えんせきるゐじゆ

燕石類聚 卅二卷

年中の行事節會等を、諸家の記錄によりて、選抄したるものなり。大本二册に寫傳す。

えんぜつしよ

演說書 卅一册

幕府評定所より引繼ぎたるものにして、佐々木信濃守の演說なり。元祿元年甲子(一六八八)より、慶應二年丙寅(一八六六)に至る。內閣文庫に保存す。

えんそうへん

焉度編 卅五卷 菴戸(ノケキ) 太華

人物批評の語句を集めて解釋したるもの。內外聖經賢傳によりて人物査定に關する評語を集解し、人臣選擢の參考として作りたるものなり。天明八年戊申(一七八八)五月十四日の自序、及び同九月九日細井德民の序あり。

◎菴戸太華の傳は「類聚編」の下にあり。

ゑんそくいつけんひかへ

遠足一件控 卅一卷

文化八年辛未(一八一一)中諸役人等の遠足伺卽ち旅行伺書類を集錄して「一輪池叢書」第三十二に收む

ゑんたいき

園太記 三十三卷 中園 公賢

一名「園太曆」に從つて次に解題す。

ゑんたいれき

園太曆 三十三卷 中園 公賢

著者の記錄にして、南朝の時朝家衰微の有樣、盛衰進行の事等を記せり。觀應の比の記に兼好法師の履歷なども詳載す。本書は一名を「園太記」ともいふ。

◎中園公賢は藤原氏。左大臣實泰の子なり。延慶中參議に任ぜられ、後正二位に進み大納言となり、右兵衞大將有馬寮御監等を經、內大臣に進み、式部卿となり、從一位右大臣源淨宮傳。左大臣等に移り、正平中遂に太政大臣となる。後薨逝して空元と號す。博覽索識にして禮典に精し。著書は本書の外に、歷代最要鈔、略代鈔等あり。正平十五年庚子(一三六〇)四月、七十歲にて薨ず。

ゑんたいれきもくろく

園太曆目錄 卅一卷

園太曆は藤原公賢の記錄事項延慶四年亥(一三一一)より、貞和六年庚戌(一三五〇)九月までを目錄す。

ゑんたうおんうたあはせ

遠島御歌合 卅一卷

一名「嘉祿二年歌合」の下に解題す。

ゑんたうおんうたのじよ

遠島御歌序 卅一卷 後鳥羽天皇

御遠島中の御製歌の序なり。太田晉の編したる「百瀨川」第四に入る。

◎後鳥羽天皇の御傳は「御島羽院御記」の下にあり

ゑんたうかきとめ

遠島書留 卅二十九册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。寬政年度より、文化七年庚午(一八一〇)の者に至る。

ゑんたうきかう

遠島紀行 卅一卷 僧 光宥

江戸より伊豆の大島へ流罪せらるゝ時の和文日記なり、和歌もあり詩もあり文章最も誦すべし。今見るところは、末に元政法師の「身延紀行」と併せ寫したり。

◎光宥のことは「土佐國種間寺由來記」の下にあり。

ゑんたうくわれうちやう

遠島過料帳 卅一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる遠島過料帳にして、嘉永二年己酉(一八四九)より、慶應二年丙寅(一八六六)に至る。

ゑんたうざつどめ

遠島雜留 卅十五册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、年度詳ならず。十五册中一册は目錄なり。

ゑんたうぜんくわもんだふ

遠島前科問答 卅四册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、文化十年癸酉(一八一三)より、安政六年己未(一八五九)に至る。

えんだうぞくせつべん

艶道俗說辯　五卷　不知足山人

婚嫁の事に就きて俗說の由來を辯じたるものなり。採るべきこと甚だ少し。全卷數十條より成り、「男女年若くして嫁娶を赦さずと云ふ說」を始として、「生下未分の說」に終れり。自序に己丑季冬とあるのみにて年代詳ならず。

ゑんたうものとがしよ

遠島者科書　寫本 六册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、文化十三年丙子〔二四七六〕より、慶應年中に至る。

えんだまるおとしぶみ

延陀丸於登之文　寫本 一卷　松永　貞德

和漢聖賢の蹟を尋ね、古今德政の例を引きて、其政の施行せられむことを縣說したる和文の隨筆なり。原著者、原書名は詳ならず。延陀丸の奥書あり。「此の一卷は或る歌書の奥に侍りしを、何となく讀みて見侍れば、君を諫る心の至りは仁賢の敎に背かず、書き列ねたる筆のあやは歌仙の詠にも似たり。なほざりもの丶所爲にあらじ。之れを聞き見るより、自らなどか見て目をなぐさむるばかりは何の甲斐なし。天下國家の爲に書きたりおほやけの御寶やと思ひて門下の書生助六に書き寫さしめ、防州公に奉り侍る。定めて作者の心にも適ひ侍るべし。又、此の書の名も作者も知れず侍れば、今、此の書を於登之文とや名け侍るらん。君に見せまほしき心通ひたればさも侍るなんかし」とあり。其の性質、文體及び來歷の一端をも知るべし、延陀丸は貞德の一號にして、或は圓陀丸とも書けり。『續群書類從』卷九百八十、雜部第百三十にあり。

◉松永貞德の傳は『歌林雜話』の下にあり。

えんだんしひんならびにざつもん

演段四品並雜問　寫本 一卷

古筭法書なり。演段四品の法則逕筭等を說明し、更に平法立法に關する數多の雜問解式等を揭げたり

ゑんちんをしやうでん

圓珍和尙傳　寫本 一卷　三善　清行

圓珍和尙は讚岐の人にして、空海の外甥なり。弘仁六年乙未〔一四七五〕に生れ、延曆寺座主義眞の徒弟となり、仁壽三年癸酉〔一五一三〕入唐して、天安二年戊寅〔一五一八〕歸朝し、貞觀十年戊子〔一五二八〕近江國園城寺を以て道場と定め、寛平二年庚戌〔一五五〇〕僧都に任じ、是歲四月七十八歲にて入寂す。延長五年丁亥〔一五八七〕智證大師の謚號を賜れり。本書は此の一生の詳傳なり。

◉三善淸行の傳は『革命勘文』の下にあり。

ゑんづうだいおうこくしごろく

圓通大應國師語錄　三卷　僧　紹明

上卷には國師初住筑前興德禪寺〔文永七年十月入寺〕にての法語、及び太宰府萬年崇福禪寺〔文永九年臘月入院〕にての語錄を、中卷には太宰府萬年崇福禪寺にての語錄の續きを、下卷には洛陽萬壽禪寺〔嘉元三年七月開堂〕にての語錄、及び巨福山建長寺〔德治二年臘月入院〕にての語錄を載せたり。『縮刷藏經』霜帙第八に收めらる。

◉紹明は臨濟宗の名僧。駿河國安部郡の藤氏に生れ、南浦と號す。正元年間支那に渡航し、徑山に登り虛堂の嗣法たり。歸朝して東西諸大刹に歷住し熾んに禪法を唱へ、延慶元年戊申〔一九六八〕臘月、七十四歲にて入寂す。敕して圓通大應國師と謚す。

ゑんでんりうやりなぎなた

圓傳流鎗長刀　寫本 一卷

圓傳流の鎗長刀の諸法名目を擧げたるものにて、天保十四年癸卯〔二五〇三〕の寫本なり。

ゑんどうかふ

遠藤家譜　寫本 一卷　伊東　玄伯

始祖胤賴より、但馬守慶隆に至る十四代間の記なり。卷末に三木系圖及び愛宕山五人塚の石碑の銘を附す、家人玄伯が同家人櫻井玄登と共に主命によりて記すところなり。

◉伊藤玄伯のことは『慶隆記』の下にあり。

えんとくき

延德記　寫本 一卷

延德年中大神宮御神體異動云々の事に關したる記錄なり。延德元年己酉〔二一四九〕十月、吉田兼俱密に虛談の奏狀を捧げて、吉田の祭場に一の靈物現出し、神器降臨の由を言上せるに依りて、大神宮の御體降臨疑ひなしとの由、敕ありしといふ風聞に依りて、禰宜等驚き、兼俱が奸謀の由を注進上奏するなどの事を記したるものなり。

えんとくごはつかうのき

延德御八講記　一卷　姉小路基綱

後土御門天皇の延德二年庚戌〔二一五〇〕卯月八日國母仙院三回の聖忌にて同月二十六日より五日間禁中に於て法華御八講を行せられたる時の記事なり。其の因緣功德等を詳かに、叉文章的に物せられたり。末に長編の御製を添ふ。『群書類從』四百二十八の卷、釋家部第四に收む。本書は『延德八講記』として單行せるもあり。

◉姉小路基綱のことは『春日社參記』の下にあり。

えんとくずゐひやうき

延德隨兵記　寫本 一卷

『伊勢弓馬叢書』中の一書にして、延德三年辛亥〔二一五一〕八月二十二日の記にて、隨兵次第の故實四十餘條を記す。一本には「明應九年〔二一六〇〕十一月十五日民部少輔向淸在判」とあり。

えんとくにねんしやうぐんせんげき

延德二年將軍宣下記　寫本 一卷

延德二年庚戌〔二一五〇〕將軍義政薨去に就き、義稙將軍に任ぜらる。本書は其の時の記事なり。『續群書類從』六百五十七の卷、武家部第三に收む。

えんとくはつかうき

延德八講記　寫本 一卷　姉小路基綱

群書類從本によりて、『延德御八講記』の名の下に解題せり。

ゑんどんくわんしんじつぱふかいづじよ

圓頓觀心十法界圖序　一卷　僧　一容

佛、菩薩、辟聞、緣覺、天、人、修羅、餓鬼、畜生、地獄、の十法法界圖形像の漢文贊にて、古活字本なり。『輪池叢書』第三十二に收む。

えんのぎやうじやごりしやうづゑ

役行者御利生圖會　六卷　藤原　海

役行者の一代記なり。卷首に役行者の肖像と其の使用せし磐笛の圖とを揭げ、役行者の誕生鎌足公の病氣咒驗の事より始まりて、大島へ流罪、歸洛の事に終る。記事荒誕不稽にして信ず可からざる事多し。嘉永二年己酉〔二五〇九〕の刊行に係る。

えんばうかうしんのき

延寶庚申記　寫本 一卷

延寶八年庚申〔二三四〇〕の日記なり。江戶城幕府內の儀式、出入等の事に係る。

えんばうさんねんけんぶんむにんたうのづ

延寶三年見聞無人島之圖　寫本 一鋪

豆州沖なる無人島二島、及び小島數十を、着色して圖せり。湊の深淺、潮汐の事、島の四方里數等を示し。圖末に「大日本之內也、島々爲見分之、卯四月貳拾九日致着船、同六月五日に日本へ出船仕候、御船頭島谷市左衞門、同上乘中尾庄左衞門、子島谷三郞左衞門、大工八兵衞、延寶三年卯〔二三三五〕五月吉日、右之通勝書仕置候也」と記せり。

えんばうさんねんとうえいざんごはふゑのとめ

延寶三年東叡山御法會之留　寫本 一卷

延寶三年乙卯〔二三三五〕の、德川家光二十五回忌法會の記事なり。敕使參向の事、飢民施行の事、裝束の事、行列の事、讀經供養の事、罪人赦免の事等を記せり。

ゑんぱうしくわんき

圓方四卷記　四卷　初坂　重春

錐臺等の求積筭より、八筭見一、角術、截積、開平、開立、諸雜筭を記述したる書にして、概ね塵刧記、竪亥錄等より引來りたるもの多し。明曆三年丁酉〔二三一七〕出版す。

えんばうじつき

延寶實記　寫本 四卷

德川四代將軍嚴有院薨去の事に關する記錄にして、延寶六年戊午〔二三三八〕病氣に罹りて同八年庚申〔二三四〇〕に薨去せしこと、及び常憲院へ將軍宣下ありし事等を記し、其の間出棺葬式等の事を委しく述べたり。

えんばうしやうがつおんしき

延寶正月御式　寫本 一卷

德川時代の三ヶ日の儀式、三家諸大名獻上物拜領物等の次第を記せり。卷首に正月御用番の姓名をも揭げたり。

えんぱうでんとうろく

延寶傳燈錄　四十一卷　僧　師蠻

我國禪宗の名僧碩德の傳記を纂輯したるものにして、其の受法の系統、畢生の行狀、教語、詩文等を網羅し、其の他帝后將相及び他宗の名僧居士等が禪法に歸依したる履歷の敍述に至るまで卷中に收め甚して洩らすことなし。尙本書成立の梗槪は序文中に「自建久二〔本邦禪宗の始祖榮西禪師の入唐歸朝せしは建久二年なり〕迨于今五百餘載輯錄無人致俾名賢聖德湮沒無聞可謂闕典矣余從冠歲遊履四方或問諸山之耆宿或求江湖之禪友逓々搜索三十餘年語錄行狀碑文塔銘凡有關宗教者蒐羅不泄焉總計幾乎一千人編成四十一卷號曰延寶傳燈錄」と云ひ、凡例に「是書專記機緣語句傍載姓氏出處大概欲俾學者知其先言往行也或無機緣語而有偈頌小佛事足觀其胸量者有名勝之贊語賠言可代其嗣承履歷之實錄者亦登載之庶乎無遺先哲之軌躅焉」と云へるにて知らるべし。而して本書の內容實に著者の言ふ所に背かず。以て禪門の風榮を想望すべく、又以て敎史の資料に供すべし。本書の成稿せしは延寶六年戊午〔二三三八〕にして、其の後二十八年を經て寶永三年丙戌〔二三六六〕に刊刻せられたり。題號は宋の景德年間に沙門道原の纂集せし「景德傳燈錄」に倣ひ成稿の年號より取りたるものにして其の性質亦彼此相同じ。

◉師蠻のことは「本朝高僧傳」の下にあり。

えんぱうながさきき

延寶長崎記　寫本一卷

長崎奉行馬場三郞左衞門在職の時、白石與左衞門なるものが書出せし所の長崎始めて開けし事といふ事項より、以下同地に於ける事實の起滸やうの書なり。延寶四年丙辰〔二三三六〕の頃の記なるより、「延寶長崎記」とは稱したるなるべし。

えんぱうにねんえどおほえづ

延寶二年江戶大繪圖　一鋪　中村市右衞門

延寶二年甲寅〔二三三四〕十月、版行したるものにて、圖端に日本橋より諸方への里程を記せり。「右此の繪圖江戶中はつれづれ不殘書入申候」と末記す。著者中村市右衞門は江戶の書肆なり。

えんぱうにほんづ

延寶日本圖　一鋪

全國境、石高、城邑、及び城主姓名知行、宿驛街道等を記せり。裏面に、「日本武者執行所持主本田唐之助內永井佐五右衞門」と記して花押あり。

えんぱうはちねんしやうぐんせんげのき

延寶八年將軍宣下記　寫本一卷

延寶八年庚申〔二三四〇〕八月二十三日、德川綱吉に將軍宣下の際の式を漢文にて記せるものなり。敕使院使等江戶へ參着の事より、營中にての儀式、並に諸家の座配等の事を記せり。

えんぱうばんとうかいだうちうき

延寶板東海道中記　一卷

江戶日本橋より京に至る道路宿驛の道程、間屋の名前、人馬の賃錢、橋梁の間數、勝地の詠歌、社寺の緣起、土產名物、其の他旅行道中の諸心得を記したるものなり。延寶三年乙卯〔二三三五〕の開版にて、袖珍小册子なり。

えんぱうぶかん

延寶武鑑　一卷

諸大名以下の名及び家紋を記せるものなり。即ち諸大名以下の名の上に紋を畫き、名の側に家紋の名を揭げ、諸役諸奉行御用聞、町人猿樂座人に至れり。延寶九年辛酉〔二三四一〕刊行す。故に「延寶武鑑」といふ。卷末には江戶名所の圖、橋の名、町の名等をも附記せり。抑、武鑑は武家諸家の官職、知行、家紋、附士、馬匹、住宅等を記したるものにて、此の種の書は當時殆ど年々に刊行せられたり。今見るところにても、應仁、慶安、明曆、延寶、貞享、元祿、寶永、寬延、弘化等のもの。及び鎌倉、京都、足利、御旗本等の名を冠したるもの。また廣德、太平、大成、改正、增補、國字分、いろは分等の字を冠らせたるもあり。また昔古、累世、早見等の名を揭げたるもあり。

えんぱうよねんうたあはせ

延寶四年歌合　寫本三卷

延寶四年丙辰〔二三三六〕八月、十五番歌合一卷と、同年二十一番歌合一卷と、三十番歌合一卷とを合綴したるものなり。

ゑんぱふしりつ

圓法四率　寫本一卷

圓周率、弧率、立圓率、缺球率の起源を記載したるものなり。故に之れを四率と曰ふ。算法頗る密にして、全體古風を備へたる書なり。年代記入なし。

ゑんぱんろうしせう

遠帆樓詩鈔　四卷　恒遠　賴母

著者が文政己卯〔二四七九〕より、天保壬寅〔二五〇二〕に至る間の作詩三千首中より、綱者門人別府義質の好む所二百餘首を撰集したるものなりといふ。天保十三年壬寅〔二五〇二〕廣瀨建、廣瀨謙の序、及び諸家の跋あり。弘化四年丁未〔二五〇七〕四卷二册に新鐫す。

◉恒遠賴母は豐前の人にして、遠和と字し、子達また遠帆樓と號す。

ゑんひんずゐひつ

遠濱隨筆　寫本一卷

遠州濱松に於ける諸社神官等の考より、同出身營家の事、寺社古文書等を集めたり。奧書に、「右隨筆一卷は、背山下野守忠重家之臣、須田角之允義申、因所望而書寫之畢。正德四年甲午〔二三七四〕曆文月朔日、遠州諏訪大祝從五位下藤原朝臣國頭手誌」と記す。

えんぷしふ

閻浮集　寫本二卷　僧　鐵舟

著者の偈頌序疏等數百を集めたるものなり。正平七年壬辰〔二〇一二〕三月六日、釋四明天龍間叟東陵永璵といへる人の奧書中に、「今觀補陀鐵舟禪師語錄凡偈贊佛事詩頌題跋序疏等、文燦然如夜光結綠不覺使人心目開明可以垂裕後昆可以照映千古他日有具眼者同此證明」とあり、「續群書類從」卷三百二十三、四の二卷、文筆部第七にあり。

◉鐵舟は夢窓國師の弟子にして嵯峨龍光院の開基なり。法を元に求め歸朝して萬壽禪寺に住職す。北朝光明天皇の康永、貞和頃の人なり。

ゑんぶせう

猿舞抄　一册　經　文

俳句の集にて、元祿十一年戊寅〔二三五八〕の編なり。京都井筒屋の版行にかゝる。

えんぶんかいげんぢやうき

延文改元定記　寫本一卷　兼　綱

北朝後光嚴天皇の文和五年丙申〔二〇一六〕延文と改元せらるゝ時の記錄にて年號撰定等の事を詳しく記したり。「續群書類從」卷二百八十九、公事部第四十二にあり。

◉兼綱は當時參議左大辨たり。後に瑞雲院と號す。著書には本書の外、延文元年賀茂臨時祭記、瑞雲院贈左府記等あり。

えんぶんぐわんねんかもりんじさいのき

延文元年賀茂臨時祭記　寫本一卷　兼　綱

北朝後光嚴天皇の延文元年十二月二十七日、即ち御即位後初度の臨時祭記事なり。「續群書類從」卷三十三に收む。

◉兼綱のことは「延文改元定記」の下にあり。

えんぶんよねんき

延文四年記　寫本一卷

北朝後光嚴天皇の延文四年三月二十九日より同十二月十二日に至る略日記なり。「續群書類從」卷八百六十八、雜部第十八に收む。

えんぶんよねんけちえんくわんぢやうき

延文四年結緣灌頂記　寫本一卷

北朝後光嚴天皇の延文四年四月二十九日贈左相府源尊氏の一回忌追善の爲め等持寺に於て結緣の灌頂會を行ふ。本書は其の時の雜記なり。「續群書類從」七百五十六の卷釋家部第四十一にあり。

えんぺきけんき

遠碧軒記　寫本七卷　黑川　玄逸

著者の假名隨筆なり。天象、地儀、時令、居所、神祇、寺院、官位、禮儀、人倫、其の他等に分類して和歌古今の事績を隨筆す。延寶三年乙卯〔二三三五〕弘文院學士林叟の序あり。

◉黑川玄逸の傳記は「雍州府志」の下にあり。

ゑんまんゐんもんぜきさうしようしだい

圓滿院門跡相承次第　寫本一卷

智證大師、康濟律師より、三十六代常尊〔准三后義照の孫〕に至る。「續群書類從」卷九十六、補任部第八に入る。

えんみしふ

鹽味集　一册　水田　西吟

著者の俳句集なり。編述年代は明示なけれど、天和貞享比のものたるべし。

◉水田西吟は井原西鶴の門人にして、俳諧に巧なり。攝津櫻塚に住せり。別號を落月庵と稱す。著書は本書の外に、西吟さくら、菜の花、難波櫻、寢覺廿日、やよひ山等あり。

えんめいゐんじつき

延命院實記　二卷

明治十九年東京榮泉堂より、今古實錄の一として翻刻せる著者未詳の小說なり。上下二編十六回、一册に活刷す。

ゑんやうめいしよわかしふ

遠陽名所和歌集　寫本一卷

遠江國の名所三十六箇所を擧げ、古歌百九十七首を集む。一所每に稱呼の異同を註し、歌は各首共出所讀人を記せり。

ゑんゆうきかう

遠遊紀行　一卷　山崎　嘉

京都江戶間の紀行なり。卷末に「明曆四年(二三一八)之春、嘉、遊于東武、萬治改元(二三一八)之秋、歸西京、紀行詩總計百三十六編」と記せり。別著「再遊紀行」は、萬治二年再び江戶に出でたる時の記也。

◉山崎嘉の傳記は「垂加文集」の下にあり。

ゑんゆうのゐんごくわんぢやうき

圓融院御灌頂記　寫本一卷

永延二年戊子(一六四八)三月九日、東寺灌頂院に於て、圓融院御受戒の次第を詳しく記載したるものなり。

ゑんりかくげんへうかい

圓理較元表解　寫本一卷　阿部　圓

和田寧が發明したる圓理表中の內傳に屬する者にして、小出修喜が傳へし書なり。年代記入なし。

◉阿部圓は伯周と字す。阿州の人にして小出修喜の門人なり。

ゑんりきうせきしよもん

圓理求積初門　寫本一卷　池田　正慶

圓理に於ける積、交周等を求むる解法を記述したる書なり。嘉永三年庚戌(二五一〇)と記入す。

◉池田正慶は彌三郎と稱し、甸山と號す。大阪の人にして、福田嘉當の高弟なり。

ゑんりきうせきへん

圓理求積編　寫本三卷

圓理の問題にして、初步に屬するものを解きたる書なり。循々序次あり、大に學者に益あるべし。年代及び著者詳ならず。

ゑんりきくさんぱふ

圓理規矩算法　一卷　僧　覺道

先づ綴術を記し、尋て方理を解きて、而後圓理に解き及ぼしたり。其の法勾股の理に基きて、圓周及び弧背等を求むるものとす。故に規矩算法と謂ひたるものか。本書と如意算法とは沙門の算書として、頗る見るべきものなり。寬政六年甲寅(二四五四)出版す。

◉覺道は正空と字す、洛西大原郷紫雲山の僧なり。沙川に在りて數學を以て聞ゆ。

ゑんりきげん

圓理起元　寫本一册　和田　寧

數學中求積に屬する理論書なり。九成艸表、圓理脣口、東南表、截經順逆法、殆將算法等を各細目に分けて理陽解式等を示したるものなり。

◉和田寧の傳は「圓理算經」の下にあり。

ゑんりけいだいのかい

算法圓理輕題の解　寫本一卷　荒　至重

圓理の問題を解きたる書なり。輕題の名を冠すれども、輕題にあらず、年代記入なし。

◉荒至重の傳は「量地三略」の下に詳なり。

ゑんりさんきやう

圓理算經　寫本三卷　和田　寧

本書は和田寧が、不世出の傑才を以て圓理の眞術、一貫の理を新發したるものを、著者の歿後門人小出修喜の編成したる書なり。彼の安島直圓の歿後門人日下誠が「不朽算法」を編成したる者と相似て、其の技更に高し。寧が圓理の眞術を新發して、外傳、內傳共に六十六卷を著したり。惜哉其の全書傳らざるも、修喜其の要を輯めて序次を立て、更に統元之卷一册を添へ、之れを首に置き、以つて斯道を學ぶ者の善書たらんことを期したり。安倍晴親の命に依り、之れを上木せんとせしが、終に果さす、惜むべき哉。是を以て本書は世人知る者少し。晩近圓理の書多きを加ふるも、未だ曾て斯の如き者を見ず。本書は小出修喜編、門人北野順夫校、福田子錢訂と署名せり。天保十三年壬寅(二五二〇)に成る。

◉和田寧は通稱を豐之進、後ち算學、又、圓象と曰ひ、子永と號す。初め香山直五郞と曰ふ。播州三箇月の藩士なり。故ありて江戶に出て、芝三緣山增上寺の士と爲る。既にして又土御門家の算學棟梁と爲れり。寧大に圓理を究め、遂に斯道に最要なる諸表を創製し、延て諸術を詳解す。其の解法誠に新にして、且つ美なり。圓理の解法、是より一新して高妙の域に達せり。氏初め數學を宮城流某に學びしが、後關流日下誠の門に入る。其の學力門中に比なし。關門の諸氏陰に寧氏が門に入りて、傳を受るもの甚だ多し。師誠も亦之れを受けたり。氏が學力の高妙なる、以て知るべし。天保十一年庚子(二五〇〇)九月十一日歿す。著書甚だ多し、高尙にして寫本に屬して一も版本なし。

ゑんりしふかい

圓理集解　寫本一卷　池田　正慶

圓理に於ける問題中既刻の算書、或は自撰の題を解きたるもの數條を記述したる書なり。

◉池田正慶の傳は「圓理求積初門」の下にあり。

ゑんりしようへいじゆつ

圓理稱平術　寫本一卷　久保田年榮

圓理に依て平面に於ける重心を求むる解法を記述したる書なり。初學者の爲め大に益あるべし。

◉久保田年榮は內田五觀の門人にして、豐岡の藩士なり。

ゑんりしようへいじゆつこうへん

圓理稱平術後編　寫本一卷　桑本　正明

圓理に依て體積の重心を求むる解法を記述したる書なり。前編と相待ちて大に學者に益あり、安政二年乙卯(二五一五)に成れり。

◉桑本正明の傳は「算法尖圓豁通」の下にあり。

ゑんりしよはつ

圓理初發　寫本一卷　內田　五觀

先つ垜數の各差を記して後錐或は甃を截斷して其の極限を求めたり。圓理の由る所を記述したるものにして、數丁の小册子なり。

◉內田五觀の傳は「對數表精解」の下にあり。

ゑんりしんこう

圓理脣口　寫本一卷　和田　寧

八象表、九成表を用ひて、圓理を解きたる初階の書とす。圓理を學ぶの徒に在りては最も良書なり。和田氏が創めて發せし所の新法大に見るべし。

◉和田寧の傳は「圓理算經」の下に出づ。

ゑんりしんしん

算法圓理新々　一卷　齋藤　宜義

圓理に於ける問題答術を記載したる書なり。全卷頗る高尙なるを見る。天保十一年庚子(二五〇〇)出版す。

◉齋藤宜義の傳は「算法圓理鑑」の條に詳なり。

ゑんりせんびへう

圓理闡微表　寫本一册　內田　五觀

圓理に關する諸表を記述したるもの。和田氏の圓理諸表の名稱を變記したるに過ぎず。卷數或は合或は分ちて一ならず、今見る所は大本一册なり。

◉內田五觀の傳は「對數表精解」の下に詳なり。

ゑんりてうげん

圓理釣原　寫本一卷

圓理に依りて重心を求むる術を解きたる書なり。著者及び年代共に詳ならず。

ゑんりてつじゆつ

圓理綴術　寫本一卷　建部　賢弘

關孝和歿して二十年、嗣子新七、故ありて建部賢弘の家に客たり。新七養父孝和の祕書、弧背の密法を以て賢弘に見す。賢弘乃ち之れを校正して、本書を成したり。實に關流內に於て、圓理の大祕書と爲す。年代記載なきも大率知るべし。

◉建部賢弘の傳は「發微算法演段諺解」の下にあり

ゑんりてつじゆつ

圓理綴術　寫本一卷

本書も亦弧背を求むるの法を記載したるものなれども、前書とは頗る異り、後人の手に成りたることを知るべし。年代を記さず。

ゑんりひじゆつ

圓理祕術　寫本一卷　福田　復

初歩なる圓理の問題を解きたるものなり。
◉福田復は美濃と稱し理軒と號す。美濃の人大阪に住し、後江戸に住み、小出修喜の門人にして、順天求合社を興し、土御門家に隷して、天文生となる。

えんりようせいかん

延陵世鑑　寫本一册　白瀬　永年

最初日向國の由來を記し、延岡藩の第一祖より、元祿五年壬申〔二三五二〕下野國壬生に二萬石の城主たりし三浦壹岐守直次が三千石に三千石の加增を得て延岡城に移りたるまで、各代を詳記す。
◉白瀬永年は德卿と字し、日向延岡藩の醫員にして、天保の初年歿したりといふ。

えんろく

蔫錄　一卷　大槻　茂質

煙草に關する記事にして、煙草原始より、雅賞に至る十門に分ち、附考餘考をも附し、畫圖を挿入せり。引用書は和漢洋七十三部あり。文化六年己巳〔二四六九〕に刊行し、寛政九年丁巳〔二四五七〕田泰の序、山村昌永の跋あり。
◉大槻茂質の傳は「蘭學楷梯」の下に出す。

おを

をあさまのやしろしんきやうさたぶみ

小朝熊社神鏡沙汰文　一卷

建久十年己未〔一八五九〕五月一日伊勢國小朝熊神社の神鏡一面紛失せし以來、天福二年甲午〔一八九四〕に至るまでの該事件に關する取調進達等の文書を集めたり。「群書類從」卷十二、神祇部第十二に收めらる。

おあそびのせう

御遊抄　寫本五卷

天武天皇以下數代の內宴、御會、御元服、行幸等に關する事を拔記したるものなり。文政元年戊寅〔二四七八〕秋、正二位資矩書寫の奧書、及び同五年八月二十一日左番權助季長寫本の奧書あり。

おあらためぶくきりやう

御改服忌令　一卷

元祿六年癸酉〔二三五三〕十二月二十一日制定の服忌令に、同年の追加を省略して、十六箇條を加へ、元文元年丙辰〔二三九六〕九月十五日、更に七箇條を增補したるもの。大奉書十八枚に印刻す。光格天皇の文化元年甲子〔二四六四〕再刻して小折本に作れるもあり。

おあらためぶくきりやう

御改服忌令　一折

前揭「御改服忌令」を再刻して、假名付一小折本に作りたるものなり。文化元年甲子〔二四六四〕御物師江戸出雲寺和泉掾が發行するところなり。

おあんものがたり

おあん物語　寫本一册

慶長庚子の亂、美濃國大垣の城に在りて、實戰を見聞したる物語を記したるものなり。卷首に「おあんさま」云々と書出でたるより「おあん物語」と名けたるにて、おあんは御庵の意にて作者がおあんといふ名とは限らざるべし。作者某は山田去暦の女にして、石田三成に仕へ江州彥根に居り、後、土佐に赴き雨森儀右衞門に嫁し、夫、死して後、甥山田喜助のもとに寓居し、後西院天皇の寛文比八十餘歲にて死せりといふ。本書は享保十五年庚戌〔二三九〇〕三月二十七日に記せる谷垣守の奧書あり。朝川善庵の跋を附し、天保八年丁酉〔二四九七〕「おきく物語」と合して刊行す。此の善庵の跋あるものは誤謬多しといふ。

おいぬのしよ

御犬書　寫本一册　水野冲右衞門

著者が猟犬の飼養、仕立等の方法を記して、若林角一といふものに贈與したる書束なり。文化七年庚午〔二四七〇〕のことに係る。

おいのをしへ

老の敎　一卷　松平　定信

養氣衞生等に關し、飮食湯藥等の事を詳しく論說したり。文政十二年己丑〔二四八九〕の孟春、著者七十二歲にて書する所なりとあり。明治二十六年十一月發行の「樂翁公遺書」下卷にあり。
◉松平定信の傳記は「花月草紙」の下に揭ぐ。

おいのきそごえ

老乃木曾越　寫本一卷　細川　藤孝

著者木曾路に向つて、東都を首途せしより、浦輪、倉賀野、筑摩川、和田峠、野尻、妻籠、伏見、猪瀨川、垂井、藤川、粟津野等を歷て、粟田山に至るまでの紀行にして、途中自詠の和歌を揭ぐ。太田南畝の奧書あり。其の中に、「予享和改元辛酉〔二四六一〕浪花に在りて、師走の二十八日の夜、順慶町の市にて、岐蘇路の記〔貝原益軒の著〕を得て、細川玄旨の紀行ある事を知れり。其の後此の書を求むるに得ず、ことし計らずも中橋の市に此の書を得たり。十五年の朦朧一時に霽れし心地ぞする。時に文化十二年乙亥〔二四七五〕卯月二十一日なり。翌日つとめて記了」といへり。
◉細川藤孝の傳記は「伊勢物語闕疑抄」の下にあり

おいのくりごと

老のくりごと　一卷　僧　心敬

游歷寄寓の記事を兼ねて、和歌連俳に關する沿革槪評等を記載したるもの。意見文章共に見るべし。「群書類從」卷三百〇五連歌部に收めたり。
◉心敬は十住心院權大僧都と稱す。聖護院の院室にして修驗道の棟梁たり。幼より連歌を好みて、其の道に精しく、遂に名を成せり。著書は本書の外に「さゝめごと」あり。文明七年乙未〔二一三五〕四月十六日歿す。

おいのすさみ

老のすさみ　一卷　僧　宗祇

古來の連歌を評論したるものなり。其の總序に曰く、「予既老の波、六十路にかゝりて、耳順ふことわりもなく、徒に花の春、月の秋を送り、朝の霜、夕の風を待ちわびて、末葉に宿る露の限り遠くとも、いま幾程か侍らん、空しく當來のつとめを思はずして、此の世の道に執をとむること、いかゞはせんとなげきあまりては、吉野の川のよしや世の中と思ひかへし、鳴のはねがきかきあつめつゝ一册となして、昔今の詞をあらはせり、これ偏に齡の末のなぐさめなれば、號けて老のすさみとやいふべからむ」とあり。文明十一年己亥〔二一三九〕春三月の著、「群書類從」卷三百〇五連歌部に收めたり。
◉宗祇の傳記は「新菟玖波集」の下にあり。

おいのたのしみ

老の樂　一卷　市川　柏筵

享保十九年甲寅〔二三九四〕正月元日より、天文、寛保、寛延を經て、元文五年庚申〔二四〇〇〕十一月朔に至る折々の日記なり。書中著者の句も亦多しと。「溫知叢書」第一編にあり。
◉柏筵は元祿元年戊辰〔二三四八〕に生れ、十七歲の時元祖團十郎死したる故、寶永七年後を續で二世團十郎となる。

おいのともしび

老の灯　寫本一卷　六誹園立路

著者の隨筆にて、其の端書に、「耄する事のいやましなれば、昨日の事は今日失ひ、人に尋れし言くさも、わすれかちなるくるしさ增して、毎文のふる言のかすかすは、胸の鏡くもりがちなるに、それかれと見わからず、おもひも出ればそれを照さん老の灯なり」といふ。
◉六誹園立路は俳人にして、隨筆に富めり。卽ち本書の外に、しるしの反故、とのゐ瓢、筆の行衞、寢ぬ夜の友、筆詞、筆亂、筆車、日數の徒然、窓の雪、有無草、閑道芝、寢覺硯、友千鳥等あり。今その詳傳は得がたし。

おいのながばなし

老の長咄　一卷

酒客の間に行はるゝ閑話を始として、高僧の逸事、鄕黨の善行等諷世警俗の雜話二十六箇をかきあつむ。著者は寛政比の人なるべしと云ふ。「溫知叢書」第十二編に收む。

おいのなみ

老の波　一卷　松平　定信

茶道に關して精しく論述したるものなり。何時比の作なるか詳ならず。明治二十六年十一月發行せられたる「樂翁公遺書」中卷に收む。
◉松平定信の傳は「花月草紙」の下に揭ぐ。

おうあんせんぐうき

應安遷宮記　寫本一卷

北朝の應安六年癸丑〔二〇三三〕伊勢外宮遷宮の記なり。

おうあんにねんかすがさんじふはちしよつくりかへのき

應安二年春日三十八所造替記　寫本一卷

應安二年己酉(一三六九)に於ける春日三十八所造替の記なること名の如し。但、數枚より成る。「續群書類從」卷三十八にあり。

おうえいいらいげくうあうしんじやう

應永以來外宮注進狀 冊一卷

後小松天皇の應永五年戊寅(一三九八)三月、豐受大神宮權禰宜度會神主眞通の盛狀より、寛永六年己巳(一六二九)閏二月の注進狀に至る數多の注進狀を集めたるもの。「續群書類從」卷二十一に收む。

おうえいき

應永記 冊一卷

應永六年己卯(一三九九)十月、大內左京權太夫義弘、讒を信じて大樹義滿を恨み、嫡子新介、執事平井備前等の諫をも用ひず遂に泉州堺に於て叛逆を企つ。因て同年十一月八日大樹義滿、細川賴元、京極治部少輔、斯波尾張守、赤松上總等を率ひて征討し、十二月二十一日遂に義弘を亡す。本書は其の記事なり。故に一名を「大內義弘退治記」とも云ふ。

おうえいきたやまきやうかうき

應永北山行幸記 冊一卷

應永年中北山御幸の事を和文にて記したるものなり。末に同十五年戊子(一四〇八)三月二十三日和歌御會の歌を載げたり。大永五年乙酉(一五二五)藤原氏直の寫本奧書あり。

おうえいぐわんねんむろまちでんこしやさんのき

應永元年室町殿御社參記 冊一卷

應永元年甲戌(一三九四)八月、日吉社へ參詣したる時の漢文記事。「續群書類從」卷五十四に入る。

おうえいいじふよねんかすがわかみやりんじせんぐうき

應永井四年春日若宮神殿守記 冊一卷

應永三十三年丙午(一四二六)より、三十四年に渡りたる春日若宮神殿守の日記なり。「續群書類從」卷三十七にあり。

おうえいさんじふよねんかすがのやしろつくりかへにつき

應永十四年春日社造替日記 冊二卷

應永十三年丙戌(一四〇六)造營沙汰の記事より、同十四年十二月十一日上棟式擧行迄の日記。「續群書類從」卷三十六にあり。

おうえいしちねんさかはのやしろせんぐうき

應永七年率川社遷宮記 常住 春雄 冊一卷

應永七年庚辰(一四〇〇)七月十三日より、同八年辛巳四月二十五日に至る記事なり。「續群書類從」卷三十八に收む。

◎常住春雄は別に「應永十五年春日若宮臨時遷宮記」の著あり。

おうえいじふごねんかすがわかみやりんじせんぐうき

應永十五年春日若宮臨時遷宮記 常住 春雄 冊一卷

後小松天皇の應永十五年戊子(一四〇八)三月二十三日和歌御會の歌を載げたり。大永五年乙酉(一五二五)藤原氏直の寫本奧書あり。

おうえいにじふろくねんげくうしんはうそうくわんふ

應永二十六年外宮神寶送官符 冊一卷

應永二十六年己亥(一四一九)伊勢外宮豐受大神宮の御裝束、神寶、雜物等の勘錄なり。「續群書類從」十の卷神祇部にあり。

おうおうやわ

翁嫗夜話 冊十五卷 增田 休意

讃岐國の地誌なり。本名「讃州府志」の下に解題す。

おうき

小右記 冊二十册 小野宮實資

著者の日錄なり。小野宮右大臣の字によりて「小右記」と名け、一名を「野府記」といふは、小野宮右府にとれるなり。また祖父小野宮清慊の「水心記」に對して「續水心記」ともいへり。天元五年壬午(一六四二)夏、治安三年癸亥(一六八三)夏、秋、同四年春、夏、萬壽二年乙丑(一六八五)秋、同三年秋、同四年四季、同五年四季、長元二年己巳(一六八九)秋、同四年春、秋、同五年四季等の日記なり。記事に斷續ありと雖も、當時の實錄なれば亦參考書として貴重なり。帝國圖書館貴重本として藏す。「群書一覽」に卷を十七卷とし、記事を治安四年甲子(一六八四)よりとしたるは、又、別種の寫本によりしものなるべし。此の外にも種々の異本あり。

◎小野宮實資は藤原姓參議齊敏の子なり。長保三年大納言兼右近衛大將に任ぜらる。時に左大臣藤原道長專ら朝政を總べて威福を逞し、三條帝位を窺ぐに及びて、益甚しく、朝臣阿附するもの多し。實資獨り儕然として色を正し、愚直以て朝に奉ず。大小の事多く實資と議し、天皇もまた大に倚賴し、大小の事多く實資と議し給ふ。治安元年右大臣に拜し、皇太弟傳を兼ね、萬壽三年牛車宮門に入るを聽され、長暦元年從一位に進む。永承元年丙戌(一〇四六)正月、年九十にて薨ず。

おうきうしふ

鷗巢集 冊一卷

絕詩一百餘首の集なり。後奈良天皇の天文二年癸巳(一五三三)或人の書寫するところなるが、作者の姓名を明記せず、從つて鷗巢は作者の號なるや否やを斷じがたし。

おうせいかう

應聲考 冊

人の音聲の理を論述す。卽ち「應答の聲は、なべての語音とは異にて、彼方より言ひかくる時、其の事情に隨ひて、自ら阿伊宇衣於の五音の中の聲を發して應ふる」ことを大略說述したるものなり。その例證には種々の古文古歌等を引用せり。編年明記なし。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

おうせんぢやうりつもんだふしき

應撰定律問答私記 冊二卷

林 恕

律令に關する諸家の私記傳記等を參酌して問答體に說明す。延喜七年己未(九〇七)正月十四日。春齋の奧書あり。

◎林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

おうせんぢやうりつもんだふしき

應撰定律問答私記 僧 嚴寶

文武天皇の大寶元年辛丑(七〇一)藤原不比等の敕を奉じて撰したる「令」の抄なり。著者嚴寶が父一條兼良の說を受けて抄したるものなりと云ふ。

◎嚴寶は關白一條兼良の子。三后に准じ、東寺長者、法務、東大寺別當となる。生死の年月詳ならず。

おうにんき

應仁記 一卷

後土御門天皇の應仁中に於ける細川勝元、山名宗全の戰爭、卽ちゆる應仁亂の記なり。最初兩人の權威を爭ふことより、諸大名の各方に附隨せること、數年戰爭のつゞける事、洛中外の疲弊せる事、宗全勝元等死し諸大名、各歸國する等の顚末に至る。別に「重編應仁記」二十卷あり、そは題名の下に於て解題すべし。

おうにんきしゆせう

應仁記手抄 冊一卷

おうえいにじふろくねんかとりぐうぞうえいちうもん

應永二十六年香取宮造營注文 冊一卷 小林玄藩允

應永二十六年己亥(一四一九)下總國香取宮社造營の注進文なり。「續群書類從」卷七十にあり。

おうえいにじふろくねんげくうしんはうそうくわんふ

應永二十六年外宮神寶送官符 冊一卷

應永二十六年己亥(一四一九)伊勢外宮豐受大神宮の御裝束、神寶、雜物等の勘錄なり。「續群書類從」十の卷神祇部にあり。

おうおうやわ

翁嫗夜話 冊十五卷 增田 休意

讃岐國の地誌なり。本名「讃州府志」の下に解題す。

おうき

小右記 冊二十册 小野宮實資

著者の日錄なり。小野宮右大臣の字によりて「小右記」と名け、一名を「野府記」といふは、小野宮右府にとれるなり。また祖父小野宮清慊の「水心記」に對して「續水心記」ともいへり。天元五年壬午(九八二)夏、治安三年癸亥(一〇二三)夏、秋、同四年春、夏、萬壽二年乙丑(一〇二五)秋、同三年秋、同四年四季、同五年四季、長元二年己巳(一〇二八)秋、同四年春、秋、同五年四季等の日記なり。記事に斷續ありと雖も、當時の實錄なれば亦參考書として貴重なり。帝國圖書館貴重本として藏す。「群書一覽」に卷を十七卷とし、記事を治安四年甲子(一〇二四)よりとしたるは、又、別種の寫本によりしものなるべし。此の外にも種々の異本あり。

◎小野宮實資は藤原姓參議齊敏の子なり。長保三年大納言兼右近衛大將に任ぜらる。時に左大臣藤原道長專ら朝政を總べて威福を逞し、三條帝位を窺ぐに及びて、益甚しく、朝臣阿附するもの多し。實資獨り儕然として色を正し、愚直以て朝に奉ず。大小の事多く實資と議し、天皇もまた大に倚賴し給ふ。治安元年右大臣に拜し、皇太弟傳を兼ね、萬壽三年牛車宮門に入るを聽され、長暦元年從一位に進む。永承元年丙戌(一〇四六)正月、年九十にて薨ず。

おうさうしふ

鷗巢集 冊一卷

絕詩一百餘首の集なり。後奈良天皇の天文二年癸巳(一五三三)或人の書寫するところなるが、作者の姓名を明記せず、從つて鷗巢は作者の號なるや否やを斷じがたし。

おうせいかう

應聲考 冊

人の音聲の理を論述す。卽ち「應答の聲は、なべての語音とは異にて、彼方より言ひかくる時、其の事情に隨ひて、自ら阿伊宇衣於の五音の中の聲を發して應ふる」ことを大略說述したるものなり。その例證には種々の古文古歌等を引用せり。編年明記なし。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

おうせんぢやうりつもんだふしき

應撰定律問答私記 冊二卷

林 恕

律令に關する諸家の私記傳記等を參酌して問答體に說明す。延喜七年己未(九〇七)正月十四日。春齋の奧書あり。

◎林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

おうせんぢやうりつもんだふしき

應撰定律問答私記 僧 嚴寶

文武天皇の大寶元年辛丑(七〇一)藤原不比等の敕を奉じて撰したる「令」の抄なり。著者嚴寶が父一條兼良の說を受けて抄したるものなりと云ふ。

◎嚴寶は關白一條兼良の子。三后に准じ、東寺長者、法務、東大寺別當となる。生死の年月詳ならず。

おうにんき

應仁記 一卷

後土御門天皇の應仁中に於ける細川勝元、山名宗全の戰爭、卽ちゆる應仁亂の記なり。最初兩人の權威を爭ふことより、諸大名の各方に附隨せること、數年戰爭のつゞける事、洛中外の疲弊せる事、宗全勝元等死し諸大名、各歸國する等の顚末に至る。別に「重編應仁記」二十卷あり、そは題名の下に於て解題すべし。

おうにんきしゆせう

應仁記手抄 冊一卷

前掲「應仁記」中の要件を摘錄して著者の遺志に備へたるもの、如し。

おうにんくわうき　應仁廣記　五卷

前掲「應仁記」を推廣したる意にて凡て應仁文明間の變遷擾亂を詳記せり。三十五箇條より成る。

おうにんこうき　應仁後記　三卷

應仁の擾亂以後、永祿年間までの變遷汚隆を記す。都合三十箇條より成る。「續應仁後記」十卷あり、それは題名の下に解題すべし。

おうにんぜんき　應仁前記　二卷

兩畠山家督爭論より、赤松家の瘟褒、將軍家規式の次第等、凡て寬正年間の世態變遷を記せり。上下二卷都合九箇條より成る。

おうにんにねんしんぐうふくさりやう　應仁二年神宮服忌令　冊一卷

應仁二年戊子(一四六八)伊勢神宮に於ける服忌令二十二項、精進の條々等を記したるものなり。「續群書類從」卷八十にあり。

おうにんぶかん　應仁武鑑　七卷　栗原　信充

後土御門天皇の應仁時代に於ける武臣の所領を主として、其の系圖官職等をも記したるものなり。最初第一卷第二卷には。表題に、「京都將軍家所領役考」と冠して、京都將軍家の所領より吉良、澁川、石橋等の一族、斯波、細川、畠山の管領、山名、佐々木、赤松の四職、國持御供衆申次等までを記し、卷三卷四を續編とし、「鎌倉管領所領役考」と冠して、鎌倉分國十五州の內鎌倉所領の內上杉、及び支族關東八大將、評定衆等の所領役を記し、五六七、を三編とし、鎌倉分國十五州の內武田、小笠原、木曾、大井、村上等の大名を首として、南部、伊達、武藤等の甲族を記す。而して初編二卷以下五卷は同弘化年中に新鐫せられたる小本なり。

◎栗原信充の傳は「續群新書」の下にあり。

おうにんべつき　應仁別記　冊一卷

後土御門天皇の應仁元年丁亥(一四六七)京師の兵亂、卽ち山名、細川兩家の不和より、一味の大名東西に陣を張り數十度の戰爭ありし濫觴より其の結末に至る記事なり。

おうにんりやくき　應仁略記　二卷

上卷に當年大亂現行の次第、此の時御在位の始め大嘗會以下色々の節會並に江州敏滿寺滅亡に就て神輿入洛の事附り祇園炎上の事。下卷に正月十八日御靈の事、畠山方確執濫觴の事。京中同神前合戰の事附り五月二十六日大亂の事。公家仁々所々暫住する事。祿在所粗注留むるの事。公家仁々所々暫住する事。過去帳三國傳記附り前近江守最後の事。並に十首和歌此の記の意に叶ふ事。今出川殿伊勢の國御下向の事。附り翌年御歸洛御登山以下不思議成行の事並に伊勢守再出反の事。去永享塔婆建立の時上意一色左京大夫並世保大膳大夫討死の事。愛宕太郎坊比叡山瓦山大天狗召請の事等なり。應仁元年丁亥(一四六七)十月之れを誌すとあり。「群書類從」卷三百七十七、合戰部第九にあり。

おうましるし　御馬印　冊六卷　久庵

德川家康以下代々の將軍、三家、族本、諸大名の、族族兜鎧等を模圖し、寸法彩式諸家の姓名等を記したるものなり。卷一には、德川家康の馬印より松平丹波守の馬印に至る二十九。卷二には、松平甲斐守より九鬼長門守に至る二十一。卷三には、小笠原豐後守より松平外記に至る二十八。卷四には、織田信長より宗對馬守に至る二十三。卷五には、桑山左衛門佐より稻葉淡路守に至る三十五。卷六には本多伊勢守より眞田伊豆守に至る三十四。都合百七十家のを列擧せり。戰史研究上參考の價値あるべし。明曆元年乙未(一六五五)刊行せられたるが、其の後百三十二年を經、天明六年丙午(一七八六)に至り、絕版に歸したりといふ。明曆元年雜魯子三淺といふ人の序あり。著者久庵は洛下隱士と肩書せり。

おうりしうかいづ　應理宗戒圖　二卷

大乘法相宗の戒行の名稱種類竟に作法等を說き述べたるものにして、本文集と釋文鈔とにて上下二卷を分てり。本文集は「瑜伽師地論」「彌勒菩薩造」の文の抄錄にして、釋文鈔は「瑜伽師地論釋」「最勝

子等諸菩薩造」「瑜伽論記」「遺倫述」「瑜伽略纂」「悉恩述」等の文を抄錄し、上の本文を註解したるものなり。寬文十一年辛亥(一六三一)の開版に係れり。因に記す。「諸宗章疏錄」に出せる「應理戒宗釋文鈔」二卷(「續群述」)と本書との同異如何、他日の考定を待つ。

おえどおほえづ　分御江戶大繪圖　一折　石川　流宣

德川七代將軍家繼の時製したる九千分一の精細地圖なり。一見當時の江戶を明晰にす。正德三年癸巳(一七一三)の版刻にて、帝國圖書館に貴重品として所藏す。

◎石川流宣のことは「日本圖」の下にあり。

おをけいちうき　於平輕重義　冊二卷　東條　義門

五十音中の、お、を、の輕重を論せり。該二音の發音上に區別無くなりて、綴りの上にても輕重を混亂するやうになりたるより、其の由來用格を詳に論じたり。上卷には證を擧げて、お、を、の所屬を辯じ、下卷には他の諸難に答へたるもの、及び上卷の疑證を實したるもの二十餘項を記述せり。文政十年丁亥(一八二七)閏六月の作。

◎東條義門の傳は「活語指南」の下にあり。

おかきつけうつしならびにしよろく　御書付寫並諸錄　冊二卷

德川幕府の書付を寫し留めたるものなり。卽ち天明五年細川家にて家老加增の書付、寬政元年松平定信將軍補佐となりし時の諸司へ示したる書付。天明七年小普請組植崎九八郎の呈書、其の他天明より寬政に至る間の仰出し書付數通を載せたり。

おかきつけふれどめ　御書付觸留　冊四册

德川幕府の書付觸留等の雜錄なり。

おかきとりならびにおかきつけかきぬき　御書取並御書付書拔　冊一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。年度不詳に屬す。

をかざきものがたり　岡崎物語　冊三卷

德川家康一生の記なり。上卷は其の幼時より、天正九年菊田のはたらきに至り、中卷は同十年より慶長四年石田三成の密謀露顯を記す。下卷は歿後叙號を賜はるまでを記す。

をがさはらかきもの　小笠原書物　冊十四卷

小笠原流武家故實の書なり。卷一に圖物の事より、犬追物の馬場の尺の事に至る六條。卷二笠懸馬場の事より、還笠懸の事に至る十一條。以下十四卷書札の諸禮に至るまで凡て九十三條あり。

をがさはらかれいしよ　小笠原家禮書　一卷　小笠原長時

家流の作法書にて、元服之次第、酌の次第、道の次第、萬請取渡の次第、萬躰の次第、書札の次第等にて同家の祕書たりといふ。各同貞慶と共に署名あり。寬永九年壬申(一六三二)百五十餘枚に版行。

◎小笠原長時の傳は「元服之次第」の下にあり。

をがさはらくないき　小笠原宮內記　冊一卷

享保二十年乙卯(一七三五)以下、小笠原宮內にかかる取調べ始末に關する實記なり。上下往來の書類をも網羅す。下半の上書に「享保二十一年丙辰三月案錄之次日向誠直」と記し、最後に「右者牢人小笠原宮內父民部書記也依見書寫之、于時元文元年丙辰(一七三九)六月也」と記せり。

をがさはらけいづ　小笠原系圖　冊一卷　小笠原貞宗

淸和天皇より出で、貞純、經基より武臣となりて源姓を賜はり、數百代を經て、元和元年乙卯(一六一五)に及したる忠脩の子弟に至る系圖なり。「續群書類從」卷百二十四、系圖部第十九にあり。

◎小笠原貞宗の傳は「犬追物目安」の下にあり。

をがさはらけいづ　小笠原系圖　冊一卷

新羅三郎義光五代の孫長淸より、寬永年代なる新五郎貞信に至る系圖。「續群書類從」卷百二十五、系圖部第二十に收む。同卷には別本一種と、同諸流系圖、同三家系圖等を收めたり。

をがさはらけこしよぬきがき　小笠原家右書拔書　冊二册　小笠原康廣

一册は書禮の書にして、一册は、犬追物の書なり。共に「右從小笠原縫殿助追而來る古書之書拔七册之內」と奧書して、各數枚の寫本なり。書禮の方には中に小笠原六郎康廣の永祿二年己未〔二二一九〕の書幾通をも收め、犬追物の卷端には「御不審之事」と掲げて數條を記せり。

をがさはらけこもんじょ

小笠原家古文書　寫本一卷

文安以後永享の比までの書類四十二通を編輯したるものなり。

をがさはらじまき

小笠原島記　寫本一卷

小笠原島に關する書付類を集錄したるものなり。

をがさはらしようさいしつけのしょ

小笠原勝齋仕付書　寫本一卷　小笠原勝齋

飲食其の他の禮式作法を詳記したる數十項の仕付書なり。年代署名なしといへども、小笠原勝齋の書たる條、信ずべし。

をがさはらしょれいしふ

小笠原諸禮集　三卷　小笠原貞慶

別名「諸禮集」といふ名の下に解題せり。

をがさはらしょれいだいぜん

小笠原諸禮大全　一册　石田　玉山

小笠原家の禮式作法百數十項を說明し、門人大阪の畫家石田玉峯の筆を以て畫繪を挿入す。文化六年己巳〔二四六九〕細香主人の序あり。明治十四年篠田正作其の半數を刪除して新に版行せり。著者石田玉山は畫家にして法橋たり。

をがさはらせうきろく

小笠原小記錄　寫本十五卷　稻葉　則道

小笠原流の諸禮式を列記したるものなり。卷末に稻葉源太夫則通、福生又兵衛眞溫、小關源五兵衛正親の連名にて、初學の爲めに粗記し置く由を記せり。十五卷五册に寫傳す。

◉稻葉則通のことは「山鹿古先生由來記參考」の下にあり。

をがさはらだいだいき

小笠原代々記　寫本一卷

小笠原長時と、武田晴信と信州に合戰を始めし事より、其の子貞慶に至るまでの事績を記したるものなり。

をがさはらにふだうそうけんき

小笠原入道宗賢記　寫本一卷　小笠原宗賢

武家武具に關する故實作法を詳記したるものなり。慶長年中の書寫本なり。「續群書類從」卷六百八十四、武家部第三十に收む。

をがさはらはいぜんくひやうのこと

小笠原配膳食樣之事　寫本一卷

武家有職の書にて、書名の示せる如く、配膳食樣の故實を記したるものなり。正保四年丁亥〔二三〇七〕貞儀寫本の奧書あり。

をがさはらみんぶき

小笠原民部記　寫本一卷

卷頭に「小笠原民部長啓所持家康公御證文十八通」と記して、年來の各書類を列掲し、末に小笠原家の詳細系圖を掲げたり。

をがさはらりうたづなのひしょ

小笠原流手綱之祕書　寫本一卷　小笠原淨元

手綱の故實規式を記したるものにて、末に「寶德二年〔二一一〇〕八月十七日淨元在判」とあり、また「此一册者上原豐前入道石庇證本也、然に彼息神八郞誂與之間、令借寫訖、天文六年〔二一九七〕九月日」とあり。「續群書類從」卷六百八十、武家部第二十六にあり。

◉小笠原淨元のことは「犬追物集書」の下にあり。

をがさはらりうれいぎのしょ

小笠原流禮儀書　寫本一卷

小笠原流禮儀中、喰初、髮置、袴着、元服の法式に關するものを抄出せる十二枚の寫本なり。

おかざほしちやうのうつし

御風干帳寫　寫本一卷

將軍家寶藏の器物目錄なり。內務省に於て五十餘枚に傳寫す、年代を記さず。

おかざりのしょ

御飾之書　寫本一卷　相阿彌

左大臣足利義政が座敷の圖並に諸道具の裝置を記述圖示したるものなり。大永三年癸未〔二一八三〕十一月著者之れを編して將軍義稙に進す。奧書に曰く、「右此一卷者義稙公之御爲に無殘注置候相構而不可有他見於此上口傳繼に相傳中候者也」と、「輪池叢書」に收めらる。又、「群書類從」卷三百六十一、遊戲部第五には「御飾記」として收めたり。

◉相阿彌は名を眞相鑑岳といひ松雪齋と號す。造庭、書畫、詩歌、茶式等に精しく書畫器物の鑑定に妙を得、畫は山水花鳥人物等を善くす。足利義政に仕へて寵せらる。

おかたがへぎやうかうき

御方違行幸　寫本一卷

後花園天皇の永享九年丁巳〔二〇九七〕十月二十一日天皇御方角避の略記事なり。供奉の人名、器物等を記す。

をかだたけゑもんおぼえがき

岡田竹右衛門覺書　寫本一卷　岡田　元治

德川家康時代に於ける松平周防守の事績を覺書したる略實記なり。同家の祕書なりといふ。明治八年內務省に寫本す。

◉岡田元治は松平周防守の臣にして、少名を帳平次といひ、竹右衛門と稱す。本書は其の存生中の見聞を記したるなり。

おかちめつけこころえかきとめ

御徒目付心得書留　寫本一卷

御門々御定書、大手七箇條御門纖被仰渡之事以下凡て二十五條、徒目付の心得事例を略記す。享保、明和、安永等の事例なり。橫綴一册に作る。

をかとうかいせんせいぶんかう

岳東海先生文稿　十卷　岳　融

著者の文詩集にして、其の編上なり。卷一に序九。卷二に序五、記四。卷三に記三、箴一、銘一、贊二、行狀二、墓碣二、書牘六。卷四五に紀事十四。卷六に倣古樂府八十、五言古詩二十八。卷七に七言古詩三十五。卷八に五言律七十三、五言排律八。卷九に七言律七十四。卷十に五言絕句四十二、七言絕句七十三首を收む。天明五年乙巳〔二四四五〕門人、鐵棗胤の序其の他の序跋あり、同年十卷五册に新鐫す。

◉岳融は三河國寶飯の人にして、子陽と字し、東海と號し、太沖と稱す。享保二十年乙卯〔二三九五〕二月二十三日生れ、幼より學を好み、江戶に移りて學ぶ。享和三年癸亥〔二四六三〕二月二十一日歿す、年六十九、江戶泉岳寺の後山に葬る萬松山といふ。著書は本書の外に岳東海先生文稿下編、五嶽古名考、荀子考注、大華山圖等あり。

をかとうかいせんせいぶんかう

岳東海先生文稿　十卷　岳　融

本書は下編にして、卷一に序五、記一。卷二に傳二、墓碣銘七。卷三に紀事一、論一、辯一、贊銘戒十九、題跋六。卷四に書牘九。卷五に風雅十、賦三、倣古樂府二十七、四言古三、五言古十四、七言古十二。卷六に五言律九十、五言排律十一。卷七に七言律六十五。卷八に七言律六十一。卷九に五言絕八十一、七言絕六十。卷十に七言絕九十六、六言律五、六言絕六等を收め、末に子岳巒の撰したる「東海岳先生行狀」を掲げ、文化四年丁卯〔二四六七〕男巒の序、及び男璞の跋あり。十卷五册に行はる。

◉岳融の傳は「岳東海先生文稿」〔上編〕の下にあり

をかのずゐひつ

岡野隨筆　寫本二十九卷　本島　知辰

一名「月堂見聞集」といへる題下に解題せり。

をかのはな

岡の花　八册

美濃派の俳句を集めたるものなり。寶永二年乙酉〔二三六五〕京都にて出版せり。

をかのやかしふ

岡屋歌集　二卷　栗田　土滿（ヒヂマロ）

著者の長短歌を輯集したるもの。享和四年甲子〔二四六四〕橘千蔭の序、本居大平の序、門人栗田眞菅の跋あり。

◉栗田土滿の傳は「神代紀葦牙」の下にあり。

をかのやくわんぱくき

岡屋關白記　寫本四册　藤原　兼經

著者が、建長元年己酉〔一九〇九〕同二年三年、貞永元年壬辰〔一八九二〕等の日記なり。

◉藤原兼經は攝政家實の長子にして、嘉禎三年丁

酉〔一八九七〕三月十日攝政となり、仁治元年庚子〔一九〇〇〕十月二十八日牛車の宣旨を蒙り、太政大臣に任ぜられ、同二年に太政大臣を、同三年に攝政を辭し、寶治元年丁未〔一九〇七〕再び攝政となる。兼經和歌を善くし、また典故に通ず、岡屋と稱し、後入道せり。

なかのやのりとしふ

岡屋祝詞集　寫本三卷　栗田土滿(ヒヂマロ)

遠江國廣幡八幡神社の、四時の祭祀を始め、臨時の祈禱等をなしたる時の著者の祝詞文數多を編輯したるものなり。光格天皇の文化九年壬申〔二四七二〕門人藤原眞道等有志の編輯校合したるところなり。

◉栗田土滿の傳は「神代紀葦牙」の下にあり。

なかべけいづ

岡部系圖　寫本一卷

爲盛の支流岡部六彌太忠澄が後胤、中務忠秀より、元和三年丁巳〔二二七七〕、徳川秀忠に謁し、寬永元年甲子〔二二八四〕より、將軍家に仕へたる小次郎吉次に至る系圖なり。

なかべにつき

岡部日記　一卷　賀茂眞淵

某年江戸より故鄕遠江に歸り遠江の所々を巡りて、又江戸に歸りたる時の紀行なり。一名「東歸」ともいへり。別記「西歸」に對し、東より歸る義にて付けたる名なるべし。

◉賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下に揭ぐ。

なかもちかしふわがおもしろ

岡持家集我おもしろ　二卷　手柄岡持

著者の長歌、狂詩、國字詩、狂文を編集したるもの。文化十一年甲戌〔二四七四〕六十六翁蜀山人の序あり、次に寬政元年己酉〔二四四九〕の自序あり、此の序は自己の狂歌を集めて、我面白と名け、その序にとて、狂體の短歌を論じたるものなるを、男平澤太奇の遺編を拾輯するに方りて、更に揭げたるものと見ゆ。

◉手柄岡持の傳は「後は昔物語」の下にあり。

なかもとき

岡本記　寫本一卷

弓技射術に關する規式作法を詳記したるものにて、天文十三年甲辰〔二二〇四〕十二月三日著者の奧書、及び寬政四年壬子〔二四五二〕伊勢萬助の奧書あり。「續群書類從」卷六百七十二、武家部第十八に收む。著者は岡本美濃守と署名せり。

なかもとけいうんにつき

岡本慶雲日記　寫本一卷　岡本慶雲

天正十二年甲申〔二二四四〕春より、同十三年九月に至り、前田利家、佐々成政の越中陣の事を詳記したるものなり。

◉岡本慶雲のことは「加越戰爭記」の下にあり。

なかもとやすたかちよじゆつもくろく

岡本保孝著述目錄　寫本一卷　岡本保孝

著者の著述目錄にして、二百餘種を收む、自ら編輯するところなり。安政四年丁巳〔二五一七〕三月の自題に、「此册是自著之目錄也、余積年所筆記、頃手自臚列、姑顏曰拙誠堂叢書、拙誠是余堂號也、凡三門、一曰此土門、二曰彼土門、三曰釋氏門、部類卷數未定也、何者自今已後因天假年之永與不永、而著述或多或少、則未知可追收幾部也」云々とあり。

◉岡本保孝の傳は「韻鏡考」の下にあり。

おきうぞくき

御九族記　寫本九卷　平岡資模

徳川家康の高祖父、曾祖父、祖父、父、子、孫、曾孫、玄孫の九族系傳にして、寬保三年癸亥〔二四〇三〕の作なり。

◉平山資模のとは「天明五年遺忌錄」の下にあり。

おきうばはじめ

御弓馬始　寫本一卷

毎年正月十七日に於ける將軍家弓馬始の次第を詳說したるものにて、武家故實に關する叢書「弓馬雜纂」の中に輯收したり。

おきくものがたり

おきく物語　一卷

元和元年乙卯〔二二七五〕大阪落城の際に於て、從來見聞したる事實を記したるものなり。おきくは田中意德といふものゝ祖母にして、豐臣氏に仕へて、大阪城中のことを知れるまゝに物語したるなり。朝川善庵の跋を附し、天保八年丁酉〔二四九七〕「おあん物語」と合刊せらる。

おきつしのちよにあたふるかきつけ

與與津氏之女書付　一卷　稻葉正義

婦德に關する教訓書なり。與津某女が奧田某に嫁する時、著者が餞別として認め送りたるものなりといふ。元文五年庚申〔二四〇〇〕冬十二月武江城東の僑居に執筆する由を記す。

◉稻葉正義の傳記は「迂齋學話」の下にあり。

おきつしまさきもりにつき

瀛津島防人日記　寫本二卷　青柳種麿

寬政六年甲寅〔二四五四〕三月二十八日、宗像郡瀛津島に、防人の役を受けて赴任せる時の日記なり。和文にて和歌をも詠み入れ、優麗なる筆をもて地理的記事を詳にせり。今、文化八年辛未〔二四七一〕青柳の原本に就て五百秋の謄寫せるものによる。二卷一册に作る。

おきなぐさ

翁草　寫本百一册　神澤杜口

百四五十年間に於ける世說口碑に傳ふる軍談武功、又は奇事逸話等採摭記載せざることなし。就中、他人の著述全部を收載せるもの四十三册あり。卽ち國朝舊章錄、裘人錄、別所記、戸川記、同文通考、武野燭談、元寳莊子、萬國夢物語、感入錄、當用書札、莽莖獨語、四十六士論、名君享保錄、御參內記、庵百首、東武紀行、鎌倉記等なり。拔寫せるものにては老人雜話、爲人錄、永夜茗談、耳底記、山井根元記、古老燭談、太閤記等なり。安永五年丙申〔二四三六〕正月に作れる杏堂の漢文序、及び自敍あり。「翁草」は續編も一百一册あり、何れも一册は目錄なり。正續同性質の編纂に係る。

◉神澤杜口は大阪の人、京師町奉行の與力たり。寶永七年庚寅〔二三七〇〕に生る。其蝸と號し、與兵衞と通稱す。常に讀書を好み、詩文俳諧に長ず。早く隱遁して著述に從事し、其の著すところは、實に本書一百卷の外「續翁草」一百卷、「ちりひぢ」三十卷あり。寬政七年乙卯〔二四五五〕二月二十七日歿す、年八十六。

おきなくさぜんごへん

興名草前後編　寫本一卷　淺井重遠

橘家神軍の事を漢字にて記述したるものなり。「懲事記」興津彥の事を擧げ、末には鴨爲祐の「玉方陣記」を引けり。奧書に「此記橘氏潮家之書也。潮家天正十年〔二二四二〕正五位下左衞門櫟佐橘諸光、有レ故而廢焉其裔橘重信以二戰功一從二于池田家一遂去、其子信秀傳レ之以深藏焉」云々とあり。

◉淺井重遠は京都の學者にして、和漢を兼ねたり。桂宮に進講したることあり。

おきなものかたり

翁物語　寫本一册

武田氏の事を記したるものなり。古老の物語を筆記し、末に韮崎合戰、戸石合戰の事を記せり。

おきなものがたり

翁物語　寫本四册　小早川能久

主として軍事上の經歷等を記し、教誠の和歌等を加へて、其の子に與へたるものなり。第一卷武州八王子城責のとき上杉景勝が討取る處の首級の事より、第四卷北條五代の事より戰爭の論等凡て百十二件より成る最後の卷には明曆元年乙未〔二三一五〕三月五日とあり。

◉小早川能久は毛利元就の第八子小早川秀忠の第三子にして式部と稱す。小幡景憲に從つて甲州流兵法の奧儀を究めたりといふ。

おきなもんだふ

翁問答　二卷　中江原

歷史文學其の他の雜事を記したるものなり。一の老翁と某學者との問答を書き集めたるより書名を撰びたりといふ。著者の死後二三年を經て慶安三年庚寅〔二三一〇〕比、門人等の校正發行するところなりと。

◉中江原の傳は「江西文集」の下に揭ぐ。

おきのえらぶじまし

沖永良部島誌　寫本一卷

沖永良部島は、往古琉球の屬島なりしが、慶長十五年庚戌〔二二七〇〕鹿兒島藩主島津義久、關白豐臣秀賴の命を受けて琉球國を伐ち、其の王尙寧を擒にし、此の地を裂きて獻ぜしめたるものなり。本書は同地の地形、郡鄕、寒暖、風雨、言語、風俗、衣服、飮食、家屋、倉廩、肥培、耕耘、地味、地價、物產、港灣、舟楫、運輸、石高、反別、禽獸、草木、其の他等を記し、屬島與論島の地誌をも併記せり。沖永良部島の誌としては稍詳しきものなり。

おきのくにしんめいちやう

隱岐國神名帳　本寫一卷

隱岐四郡中の神位神名百餘を記す。『續群書類從』卷六十二に入る。

おきのくにのき

隱岐國記　本寫一卷　藪屋　北昆

隱岐國の略誌にて、本國の大概より、竹島の事に至るまで、四十一條を擧げたり。自序中に、「我たまたま公務のために彼の地に至れる事、誠に風雅の幸ならんかし。享保五庚子年〔二三八〇〕春三月、芭蕉二世東武散人北昆」といへり。

をぎのこりうはふしき

荻野古流法式　本寫一卷　荻野　安重

鐵砲の式法を記したるものにて、玉込、火藥、筒、距離等の事を記し、延寶五年丁巳〔二三三七〕十一月二十五日の奥書をなし、更に「天山先生相傳」といふを附したり。

◎荻野安重は上野國左氏の城主荻野越後守の末葉にして、六兵衛と稱す。種子島流の砲術を學び、初、濱松城主本多氏に仕へたりしが、後、辭して正木流の砲術を究め、更に工夫して遂に一家の荻野流を成す。寛文七年池田光政に仕へ、後、明石の城主松平若狹守に仕へて祿三百石を受け、元祿三年庚午〔二三五〇〕六月七日、七十八歲にて歿す。須磨浦人麿寺に葬れり。

をぎのしをり

荻の栞　二卷　中堀　僖庵

連俳の用語を、いろは順に列ねて解釋す。連俳初學者の爲めに物したるなり。每語傍に西順の合點あり。別名に、しをり荻、詞林綱目、詞林萬葉頁材等あり。元祿五年壬申〔二三五二〕五月の自序あり。享保三年戊戌〔二三七八〕六月出版す。

◎中堀僖庵は元祿時代の人。俳人梅月堂に就いて、斯道の奥儀を究めたりといふ。

おきのしらなみ

隱岐の白波　一卷　臥遊軒主人

刀劍の辯論に關する著。曩に『刀劍辯論』を著して、水心子正秀の『刀劍實用論』、『刀劍辯疑』等を排斥したるを、更に補ひ正したる餘論なり。隱岐の島根に後鳥羽院の敕諭を受くる夢物語に擬し作れり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕友人絲非泉明の序、同三年菅扶綱の序、同二年靜庵竺翰の跋及び自跋等あり。

◎臥遊軒主人のことは『刀劍辯論』の下にあり。

おきのすさび

おきのすさび　一卷　風水

寶永二年乙酉〔二三六五〕水無月の末、故鄕隱岐へ遠祖廟參の爲め赴く時の和文日記にて、連歌、俳諧、和歌等を詠み入れたり。

をぎのつゆ

荻の露　一册　榎本　其角

著者の俳句集なり。東山天皇の元祿六年癸酉〔二三五三〕の編にて、京都俳諧書林井筒屋の版行したるものなり。

◎榎本其角の傳記は『句兄弟』の下にあり。

おきふじかたどめがき

御給仕方留書　本寫一卷

德川將軍家の給仕方規式の覺書にして、萬治二年己亥〔二三一九〕正月元日より、同十二月二十九日に至れり。

おぎふりうまつだひらけぶんみやくづ

大給流松平家分脈圖　本寫一卷

本國三河なる大給松平家の系圖なり。天文三年甲午〔二一九四〕四月十五日九十三歲にて歿したる松平伊賀守乘元より、本枝百餘代の後に及べり。

おぎやうれつづ

御行列圖　一卷　源　宜謙

天明八年戊申〔二四四八〕二月朔日、畏くも內裏炎燒し、聖護院門跡の御殿を假皇居と定め、後內裏の造營成り、其の御遷座の時、諸卿の供奉せること、及び近國大小名等の警衛せる樣等を圖したるものなり。寛政三年辛亥〔二四五一〕三月の自序あり。著者源宜謙は越州の人なり。

おくだひらかけい

奥平家系　本寫一册

先祖氏行以來、上州奥平に住し、寶德中より德川氏に隨ひ、其の後信昌に至りて戰功多りし事等を記し、最後に大膳太夫昌邦の時、卽ち寶曆十二年壬午〔二四二二〕中津城より參府する事の記に終れり。

おくだひらき

奥平記　本寫一卷

最初に奥平家の事を詳記し、漸く諸家の雜事を記し、寛永十九年壬午〔二三〇二〕比の記事に及べり。文化十二年依田利川の奥書あり、其の次なる無名氏の奥書に、「石川忠總書留を抄出せるなるべし。されど奥平の事忠總書にも見えればかの書にも關あるにや」と云へり。

おくだひらけでんき

奥平家傳記　本寫一册

『奥平家系』と異同あり。本書は信昌の時より家康に仕へ、長篠合戰及び小田原關ヶ原等の役に功ありしこと等を詳記す。

おくだひらけのこと

奥平家の事　本寫一册

最初奥平家の事績より、安部四郎兵衛の筆記牧和泉が事、瀧田氏伊達氏等の事、山中忠兵衛が長湫の戰記、加藤宗月が伊賀越の記事、北條安藝守の家記、其の他の數事件を記錄す。題號は卷首の項名をとりて付けたるなるべし。末に天正十年壬午〔二二四二〕より寛永十九年壬午〔二三〇二〕に至る事實の大綱を錄せり。

おくにだか

元祿天保御國高　本寫一卷

無海國、五畿內、中國筋、九州、四國、關八州、東西三十三箇國等の郡名村數高を詳載したるものなり。元祿の改高と、天保の改高とを記せり。

おくのあらうみ

奥の荒海　一卷

松前より京都に歸る紀行。經過する所の大略を記せり。三浦義德の跋に、「女流記逍遊、阿佛有十六夜日記、僑留相武之間耳。今讀此記、詳奥羽之東、名山陳跡、的々千心目、臥遊圖不啻、嗚呼小磯殆姑姉於阿佛尼者乎」といへり。寛政二年庚戌〔二四五〇〕從三位源家具の序及び阿波源義根の序等あり。著者は小磯某女と記せり。小磯某女は京都の人にして、小磯氏より出で丶、岡某に嫁せり。花山院右府の息女が松前氏に嫁するに從ひて、松前にありしが、同息女卒したる後辭して京に歸れり。此の記はその時の作なり。

おくのゐんこうはいき

奥院興廢記　本寫一卷　僧　尙祚

紀州高野山奥院沿革を記したるものにて、弘法大師入定〔承治二年乙卯〕の事より奥院南小庵室修理造營の〔嘉祿元年乙卯〕の事に至る四十餘項。凡て三百九十一年間の沿革を記し。更に仁治三年〔一九〇二〕等の事實を附載せり。元仁二年乙酉〔一八八五〕の奥書あり。著者尙祚は東寺の僧なれど今その詳傳を得ず。

おくのこにつき

奥小日記　一卷　兒島　青房

攝州浪華より東海道を經て奥州鹽釜に至り、後木曾路によりて浪華に歸る紀行なり。發句を擧ぐること多し。其の奥州の事を記すや、芭蕉の「奥の細路」に擬したり。享保十七年壬子〔二三九二〕の出版

◎兒島青房は俳人なり。著書は本書の外に厚顏記、通俗志等あり。

おくのにつし

おくの日誌　本寫一卷　遠山　景晋

寛政十一年己未〔二四五九〕著者が、德川幕府の命によりて蝦夷地に行きたる時の日記なり。寛政十二年、文化九年、同十三年等の寫本奥書あり。

◎遠山景晋の傳記は『服忌令詳解』の下にあり。

おくのほそみち

奥の細路　一卷　松尾　芭蕉

江戸深川の住居を立ち出で、弟子河合曾良と共に上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中等の名所舊蹟を探りて、陸奥出羽に遊び、更に北陸道諸國を經て美濃に出で、又伊勢に詣でんとて乘船せるまでの紀行文なり。書名『奥の細路』は陸奥の細路の意なるべし。元祿二年己巳〔二三四九〕三月二十七日出立以後の日記に係る。元祿七年門人素龍の跋、八年門人去來の跋あり。其の後版を重ぬること、幾度なるかを知らず。後世俳文の巨擘と稱せらる。

◎松尾芭蕉は本名を忠左衛門と稱し、又、宗房と名く、風羅、桃青、羽扇、釣月、羊角等の數號あり。正保元年甲申〔二三〇四〕伊賀阿拜郡に生る。長じて津侯藤堂家に仕へたりしが、故ありて遁世す。夙に學を好み、老莊禪學を修め、又俳諧を北村季吟に學び、頗る西行を慕ひて私淑す。延寶八年、年三十七にして庵を江戸深川に結び髮を剃りて風羅坊桃青と號す。後庭前に芭蕉一株を栽ゑて之れを愛し遂に號とせり。性、最も行脚雲水を好み足跡天下に遍くして到るところに吟詠を殘せるは。皆人の知る所なり。俳諧に於ては其の妙奥を極め自ら一機軸

を出だす。從つて來り業を受くるもの多し。中にも榎本其角、服部嵐雪、森川許六、向井去來、立花北枝、河合曾良、志田野坡、內藤丈草、各務支考、越智越人を蕉門の十哲と稱す。芭蕉は元祿七年甲戌(二三五四)五十一歳にて大阪に歿す。其の文章俳諧は風俗文選、芭蕉翁一代句集等に見ゆ。

おくのほそみちすがごもせう

奥細道菅菰抄　二卷　簑笠庵梨一

芭蕉の紀行「奥の細路」を註釋したるものなり。自序凡例等あり。安永七年戊戌(二四三八)出版す。

◉簑笠庵梨一は越前丸岡の俳人にして佐久間柳居の門人なり。本書の外に「凉莵句集」なども著せり。

おくのみちくさ

おくのみちくさ　寫本一卷　福居芳麿

本書は一名「蝦夷の島踏」の題下に解題したり。

おぐらしやうげんさねずみしさう

小倉將監實澄詩草　寫本一卷　小倉實澄

絕句、律詩共六十餘首を輯む。卷首に僧横川(景三)の撰左近將監の像贊延德二年庚戌(二一五〇)のものを揭ぐ。江州愛知郡永源寺の所藏本に就て、實澄の後裔澤實堅といふものゝ寫本による。

◉小倉實澄は源姓にして、多賀豐後守高忠の弟子たり。左近將監となり、中明寺と號す。江州小倉に食邑して、隨緣居士と號し、道春正綱と法諱す。著書には笠懸聞書、笠懸記等あり。

をぐらひやくゐん

小倉百韻　一册　竹山重榮

著者の俳諧の集なり。編輯の年代は詳ならず。

◉竹山重榮は京師の人にして、雛屋立圃の門に出でたる俳人なり。著書は本書の外に「短綆集」あり。

をぐらひやくく

小倉百句　一卷　反古庵白猿

小倉百人の名の下に狂句百句を詠みて闘したるものなり。畫は北齋辰政の手に成る。享和三年癸亥(二四六三)版行す。

◉反古庵白猿の傳は「友なし猿」の下にあり。

をぐらひやくしゆりやくげ

小倉百首略解　二卷　深田正韶

定家の「百人一首」を略解したるもの。毎歌各撰集の詞書を加へ、註釋は最も簡略を旨とせり。文政二年己卯(二四七九)の著者の凡例あり。明治二十一年再版す。

◉深田正韶は尾張の世臣にして香實と稱す。天保十二年辛丑(二五〇一)六十九歳なり。本書の外に「稽德編」十四卷を著せり。

おぐらもんだふ

小倉問答　寫本一卷　藤原定家

著者小倉の山莊にありしとき、歌の事に關し、子爲家の問へるにまかせ、一々答へ教へたる書なり。一名を「定家問答」といふ。卷末に、「右此一卷者、歌道之祕密之問答也、皆顯神祕者也、故彌外不出之祕書也、堅莫他傳事、清原長作」と記せり。「續群書類從」卷五百四十二、歌部第二にあり。

◉藤原定家の傳は「拾遺愚草」の下にあり。

をぐりぐわいでん

寒燈夜話小栗外傳　十五卷　小枝繁

世俗傳ふるところの小栗判官、照手姫の浮沈を、前輯十一編、中輯八編、後輯七編、凡て廿六編十五卷に編成せる小說なり。文化十年癸酉(二四七三)正月の自序あり。

◉小枝繁の傳記は「柳の絲」の下にあり。

をぐりけいづ

小栗系圖　寫本一卷

平將軍繁盛を祖として、寬永十一年甲戌(二二九四)將軍家勤大御番を奉職せる權左衞門正盛に至る系圖なり。「續群書類從」卷百三十九、系圖部第三十四に入る。

をぐりものがたり

小栗物語　一卷

小栗判官滿重が蘇生の事、照手姫が苦辛の事等を、繪入小說に綴り成せるものなり。

をぐりりやくえんぎ

小倉略緣起　一卷

常州小栗の城主、小栗滿重の略歷、照手姫の由來等を略記したるもの。滿重は應永三十三年丙午(二〇八六)三月十六日卒し、照手姫は永享十二年庚申(二一〇〇)十月十四日死す。共に藤澤山長照院に

葬りたること等を記述したり。

おくれいけ

おくれ池　二册　未拙

俳句の集なり。元祿十一年戊寅(二三五八)の編にて、京都俳諧書林井筒屋の版行したるものなり。

◉未拙は豐後國の俳諧者なり。本書の外に「けふのむかし」を著せり。

おくれすごろく

おくれ雙六　二册　鈴木清風

著者清風の俳諧集なり。天和前後頃の編なるべし。

◉鈴木清風のことは「いなむしろ」の下にあり。

をごせりうをんじきろく

越生龍穩寺記錄　寫本一卷

武州高麗郡越生鄉龍ヶ谷村なる長昌山龍穩寺の緣起にて、貞享二年乙丑(二三四五)五月二十八日、再記の奥書あり。

をこだてせんく

嗚呼立千句　一册　山本重軌

著者の俳諧千句にて、寬文七年丁未(二三二七)霜月の編にかゝる。

◉山本重軌は俳人にして、江州大津に住し、或は國友氏を稱す。野々口立圃の門人にして「見百一集」等の著あり。

をこたりぐさ

嗚呼矣草　五卷　田宮仲宣

本邦の事實、日用器具、諷諺俗談、筆にまかせて書き集めたる假名文隨筆なり。其の題名の基くところは東山投林居主人の序文に此の草稿杜撰妄談の甚しく實に識者の嘲哢をまねく嗚呼矣とて書肆の乞に應ぜざりし詠辭より取りたりといふ。文化二年乙丑(二四六五)九月の序あり。

◉田宮仲宣は東牖子また橘庵と號す。本書の外に愚雜爼、橘庵漫筆等の著あり。

おこりのごしよ

興御書　一册　僧源空

淨土宗の開祖源空が眞宗の開祖親鸞に贈りし一通の消息なり。元久二年乙丑(一八六五)閏四月、源空自己の影像を親鸞に與へし時、添へて贈りし書にして、其の親筆現に京都新黑谷金戒光明寺に在りといふ。文辭簡短なれども、能く淨土の敎義の要領を盡せり。題名は眞宗の法義此れに由て興盛せりとの意味にて、後人の呼びなせしものならん。註釋書には、「興御書抄」一卷(慧雲述)、「興御書讚歎錄」四卷(僧樸作)、「興御書述贊」一卷(玄智述)、「興御書嗟嘆錄」二卷(曇龍述)等あり。皆眞宗々徒の手に成れり。此の外に、「興御書直解」六卷あり。恐くは淨土宗鎭西派の僧の作ならんと云ふ。

◉源空の傳は「選擇本願念佛集」の下に在り。

おさげふくげちごとめ

御下服下知後留　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる書類にして、仁孝天皇の文政十一年戊子(二四八八)中に取扱ひたるものなり。

おさしづざつひかうろく

御差圖雜比考錄　寫本廿六册

天明年度より文化年度に至る書類にて、幕府評定所より引繼ぎて、內閣文庫に保存せるものなり。

おさしづぶりぶんのしふせん

御差圖振文之集撰　寫本廿一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、年度未詳に屬す。

おさしづまうしわたし

御差圖申渡　寫本六十九册

幕府定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。文化九年壬申(二四七二)より、慶應三年丁卯(二五二七)に至れり。

おさしものそろひ

御指物揃　一卷　谷重通

德川家康、同秀忠以下諸代衆の旗馬印等を圖して其の色目を記したるもの信長、秀吉其の他諸大名の指物を記せる「諸家指物揃」と合刻せり。寬永十四年丁丑(二二九七)長門後學河野春彩とふものゝ漢文の序あり。

◉谷重通は谷北溪の祖にして通稱を勘兵衞と稱し彫刻に妙を得、兼ねて國學に長じ。洛陽に住したり

おさだめがきにつき

御定書日記　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。安

政二年乙卯〔二五一五〕度のものにかゝる。

おさだめがきひやくかでう

御定書百箇條　寫本　一卷　松平右京亮

當時制法の記錄にして、寛政二年庚戌〔二四五〇〕三月、寺社奉行、町奉行、勘定奉行等評議制定せしもの。「右之趣奉達上聞相極候、其懸役人の外、不可有他見もの也。寛政二年松平越前守」と云へる奥書を載せたり。

をさなげんじ

をさな源氏　十卷　野々口立圃

「源氏物語」卷々の梗槪を俗解したるものなり。所所に繪畫を交へなどして最も兒女子に解しやすく記せり。後西院天皇の寛文十年庚戌〔二三三〇〕刊刻す。〔同著者別に「十帖源氏」十卷をも著せり。〕

◉野々口立圃は俳諧師なり。丹州保津の人、名は親重、號は松齋、俗稱を紅屋庄右衞門といふ。京師に出で、雛人形を商ひたるより雛屋と呼べり。書を尊朝親王に、畫を狩野の門に、歌を烏丸光廣に、俳諧を松永貞德に學びたり。著書には、はなひ草、德萬歲、花月千句、歸花、あだ花、つゝら折、こきりこ、江戸紫、空つぶて、明鐘、袖中記、鶺鴒千句、誹打千句、河舟、大夲、詞よせ、硯はいかい、片輪車、すり火えぼし箱、老烏千句、萃紫華、小町踊、若楓、みこの舞萬句、雜談集等なり。寛文九年己酉〔二三二九〕七十一にて病歿す。

おさばのき

御寢花記　寫本　一卷　高橋宗恒

寢花は謂はゆる神道の散飯、佛家の左波なり。本書は之れに關する事を禁祕抄、年中行事、江家次第、日本書紀、釋氏要覽、翻譯名義集、佛祖統記、壓添壒囊抄、論語、禮記等より抄出記述せしものなり。元祿二年己巳〔二三四九〕に成れり。

◉高橋宗恒は國學者なり。野々宮定基の門に入りて、頻りに有職考古の學を研究し、大に發明するところありて遂に一家を成せり。官は御厨子預從四位上備前守に至り、數部の著書あり。

おさんしよにつき

御産所日記　一卷

永享六年甲寅〔二〇九四〕二月九日足利義敎の子義勝が誕生したる時の日記なり。「群書類從」四百二十の卷に收めたり。

おさんのき

御産記　寫本　一卷　藤原俊家

堀河天皇の康和元年己卯〔一七五九〕正月二十四日より、同五年四月二十六日に至る御産の類集にして、御誕生産養集及び前後の儀式等を詳錄したるものなり。

◉藤原俊家は寛仁三年己未〔一六七九〕に生る。右大臣賴宗の子なり。朝に仕へて長暦長久の間參議に任ぜられ、從二位に進み、權中納言權大納言を經、承暦中右大臣となる。永保二年壬戌〔一七四二〕年六十四にて薨す。其の日記を「大宮記」といふ。

おしゑはやけいこ

絹張細工押繪早稽古　一卷　井上景堪

衣裳繪獨案內なり。繪の書方、裏打の糊加減、紙の厚薄、絹の張樣、切の用方、きめ込、顏、眼の製等圖解親切到らざるところなし。殊に鋏の入れやう、糊つけ、重ねやう等は一二三の順序といろはの合符とを附したり。其の敎ふるところは大黑天の人形の仕樣、傾城の人形の仕樣等凡そ三十餘種。元文四年己未〔二三九九〕二月彫刻す。

◉井上景堪は京都の御衣裳繪師なり。

おしおきうかゞひ

御仕置伺　寫本　一千九册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、天明八年戊申〔二四四八〕より、文久元年辛酉〔二五二一〕に及べり。各伺人の氏名を表書す。

おしおきうかゞひしよ

御仕置伺書　寫本　二百四十五册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、別解「御仕置伺」「御仕置伺別本」とは別物にて、天明八年戊申〔二四四八〕より、慶應三年丁卯〔二五二七〕に至る。

おしおきうかゞひべつぽん

御仕置伺別本　寫本　二百五十一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。天明四年甲辰〔二四四四〕より、慶應四年戊辰〔二五二八〕に至る。

おしおきしかたづ

御仕置仕形圖　寫本　一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。年度不詳なり。

おしおきすぢそのほかとりはからひ

御仕置筋其外取計　寫本　一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。享和元年辛酉〔二四六一〕のものなり。

おしおきちやう

御仕置帳　寫本　五十六册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる御仕置帳にして、元文五年庚申〔二四〇〇〕より、天保十年己亥〔二四九九〕に至る、各掛官の姓名を表書す。

おしおきぢよじつおぼえ

御仕置除日覺　寫本　一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、嘉永七年甲寅〔二五一四〕より、慶應二年丙寅〔二五二六〕に至る。

おしおきのぎにつきおほせいださるるかきつけ

御仕置之儀に付被仰出書付　寫本　一卷

德川幕府の時老中衆より三奉行に申し出でし書付にて仕置竝に諸罰の事等、豫定の如く伺ふべき旨押紙朱書したるものなり。

おしおきのことかきぬき

御仕置事書拔　寫本　二卷

江戸時代の罪目一百八十餘件を擧げて、各仕置罰則を拔書したるものなり。乾坤二册に寫傳す。

おしおきれい

御仕置例　寫本　三百十四册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、寶暦年度より、天保年度に至れり。

おしおきれいしよ

御仕置例書　寫本　千四百十二册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり、寶暦年度より、安政五年戊午〔二五一八〕に至れり。

おしおきれいしよ

御仕置例書　寫本　百四十九册

天明年度より、文化年度に至る書類にて、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せるものなり。

おしおきれいるゐしふ

御仕置例類集　寫本　二百四十二册

德川時代に於ける賞罰判決錄なり。明和八年辛卯〔二四三一〕より嘉永五年壬子〔二五一二〕に至る。全篇を取計、捉事、巧事、盜賊其の他等に類別し、更に其の中に補を立てゝ、各事實伺指令等を載す。實に德川氏時代の大司法錄たり。各册大美濃紙に寫したるもの、幕府評定所より引繼ぎて、內閣文庫に保存せられたり。

をしねめいぎかう

をしね名義考　寫本　一卷　木村正辭

此の書は、「をしね」といふ語の、をの字に就きて、おを兩說あるを論辯して、をの假字と論定したるものなり。

◉木村正辭の傳は「萬葉集美夫君志」の下にあり。

おしのしろせんき

忍城戰記　寫本　一册

武藏國忍城主成田下總守長氏、北條氏政に隨ひて小田原城に籠れる時、石田三成等忍城を攻め圍めれば、長氏の妻及び其の家人等堅く城を守り、屢々激戰せしことあり。本書は詳に之れを記せり。奥書に寛政十年戊午〔二四五八〕正月七日成田左衞門泰親〔長氏の弟〕九代隆見齋元維書寫の由を記す。

おしはらすゐいろく

押原推移錄　三卷　山口安良

日光道中下野國壬生通鹿沼宿〔古來地方に就ては押原村と稱し、道中筋に掛りては鹿沼町と云ふ〕の沿革を詳敍したる者なり。全部三卷圖說共八十七條に記せり。文政九年丙戌〔二四八六〕の自序あり。

◉山口安良は散木子と號せり。

をじまのとまや

をじまのとまや　二卷　細井德民

著者の和文紀行なり、和歌など詠みいれ、優雅なる筆つかひなり。天明八年戊申〔二四四八〕八月の作。天保二年辛卯〔二四九一〕男德昌編輯出版す。

◉細井德民の傳は「詩經毛鄭異同考」の下にあり。

おしめいしよづゑ

忍名所圖會　寫本　二卷　洞李香齋

武藏國忍の名所を圖解したるものにて、天保六年

乙未〔二四九五〕の作にかゝる。本書を増補したる岩崎長容の「増補忍名所圖會」あり。

おしやいつけん

御赦一件　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。文化年度のものなり。

おしやうかゞひ

御赦伺　寫本十五册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、寛政年度より、文久年度に至る。

おしやうかゞひしよ

御赦伺書　寫本三册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる御赦伺書にして、天保年度より、嘉永年度に至れり。

おしやしらべがき

御赦調書　寫本二十五册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、享保年度より慶應年度に至る。

おしやちやう

御赦帳　寫本二册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、萬延元年庚申〔二五二〇〕度のものなり。

おしやとめちやう

御赦留帳　寫本十一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、櫻町天皇の延享年度より、仁孝天皇の天保年度に至る約百年間のものたり。

おしやとりしらべしよ

御赦取調書　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、嘉永三年庚戌〔二五一〇〕度のものなり。

おしよ

御書　寫本十三册

大坪流馬の書にて、初書、極意、秘傳、歌集、繪圖、齒圖、息合、藥法、手綱〔二册〕、曲馬集〔二册〕、幸秀論等を輯む。

おそなへいつけんしよゑづ

御備一件諸繪圖　寫本一折

文化四年丁卯〔二四六七〕十二月四日、牧備前守殿へ甲斐守御直伺に添差上候放火山より、近國所々見取預繪圖を始めとして、各國旗印、港湊地圖、臺場、船舶等の諸圖を輯集せる一大折本なり。

おそなへばおかきつけどめ

御備場御書付留　寫本七册

第一册には元和二年丙辰〔二二七六〕八月以下の書付類を輯め、第二册以下は「御備場御用留」と表題して弘化三年丙午〔二五〇六〕六月以下の諸港の備場に關する雜事を記し、第七册を「御備場御用留附錄」と題して同じ異國船に關する伺書類等を收めたり。凡て七册横綴本に寫す。

おそなへばしふぎ

御備場集義　寫本六册

德川の中葉以下に於ける伊豆の下田、羽田、上總の品津、竹ヶ岡、其他要害の津々浦々なる御備場に關する人數、武器、諸道具の出入、調査、書上物、下り物等の書類を收輯したるものなり。

おそばつとめちうしよじつけこみ

御側勤中諸事附込　寫本一卷

文久、元治此の側勤に關する雜件を書き留めたるものにて横綴一册に寫せり。

おそめひさまつうきなのよみうり

於染久松色讀販　五卷　鶴屋南北

於染と久松との戀愛に關する外題小說なり。稿本は江戶狂言の立物鶴屋南北の臨書にして、北工は俳優寫生に名を得たる歌川國貞なり。天保二年辛卯〔二四九一〕彌生以下漸次に刊行。

◉鶴屋南北の傳は「俳優水滸傳」の下にあり。

おだいくわんごりやうしよたかわりちやう

御代官御領所高割帳　寫本一卷

諸國代官の管轄地、石高等を記せり。寶曆年間のものなるべし。

おだいみやうぶにん

御大名補任　寫本四帖

各大名共其の石高、領地、居城を記し年齡、父母、祖父母伯叔父母、妻子弟妹、從兄弟其の他等を記錄し

たるものなり。總數百數十名あり、鄭重に仕立て大折本四册より成り、帝國圖書館貴重品として藏す。

おたかのきうき

御鷹野舊記　寫本一卷　小宮山杢之進

德川氏鷹野留書類を輯む。最初に享保、寶曆、天明年間の留書を記し、末に天明八年戊申〔二四四八〕八月なる、本多彈正大弼へ出せし由を記し、隅田村御前栽畑、小菅、新田十分一、行德領鵜濱等を錄し、其の末に明和六年己丑〔二四二九〕八月、小宮山杢之進と見えたり。

◉小宮山杢之進の傳は「有職問書」の下にあり。本書は其の代官たりし時の記なるべしといふ。

おたからのにしき

御寶能錦　寫本十二帖　狩野春笑

日光廟、常憲院廟、駿州久能山の廟、鎌倉鶴岡廟等の外廻り繪方仕方を、狩野春笑、狩野春仙、狩野梅俊、狩野梅軒等の圖樣を寫したるものなり。梅軒のは天保十四年癸卯〔二五〇三〕の筆にかゝる、

おだぐんき

織田軍記　二十三卷　遠山信春

織田氏の家系より、信長一世の事歷を敍し、明智光秀の弑逆に遇ひしこと、後贈官贈位の事に至る凡て二百二十四條より成る。卷首に「總見記」と記せるは信長の謚號によりて附けたる名なりといふ。著者の跋に、「是れより先き小瀨甫庵、信長記を著す其の內取捨未だ全からず、爰に於て其のあまりあるを省き、足らざるを補ひ、其の始め信長尾州に起り始末五卷、濃州に在し始末十卷、江州に在し始末八卷と、分ちて三等、合せて一部となし、これを前の拾遺眞說翁に就て眞僞異同を訂正せしといふ。翁は則ち信長の的孫なり」と記述せり。貞享二年乙丑〔二三四五〕自跋、同三年丙寅竹洞子の序あり。元祿十五年壬午〔二三六二〕正月上旬大阪にて版刻。

◉遠山信春は美濃國七遠山の中なるべし。別著に「島原合戰記」五卷あり。

おだけいづ

織田系圖　一卷

織田家の始祖より、本枝數百代を經て、慶安二年己丑〔二三〇七〕に死去せる石黑平內右衛門の室に及ぶ。「續群書類從」百四十二の卷の全部是れなり。

おだしんき

織田眞記　十五册　織田長清

太田牛一の輯錄せる「信長記」を、著者が家錄によりて増訂したる日記書にして、比較的に正しきものなり。記事は後奈良天皇の天文十一年壬寅〔二二〇二〕八月十日に起り、山崎戰後信長太政大臣從一位を贈らるゝ事に終る。享保二年丁酉〔二三七七〕三月の自敍ありて、同四年正月の梓行に係る。著者織田長淸は丹後守と稱す。

おだたひらののぶながき

織田平信長記　寫本一卷

織田信長が後奈良天皇の天文三年甲午〔二一九四〕尾州に生れて、正親町天皇の天正十年壬午〔二三四二〕六月二日京都本能寺に四十九歲にて弑殺せられたるまでの顚末を漢文にて記せり。

おたちあいもの

御立合物　寫本三册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、寛政五年癸丑〔二四五三〕より、文政十一年戊子〔二四八八〕に至る。

おたてものめいさいしよならびにづ

御建物明細書並圖　寫本十卷

第一を御關船、御召船、第二を御關船御解船、第三、四を御關船、第五を御鐵砲玉藥方御預御武器類、第六を御鐵砲御簞笥方御預御武器類、第七を御弓矢方御預御武器類、第八、九を御弓矢方御預御武器類、第十を御具足御幕方御預御武器類とす。向井將監の第一册以下諸家の記錄したるを、弘化二年乙巳〔二五〇五〕各掛官の調査書付したるところなり。

おだないふぶんげんちやう

織田內府分限帳　寫本一卷

織田內府信雄の分限調査書にて、石高所領、諸士の分限等を記せり。「續群書類從」七百〇九、武家部第五十五にあり。次に揭ぐる「織田信雄分限帳」とは別物なり。

おだのぶをぶんげんちやう

織田信雄分限帳　寫本一卷

織田信雄が伊勢國大河內に居城したる時の分限記なり。例の石高、及び所領地等を記す。卷末に信雄の系圖あり。

おだのぶながふ

織田信長譜　一卷　林　道春

織田信長の詳細傳譜なり。其の祖先平清盛より系を引きて、信長の一生の事歷を細叙し、光秀の弑に遇ひて後太政大臣從一位を贈られたるまでを記せる四十九枚の漢文記なり。著者が帝命を受けて、寛永十八年辛巳〔二三〇一〕十一月上旬筆を起して同十二月七日進呈したるところなりといふ。明曆四年戊戌〔二三一八〕五月七日刊行。
⊙林道春の傳記は「羅山文集」の下に掲ぐ。

をだはらき

小田原記　寫本　九卷

小田原北條五代の記にして、早雲より氏直自殺の事に至るまでの事績を詳記す。奥書に「右之一部文祿二年〔二二五三〕九月、相州小田原にて誌之、于時二十五歲也」とあれど、姓名を記さず、もと北條家に仕へたるものなるべし。

をだはらき

小田原記　寫本　一卷

北條興關白不快之事、山中合戰之事、關白勢圍小田原事、附松田內通之事、於所々小田原敗北事、岩付合戰事、氏勝降參事、佐野城落事、松田陰謀露顯事、小田原落城事、氏政氏照御最期事、川上喜助聞書事、太田道灌事附江戸川越城築事、太田道灌最期事、山內扇谷不和之事、高見原合戰之事等を記す。

をだはらぐんき

小田原軍記　寫本　十卷　横井　宗可

天文以後文祿年間に及ぶ小田原北條五代間の盛衰汚隆を實錄したるものなり。末に北條五代間の年代及び系圖あり。
⊙横井宗可は北條氏の邸等にて、祖先來五代間相繼で仕へたるものなりといふ。自序あり、此の時七十歲にて之れを綴れりといふ。

をだはらしうしよりやうやくちやう

小田原衆所領役帳　寫本　二卷

一名「北條家所領役帳」の下に解題せり。

をだはらへんねんろく

小田原編年錄　寫本　十八卷　間宮　士信

北條氏早雲以下氏綱氏康、氏政、氏直、の五代、一百三年間の盛衰を記し、且關八州に係る當時の事實を略記せり。全部編年體にして、月日の下に事實を繫け、事實に引用したる書名は、各其の條下に註せり。首卷二卷に世系を揭げ、年代を表し、また關東圖說を附して地理を明にす。本文十一卷あり、附錄五卷に北條分限帳家傳、古文書等を載す、通計首卷共十八卷あり。但今見るところは、本文の一、二、五、七を闕き、附錄を七冊に作り、都合十六冊あり。
⊙間宮士信は庄五郎と稱す。本書の外に「新編相模風土記」百二十六卷、編脩地誌備用典籍解題二十八卷、龜戸天滿宮鑿替書上一卷等を著せり。

をだはらほうでうぶんげんちやう

小田原北條分限帳　寫本　一卷

卷首小田原所領役帳と題して、相州、豆州、武州、上總、下總、下野に各分限を記せり。次に御馬廻衆知行役、松山衆知行役、津久井衆、諸足輕衆、他國衆、社領、寺領、其の他に及び、終に「永祿二年己未〔二二一九〕二月十一日、奉行太田豐後守關玄部丞松田筑前守」と書し、奥書に「此本帳者高野山高室院に有之、元祿五壬申〔二三五二〕正月日、書寫之畢、武州豐島郡若一王子宮別當金輪寺第五世宥相」と記す。

おだまき

小手卷　四冊　忠　直

俳諧の集、卷頭に荒木田守武の句あり。延寶六年戊午〔二三三八〕の編にかゝる。

をだまき

をだまき　一冊　溝口　竹亭

俳諧作法の書にて、仕様、てにをは、假字遣等を記述したるものなり。元祿年中のものなるべし。
⊙溝口竹亭は田中常矩の門に出でたる江戸の俳人なり。元祿五年壬申〔二三五二〕六月二十九日、三十五歲にて歿せり。

おちくぼものがたり

落久保物語　四卷

一の作り物語にて、其の結構は、古、某中納言の兒女數人ある中に、一人異腹の女あり、繼母之れを惡みて、縫殿の放出の落窪の一と間に別所せしめて落窪の君と呼ばしめしが、其の女藏人の少將と云ふに思はれて、行末遂に榮華に及べるやうを綴れり。或は貞信公の公達實賴、師輔の同胞のいとわかきより競ひ立ちて上達せるを、此のはらの若君たち劣らずつかさくらゐすゝろげるにもてつけてかきたるなりといへるよし上田秋成の序には見えたり。賀茂眞淵は、「落久保は冷泉院の頃に作り成して、中に道頼のおほい殿と書くは忠平公をや思ひけん、御子たちの官の競ひざまいと能く似たり云云」と云へり。寛政十一年己未〔二四五九〕版行す。本書の作者を源順とせる說あれど確實ならず。本書の註釋には次に解題せる賀茂眞淵の「落久保物語頭書」あり。

おちくぼものがたりかしらがき

落久保物語頭書　四卷　賀茂　眞淵

前に解題せる「落久保物語」に頭書したるものなり。卽ち著者の講義の筆記を信夫菜といへる人の頭書したるにて、本文にも所々漢字をあて、又傍訓を附したり。寛政六年甲寅〔二四五四〕に作れる橘千蔭の序を添ふ。
⊙賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に見るべし。

おちくぼものがたりりやくぼん

落久保物語略本　二卷

落久保物語略本といへれど、前に解題せる「落久保物語」とは大に異れり。其の組織は、中昔の頃長岡に澤野の中納言といへる人あり、此の人年來子なきを憂ひ京の六角堂の觀音に祈誓して一女子を生みたり。此の姬七歲にして生母を喪ひ、後、繼母にかゝり其の惡むところとなり、巽の方の一と間の板敷を一段さげてそこに住居せしめしより人皆落久保の姬君と呼ぶ。此の姬、後、二位の中將に思はれて榮えたりしことを記す。書中往々前の「落久保物語」を直寫せるところあるより見れば本書は後の僞書なるべし。萬治二年己亥〔二三一九〕發行す。

をちこちしふ

遠近集　七冊　西村長愛子

著者の俳諧集にして、寛文六年丙午〔二三二六〕春編輯したるものなり。
⊙西村長愛子は別に「たつき集」をも著せり。

をちせいしかう

越智姓氏考　寫本　一卷　高田　與清

新撰姓氏錄、三代實錄等にある越智の姓につきて、古今の諸書に考徵論述したるものなり。「松屋叢書」第九に收めたり。
⊙高田與清の傳は「松屋叢話」の下にあり。

おちばしふ

落葉集　寫本　二十五卷　平野　世外

我が古來歌文に用ひ來れる名詞、單句等を類別して各種假名分けに說明したる辭書なり。凡そ數千言もあるべし。往々出所用例等をも示したり。類別は乾坤、時候、神釋、人倫、官位、衣食、器財、草木、氣形、支體、言語、數量の十二類に分てり。文政二年己卯〔二四七九〕六月十日、著者七十二歲にて集錄し、天保二年辛卯〔二四九一〕五月晦日再び八十四歲にて書寫せる奥書ありて捺印す。二十五卷二十五冊の大部なり。

おちばのにしき

落葉の錦　二冊　本居　內遠

祖父鈴屋翁本居宣長の筆蹟にして、諸家の藏にかゝるものを集め式紙にまれ短冊にまれ、歌にまれ文にまれ、大小數を盡して配置揭載したるものなり。各其の所藏家を記し又竪橫物、對幅物等をも明にせり。嘉永四年辛亥〔二五一一〕十月編者の序あり。同十二月發行大坂末吉源兵衞といふ剞劂師の手に彫刻せらる。
⊙本居內遠は尾張の和學者なり。實は濱田氏、初の名は健次郞孝國、又、久次郞秋津と稱し大平の養子となりて本居氏を冒す。木綿垣、榛園等の號あり。著す所は本書の外に、賊者考、宍食禁忌考、古學大意、古調考、田租度量考、牛臂考證、神武紀巡幸路次辨、伊太祁曾三神考、熊野祭神考、紀伊國神社考、紀伊國神名帳、紀伊國造職補任考、古事記年立、尾張濱主考、妹背山考、條里圖帳考、天野告門考、三穗嵐考、古今官位指圖、官職略抄、大甞机考證、冠幘革制考、後奈良院何曾考解、源氏物語年立考、小倉百首證文、紀伊國續風土記、紀伊國古昔國界考、紀伊國名所和歌集、紀伊國名所辨、牛蹕考證、眞借考、黑鳥考、獨考辨、小野小町考、衾枕抄、佐喜美多箱、初櫟集等あり。安政二年乙卯〔二五一五〕十月四日六十四歲にて歿す。

おちぼしふ

落穗集　七冊　高瀨　梅盛

諸家の俳諧を集めたるものにして、寛文三年癸卯〔二三二三〕三月編輯したるものなり。
⊙高瀨梅盛の傳記は「鸚鵡集」の下にあり。

おちぼしふ

落穗集　寫本　三十卷　大道寺友山

徳川家康一世のこと及び他家に關する事實までも遺老の物語等を引證して年序的に記錄したるものなり。第一卷天文十一年壬寅(二二〇二)十二月二十六日家康參州岡崎城に生れし事より、第三十卷大阪落城の次第、元和改元の事等に終る。凡そ四百八十三箇條より成れり。
⦿大道寺友山の傳は「岩淵夜話集」の下にあり。

おちぼしふ
落穗集　寫本五卷
大道寺友山の「落穗集」につき、其の一條宛を擧げ、著者當時の見聞を附記して是正したるものなり。「落穗集」と併せ見て德川將軍家の事實、諸家及び寺社町方の樣子、江戶地理の變遷等を知るべし。延享三年丙寅(二四〇六)卯月十二日の自序、寶曆二年壬申(二四一二)十月望日北畠永以の奧書あり。

おちぼしふかう
落穗集考　寫本二卷　柏崎　永以
大道寺友山の「落穗集」を考證したるものなり。延享三年丙寅(二四〇六)の自序あり。明和六年己丑(二四二九)多賀常政の奧書あり。小栗研齋の「見聞雜記」第四十四、四十五の二冊に收む。本書は別著「參考落穗集」と大同小異のものなり。參照すべし。

おちぼしふつゐか
落穗集追加　寫本五卷　大道寺友山
前の「落穗集」を根元として刪削したるものなり。
⦿大道寺友山の傳は「岩淵夜話集」の下を見よ。

おちぼしふよだん
落穗集餘談　寫本二卷
中古以來元祿寶永の比に至る雜事を記錄したるものなり。上卷八十五項、下卷九十五項、凡て百八十項より成る。

をつぎかねふみのき
小槻兼文記　寫本一卷　小槻　兼文
著者が日記の一部にして、弘安元年戊寅(一九三八)二月の記事なり。著者小槻兼文は、時に左少史たり。

をつぎすゑつぐのき
小槻季繼記　寫本一卷　小槻　季繼
著者日錄の一部にて、今、見るところは、寬政五年癸丑(二四五三)藤井貞幹傳寫の奧書あり。著者小槻季繼は左少史たり。

をつぎときもとのき
小槻時元記　寫本一卷　小槻　時元
明應六年丁巳(二一五七)以下、文龜三年癸亥(二一六三)に至る記錄なり。自家の任免辭令等を主と揭ぐ。著者小槻時元は、時に左大史たり。

おつしにつくわうきかうし
乙巳日光紀行詩　寫本一卷　林　春信
寬文五年乙巳(二三二五)四月四日、家父に從て忍岡を出で、日光に至り、同月廿二日家に歸る迄の紀行詩八十首を收む。內閣文庫に特別書として藏す。
⦿林春信の傳記は「史館茗話」の下にあり。

おつちうさいきき
乙丑西歸記　寫本一卷　長村　鑑
文化二年乙丑(二四六五)江戶の藩邸を立ち、道を中仙道にとりて、鄕里肥前平戶に歸着するまでの漢文紀行なり六月四日鳥越の邸を辭することより七月十八日故山に歸り母子妻孥一族恙なかりしことまでを記せり。文化三年佐藤坦の序あり。
⦿長村鑑は字を仲槃といふ。平戶藩の家老職たり。

おつびきかう
乙未紀行　寫本一卷　植村　禹言
卷首に「詣芳野高野記」と題して、安永四年乙未(二四三五)三月、奈良、吉野、高野等に詣で、和歌の浦に出で泉州路より家に歸るまでを記せり。
⦿植村禹言のことは「廣大和名勝志」の下にあり。

おつゆうさいき
乙酉歲記　寫本一卷　僧　嚴助
大永五年乙酉(二一八五)正月一日以下同十二月三十日に至る嚴助大僧正の自記なり。
⦿嚴助は大僧都たり。別に「大永三年室町殿護摩記」一卷の著あり。

おでんせう
御傳鈔　二卷　僧　覺如
眞宗の始祖親鸞上人の略傳。或は「ごでんせう」と稱ふ。解題は「本願寺聖人親鸞傳繪」の下にあり。

おてんとりわか
御點取和歌　寫本一卷
後西院天皇の萬治年中より、同天皇の寬文年中に至る御製並に諸卿の歌を集めたるもの、後水尾院の敕點、及び中院通茂、烏丸資慶等の合點あり。何れも添削のまゝに記す。

おてんとりわか
御點取和歌　寫本一卷
櫻町天皇の元文年中の御製並に諸卿の詠歌なり。烏丸光榮、西三條公福の兩點並に添削あり。

おとぎさうし
御伽草子　廿三卷
中古以來の草紙物を編集したるものなり。卽ち文正草子、鉢かづき、小町草子、御曹子島渡り、唐絲草子、木幡狐、七草草子、猿源氏草子、物草太郞、さゝれ石、蛤の草子、小敦盛、二十四孝、梵天國、のせざる草子、猫の草子、濱出草子、和泉式部、一寸法師、さかき、浦島太郞、酒顚童子、橫笛草子等以上二十三種より成る。一名を「御伽文庫」とも云ふ。

おとぎにんぎやう
御伽人形　四卷　苗村松軒子
見聞の妖怪物語を記したるもの。卷一第一の目を示せば、「思ひ立つ矢あやまたぬ拳」の下に、「うちしほにそむるくれなゐのはかま、あぶらや勘助女ぼうぶめ鳥と成りし事」とせり。寶永二年乙酉(二三六五)增田圓水の序あり、同年出版す。

おとぎばふこ
御伽婢子　十三卷　淺井　了意
俗間に傳ふる怪談奇話を書き綴りたるものなり。例へば眞上阿祇奈君龍宮上棟の文を書く事、文兵次黃金かして損却する事、付り過去物語、等六十餘種あり。寬文六年丙午(二三二六)正月の自序中にいはく、「此伽婢子は遠く古をとるにあらず近く聞きつたへしことを載せあつめてしるしあらはすものなり。學智ある人の目をよろこばしめ、耳をすゝぐためにせず、只兒女の聞を驚かし、自ら心を改め正道に趣く一つの補とせんとなり」云々。後、元祿七年に刊したる柳絲堂撰の「拾遺御伽婢子」七卷あり併せ見るへし。
⦿淺井了意の傳は「東海道名所記」の下に揭ぐ。

おとぎひやくものがたり
近代御伽百物語　六卷　靑木　五省
古來の珍談奇話を集錄したるものなり。例へば、剪刀師龍宮に入る、付り北野八百五十年忌、むじなの祟り、付り豐後國日田の智圓が事、石塚の盜人、付り鐵鼠沙を降せし事、灯火の女、付り小春友三郞妖化に遭るゝ事、宮津の化物、付り御符の奇特ある事等數十談を揭ぐ。寶永三年丙戌(二三六六)正月開版す。
⦿靑木五省の傳は「竊水閑談」の下にあり。

おとぎぶんこ
御伽文庫　二十三卷
前に解題したる「御伽草子」と異名同物なり。由て同書の下に解題す。

おとぎやわ
御伽夜話　四卷　本多　月樂
古來の寓話俗談等をかきあつめて童蒙の慰草に供へたるものなりといふ。例へば「蟷螂蜘蟋雜題事、井守螢爲ノ命捨事、蛙已高慢云事等二十餘を揭ぐ。延享三年丙寅(二四〇六)中冬刊す。
⦿本多月樂のことは「江戶內めぐり」の下にあり。

をとこちようはうき
增補日用男重寶記　寫本五卷　高井　伴寬
日本宗廟伊勢太神宮、日光東照權現等の諸神を尊敬すべき事、神儒佛の三道の事、諸宗の義等日用雜事を記載したるものなり。
⦿高井伴寬の傳記は「孝子敎鈔解」の下にあり。

をとこやまはうじやうだいゑ
男山放生大會　六卷　菅　宗德
男山に於て後三條院の御宇、始めて放生會の行はれたる由來沿革等より、詳細に記述せり。附巽一卷ともに六卷なり。自跋及び元祿元年戊辰(二三四八)田中忠辰の序あり。著者菅宗德は京師の人にして、白雲齋と號す。

おとどけがきふりあひ
御屆書振合　寫本一册
幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。光格天皇の寬政八年丙辰(二四五六)のものにかゝれり。

をどのしほひ

小門の汐干　二巻　八田　知紀

著者と同時の人、凡そ百三十名の和歌數百首を撰び、四季戀雜に編輯したるものなり。末に歌人の姓名を列擧す。安政六年己未〔二五一九〕江戸神明前岡田屋嘉七二册に發行す。

◉八田知紀の傳記は「經義大意」の下にあり。

をとめのまきせうちう

少女卷抄註　一巻　鈴木　朗（アキラ）

源氏物語の少女卷を抄註したること名の如し。著者の序に曰く「源氏物語をとめの卷の內、夕霧君の御入學案試の事を書きたる所に、思ひよりたることゞものあるをいはんとて、先づ湖月抄の文を大かたかきとりて、其の中にわろくふようなる事どもは皆省きて、さて師の玉小櫛とおのが今案とをば書きいれて、此の一卷になん物しつる。こは藤垣内の本居大平主のすすめによりてなり」と。文政七年甲申〔二四八四〕十一月の作、同十年の版、千村仲雄の序、本居大平、中山美石の跋あり。

◉鈴木朗の傳は「源氏物語玉小櫛補遺」の下にあり。

おともこじつ

御供古實　一巻　伊勢　常喜

殿中以下御供に關する次第故實を詳細に說明したるものなり。御供の時下馬候事、御輿の左右の事、等凡て一百條あり。文明十四年壬寅〔二一四二〕七月作。「群書類從」卷四百十、武家部第十一に收む。

◉伊勢常喜は備中入道と稱し、伊勢貞職の父にして、貞藤のことなり。五十一歲の時註し置くところなりといふ。

おないしようならびにしなじなくさのとめ

御內證並品々草之留　寫本一册

德川二代將軍秀忠の時に於ける禁中と將軍家との間に贈答せる案文を記したるものなり。即ち禁中への御內書、及び女房奉書等をあつめたり。

おなりのき

御成之記　寫本一巻

將軍家の御成次第を記し、主として座敷の新作、裝飾の規定品類及び獻品等を詳說圖示せる寫本なり。

おにがわら

鬼瓦　一册　正　春

著者の俳句集なり。元祿年中の編述なるべし。著者正春は俳人にして、別に「桂川」の著あり。

おにつきかきぬき

御日記書拔　寫本三册

仙臺藩の日記「治家記錄」中より抄出したるものなり。但三册中其の一册は「東鑑」中より抄出せるなり。天正十七年己丑〔二二四九〕より、同廿年に至る間の事績を、德川氏の日記中より抄出したるなり。

おにのめ

鬼農目　一册　水田　西吟

俳諧三吟の集なり。延寶九年辛酉〔二三四一〕卯月の編にかゝる。

◉水田西吟の傳は「蝨味集」の下にあり。

おのがひかり

己が光　一册　車　庸

俳句の集。元祿五年壬申〔二三五二〕の編にて、京都俳諧書林井筒屋の版行したるものなり。著者車庸は俳人にして、大阪の人なり。

おのがまなこ

自眼　一册　轍　士

俳書「わたち」に續きて近江、美濃、尾張、三河、伊勢等の俳句を輯めたる者なり。元祿年中の編に係る。

◉轍士は俳人なり。本書の外に、似我蜂、世のため、我が庵、わたち等の俳諧書をも著せり。

をのしけいづ

小野氏系圖　寫本一巻

敏達天皇より、本枝數百代にして、六郎俊行の子、太郎行氏に及べる系圖なり。「續群書類從」百六十六、系圖部第六十一にあり。同卷には別本もあり。

おののこまちなりひらさうし

小野小町業平草紙　一巻　昌　房

在原業平を骨子として、陸奧忍摺の復讐を作成せる小說なり。「復讐信夫摺在原草紙」とも題せり。通計十回あり、文化九年壬申〔二四七二〕武藏感和亭鬼武の序に、浪華昌房子の編を校合せる由あり。

おのふるみちかしふ

小野古道家集　一巻　小野　古道

著者古道の歌集にして、淸水濱臣の校訂したるものなり。

◉小野古道は江戸の人にして、鎌益と稱す、初め醫業に從ひしが、中年にして明を失し、專ら鍼術按腹を業とす。常に詩歌文章を好み、賀茂眞淵の江戸に出るを待つて、率先して名簿を入れ其の門人となる。明和年中に歿せり。享年未だ詳かならず。

をのらんさんせきふりやく

小野蘭山石譜略　寫本四巻　小野　職博

本邦諸州を國分けにして、所產の金石類を列擧したるものなり。

◉小野職博の傳は「飲膳摘要」の下にあり。

おのらんざんはうしよやくめいかう

小野蘭山方書藥名考　寫本一巻　小野　職博

藥方書「千金方」に載するところの物品につきて、蘭山の口授したるを、文政年間秋田人渡島春庵の筆記したるものなり。

◉小野職博の傳は「飲膳摘要」の下にあり。

をばしもんじよ

小場氏文書　寫本一巻

同家の古文書にて、常州那珂郡部垂村農家倉田氏の所藏を傳寫せり。倉田氏は小場氏の舊臣なり。

をばたかげのりにつき

小畠景憲日記　寫本三巻　小畠　景憲

著者が德川家康に勤仕中の軍功の次第を記載したる記錄なり。今見るところは寬永十九年壬午〔二三〇二〕九月の寫本なり。

◉小畠景憲の傳記は「甲陽合戰傳記」の下にあり。

をばたき

小幡記　寫本一巻

小幡景憲の祖先より寬永十九年壬午〔二三〇二〕比までの系統略續を記したるものなり。

をばただうぎうじれき

小畠道牛事歷　寫本一巻

小畑景憲の事歷、及び其の父兄の事績を記す。道牛は景憲の號なり。

おはたもと

御旗本　一巻

旗本衆の家紋、住所、石高等を記したる小册子なり。安政五年戊午〔二五一八〕御書物師江戸出雲寺の藏版にて、毎月改版したるものなりといふ。此の書は其の四月初旬の發行にかゝる。

おはたもとかたき

御旗本容氣　寫本一册

享保の比より三十年前旗下の番士等の家にありしことを記せり。笹井已之助籠島沓袋の事より、大岡出雲守成立の事に至る凡て十五箇項より成る。

をはぶりでん

尾羽張傳　寫本八巻　大原　美城

日本書紀の神代卷の註釋なり。自序中に、尾羽は鋒刄なり、張は張大なり、上古伊奘諾尊帶する所の劍を號して尾羽張といふ、武德末に張るの謂なり、今取て此の書に名く由を云へり。

をばまりやうのづ

小濱領之圖　寫本一鋪

若狹國小濱は遠敷郡中にありて酒井侯の所領たり。此の圖東は與麻生に限り、西は丹後界に至り、南は近江界大杉に至り、北は木比田管谷に至る。社寺郡鄕島嶼等は圖中に記し、石高里程等をも揭ぐ。

をはりきうせつ

尾張舊說　寫本一巻　山本　格安

尾張の舊說につき、紫談、會入、經過、出武、出假、近昔事績目、編年の七編に分ち、一々考據を擧げて記述せり。寬延二年己巳〔二四〇九〕の自序中に、「我が產地の舊事、書に見る事あれば、昔を思ふに頗る感あり、讀所の書にして、偶、舊事に感ある、即、捧でこれを記せり」といふ。

◉山本格安の傳記は「獻暄錄」の下にあり。

をはりくわんこしよもく

尾張官庫書目　寫本二巻

最初「源敬樣御撰述御書目」として二十一部を揭げ、次に「駿河御讓御書物目錄」として經、雜、子、集、和書を擧げ、次に「瑞龍院樣御書物目錄」として、經、集、和書を擧げ、次に「御時代雜和分御書物目錄」として、經、子、史、集、和書。次に「圓覺院樣御書物目錄」として、醫書、馬醫書、雜書、御側御醫書。

次に「泰心院様御代御書物目録」。次に「顯服院様御書物目録」。次に「梅昌院様御書付目録」。次に「本壽院様御書物目録」。次に「源藏院様並御代御書物目録」等として、凡そ二三千部を收めたり。今見るところは嘉永三年庚戌〔二五一〇〕の寫本にかゝる。

なはりごかせん
尾張五歌仙　一卷　松尾　芭蕉
一名「冬の月」の下に解題せり。

なはりこくしれきにんりやく
尾張國司歷任略　寫本一卷
尾張國造の起原より、戰國時代の領主の名、並に當代國主の事に至るまでを記せり。寶永前後のものなるべし。

なはりこくないじんみやうてふ
尾張國內神名牒　一卷
尾張全國の諸神を列載す。貞治三年甲辰〔二〇二四〕の奥書あり。

なはりこじやうならびにじんぶつし
尾張古城並人物志　寫本一卷
最初「尾州出生之武士」として、九十五人の氏名郷貫等を記し、次に「薩摩様衆關ヶ原御合戰の時高名衆」として、三十四人を擧げ、次に「御軍役」として、二百石以上一萬石までを出す處の兵器數其の他を記し、末に各郡村の古城百餘箇所を記せり。

なはりしんぷくじこもんじよ
尾張眞福寺古文書　寫本一卷
名古屋大須眞福寺所藏の古文書を輯收し、津島社古文書を末に添へたり。

なはりのいへづと
尾張廼家苞　五卷　石原　正明
本居宣長の「美濃の家苞」〔古今和歌集を註釋詳論したるもの〕の説を評論し、本集の歌を一々に註釋したるものなり。文政二年己卯〔二四七九〕四月、甥石原正俊の序あり。第三の卷の外は各上下として五卷九册に發行せり。
◎石原正明の傳は「壬戌隨筆」の下にあり。

なはりのくにげもん
尾張國解文　寫本一卷　僧　靈徹
圓融院の御時、尾州の民、國司の收斂につきて朝廷に訴へたる事あり、其の訴文〔漢文〕を訂正訓點を附したるものなり。寶永六年己丑〔二三六九〕六月の自序あり。
◎靈徹は尾張國海東郡中一色村淨門鎭西の末刹、栖篷山西方教寺第六世寂蓮社照譽亦無と肩書せり。

なはりのくにしゆつしのかきつけ
尾張國出士之書付　寫本一卷
尾張國出生の名士の名を列記せるものなり。織田信長、豐臣秀吉等より、水野次郎右衛門、淺野右近等に至る九十六人を擧げて、各其の出産地名、奉公主名等を記す。

なはりのくにじんぶつしほい
尾張國人物志補遺　寫本一卷　天野　信景
古來尾張出身の人物の遺漏を拾集したるものにて、卷端題して尾張國人物略といふ。正徳元年辛卯〔二三七一〕の作なり。
◎天野信景の傳記は「牛頭天王辨」の下にあり。

なはりのくにじんぶつしりやく
尾張國人物志略　寫本一卷　天野　信景
尾張出生の各種の人物を略傳したるものなり。正徳元年辛卯〔二三七一〕の編にかゝる。
◎天野信景の傳は「牛頭天王辨」の下にあり。

なはりのくにじんめいちやうしふせつ
尾張國神名帳集説　寫本一卷　天野　信景
尾張國各郡式內式外の神社を記して考證したるものなり。寶永四年丁亥〔二三六七〕の自序に、「我敬公、國務之餘、式內神社之故名、神祇寶典、元祿中、誠公、更使有司撰修國志、然至封內神社者、頗不甄者多矣。度會神主延經。偶訊敝廬、曾有志于神名式註解、而以其稿示僕、實先人未發之説、今抄錄本州神社之説、以本之、更參伍考訂、竊述國帳集説一卷」といへり。末に吉見幸和が寶永五年戊子の跋を附したり。

なはりのくにづ
尾張國圖　寫本一鋪
彩色を以て、郡界、道路、河海、島嶼、山岳、村里を示せり。年代作者共に詳ならず。

なはりのくにふどき
尾張國風土記　寫本一卷
尾張國中、海部、中島、羽栗の三郡を誌し、丹羽、知多、山田、春日の四郡は其の郡名のみをなし、「文明兵火、燒失諸本、失本文、中原職道本、又脫簡」と記せり。文龜元年辛酉〔二一六一〕、大永四年甲申〔二一八四〕、弘治三年丁巳〔二二一七〕等の諸家の奥書あり。

なはりのくにまうしぶみ
尾張國申文　寫本一卷
東大寺總持院の所藏にかゝる尾張國古文書の寫しなり。慶長元年丙申〔二二五六〕十一月十七日の奥書、天保三年壬辰〔二四九二〕八月二十五日の寫本奥書等あり。

なはりのくにみんぶしやうづちやう
尾張國民部省圖帳　寫本二卷
葉栗郡と、海部郡との圖帳にて、卷末に「元亨二年〔一九八二〕十月、史生源忠勝奏行宗」と記せり。

なはりのくにめうこうじもんじよ
尾張國妙興寺文書　寫本五卷
尾張國長島山妙興禪寺所藏の古文書類を輯集したるものなり。今、嘉永三年庚戌〔二五一〇〕某の寫本による。五卷三册に寫傳す。

なはりのくによち
尾張國輿地　一折　高柴　三雄
尾張の輿地三十五度、東西十四里餘、南北師崎渓より、犬山邊まで三十里餘の山川、城下、陣屋、郡驛、社寺、舊蹟等を圖したる。小折本にして、京橋傳馬町三河屋善兵衛の版たり。
◎高柴三雄は江戸の人なり。本書の外に「永田町繪圖」の著あり。

なはりはつぴやくゐん
尾張八百韻　一册　友　次
著者の俳諧八百韻なり。萬治元年戊戌〔二三一八〕十一月、尾張にて作る所にかゝる。
◎友次は尾張名古屋の俳人にして無能子と號す。別著に「也足叟渓和両吟」の編あり。

なはりふ
尾張譜　寫本一卷
尾張家の系譜にて、徳川義直以下其の子孫幾代を譜傳したるものなり。

なはりふどき
尾張風土記　寫本一卷
日本總國風土記の殘闕にして、尾張の內、海部、中島、羽栗の三郡を存せり。後柏原天皇の文龜元年辛酉〔二一六一〕五月十三日、槻少外記中原請職寫本の奥書あり、次に大永四年甲申〔二一八四〕三月二十七日、十住院心敬の奥書に、「尾張國風土記全計二卷、以覺勝院僧正御本、寫之畢、雖然蟲食簡脫、火災等無是非事歟」と記し、次に後奈良天皇の弘治三年丁巳〔二二一七〕五月二十四日槻大宮司富成の奥書あり。

なはりぶんげんちやう
尾帳分限帳　寫本一卷
黃門光友の時に改正したる分限帳にして總高四十六萬千九百七十五石餘とあり、家門衆に附せられたる人數役高等を記し、末に尾張の略系を揭ぐ。

なはりめいしようし
尾張名勝志　六册　伊藤　隨庸
尾張國諸傳より、各郡村の名所舊蹟を詳しく列記したるものにて、一名を「佳境遊覽」といふ。享保七年壬寅〔二三八二〕の自敍中に、「元祿中至正徳、多年所々經歷、所到尋其濫觴每歸家則記之爲一小册、積蔵數卷矣。凡城郭神社佛閣、名蹟舊地、山川人物土產等、各分郡縣、別品類、遂爲全部四卷、號曰佳境遊覽」といへり。

なはりめいしよづゑ
尾張名所圖會　十二卷　岡田　啓
尾張全國の名所を圖會したるものなり。「此の書の序次、前編は府城に筆を起し、熱田宮に中し、津島社に終る。則當國八郡の中、愛知、知多、海東、海西の下四郡をもて、前編七卷とし、後編は中島、春日井、丹羽、葉栗の四郡を五卷とし、一の宮瀬戸犬山を始終に序づ、前後十二卷にして其の完きを致す」と凡例せり。引用書は殆んど千部の多きに至り、或は全文を擧げ、或は抄出引用するあり、天保十二年辛丑〔二五〇一〕深田正韶、深田精一、植松茂岳の序、上田仲敏の序等あり、同年出版す。野口道直と共に編するところにして、圖畫は春江小田切

中心近の手に成れり。著者岡田啓は文園と號す。今その詳傳を得す。

おはんがべに

阿半が紅　一卷

京屋の阿半女といふを中心として戀愛、强慾等種種の不德を演出したるもの、全編繪中に細書せる例の讀本小說なり。

おひざらへ

於非藏良幣　二卷　桃五

天保以前に於ける發句の集なり。著者越後の自國を出で諸方遊歴の折々大家の發句を筆記し、晩年歸鄕の節其家づとにとて編輯したるものなり。天保十五年甲辰(二五〇四)の序跋あり。著者桃五は越後の人なり。

おびつやまはくさんえんぎ

小櫃山白山緣起　寫本一卷

上總國望陀郡久留理領俵田村なる、小櫃山白山神社の緣起にて、妄誕不稽の說多し。

おひどりがり

追鳥狩　一册

備中露堂並に大阪舍經の編輯したる俳句集にて、元祿十四年辛巳(二三六一)京都にて出版す。

おひにつき

笈日記　三卷　各務(カヾミ)支考

日記的に又精しき端書ある發句を集めたるものなり。人々文の端に發句、文章等のあるものをあつめて行脚の紀念となすべしといふ先師芭蕉の遺志を繼ぎて編輯したるものなりと。元祿八年乙亥(二三五五)秋七月十五日の自序あり。

◉各務支考は寛文五年乙巳(二三二五)美濃に生る。凉菟に就て俳道を學び其の技に達す。凉菟其の才を愛して師芭蕉を介して其の直弟とす。支考の俳風、美濃派、又、獅子門統と稱して其の流を汲むもの多し。獅子庵、野盤子、惡々庵、東花坊、西花坊、蓮二、華表人、桃花仙等の數號あり。著す所は本書の外、本朝文鑑、十論爲辨抄、古今抄、白馬經、葛の松原、續五倫等あり。享保十六年辛亥(二三九一)二月七日、六十七にて歿す。

おひのをぶみ

笈の小文　一卷　松尾芭蕉

貞享四年丁卯(二三四七)の冬より、翌五年の夏にかけて、東海道諸國を經て、伊賀伊勢吉野播磨邊に旅行したる時の紀行なり。近年發行の俳諧文庫第一編「芭蕉全集」の中にも收む。

◉松尾芭蕉の傳は「奥の細道」の下にあり。

おふねおのりはじめのき

御船御乘初記　寫本一卷　稻毛實

文政十一年戊子(二四八八)正月十六日德川將軍乘船初の記なり。記者の奥書に曰く「右一册は繼絶與廢の御代に生れあひてかゝる御船備等拜み奉りし事生涯の大幸、實に難有御事なれば、密に其の事實を探り、設に輯錄して聊參考の一助に供ふ」と。色圖等ありていと細しく記し、更に最後に寫記を抄出して附錄とす。

◉稻毛實は本書の外に「練子考」一卷を著せり。

おふみみやうとう

御文明燈　十五卷　僧道隱

眞宗の開祖親鸞上人の消息文を講解したるものなり。道隱草案のまゝに止みて、淸寫に及ばざりしものを、門人覺了が、弘化四年丁未(二五〇七)訂正印刷に附するところなり。十五卷三册に作り明治十六年再刻せり。

おふれがき

御觸書　寫本九卷

明暦三年丁酉(二三一七)より、明和八年辛卯(二四三一)に至る觸れ書を年序的に集めたるものなり。但し其の中、延享寛延年間の事を闕けり。

おふれがき

御觸書　寫本二册

寛保二年壬戌(二四〇二)三月より、寶暦六年丙子(二四一六)に至る德川幕府の觸書を集めたるなり。中に諸國の寺社へ出したるもの多し。

おふれがき

御觸書　寫本二十五册

寛保集成の御觸書なり。第一册武家諸法度、御條目、高札、關所等より、第二十五册朝鮮人來聘、琉球人參府(寛文十一年、天和二年、寶永七年、正德四年、享保三年)等に至る觸書類輯成なり。外に二册目錄を添へ通計二十七册あり。內閣文庫に貴重品

として所藏す。

おふれがきしふらん

御免御觸書集覽　二册

天保十二年辛丑(二五〇一)五月二十二日の觸書より、同十三年十二月二十八日の被仰渡に至る法制布達觸書一百五十餘種を、年月日の順序に輯錄したるものなり。一に「修身孝義鑑」といふ。江戸下谷書肆の版行するところなり。

おふれどめ

御觸留　寫本三册

文久年度の觸留書にして、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せり。

おへやにつきまぜあはせ

御部屋日記突合　寫本三册

享保元年丙申(二三七六)七月より十二月に至るのと、同十五年七月より十二月に至るのとの部屋日記なり。殘闕の本なるべし。

おへやにつきまぜあはせ

御部屋日記突合　寫本二册

某部屋仕入の日記殘闕本なり。一册は萬治三年庚子(二三二〇)七月より同十二月に至り、一册は延寶五年丁巳(二三三七)六月より同七月に至る日次記なり。

おほゐがはふぢえだ

大井川藤枝　四册　松江維舟

著者の俳諧集なり。延寶二年甲寅(二三三四)五月編輯するところにかゝる。

◉松江維舟の傳記は「犬子集」の下にあり。

おほゐけいづ

大井系圖　寫本一卷

武田太郎信義六代の孫信忠より、二十餘代を經て、安藤太郎兵衛忠利に至る。「續群書類從」卷百二十三にあり。

おほいちひめじんじやかう

大市姬神社考　寫本一卷

紀伊國那賀郡山崎庄赤垣村なる同社の緣起、沿革、祭神の次第等を記したるものなり。

おほうちえんじやうき

大內炎上記　寫本一卷

嘉永七年甲寅(二五一四)四月六日、禁裏炎上の御始末を詳記したるものなり。安政二年乙卯(二五一五)某の奥書あり。

おほうちもんだふ

大內問答　一卷　伊勢貞久

堂上の儀式、稱呼、作法等を問答體に記したるもの、例へば公家門跡、並に三職の御衆、諸大名以下、御參會の事。近代依ㇾ無ㇾ在京、萬端違國の仕合、輕賤法外之間、被得尊意條々之事。攝家、淸花、並に御門跡など、俄に御成被成時の儀如何、以下能樂田樂猿樂の次第等に至る凡そ數十項を記す。永正六年己巳(二一六九)九月三日の記。「群書類從」卷の四百十一にあり。

◉伊勢貞久の傳は「道照愚草」の下にあり。

おほうみのはし

大うみのはし　一卷　富士谷成章

雲上人の出入を始めいろ〳〵の事を記せる日記にして、歌などもひけり。著者末に書き添へて云へることあり、「あはれ昔、有りきてふなるくれ竹の、よつぎの翁ならませば、其の言の葉の末も猶、なかしきふしぞまじらまし。まだ山ほきのふちの木に、はひまつはれるつたの身の、露と時雨と色にいでじと、思ひくちてはありけれど、さて山河の音にのみきゝすぐしなば、住のえの岸のくさはに、うつもれん事もさすがになし鴫の、さわぐ入江の水ぐきに、大うみのはしのそこはかと、波間のもくづかすめて、あしのしのやの、さみだれの世にもりいでば、よもやまの人わらへにやならんすらん」と。「百家說林」第九卷にあり。

◉富士谷成章の傳は「あゆひ抄」の下にあり。

おぼえがき

覺書　寫本一册

慶長十五年庚戌(二二七〇)より、萬治四年辛丑(二三二一)に至る國家の事件を略記したるものなり。中にも、正保以前は其の記す項目も四五件に上らず、慶安以後こそやゝ詳錄はせられたれ。

おぼえがき

覺書　寫本三册

元祿年間に於ける、德川氏の評定一座に關する論

訴落着の覺書なり。即ち直目安、論所、田畑、海道、蹟式、主人師匠殺、人勾引、諸請家業、提背、無取上、赦免、虚説、在牢等の項を載せたり。立會諸役人の姓名は毎條の下に記せり。

おほえかきつぎ

覺書繼　寫本一册

文化年度の留書にて、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せるものなり。

おほえしけいづ

大江氏系圖　一卷

元祖平城帝より出で、第三代にして臣籍となり、備中守本主と稱して大枝姓を賜る。第四代は天慶年代の人文章博士大內記民部左大辨從三位參議等になれる音人なり。爾來本枝數十葉を經て永正後に至れるものなり「群書類從」卷六十三にあり。「續群書類從」卷百七十六にあるものと異れり。同卷には別本もあり。

おほえただのりのし

大江匡範詩　一帖　大江　匡範

「夏日同賦二佳客對一泉石一」とて七言律詩の懷紙なり。懷紙の書法によりて六行三字に書す。習字本の爲めにとて書せるなり。

おほえただひらあそんしふ

大江匡衡朝臣集　寫本一卷　大江　匡衡

「卯花のかされならでも時鳥、心のうちのまつになかなん」より、「秋風に聲よはりゆく鈴蟲の、つゐにはいかにならむとすらむ」といふに至る凡て百十首より成る。「續群書類從」四百三十九、和歌部七十四にあり。

◉大江匡衡の傳は、「江吏部集」の下にあり。

おほえちさとのしふ

大江千里集　寫本一卷　大江　千里

「白氏文集」の詩句題によりて詠みたる歌、凡そ百餘首より成る。卷端に眞名の自序を掲げたり。

◉大江千里は參議大江音人の子にして、在原行平の甥なり。元慶七年癸卯(一五四三)備中大丞に任ぜられ、延喜三年兵部大丞に上る。漢詩漢文に精しく、從て作るところの和歌にも漢詩文の意を譯したるものあり。

おほえてうげつきゝがき

大江釣月聞書　一卷　大江　釣月

和歌會席の作法懷紙短册の法等凡て歌道の故實を記したるものなり。大江釣月の問ひに武者小路藤原實陰の答へたるものなり。著者大江釣月は隆哲ともいへり。詳傳を得難し。

おほえどづせつしふらん

大江戸圖說集覧　一册　橋本　蘭齋

江戸往古圖。永祿年間の江戸圖、寛永板江戸繪圖等の縮寫を載せ、江戸繪圖版行の記及び有名なる社寺の沿革等を掲げ別に寛永版の大繪圖一枚を附したり。卷首に嘉永五年壬子(二五一二)の自序あり。

◉橋本闌齋は名を嫌玉といひ字を貞秀と稱す。闌齋は其の號なり。和畫家にして圖繪に妙を得たり。

おほえどわかしふ

大江戸倭歌集　六卷　蜂屋　光世

著者同時諸家の和歌を、其の見聞に從て書き輯め、自詠の歌も多く入れ、四季戀雜の六卷とし、二千餘首を收めたり。自序に安政五年戊午(二五一八)の編なる由を云ひ、安政七年自らの奥書あり、その時の版刻なるべし。六卷三册に作る。

◉蜂屋光世の傳は「江戸和歌集」の下にあり。

おほえもとなりかしふ

大江元就家集　寫本一册　毛利　元就

著者の家集にて、和歌七十三首を收めたり。一首毎に判の詞あり。

◉毛利元就の傳記は「春霞集」の下にのり。

おほえもとなりれんか

大江元就連歌　寫本一册　毛利　元就

著者の連歌を集めたるものにて、これまた一々判の詞あり。

◉毛利元就の傳記は「春霞集」の下にあり。

おほかうちけき

大河內家記　寫本三卷　大河內秀連

大河內家正傳の記なり、家系の本源清和天皇より、數十代の略傳を記して、文祿慶長時代に於ける政朝、景綱等の事に及べり。最初に此の記の傳來を記し、其の中に大河內基孝、同幸孝より以上の事は大河內景綱之れを記し、政綱以下景綱の事に至ては大河內秀連之れを記せる由あり。今、明治八年岡谷繁實の所藏本に依て內務省に寫傳するものを見る

◉大河內秀連の傳は「前親物語」の下にあり。

おほかうちひでもとてうせんにつき

大河內秀元朝鮮日記　寫本五册　大河內秀元

豐臣秀吉の朝鮮征伐に關する記錄なり。筑前中納言秀詮、朝鮮征伐の大將として出陣せることより、朝鮮に於ける戰爭の始末、秀詮及び諸將士の歸朝、豐臣秀吉薨去の事に至るまで月日を追うて筆記せり。慶長二年丁酉(二二五七)三月の自序あり。

◉大河內秀元の傳は「朝鮮物語」の下にあり。

おほかゞみ

大鏡　八卷　藤原　爲業

文德天皇の嘉祥三年庚午(一五一〇)より、御一條天皇の萬壽三年丙寅(一六八六)に至る百七十六年間の事を記せる假字書歷史なり。第一卷に序、文德、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、朱雀、村上、冷泉、圓融、花山、一條、三條、御一條等の帝紀を掲げ添り、第二卷以下に、左大臣冬嗣、太政大臣良房、右大臣良輔、權中納言長良、太政大臣基經、左大臣時平、左大臣仲平、左大臣忠平、太政大臣實賴、太政大臣賴忠、左大臣師尹、左大臣顯光、右大臣師輔、太政大臣伊尹、太政大臣兼通、太政大臣爲光、太政大臣公季、太政大臣兼家、內大臣道隆、右大臣道兼、太政大臣道長等の臣傳を載せたり。大鏡の名は帝室の御有樣、大臣の事實等を直筆精寫して鏡にかけて見るが如しとの意より撰びたるなるべしといふ。書中繁樹が歌に、「あきらけきかゞみにあへば過ぎにしも、いまゆくすゑのことも見えけり」とあり、又世繼が歌に、「すべらぎのあともつぎ／＼かくれなく、あらたに見ゆるふるかゞみかも」とあり。本書の一名を「世繼物語」といふ。そは、本書の結構世繼の翁の物語りになれるより云へるか、將又帝室の御世、藤原氏の世代繼々の次第を記せるより名けたるか、思ふに、當時は一般の系譜やうの書を世繼と唱へたる例あれば世代的史傳物語なるよりいひしなるべし。「榮華物語」「今鏡」等も其の例なり。作者に就て說あれども、「尊卑分脈」の爲業は世繼の作なりといふ說と、「大日本史」中藤原爲業の傳に、「世繼翁夏山繁樹の問對を設けて君臣の事績を概記し文德帝に起り後一條帝に終る。名けて世繼物語といひ、又大鏡と名く」云々といへるによりて、藤原爲業と定む。本書は「國史大系」の第十七卷にも收めたり、該書は活字本を原とし、故大澤清臣の校本を以て增訂したるものといへり。註釋の書としては落合直文、小中村義象兩氏の作(明治二十九年成る)「大鏡詳解」四册あり。字解句解及び一章一節の大意を掲げ、終始周到なる解釋を施したるものなり。本と本書は讀み難く解し難き割合に、水戸本、塙本、屋代弘賢、清水濱臣、伴信友、狩谷望之、久米幹文等の校本の外註釋本とては更になかりしところなり。

◉藤原爲業は權中納言長良の裔にして丹後守爲忠の子なり。崇德天皇の朝に仕へて藏人に補せられ後累進して皇太后宮大進となる。和歌を詠み記事に巧なり。後剃髮して寂念と號して大原山に隱る。二弟寂然、寂超と合せて大原の三寂と云ふ。

おほかゞみかげがき

大鏡陰書　寫本一卷

大鏡の中の事實を補訂し、まゝ考證を挿み、且、大鏡の異本襄書等を附錄とせり。

おほかゞみるゐご

群書搜索目錄　大鏡類語　寫本一卷　小山田與清

五十音順に分類して大鏡中なる類語凡て七百箇を集めたり。每語の下に本書の丁數及表裏等を記す。

◉小山田與清の傳は「松屋叢話」の下にあり。

おほがきはんちはうざつき

大垣藩地方雜記　寫本六册　增田　耕藏

大垣藩の農政に關する慣例、山川古蹟の舊記其の他等を集錄したるものなり。弘化元年甲辰(二五〇四)の作。

おほかはじんせいろく

近世美談　大川仁政錄　二十卷　松亭　金水

江戸町奉行大川越前守政光を中心として、或は强盜、殺人、侫奸、其の他種々複雜なる裁判的出來事を仕組み、遂に大川の裁可神の如きを顯す小說なり。第一輯五卷、第二輯五卷、第三輯五卷、第四帙五卷、都合二十卷にて、第四帙は安政四年丁巳(二五一七)中秋に成る。

◉松亭金水の傳は「松亭漫筆」の下にあり。

おほぎまちじゆいちゐきんみちきやうおんくじゆ

正親町從一位公通卿御口授　寫本一卷

享保三年戊戌〔二三七八〕秋正親町從一位公通卿江戸に出で西の窪一乘寺に館したる時、或る兩夕、光海、八重垣の二人に向ひて說話したる事項を書き留めたるものなり。卽ち、神代歌、住吉、心化、浮橋造化人事、神代人皇、浮橋二歌、九神七庚申、和歌、笏、中臣祓等の事を略述したるなり。

おほぎまちのゐんおんひやくしゆ

正親町院御百首　寫本一卷　正親町院

立春「きのふまで雪にみなれし山の端も、霞にあけて春や立つらん」より、祝言「なにの道もまさきのかつら末遠に、たえずつたへよ家々の風」に至る。「續群書類從」三百八十七、和歌部二十二にあり。

おほぎまちのゐんごそくゐりやくしだい

正親町院御即位略次第　一卷

永祿元年戊午〔二二一八〕即位の禮を行はせらる。本書は其の記事を漢文にて記したるものなり。「群書類從」卷九十一、公事部第十三にあり。

おほくさけれうりのしよ

大草家料理書　一卷

鳥獸魚料理法、精進料理法、及び同器具の製作裝置、丁士の作法等を詳細に說明したるものなり。凡そ六十五項あり。「群書類從」卷三百六十六、飲食部第三に收む。

おほくさどのさうでんのきゝがき

大草殿相傳の聞書　寫本一卷

大草流一切の料理法故實を聞書したるものにて、卷末に「天和二年戊〔二三四二〕の仲春二十二日書之」とあれど姓名を記さず。

おほくにたまじんじやりやくき

大國魂神社略記　寫本一卷

武藏國北多摩郡中驛に鎭座せる同社の緣起沿革等を略記したるものなり。編年編者詳ならず。

おほくぼけとめがき

大久保家留書　寫本一册

大久保一家新八郞忠俊より、同加賀守忠任に至るまでの傳統事績を逐一に揭載す。

おほくぼけのきべつしふ

大久保家記別集　寫本五册

大久保氏の家系及び代々の事績に至る事實雜說を揭げて、大久保家記の別集としたるものなり。

おほくぼたゞのりじき

大久保忠敎自記　寫本二卷　大久保忠敎

「大久保彥左衞門筆記」と同物なれど往々少異あり。織田信長の比叡山を建てざりしを家康建立せしことより、信長記の誤り多き事等を評せしまでにて終れり。恐くは寫本半途にて止めたるものなるべし。本書は著者の名を顯さず單に筆者の名をとりて「三河物語」の加藤孫太郞本といふ。

◉大久保忠敎の傳記は「大久保彥左衞門筆記」の下にあり。

おほくぼとやまへんのづ

改正大久保外山邊圖　一折　村上吾雄

江戸大久保、外山、高田邊の地圖にして、旗本組屋敷社寺等の位置を明記す。孝明天皇の嘉永四年辛亥〔二五一一〕近吾堂版の小折本なり。

◉村上吾雄の傳は「南本所竪川邊圖」の下にあり。

おほくぼひこざゑもんひつき

大久保彥左衞門筆記　寫本四册　大久保忠敎

我が國開闢の事より、皇室の御系、源氏の血統を始として德川氏に至り、家康の三遠甲信の取合、小牧、長久手、關原、大阪等の事に至るまでの記錄なり。開卷の最初に記して曰く、「我れ老人の事なれば、夕去を知らず、然らば則ち吟明の時分は御主樣御譜代の衆も御譜代久しく筋目も不知、三河者ならば、皆式に御譜代の者と思ひける間、其の立分をも子孫知らまほしき事なれば、書き置くなり。此の書物公界へ出すものならば、御譜代衆忠節の筋目をも、亦走廻りの事をもよく穿鑿して書くべきが、之れは我れ等の子共に、我が筋を知らせん爲めに書き置くなれば、他人の事を記さず。其れによりて門外不出と云ふなり」云々と記せり。一名を「三河物語」と題すれども、同種の「三河物語」、「三河記」、「三河實記」等は多少の異同あり、從つて精粗得失各一樣ならず。

◉大久保忠敎は彥左衞門と稱す。初の名は忠雄、小字は平助、彥左衞門は後の改名なり。永祿三年庚申〔二二二〇〕に生れ、幼より軍職に特功あり。德川家

康、秀忠、家光の三將軍に歷仕して最も敬重せらる。家康嘗て臣下に命じて曰く、大儀は必ず彥左衞門を以て決を取らんと。三代皆其の言の如くす。諸侯敬せざるなし。明正天皇の寬永十六年己卯〔二二九九〕年八十にて歿せり。

おほくらきやうゆきむねきやうしふ

大藏卿行宗卿集　一卷　行宗

最初「山花未綻」の題なる「山櫻まださかずとも見えぬ哉、朝見るくものたえぬかぎりは」より、「心にぞ逢ひ見ぬ程をかぞへせば、中のゆびまでふせずあらまし」の最後に至る數百首を載せたり。始めに「長承元年壬子〔一七九二〕十二月炎上之後隨二思出一書レ之」と記す。「群書類從」卷二百四十四にあり著者行宗は大藏卿たり。

おほくらしけいづ

大藏氏系圖　寫本一卷

孝德天皇の御宇歸化して大和國高市郡檜前村に住居したる阿智使主の祖、後漢光武帝より起りて天草三郞大和守種滿に至る。「續群書類從」百八十六の卷に收めたり。

おほけいづ

大系圖　三十卷　西　道智

洞院公定の「尊卑分脈」に基きて諸家の系圖略譜等を增補集成したるものなり。卷首に「新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類」と記せり。明曆年中〔二千三百十年代〕に作らる。

◉西道智は京師の人、國學を以て名あり。宗庵と稱す。初め醫を業とし、後、專ら典詁有職の研究に從ふ。著書には、古今集頭書、源氏物語綱目、徒然草金槌、保元物語大全、平治物語大全、平家物語大全、太平記大全、本朝雜談抄等あり。寬文中〔二千三百二十年代〕の人なりといふ。

おほけいづくわくびきべんらん

大系圖畫引便覽　二十四卷　洞院　公定

尊卑分脈大系圖の姓名を、字畫にて引くやうに作りたる索引なり。嘉永二年己酉〔二五〇九〕全編四册に版して、「丹鶴外書」となす。

◉洞院公定の傳は「尊卑分脈」の下にあり。

おほざうし

大草紙　三卷　小笠原貞慶

一名によりて「諸禮集」の題下に解題を揭げたり。

おほざうし

大草子　寫本一卷

弓射樣、草鹿丸物、笠懸、小笠懸、犬追物、御引出物、馬引請取、鷹進又請取、琵琶琴進、鞠の扱、要向、烏帽子着、徒移、書札法川、奉公人可心得、當家形圖次第の事等を記せる武家故實書なり。

おほさかいちらんおこりのおぼえがき

大阪一亂起の覺書　寫本一册

大佛供養停止の事より大阪陣の事に至る十五條と、本多上野介正純より片桐兄弟の誓紙文を揭げ、次に片桐兄弟の事實七條を載せたり。或は片桐家記より抄出したるものならんかとも云へり。

おほさかえきのきゝとめがき

大阪役記留書　寫本一册

大阪役に關する榊原、石川二家中の覺書なり。榊原家中の留書は五月八日村上彌右衞門が陣中の書簡なり。石川家中の留書には奧に、「右一卷太田彌太夫忠高より借寫するものなり。享保八癸〔二三八三〕八月」とありて、大阪兩度の役、主殿頭一手の手合始末等を記せり。

おほさかおしろてんしゆのづ

太閤御代大阪御城天守圖　寫本一折　鮫島次郞兵衞

秀吉時代に於ける大阪城天守の寸法圖なり。凡て寸法を精算す。天保八年丁酉〔二四九七〕の作。

◉鮫島次郞兵衞は大阪薩摩藩邸出入の大工棟梁なりと。此の圖は次男利助の寫本を、明治十四年小野某の傳寫するところなり。

おほさかおしろときのたいこのめい

大阪御城時太鼓銘　寫本一卷

法報應三身眞言の梵文十五字、普通打鐘偈十六字、弘法大師所述の發字義文といへるもの四句二十字を揭げ、次に銘を載せたり。正安四年壬寅〔一九六二〕正月八日の筆にて、「生駒山大聖竹林寺太鼓張記錄銘事」と記せり。竹林寺は大和國平群郡にありて生駒山と號す。「元明天皇の和銅六年草創にて開基は行基菩薩なりといふ」此の寺の鐘、後に大阪城のものとなりしによりて「大阪御城時太鼓銘」とは

いひたるものなるべし。一册僅に四枚より成る。

おほさかおしろのづ
大阪御城之圖　本一折

豊臣秀頼籠城中の大阪城を精密に寫製したる大地圖なり。諸將士の居所は勿論、井の深さ堀の寸法、組石の大小迄皆尺寸を付して記せり。其の當時の作と見えて古色蒼然たり。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

おほさかおてしんゆのづ
大阪御天守圖　本一軸

軸頭に延寶九年辛酉(一六七三)四月、藤本氏が記す所の「大阪御城圖」に添ふる由を記せり。明細なる内外分間圖なれど、一切數符文字等の記載なし。

おほさかおもてごぐわつなぬかかつせんおぼえ
大阪表五月七日合戰覺　本一卷

慶長二十年乙卯(一六一五)五月七日大阪冬陣の顛末を詳敘せし者にて、慶安元年戊子(一六四八)四月、家康東照大權現の宮號を得たるまでを記せり。

おほさかがみ
大阪鑑　六卷　一無軒道治

一名「難波名所蘆分舟」の題下に解題したり。

おほさかき
大阪記　本二卷

大阪亂の發端より、家康の凱陣まで凡そ二十九箇條を記し、末に家康の薨後、卽ち元和三年丁巳(一六一七)樞を日光山へ移し葬りたることを載す。

おほさかおしろのづ
大阪御城之圖　本一折

豊臣秀頼籠城中の大阪城を精密に寫製したる大地圖なり。諸將士の居所は勿論、井の深さ堀の寸法、組石の大小迄皆尺寸を付して記せり。其の當時の作と見えて古色蒼然たり。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

おほさかおてしんゆのづ
大阪御天守圖　本一軸

軸頭に延寶九年辛酉(一六七三)四月、藤本氏が記す所の「大阪御城圖」に添ふる由を記せり。明細なる内外分間圖なれど、一切數符文字等の記載なし。

おほさかおもてごぐわつなぬかかつせんおぼえ
大阪表五月七日合戰覺　本一卷

慶長二十年乙卯(一六一五)五月七日大阪冬陣の顛末を詳敘せし者にて、慶安元年戊子(一六四八)四月、家康東照大權現の宮號を得たるまでを記せり。

おほさかがみ
大阪鑑　六卷　一無軒道治

一名「難波名所蘆分舟」の題下に解題したり。

おほさかき
大阪記　本二卷

大阪亂の發端より、家康の凱陣まで凡そ二十九箇條を記し、末に家康の薨後、卽ち元和三年丁巳(一六一七)樞を日光山へ移し葬りたることを載す。

おほさかおしろのづ
大阪御城之圖　本一折

豊臣秀頼籠城中の大阪城を精密に寫製したる大地圖なり。諸將士の居所は勿論、井の深さ堀の寸法、組石の大小迄皆尺寸を付して記せり。其の當時の作と見えて古色蒼然たり。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

おほさかおてしんゆのづ
大阪御天守圖　本一軸

軸頭に延寶九年辛酉(一六七三)四月、藤本氏が記す所の「大阪御城圖」に添ふる由を記せり。明細なる内外分間圖なれど、一切數符文字等の記載なし。

おほさかおもてごぐわつなぬかかつせんおぼえ
大阪表五月七日合戰覺　本一卷

慶長二十年乙卯(一六一五)五月七日大阪冬陣の顛末を詳敘せし者にて、慶安元年戊子(一六四八)四月、家康東照大權現の宮號を得たるまでを記せり。

おほさかがみ
大阪鑑　六卷　一無軒道治

一名「難波名所蘆分舟」の題下に解題したり。

おほさかき
大阪記　本二卷

大阪亂の發端より、家康の凱陣まで凡そ二十九箇條を記し、末に家康の薨後、卽ち元和三年丁巳(一六一七)樞を日光山へ移し葬りたることを載す。

おほさかおしろのづ
大阪御城之圖　本一折

豊臣秀頼籠城中の大阪城を精密に寫製したる大地圖なり。諸將士の居所は勿論、井の深さ堀の寸法、組石の大小迄皆尺寸を付して記せり。其の當時の作と見えて古色蒼然たり。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

おほさかおてしんゆのづ
大阪御天守圖　本一軸

軸頭に延寶九年辛酉(一六七三)四月、藤本氏が記す所の「大阪御城圖」に添ふる由を記せり。明細なる内外分間圖なれど、一切數符文字等の記載なし。

おほさかおもてごぐわつなぬかかつせんおぼえ
大阪表五月七日合戰覺　本一卷

慶長二十年乙卯(一六一五)五月七日大阪冬陣の顛末を詳敘せし者にて、慶安元年戊子(一六四八)四月、家康東照大權現の宮號を得たるまでを記せり。

おほさかがみ
大阪鑑　六卷　一無軒道治

一名「難波名所蘆分舟」の題下に解題したり。

おほさかき
大阪記　本二卷

大阪亂の發端より、家康の凱陣まで凡そ二十九箇條を記し、末に家康の薨後、卽ち元和三年丁巳(一六一七)樞を日光山へ移し葬りたることを載す。

おほさかおしろのづ
大阪御城之圖　本一折

豊臣秀頼籠城中の大阪城を精密に寫製したる大地圖なり。諸將士の居所は勿論、井の深さ堀の寸法、組石の大小迄皆尺寸を付して記せり。其の當時の作と見えて古色蒼然たり。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

おほさかおてしんゆのづ
大阪御天守圖　本一軸

軸頭に延寶九年辛酉(一六七三)四月、藤本氏が記す所の「大阪御城圖」に添ふる由を記せり。明細なる内外分間圖なれど、一切數符文字等の記載なし。

おほさかおもてごぐわつなぬかかつせんおぼえ
大阪表五月七日合戰覺　本一卷

慶長二十年乙卯(一六一五)五月七日大阪冬陣の顛末を詳敘せし者にて、慶安元年戊子(一六四八)四月、家康東照大權現の宮號を得たるまでを記せり。

おほさかがみ
大阪鑑　六卷　一無軒道治

一名「難波名所蘆分舟」の題下に解題したり。

おほさかき
大阪記　本二卷

大阪亂の發端より、家康の凱陣まで凡そ二十九箇條を記し、末に家康の薨後、卽ち元和三年丁巳(一六一七)樞を日光山へ移し葬りたることを載す。

おほさかおしろのづ
大阪御城之圖　本一折

豊臣秀頼籠城中の大阪城を精密に寫製したる大地圖なり。諸將士の居所は勿論、井の深さ堀の寸法、組石の大小迄皆尺寸を付して記せり。其の當時の作と見えて古色蒼然たり。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

おほさかおてしんゆのづ
大阪御天守圖　本一軸

軸頭に延寶九年辛酉(一六七三)四月、藤本氏が記す所の「大阪御城圖」に添ふる由を記せり。明細なる内外分間圖なれど、一切數符文字等の記載なし。

おほさかおもてごぐわつなぬかかつせんおぼえ
大阪表五月七日合戰覺　本一卷

慶長二十年乙卯(一六一五)五月七日大阪冬陣の顛末を詳敘せし者にて、慶安元年戊子(一六四八)四月、家康東照大權現の宮號を得たるまでを記せり。

おほさかがみ
大阪鑑　六卷　一無軒道治

一名「難波名所蘆分舟」の題下に解題したり。

おほさかき
大阪記　本二卷

大阪亂の發端より、家康の凱陣まで凡そ二十九箇條を記し、末に家康の薨後、卽ち元和三年丁巳(一六一七)樞を日光山へ移し葬りたることを載す。

で詳しく着色にて表せり。文化四年丁卯(一八〇七)片岡直亮の寫すところなり。

おほさかごじやうないおやかたのづ
大阪御城内御屋形之圖　本一舖

同屋形の圖は御殿向の圖にして、御上段、御廊下、御緣側及び菜の間といふこと。又縱横の間數等を記せり。文化四年丁卯(一八〇七)片岡直亮の寫したるものなり。

おほさかごじやうないさくらごもんないめいせきのづ
大阪御城内櫻御門内名石之圖　本一舖

櫻御門内石垣になる龍石、虎石、鶴石、龜石、蟾石其の他大石の縱横尺寸等を記載す。文化四年丁卯(一八〇七)片岡直亮の謄寫したるものなり。

おほさかごじやうないてびきぐさ
大阪御城内手引草　本一舖

同城内御殿向、玄關より、下臺所に至るまでの各間、各給仕、各筆者等を記し、更に御庭廻順と記して諸門より小天守臺内に至り、天守臺より方角の圖を示せり。文化四年丁卯(一八〇七)片岡直亮の寫に係る。末に「明和七庚寅年(一七七〇)四月二十二日、大阪御城にて寫之」と記せり。

おほさかごせんのづ
大阪五戰之圖　六折

慶長元和年中大阪五度の戰爭を實寫したるものなり。各開戰進備、將士配置、寄手引受等の位置なり。帝國圖書館に貴重品として所藏す。

おほさかごぢんいへいへおたづねきのづ
大阪御陣家々御尋記　本一册

松平　左近

延享二年乙丑(一七四五)八月、松平左近將監を以て松平兵部大輔、松平土佐守、酒井左衛門尉、榊原小平太、丹羽飛驒守、眞田伊豆守以下二十二の諸家へ、大阪冬陣に、江戸より供奉し、或は大阪にて攻口等の事を尋ねさせたる時得たる傳說なり。盖し德川氏の大阪記編纂の料に徵したるものなるべし。

◎松平左近は大給の領主なり。眞次と稱し、三郎次郎と云ひ後縫殿助と改む。警て大阪冬夏の軍に從ひて戰功あり。上野國内に采地千石を得從五位下に敍せられ、寬永四年大番頭となり。三河國に移されて知行七千石を領す。正保三年丙戌(一六四六)九月十四日七十歳にて歿す。

おほさかごぢんおぼえがき
大阪御陣覺書　本三卷

大阪陣の最初より落城の終りまでを記錄したるものにて、一名を「攝戰實錄」とも云へり。

おほさかごぢんぐぶなまへ
大阪御陣供奉名前　本一册

大阪兩陣の時、家康、秀忠に供奉したる人名定員を記錄したるものなり。

おほさかごぢんこんろんにつき
大阪御陣金地院日記　本一卷

慶長十九年甲寅(一六一四)同二十年に於ける大阪陣中の記なり。漢文にて記す。寬保三年癸亥(一七四三)林信充の奥書あり、道春所撰の駿府記、政事錄等と異同あり、勘考の料たるべきことをいへり。

おほさかごぢんしまつのき
大阪御陣始末之記　本八卷

慶長元和間の大阪陣始末を、諸書に徵して編輯す。最も確實なる史料たるべし。冬陣四册、夏陣四册に作れる古寫本なり。外に夏陣寄口御備定、同御感狀、冬陣御感狀等の三册を添へたり。八卷凡て十一册あり。

おほさかごぢんのづ
大阪御陣之圖　本一舖

元和元年乙卯(一六一五)五月七日、德川家出陣備立の圖にして、勝德兩家は朱墨を以て區別せり。

おほさかごぢんやまぐちさうあんばなし
大阪御陣山口休庵咄　本一卷

山口　休庵

慶長十八年癸丑(一六一三)より、元和元年乙卯(一六一五)五月に至るまで大阪城中にありて實見したる戰況實記なり。記事簡略なりと雖も、當時の實記なれば殊に價値あるべきを覺ゆ。享保十一年丙午(一七二六)四月人見行察の奥書あり。

◎山口休庵は、豊臣秀頼の侍臣にして、大阪落城後赤座内膳、伊藤丹後、岩佐右近等と共に京都妙心寺に五ヶ年自殺せむとせしに寺僧澤山和尚の乞によりて許したる得たる人なりといふ。

おほさかごぢんりやうどしまつき

大阪御陣兩度始末記　桂山 義樹　寫本 十册

第一册に天正十八年以來御知行割の記。第二第三册に御入國より慶長年間諸役人の記。第四第五册に冬大阪御陣につき御觸出の記。第六册に冬大阪御陣につき攻口並に御備定の記。第七册に夏大阪御陣につき寄口並に御備定の記。第八第九册に夏大阪御陣につき御觸出の記。第十册に慶長元和の間御條目の記等に排列せり。林大學頭との合著に係る寛保三年癸亥〔二四〇三〕八月二十五日の改撰
◎桂山義樹の傳は「東韓事略」の下にあり。

おほさかごにんをとこごせんぎとめがき

大阪五人男御詮議留書　寫本 一卷

元祿十五年壬午〔二三六二〕八月二十六日大阪道頓堀に於て死刑に處せられたる惡漢五名の口書留書なり。五名の惡漢は、鴈金文七、庵の平兵衞、極印千右衞門、神鳴庄九郎、ほての市右衞門なり。

おほさかごようきんいつけん

寶曆文化 大阪御用金一件　寫本 一卷

寶曆十一年辛巳〔二四二一〕同十二年、文化十年癸酉〔二四七三〕等に、大阪表に於て米相場川金町內數配當及び買米代貸付其の他に關する沙汰書、差上書等一切書類を編錄したるものなり。

おほさかさんがうまちゑづ

大阪三鄕町繪圖　寫本 一折

追手口御城代下屋敷並家來屋敷、其他諸役人屋敷、水道、請地、組合、村方、及び築立新地等に至るまで彩色を以て細圖したる大繪圖なり。明和四年丁亥〔二四二七〕以來漸次築立の新地までを記す。

おほさかしぎのおぼえかき

大阪鴫野覺書　寫本 一册

慶長十九年甲寅〔二二七四〕十一月二十六日鴫野堤、蒲生堤手合の戰話を記したるものなり。「景憲物語」と合寫す。

おほさかししやうづ

大阪指掌圖　一鋪

寛政元年己酉〔二四四九〕出版の「攝津大阪圖」を、同五年再刻したるものなり。朱線を以て分間を記し、裏面に河繪圖を添へたるは前圖と異なるところなり。

おほさかしまつき

大阪始末記　寫本 十五卷

豐臣秀賴上洛の事より、大阪兩度合戰の始末を記し、德川家康同秀忠の歸洛、大阪遺臣所罰のこと等に至る詳細の記錄なり。

おほさかじやうたていへのづ

大阪城建家之圖　寫本 一折

同城建築の明細圖にして、明治八年乙亥〔二五三五〕內務省に於て謄寫せるところの小折本なり。

おほさかじやうづかい

大阪城圖解　寫本 一卷

慶長元和間の大阪圖に就きて詳しく內部を說明したるものなり。

おほさかじやうふゆぢんしよせのづ

大阪城冬陣仕寄之圖　寫本 一鋪

名の如く大阪冬陣に於ける陣取、配兵、敵味方の實況を寫したる彩色精圖なり。

おほさかすんぷごじやうないならびにつくわうおなりおるすごでうもく

大阪駿府御城內並日光御成御留守御條目　寫本 一册

德川家康が方々巡見の記錄なり。專門學者には得るところあるべし。

おほさかづかんかうもく

大阪圖鑑綱目　一鋪

圖傍に記して「此の大繪圖は、大阪東西南北、町々、川筋、神社、佛閣並近邊名所舊蹟、端々隈々迄、微細に題し、または町名往昔の相違を改め、或は諸大名屋敷の替り等、巨細に記し、圖鑑綱目と號す」といへり。寶永六年己丑〔二三六九〕の版にかゝる。圖の上方には、題して「攝津大阪圖鑑綱目大成」といふ。

おほさかどくぎんしふ

大阪獨吟集　二卷　西山 宗因

幾音、素玄、三昌、意樂、鶴永、由平、未學、悅春、重安等の發句集なり。延寶三年乙卯〔二三三五〕西山宗因批判の儘を彫す。
◎西山宗因は肥後加藤氏の臣、名を豐一、通稱を二

那作といひ、宗因は其の號なり。又、忘吾齋、一幽子、向榮庵、西翁、梅翁、野梅子、梅花翁等の號あり。寛永九年主家亡びて浪人し、是より里村昌叱に連歌を、松永貞德に俳諧を學び、更に一派の俳風を起す。謂ゆる、檀林派の祖なり。著す所廿日草四人法師、十會集、たうがらし百韻、兩吟集、ひろかみ等あり。天和二年壬戌〔二三四二〕三月二十八日、七十八にて歿す。谷中日暮里發福寺に葬る。

おほさかなつごぢん

大阪夏御陣　寫本 二卷

大阪軍記の中下兩卷と同物なり。內閣文庫に貴重品として所藏せり。

おほさかなつごぢんおぼえがき

大阪夏御陣覺書　寫本 二卷

「大阪夏御陣」若くは「大阪軍記」の中下兩卷を以て別書としたるものなり。內閣文庫に貴重品として所藏せり。

おほさかなつごぢんのき

大阪夏御陣記　寫本 一卷

「大阪夏御陣」、若くは「大阪軍記」〔二書同書〕の下卷と同書にして、「大阪落城記」と異名同書なり。大阪表五月七日合戰覺書以下の記なり。內閣に貴重品として藏す。

おほさかなつごぢんのづ

大阪夏御陣之圖　寫本 一鋪

元和元年乙卯〔二二七五〕夏陣の時、大阪城內外を圖したるもの。東は龍田越、眞城嶽を限り、西は福島川、土佐堀より海濱一帶を限り、南は天王寺より富林を限り、北は淀川より河州那須山を限り、山川橋梁、諸將士陣取の場所等を示せり。

おほさかにつき

大阪日記　寫本 一卷

後陽成天皇の慶長八年癸卯〔二二六三〕二月、秀賴內大臣に任ぜられ、家康征夷大將軍に任ぜられたる等より、慶長二十年元和と改り、家康駿府へ歸城する事に及べる略日記なり。

おほさかふうぞくし

大阪風俗志　寫本 三卷　中井 積善

內に「攝都風俗志」と題して、大阪米相場以下風俗習慣等を記述評論したるものなり。二十一條三卷一册に寫傳す。
◎中井積善の傳は「逸史」の下にあり。

おほさかふゆなつごぢんしまつのき

大阪冬夏御陣始末之記　寫本 五册

大阪兩度の戰爭始末を細敍したるものなり。沙汰書付、往復狀其の他殆ど錄せざることなし。

おほさかものがたり

大阪物語　二卷

慶長以後大阪の爭亂、將軍家の盛衰を、繪入物語に書き綴りたる草紙本なり。版刻頗る古色を帶びたれど年代著者等を詳にせず。末に當時の首帳を附したり。表紙には「繪入新版大阪物語」と記す。

おほさかよりさいこくすぢふなぢつけ

大阪より西國筋船路付　寫本 一卷

書名の示すが如く、各國船路を記し、港の淺深、島嶼の大小、風候潮汐の險易等を記せり。

おほさからくじやうき

大阪落城記　寫本 一卷

「大阪夏御陣記」の下卷を割て一卷と成したるもの。卽ち「大阪軍記」の下卷。寶永元年甲申〔二三六四〕の寫本なり。內閣文庫に、特別書として所藏す。

おほさかりやうぢんのき

大阪兩陣之記　寫本 二卷

慶長元和間に於ける大阪冬夏兩陣中の日記なり。乾坤二卷の略記を一册に作る。何人の作なるかを知らず。

おほさかろうじやうき

大阪籠城記　寫本 一卷

大阪冬夏の陣の始末を記錄したるものなり。秀賴大阪在城のことより、其の生害に至る二十一箇項より成る。中にも大阪方の事を頗る詳細に記せり。

おほさはぶんこ

大澤文庫　一卷　僧 良定

淨土宗に相傳せる淨土三部經の要義を摘示せるものなり。故に本書の內題には、「淨土三經相傳鈔」と云ひ、又は「奉納大澤文庫大經相傳」とも云へり。以つて本書の由來をも推知すべし。目次には、大悲本

懲事、五劫事、第十八願事、十二光事、五智事附陽事、光臺現國事、住立空中事、九品事、從是西方事、各於其國事等の十五箇條あり。慶長十六年辛亥(二二七一)の著作に係る。

◎貞定の傳は「要閻讃」の下に在り。

おほしほへいはちらうげきぶん

大鹽平八郎檄文　寫本一卷　大鹽平八郎

著者首魁となり、同志を集合して一揆を起し、下民を惱したる諸役人、及び驕者に長じたる大阪富豪者等を襲殺して、其の貯藏せる米金を、下、貧民に分散配當せんとし、其の旨を攝河泉播の諸民へ通達したる檄文なり。貧民の困窮を訴へ、俗官の非行を鳴らし、自己の精神を發揮すること亦明らかなり。時に天保八年丁酉(二四九七)二月なり。版本は草書平假名交りにて四の内紙五枚の織摺なりと。

◎大鹽平八郎の傳記は「洗心洞劄記」の下に掲ぐ。

おほしほへいはちらうでんき

大鹽平八郎傳記　一卷

天保八年丁酉(二四九七)大阪に兵を起して其名を人に知られたる、大鹽平八郎の家系より、同人の一生事績殊に叛亂始末までを詳しく記したる實錄なり。四十餘回に記したり。明治十九年古今實錄の一として反刻せり。

おほしまひつき

大島筆記　寫本五卷　戸部良熙

寶暦十二年壬午(二四二二)七月二十二日琉球船漂流して大島に着す。本書は當時の始末を詳記したるもの。其の目を擧ぐれば、琉球人漂着次第、琉球國體、人物、風俗、年中大略、官位之事、朝服之事、地名、產物大概、琉語大略、雜話、附錄、出會詩歌、圖繪、琉球歌、琉球人和歌、雨夜物語、永峯和文等なり。

◎戸部良熙は正德三年癸巳(二三七三)に生る。土佐の儒者なり。原山と號し、助五郎と稱す。著書は本書の外に、「國號考」あり。寬政七年乙卯(二四五五)年八十三にて歿す。

おほじやうご

大上戸　一冊　富尾似船

著者の俳諧、獨吟二百吟なり。延寶四年丙辰(二三三六)三月の編にかゝる。

◎富尾似船の傳記は「堀川の水」の下にあり。

おほじやうらふおんなのこと

大上臈御名之事　一卷

慈照院殿の御代に於ける殿中上臈の稱呼を記したるものなり。例へば花山院殿を上臈、德大寺殿をちやゝ上臈、三條殿をめゝ上臈、西園寺殿をあぶら上臈、武者小路殿をあちや上臈、あすか井殿をとう大納言、山名殿を御やち、等と呼べる實例、其の外宮仕女房などの化粧作法詞遣等を記せり。「群書類從」四百十四の卷、武家部第十五に入れたり。

おほすかけでん

大須賀家傳　寫本一卷

永祿十一年戊辰(二二二八)以來、元和元年乙卯(二二七五)に至る、同家の由緒功績等を記す。明治十四年德川昭武の藏本によつて寫したるものなり。

おほすみともたいらんき

大洲純友大亂記　寫本一卷

「藤原純友大逆初發事」より、「平將門藤純友降伏次第事」に至る四十三箇條を記載せり。

おほすゞり

大硯　一冊　保友

著者の俳諧集なり。井原西鶴の序あり。編述の年時は詳ならず。

おほすみたちやう

大隅田帳　寫本一卷

同國窪田帳にて、明治八年田中頼庸氏の本に依て小杉榲邨氏の謄寫したるものなり。

おほすみのくにゑづ

大隅國繪圖　寫本一舖　松平又三郎

東北は日向に限り、西南は薩摩と海とを境とせる地圖にて、郡村、陸路、航路、等を記し、また熊毛郡種子島、驛謨郡屋久島、大隅郡攝島、其の他の大小諸島をも圖せり。圖端には郡村高等を揭げ、「寶曆六丙子年(二四一六)松平又三郎」と記せり。

◎松平又三郎は、本書の外に、薩摩國繪圖日向國繪圖、琉球國繪圖等を著せり。

おほすみのくにがうそんこくづけちやう

大隅國鄉村石付帳　寫本一卷

大隅一國の八郡、二百三十村、十七萬〇八百三十三石四斗五升一合の高附なり。郡村別に記したり。

おほせだされどめ

被仰出留　寫本十一冊

江戸幕府の布達仰出書類を、順序を正して、遺漏無く淨書したるものなり。明曆三年丁酉(二三一七)より、享保元年丙申(二三七六)閏二月のに及ぶ。幕府法制の研究には最も精確なる有要の資料たるなり。惜むらくは卷中漸く蠧害を被りて、既に文字の辨じがたきところあり。

おほたいづみのかみせきがはらぐんき

太田和泉守關ヶ原軍記　寫本二冊　源重通

慶長五年庚子(二二六〇)關ヶ原に於ける軍事の日記なり。異本種々あり。

おほたうぢごじふでう

太田氏五十條　寫本一卷

數學中開平方問題五十題を擇び更に其の解說を附したるものなり。編年詳ならず。

おほたかほん

大高本　寫本一卷　大高時通

弓馬故實の書にて、射手條々、矢注、引目巾、鞭、射手出立、籠手射手之可心得事、犬矢所等の事を詳說す。文明十年戊戌(二一三八)垣屋駿河守入道聖恩の奧書、明應四年乙卯(二一五五)十月十六日垣屋新五郎農成等の奧書あり。「弓馬叢集」の中に收む。著者大高時通は官中務丞たり。

おほたぐんき

太田軍記　寫本四卷

上杉景勝の異圖により、家康會津へ出發せる事に始り、關ヶ原合戰に及び、石田、小西等誅伏等の事に至る。首卷には「關ヶ原物語大全目錄」と題して總目次を擧げ、次卷以下「關ヶ原物語」と記せり。

おほたけのき

太田家記　寫本一卷

太田資房(法名道哲)同資清(道眞)同資長(道灌)の三代及び道灌の弟圖書助資忠等が事實の略歷を記したるものなり。寬永諸家系圖傳條例、續太平記、東亂記、北條盛衰記、管領九代記等を根據として摘出編輯したるものなりといふ。

おほたどうくわんくわげつひやくしゆ

太田道灌花月百首　寫本一卷　太田道灌

蓮乘院入道太田道灌の百首に、權大納言飛鳥井雅親の加點したるものなり。「續群書類從」三百九十四、和歌部二十九に收む。

◎太田道灌の傳記は「我宿草」の下にあり。

おほたどうくわんへいしよ

太田道灌兵書　寫本二卷　太田道灌

人主之法、軍將之法、士大將之法、六首官之法、鐵砲足輕大將之法以下數十項軍事の要を、論考したる兵書なり。全編假名文にて記す。或は曰く、此の書は後人の假託なりと。

◎太田道灌の傳記は「我宿草」の下にあり。

おほだてつねおきしよさつせう

大館常興書札抄　一卷

「公方樣へ御請書樣之事」、「攝家へ之書狀之事」等を始め、凡そ一百餘種の書札實例を擧示せるものなり。最後に常興在判九郎殿宛にて「右之條々凡爲ニ意ニ得世和之趣ニ注レ之、書札事者此上にて猶少可レ被ニ敬書ニ段可然也。不レ可ニ外見ニ之狀如レ件」とあり。「群書類從」卷百四十五に收む。

おほだてにふだうつねおきのきならびにやまとはるみちのき

大館入道常興記並大和晴通記　寫本一卷

武家有職に關するものなり。卷尾に後花園天皇の寬正年中の記錄を添附す。

おほたでんき

太田傳記　寫本一卷　卜部兼倶

伊勢二所皇太神御鎮座の傳記なり。原名を「御鎮座傳記」といふ。神道長上從二位行神祇大副兼侍從卜部朝臣兼倶在判の書以來慶安五年壬辰(二三一二)賀茂縣主保可の寫すところ又、大永元年辛巳(二一八一)銅駝老人といふものゝ寫すところの者なり。

◎卜部兼倶の傳は「神祇道服忌令」の下にあり。

おほたなほじらうろしあじんきゝがき

太田直次郎魯西亞人聞書　寫本一卷　太田覃

文化元年甲子〔二四六四〕九月七日魯西亞船一般八十餘名の船員にて開交の爲め我が長崎に來る。本書は當時の係り官太田直次郎が、其の顛末を巨細に記述したるものなり。
◉太田覃の傳記は「南畝叢書」の下に掲ぐ。

おほたにいせきろく
大谷遺蹟錄　五卷　僧　先啓
親鸞上人の遺蹟を考究したるものなり。明和八年辛卯〔二四三一〕の自序中に、「先啓年十有八而、尋彼遺蹟、思此復古、凡所經歷見聞之記錄口實、土地郡縣、乃筆乃記、逐集而簡擇之、三十餘歲于此矣、心思爲之苦」といへり。卷首に親鸞の年譜を掲げたり
◉先啓の傳記は「淨土眞宗聖教目錄」の下にあり。

おほたにいはふさんゐ
大谷遺法纂彙　一卷
淨土眞宗の開祖釋親鸞の遺著として、往還回向文類、獲得信心集、迎接曼陀羅由來、淨土二教門圖等の十部を集めて一卷となせるものなり。然れども、其の多くが後人の僞作にして、信憑するに足らざることは、古來の評家が既に明言せる所なり。寶曆五年乙亥〔二四一五〕四月に、西波の先啓了雅が校刻したれども、寫誤錯脫甚多し。

おほたにき
大谷記　寫本　六册
關ヶ原戰亂の始末を詳記したる漢文目次記にして慶長三年戊戌〔二二五八〕正月十日より、同五年十二月十二日に至る。一名を「東西合軍記」又「慶長治亂記」といふ。「大谷記」といふは、其の名を僞作したるものならむといふ。

おほたにほんぐわんじちやくしよじつき
大谷本願寺嫡庶實記　寫本　一册　僧　淨穩
東本願寺由緒記にして殊に嫡庶の次第を明細に書記せしめたるものなり。天保六年乙未〔二四九五〕十月に成れるものなり。編輯は當時同寺にありし衆僧中より撰ばれたる欽備行寺淨穩、專光寺梵藏照蓮寺隆方、完成寺超然等、數人の手に合著せられたるものなり。

おほたにほんぐわんじつうき
大谷本願寺通記　寫本　十五卷　僧　玄智
眞宗本願寺に關する精細なる實錄なり。今其の所載事項を摘擧すれば歷代の宗主、宗祖親鸞等の門弟及び宗內學匠等の傳記あり。同宗他派の各本山〔東本願寺、興正寺、佛光寺、專修寺、錦織寺〕等の沿革、歷代略傳、寺祿等の敍述あり。本願寺及び大谷墳廟の殿堂各部の構營に就ての說明あり。派內各地別院の由來、歷代佛事の諸式、派內僧階の序次、公私必要の文書等を列記するあり。其の他、各宗本山の沿革寺格等、源空門下五派〔大谷、西山、鎭西、長樂寺、九品寺〕の創唱者、系承及び分派、同門下諸弟の略傳、淨土宗各派本山の沿革等に至るまで直接に間接に苟も事の本願寺に關せるものは巨細を問はず網羅纂輯し、加之考證も精確なれば本願寺一家の事歷は勿論、本邦宗教史の研究に向つて好箇の資料たるや疑を容れざる所なり。而して本書は一時連續に成稿せしものに非ず。前四卷卽ち歷世宗主傳に就ては、自記して「安永八年己亥〔二四三九〕三月始艸㆓高祖及毘遜二師傳㆒、經㆓五年㆒、天明四年甲辰〔二四四四〕閏正月廿二日承㆑命撰㆓纂本山實錄㆒、因㆓原於舊稿㆒撰㆓大谷歷世宗主傳四卷㆒、五年乙巳八月五日卒業」と曰ひ、第十五卷終には「天明五乙巳年五月廿六日染毫十一月十五日脫藁」と記し、第五卷の「本山日黃錄」に寬政元年己酉〔二四四九〕より同四年までの日記を載せたる等を參照するに、安永七八年頃より十三四年間の草稿を校訂編次せしものならん歟。
◉玄智は本願寺の末寺京都慶證寺の僧なり。字は景耀又若瀛と稱す。僧樸の弟子となり日夜精學其業大に進み博識強記にして、其の才世出世に亙る。舊來梓行の敎典に就て、異本を校正し、句讀を訂し、清濁を詳にし、四聲を明にし、且常に寺法勤式等の遺を拾ひ、闕を補ひ、宗徒を資益すること甚多し。寬政六年甲寅〔二四五四〕十月疾を以て終れり、享年六十一。著す所本書の外、眞宗七祖傳、眞宗敎典誌、祖門舊事記、考信錄、三經字音考、其の他十數部あり。多く世に行はる。

おほちき
大內記　寫本　二卷
山口の城主大內義隆に關する記錄なり。義隆周防山口にありて文武の威勢盛りしが、家人の讒訴より家臣等異心を生し、遂に陶尾張守隆房の逆意にあひて生害せる顛末を記したるものなり。編年編者詳ならず。

おほぢぐるま
大路車　二册　可俊
俳諧の付合集なり。元祿三年庚午〔二三五〇〕四月の編述にかゝる。

おほちけいづ
大內系圖　寫本　一卷
百濟人琳聖太子を元祖とし、數代斷絕の後正恒といふに至りて始めて館舍を立て大內と號す。以下數十代を經て義隆の末裔、寬永十二年乙亥〔二二九四〕父の蹟を襲ひて五千石を賜りたる從五位下備前守重恒、及び其の妹高木主水正正成の妻に至る「續群書類從」百八十七に收む。同卷には本書の別本もあり。

おほちけへきしよ
大內家壁書　一卷
周防山口の城主大內義隆の制法なり。本書端に闕文あり。寬正二年六月二十九日執達の「從山口於御分國中行程日數事」を始めとして、永正十一年己未〔二〇九九〕十二月十九日の「百姓逃散御定法之事」に至る數十件を記す。「群書類從」卷四百〇二、武家部第三にあり。

おほぢしんれきねんかう
大地震曆年考　二卷　山崎　美成
大地震の辯說、地震西洋の辯、地震前知の辯、元祿癸未大地震古圖、伊太利亞國地震の圖、震雷よけ殿造の細圖、農家雷風よけの圖、洪浪あげ引の圖、文政十一年越後國大地震書翰の寫し、天武天皇の御代より安政二年まで地震雷水津浪の事等を記載す。安政二年乙卯〔二五一五〕十月の自序あり、翌年江戶にて小册子に出版す。
◉山崎美成の傳記は「書家便覽」の下にあり。

おほちのみさゝぎのづ
大內陵圖　寫本　一鋪　堤　惟德
大和檜隈大內陵內外の詳圖なり。傍に記して、「天智持統合葬之地、大和志曰岩窟廣八尺許、深九丈許、內有雙石棺、寬政八丙辰年〔二四五六〕八月四日、予入窟中、有水及于腰、窟中如圖上則以二大石蓋之、水上高丈餘、水中有栽泥而堆者、揣之則石棺也、形如圖、按南面者天武、西面者持統、此棺覆誠斜而不合」といへり。此の圖最も詳なり。

おほちゆめものがたり
大內夢物語　寫本　一卷
大內義隆の奢侈觀樂を批評したるものなり。或る行脚僧長門國に巡り行き、彼の大內義隆の自殺したる大津郡深川村大寧寺に一宿し、夢に一册子を見たりとて其の書を寫したるなり。半紙僅に八枚の寫本。

おほちよしたかき
大內義隆記　一卷
大內義隆周防山口にありて領國內の神社佛閣を興し神官僧侶を諸國に召し、種々なる祭禮法事等を執行し、朝夕詩歌管絃に耽けり、風流奢侈に溺れて戰國の世に武事を忘却せる事等より、老臣陶晴賢と不和を生じ遂に其の黨の爲めに山口城を落され天文十一年壬寅〔二二〇二〕九月朔日深川村大寧寺に落ちて主從十一名自殺せること等を詳記す。

おほちよしひろたいぢのき
大內義弘退治記　寫本　一卷
本名「應永記」の下において解題せり。

おほつゑづ
大津繪圖　一鋪
近江國滋賀郡なる大津の地圖にして、東、膳所領を限り、西、小關越を限り、南、山科の境を限り、北、琵琶湖を限れり。縱橫町の山川社寺の大略を記し、京道、伏見道、北國道をも記せり。

おほつきへいじぞんじよりしよ
大槻平次存寄書　寫本　一卷　大槻　清崇
嘉永六年癸丑〔二五一三〕六月八日、亞米利加船渡來につき林家へ差出したる存寄書なり。寫して「祕鑽叢書」中に收む。
◉大槻清崇の傳記は「鴻漸齋一百詩鈔」の下にあり

おほつぼいきあひのまき
大坪息間卷　寫本　一卷　大坪　廣秀
當流馬道息間故實書なり。卷末に廣秀以下を連名し、更に長谷川忠兵衞入道頓也より、萬治三年丙子〔二三二〇〕五月十八日、朝山瀨兵衞にあてたる記あり。「弓馬祕抄」中に收む。
◉大坪廣秀は上總の人にして、大坪流馬術の祖な

り。馭術を善くし、また巧に鞍鞦を作る。初め孫三郎と稱し、また左京亮と稱し、式部大輔といふ。而して廣秀は一に慶秀にも作れり。足利義滿及び義持に仕へ、剃髪して道禪と稱し、八十四歳にて歿す。

おほつぼうまのでんしよきゝがき

大坪馬傳書聞書　寫本一册

繰絲卷、若菜卷等の聞書にして、享和元年辛酉〔二四六一〕朽木藩井上源吉の傳書によりて、永井義通寫本の奥書あり。

おほつぼひでんしよ

大坪祕傳書　寫本一卷　大坪　廣秀

當流馬道の故實書なり。卷末に起請文を掲げ、大坪式部廣秀以下六名を署名し、更に長谷川忠兵衛入道頓也より、萬治三年庚子〔二三二〇〕五月十八日、朝山瀬兵衛に宛てたる記あり。『弓馬祕抄』の中に收めたり。

◉大坪廣秀の傳記は「大坪息間卷」の下にあり。

おほつぼぶばけんせうしふ

大坪武馬見笑集　二卷　齋藤　定易

馬術に就きて論述詳說す。貞享二年乙丑〔二三四五〕芝山鵜鶿子の跋中に、「余講武藝之友小埜定易、近撰兩卷論騎馭之術、余攤而閱厥成編、爲其書、語卽俚俚然意卽訓、先閑于事、後明于理、克整于表、以存于裏、及其至也事理一致、心身同歸、自入渾然融會之妙、凡學馭者、欲辯說過究力之非而求乎誠一、乃不須不視茲書也」といへり。能く其の價値を紹介せり。『弓馬雜纂』の中に收む。

◉齋藤定易は東武の人小野氏にて、三左衛門尉と稱し、迎來流之本道、鹿島流之的根、大坪九世の孫にして大坪流の馭道に達したる人なり。馭馬大元記、武馬必用、大坪本流馬相縮名拔書等の著あり。

おほつぼほんりうえうばひきよくのまき

大坪本流要馬祕極之卷　寫本十三卷　土岐　賴恭

軍馬の御法を主とし、其の撰擇、及び馬具等に就きて論述圖解精細に研究したるものなり。其の大綱を云へば、卷の一鞍がため廻し方沓の次第。卷の二鞍がため腹帶芝繋の次第。卷の三馬法並に弓鐵砲心得の次第。卷の四浮沓並舟軍川の次第。卷の五馬直方心持の次第。卷の六直方繩仕懸の次第。卷の七直方飯の圖の次第、擬川上手綱飯の圖の次第。卷の八軍用道具圖の次第。卷の九馬形善惡目利の次第。卷の十馬形見分の次第。卷の十一病馬見立療治の次第。卷の十二藥方療治の次第。卷の十三針灸の次第等を更に數百の目に分ちて細論せり。

おほつぼほんりうばさうゑめいばつしよ

大坪本流馬相縮名拔書　寫本一卷　齋藤　定易

『馬相縮』の名稱十五箇を列擧して、微證したるものなり。元祿十年丁丑〔二三五七〕大高坂芝山、稻保春、源英達等の物したる馬相縮の序跋あり。芝山の序中に、「爰者馬官黑澤、作百馬圖、林羅山、韻群經諸書、尋繹米著名附訓、今天之下、有齋藤定易者、重使丹青描毛色、圖其品百二十、古籍所演焉、別錯雜異馬十有二、總算百三十二具、卷題馬相縮、悉撫詩經、爾雅、說文、馬經、相馬、按驥詩文類、及本邦馬書幾許、編參互考、證匡彼差謬、又有和讀逆本書字註、則直改換、於是乎名色各適切其眞、而苟圖得失、亦喫然如指掌、定易用心可謂困而成矣。」云々といへり。『馬相縮』の由來、本書の大略等を知るべし。『弓馬雜纂』中に收む。

◉齋藤定易の傳は「大坪武馬見笑集」の下にあり。

おほつぼりうまのしよ

大坪流馬之書　寫本二十册

大坪流馬術の傳書なれど、中に上とありて中下のなきものあり、四、六、とありて、一、二、三、五、等のなきものあり。全數の書ならざること知るべし。全數は十三册の由奥書あり、今離合の如何を詳にせす。此の中にて『雲霞集』の如く上中下と三卷相揃へるもの〻如きは別に揭げて解題せり。

おほつぼりうまのでんしよ

大坪流馬傳書　寫本二册　大坪　廣秀

同流馬術。故實傳書にして、繰絲卷、若葉卷、善御諧好芝記、免引卷註解、對馬問答註解、善御譜註解、等を揭ぐ。寶曆六年丙子〔二四一六〕十二月二十三日、川添傳四郎へ傳ふる由の奥書あり。

◉大坪廣秀の傳記は「大坪息間卷」の下にあり。

おほつぼりううんかしふ

大坪流雲霞集　一册

大坪流の御法、卽ち馬匹を責むる方法を詳記したるものなり。

おほともき

大友記　寫本一册

豐後大友氏に關する記事、建久七年丙辰〔一八五六〕三月十日源賴朝、豐後國を大友能直に與へたるが、其の第十九世義長の時、卽ち大永七年丁亥〔二一八七〕十月、筑後國に於て星野伯耆守と開戰したるに起り、其の子義鑑、孫義鎭の三世に係る戰記を主として浮沈汚隆を記し、遂に明曆二年丁酉〔二三一七〕九月の記事に終る、漢文の略記なり。

おほともけいづ

大友系圖　寫本一卷

始祖攝政關白藤原道長より出でて新五郎義泰、長十郎親方に至る。『續群書類從』卷百五十にあり。

おほともこうはいき

大友興廢記　寫本二十二卷

豐後大友氏の興廢を詳述せること名の示すが如し。總目次一百八十六より成る。著者の奥書に曰く、「予愚昧にして不省といへども、人の傳說を聞て卷をなす事二十餘にして其の萬が一を記す。若し人あつて不善不全是を正して以て奕葉に傳へば維幸矣」と。惜むらくは著者の名を知らざるを。

おほともこうはいき

增補 大友興廢記　寫本四十八卷　甲斐　武則

豐後なる大友氏の興廢に關し日本紀以下四十八種の正史野史稗史小說等により、又古老傳說の見聞等によりて書き綴りたるものなり。本文四十六册、附錄二册あり、其の一には豐後に緣故ある他事を揭げ、一には大友氏の大系圖を載す。

おほともしけいづ

大伴氏系圖　寫本一卷

大伴狹手彥の父金村を祖として本枝百餘葉の後四郞右衛貫宗に至る。『續群書類從』百八十二に收む。

おほともほうちくらんき

大友豐筑亂記　寫本三卷

大友左近將監從五位下豐後守藤原朝臣能直が旗下豐後筑後に於ける爭亂の記事なり。時は天正十五年丁亥〔二二四七〕の七月を以て畢る。

おほともみつのかう

大伴三津考　一卷

萬葉集の第一、第七の卷其の他に散見せる大伴の三津の濱邊は難波と江州とに大伴の三津ありて同名異所とあるを、多くの撰集家集等を引例して其の名と所とを考證したるものなり。

おほともよしむねこうぐんき

大友義統公軍記　寫本一卷　田北彌太郎

慶長六年辛丑〔二二六一〕八月二十五日、大友義統敗戰後其の臣田北彌太郎より柴田左京進後家妙因へあてたる事實筆記なり。最後の文中に「御一家樣方の御事數々にて御座候へば筆にては難盡候。私も痛手負片輪に罷成候、以參申談度候へ共不得其意候存命仕候はゞ、時節次第掛御目委御物語可申候。彼合戰之事もざつと書付進申候。細々は書記しがたく候以上」とあり。

おほとりだいじんぐうならびにしんほうじえんぎちやう

大鳥大神宮並神鳳寺緣起帳　寫本一卷　大鳥　春相

和泉國大鳥神社、「日本武尊を祭れりとせるが、本書には天照大神を祭るとせり」及び、神鳳寺の境域緣起等を漢文にて略記したるものなり。

おほとりみやうじんえんぎ

大鳥明神緣起　寫本一卷

和泉の國なる大鳥神社の緣起大略を記したり。

おほなぎなた

大長刀　二册　水　雲　子

俳諧の集。花千句「肩入奉公」の返答なり。延寶五年丁巳〔二三三七〕六月の編にかゝる。著者水雲子は阿波國の俳人なり。

おほにつき

大日記　寫本三卷

寬永八年辛未〔二二九一〕より、天和二年壬戌〔二三四二〕に至る。日記目錄を摘錄したるものなり。傍標に月日を記入せり。

おほにつたきゝがき

大新田聞書　寫本一册　丹治　庶智

最初「大新田山名嫡流後閑」と題して、次に「新田領村岡大光院由緒」に終れり。一名を「恒足軒覺書」といふ。
◉丹治庶智は寄騎侍二十五員の一にして字を丹阿といふ。岩田恒足軒と號す。本書の外に「再校江戶砂子」六册の作あり。

おほぬさ

於本奴散 寫本一巻 中川自休

香川景樹の著といへる「桂園一枝」を批評せる秋山光彪の說を駁し、其の褒貶の不當なる、批評の狂言なることを逐條說破したるものなり。天保四年甲午(二四九四)六月二十一日の著にかゝる。
◉中川自休は望南亭と號す京都の歌人なり。洛北平野に住す。桂園門の高足にして歌學の教授を事とせり。

おほのりうはうじゆつでんしよ

大野流砲術傳書 寫本八巻

第一を初學の卷、第二を鍛練の卷、第三を玉法の卷、第四を規矩の卷、第五を算數の卷、第六を町見の卷、第七を藥法の卷、第八を大極の卷とし、大野佐五右衛門吉規、大野宇右衛門武範、白井郡平道賢等より傳ふる由奥書あり。八册に寫傳す。

おほはしき

大橋記 寫本一巻 大橋重長

永祿二年己未(二二一九)四月五日、著者が坂井右近に差し出したる數枚より成る略系なり。奥書に曰く、「今度家々系圖從御改、四家七名字之者、筋目可書上之旨依仰、大橋傳記拔書華、十一等之者、各以別紙書上候仍如件」と。

おほはしけいふ

大橋氏系譜 寫本一巻

大橋氏始祖より十代間の系圖なり。始祖大橋氏は後醍醐天皇第三の皇子宗良親王の嫡、良王、源姓を稱して尾張津島に住たり。其の子神王、後に母方の氏を稱して大橋和泉守信重と號せり。母は大橋修理亮貞元の女、卷末に貞元の家系を附記す。

おほはらき

大原記 二巻

大原紀行の文篇にて紀行「山家記」と併せて、正保四年丁亥(二三〇七)京都にて出版せり。

おほはらさんぎん

大原三吟 二册

連歌師宗祇、宗長、基佐三人の連歌四十番を編輯したるものなり。年時を記さず。

おほはらだんぎきゝがきせう

大原談義聞書鈔 一巻 僧聖覺

淨土宗の教義に關する問答筆記なり。文治二年丙午(一八四六)に、叡山の座主顯眞、高野の明遍、笠置の貞慶等、諸宗の僧侶二百餘人、洛北大原に會し、往生淨土の宗義に就て、淨土宗の開祖源空に質問し、源空之れに應して答辯したるを、世に「大原問答」或は「大原談義」と稱せり。本書は聖覺法印が親しく其問答を傍聽筆記したるものなりと云ふ。淨土宗には斯の書を珍重すれども、「淨土眞宗教典誌」の如きは、之を眞僞未決部に收めたり。筆記者に就ても異論あれど、今は姑く傳說に從ふ。斯の書を註釋せるもの古來甚多し。就中「大原談義見聞」一卷(良定述)、「大原談義纂述鈔」三卷(往譽述)、「大原談義選要鈔」一卷は、尤古く世に行はれ「大原問答辯釋」一卷(開譽述)は、上三書の解釋を簡短に摘評せり。其の外「大原問答端書」一卷(良定述)、「大原談義再三鈔」三卷「大原談義句解」十卷(了意述)、「大原談義頭書」一卷(吟譽竹翁述)「大原問答私考頭書」三卷「大原問答纂釋」十卷(佛元述)等は、詳略の差こそあれ、皆是れ本書を註釋せる者にして、「大原談義句解」を除くの外は、何れも淨土宗々徒の手に成れるものなり。
◉聖覺は、姓は藤原氏、澄憲法師の長嗣なり。靜嚴法印に從つて受學し、內外の二典に涉り、文雅の名世に高く、笠置の解脫房貞慶と聲を齊しくせり。後、源空上人に謁して、淨土念佛の法に歸依し、延曆二年乙未(一八七二)の三月に卒せり、年六十九。「唯信鈔」等の著あり。

おほはらひしつちうせう

大祓執中抄 三册 近藤芳樹

大祓を詳釋したるものなり。律令の起元を旨として、御祓と禊との差別を詳にす。內外說を折中して偏固ならざる意より執中抄とは名けたり。安政四年丁巳(二五一七)國造尊孫の序、弘化三年丙午(二五〇六)五月加納諸平の序あり。天地人三册に作る。
◉近藤芳樹の傳記は「淫祀論」の下にあり。

おほはらひのかい

大祓解 一巻 森川安範

大祓の詞を註釋したるものなり。主として漢土の古書字義によりて例を引き字を釋す。中御門天皇の享保三年戊戌(二三七八)正月の作、寛政十二年庚申(二四六〇)正月版行せらる。
◉森川安範は源姓にして、讃岐國の人、葛城慈雲和上の父なり。

おほはらひのことばごごしやく

大祓詞後々釋 一巻 藤井高尙

本居宣長の「大祓詞後釋」の誤れるところを抄出して考註したるものなり。故に後々釋といへり。播磨廣嶺神宮司源國忠の序、文化十四年丁丑(二四七七)九月榮合大枝の跋あり。
◉藤井高尙の傳記は「淺瀨のしるべ」の下にあり。

おほはらひのことばごしやく

大祓詞後釋 二巻 本居宣長

大祓の詞を解釋したるものなり。主として賀茂眞淵の「祝詞考」中なる大祓考の誤謬を論じたり。附錄には此の他の祝詞中なる種々の事をも解釋せり。寛政七年乙卯(二四五五)十一月、神祇伯資延王の序あり。翌寛政八年版本となる。
◉本居宣長の傳記は「古事記傳」の下に掲げたり。

おほはらひのことばごしやくよかう

大祓詞後釋餘考 寫本一巻 上田百樹

大祓詞後釋に更に考を加へて成れるものなり。奥書に、「一本には氣吹抄三卷多田利見欽著とありて跋に則祓辨者享保十六年夏依江戶松崎勘右衛門義克之望著之。始題祓除起源本編上中二卷者享保十八年依郡山植松老人之望著之。其後塵務繫蕪不遂下卷之功六七年今年過植松老之頻請而雨夜燈前述記之云、元文四未年三月二十三日多田利見とあり。此の書の中に云へるおもしろしと思ふふし摘出、予が思ふことをも添て大祓詞後釋餘考と題けつ。祝詞考及び後釋に云はれたるは皆省けり併べ考ふべし」とあり文化七年庚午(二四七〇)七月記すところなり。
◉上田百樹は一に姓を波伯部といふ篤學にして古書の校合に精しとて伴信友の如きも稱したり。

おほはらひのことばさいしやく

大祓詞再釋 二巻 平田篤胤

大祓詞の由來をはじめ、高山之伊穗理、短山之伊穗理の事、また鹽の八百會の事、其の他詳しく釋したるものなり。題號の意は「故鈴屋大人の後釋あるが上に再び釋出たる故にかく名けられたり」と「伊吹能舍著撰書目」に云へり。
◉平田篤胤の傳記は「古史傳」の下に掲ぐ。

おほはらひのことばせいくん

大祓詞正訓 一折 平田篤胤

仁孝天皇の天保三年癸巳(二四九三)八月平田篤胤の施したる大祓詞の正訓なり。末に「天津祝詞」「諸社祝詞文例」を附す。
◉平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

おほはらひのちう

大祓註 寫本一巻 賀茂眞淵

延喜式祝詞の中なる六月晦大祓詞一條を註釋したるものなり。
◉賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

おほはらもんだふ

大原問答 一巻 僧聖覺

淨土宗の教義に關する問答筆記にして、前に掲げたる「大原談義聞書鈔」と異名同物なり。故に、性質、年代、註釋書、筆記者等、凡て彼書の下に解題す。
◉聖覺の傳記は「大原談義聞書鈔」の下を見よ。

おほはらもんだふくわんだう

大原問答勸導 寫本三巻 僧信曉

大原問答は佛滅後三千百三十二年、吾が文治二年丙午(一八四六)秋八月七日頃、法然上人五十四歲の時の大問答にて、各法宗の優劣を論したるものなり。此の書は信曉の演說を片假名文に開書したるものにて、小本三册に作れり。今見るところは明治二十年の翻刻なり。
◉信曉は別に「涅槃像勸喩錄」を著せり。

おほまがりおぼえがき

大曲覺書 寫本一巻 大曲藤内

卷首に「九州肥前國下松浦平戶肥州御家武運長久之次第書、亂父之書おき、又申つたへ候分、殊道可樣御物語被成たる趣、子孫ともの覺の爲、あらあらに書おく者也」と低書して、末に同家六代目稻澤牛

左兵衛〔元名大曲〕が正徳二年壬辰〔二三七二〕十月の奥書あり。

◉大曲藤內は大曲三河守二代目にて、文祿年間の朝鮮陣にも數度の功ありしものにて、寛永十七年庚辰〔二三〇〇〕十二月十五日、八十九歳にて死去し、法名を喜雲源用居士といひ、稲澤半左兵衛の曾祖父にあたれる由同人の奥書中にあり。

おほまと

大的　寫本一卷

弓馬故實の書にて。歩射の的に限れる大的の事を詳說したるものにて、『弓馬叢集』の中に收む。

おほまとたいはいき

大的體拜記　一卷

大的に關する故實を記したるものなり。主人出立の儀式、着座の次第、弓の持樣、水干の紐を納る次第等、以下數十項を記す。『群書類從』卷四百十四にあり。

おほまとたいはいき

大的體拜記　寫本一卷　**小笠原持長**

『伊勢弓馬叢書』中の一書にして、三十餘條あり。もと『法量物』の卷末にありたるを分本したるなりといふ。寛政四年壬子〔二四五二〕伊勢貞春の松岡平次郎に宛てたる奥書あり。

◉小笠原持長の傳記は『犬追物集書』の下にあり。

おほまとのき

大的之記　寫本一卷

大的の大概を略記せる數枚の寫本なり。『弓術祕傳書』の中に收む。

おほまぶみ

大間書　一卷　**後三條公敎**

保元四年己卯〔一八一九〕の頃に於ける、神祇官太政官等より各國司に至る職員錄なり。『群書類從』卷百十、公事部第二十九に收めらる。

◉後三條公敎は太政大臣藤原實行の長子なり、侍從、左右近衛少將、同中將、權中納言等を歷て久安中正二位に敍し、大納言となり、左近衛大將を兼ね、保元二年內大臣に拜し、永曆元年庚辰〔一八二〇〕七月を以て薨す。

おほみかはし

大三川志　寫本百一卷　**松平頼寛**

家康の出誕より元和二年丙辰〔二二七六〕に至る七十六年間に於ける德川氏の事績を詳述したるものなり。朝廷の大事、天變地異、其の他まゝ他家の事をも略記す。書中事實の誤れるものあれど、家康の難戰敗軍等も忌憚なく詳錄したれば、又他の類書に勝れたる條多し。本書目次の首尾を云はゞ首卷には引用書四百二十六種、凡例二十二項を出し第一卷は「起神祖降誕祥瑞及御世系源姓德川氏之所由起終親氏君建基業於三州泰親君信光君世紹宏德得西三州」に始り第百卷は「起元和二年七月二日忠輝君配朝熊終東照宮諸國鎭座」に終る。

◉松平頼寛のことは『蜀經』の下にあり。

おほみなと

大湊　一册　**高田幸佐**

俳句の集。時代は記さゝれど、元祿年中の編なるべし。或はいふ、本書は其の師江崎幸和の編なりと。

◉高田幸佐は京都の俳人にして、幽竹堂と號し、蘇和菴と稱す。江崎幸和の門人にして、入船、灯下集等をも著せり。

おほみなときかう

大湊紀行　寫本一卷　**戸部良熙**

大湊は土佐國の地名。安永四年乙未〔二四三五〕三月九日より同地に遊びて十三日家に歸るまでの小紀行なり。

◉戸部良熙の傳記は『大島筆記』の下にあり。

おほみねやまごきのゆらい

大峯山五鬼之由來　寫本一卷

紀州前牛邑五鬼の由來を詳說したる小說的俗書なり。大永三年癸未〔二一八三〕四月寫本の由末記す。

おほみやりうたかのしよ

大宮流鷹書　寫本一卷　**大宮新藏人**

鷹故實六十一箇條を記す。元和七年辛酉〔二二八一〕十月、平井似仁齋寫書して、辰相虎輔に與へたる奥書を存す。

◉大宮新藏人のことは『類鷹字義』の下にあり。

おほみわしやちんざき

大三輪社鎭座記　寫本一卷

大三輪神社の緣起由來及び別宮小社の事等を記せり。末に天正九年辛巳〔二二四一〕、寶永三年丙戌〔二三六六〕同四年丁亥等の奥書あり、尚、明治七年

久保季玆、同十年內務省御用掛等の寫本奥書あり。

おほみわじんさんしやちんざしだい

大三輪神三社鎭座次第　一卷

奥津盤座大物主命、中津盤座大已貴命、邊津盤座少彦名命、以上三社の神階、祭禮、別宮小社等の鎭座次第を記したるものなり。嘉祿二年丙戌〔一八八六〕仲冬十九日と記し、『群書類從』十八の卷にあり。

おほみわじんしやがくじうつし

大神神社額字寫　寫本一折

大和國三輪社額面の字形を模寫したるものなるが、何字を崩略したるかを知らず。

おほむらかんすけいへのき

大村勘助家記　寫本一册　**大村勘助**

肥前島原の戰に關する覺書なり。先づ加藤清正高麗出陣の突名を掲げ、次に書狀二通、次に高麗歸陣の書留、次に「島原一亂家中前後の日記覺」と題し同一揆の顛末を記せり。

◉大村勘助は松倉長門守の臣にして肥前島原の役に與りて戰功ありしものなり。本書は其の經歷日記と家の古記錄とを以て作成したるものといふ。

おほものぬしのかみえきしつをおこしたまへることのかう

大物主神疫疾を起し給へる事の考　一卷　**久保季玆**

瑞垣宮の御代に三輪の大物主大神荒び給ひて疫病を起し給ひし理由を論じたるものなり。明治二十二年九月五日印刷して『やまと叢書』の中に入れらる。僅々四頁の論文なり。

◉久保季玆の傳は『古道訓蒙頌』の下にあり。

おほやかず

大矢數　二册　**紀子**

俳諧の集なり。延寶五年丁巳〔二三三七〕九月の編にかゝる。

おほやしまづせつ

大八洲圖說　一卷　**小田成胤**

大八洲の根本、神道の本元に就て論說圖解したるもの。其の自序に曰く、「伊弉諾尊、伊弉册尊、生二大八洲一、舊事紀、古事記、日本紀、所レ言二其次第一、各不同而皆有二至理一也。世事二神籍一者辨レ之不明、大神宮司主典橘成胤詳考レ之、作二大八洲之圖說一、分二其位一發二其意一」云々と。寶永七年庚寅〔二三七〇〕二月序す。

◉小田成胤は伊勢の和學者なり。桃園天皇の寶曆頃〔二千四百十年代〕の人にして、大神宮の宮司兼檢非違使たりき。

おほやしまぬぼこのせつ

大八洲瓊矛之說　寫本一卷　**伴部安崇**

大日本帝國が、天下第一の武國たることを、舊記等によりて論述したるものなり。櫻町天皇の元文五年庚申〔二四〇〇〕正月二十六日の作にて、美濃紙七枚に寫傳せり。

◉伴部安崇の傳は『一切成就祓抄』の下にあり。

おほやしまのき

大八洲記　十二卷　**鴨祐之**

卷一、二、三、四に、皇都國號、邊要、疆域、要路、貢吏、給使等の事を論證し、卷五以下卷十二に至るに、諸道各國を擧げて考證せり。

◉鴨祐之の傳記は『祭事記』の下にあり。

おほやまとじんじやちうしんじやう

大倭神社注進狀　一卷

大和國山邊郡大倭邑なる出雲杵築神社の別宮大倭神社の調査注進書なり。『群書類從』卷十八にあり。

おほやまとじんじやゆゐしよき

大和神社由緒記　寫本一卷

同社最古來の大祭日、及び同日の儀式等を略記す。今、見るところは內務省御用掛が、明治十年謄寫するところにかゝる。

おほやまのさち

太山能散遲　寫本一卷　**與野隆雄**

杉檜の播種栽培法等を詳示したるものなり。蓋し同國山林に杉檜を植うるに子實を移し植うるは著者の父興隆に始まれりといふ。嘉永二年己酉〔二五〇九〕の作。

◉興野隆雄は下野國黑羽の人、興野興隆の子なり。

おほやまふどうれいげんき

大山不動靈驗記　十五卷　**僧養智**

相模國中郡大山の山腹なる大山寺に安置せる不動明王の靈驗奇瑞百二十餘條を集錄したるものにて、寛政四年壬子〔二四五二〕の自序、及び同年僧妙海の序あり、十五卷十五册に版行せり。
◎蕤智は相模國中郡大山寺の住僧なり。

おほよこて
大横手　一册　西六
俳諧の集にて、西吟面十句懐紙入なり。編輯の年代詳ならず。
◎西六は俳人にして、別に松鶴軒と號せり。

おほよどのき
大淀記　寫本一卷　村井昌宏
伊勢の國大淀の由來沿革、及び其の名勝の地なることを記述したるものなり。諸舊記を引き又數多の和歌等をあげて精細に說けり。享保二年丁酉〔二三七七〕四月作れる自序にあり。

おぼろづきよ
朧月夜　一册　定直
著者の俳句集なり。元祿三年庚午〔二三五〇〕七月八日の編述にかゝる。
◎定直の傳記は『卯月まて』の下にあり。

おまくおうまじるしおはたもとさしものおあひじるし
御幕御馬印御旗本差物御相印　寫本一卷　井口英清
德川當代將軍の幕馬印、及び旗本の差物相印等を圖示したるものにて、寛政七年乙卯〔二四五五〕春二月の作にかゝる。

をみしやうぞくき
小忌裝束記　寫本一卷　卜部兼致
小忌裝束の事につきて略說せる四枚の寫本なり。某の舊作を明應元年壬子〔二一五二〕九月二十日、卜部兼致の修補するところなり。末に貞享四年丁卯〔二三四七〕十月二十七日紀宗恒寫本の奥書あり
◎卜部兼致は當時神祇權侍從なりき。

をみなへしものがたり
女郎花物語　三卷
女子の教誡に供せんため日本紀其の他代々の敕選集、草紙類等より著名なる女子の事實などより出でて物語に作りたるものなり。北村季吟手寫のものを三卷六册として版行す。同人の跋を添へたり。著者は藤原大貳と云ひ傳へたれど確ならず。

をみのぶ
小忌部　寫本一卷　滋野井公麗
諸家の舊記によりて、小忌の服裝に關する雜事を抄出輯錄したる有職記錄なり。參考の料たるべし。
◎滋野井公麗の傳は『禁祕抄階梯』の下にあり。

おみのみち
臣道　一卷　本居宣長
我が上古神代の事實に基きて臣道の大意を論述したるもの。卷頭に「或る人今の世に、古の道もて君に仕へ國を治めむ、心ばへはいかにあるべきと問に答へ諭す詞」と題し、末に「しまらくも直日の神を忘らすな、君とたみとの御中とるきみ」といふ歌を揭げたり。『やまと叢誌』第二に收む。
◎本居宣長の傳は『古事記傳』の下にあり。

おむろごだいだいのき
御室御代々記　寫本一册
仁和寺御室の御一世寛平法皇より、第三十世寛全法親王に至る御履歷を次第的に詳記したる者なり。

おむろせん
御室撰　寫本一卷
正治二年庚申〔一八六〇〕三月五日の當座歌合なり。守覺法親王、權中納言藤原隆房以下にて歌は六十首あり。藤原俊成の判するところなり。

おむろのにしき
御室能錦　寫本十二帖
狩野梅俊が卯歲の筆寫に係る日光廟諸彫刻の縮方仕本、天保四年狩野梅軒の駿州久能山の廟社縮方仕本等を輯めたるものなり。

おめつけがたたつしよつゞり
御目付方達書綴　寫本二册
幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。文政六年癸未〔二四八三〕のものにかゝる。

おもかげざうし
面影莊子　四卷　田中長與
孔孟聖賢の中庸に基き、莊列淸廉の論法を借りて、世の俗說を諷教したるものなり。孔孟の道に通じ、莊列の文に明なるの筆づかひ、儼に一讀すべき價値を有す。卷一に蟻鯨情蛍、彩蝶辨色、蒸蒸苦樂、地黃精鏃。卷二に始皇封松、蜈蚣自得、蓉目傳授、伏羲兩端。卷三に彭顏夭壽、金鐵論功、石臼生死、順逆兩忘。卷四に三猿會心、蚊子議和、仙術眞訣、莊子趣意等の目あり。寛保三年癸亥〔二四〇三〕正月の自序あり。同年大阪にて出版す。
◎田中長與は攝津大阪の人にして冥山と號す。別著に「大平鶴譜」一卷あり。

おもひでぐさ
思出草　六册　神田貞宣
著者の俳諧集にして、寛文元年辛丑〔二三二一〕五月下旬編輯したるものなり。
◎神田貞宣は江戶の俳人にして、通稱佐兵衞、初の名は貞翫、花樂軒、紅葉軒、蝶々子等の號あり。安原貞室の門人にて、外に、物忘草、たちきさ、松茸草、巳巳巳巳、當世男、朋友集等の著あり。

おもひでぐさ
思出艸　寫本一卷　無心道人
著者の和文隨筆にて、中間和偈と稱し思ひ出といふことを詠み入れたる四十餘首の歌を擧げたり。卷末に寛延二年己巳〔二四〇九〕僧善超の奥書あり、此の書の由來を考證し、無心の歌集「年なみぐさ」二十册中の末の一帖なりといふ。今見るところは寶曆五年乙亥〔二四一五〕敬道の寫本なり。

おもひでぐさ
思出草　寫本九册　津村正恭
寛政四年壬子〔二四五二〕江戶より攝州難波に遊歷したる時の紀行なり。先づ東海道を下りて、京大阪に七箇月餘滯在し、更に甲州路を經て江戶に歸る。其の間の經過するところ、大小となく見聞に任せて筆錄したるものなり。最後に三浦の記を揭ぐ。相州三浦に遊びたる時の記なり。寛政六年甲寅〔二四五四〕源和鼎の序あり。
◎津村正恭は三郞兵衞と稱し、敬定と字し、淙庵と號す。津村の姓を囲また貞と書したるものあり。歌人なり。もと京都の人にして、江戶に出で、佐竹侯の用達となる。著書は別に『片玉集』十四卷あり。文化三年丙寅〔二四六六〕五月十六日歿す。築地本願寺中善宗寺に葬れり。

おもひでぐさ
於茂祕傳草　一卷　伴林（バンバヤシ）光平
種々智識道德に關する和文隨筆なり。其の題目を擧ぐれば、以筆比桙、學問要路、君子名義、湯武弑簒、一朝一夕、和戰當否、良工醫國、勇怯勝敗、讀書利害、讀書準的、悟他自序、物無兩全、神國文武、文武左右、文武不二、內外無別、善惡混名、忠逆異名、妖怪神異、死生隨神、家狗噉主等四字題二十一項より成る。文久二年壬戌〔二五二二〕四月の著、明治二十二年十二月『やまと叢誌』中に刷入す。
◎伴林光平は攝津の人、通稱を六郞といひ、蒿齋、又斑鳩隱士等の號あり、幼にして眞宗の僧となり法號を周永と稱す。稍長じて國學の硏究に志し、又還俗して光平と名付け、大和斑鳩村に住して國學和歌の硏究に從事し、古史舊典百家の書に通ず。嘉永癸丑以來幕議の因循を排し、尊王攘夷を唱へ、侍從中山忠光の軍に從つて强敵を敗り、後、奈良奉行屬吏の爲めに縛せられて獄に下り、元治元年甲子〔二五二四〕二月十八日、同志の士二十餘人と共に刑殺せらる。時に年五十二。

おもひのまゝのにつき
思儘日記　寫本一卷　藤原良基
御代の安穩をよろこびて朝廷の儀式例などを思ひのまゝにかきつゞりたる雅文なり。奥書に「此の日記は春日の神の御つげなれば、見む人よろづの願ひかなひ、思ふ事あるまじと人のしけんにて侍とかや」とあり。横綴三十一枚より成れる小册子なり。『群書類從』卷四百八十九、雜部第四十四にも收めたり。
◎藤原良基の傳記は『菟玖波集』の下に揭ぐ。

おやかたごじやうきやうにつきしよとめき
御屋形御上京に付諸留記　寫本一卷
文久二年壬戌〔二五二二〕九月、屋形上京に付きての沙汰準備道中等の始末を記錄したる横綴一小册子なり。

おやくしやゆゐしよがき
御役者由緖書　寫本一册
能役者一增又六郞以下猿俤右衞門に至る數人の由緖來歷を記したるものなり。

おやくしよしんきごふしんとりはからひかた
御役所新規御普請取計方　寫本一册
幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるもの

にして、享和元年辛酉(二四六一)のものなり。

おやくにんまんねんろく

御役人萬年錄　寫本一卷

天正以來元文に至る德川幕下諸役人の名目年月等を記したるものなり。本書はもと下卷のありしものなるべし、卷首に「萬年錄上卷目錄」とあり。

ならがはる

ならが春　一卷　小林　一茶

俳文俳句の集。著者自筆の稿本を嘉永年間に刊行したるものなりといふ。近年發行の俳諧文庫第十一編「一茶大江丸全集」にも收む。

◉小林一茶の傳は「一茶發句集」の下にあり。

ならでがま

遠羅天釜　二卷

佛法の精進工夫相續不斷の功德に關する說明にて、著者が門徒と往復したる書簡なり。上卷は「答鍋島攝州侯近侍書」四十一枚の書なり。延享五年戊辰(二四〇八)の作。下卷を續集として、「答念佛興公案優劣如何之問書」二十五枚と、參學衆の漢文に記したる「答客難」八枚の文とを揭げたり。書名遠羅天釜は、著者が平日用ふる所の茶銚の名なりといふ。何の義たるかを知らず。寬延四年辛未(二四一一)校正者慧梁の末記あり。著者の名は「沙羅樹下闡提老衲」と記せり。

おらんだあぶらしゆゆはう

阿蘭油取油方　寫本一卷

藥用に供するに、諸種草木鳥獸の脂油を取り、及び應用する等の阿蘭陀法を記したる橫本なり。末に推名義賴といふものゝ寶曆六年丙子(二四一六)二月の末記あり、「河合先生給之」と記す。

おらんだいじもんだふ

阿蘭醫事問答　二卷　杉田　公勤

建部清庵、杉田玄伯兩人の假名文往復書牘を編錄したるものなり。恐く和蘭陀醫法にかゝる。此の書もと「蘭學問答」、「瘍醫問答」等稱したりしを、寬政七年乙卯(二四五五)六月改題して發行せり。同年大槻茂質の序、同六年槐園宇晉の序等あり。

◉杉田公勤、字は伯元、また士築といひ、紫石、嫡東居士等の號あり。もと一關藩建部清庵の第五子なりしが、杉田玄伯の門に學び、請はれて其の養子となり、能く家業を修め、養父の志を繼ぎて、蘭醫たり。文化六年幕府の命によりて、其の所識蘭書及び譯本の地理書を獻じて、銀を賜りたることあり。性素朴にして着實なり。天保四年癸巳(二四九三)五月廿一日、七十一歲にて歿す。一子あり泰卿といふ。

おらんだうまのりかたきゝがき

阿蘭陀馬乘方聞書　寫本一卷

阿蘭陀馬の由來種類より、其乘方、馬具の一切を聞書し、馬疾の療法藥法までを詳說す。全編百餘目すべて假名文に記せり。

おらんだうまれうぢのほん

阿蘭陀馬療治之本　寫本一冊

阿蘭陀馬醫法にして、療法藥法等を假名文に譯述したるものなり。最初二枚目の末に「此二丁寫本脫之、寬政九年丁巳(二四五七)以中川飛驒守本補寫之」と細書せり。原本の編述時代詳ならず。

おらんだうまれうぢわげ

紅毛馬療治和解　寫本一卷

紅毛國に於ける一切療馬法を和解したるものにて、凡て七十四條あり。「弓馬雜纂」の中に收む。

おらんだゑいぞくれきわげ

阿蘭陀永續曆和解　寫本一卷

名の如く阿蘭の「永續曆」を和解したるもの、「中古叢書」第八十一に收む。

おらんだかうやくはう

紅毛膏藥方　寫本一卷

阿蘭陀國の膏藥製法用法及び其の功能等を說示せるものなり。

おらんだがたしやうばいおぼえちやう

阿蘭陀方商賣覺帳　寫本一冊　西　吉太夫

正保五年戊子(二三〇八)より、享保三年戊戌(二三七八)まで年々入國せる阿蘭船の入港數、及び每度に於ける交易錄高等を記したるものなり。享保四年己亥(二三七九)五月十九日差し出したる書なり。

◉西吉太夫の傳は「諸國土產書」の下にあり。

おらんだかひづ

阿蘭陀貝圖　寫本一冊

阿蘭の諸書中より貝の種類を傳寫したるものなり。其の數凡て六十七あり。

おらんだきき

阿蘭奇器　寫本四枚

四枚連續したる、船、沈水器、水練具等の小彩色圖なり。天保五年甲午(二四九四)六月二十九日阿蘭陀船長崎へ入港の時寫して奉行より幕府へ差出したるものなり。

おらんだざつわ

紅毛雜話　二卷　桂川　中良

和蘭人の物語にきゝて、萬國の草木、禽獸、鳥魚、器物等の圖說、及び奇聞異談等を輯錄したるものなり。天明七年丁未(二四四七)出版す。

◉桂川中良の傳記は「桂林漫錄」の下にあり。

おらんださんぶつづかう

和蘭産物圖考　五卷　藤　元良

同國の人情風俗、及び動物を圖說したるものなり。寬政九年丁巳(二四五七)友人箕山熊尙之の序、秋里籬島の序等あり。著者藤元良は伊勢の人なれど、今詳傳を得ず。

おらんだしよさうあぶらとりやうのこと

阿蘭陀諸草油取樣之事　寫本一卷

阿蘭陀諸草の油取法を、油酏劑、油取樣、水之取樣、藥酒之造樣等に區別して略說せり。

おらんだじんぎやうさ

阿蘭陀人行作　寫本一卷

本書は「異國和解」五卷中より、其の第五卷たる阿蘭陀の卷を抄出したるものなり。多少の前後を見るべしと雖も、全體の上に於て、異同する所は少かるべし。

おらんだせんうかせかたいつけん

和蘭陀船浮方一件　寫本一卷

寬政十年戊午(二四五八)十月十七日、和蘭陀船長崎に沈沒したる時、官民百方手を盡して遂に浮き上がらしむるの望なかりしを、防州都濃郡串ヶ濱の船頭村井喜右衞門といふもの、勇膽義俠、自費を以て、之れを引き揚げたる顚末、官賞及び蘭人謝意の事等までを詳記したるものなり。この事は既に「一宵話」の中にも記載し、此の時の始末は繪圖にして傳へたるもあり。因に記す。右村井喜右衞門の子孫は、今尙同地にあり、家富有なるまゝに、明治の近年に至り、右事績に關する紀念碑にても建てばやと發企し居れる由なり。

おらんだぞくわ

紅夷俗話　寫本二卷　司馬　江漢

紅夷は別に喎蘭陀、和蘭陀、阿蘭陀等に譯字し、また陀を省きて、和蘭、阿蘭とも書せり。本書は同國雜事を記したるものにて同國學術の進步を稱し、其の器械、食貨、醫藥等の百事を贊して、和漢の學者の排夷論を攻擊したり。寬政十年戊午(二四五八)の作なり。

◉司馬江漢の傳記は「畫圖西遊譚」の下にあり。

おらんだつうはく

和蘭陀通舶　二卷　司馬　江漢

第一卷に五大洲總說を舉げて、土地、風俗、氣候、人物、氣質、衣服、飲食、產業、作事、土產、器械等の事を論じ、また地球總說、西洋畫法、銅版、天象、地理等を揭げ、第二卷に和蘭陀の土地、人物、風俗、器械、物產等の事を記載せり。凡例中に嚮に著したる「銅版地球全圖」に小說を附したれど、圖面狹小にして諸州の形勢大概にす、こゝに舶來の諸圖を模刻して此の書を成せれば「銅版地球全圖」と併せ見るべき由を云へり。文化二年乙丑(二四六五)の作。山本北山の序あり。

◉司馬江漢の傳記は「畫圖西遊譚」の下にあり。

おらんだてんちりやうきうしゆほせいざうき

阿蘭陀天地兩球修補製造記　寫本一卷　馬　道良

阿蘭陀國渡來の天地兩球を修補製造したる記なること名の示すが如し。此れを對照說明して同器の箱內に貼附したるものなりといふ。寬政七年乙卯(二四五五)六月の作。

おらんだわやくこうしふ

和蘭陀和譯後集　寫本一卷　青木　敦書

和蘭陀語四條を和譯したるものにて、既に後集といふ、必ず前集ありしなるべし。此の書は延享元年甲子(二四〇四)春三月十一日の自跋あり。

◉青木敦書の傳記は「昆陽漫錄」の下にあり。

なりなりぐさ

折々草　寫本四卷　建部　凌岱

著者の和文漫筆なり。卷一に大和山城の宮蹟をいふ條より、峰の蜜になりしをいふに至る十四。卷二に姨捨山をいふより、若狹の國に主人の兒にかはりて犬に喰殺されし女をいふに至る十。卷三に明和七年秋の事をいふより、一もとすゝきをいふに至る六。卷四に若狹の國の老女をいふより、大高子葉俳人汀沙をつかひしをいふに至る七條あり。册を春夏秋冬に分ち、各上下に分てり。卷末に享和二年壬戌(二四六二)杏華園の奥書あり。

◉建部凌岱の傳は「歌文要語」の下にあり。

をりたくしばのき

折たく柴の記　三册　新井　君美

自家の經歷雜感を知したる和文の自傳記なり。其の自序中にも「今はいとまある身となりぬ。心に思ひ出る折々、過ぎにし事ども、そこはかとなく記し置きぬ。外ざまの人の見るべきものにもあらねば、ことばのつたなきをも、事のわづらはしきをも、撰ぶべしやは」云々といへり。『折たく柴の記』の名は、後鳥羽天皇の「思ひ出る折りたく柴の夕けぶり、むせぶも嬉しわすれがたみに」とあるにとれるものなるべしといへり。自傳を記したる書は古來稀なる所、和文學者にして、しかも遒勁なれば、著者の事績當時の事情等を知るの外に、文章上の標範として見るべし。卷末に「筑後守從五位下源君美正德六年丙申(二三七六)五月下澣筆を絶つ」と記せり。

◉新井君美は江戸の人にして、在中また濟美と字し、白石、紫陽、錦屏山人、天爵堂、勿齋等を號とす。幼にして穎敏、神童の稱あり、父正濟久留里侯土屋利直に仕へ、其の嗣賴直無賴なり、因て諸臣の廢立を謀るものあるに座して、父子共に禁錮せらる、白石是れより節を折りて讀書を事とし、家貧するに從て學益勉め、經史百家通ぜざるなく、後木下順庵の門に學び、强記該博を以て推重せらる。天和二年古河侯堀田正俊に仕へ、元祿六年德川家宣の甲府邸に召されて儒官となり、侍講の命を受く。時に年三十七。眷遇甚だ渥し。寶永六年、家宣將軍となるに及び、侍講たること舊の如く、文學を以て帷幄に參し、獻替する所頗る多し。從五位下筑後守に敍任せらる。其の漸く老ゆるに及びては志を時事に絶ち、專ら著書に從事せり。著すところは皆、世用適切の實說にして、道義、敎育、經濟等一も社會の實用に當らざるものなし。一世の碩學なり。享保十年乙巳(二三八五)五月十九日、實に六十九歲にて歿す。淺草本願寺內報恩寺に葬あり、正面に「新井源公之墓」と記し、側面に「筑後守從五位下諱君美年六十九享保十年五月十九日卒」と刻せり。其の著書を擧ぐれば。東雅、東音譜、花押藪、本朝軍器考、本佐錄考、列朝實錄、小牧戰話、藩翰譜、藩翰譜系圖、神祖法意解、折たく柴の記、古史通、同或問、讀史餘論、方策合編、百家編、五色筆、新令句解、癸巳三月議、進呈案、續方策合編、長崎御用書物、以酊庵事議艸、將軍宣下三十一度儀不同次第、經邦典例、田制考、貨幣考、車輿考、冠服考、樂舞考、職官考、聖像考、人名考、三家考、決獄考、木瓜考、文字考、俳優考、玉考、樂考、樂對、地名河川兩字通用考、殊號事略、外國通信事略、本朝寶貨通用事略、高野山事略、琉球事略、蝦夷事略、鎌倉事略、九州事略、金幣事略、火器事略、骨董錄、白石詩艸、白石餘稿、停雲集、白石艸集、新井家譜、新井家系、古器圖、集古圖說、孝德天皇白雉圖、黃白問答、黃白問答後編、車服制度手記、山科殿白石問答、高倉殿白石問答、倭地形類、那須國造碑考、五十四郡考、奧羽海運記、江戸道聞、日本行程考、蝦夷志、南島志、西洋圖說、采覽異言、殊方通信錄、西洋紀聞、西洋人物集、西學推問、西學考略、和蘭紀事、阿蘭陀風土記、座間筆語、江關筆談、朝鮮之話、朝鮮禮聘事、聘事文案、國書復號紀事、國書文通考、詩經圖、經說、史論、史疑、大極圖述、孫子兵法擇、孫子兵法、副言、文公家禮考、五服圖、鬼神論、辨疑錄、語助集解、舜水解疑、珊瑚網、說死粹、鷄肋稿、天爵堂漫抄、畫工便覽、一帆集、空華集、屏風贊、品革威考、日本紀神代卷考、日本紀論、岩松氏系譜考、朝鮮信使進見儀注、書契文談、書契文通考、姓名考、准后考、𦾔家朝臣古圖考、高子觀遊記、奉命敎論、朝鮮信書式、應接事議、聘事後議、鴻臚筆談、陶情集、市舶議市舶新例、改貨議、改貨後議、眞珠船、藪園錄、雜錄、退私錄、紳書、紺珠、白石遺文、白石遺稿、續善隣國寶記、本朝河功略記、畿內治河記、新安手簡、新安手簡續篡、白石手簡、牧諭諺解、國郡字考等なり。

をりどめ

新益大全をりどめ　六卷

「新益京羽二重織留大全」と內題して、山城郡名、八郡村名、遷都時代以下數十項、山城國中の名所舊蹟、地理的事項擧げて漏すことなし。寶曆四年甲戌(二四一四)改版して、小本橫綴六册に作る。

をりふしのふみ

をりふしのふみ　二卷　竹村　茂雄

中古以來諸家の消息文を部類編輯したるなり。下卷は追加にして、二卷凡て三十九編を收む。凡例あり、間宮廣鄉の跋あり。

◉竹村茂雄の傳は「千町能拔穗」の下にあり。

をりめだか

折目高　一册　輕芦

著者が俳句の集にて、東山天皇の寶永三年丙戌(二三六六)京都にて出版したるものなり。著者輕芦は肥後の俳人なり。

おるからきぬ

和歌綸入織からきぬ　六卷

人生日常の行爲につき、經書中の意をとりて悉く三十一文字の和歌によみ出でたるものなり。「露の經霞の緯に織りはへて、花の錦の名にぞたちぬる」といふ古歌によりて名を撰べりといふ。寶永二年乙酉(二三六五)閏四月二十五日、著者六十九歲の自序あり、版下も自ら書するところなりといふ。翌三年六册に出版す。

おるすゐつとめかたてびかへ

御留守居勤方手控　寫本　五册

萬延以下文化、文政、天保安政間の御留守居勤方の先例また當時の事實等を書き留めたるものにて、條項百數十あり。橫綴五册に作る、今見るところは轉寫本なり。

おろかおひ

おろかおひ　一卷　足代(アジロ)　弘訓(ヒロノリ)

古今饑饉の狀況を述べ、救荒食物の製法等を記したるものなり。天保四年癸巳(二四九三)十月の著。

◉足代弘訓の傳は「寬居(ユタヰ)問書」の下にあり。

おろしやじんえぞちらんき

俄羅斯人蝦夷地亂記　寫本　三卷

文化前後俄西亞人の屢々我が國に渡來したる次第を記し、更に蝦夷に於て掠奪等を爲したることを揭載したり。

おろしやじんおうせつまうしあげしよ

俄羅斯人應接申上書　寫本　一卷

文化三年丙寅(二四六六)俄羅斯人蝦夷地へ渡來したる時の始末を具して時の係役より上申したるものなり。

おろしやじんくなしりどらいき

俄羅斯人吹奴陸喇渡來記　寫本　一卷　奈佐瀨左衞門

文化八年辛未(二四七一)五月東蝦夷地吹奴陸喇島へ俄羅斯人渡來せる時の始末記なり。

◉奈佐瀨左衞門は松前奉行支配調役吹奴陸喇場所に出勤せり。

おんいばはじめしだい

御射場始次第　寫本　一卷

伊勢弓馬叢書の中の一書にして、正月十七日御弓場初次第を詳說したるものにて、數十條あり。寬政四年壬子(二四五二)閏二月十三日伊勢貞春、松岡平次郎へ免傳寫の奧書あり。

おんゐんかうしよう

音韻考證　寫本　二十二卷　黑川　春村

漢吳音圖に基きて、漢字音の古今正訛を考論したるものなり。凡例中に曰く、「春村いまだ若かりしほど、太田氏の漢吳音徵を見しより、其の委曲なる心づきに驚駭き、其の後は見るに從ひ、筆にまかせて爪じるし爲しつるが、三十餘の歲月を經しかば、いつしか机上に積りにたるを、此の頃はからざる心のすゝみに、此の稿草をば思ひ起るなりけり。字音は一字に衆音ありて、漢音あり、吳音あり、漢吳に拗、直、疾音あり、上略、中略、下略音あり、又古音あり、今音あり、轉音あり、轉韻あり、鄉音あり、唐音あり、倭音あり、訛音あり、如此許多の音ありといへども、古音、今音、以下の衆音は、卷中に、皆一音と標して、古今轉訛の紛らはしき類は、偶、其の字下に註するを見るべし」云々といへり。文久二年壬戌(二五二二)五月成りたりといふ。本書一名を「皇國譯音」また「皇國釋音」といふ。

◉黑川春村は「神名帳考證土代附考」の下に傳す。

おんゐんかなづかひ

音韻假字格　寫本　一卷　關根　爲寶

字音の假名の定說を示したるものなり。基くところは、菅原古人の「音韻略」、釋安然の「音韻格」等なりといふ。

◉關根爲寶のことは「假名類纂」の下にあり。

おんゐんかなようれい

音韻假字用例　二卷　白井　寬蔭

本居宣長の著せる「字音假字用格」中の如何しき點を抜きいで、又、僧義門の字音訛をも取り出でて論じたるものなり。「撥る韻の假字の事」といへるより、「字音呼法の事」といふ凡そ七十二項に分ちて詳細に字音假字の用例を論じたり。著者は其の卷頭に言ひけらく、「安永の始に鈴屋翁、字音假字用格を著されたる、其の心づきいひしらすめでたく、古の書どもを徴として記されたれば、今は大かた字音の假字を書かむとするには、かならず規矩とすべきこととなりぬ。然れども其の多かる中には、猶考へもらされたるも、或は思ひひがめられためるも、さはいへど少からず、さるが中にも殊に甚しき僻ごとなるは、撥る韻の假字どもを、凡てむとのみ定められたるなり、猶、其の他にも、誤れりとおぼしきをおちく\、今彼書字音假字用格を抜いでて、つばらかにことわらむとす、又故義門法師が、此の書の餘論を書かれたる中にも、いかにぞやかたぶかるゝふしなきにしもあらねば是れはた聊か抜きいでて辨へんとす、抑假なき質の金玉の中より、たまく砂石を見出たりとて、したり顔に論らはむは、かたはらいたきしはざなれど、大人の書きおかれたる玉勝間を見たるに、もし考へ誤れる僻ごとあらば、ふたゝび改めたゞしてよと見え、太田翁の漢呉音徴にも、略陳二所由一以竢二來哲是正一焉と見えたれば、今しもかく論らふを、翁たちの天かけれらむみたまも、さのみはにくみ給はじとてなむ」と云へり。萬延元年庚申(二五二〇)閏三月鏤梓。著者白井寛蔭は黒川春村の門人なり。

おんゐんけいもう

音韻啓蒙　一卷　鳥海恭

音韻に關する論述にて、其の目を擧ぐれば、總論、四聲清濁輕重の事、五十音排列の事、五音出生の大體をいふ事、未成普通のハヒフヘホ、成音のハヒフヘホ、半濁音のハヒフヘホ、清音のパピプペポ、濁音バビブベポ、拗音のファフィフゥフェフォ、五十音排列に從ひて合音する大抵の事、世界萬國同音の事、文字の事、音韻妙用の事、音轉に因て木撥の異音を同一にすること、用字の格は歌文より外に用ふべからざる事、音韻の理は知らずばあるべからざる事等なり。文化十二年乙亥(二四七五)四月、龜田鵬齋の漢文序あり。小泉雄周校正して同十三年發行せり。

◉鳥海恭は仲默と字し、松亭と號す。

おんいんざつかう

音韻雜攷　寫本　一卷　木村正辭

文字の音韻の事につきての、種々の考論なり。

◉木村正辭の傳は「萬葉集美夫君志」の下にあり。

おんゐんりやく

音韻略　寫本　一卷

韻頭の字に、漢呉音の直拗を眞假名にて記したるものなり。奥に、「音韻家訓可祕、戊戌春日、古人記」と書せり。これによりて、菅原古人の撰と云ひ傳ふれど、眞僞未だ知るべからず。

おんゑいろく

恩榮錄　寫本　三卷　小田彰信

慶長五年庚子(二二六〇)美濃關ヶ原軍後の、諸侯以下の領地秩祿等を詳細に列擧したるものにて、三册に寫傳す。

◉小田彰信の傳は「廢絶錄」の下にあり。

おんがくざつさ

御樂雜々　寫本　一卷

最初定輔卿の音樂奉授の記より花山院右大臣記、長宣卿記を掲げ、長祿二年十二月十七日後花園院御灌頂の記、明應二年九月二十六日の同記、應永十九年壬辰七月十日親王御箏始の記、文明七年四月二十日宮御方御箏始の記、同八年四月十五日若宮御方御詠草の記、同九年十二月二十三日若宮御方蘇香御傳授の記、同十年十一月二十一日若宮御方萬秋樂曲御傳授の記、其の他一二の記を寫し集めたるものなり。

おんがくさんじやう

御樂散狀　寫本　一册

文明十七年乙巳(二一四四)九月二十一日の御樂。後柏原天皇の永正十五年正月十六日以來の、同十六年九月二日以來の、天文十四年の十二箇月其の他の御樂次第を記錄したるものなり。

おんがせんく

御賀千句　一卷

寛保三年癸亥(二四〇三)二月、將軍家六十の賀の連歌なり。昌廸、昌訊、昌長、昌恭、具阿、通貫、幸塑、玄蜃、元高、信領、眞亮、昌郁、主信。以上十三人の千句なり。

おんからかさ

御傘　五卷　松永貞德

本名「俳諧御傘」(はいかいごさん)の下に解題せり。

おんぎかうろく

音義講錄　寫本　一卷　堀秀成

我が國五十音の義を例解したるものなり。其の一例をいへば「伊」の音は、立ちのぼる象、滿ちたる象、成り調ふる象、寄せ付くる象、ちから入る象等の五に分ち、其の「立ちのぼる象」の例證には、息、勇、嚴、碇、怒、烏賊、毛毬、苛、其の他等を擧げ、「滿ちたる象」には、池、充滿、云、概を擧げ、「成り調ふ象」には石、家、今、飯を擧げ、「寄せ付くる象」には、色、いろは、いろれ、いろと、いろせ、誘、抱、綺、述等を擧げ、「ちから入る象」には、祈、甚、致、徒、泣、嘶、爭、排、厭、營、暇等の例を擧て證明し、又まゝ古歌、古文等を引用す。

◉堀秀成の傳記は「言靈妙用論」の下に掲ぐ。

おんきやうゐんじつき

温恭院實紀　寫本　十五册

德川十三代將軍家定(諡號温恭院)の實記にして、大小の事實を記す。嘉永六年癸丑(二五一三)七月より、毎月に闕脱なく安政四年丁巳(二五一七)十二月に至れり。帝國圖書館に貴重品として藏す。

おんきやうこうふ

温恭公譜　寫本　一卷

德川十三代將軍温恭院家定一生間の年譜なり。

おんきよくくでんしよ

音曲口傳書　一卷　竹本播磨少掾

淨瑠璃の原始、附り師傳段々の由來、淨瑠璃の工夫の事、附り音聲大小の事等より、たしなみといふ事に至る十五條。門人順四軒の爲めに口授したるものといふ。明和八年辛卯(二四三一)男、中江屋長右衞門の序、順四軒の跋あり。安永二年癸巳(二四三三)出版す。

◉竹本播磨少掾は初め中紅屋(ナカモミヤ)長四郞と稱す。幼にして淨瑠璃を好み、筑後掾の弟子となり、修業して其の奥に至り、師に竹本の姓を受け、遺言によりて名蹟を續ぎ、また二代目義太夫と改め上總掾となり、元文二年播磨少掾喜教と改む。後人淨瑠璃中興の祖と稱す。延享元年甲子(二四〇四)七月二十五日、五十四歳にて病歿す。大阪天王寺領國恩寺に葬り、碑を天王寺の西門側に建つ。

おんぎよくはなげぬき

音曲波奈希奴幾　一卷

淨瑠璃稽古に關する諸件を記したるもの。例せば、操芝居の辨、稽古仕樣、稽古の心得、聲を熟するの辨、外連決といふ論、無理當自然の辨、素人より太夫に成る辨等より、以下二十三條、淨瑠璃語る節身構の事、節に四季ある辨、出妙丸金龍丸(聲を出す妙藥)等に至れり。寛政三年辛亥(二四五一)太瓶樂居の序文に、耳鳥齋主人の作といへり。同九年大阪にて出版す。

おんきよくひやくしゆ

音曲百首　寫本　一卷

音曲祕傳事項を百首の和歌に詠出したるものなり。例せば、「音曲の道とやならんもしほ草、書きあつめたる手すさみの蹟」より、「音曲は夕の月にまとひ出て、末は闇路に迷ひこそすれ」に至る百首にて、次に五韻直拗二音之圖歌百首あり。「輕かろし重おもくなる淸み濁める、濁りにこるなり上の字による」より、「世間にあらゆる神もきこしめせ、鼓打とは思はざりけり」に至る。永祿三年庚申(二二二〇)五月十三日同じ人の作なるべきか。

おんくらまいわりつけ

御藏米割付　一卷

藏米を金高に配當する便法を記し船株の定量運賃各國一俵の定量等を記したる小本なり。天明四年甲辰(二四四四)鶴屋喜右衞門の出版なり。

おんぐわいせきでん

御外戚傳　寫本　六卷

德川氏の外戚系圖なり。家康の外祖母より始まり有德院の母、紀伊光貞の母等に終る。單に朱線を以て系圖を記したるなれば、傳といへども事實を記したるにはあらず。

おんくんかなづかひ

音訓國字格　二　高井伴寛

假名遣のことを主として説きたるものなり。其の目を擧ぐれば、大意、朝鮮伊呂波、日本の文字、和蘭伊呂波、音訓、縱横相通五音五十字、日本國字伊呂波、五音分配、片假字伊呂波、梟胥翻譯、日本古假伊呂波、漢音呉音、唐土伊呂波、天竺伊呂波、反切、四聲七音清濁、日本國字反切、日本之四聲丼發字、唐音華音、國字音格、國字訓格等なり。寛政十一年己

未〔二四五九〕江戸に發行したるものなり。
◉高井伴寛の傳は「孝子敬鈔解」の下にあり。

おんくんかなのしをり
音訓假字栞　一卷　花垣　幸國
假名遣、字音假名遣の事を略說したるものなり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕の著。源佳球、田付寛等の序あり。
◉花垣幸國の傳は「雛後言」の下にあり。

をんこうしちこくしやうぎづ
溫公七國象棋圖　一卷　菊地　武愼
司馬溫公の作と傳ふる、七人象棋の圖說を、假名文に譯述したるものなり。其の象棋法は七人一局を圍むべく、或は三人五人にて二國三國を兼ねて行ふべく、一國の代表者一手づつを下し、七手にして始にかへる、合縱連衡を旨とし、王室を尊び、覇を卑み、與國を親み、患難相援ひ、禮義を重ずる事を表して戲作したるものなり。安永四年乙未〔二四三五〕武愼の自序跋、龍洞主人〔眞田幸豐〕の序、岡野融、王遜民、の序、鞠子方正の跋あり、同五年出版す。
◉菊地武愼の傳は「南陽先生四部論」の下にあり。

をんこうしちこくしやうぎづこくじかい
溫公七國象棋圖國字解　一卷　菊地　武愼
司馬溫公の作と稱する「七國象棋圖」を和譯したるものなり。安永四年乙未〔二四三五〕滋野幸豐、岡野融の序あり、翌五年出版す。前掲「溫公七國象棋圖」と表題を異にせるのみ。

をんこえうりやく
溫故要略　五卷　僧　盤察
俗間の故事俚諺の出據等を考說したる雜錄。享保七年壬寅〔二三八二〕の自序を附して同年出版せり。
◉盤察の傳は「除睡鈔」の下にあり。

をんこさいいはやきかう
蘊古齋磐谷紀行　一卷　松弘　毅
某年乙酉歲、著者河內國磐谷に遊びたる時の紀行。詩二十餘首を卷末に附せり。
◉松弘毅は大阪の人にして、士道と字し、蘊古齋と號す。

をんこさいきんぷ
溫故齋菌譜　一卷　佐藤　成裕
本邦諸州産の菌類を圖說したるものにて、其の數凡そ五十餘種あり。
◉佐藤成裕の事は「飼籠鳥」の下にあり。

をんこさいごずゐへん
溫故齋五瑞編　一卷　佐藤　成裕
香蕈の製作法を說示せるもの。卷を木、斫木、浸水、萌蘖、火乾の五章に分ち記せるより、五瑞編と名づく。著者は諸州を漫遊して、香蕈製法を傳へたる人なり。
◉佐藤成裕の傳は「飼籠鳥」の下にあり。

をんこさいしんし
溫故齋蕈志　一卷　佐藤　成裕
人參の培養法、氣味、忌禁等を記したるもの。寛政七年乙卯〔二四五五〕の著なり。
◉佐藤成裕のことは「飼籠鳥」の下にあり。

をんこしんしふ
溫故新集　五册　小笠原長時
萬媒の次第、喰初の次第、萬請渡の次第、書札禮等の禮式作法を記したるものにて、今見る五册は殘闕本に屬せり。
◉小笠原長時の傳記は「元服之次第」の下にあり。

をんこしんしふきゝがき
溫故新集聞書　寫本　五册
「溫故新集」の講說を聞書したる小笠原流の禮式書なり。本書は五六を一册にして六册に作り、今見る所其の中三の卷一卷を脫せり。

をんこずゐひつ
溫故隨筆　寫本　一卷　小野　高尙
本邦の古事を、古書に考へて雜記せり。明和七年庚寅〔二四三〇〕劉維翰の序、小野高潔の跋あり。
◉小野高尙の傳は「古今類聚名諱集」の下にあり。

をんこせう
溫故抄　寫本　一册　野宮定基
束帶之具、冠、袍、下襲、半臂、袙、單、大帷、表袴、赤大口、襪、笏、扇、帖紙、横刀、平緒帶、魚袋履、弓箭等の事を記せり。寶永元年甲申〔二三六四〕仲冬の自敍あり。
◉野宮定基の傳は「有職問書」の下にあり。

をんこせんゐ
溫古荃彙　一卷　墾田（ハルタ）　永年
本邦の革制を細論したるものなり。目を素革部、骨革部、色革部、糊革部、甚革部、紋革部、黑革部等の七部に分ち、各古器に徵し、舊記に據り、其の名稱、染色、紋方、用法等に至るまで詳しく記したり。寛政七年乙卯〔二四五五〕の作にして、江戸須原屋茂兵衞發行す。
◉墾田〔春田〕永年の傳は「延喜式工事解」の下にあり。

をんこだうざうしよもくろく
溫故堂藏書目錄　寫本　六卷
神祇部二百廿二部、四百〇九卷。國史部二百十二部、三千五十三卷、記錄部百四十九部、千三百四十三卷。補任部四十一部、百八十三卷。系譜部七十四部、四百七十五卷。傳記部百三十六部、六百五十四卷。官職部三十三部、八十六卷。律令部三十六部、三百八十三卷。公事部百六十二部、八百七十七卷。裝束部六十部、百十六卷等の書目にて書名と卷數とを揭げたり。卷頭の目次には、此の次に文筆、往來、語錄の三部目あれど、書中今之れを闕けり。

をんこだうしかう
蘊古堂詩稿　寫本　六卷　上柳　美啓
卷一に五言古風五十。卷二に七言古風四十。卷三に五言律百五十、五言排律十三。卷四に七言律百十二。卷五に五言絕句七十四、六言絕句十三。卷六に七言絕句百五十首を收む。六卷一册に寫傳す。
◉上柳美啓は平安の人にして、公通と稱し、蘊古堂と號す。

をんこちしんしふ
溫故知新集　寫本　十卷
德川幕府の寺社奉行所に關する雜錄なり。後水尾天皇の寛永年中より中御門天皇の享保年中までに取扱ひたる事件を載せたり。

をんこちしんしよ
溫故知新書　寫本　三卷　大伴　廣公
五十音順に語を集め、漢字に假名を振りて作れる辭書なり。各音中、更に乾坤、時候、氣形、肢體、態藝、生植、食服、器財、光彩、數量、虛押、複用の十二門に分てり、文明十六年甲辰〔二一四四〕の著。同年三井寺尊通の漢文序あり。

をんこにちろく
溫古日錄　十二卷　杉村　友春
連歌四季の景物を記したるもの。延寶四年丙辰〔二三三六〕六月の作なり。十二卷五册に版刻す。

おんさけちよくしのき
御酒敕使記　寫本　一卷
永長年間より延元年間に至る御酒敕使に關する部類記なり。宗俊卿記、經信卿記、俊房卿記、八節八座抄等の書を引用し、先例六十八箇條を載せたり。

をんざんぶん
溫山文　三卷　川北　重憙
著者の漢文集。卷上に序七、記七。卷中に論、解、說、讚、題、跋、碣等十三編。卷下に律、賦、古今體詩九十五首を收めたり。文中師友昌谷碩、野田笛浦、大槻磐溪、賴山陽、篠崎小竹、古賀侗庵、牧原半陶、古賀穀堂等の評點あり。嘉永二年己酉〔二五〇九〕大槻磐溪の序、同元年昌谷碩の序等あり。同年三月發行す。
◉川北重憙の傳記は「原城紀事」の下にあり。

をんじやうじだうしやべんらん
園城寺堂社便覽　寫本　一卷
近江國長等山園城寺並に金堂本尊の緣起なり。元祿十一年戊寅〔二三五八〕天保二年辛卯〔二四九一〕等の寫本あり。

をんじやうじちやうりしだい
園城寺長吏次第　寫本　一卷
大友皇子の建立にかゝる伽藍園城寺の長吏、第一圓珍より、第五十四權僧正重圓に至る列記にて各略傳を附せり。「續群書類從」卷百〇一、補任部第十三に收めたり。

をんじやうじはうもつもくろく
園城寺寶物目錄　寫本　一卷
近江國滋賀郡別所村なる天台宗寺門派總本山園城寺の古器古文書資什等を列記したるものなり。

おんじやうろん
音聲論　一卷　齋藤彥麻呂
五十音の發音法、「い、え、お」と、「ゐ、ゑ、を」との差別、「い、う、え」二音づゝある由、「は、ひ、ふ、へ、ほ」

の音便、其の他音聲に關する數條論じたるものなり。文政五年壬午(二四八二)の作。片岡寛光、富直利の跋、甫喜山光義の跋等あり。
◉齋藤彦麻呂の傳は『傍廂』の下にあり。

おんしらがのき
御白髮記　寫本　一册
德川五代將軍の嫡子德松君が髮置の式を行ひし時の記事なり。卽ち、天和元年辛酉(二三四一)十一月十五日水島之成をして白髮を作らしめ堀田正英に命じてそを擧げしめたる由を記す。

をんせんかう
溫泉考　一卷　原　雙柱
溫泉の湧出、湯治功用等の事を略說す。寬政六年甲寅(二四五四)の出版にかゝる。
◉原雙柱は水戶の醫にして、南陽と號す。

をんせんし
溫泉志　寫本　一卷　貞　裕
日本全國の溫泉地を、國分に列擧したるものなり。『中古叢書』卷百五十に收む。

をんせんふ
溫泉譜　寫本　一卷　澁井　孝德
諸國溫泉の在所主治等を列記詳載したるものなり
◉澁井孝德の傳記は『國史』の下にあり。

をんせんめいしようし
溫泉名勝志　二卷　後藤　義方
相模國中の溫泉名地を詳記したるものなり。其の子「梧陰庵梨春の序によれば、元祿五年壬申(二三五二)秋、入湯したる時の記なりと見えたり。上卷を「湯山土產」、下卷を「山路の月」といふ。
◉後藤義方は本草家後藤梨春の父にして、橘軒と號せり。

をんせんめいだん
溫泉茗譚　一卷
寶永六年己丑(二三六九)某僧が相模國塔の澤溫泉に於きて眞宗の僧虛舟との對談を筆記したるものなり。話頭を眞宗の肉食妻帶の事に起し、延びて當時僧侶の有樣を評罵し、終りに、某僧の問に應じて、虛舟が東西本願寺の分派前後の事情を詳話し、眞宗敎義の要領を略說して其局を結べり。分派の事情を陳ぶる處、稍西派に偏するの嫌なきに非ずと雖、參考に供すべき節亦少からず。本書は通俗なる假字文にして、所謂某僧の手に成り、虛舟は籍を東本願寺の末派にかくるものなる由を記したれども、假託に出でしものなるや否やを知らず。正德四年甲午(二三七四)に刊行せり。

をんせんゆうさう
溫泉遊草　一卷　僧　元政
攝津國有馬溫泉に遊べる紀行にして、寬文八年戊申(二三二八)の出版なり。卷末に門人自堅子の作、溫泉再遊一編を載せたり。
◉元政の傳は『扶桑隱逸傳』の下にあり。

をんせんろん
溫泉論　三卷　柘植　彰常
最初水火の辨より、溫泉の性質、浴泉法、浴泉禁、諸器械等に至るまで、溫泉一切に關することを說明したるものなり。文化六年己巳(二四六九)出版す。
◉柘植彰常の傳は『叢難錄』の下にあり。

おんだいはじめのせう
御代始抄　寫本　一册　一條　兼良
御讓位の事、御卽位の事、御禊行幸の事等以上三項の要事を記載す。文明十年戊戌(二一三八)二月「依僧宗祇所望馳筆了」との奧書あり。
◉一條兼良の傳記は『歌林良材集』の下に揭ぐ。

おんちさこんのたらうきゝがき
恩地左近太郎聞書　一卷　恩地左近太郎
古書、舊談によりて、兵法の研究、邪正の辨別、言行の一致、孝親、報恩、修學、習藝等の諸德を、積極に、又消極に敎訓誡したるものなり。正保二年乙酉(二三〇五)仲秋下旬開版者の奧書に、「此祕鈔或貴人被爲所持種々雖爲困望更無御許容故竊盜出書寫之尤可祕藏者也」とあり。
◉恩地左近太郎は楠正成が股肱の臣なり。謂はゆる楠家四天王の一人にして赤阪の役、千劍破役に於て最も著しき軍功あり。正成戰死の後は、子正行を助けて又功あり。終る所を知らず。

をんちせいえう
溫知政要　寫本　一卷　源　宗春
武家の政家法規道德等に關する訓誡なり。宗春庶子より出でて嫡家の正統を嗣ぎ、專ら治國安民を謀り、子孫をして益善政を行はしめんために、諸臣に付與訓誡せる書付なり。享保十六年辛亥(二三九一)三月中旬の自序あり。
◉源宗春は尾張藩主にして中納言たり。

をんちわかしふ
溫知和歌集　寫本　一卷
雅經、定家、逍遙院、徹書記、宋世、道堅等の歌を、四季戀雜共雜集せり。

おんづしんかい
音圖神解　寫本　五册　大國　隆正
五十音圖に基きて、語源音義等を說述したるものなり。其の五十音順は、普通のものと異りて、行を「あかさたわはまならや」とせり。
◉大國(野々口)隆正の傳は『學運論』の下にあり。

おんどしふ
音頭集　四册　三　保
俳諧の集にして、寬文十二年壬子(二三三二)十一月編輯したるものなり。

をんないまがは
女今川　一卷　澤田　きち
今川眞世の「今川帖」に擬して、婦女子の訓誡たるべき條々を繪入假字文に綴りたるものなり。自序あり。元祿十三年庚辰(二三六〇)出版す。

をんないまがはみさをかがみ
女今川操鑑　一卷
「今川に擬へて、自らを戒むる制詞の條々」と書き出して、女子の小大注意要件を假名文に書き綴りたるものなり。今見るところは安政二年乙卯(二五一五)出版にかゝる。

をんなかうきやうかうしやく
女孝經講釋　一卷
女訓孝經を講釋したるものにて、萬延二年辛酉(二五二一)江戶にて出版す。

をんなかたきうちまつだけいづ
女敵討松田系圖　寫本　一卷
享保九年甲辰(二三八四)四月、石州濱田の城主五萬四百石を領せる松平周防守康豐の奧方の里付侍女局澤野といふもの、同じく奧方の側仕へに於みちといふものを、草履を以て打擲し、非常の侮辱を加へて遂に自害せしめたるより、於みちの下女於さつといふもの主の爲めに局澤野を害して復讐したる顚末を記したる實記なり。下女さつの父は元長門國の大主松平大膳太夫の分地毛利甲斐守の小人組頭松田八助といふもの故に此の書名を松田系圖とはいへり。世の脚本に『鏡山草履打』に作るもの此の事實なり。

をんなげいしやみなしごおすくひねがひ
女藝者孤御救願　寫本　一册
幕府評定所より引繼ぎたる書類にして、光格天皇の文政七年甲申(二四八四)、同八年の兩年間に、德川幕府に於きて取扱ひたるものたり。內閣文庫に保存せり。

をんなごきやう
女五經　五卷
女子敎養のためにとて、五經の名を借り、一種の物語に作成したる讀本なり。故に內には「おかし物語」といへり。延寶九年辛酉(二三四一)の出版。

をんなししよげいもんづゑ
女四書藝文圖會　四卷
花の卷を「曾大家女誡圖會」、鳥の卷を「鄭氏女孝經圖會」、風の卷を「曹大家女論語圖會」、月の卷を「明孝慈烈女傳圖會」として、各假名文に譯して、圖會したるものなり。天保六年乙未(二四九五)淸原宣明の序あり。同年出版す。

をんなじんぎものがたり
女仁義物語　二卷
「女四書」の義をとりて、平易に女子の本分孝貞の道を、物語體に書き綴りたりたるものなり。二卷一册に版行す。

をんなせうがく
女小學　一卷
女子修身上の大小注意を假名文に書き綴りたるものなり。天保三年壬辰(二四九二)文海堂主人校正して、嘉永三年庚戌(二五一〇)出版す。書は佐藤愼一郞の手に成れり。

をんなだいがくたからぶんこ
女大學寶文庫　一卷　貝原　篤信

女子修身の要義大小の注意を假名文に書き綴りたるものなり。近年改版して行へるもの一二種あり。
◉貝原篤信の傳は『自娯集』の下にあり。

をんなちようはうき

増補日用女重寶記　寫本五卷　高井伴寛

諸藝の學ぶべき事、言葉遣ひ、懷妊中の心得、産前後の注意等、女子日用の雜事を記したるものなり。
◉高井伴寛の傳記は『孝子教鈔解』の下にあり。

をんなぶゆうしふ

女武勇集　寫本六卷　古田忠義

我が女性武勇の事績を輯錄す。其の總目を擧ぐれば、卷一京極備中守高豐足輕尼崎幸右衛門が姻親の敵を討し事、井上中務少輔正任內室男乘物に乘て牽馬を連る事。卷二淸水數馬が女房長谷川丹右衛門が女房を討つ事、本多中務大輔政武內室武功なる女を小出左京太夫吉英內室に仕へし女手柄の事、相良遠江守賴隆息女我儘尤なる事。卷四森志摩守長孝家來弓足輕組頭岩崎又右衛門が娘の事、女上に女大名と云ふ取沙汰ある事。卷五島津淡路守惟久內室勇氣ある事、鍋島加賀守直能息女信ある事。諸家に女別式といふ釼帶役ある事。卷六本多能登守忠義息女逵武勇並男女の兄弟十二人の事、阿部對馬守正盛家來吉村嘉六義心有て身を亡す事並姬れつ强勇の事等なり。寬延四年辛未(二四一一)閏六月十五日の著作なり。著者古田忠義は武陽の西赤坂築地洞煙陋堂に成功せりといふ。

をんほそながのき

御細長之記　寫本一卷

細長箱のことを詳に考證したるものなり。

をんまとにつき

御的日記　寫本一卷

元弘三年癸酉(一九九三)五月七日關東六波羅同じく滅亡す。依て同六月先帝隱岐より歸り給ひ京都御馬場殿に於て御的あり。本書は其の記事なり『續群書類從』六百六十七、武家部第十三にあり。

をんまはしまいはせんいつけん

御回米破船一件　寫本一册

寶曆十年庚辰(二四二〇)五月、越後より大阪に運送する御城粮船の覆沒したる始末を記せり。

をんやうぐわいでんいはとびらき

陰陽外傳磐戸開　二卷　梅辻規淸

部を理、事、物、無心之感、有心之感、譬論、問遂傳の部等に分ち、因緣說、奇法、妖術等を論辯したるものなり。自序及び明治二年己巳(二五二九)鈴木寬渡邊知彰の序等あり。
◉梅辻規淸の傳は『生魂神供次第記』の下にあり。

をんりやうけんにちろく

蔭涼軒日錄　寫本十六册

永享七年乙卯(二〇九五)より同十二年に至り、嘉吉元年辛酉(二一〇一)、寬正二年辛巳(二一二一)より同六年に至り、文正元年丙戌(二一二六)、長享三年己酉(二一四九)、翌延德二年庚戌等の日記なり。其の間の闕年は今佚失したるものなるべし。

か

かいいんげんげんろく

海印玄々錄　寫本三卷　僧明道

佛教に關する典籍の解題書と謂つべきものにて、般若心經略疏、法界無差別論疏、法華遊意、圓覺經略疏、勝鬘經義疏、文義綱目、起信論義記、十二門論宗致義記、楞伽玄義、金剛錍論、三類境、十句義論、三論玄義、妄盡還源觀、五教章、遊心法界記、首楞嚴經疏等の書に就きて、一部大旨、造書素意、註者辨別、異本種類、相承稱別、諸家判釋、略釋題目等の科目を分ちて詳明に解說せり。本書の或る一部に、享和二年壬戌(二四六二)著者四十二歲の時著せし由を記せり。然れども全部同時に成りしや否やは、未だ詳ならず。
◉明道は華嚴宗の僧にして宜然坊といふ。洛西の海印寺に住せり。初め高野山正智院覺道の弟子にして、後、故ありて勘氣を蒙り直に上京して華嚴宗の學匠救歷和尙に從ひて華嚴宗の教義を研究し、諸國に講筵を張れり。唯識華嚴の學に通曉して才發の人なりき。寶曆十一年辛巳(二四二一)に生れ、享和二年四十二歲なりしなり。歿年詳ならず。

かいいんげんだん

海印玄談　寫本三卷　僧明道

佛教に關せる典籍の解題と謂ふべきものにして、又は『海印玄々錄』と名く。故に委しき解題は彼れの下に讓れり。
◉明道の傳記は前揭『海印玄々錄』の下に詳なり。

かいゐんこれん

諧韻瑚璉　寫本一卷　中井積德

古韻の取捨に就きて論辯したるもの。明和六年己丑(二四二九)中秋の自序末に、『首是編之述、要在廢悉曇、而合乎古、悉曇已廢、則無四聲部限之拘、則出口成音、音相應成韻、欲不合乎古而得焉乎、則協音之衮、不待辯而破矣』といへり。『履軒古韻』の末に併せ寫したり。
◉中井積德の傳記は『七經彫題略』の下にあり。

かいうんぜんじくんしふしふ

海雲禪師捃拾集　三卷　僧海雲

表題『捃拾集』によつて『く』の部に解題せり。

かいうんろく

開運錄　寫本三卷

德川氏の祖先來、家康薨去及び五代比までの事を記したる記錄なり。最初、淸和天皇より有章院に至る系圖を製し、又崇岳院より常憲院に至る夫人三十三人の略傳を載せたり。

かいかう

歌意考　一卷　賀茂眞淵

歌意、歌體、歌詞等を論じて歌學上の注意を說示したるもの。卽ち上代の歌體のすなほに、歌詞の安らかなることより、萬葉集、古今集、又後撰集、拾遺集、古今六帖等の順次讀むべき事、其の他等を懇に說明せり。
◉賀茂眞淵の傳は『冠辭考』の下に揭ぐ。

かいがくざつゑい

海岳雜詠　一卷　菊池稹

旅行中の詠詩五十九首を輯錄す。天明元年辛丑(二四四一)松平賴德の序に『叔成辛丑之夏、羅微恙、請暇游浴於相豆溫泉、其所經歷名山勝地、應接巨觀海若者若干首、輯爲一卷、名曰海岳雜詠』といへり。
◉菊池稹の傳記は『三山紀略』の下にあり。

かいがふみやうもくせう

開合名目抄　一卷

宮商角徵羽の音韻書なり。根來寺に於て製作するところなり。

かいがんばうぎよたくせん

海岸防禦託宣　寫本一卷

嘉永六年癸丑(二五一三)神託に託して、當年の海防一件を論議したるものなり。祕鑚叢書中に收む。

かいぎせいえうろく

解疑正要錄　寫本一卷　二階堂平堪

生死の論、弓矢甲冑の原始論等を揭げたり。享保四年甲午(二三七四)諸國巡行の時見聞したる大略記なりといふ。
◉二階堂平堪は江戶の人、幕府評定所の儒官たり。號を愼叟と稱す。『解疑正要錄』は其の名著なり。

かいぎよかう

海魚考　寫本三册　饒田喩義

魚類及び魚製食品の釋名、集解、效用等を和漢の諸書より蒐錄したるもの。光格天皇の文化四年丁卯(二四六七)の作なり。著者饒田喩義は長崎の人なれど、今詳傳を得ず。

かいぐはうていもんだふ

皆具邦貞問答　寫本一卷　伊勢貞丈

皆具の故實につき、新井源太郞邦孝の問に對して、著者の答辯したるものなり。明和九年壬辰(二四三二)霜月二日の考。
◉伊勢貞丈の傳は『安齋叢書』の下にあり。

かいぐわいいでん

海外異傳　一卷　齋藤正謙

我が邦人の海外に於て異績ありたる事實を輯錄したるものにて、山田長政の身毒に覇たりし事、濱田彌兵衛の紅毛を挫したる事、鄭成功が臺灣に王たりし事等を漢文にて記す。
◉齋藤正謙の傳は『伊勢國司記略』の下に見よ。

かいぐわいいぶん

海外異聞　寫本三十三卷

海外事情に關する雜著及び雜話を輯錄したるものなり。古來より寬政前後に至る諸漂流者の口書等を主として集めたり。本文二十二册なりしに、文政九年丙戌(二四八六)小柴研齋、『崎陽雜記』を取て首卷に置けり。長崎の地は寬永以來外國に關する

事件の交渉地と定められたるより、本書を讀むもの〻案内たらしめん爲めにとてなり。

かいぐわいいわ
海外異話 寫本二卷

天保十二年辛丑〔二五〇一〕伊豫國松山和氣郡興居村船子亥之助といふもの、若年より、東北諸外國に往來して、種々の見聞雜事を齎したるを、某の聞書したるものなり。今內務省の寫による

かいぐわいざつき
海外雜記 寫本一卷 蘭交室民

西洋各國に於ける奇事、珍說のみを隨筆したるものにて、凡て廿八條あり。文化四年丁卯〔二四六七〕の自序に、「此の書唯一時の隨筆に出て、校正を經ざれば、其の誤譯脫漏甚だ多し、雖然事實に於て杜撰妄說にあらず。是れ蘭學家の糟粕にして、高識の人の爲めに棒腹の笑話を求むるは、聊大幸とする所なり」といへり。著者の蘭交室民は其の氏名なるか、又一時の戲號なるか詳ならず。

かいぐわいさんぶつづかゞみ
海外產物圖鏡 寫本一册

支那の產物なる動植物其の他圖說したるものなり著者年代詳ならず。

かいぐわいしんわ
海外新話 寫本三卷 鳥有生

清書「夷匪犯疆錄」に基きて、支那道光二十年〔我が天保十一年〕以下英國、清國關係の始末を記し、「經世文編」、「隱憂錄」「乍浦集詠」等の書に依りて、鴉片戰爭、其の他の事を增載せり。著者鳥有生の凡例あり、其の中に嘗て「清國沿海圖考」をも著したりといふ。

かいぐわいしんわしふい
海外新話拾遺 五卷 種菜翁

英佛の諸國支那の地に近着して種々の關係を開きたる事實を記せるものなり。但し夷匪犯疆錄、侵犯事略等に就て嘗て嶺田楓江といふもの「海外新話」を著して清英兩國の關係始末を記したれば其の補遺として脫したるを拾集したりといふ。嘉永二年己酉〔二五〇九〕の作なり。

かいぐわいへうりうねんだいき
海外漂流年代記 二折 芥子屋重兵衛

支那印度朝鮮、及び西洋諸外國等より、貢獻の爲め、又商業、交易等の爲めに來往したる事實を年代的に記したるもの。最初崇神天皇の六十五年戊子〔六二八〕任那の來聘より、嘉永七年甲寅〔二五一四〕米船浦賀へ入港したることまでを記す。本書は同年三月作成したるものなり。

◉芥子屋重兵衛は戲書屋、若くは豐芥子と云ふ。別著に「街談文々集要」あり。

かいくわうすうち
開荒須知 寫本二卷 吉田友直

開墾殖產の急務なることを論じ、其方法及び獸害豫防等の事を記す。寬政七年乙卯〔二四五五〕の作。

◉吉田友直は上州澁川の人にて、平澤元愷の親友なりしといふ。

かいくわんきやうきけふかくでん
開卷驚奇俠客傳 廿五卷 瀧澤馬琴

古來本邦の偉人豪傑を假り來りて其の傳を小說的に綴りたるもの。其の自序中に偉人俠客の當時に傳すべきを論じて更に「余之固陋、不敢自料、寧思欲排其難解其紛、明補舊記之闕文、慢載野乘所未言、演義立傳、以快人之心、若夫與隱、非游俠、則其事不潔、使人心愉快、非寓言乃其談不博、無財而能俠其俠、此希奇也、用滑稽善談、罔不出人意表、宜名不虛立、書不虛行、竊有賴于此、又惡問虛之與實哉」云々と云へり。天保二年辛卯〔二四九一〕序す。第五輯五卷は嘉永二年己酉〔二五〇九〕の發行なり。

◉瀧澤馬琴の傳記は「南總里見八犬傳」の下に揭ぐ

かいくわんとくはうへん
開卷得寶編 寫本一卷 定所主人

款にべ製法、カステイラ、象牙を磨く法、雪餅の法、油ぬき、醋の法、金銀さびを落す法等以下あらゆる數百の諸法を書き記したるものなり。

かいくわんひやくせう
開卷百笑 二卷 立川焉馬

古今の珍話奇談滑稽に關する落語を拾集したるものなり。

◉立川焉馬の傳は「俳優畸人傳」の下にあり。

かいけいろく
海警錄 三卷 成島良讓

古來の國書中に就き、外寇に關するものを蒐め清韓の諸書にも徵して、論評をも加へたるものなり。蓋し往迹に據て今事を議し、撫馭の典、防禦の法を講ずる意なりといふ。新羅、高麗、女眞、蒙古、朝鮮等に序す。「慨世異聞」の卷三卷四にも。

◉成島良讓の傳は「南山史」の下にあり。

かいげんゐんそうのぶるゐ
改元院奏之部類 寫本一卷 藤賴孝

諸家の古記錄によりて、寬治八年甲戌〔一七五四〕の分より、永長、嘉承、天仁、天永、元永、保安、天治、天養、久安、仁平、保元、治承、養和、建久、正治、元久、承久、貞永、寬元、寶治、康元、弘長、建治、乾元、德治、文保、元應、元弘、建武、至德、嘉慶、應仁等の奏院を部類したるものなり。著者藤賴孝は從二位執權たり。今詳傳を得がたし。

かいげんうとき
改元烏兎記 寫本一卷

文武天皇の大寶より、靈元天皇の延寶に至る二百六改元の記なり。「續群書類從」二百七十九、公事部第三十二に收めたり。

かいげんしだい
改元次第 寫本一卷

後桃園天皇の安永十年辛丑〔二四四一〕四月、天明と改元せられたる時の詔敕並に勘文を揭げたり。

かいげんでうじさだめ
改元條事定 寫本一卷

櫻町天皇の延享元年甲子〔二四〇四〕改元の時の記錄にして、勘文並に其の式事を記せり。

かいげんぶるゐ
改元部類 寫本一卷

後醍醐天皇の元亨より、後光嚴天皇の文和に至る改元記事なり。水左記、園太曆、其の他の家記より拔輯したるもの。「續群書類從」二百八十五、公事部第三十八にも收めたり。

かいげんぶるゐき
改元部類記 寫本一卷

「吉續記」の中より、建治四年戊寅〔一九三八〕二月二十九日の改元次第を抄出したるものなり。

かいげんものがたり
改元物語 寫本一卷 林恕

後西院天皇の寬文十三年癸丑〔二三三三〕九月、延寶と改元せられたる時の記事なり。

◉林恕の傳は「本朝通鑑」の下に揭ぐ。

かいこうしんご
譯解 開口新語 一卷 谷村霞州

支那の寓言的隨筆「開口新語」を抄出して句點したるものなり。野鄙猥褻の條の混ぜるは惜むべきなり。寶曆二年壬申〔二四一二〕長州隱史の序あり。

かいこうしんご
準譯 開口新語 一卷 岡白駒

「開口新語」に準じて同じく漢土の寓言的故事を取て漢文に隨筆したるものなり。寬延四年辛未〔二四一一〕滿田絢の序あり。同年刊行す。

◉岡白駒の傳記は「皇朝儒臣傳」の下にあり。

かいこうせうごろく
開口笑語錄 一卷 田中邦高

古今諸家の寓話を輯錄して各章評論したるものなり。其の師艸窩の評するところなり。全卷漢文奇編なり。寶曆四年甲戌〔二四一四〕の自序あり。著者田中邦高は必齋と號せり。

かいこくえうろん
開國要論 寫本一卷 佐藤信淵

相土の方、開物成務の序を論じたるもの。卽ち磧鹵、窮[illegible]、黑壚、磽确、礦礫、淤溢、粘埴、青溜、黑墳、赤埴、白埴、黃埴、軟沙、黑壤、赤壤、白壤、黃壤等を見たてて、殖產の適否を撰ぶべきを論じたり。文政六年癸未〔二四八三〕の作。

◉佐藤信淵の傳記は「經濟要錄」の下にあり。

かいこくくんしやうじりやく
開國勳將事略 寫本十二卷 友部熙

德川家康及び豐臣秀吉の世に、名將猛士を以て偉功ありし元勳者を列傳したるもの。其の師安積艮齋の勸誘に發企して此の書を成せる由、嘉永五年

壬子〔二五一二〕の自序中にあり。全編漢文を以て、各傳は最も詳を期せり。其の總目を擧ぐれば、卷一に大久保忠俊、酒井正親、本多重次、鳥居元忠、酒井忠次。卷二に井伊直政、本多忠勝、榊原康政。卷三に大久保忠世、水野忠重、松平康高、菅沼定盈、本多廣孝。卷四に奥平信昌、井伊直孝、水野勝成。卷五に松平政宗、最上義光。卷六に加藤清正、福島正則。卷七に松平輝政、黒田長政、淺野幸長。卷八に細川忠興、前田利長。卷九に藤堂高虎、加藤嘉明、堀尾吉晴、堀直寄。卷十に京極高次、豐臣秀秋。卷十一に吉川廣家、毛利秀元、宗義智、松平家久。卷十二に鍋島直義、立花宗茂等なり。十二卷十二册に寫傳す。著者友部熙は常陸國水戸の人なり。

かいこくざつき

開國雜記　寫本 一册

徳川家康の事業に關する記錄なり。中に家康三遠兩國領分に關すること、關東にて采地を與へたる人名、關ヶ原の陣立、大阪兩陣の備立等の事を錄す。「遺老物語」第九卷にも收めたり。

かいこくししふ

嶰谷詩集　七卷　岸　鳳質

著者の詩集なり。卷一、卷二に古詩。卷三、卷四、卷五に律。卷六、卷七に絶句を載す。光格天皇の寛政十年戊午〔二四五八〕僧臥雲及び僧潛鮮の序文を附したり。

◉岸鳳質は、字を文卿と云ひ、號を嶰谷といふ。武藏國背梅の人、漢學を以て知られたり。著す所は別に「扶桑蒙求」あり。

かいこくへいだん

海國兵談　十六卷　林　子平

我が國當年の對外戰備を論究したるもの。即ち「我が海國の位置より外寇にかゝり易きより其の武備は外寇を防ぐを知ること指し當つての急務なるべし。さて外寇を防ぐの術は水戰にあり、水戰の要は大銃にあり。此の二つを能く調度する事日本武備の正味にして唐山韃靼等の山國と軍政の殊なる所なり。之れを知て然して後陸戰の事に及ぶべし」云云とて、全編十六卷、水戰、陸戰、軍法並に物見、戰略、夜軍、撰士附り一騎前人數組附り人數扱、押前、陣取、備立、宿陣、野陣、器械並に小荷駄附り粮米、地形、城制、城攻附り攻具、籠城附り守具、操練武士之本體並に知行割人數附り制度法令之大略、馬之飼立仕込樣附り騎射之事、略書等に目を分けて詳論せり。天明六年丙午〔二四四六〕夏の自序あり。寛政三年辛亥〔二四五一〕刊す。

◉林子平は江戸の人、後兄と共に仙臺に貫籍す。名を友直と云ひ六無齋主人と號す。性恬澹にして穎悟なり。幼より書史を好み又地誌を諳記し、常に四方に游歷して天下の士氣を鼓舞し海國の防備策を說く。「海國兵談」は正しく其の方法を講じたるものなり。別に「三國通覽」を著して朝鮮、琉球、蝦夷等の地誌を明にして他日應變の參考に供ふ。幕府の有志相議して妄說となし仙臺に禁錮し遂に獄中に歿せしむ。時に寛政五年癸丑〔二四五三〕六月年六十二。明治の朝に至り其の大義愛國を賞して正五位を贈らる。其の著書は前敍書の外、倚富國策、父兄訓等あり。

かいざう

解莊　十二卷　宇津木益夫

莊子全編に註解したるもの。蓋し著者本書を精研する五十餘年、其の結果毎句毎章一種の見解を以て周密に註解したるものなり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕夏四月の自序あり。

◉宇津木益夫は尾張名古屋の人、安永八年己亥〔二四三九〕生れ、後京師に出でて醫業に從ふ。天放と字し、昆臺と號し、太一郎と通稱す。詩文和歌等を好みて其の道に長ず。孝明天皇の嘉永元年戊申〔二五〇八〕五月八日年七十にて歿せり。

かいさうしふ

海莊集　三卷　菊池　保定

表題「琴溪山人第三集」の下に解題せり。「海莊集」は、同書の內題なり。

かいざうづふ

解臟圖賦　一卷　池田　義之

人體解剖に關する記事を七字賦に作りたるもの。文政四年辛巳〔二四八一〕著者が同門藤田守道、小森義眞、辻恒、中尾徽、田村邦懷、池田孝、武井賁、高橋義興等四人の屍を解剖して、頭部、胸部、腹部、凝形物、流系物等に分ちて記したるものなり。

◉池田義之は、福井の人、小森桃塢の門人なり。

かいざうりやくゐん

海藏略韻　十卷　僧　虎關

平韻の字を輯して各、熟字を採錄した

もの。著者東福寺の海藏院に住職たりしより、海藏の題名は得たるなり。

◉虎關は名を師錬といひ東福寺海藏院に住す。才學最も豐富にして和漢古今の書に該通せざるものなかりきといふ。元亨年中「元亨釋書」を著はす、蓋し本邦釋典の始めなり。正平元年丙戌〔二〇〇六〕七月六十九にて入寂す。

かいさくづ

海錯圖　一卷　建部　凌岱

雜多の海魚を圖解したるものにて、安永四年乙未〔二四三五〕に著したるなり。

◉建部凌岱の傳は「歌文要語」の下にあり。

かいしうえうぎべん

開宗要義辨　二卷　僧　德運

淨土祖師の遺訓開宗要文を敷衍釋解したるもの也。諸經諸書を引きて、假名文に詳釋せり。慶應二年丙寅〔二五二六〕の自跋あり。華頂山大僧正名譽學天の題詞、慶應二年平安大雲院的門の序、同三年濕華隱子正阿の跋等あり。著者德運は淨土宗の僧にして、松溪と號せり。

かいしきしんぱふ

開式新法　二卷　川井　久德

數學開平方に關する新技術を披露せるものにて、坂部廣胖校閱す。享和三年癸亥〔二四六三〕の自序あり

かいしへん

解屍編　一卷　河口　信任

人體解剖に關する說述なり。明和七年庚寅〔二四三〇〕著者、官に請うて囚人の屍を解剖し、其の實驗するところを記したるものなり。記事、圖譜共に簡略にはあれど往々荻野元凱の批評意見を挿入す。

◉河口信任は字を子遠といふ、世々瘍醫を以て古河侯に仕ふ。嘗て長崎に栗崎道意に學び、又京師に荻野元凱に學ぶ。

かいしほんでん

開始本傳　寫本 一卷

尾張國愛市郡火上姉子社の本傳にして、日本武尊宮酢姫命の御傳を記したるものなり。

かいじやうかうのうせう

海上行囊抄　寫本 六卷　江間　氏親

行囊抄中の一部にて、攝州大阪より豐前小倉に至り、小倉より、船路にして、九州を巡り、更に四國津津浦々を順覽せし時の紀行なり。古書等を引きて地誌的事項を明にす。六卷三册に寫傳す。

◉江間氏親のことは「行囊抄」の下にあり。

かいしやうしんしくはふ

開廠賑粥法　一卷　鎌原　石見

凶年に際し小屋を作りて粥を施す方法を說きたるもの。卷首に「是れは張司農が備荒十二議を本とし、唐宋元明の間諸賢の名法效驗ありしを採て增補せしものなり」とあり。天保三年壬辰〔二四九二〕著すところなり。

◉鎌原石見は子恕と字し桐山と號す。信濃の儒者なり。或は云ふ佐久間象山の師なりと。

かいじやうはうじゆつぜんしよ

海上砲術全書　寫本 二十八卷　杉田　信

和蘭砲術書を譯出したるものなり。即ち同國メテムブリツキ〔地名〕の海軍教場砲術甲必丹行狀の嶽官ロイテナント〔官名〕カルテン〔人名〕の西洋紀元一千八百三十二年〔我が天保三年〕の著にかゝる「レイドタラアト、ヘイ、ベツト、オンデル、グクト、インデセニアルチルレリー」を、幕命によりて、箕作阮甫、品川梅治郎、山路彌左衞門等と譯出したるものなり。其の編目を擧ぐれば火藥、熕礮、熕車、彈、裝藥用熕器計、熕礮使用、火料、射放挪放、帶伏、築堡、海岸攻守編等にして、目を數十に分つ。天保十四年癸卯〔二五〇三〕の譯なり。

◉杉田信の傳記は「梅里遺稿」の下にあり。

かいじやうもんだふ

海上問答　三卷

佛敎上の因果談を、船中婦人諸人との問答に託して說明したる繪入假字書のもの。卷上に長崎よりさつまへの船中にて御僧敎化の事、女人出て後生の一大事を問ふ事等より、狂人は生中のはぢを知らざる事に至る十五條。卷中に死で後たよりなき不審をはらし給ふ事より、出家は難行苦行すといへども却て樂の事に至る十八條。卷下に獅子そんじや大王にくびを請はれ與へ給ふ事より、臨終正念のれん佛をすゝめ給ふ事に至る十一條あり。草書に書き熟字には振假名を施し、所々繪を挿入して婦女子の爲めに便せり。寛文十年庚戌〔二三三

〇〕の版刻なり。

かいじやうりていしよ
海上里程書　寫本　一卷
周防國三田尻港を中心として、大阪、長崎、鹿兒島、萩、江戸、新潟、廣島、その他等への海上里程を記したるものなり。

かいじやせう
改邪鈔　一卷　僧　覺如
佛説の大要を説き、邪法の張行を制止したるもの。建武四年丁丑〔一九九七〕秋九月、出雲路の乘專といふもの丶請によりて著すところにて、著者時に年六十八歳なりきといふ。應永二十六年己亥〔二〇七九〕の奧書あり。
◉覺如の傳記は「本願寺聖人親鸞傳繪」の下にあり

かいじゆひつそう
介壽筆叢　寫本　一卷　山地　覺藏
近世の雜書を編輯したるもの、介壽は著者の號なり。本書に收むるところは、文明一統記、上中下説、天下貪富人情曲直説、芳烈侯國中寺院追出之後御書出八箇條、戒石銘、紀伊大納言宗直卿御家中毎月御觸、文昭廟御代始新令、正德四年冬御沙汰書、誨蒙近言、中江藤樹書翰、甍狐廼噂、肥後政府鹽書、治天下在得人論、資治精要の十四種なり。天保七年丙申〔二四九六〕教授官員並雅景の奧書あり。

かいしよくけんし
海食獻志　寫本　一卷　無爲子
海産物の圖繪十四種を掲げたり。蓋し諸國より幕府へ獻進したるを寫したるものなりといふ。就中肥前五島の捕鯨圖には解説を附したり。著者無爲子は安藝國の人なれど、其の姓名を詳にせず。

がいしよくだん
鎧色談　寫本　一卷　伊勢　貞丈
伊勢弓馬叢書中の一書にして、同故實數十條を記せり。明和八年辛卯〔二四三一〕秋七月十四日貞丈の末記あり。
◉伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

かいしよくわうこくしうめいか
揩書皇國州名歌　一折　市川　三亥
我が國六十餘州の名稱を、順序に七言句に詠出したるものにて、文化十三年丙子〔二四七六〕撰し、且、書したるものなり。刻して習字臨本に作る。
◉市川三亥の傳記は「五體墨場必携」の下にあり。

かいしよせんじもん
揩書千字文　一折　市川　三亥
千字文全編を楷書したる臨本にて、文化十四年丁丑〔二四七七〕の書。明治十三年章盛館模刻出版す。
◉市川三亥の傳記は「五體墨場必携」の下にあり。

がいじろん
害事論　一卷　石井　光致
家相方位説の怪異邪曲にして信ずべからざることを論じ、併せて家の盛衰身の禍福は唯、道と人との正不正にあることを説きたるもの。其の題名は、「孟子」の「作其心。害其事」と云ふ句に取りたるなり。文政十年丁亥〔二四八七〕九月の作。
◉石井光致は下野の儒者なり。通稱を吉兵衛といひ、號を磯亭といふ。光致は其の名なり。儒佛議論、千支考、修身談等の作あり。

かいしんせう
開心鈔　三卷　僧　杲寶
部門を分ちて眞言宗の法義を説述したるものにして、三卷合して三十門あり。就中、上卷は、論鋒主として顯宗に向ひ、眞言宗の見地よりして兩宗の關係を説きたるもの多く、禪密攝屬門、禪宗私建門、祕密修禪門等あり。中下兩卷は、直ちに眞言宗の宗義を述べたるが多く、卽身成佛門、煩惱卽道門、三毒受荼門、卽事而眞門、俗諦常住門、一塵法界門等の諸門あり。序跋なく、著作の年時を記さず。梓行せられしは、慶安四年辛卯〔二三一一〕なり。
◉杲寶の傳は「杲寶私鈔」の下にあり。

かいせいあはのくにぜんづ
改正安房國全圖　一鋪　秦　檍丸（アハギマロ）
山水、道難所、郡村、社寺、古城等を標記し、圖端に諸古書なる同國地誌に關することを雜載せり。寛政元年己酉〔二四四九〕の作なり。
◉秦檍丸の傳記は「鎌倉勝概圖」の下にあり。

がいせいいぶん
慨世異聞　寫本　十卷
内外の政策に關する諸家の意見書等を集めたるものにて、卷一に、松平越前守見込書、眞田信濃守伺

松平薩摩守上書二條、江川太郎左衛門上書、鍋島家防策、太田道醇並太田攝津守添書、一封に調攝津守より差上被申候寫、古賀謹一郎存意書略を初以下七條、浦賀表防禦之儀申上候書付、制處事宜、大槻清崇上書寫等を掲げ、第二卷以下凡て、二十一種を載す。

かいせいかき
改正家記　寫本　二卷　村瀬　多仲
「君家考之部」と記して、上卷を親王記分とし、宗良親王年譜、尹良親王年譜、良王君年譜を掲げ、下卷を德川記分とし、新田義季、同賴氏、德川教氏、世良田家時、同政氏、同政義、同有親、新田親氏、松平泰親、親清、信廣、信光、親忠、長親、信忠、清康、廣忠、德川家康等を經て其の子家元の系譜にまで及べり。安永六年丁酉〔二四三七〕より、享和元年辛酉〔二四六一〕に至る間の作に、更に光格天皇の文化元年甲子〔二四六四〕朱書增補せる鄭重の系譜書なり。附錄之部、書上之部各一册添ひて、都合四册の大寫本なり。

かいせいかづさのくにぜんづ
改正上總國全圖　寫本　一鋪　秦　檍丸（アハギマロ）
郡域路程郡鄉の名、戸數、租税等をも記し、更に郡鄉沿革考を附錄せり。又和名鈔、延喜主税式租税、延喜神名帳四座、三代實錄の六社、萬葉集の歌十八首、名所の歌七首を掲載す。寛政七年乙卯〔二四五五〕の圖なり。
◉秦檍丸の傳記は「鎌倉勝概圖」の下にあり。

かいせいじんこくき
改正人國記　二卷
「人國記」と同書なり。詳解は同書名の下にあり。

かいせいじんだいきいどうへいきん
改正神代紀異同平均　寫本　一册　齋藤　彦麿
「日本書紀」神代卷の本文に和訓字音を附したり。奧書に曰く、「此の二卷誤落錯亂少からず、從て傳說異同紛はしくて讀み得むこといと難し。故に本文も一書の傳と平均し、古傳と覺しきを立て、異様なるを略き、精しきを擧て粗きを省き、傍に朱點を加へしは字音に讀むべき印なり。此の紀を強に訓もてよめるは非なり。題號に日本の二字を冠しめ給しは外戎にも傳ふべき心しらひなり。さる故に漢文の熟字あまたあり、古事記は上古の詞にて傳へられしなれば、字に拘らず音聲の清濁平上去の差別いと〳〵あざやかなり。彼れと此れとは撰ばれしもとの心いたく異り」と記せり。本書の特色を見るべし。
◉齋藤彦麿の傳は「傍廂」の下にあり。

かいせいせつしうおほさかちづ
改正攝州大阪地圖　一鋪
大阪三鄉市坊橋梁等より以下詳細圖にして、藏屋敷所附を附錄とす。浪華の人曾之唯といふもの、題辭に、此の圖は浪華の隱士澤田翁の編して中途歿したれば、書肆赤松某〔九兵衛なるべし〕讐校して上梓したるものなりといふ。

かいせいぞうほしやうちうしゐんせん
改正增補掌中詩韻牋　一折
平上去入の四聲韻を列擧して、鼇頭に增補したるもの。天保元年庚寅〔二四九〇〕山東杏如錦の序あり。青洲の輯、君林の訂正、誠齋の增補するところなり。天保十四年平田豐愛の跋を附して一小折本に作れり。

かいせいむさししよくだん
改正武藏燭談　寫本　五卷
德川氏歷代に關する記錄なり。「武藏燭談」の文字の不正を正し、更に分類編次を變じ第一卷御代々の部、第二卷御家門の部、第三卷執權の部、第四卷老臣の部、第五卷諸役人諸大名の部等に分つ。後櫻町天皇の元文五年庚申〔二四〇〇〕に認めたる自序に見えたり。

かいせきいかう
介石遺稿　二卷　僧　終南
著者の詩文集にして、具には「介石終南禪師遺稿」といふ。卷上に五言古二、七言古五、五言律四十九、五言排律四、七言律三十三、五言絶句十三、六言絶句一、七言絶句七十七。卷下に序二、記三、銘四、墓碣銘二、讚十一、雜文五、疏一、跋十、書二十六首等を收む。明和六年己丑〔二四二九〕竺常の序あり。

がいせきいちらん
槪席一覽　一卷
士分の役料、扶持、手當、知行等の高を記したる横

折小册子なり。末に寄合小普請御役金の事、年中衣服附等を添へたり。

かいせきき

介石記　寫本 四卷

淺野、吉良の爭亂に關し、四十餘人復讐切腹の始末を詳記したるもの。「介石記」の題名は周易豫六二の「介于石不終日」といふ語に、大石內藏助が稱呼の略を通ぜしめたるものなるべしといふ。小栗研齋の「見聞雜記」中にも收めたり。

かいせききびかう

介石記備考　寫本 八卷

赤穗四十七士の復讐始末を記述したる「介石記」に、更に備考を加へたるものなり。

かいせきしうなんぜんじいかう

介石終南禪師遺稿　二卷　僧　終南

單に「介石遺稿」といふ名の下に於て解題せり。

かいせつものがたり

戒殺物語　二卷

殺生の無道なることを說き、其の破戒に因て種々なる惡果報ありとて數多の例話を列擧せり。例へば戒殺の事、誕生日に殺生すべからず、兄弟三人の子痴子になりける事、獐を殺すとて我が子を殺しける事等、凡て二十三項を記す。靈元天皇の寬文四年甲辰〔二三二四〕孟春出版したるものなり。

かいせんしよけけいふ

改選諸家系譜　寫本 二百三十七册

武家諸家の系譜にして、實に前編四十册、後編百九十七册の大部より成れり。

かいせんぶけせいすゐきふろく

改選武家盛衰記附錄　寫本 一册　小野　高尙

「武家盛衰記」の附錄にて「拾遺條目」として高山右近より植村土佐守に至る十三人、次に木曾千三郞より楢村孫七郞に至る二十三人を小祿輩として其の盛衰を略記し、次に慶長五年逆徒に與して絕したる人々をまで列擧したり。

◎小野高尙の傳は「古今類聚名諱集」の下にあり。

かいたいさげん

解體瑣言　一卷　柚木（ユノキ）　太淳

人體解剖に就て解體、分職、備器、戒約、解體次第等を記したるもの。解體は解剖の斯道に益あることを論じ、分職は解訓諸員の分業、備器は當用の諸器具、戒約は當用者の注意心得なり。寬政九年丁巳〔二四五七〕十月二日。囚屍を得て解剖したる時の事なり。本書は同十一年刊行せらる。

◎柚木太淳は平安の人、鶴橋と號せり。世々眼科醫を以て知られたるものなり。

かいたいしんえう

解體鍼要　一卷　加古　嚴

人體解剖と、鍼科の事とを記述したり。解剖は著者の實驗によりて、肺、心、脾、胃、肝、膽、腎、心包、絡、大腸、小腸、三焦其の他とも圖を主として記したるなり。文政二年己卯〔二四七九〕刊行せらる。

◎加古嚴は阿波の人、又將之と云ひ、通稱を貢芝といひ、號を藍洲と云ふ。正骨科を以て名を知らる。

かいたいはつもう

解體發蒙　五卷　三谷　樸

人體解剖にする詳論なり。一器毎に其の今訓、古訓、俗名、外名等を擧げ、其の字義に及び次に位置、形狀、機能等を說き、終に自家の意見を附せり。其の挿むところの諸臟腑の圖は、著者が中御門天皇の享保中の解剖實驗によりて目擊したるところの形狀、色彩、大小、長短、輕重等を寫したるものなり。文化十年癸酉〔二四七三〕刊本となる。

◎三谷樸は近江の人、公器、又は笙洲と號す。嘗て小野蘭山に從ひて本草學を修め、業成りて其の名を知られたり。

かいだうき

海道記　二卷

後堀河天皇の貞應二年癸未〔一八八三〕卯月上旬、京都を立ちて東海道を下り、鎌倉に到着するまでの紀行なり。文中の一節を擧れば、「東國は是れ佛法の初道なれば、發心の沙彌、ことさらに修行すべき方なり。此の故に本方初發の因地より萠して、金剎極證の果門を開かんと思へり。親夫けがらはしき濱路を過行だにも、白砂なほ面白く見ゆ。まして極樂金繩の道に思ひやるもゆかしけれ。銀樹七重の風、無著の聲を調べ、紫蓮千葉の色に染、功德の

池には、水煩腦のあかを洗ひ、善根の林には菩提樹のこのみを結ぶ。ゆゐたる宮殿には、十方に飛で居ながらすぐことに利生を約諾す。生る人皆說法集會の物にまじはりて、無量の命を延年し來る。昔は悉見佛聞法の室に誇つて不退の樂に世會す」といへり。筆者の和漢の學に長じ、兼ねて佛教の義に通ぜるより、本書は鴨長明の作と相傳へたり。然れども「吾妻鏡」に據れば、長明は建曆元年辛未〔一八七一〕鎌倉に下りて將軍に謁する由あり。「方丈記」には、建曆二年日野山奧にその記を作れることを見る。隨つて貞應二年初めて鎌倉に下れるが如き、此の紀行の作者とは斷定しがたきなり。又、本書は源光行の作として刊行せるもあり。これまた事實に於て疑問の點多し。因て著者を未詳に附して後の考を待つ。「群書類從」卷三百二十九、紀行部第三にも收めたり。

かいだうくだり

海道くだり　一卷　菅沼　貞俊

文祿四年乙未〔二二五五〕秀吉の小田原に下りしことを同年二月二日諧謔的に記したる短編なり。「日本文庫」第十一編中に收めたり。

◎菅沼貞俊は三河國の人、通稱を五郞兵衞といふ、貞俊は其の名なり。

かいたうしよさんさんぶつし

海島諸山產物志　寫本 一册

伊豫の海島、會津の山岳其の他に產する動植物數十種を彩色圖說したるものなり。編年筆者詳ならず。

かいだうつけうた

海道附歌　寫本 一卷

江戶より伊勢國當世浦に至る地名を標して、古歌を集めたるもの。元祿十二年己卯〔二三五二〕竹內爲入といふもの〻奧書に、「右之歌名所追考之內慥百里に附添證者也」とあり。

かいだうのぼり

海道のぼり　寫本 一卷　正　作

最初に正直の武藏より京へ歸る記、海道上り、次に德元の都を立ちて東へまかる海道下り、次に卜養の寬永二年乙丑〔二二八五〕九月十三日津の國を出でて下國下向の記等を集めたる俳諧の記なり。

かいだんゐんこうようじんめいちやう

戒檀院公用神名帳　寫本 一卷

畿內東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道等の月別守護神二百六十餘所の神名帳なり。「續群書類從」卷六十一に收めたり。

かいだんかうせつ

街談卷說　寫本 一卷

內外古今の見聞を隨筆したるものなり。考證的事實、奇怪的事實等多し。文政六年癸未〔二四八三〕江戶の人石上菜の自序あり。

かいだんぶんぶんしふえう

街談文々集要　寫本 十八卷　芥子（ケシ）屋（ヤ）重兵衞

著者の見聞隨筆なり。文化元年甲子〔二四六四〕より同十四年まで、文政元年寅の歲より、同十二年に至る十二年、凡て二十六年間江戶及び近在、遠國支那蠻國に至るまでの見聞を眞僞に拘らず記憶の儘に雜記せりといふ。文文は文化文政の略語なり、萬延元年庚申〔二五二〇〕極月上旬の自序あり。十八册に寫傳す。

◎芥子屋重兵衞は「海外漂流年代記」の下に傳す。

かいていせきわ

海亭夕話　一卷

修學の方法を記述したるもの。即ち致生謹習討論吏に師斷を受けたるもの〻筆錄なりといふ。奧書の末に安永四年乙未〔二四三五〕夏六月記す由あり。著者は大澤某と記せり。

かいなんしよじゆでん

海南諸儒傳　寫本 二卷　大高坂季明

儒者小倉三省、野中兼山等の派に屬する學者の傳記論評なり。元祿四年辛未〔二三五一〕の自序中に曰く、「興國以來三般の學あり、京師學、關西學、海南學といふ。京師學は惺窩、羅山を宗とし。西學は中江、熊澤。南學は三省に基して兼山に成れり」云云と、之れによりて本書名を海南諸儒傳と附したる由を云へり。

◎大高坂季明の傳は「芝山會稿」の下にあり。

かいばうゐぎ

海防彙議　寫本 九册　鹽田　順庵

我が國の海防策に關する諸家の論議を輯錄したる

もの。「海防彙議二編」七卷、「海防彙議附錄」二卷、「海防彙議補」十五卷と合せて全部三十三卷あり。皆同人の編なり。

◎鹽田順庵は名を泰、號を松園といふ。本と宮川氏なりしが、幕府の醫鹽田宗温に請はれて、其の家を襲ひ、其の業を繼ぐこととなれり。天保十三年六月、外班直醫に擢でらる。性剛直にして衆と容れず、自ら職を辭す。嘉永六年米利堅國、來つて互市を要むる時、世論洶々たるより、順庵奮然海防に關する研究を企て、遂にこの「海防彙議」を編成す。諸侯大夫爭うて之れを傳寫し、また命によりて一部を昌平黌に納む。官爲めに銀を與へて賞功す。安政二年命によりて函館に移住し、同地に留ること六年、學校を設け、病院を建て、以て土人の敎養に盡す。文久二年召還せられて寄合班となり、醫學敎諭を兼ね、後また函館に行き、東京に歸り、明治四年辛未〔二五三一〕三月七日、六十七にて歿す。谷中長久院に葬れり。

かいばうゐぎほ

海防彙議補　寫本十三卷　鹽田順庵

諸家の海防策を輯錄したるものなり。其の序中に曰く、「近年洋夷唐山を侵す、唐山之れを制伏すること能はず、地を裂き銀を與へて和を議するに至る。是れ我邦にあつては殷鑑の戒となすべし。況んや比年洋夷沿海を偵うて止ざるをや。孟子曰無敵國外患者國恒亡と、今洋夷を以て外患となし奢靡遊惰の弊風を一變せは國祚天地と共に長久なるべし。幸に明君賢相上に在りて、言路塞る所なく馭戎の策を獻ずるもの相踵で起る。朝廷其の中に於て採擇取捨す固より遺算あることなし。今、其の書傳播して予が手に落る者を取て海防彙議十五卷を作る」。云々と。

◎鹽田順庵の傳は「海防彙議」の下にあり。

かいばうおくそく

海防臆測　二卷　古賀煜

我が國の海防に關する論記なり。第一「論本邦地形狹長、環海以立國、寇盜在邇、國勢雖至盛、而海防宜如棉流矢極然眉之急」より、第五十六「論本邦環海、險艦所向可至、而北陲最可慮、俄羅斯東察加荒漠之地、漸致繁庶可虞、而英機黎競貪亞墨利加肥沃之壤以逼我、其患更甚於俄羅斯」に至る。全編漢文にて記せり。天保九年戊戌〔二四九八〕の撰述なり。

◎古賀煜の傳記は「延元蕘編」の下にあり。

かいばうくわこうしんらん

海防火攻新覽　寫本七卷　手塚謙

和蘭の兵書を譯述したるものにて、海防火攻の事を詳說す。原著者は「コロンシユリナメ」〔地名〕「トムエンケルヘルツ」といふ人なり。譯者手塚謙は周防の國の人にして、律藏と稱せり。

かいばうさく

海防策　寫本一卷　齋藤正謙

我が國當年の海防策を論議したるものにて通編五編より成る。「慨世異聞」卷七にあり。

◎齋藤正謙の傳記は「伊勢國司記略」の下にあり。

かいばうしえうひろく

海防至要祕錄　寫本二卷

德川幕府時代に於ける外人異船等の評議處分に關する書類を編輯したるものなり。

かいばうしぎほい

海防私議補遺　寫本二卷　長山貫

西洋の兵書數十部中より、其の緊要なるものを抄出して海岸防禦の策を講じたるもの。安政頃の編なるべし。

◎長山貫のことは「砲家須知」のに下あり。

かいばうしさく

海防私策　寫本一卷　板倉勝明

羽倉果の「海防私策」に更に語を添へて閣老福山侯阿部伊勢守正弘に上れるもの。嘉永二年己酉〔二五〇九〕八月の筆「慨世異聞」卷七にあり。

◎板倉勝明の傳記は「甘雨亭叢書」の下にあり。

かいばうしふぎ

海防集議　寫本一卷

羽倉用九の「擬論海防」と、鹽谷甲藏の「籌海私議」とを謄寫し、末に「嘉永癸丑風說書」といへるを附したるものなり。

かいばうしふさく

海防集策　寫本一卷

孝明天皇の嘉永七年甲寅〔二五一四〕亞米利加船來浦の時に於ける水戸齊昭の「海防愚存」を始として、諸家の意見數編、聞書數十項を載す。聞書の末には嘉永六年寫取の由を記す、蓋し書稿を合せ綴りたるものならむ。

かいばうしんぺん

海防新編　寫本十四卷

諸家の海防に關する意見書類を輯錄したるもの也。卷一、二、三に水府公の獻策。卷四に某の無名書、江川太郎左衞門の存附上書、某の共和政治。卷五に嘉永六年癸丑亞米利加入港略記、某の憂當世之急務之論。卷六に某の兵談要錄、藤川憲の兵家者流海防策、某の阿蘭陀風說書抄。卷七に北亞米利加軍船風書、嘉永六年の異國船に付上書。卷八に亞米利加流記、附り持渡金圖略通川文字和解。卷九に諸家の異國船言上之記、同屆書類。卷十に北亞米利加軍鑑略名記、附り役名浦賀御國人等。卷十一に浦賀與力從合原問書。卷十二、十三に諸家の屆書類。卷十四に筒井紀伊守の上書、某の上書、御尋書一通等を收錄せり。十四卷十四册に作る。

かいばうづ

解剖圖　寫本一卷　賀川晉

女子の解剖に就て實視したるところを記したるもの。剖二胸腹壁一見二臟府一圖、陰器連二續腹臟一圖、子宮解剖、妊娠六月解剖、子宮息肉其の他の圖なり。

◎賀川晉は、備前牛窓の人、本姓は太田氏、子明と字し、晉齋また濟齋と號す。賀川南龍の門に入りて產科を修め、終に其の家を繼ぎたり。

かいばうづ

解剖圖　寫本一卷　宮崎或

人體解剖の記事なり。光格天皇の寛政八年丙辰〔二四五六〕二月十八日囚人の屍を得て解剖したる實驗を寫したるものなり。

◎宮崎或は保科侯の侍醫なり。詳傳は知りがたし。

かいばうびろん

海防備論　寫本二卷　藤森大雅

嘉永六年、米船入港の時に方て、海防制夷の要を論述したるもの。總論四編に、志を定め國是を明にすべき事、總督を立て廟堂を鎭靜にする事、全體の結構を立て申すべき事、遍く海內に防禦を設くる事等を論じ、處置之宜論五編に、費用を省き財源を通ずる事、儲蓄を廣うし不虞に備ふる事、人材を育して用に備ふる事、利器を制して人膽を盛にすべき事、文武合併の大學校を作る事等を論じ、當務の急論二編に書翰請取方並返答の致方、戰略論等を掲ぐ。即ち總論に大勢を立て、處置宜論に手を下すの次第を論じ、當務の急論にて、危急に應じ禍亂の免るべきを論ぜり。自序、嘉永六年癸丑〔二五一三〕秋七月の自跋あり。

◎藤森大雅の傳記は「如不及齋文鈔」の下にあり。

かいばうもんだふ

海防問答　寫本四卷　平山潛

吾國海防の事を問答したるものにて、末の一卷は其の圖式たり。門人松嗣略、平敬明等の同校するところ。文化十三年丙子〔二四七六〕の自序あり。

◎平山潛の傳は「孫子折衷」の下にあり。

かいはくごしんれい

海舶互市新例　寫本一卷

正德五年乙未〔二三七五〕の長崎新例なり。海舶互市の規定二十餘を條例す。今內務省の寫本による。

かいはくらいきんづせつ

海舶來禽圖說　一卷　關盈文

舶來の鳥を寫生して其の狀態を記したるものなり。寛政五年癸丑〔二四五三〕著す。別名を「舶來禽圖彙」といふ。

かいばしんしよ

解馬新書　二卷　菊地東水

馬體解剖に關する論述なり。舌、胸、心、動血脈、門脈、膜、食道胃及厚薄二腸、傷腸及乳糜諸道、脾、腎及膀胱、生殖諸器、眼球、耳及鼻齒牙、毛吏及毛色、乳房及蹄、神經、表被皮及肉樣膜、附蟬及羊鬚、騙汗及尿、旋毛の諸編、及び內外諸圖凡て二十六編に分ち、漢文にて記す。嘉永四年辛亥〔二五一一〕の著。

◎菊地東水は江戶の人、世々馬醫を以て著る。屢馬を解きて實驗し、且、博く內外の書に徵して本書を成すといふ。

かいはふずゐしんき

戒法隨身記　三卷　僧淨慧

佛教の戒法に就いて、三歸戒、五戒、及び、八齋戒の事を記述したる書なり。即ち、上卷は「三歸章」にして、三歸〔佛法僧に歸依すること〕の意義、佛法僧の字釋を始じめ、三歸戒の功德、破戒の罪等の事を述べ、中卷は「五戒章」にして、五戒〔殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒の五戒〕の意義及び功德より、破戒無戒の事等を述べ、下卷は「八齋戒章」にして、八齋戒前の五戒に、不坐高廣大床戒、不着花鬘香衣

等戒、不非時食戒の三を加ふ〕の功德、意義、作法、心得等より、六齋日、十齋日、八王日及び三長齋の事などを記したり。通俗平易なる假字交り文にて書かれたれば、佛教戒律の初步を容易に了解せんには適當なる書と云ふべし。貞享三年丙寅〔二三四六〕の著作に係れり。

◉淨慧は、本書の外に『十善戒法論』等の著あれとも、未だ其の詳傳を知る能はず。

かいびすうげん

海備芻言　寫本　一卷

我が海防に關する論述なり。西洋兵制の可否、大礮の利害、大艦の得失等を論じ、卷末に文化六年己巳〔二四六九〕二月林祭主の書上の寫を載せたり。

かいびぜんさく

海備全策　寫本　七卷　山鹿　高祐

海防の策に就て詳論したるもの。其の目を云へば、卷の一鎖國の大意、礮臺並に大礮玉藥之大意。卷の二砲臺並に大礮利害、大礮並に火藥、乘留並に舟戰。卷の三海岸戍兵之大意、農兵の大意。卷の四近海防禦並に築險。卷の五舟戰利害並に夷船打拂。卷の六離島防禦並に蝦夷。卷の七分武備之官並に學校等、以上十一項に分ちて論悉せり。

◉山鹿高祐は奥州會津の人、字を子敬、通稱を甚五右衞門と云ひ、素行、又、隱山等の號あり。幼にして穎敏、老成の風あり。林羅山の門に學び文武を兼修して其の業に達す。年三十一、淺野長直に聘せられて祿壹千石を受く。幾もなく仕を辭して教授に從ひ又著述を事とす。其の書を著して程朱を辯駁したるに罪を得て赤穗に幽閉せらる。宥されて後は幕府より處士を集めて教授するを禁ぜらる。蓋し當時由井正雪等の武士を養成して謀反を企てたるが如き惡例ありしに恐れてなり。然れども素行が教養勸渦の功は後年赤穗遺臣の如き志士を作れり。著書には武教本論、武教小學、武教要錄、聖教要錄、武事記、武教餘錄、治教餘錄、治平要錄、手教餘錄、百結字類、常用集、兵法神武雄備集、七書諺解、古今戰略考、四書句讀大全、神道書、山鹿語類、兵法或問、武經全書、武類全書、配所殘筆、謫居童問、童子問、中朝事實等あり。貞享二年乙丑〔二三四五〕九月二十六日、六十四歲にて歿す。

かいびやくづ

開闢圖　寫本　一折　鈴木　重胤

我が國神代の開闢說を圖解したるもの。臆斷不稽の想像圖に過ぎず。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕八月十五日稿し、安政五年五月六日補すとあり。

◉鈴木重胤の傳は『詞の麗芥』の下にあり。

かいひんづしよう

介品圖證　寫本　三冊

介類着色の圖譜なり。各、名稱を附して百三十七種を列擧す。

かいふ

介譜　二卷　大枝　流芳

貝類に因緣ある雜件を記したるものなり。詳しくは『貝盡浦の錦』の下に解題せり。『介譜』は該書の舊名なり。

かいふんき

解紛記　四卷　黑　庵

古今我が各國名冶の刀劍法を記したるもの。若物、炮物、數燒、古作その他とも詳細に其の要領を記す。慶長十二年丁未〔二二六七〕七月の作なり。

かいへんおそなへぐい

海邊御備愚意　寫本　一卷　松平　定信

寬政四年壬子〔二四五二〕十月晦日、著者が目附中川勘左衞門、石川六左衞門へ下附したる海防意見なり。全編半紙九枚より成る。

◉松平定信の傳記は『花月草紙』の下にかゝぐ。

かいほくじやくちうぞうしよもくろく

海北若冲藏書目錄　寫本　一卷　海北　若冲

一宗の藏書を、尋常版本、校本寫本、聚本假例、摸版等に分ちて數百の和漢書を列擧す。本書目は天明八年戊申〔二四四八〕四月二十七日菜が借寫するところなりと。

◉海北若冲の傳記は『和訓類林』の下にあり。

かいめいしえふ

階蓂詞葉　寫本　三卷

一名『本朝無題詩』によつて該題下に解題せり。

かいもくせう

開目鈔　二卷　僧　日蓮

日蓮宗の教義を敷演したる書なり。即ち、二乘作佛、久遠實成、本迹二門等の法門を述べて、法華經が他の諸經に勝れたることを論じ、例の如く、自宗を揚げ他宗を貶し、日蓮自身が法門の重器に當れることなどを陳辯したり。此の書は文永九年壬申〔一九三二〕の作にして、觀心本尊鈔、受職功德章、內證佛法血脈章等と共に、佐渡流竄中に成りしものなり。『縮刷藏經』霜帙第十卷に收めらる。註釋書には著者未詳の『開目鈔見聞』の四卷あり。

◉日蓮は日蓮宗の開祖なり。貞應元年壬午〔一八八二〕二月、安房國小湊村に生る。幼にして活潑英邁、二十一歲の時叡山に登り、深く天台宗の玄祕に達し、廣く諸宗の法義に涉れり。建長五年癸丑〔一九一三〕餘宗を排して一宗を創立し、龜山天皇の弘長元年辛酉〔一九二一〕北條時賴の爲に伊豆に流さる。四箇格言を唱へて、諸宗を痛罵せしを以てなり。後三年赦されて鎌倉に歸り、諸宗を誹謗する故の如し。文永八年辛未〔一九三一〕九月、時賴、日蓮を捕へて龍の口に斬らんとす。已にして死一等を減じ佐渡に流す。同十年癸酉、赦されて還り、甲州身延山を開きて一宗の本寺と爲す。弘安五年壬午〔一九四二〕十月、六十一歲にて入寂せり。其の著す所、本書の外、立正安國論、守護國界論、撰時鈔、受職法門鈔、內證血脈鈔、觀心本尊鈔、本門戒體鈔、立正觀鈔、教機時國鈔等の十數部あり。

かいやうせんでふ

海陽泉帖　二帖　藤原　佐理〔スケマサ〕

行草二體より成れる習字帖なり。文題には、海陽泉、曲石亭、望遠亭、石上閣、海陽湖、夕陽洞、清泉銘、遊海門峽等ありて、題名は文與第一によりて名つけられたるなり。

◉藤原佐理は關白實賴の孫にして、左近衞少將敦敏の子なり。天德天元の間、累官して參議に至り、從三位に敘せらる。正曆中太宰大貳となり、正三位に進み、官を罷めて歸り、後、兵部卿となる。佐理書を善くし、兼明親王、藤原行成と名を齊うして、當時の三筆と稱せらる。卒する年五十五。

かいらくゑんのき

偕樂園記　一折　德川　齊昭

天保十年己亥〔二四九九〕に作りたる碑文。書も景山の筆にて、全編篆書に作り、習字臨本として行る。

◉德川齊昭の傳は『食菜錄』の下にあり。

かいりくしよだうかうていき

海陸諸道行程記　寫本　一卷

全國海陸の行程里數を記載したるものにて、一名を『武跡考』といへり。延寶八年庚申〔二三四〇〕の寫本なり。

かいりくひつようしふ

海陸必用集　寫本　五卷

第一卷に山城。第二卷に山城、河內、攝津。第三卷に攝津、播磨。第四卷に播磨、備前、備中、備後。第五卷に安藝、周防、豐前、筑前、肥前、肥後、筑後。以上諸國中、その遊歷するに隨て、名所、社寺、遺蹤等の大略を記したるものなり。

かいりくろていみとりゑづ

海陸路程見取繪圖　寫本　一帖

大阪より對馬に至る里程附略地圖なり。何時の調製なるかを知らず。

かいれんへん

開匳編　二卷　僧　運敞

古來、弘法大師空海の著作なりと傳說せる『守護經釋』及『雜問答』の二書が、後人の僞作なる由を考論したるもの。即ち、二書の文を抄出して、其の杜撰誤謬の點を指摘論評し、以て二書が空海の親著に非さることを說明し、後人の僞作なりと斷定せり。就中、上卷は『守護經釋』に關し、下卷は『雜問答』に係る。貞享三年丙寅〔二三四六〕の著作なり。

◉運敞の傳は『三教指歸註删補』の下に在り。

かいれんへんべんぎ

開匳編辯疑　一卷　僧　運敞

前項に出したる『開匳編』に對する質疑に答辯したるもの。即ち、河內の覺彥阿闍梨が書を著者に寄せ『開匳編』中の疑點數箇條を擧げて、質問せしに因り、其の書束の文を擧げて、一々之れに答辯せり。貞享五年戊辰〔二三四八〕の著作にして、『三密觀辯疑』を合梓せり。

◉運敞の傳は『三教指歸註删補』の下に在り。

かいろあんしんろく

海路安心錄　一卷　坂部　廣胖

航海運送上の諸注意を記したるもの。凡そ暴風、大雨に遭ひし時の注意より、飲料水を取る方法等を圖解せり。文化十三年丙子〔二四七六〕三月の自序あり。

◉坂部廣胖の傳記は『算法點竄指南錄』の下にあり。

かいろしよはつとのこと

海路諸法度事　寫本一卷

後陽成天皇の天正二十年壬辰〔二二五二〕正月二十七日、諸國船手懸中へ布達したる乗船心得なり。船の貸借、荷物、運賃、下船、乗船、入碇、航路等に關する簡單なる假名書沙汰文なり。

かいんしうねんぺう

夏殷周年表　寫本一卷　平田　篤胤

夏殷周三代曆の眞僞を對表したるものなり。『三曆由來記』の第二十九條以下、劉歆三統曆譜の論を讀むもの、爲めに作れりといふ。男銕胤、孫延胤の同校するところなり。

◉平田篤胤の傳記は『古史傳』の下にあり。

かうあんやわ

幸庵夜話　寫本一卷　杉本　義鄰

内外古今の事實を記したるものなり。寶永六年己丑〔二三六九〕二月、著者武州大塚護國寺の門前なる渡邊幸庵といふものを訪問して其の實歷談を筆記したるもの。幸庵は天正十年壬午〔二二四二〕駿河國に生れ、家康、秀忠に仕へて諸所の軍事に從ひ、後、唐に渡り三十年を經て歸れりといふ。故に本書は多く自己の實歷軍談、入唐實況等より成る。

かういざつせう

更衣雜抄　寫本一卷

古來諸家の古記錄によりて、更衣に關する雜事を抄錄したる十餘枚の册子なり。

かううんせんしゅ

耕雲千首　二卷　藤原　親長

春二百首、夏百首、秋二百首、冬百首、戀二百首、雜二百首より成る。『續群書類從』三百七十八の上下、和歌部第十三に收めたり。

◉藤原親長の傳は『賀茂祭雜用料』の下にあり。

かううんろういかう

行雲樓遺稿　三卷　松島　坦

著者の詩文集なり。卷上古今體詩百十六首。卷中序十四首、記八首。論七首。卷下傳三首、書一首、題跋五首、雜著十五首。附、柏堂遺稿等なり。天保十一年庚子〔二五〇〇〕の自引あり。「曹丕曰、文章經國大業、不朽盛事、吾豈敢望之哉。薬水心曰、文章不足關世敎、雖工無益也、有旨哉言也。吾則志焉雖然、亦有不免孝存焉噫」といふ。

◉松島坦は儒者なり。履卿、元碩と字し、北渚と號す。信州諏訪の湖北に生る。家、醫を業とす。夙に父を喪ひ、諸國に游歷し、江戶の鹽谷世弘の門に在り、斷じて醫を廢し、專ら儒に決心す。既にして昌平黌に入り、後林祭酒の門に入り、業成り、最も詩文を善くす。天保十五年甲辰〔二五〇四〕正月、未だ志を得ずして病歿す、時に年三十一。

かううんろく

耕耘錄　寫本一卷　細木　瑞枝

土佐藩の農事に關し、田畑反別、稻種名稱、浸種、苗代、播種、耕耘、插秧、灌漑、肥培、春田耘、諸毛田耘、收穫、攻治、本貢、二番稻等を記述したるものなり。

◉細木瑞枝は土州の人、世々農人の頭役を勤め農事に精しければ、藩主擧げて此の書を作らしめたりきといふ。文久比の人なるべし。

かうゑいにつき

康永日記　寫本一卷

康永四年乙酉〔二〇〇五〕七月、八月間の日記なり。『園太曆』より拔抄したるものなるべし。

かうえうせう

香要抄　寫本二卷

香物に就きて和名漢名梵名等を記したるものなり。後白河天皇の保元二年丁丑〔一八一七〕の寫本に係る。

がうがいかう

聱牙遺稿　十卷　土井　有恪

著者の漢文集なり。第一に論。第二に策。第三に牋、疏、書、序。第四に序、引。第五に說、喩。第六に記。第七に解、辯、原、讀、書後。第八に題、跋、戒、文、賦、贊、銘。第九に碑誌、行狀、傳、紀事、雜文。第十に讀經雜話、法言、間對、偶錄等に類排して凡そ百餘編を載す。明治二十五年壬辰〔二五五二〕五月二十七日出版す。

◉土井有恪は伊勢津藩の儒者、字を士恭といひ聱牙と號す。齋藤拙堂に學び經史に通じ、文章辯舌を善くし、兼ねて書畫に巧なり。性放蕩不羈にして、行事人の意外に出で、往々人をして面色沮ましむることあり。其の著す所は本書の外に『聱牙齋存稿』三卷あり。

かうかうになるのでんじゆ

孝行になるの傳授　一卷　脇坂　義堂

或る人の繼母に仕へ兼ねて相談せるに、南部猿澤の孝子話を引きて慇に忍耐以て親に仕ふべき道を說き示したる小册子なり。

◉脇坂義堂のことは『孝子訓御撫育章』の下にあり。

かうがくひつき

講學筆記　三卷　中村　欽

學術講究の要義に關する隨筆。其の平素の講學討究を筆述せる漢文なり。鄒魯洛閩の學脈效果等を見るべし。寬保三年癸亥〔二四〇三〕增田謙之の序、露木篤の跋等あり。著者の歿後版する所なり。

◉中村欽は惕齋と號す。字は敬甫、通稱を七左衞門また仲二郎といふ。平安の儒者なり。少にして學に志し、門を杜ぢて潛考す。其の學性理を奉じ、天文地理博通せざるものなく、最も禮學に精し。當年の鴻儒伊藤仁齋と名を齊うせり。著書頗る多し。四書鈔說、近思錄鈔說、周易程傳鈔說、西銘鈔說、性理字義鈔說、孝經示蒙句解、四書示蒙句解、詩經示蒙句解、小學示蒙句解、近思錄示蒙句解、筆記周易本義、同易學啓蒙、同讀易要領、同書經集傳、同詩經集傳、同春秋胡傳、同禮記集說、同四書集註、同大學或問、同通書解、同西銘解、同大極圖說解、同律呂新書、同敬齋箴、易學啓蒙翼傳、學規假字直解、家禮訓蒙疏、愼終通考、追遠通考、愼終疏節、追遠疏節、親尊服義、入學紀綱、講學筆記、朱子爲學要言、增補訓蒙圖彙、古今州郡圖、學制考、本朝學制考、百官稱呼、韻學私言、文集、日鈔、天文考要、五緯行度圖譜、三器通考、三器考略、醫方三器通制、律尺考驗、姬鑑、四書、五經、小學、律呂新書、孝經集解等なり。元祿十五年壬午〔二三六二〕七月二十六日歿す、年七十四。

かうがくべんさくろく

講學鞭策錄　寫本一卷　佐藤　直方

朱子の書中より、學術の綱要に關するもの抄輯す。其の自跋中にも「今究其要而擧之、不過敬義兩言、而至於日新之效、上達之效、則全在平積累習熟而已矣」といへり。首に立志論を揭げ、好學論を以て終れり數十束あり。天和三年癸亥〔二三四三〕の自跋、翌貞享元年甲子九月十五日淺見安正の序あり。

◉佐藤直方の傳記は『道學標的』の下にあり。

かうがくろんせうかう

好學論照考　寫本一卷

程子の好學說に關する語句數句を摘抄したるものにて僅四枚に寫せり。

がうがさいそんかう

聱牙齋存稿　三卷　土井　有恪

著者生存中に其の文稿を編輯したるものなり。娶人論を始として幾多の人物論を揭げ漸次各文體に涉りて數十編を載す。明治二十一年戊子〔二五四八〕六月土井文次等の印刷に附したるものなり。

◉土井有恪の傳は『聱牙遺稿』の下にあり。

かうかしゅんじう

耕稼春秋　二册　土屋又三郎

農業につき氣候、土質の勘査、播種、培養等の順序を論じ、且、農具田形等を圖解したるものなり。寶永四年丁亥〔二三六七〕の著。

◉土屋又三郎は加賀國石川郡御田村の人、夙に父の後を襲ひて十村役を勤め一郡の勸農を司り、農政に從事すること三十年なりきといふ。東山天皇の元祿中、改作奉行園田左十郎といふもの罪を獲るに座せられて入獄したり。赦されて後は役を罷めて隱遁し直心野衲と號せりと。

かうき

江記　寫本三卷　大江　匡房

著者の記錄にして神事の儀式を記したるものなり。即ち伊勢敕使の事、賀茂祭の事、御禊の事、大嘗神會供物の事等の月あり。

◉大江匡房の傳記は『江家次第』の下にあり。

かうぎでん

生野銀山孝義傳　一卷　小川　式

但馬國生野銀山中なる孝子十三人を撰定して其の行實を記載したるもの。假名交り通俗文に記す。嘉永元年戊申〔二五〇八〕の自序、及び諸家の序あり。

◉小川式は豐後の人にして、民德と字す。

かうきやうかんごしつちう

孝經刊誤集註　一卷　氏家　顯

朱子の『孝經刊誤』に詳しく集註したるものなり。孝明天皇の嘉永四年辛亥〔二五一一〕の自序あり。北越中川敬の校正するところなり。著者氏家顯は仙臺の人にして、子德と字す。

かうきやうかんごしふかい

孝經刊誤集解　一卷　中村　欽

朱子の「孝經刊誤」に集解を加へたるものなり。元祿九年丙子〔二三五六〕六月、謙之の序あり。

◉中村欽の傳記は「講學筆記」の下にかゝぐ。

かうきやうかんごふかう

孝經刊誤附考　一卷　山崎　嘉

朱子の「孝經刊誤」に附したる自家の考證なり。

◉山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

かうきやうぐわいでんわくもん

孝經外傳或問　寫本四卷　熊澤　伯繼

孝道及び禮樂の事等を每或問的に假名書したるもの。跋に、「無用の長物語なれども、惑ひとけざれば、孝の正理あらはれ難し、出るに任かせて記し置きぬ。配所の紀念と思ふばかりなり。我よりは久しかるべき蹟なれど、しのばぬ人はあはれとも見じ」とあり。

◉熊澤伯繼は平安の人、有名の儒者なり。元和五年己未〔二二七九〕に生る。通稱を次郎八、又、助右衞門といひ、了介と稱し、息遊軒、蕃山等の號あり。中江藤樹を敬慕して陽明學を受け、後其の才學によりて備前芳烈公に仕へて祿三千石を受く。貧民を救ひ、教育を起し、佛寺を減じ淫祠を毀つ等の治蹟頗る大なり。晩年致仕して諸方に流寓せり。其の著す所大學小解、中庸小解、論語小解、孟子小解、孝經小解、易經小解、大學或問、集義和書、集義外書、源氏外傳、紫女物語、夜會記、宇佐問答、葬祭辯論、神道大義、二十四孝評、女子訓或問、何物語、はなむけ草、三輪物語及び本書孝經外傳或問等あり。元祿四年辛未〔二三五一〕七月廿七日、年七十三にて歿す。

かうきやうけんもんせう

孝經見聞抄　三卷　林　道春

孝經を註解したるものなり。全編本文の句々を大書し、本文より一字を低げ、片假名文を以て詳細に註解せり。萬治三年庚子〔二三二〇〕二月、三卷三冊に刊行す。

◉林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

かうきやうさんしやく

孝經參釋　一卷　川崎　履

孝經の本文の言句を補足して、章句を解釋せしめ、更に諸家の說を揭げて考註す。本文は墨書し、補足の文は朱書す。其の體は、例せば「仲尼閒暇無事而居」の如く〇點の文字を朱補せるなり。元治元年甲子〔二五二四〕の自序、慶應二年丙寅〔二五二六〕秋月種樹の序、三年沼田城主土岐賴之の序あり。

◉川崎履は魯齋と號す、通稱魯助、芝森元町に住し、後三田臺町に住す、沼田藩の儒者なり。明治二年大學大助敎に任ぜらる。能辯にて講義を善くせり。明治九年丙子〔二五三六〕六月廿日歿す年七十三。

かうきやうしづがしをり

孝經賤が枝折　一卷　中村　正尊

孝經の「用二天之道一因二地之利一愼レ身節レ用、以養二父母一此庶人之孝也」といふ句を和解敷衍して、庶民の本務等にまで實例を示して說き及ぼしたるもの。天明七年丁未〔二四四七〕四月に著し、寬政元年己酉〔二四四九〕仲春出版す。

◉中村正尊は肥後の人にして、別著に「肥後孝子傳」六卷あり。

かうきやうせうかい

孝經小解　二卷　熊澤　伯繼

孝經を詳解したるもの。一句每に、一字を下げ、平假名交り文、振假名付に記述せり。著者の歿後九十餘年にあたり、天明八年戊申〔二四四八〕姻戚源定環の出版するところなり。同人の漢文序あり。

◉熊澤伯繼の傳は「孝經外傳或問」の下にあり。

かうきやうつう

孝經通　二卷　蒔田　貞

孝經に。漢文詳註を加へたるものなり。卷端に「孝經說」數則を揭ぐ。天保十一年庚子〔二五〇〇〕の自序あり。男亮の校するところなり。

◉蒔田貞は越前の人にして、雁門と稱し、鳳齋と號す。儒者なり。本書の外に、古文尙書正讀、春秋經文纂疑等の著あり。

かうきやうはつき

孝經發揮　一卷　津坂　孝綽

孝經を註釋したるものなり。申請して津藩黌に刻して學中誦習の正本と定めたるものなり。文政六年癸未〔二四八三〕陽月の自序あり。

◉津坂孝綽の傳記は「絕句類選評本」の下にあり。

かうきやうりやうざうかんふ

孝經兩造簡孚　寫本一卷　東條　弘

孝經を考證したるものなり。孝經の意義より、作者其の他等博く他書に徵して詳に證論せり。弘化四年丁未〔二五〇七〕小西文二といふもの寫し取りたる由の奧書あり。

◉東條弘は上總國夷隅郡八幡原村の人、安永七年戊戌〔二四三八〕に生る。字は子毅、通稱は文藏、一堂と號す。夙に農醫等の家業を棄てゝ諸方に游學し師を訪ひ友を尋ねて專ら儒を學び、一たび弘前藩に聘せられて督學となり、後江戶各所に開塾して諸敎官、諸紳士、諸侯旗下等を敎授す。杉浦出雲守、福山藩阿部正弘其の他盛岡、庄內、沼津、敦賀、長島等の諸侯皆贄を執て師事す。著書三十餘部あり。安政四年丁巳〔二五一七〕七月十三日、年八十にて病歿せり。

かうきやうろうまんぴつ

孝經樓漫筆　四卷　山本　信有

著者の假名漫筆なり。卷一に歲德神より、いそがずばの歌に至る三十餘條。卷二に君子國より、日光梶に至る三十餘條。卷三に歌仙の裝束より、五果に至る六十餘條。卷四に門松注連より、山路箭に至る百數十條を揭ぐ。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕孫山本信錫の序を附して同年四冊に出版す。

◉山本信有の傳記は「作文率」の下にあり。

かうぎろく

孝義錄　官刻　五十卷

孝行者、忠義者、忠孝者、貞節者、兄弟睦者、家內睦者、一族睦者、風俗宜者、潔白者、奇特者、農業出精者等の列傳なり。寬政元年己酉〔二四四九〕幕府命じて諸國の孝義者を調査し、此の編を成さしむ。配列は、國別に記せり。附錄には復讎傳を載す。

かうくわんひつだん

江關筆談　寫本一卷　新井　君美

正德元年辛卯〔二三七一〕韓使趙泰億來朝の時、江戶本願寺に於て筆語したるもの。兩國の文獻故事より、情款戲謔の語にまで及べり。泰億君美の才華を感じ、當日の事を以て曠世の偉事とし、自ら輯めて一卷をなす。卽ち是れなり。室鳩巢の跋あり。

◉新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

かうぐわんもんしふ

江願文集　寫本六卷　大江　匡房

佛事追善の表白願文を集めたるものにして、凡そ三十編あり。編輯の年月を記さず。

◉大江匡房の傳記は「江家次第」の下にあり。

かうくんかくていきかう

江君確亭紀行　寫本三卷

文化六年己巳〔二四六九〕江相駿豆諸州に官遊したる時の詳細紀行なり。地誌地圖を詳にす、翌七年成島司直の漢文序あり。

がうけざかい

鄉家座階　寫本一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。天保年度より、文久年度に至る。

かうけしだい

江家次第　十九卷　大江　匡房

年中の常例、臨時の公事、大小の儀式等を詳記したるもの。後二條關白の命によりて撰集せるなり。本書の卷數に就て「江次第桃華御談義」には、「初は一書をなさず、公事の期に臨みて漸々之れを撰し、後人集めて二十卷となす」と云ひ、承應二年癸巳〔二三一三〕林鵞の跋には、「江氏眞本原二十一卷ありて其の第十六、第二十一の卷今皆脫して見えず、然るに今世の書本第十七卷內の數章を把り十六卷となして其の編次を足す。故に淺智の徒率ね多く考へず二十卷備れりと云ふ、余明りに固陋を忘れ粗校訂をなして其の舊章に復し以て十九卷となす」と云へり。今見るところ蓋し此の書なるか。

◉大江匡房は天性穎異、四歲にして、書を讀み、八歲にして漢史に通し、十一歲にして、詩を賦しきと傳ふ。長ずるに從て學、古今東西に通じ一世の學者を以て尊敬せらる。數朝に仕へ、官累進して正二位大藏卿となる。又三代の帝師たり。「江家次第」二十一卷の外、江記、江願文集、江談抄等を著し、鳥羽天皇の天永二年辛卯〔一七七一〕七十一にて薨す。世に江帥と稱す。

かうけしだいかう

江家次第考　寫本五卷

前項に出したる「江家次第」及び書中の記事に就きて考證論辯したるものなり。

かうけせう

香家抄　寫本三卷

香物に就き和名漢名梵名等を記したるものにて、保元年間の著作なるべしといふ。

かうげつゐんゆゐしよがき

高月院由緒書　寫一卷

三州松平郷高月院建立の由緒書上なり。松平の祖十代新田親氏、十一代弟泰親等の由緒より、高月院の草創由來寺領等を詳記す。『假修叢書二集』卷六に收む。

かうげんぶかん

江源武鑑　二十卷　佐々木氏郷

天文六年丁酉(二一九七)より、天正十年壬午(二二四二)に至る江州佐々木氏代々の日記にして、諸士の所領石高其の他等を記す。卷首には江陽屋形の次第、佐々木一家流々名字之分系、江陽代々之法制之條々、出軍制法等を載す。伊勢貞丈の『安齋隨筆』卷二十一によるに、本書は僞書なりと斷定して其の由來を敍し、江州坂本の農澤田喜太郎なるもの佐々木の嫡流なりと僞り、佐々木の系圖に加筆して己れが先祖にこしらへ、且、佐々木の日記と僞り本書を作りて刊行せるなりと云へり。故に書中の佐々木義實、義秀卿等は名ありて實體なきものなりと云ふ。然れども本書の記事諸家の舊記と符合する點も多ければ全く僞妄なりとも許し去るべからず。讀者宜しく鑑別する所ありて可なり。明暦二年丙申(二三一六)の版行。

かうげんろく

考原錄　一卷　僧　玄阿

佛教中、往生淨土の法門を說述したる書にして、說法元旨、悟道願生、利鈍通攝、唯心佛土、二種行人、持戒有無、世間捨世、自他二力、臨終念佛、魔佛對辯、勸勵學道等の題を設けて、念佛門の教義を論辯すること簡切明暢なり。靈元天皇の天和三年癸亥(二三四三)の著述に係る。

◎玄阿のことは『盂蘭盆法式略解』の下にあり。

かうごきかう

庚午紀行　寫二卷　植村　禹言

第一卷は播磨路の記として、寬延三年庚午(二四一〇)の春、浪華より兵庫に至り、高砂尾上までの事を記し、第二卷は「伊勢路の記」として、同年伊勢太神宮參詣の事を記せり。

◎植村禹言の傳は『廣大和名勝志』の下にあり。

かうこせうろく

好古小錄　二卷　藤井　貞幹

石碑、墓碣、筆蹟、繪卷物の圖を揭げ、及び、古器、古制の名義等に不審あるは諸書を考へて記せり。光格天皇の寬政六年甲寅(二四五四)六月正五位下橘經亮の序を載す。

◎藤井貞幹の傳は『逸號年表』の下に揭ぐ。

かうこにちろく

好古日錄　二卷　藤井　貞幹

古代の印章錢文等の圖及び其の考を記したるもの。凡て百十九條あり。寬政八年丙辰(二四五六)藤原資園の序あり。翌九年刊行す。

◎藤井貞幹の傳は『逸號年表』の下にあり。

かうごにつせう

庚午日抄　寫一卷　猪飼　彥博

漢書中より、抄出したる漢文集なり。今見る所著者の自筆本にして、東京帝國大學圖書館に貴重本として保存せり。

◎猪飼彥博の傳は『管子補正』の下にあり。

がうこふけん

江湖負暄　寫三卷　會澤　安

卷の上に建國之大體萬世と雖も不可變事より、無用の人を轉して有用の人となすべき事、附り雜民の員數を分け並に雜戶の制を立る事に至る四條。卷の中に無用の事を變して有用の業となす事より、糧食貯る事に至る十條。卷の下に祀禮を崇敬して天下の人心を一にする事の一條を詳論す。總て『新論』に漏れたる事を述べたる由序文に見えたり

◎會澤安の傳は『閑聖漫錄』の下にあり。

かうこよろく

好古餘錄　二冊　山崎　美成

藤井貞幹の『好古日錄』に擬して作れる雜考なり。部門を十に分ちて記せり。刊行の年月詳ならず。

◎山崎美成の傳は『耆家便覽』の下にあり。

がうさいざんかう

剛齋殘稿　三卷　江村　宗珉

著者の詩文集なり。第一卷、第二卷に詩。第三卷に文を揭げ、更に讚州歷覽志をも載せたり。延寶三年乙卯(二三三五)奧田子章が序、同元年甲子、男桃庵の記せる事績あり。元祿五年壬申(二三五二)出版す。

◎江村宗珉は友石と字し剛齋と號し、金庵と稱す。業を那波活所に受け菅山侯の儒官となる。致仕して京都に退りて後は紀伊侯の聘を辭し、又禁中侍醫の命をも辭せり。著述には剛齋雜編あり。後西院天皇の萬治四年辛丑(二三二一)七月十七日五十四歲にて歿せり。

かうさいぜんしふ

耕齋全集　二十卷　菊池　東匀

著者の詩文集なり。詩集十二卷。文集八卷。都合二十卷を四冊に版す。東山天皇の寶永三年丙戌(二三六六)の凡例序等あり。

◎菊池東匀、初めの名は東井、號を耕齋といふ京都の儒者なり。幼にして學を菅得庵に受け、年十六林羅山の門に入り、更に醫術に志し、年二十二再び江戶に出でて野間玄琢に醫を學び業成り儒醫を以て世に出づ。久留米侯に仕へ、後辭して京に塾を開く、弟子大に進む。寬文中薩州侯の賓師となりて、祿五百石を受く。著す所は本書の外に、本朝歷代名臣略傳、七書講義通考、百幅畫軸、逍遙小志等あり。天和二年壬戌(二三四二)十二月八日歿す、年六十五。

かうさうべつでふ

講草別帖　寫一冊　加藤　友德

親に事へ、敬を盡し、用を節する等の修身事項を書きたるものなり。著者が主家の庶子が他家の養子たりし時作りて與へたるものなりといふ。

かうさかはんさいのき

高坂半齋記　寫一卷　高坂　半齋

內に「田中兵部殿關ケ原の御陣の時、江戶川先登之話」と題せる、僅六枚の覺書なり。今、內務省の寫本による。

かうさくしき

耕作私記　寫一冊　土屋　時英

農事に關する雜記なり。東山天皇の寶永四年丁亥(二三六七)著作したるものなり。

かうさくわ

耕作話　寫一卷　中村　喜時

稻穀作法を記したるもの。著者が產地津輕地方に於ける實驗と見聞とによりて成れるものなり。後桃園天皇の安永五年丙申(二四三六)の作。著者中村喜時は津輕郡堂野前村の農なり。

かうさつじげん

好察邇言　一卷　長尾　龍

說樂不惱解、遠旨辭の題下に不易假名書に說明を與へ、末に至仁愛世の歌、至誠感神の歌二首を揭ぐ。文政二年己卯(二四七九)五代秀堯、崛餘居士等の序、滕惠之の跋等あり。

◎長尾龍の傳記は『創業垂統』の下にあり。

かうざんさうし

高山操志　二卷　金井　之恭

偉人高山彥九郎の傳記及び同人に關する書類、詩文和歌等古今諸大家のを網羅編輯したるもの。文久二年壬戌(二五二二)編者の序あり、同明治二年の後序に、此の書編輯後七年間篋底に放在したりといへり。諸家の序跋を附すること多し。

◎金井之恭は上野の人にして、通稱文八郎と云ひ、金洞また梧棲と號せり。

かうざんじえんぎ

高山寺緣起　寫一卷　僧　高信

栂尾高山寺の事歷沿革を記したるものなり。後深草天皇の建長五年辛丑(一九一三)三月官命によりて注進するところなりといふ。

かうざんじしよゐんのき

高山寺諸院記　寫一卷

栂尾山高山寺なる方便智院、十無盡院、觀海院、報恩院、覺閑院、善財院、三學院、西本坊、北坊、清水坊、妙華山院、山坊、寶性院、西谷坊、客坊、藤井坊、高德院、華嚴、地藏院、錢山院、南坊等以上二十一坊の歷代法脈等を記す。寬文五年乙巳(二三二五)實辨といふ人寫取の奧書あり。

がうしうあねがはせんき

江州姉川戰記　寫一卷

元龜元年庚午(二二三〇)江州姉川に於ける織田信長德川家康と、淺井長政、朝倉義景との合戰始末を記したるもの。但し織田家の討んとせる長政に義景の加勢せるより、織田家は更に家康の援勢を得て遂に勝利を得たるなり。

がうしういつけいろく

江州一景錄　三卷

此書題して「三井寺濫觴江州一景錄」といふ。湖邊八景中に於て三井寺景のみを擧げたる故、一景錄とは名けたるなるべし。三井寺濫觴建立の事より、同寺の沿革緣起を旨と記述したるものなり。

がうしうぶけこじやうき
江州武家古城記　冊一巻
應仁元年丁亥(一四六七)より、元和七年辛酉(一六二一)に至る江州なる武家古城等に關する雜記也。

がうしうよごのしやうかつせんおぼえがき
江州余吾庄合戰覺書　冊一巻
天正十一年癸未(一五八三)江州余吾庄に於て豊臣秀吉、柴田勝家の合戰の有樣を時の人の筆錄し置けるものなり。

かうしかくん
岡氏家訓　一巻　岡田　阜
修身齊家處世修業のこと等を詳細に假名文に綴りたるもの。寛政二年庚戌(一七九〇)平安伊藤榮吉の序、翌三年上田篤の跋あり。諸文によれば、本書は嘗て藩侯の命して出版せしめたるものといふ。
◎岡田阜の傳は「鵜鴨文鈔」の下にあり。

かうしきでん
高識傳　冊五十六巻　加固　周之
漢晉數百部によりて、彼土の雜事件百千件を雜記せるもの。寛政十年戊午(一七九八)の自序、文化十四年丁丑(一八一七)門人太田善世の序等あり。全編漢文にて記し、序目一册を附し、總て五十七册に寫傳す。

かうしくめたらうりやくき
孝子久米太郎略記　冊一巻
羽太　正養
江戸牛込御納戸町居南久米太郎といふもの父母に仕へて至孝なるより、寛政二年庚戌(一七九〇)官より白銀五枚の賞を得たる事ありき。本書は同人孝行の大略を記す。同じく寛政二年の編にかゝる。
◎羽太正養の傳は「休明光記」の下にあり。

かうしくわんゆうき
高子觀遊記　冊一巻　新井　君美
霧島嶽、湯中火、阿蘇山、富士嶽等漢文記事なり。長崎の人高子遊山といふもの昔時壯遊の勝を圖して、其の記を著者に囑し作らしめたるものといふ。享保五年庚子(一七二〇)春三月白石の序に見ゆ。
◎新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

かうしけう
孝子敎　一巻　秋葉　忠和
孝親の道理、方法、注意等を書けるものなり。漢文五字句に綴りて子女の誦讀に便せり。光格天皇の天明中に作る。

かうしけうせうかい
孝子敎鈔解　一巻　高井　伴寛
前に解題せる秋葉忠和の「孝子敎」を註解したるものなり。殊に頭書には假名書にして童蒙の爲めに講むと解するとに其の便を計れり。天保七年丙申(一八三六)著し、明治十四年版行せらる。
◎高井伴寛は字を思明、通稱を文左衛門と云ひ、關山と號す。江戸の小說家にして芝伊皿子に住す。著す所、三國妖婦傳、孝子敎物語、水滸傳、應仁記、星月夜顯晦錄、那智龍白絲等あり。天保九年戊戌(一八三八)十二月二十三日、七十七歲にて歿す。

かうしじふごらうでん
孝子十五郎傳　一巻　林　信充
武藏國埼玉郡下早見村の農民十五郎といふもの、其の母に仕へて孝を盡したる事を綴りたるものなり。中御門天皇の享保十八年癸丑(一七三三)の作。
◎林信充は一名を愈といひ、字を士厚、春察といひ、榴岡と號す。林學士信篤の子なり。幕府に仕へて大學頭となる。其の著には、聖象編、詩法蠡測、越後孝婦傳、越中孝子傳、本朝世說、續國史等あり。寶曆八年戊寅(一七五八)十月十一日年七十八にて歿す。

かうじせう
香字抄　冊一巻
香の各種に關し和漢の諸書中より抄出したるもの。末に眞臘二年癸未(一八八三)三月十八日醍醐寺に於て就華實胤記す由あり。「續群書類從」八百九十四上中下雜部四十四に收めたり。

かうしだいせう
江次第鈔　冊六巻　一條　兼良
大江匡房の「江家次第」を抄錄したるもの。奥書に「異本に云く愚勘を以て抄出せしめ畢ぬ。定て僻事等あらか、後成恩寺殿御判」とあり。後成恩寺は兼良の事なり。
◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下に出づ。

がうしだいたうくわおだんぎ
江次第桃華御談議　冊一巻　一條　兼良

大江匡房の「江次第」中の事實につきて考論註釋したるもの。正德二年壬辰(一七一二)左近衛權中將藤原朝臣寫本の奥書あり。
◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

がうじつきかう
嘉日紀考　冊二巻
德川氏祖先以來、本枝末葉に至る略歷譜なり。甕遲の日一日より三十日までの順序によりて記し、卷首に法號のいろは索引をも掲げたり。安永三年甲午(一七七四)藤原忠寄(大久保)が、大澤信亮、多賀常政等の藏本によりて寫本せる奥書、天明八年戊申(一七八八)屋代弘賢が、忠寄の書によりて寫本せる由の奥書、寛政六年甲寅(一七九四)某の岡田寒泉の書によりて寫本せる由の奥書等あり。

かうしふ
交集　冊一巻
和漢の雜說を交々摘錄採集せるものなり。年代著者共に詳ならず。

かうしふぶんぶのぎ
講習文武議　冊一巻　大村　庄助
文武の道に關して數十項を述べ、能く其の講習の方法等を說きたり。著者が自己の實歷當時の世風等をも評記して、文武講習の要義を詳述したるものなり。
◎大村庄助は細川越中守の臣大村源内の弟なり、好墨萬冥の名あり。後、松平越後守に仕へ世子仙千代の保佐たりき。

がうじつ

かうしみちのき
庚子道能記　一巻　武　女
享保五年庚子(一七二〇)著者が尾張國より、江戸へ歸れる折の日記なり。和漢の學に長けたる才女と見えて意も調も共に見るべきもの多し。清水濱臣標註を加へ、橘千蔭、村田春海の序を添へて文化六年己巳(一八〇九)出版す。
◎武女は享保の頃、いと時めきたる某侯の寵愛を受けたる白拍子なりといふ。

かうしやうだいりうたあはせ
康正內裡歌合　冊一巻
後土御門院女房、一條兼良、貞常伏見殿、轉法輪實量等の他の五十番歌合なり。題殘菊、水鳥、松雪深、忍久戀、祝言等の題にて、康正元年己亥(一四五五)十二月二十七日催すところなり。

かうじやうねんろく
江城年錄　冊一巻
後水尾天皇の元和十年甲子(一六二四)より、同寛永四年丁卯(一六二七)に至る三年間。德川家の日記大略なり。

かうしよ
香書　冊三巻
香道に關して精しく說明したるものなり。源平香、雛波名所香、三夕香、源氏薫物香、煙寺香、星合香、御客香、一二三香等以下數十項に分けて說明例示す。薫藥小本三册に作れり。

かうしようせんてん
考證千典　十巻　村田　了阿
天地事物に就き解說考證し、いろは分とす。例へば、一者萬物始、以呂波、皇爲始、反魂樹、聖帝化子規等あらゆる物件故事以下數百件を考證せり。皆漢文にて記す。
◎村田了阿の傳記は「異域同事錄」にあり。

かうしよう
語學考證　冊一巻　石橋　眞國
音學、動詞の變化、延約、音便、字音等の事を說明したるものなり。
◎石橋眞國は安政二年乙卯(一八五五)歿す。

かうしんきどくしや
孝心奇特者　冊一册
幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せる孝心奇特者にして、文化元年甲子(一八〇四)より、文政三年庚辰(一八二〇)に至る。

かうしんきどくしやまうしわたし
孝心奇特者申渡　冊一册
幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せり。文化八年辛未(一八一一)より、天保元年庚寅(一八三〇)に至る。

かうしんしやきどくちやうじゆしや
孝心者奇特長壽者　冊二册
幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せるもの

にて慶應元年乙丑〔二五二五〕より、同四年に至る。

かうしんべん

庚申辯　寫本一巻　野村瓢彦

猿田彦命を庚申神として祭ることの謬見俗說なることを辯明したるものなり。文化十三年丙子〔二四七六〕成る。

◉野村瓢彦は土佐國朝峰神社の神主なり。

かうしんろく

考信錄　五巻　僧　玄智

淨土眞宗の儀式、其の他、宗門に關する諸般の事項の緣由故實を考證記述し、兼ねて眞宗の法門に論及したる隨筆にして、凡べて三百三十七箇條あり。考證論述各々其の據る所ありて、皆以て參考の資に供するに足る。後桃園天皇の安永三年甲午〔二四三四〕の正月、江戸築地の舍所に於て集錄せしもの

◉玄智の傳は「大谷本願寺通紀」の下に在り。

かうせいくわんまんぴつ

好青館漫筆　三巻　木下元喬

主として支那の諸典籍中より種々抄出したる隨筆なり。東山天皇の寶永四年丁亥〔二三六七〕同六年の序同五年の自跋あり。

◉木下元喬の傳は「煙草唱和集」の下にあり。

かうせいこたうめいかん

校正古刀銘鑑　四巻　本阿彌長根

古刀銘を國別に校正記載したるものにて、第一巻に五畿內、東海、東山、北陸、山陰。第二巻に山陽、南海。第三巻に西海。未勘國、番鍛冶、官名、年號、位列、㼊、造。第四巻に叉文、帽子、鑪研、刀劒新論等の目に依て記載せり。文政十三年庚寅〔二四九〇〕著者の緒言あり。

◉本阿彌長根は菅原姓、光悦七世の孫にして、徳川幕府の研師なり。通稱を喜三次といふ。明和五年戊子〔二四二八〕に生れ、長じて狂歌を好み、手柄岡持に學びて、淺黃裏成の號を受けたり。芍藥亭、三橋亭歸遊等は其の別號なり。著書は本書の外に、「一字題百首」あり。狂歌數百首を集めたるものなり。弘化二年乙巳〔二五〇五〕二月十日、七十八歲にて歿せり。江戸谷中三崎町妙法寺に葬れり。

かうせいさうきよくしんぷ

校正箏曲新譜　一巻

豐高と共に箏曲の譜を編集したるものなり。嘉永五年壬子〔二五一二〕高木善次郎校正發行す。著者は安村檢校と記せり。

かうせいひやうえつじんだいのまき

校正評閱神代卷　二巻　松下見林

日本書紀の中神代の卷を校正して、大書小書を分ち、文字音訓を正したるものなり。

◉松下見林の傳は「異稱日本傳」の下にあり。

かうせいぶさうがふしふ

校正撫箏雅譜集　三巻

舊名によりて「撫箏雅譜集」の題下に解題せり。

かうせいぶんしふ

江西文集　寫本一巻　中江原

著者の文集なり。末に門人に與へたる書牘文及び質問に答へたる文編等を揭ぐ。明和三年丙戌〔二四二六〕幽閑室主人の奥書あり。

◉中江原は近江國高島郡小川村の人。通稱與右衞門、字は惟命、號に藤樹、默軒、顧軒等あり。幼にして擧止衆兒と異り、頗る學を好む。年十一祖父の伯耆侯加藤泰興に仕ふるに從ひ、又主の移封に從つて伊豫大洲に移れり。一日大學を讀み、「自天子至於庶人、壹是皆以脩身爲本」の句に至り、大に感歎して曰く、幸に此の經今に存せり、聖人學び至らざる理あらんやと、是れより經學に志すこと愈深く、自ら聖學を興すを以て任とし、奮勵力學、只管斯道徹底を期せり。初、程朱の學を奉じ、後全く王陽明を信じ學問躬行の兩全を基とせり。年二十七、母を孝養せんために、侯に骸骨を乞へども許されず、遂に逃れ歸り、專ら孝養に從ひ、傍ら修身道德を講じて人を敎訓し、一鄉爲めに孝敬の人となる。當時呼んで近江聖人といへり。其の學德の著名なること遠近上下の間知らざるものなし。大洲侯敬慕して復召せども應ぜず、備前侯の厚聘をも病老を以て辭せり。著書には、醫筌、醫方規矩、醫方摘要、翁問答、孝經啓蒙、江西文集、鑑草、金匱要說、原人持敬圖說、神方奇術、小醫南針、大學解、大學啓蒙、大學考、中庸解、藤樹規、日用要方、婦人房中補益論、文錄太乙神經、藥方規矩、湖洞集抄、橫蘇錄、論語解、論語鄉黨翼傳等あり。慶安元年戊子〔二三〇八〕八月二十五日歿す、年四十一。備前侯殊に悼惜して神主を設け、春秋親ら祭る。また世近江聖人を以て稱し、鄉黨今に至るまで尊崇敬愛し、墓前を過ぐるもの必ず拜跪すといふ。

かうせきろく

考績錄　寫本二十五巻

慶長以來、近く文政に至るまでの功績者を分類列擧して、各姓名の下に役名、免役、卒去の年月日等を記載したるもの。其分類總目を列擧すれば、卷一に御大老、御老中、京都所司代、大阪御城代、高家。卷二に大御留守居、御側御用人、若年寄、郡奉行、御奏者番、寺社奉行。卷三に大阪御定番、伏見奉行、駿府御城代、駿府勤番組頭、御側衆、御留守居。卷四に大御番頭。卷五に御書院番頭、御書院番組頭。卷六に御小姓組番頭、御小姓組與頭、田安家老、一橋家老、淸水家老。卷七に大目付、町奉行、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行。卷八に御旗奉行、御鎗奉行、御留守居番。卷九に甲府勤番支配、長崎奉行、箱館奉行、京都町奉行、大阪町奉行、日光奉行、山田奉行、奈良奉行、堺奉行、佐渡奉行、駿府町奉行、浦賀奉行、駿府御定番、大阪御船手。卷十に禁裏付、女院付、仙洞付、二條御城番、駿河淸水御船手、荒井奉行、三崎奉行、走水奉行。卷十一に小普請組支配。卷十二に新御番頭、淸水勤番支配、百人組之頭。卷十三に御儒者、御持弓頭、御持筒頭、定火消役。卷十四に御先手御弓頭、御先手御鐵砲頭。卷十五に御目付。卷十六に御使番。卷十七に御徒頭。卷十八に小十人頭。卷十九に御臺樣御用人、御廣鋪御用人、御納戸頭附り元方、拂方、御腰物奉行。卷二十に御船手頭、御鐵砲方、二丸御留守居、御勘定吟味役、奥御右筆組頭。卷二十一に桐之間番頭並に御廊下番頭、御女中樣方御用人。卷二十二〔以下西丸方〕に執政並に高家、御側御用人、若年寄、御奏者番、御側衆、御傳並に御留守居、御書院番頭、御書院番組頭、御小姓組番頭、御小姓組與頭。卷二十三に桐之間番頭、桐之間組頭並に燒火之間番頭、御留守居、御旗奉行、御鎗奉行、新御番頭、御持弓頭、御持筒頭。卷二十四に御先手御弓頭、御先手御鐵砲頭、御簾中樣御用人並に御廣敷御用人、御目付、御徒頭、小十人頭、御裏御門番之頭、御納戸頭、奥御右筆組頭。卷二十五〔大御所樣附〕に執政、若年寄、御側衆、御小姓組番頭、御小姓組與頭、御目付、御徒頭、小十人頭等より追加一冊あり。元祿二年より、寶永七年に至る奥詰衆五十五人を列擧す。全部二十五冊紺表裝に作れり。

かうせつこのてがしは

巷說兒手柏　一巻　柳亭種彥

脫走士度會靜馬父子の孝貞を中心に物したる世話小說なり。明治十九年出版す。

◉柳亭種彥の傳記は「修紫田舍源氏」の下にあり。

かうせつひかん

巷說祕鑑　寫本十五巻

當時の諸侯及び諸士諸民に關する雜說雜評なり。主に風俗人情の價値に就て論じたるなり。後桃園天皇の安永五年丙申〔二四三六〕中秋の作、十五巻合して三冊より成る。

かうせんぜんじごろく

高泉禪師語錄　廿四巻　僧　高泉

黃檗宗性慜高泉和尙の語錄なり。卷一に武州維摩堂語錄。卷二に奥州甘露山法雲院語錄。卷三、四に山城州法苑禪院語錄。卷五に加州明法山獻珠禪寺語錄。卷六に山城州天王山佛國禪寺語錄。卷七、八に攝州摩耶山佛日禪寺語錄。卷九に山城州天王山佛國禪寺語錄。卷十、十一、十二に問答機緣。卷十三に拈古。卷十四に頌古、代古。卷十五に佛事。卷十六、十七、十八に法語。卷十九に佛祖贊。卷二十より二十四に至る贊なり。門弟子道亨、道淸等の編輯するところなり。貞享元年甲子〔二三四四〕全部八冊に版行す。

◉僧高泉の傳記は「山堂淸話」の下にあり。

かうそうわさん

高僧和讃　一巻　僧　親鸞

三國七高僧の敎語及び行狀を和述讃詠したるものなり。七高僧とは、龍樹、天親〔印度〕曇鸞、道綽、善導〔支那〕源信、源空〔日本〕にして、淨土宗、眞宗等に尊崇する所なり。本書は全編流暢なる七五調を以て作られ、四句を一首とし、總計百十九首あり。撰述の年時は詳ならず。本書の外に、「淨土和讃」及び「正像末和讃」あり。併せて「三帖和讃」〔別に解題あり〕と通稱し、眞宗々徒が朝夕佛前に於て誦味するもの也。註釋書の中、「三帖和讃」を通釋せしものは、彼の下に讓り、今斯の「高僧和讃」のみに係るものを擧ぐれば、大可知空の「高僧和讃思齊記」十卷、月筌宗信の「高僧和讃嘗解」十二卷、報專坊慧雲の「高僧和讃興宗記」四卷、桃華坊知洞の「高僧和讃講林」六卷、快樂院柔遠の「高僧和讃撮釋」四卷等あり

◉親鸞の傳は「敎行信證」の下に在り。

かうそうわさんはうきゑほん

高僧和讃方軌會本　三巻　僧　僧鎔

同二帖を說くに、先づ造意總別、制時前後、科節有無、名類通局、入文正釋等の五門に分ち釋けり。赤松晋恩の校正するところなり。
◉僧鎔は子練と字し、空華廬と號す。もと越中國新川郡市江村の民家に生れ、性銳敏にして、威嚴仁慈の相を具す。十一歲の時猊渓禪師の弟子となり、二十一歲にして、浦山善巧寺の法を嗣ぎ、三十一歲にて講筵を開き、四十一歲にて侍講の命を受け、五十一歲にて官に拜し、六十一歲にて寂す。諡して明教院といふ。

かうそさんたんしき
高祖讚嘆式　寫本一卷　僧　高辨
眞言宗の高祖弘法大師の偉績高德を讚嘆せる講式書なり。一名を「弘法大師講式」とも云ふ。著述の年時詳ならず。
◉高辨は明惠上人といふ。高倉天皇の承安三年癸巳(一八三三)紀伊國有田郡に生る。幼より遁世の志あり、九歲の時父母の喪に遇ひ、之れより高雄山文覺を始めとして、各專門の智識に就き佛經を精究し、遂に高山寺に住職して賢首の宗を唱ふ。光顯抄、座禪次第、入解脫義、三時禮釋、觀音講式等を著す。寛喜四年壬辰(一八九二)正月十九日寂、年六十。

かうそだいしじつろく
高祖大士眞實錄　二卷　僧　日證
日蓮上人の繪入傳記なり。誕生、登山、出家、遊學、宗旨建立等より、示寂、收取遺骨、御書目錄に至る凡て三十二項より成る。天和三年癸亥(二三四三)開版、文化十一年甲戌(二四七四)再刻す。
◉日證は法華宗圓明院の住職なり。

かうそだん
高祖談　五卷　蘭室老人
蘭花に關する諸說を纂輯したるものなり。孝明天皇の嘉永五年壬子(二五一二)著述せらる。

がうそんてびき
鄕村手引　寫本二卷
東山天皇の元祿より仁孝天皇の天保に至る米澤藩の農政及び其の他の制度凡て五百餘條を輯錄したるものなり。

かうたいしき
交替式　寫本一册
諸國々司の交替式を記したるものなり。仁孝天皇の天保五年甲午(二四九四)伴信友の訓點寫本もあり。本書は石山寺にありて經文の裏書なり。本書は「國史大系」の第十三卷にも收めたり。該書の延曆交替式は故朝田由豆流の刊本を原とし、貞觀交替式と、延喜交替式とは故飯田武鄕が曾て前田侯爵家所藏本を傳寫校訂したる一本を原とし、類聚三代格、政事要略、令集解、其の他の諸書を參考し標註を加へたりといへり。

かうたいふだんわ
幸太夫談話　寫本一卷
幸太夫といふもの露西亞國に行きて歸る。其の談話につきて彼國朝野の雜談を聞きがきしたるもの。乙丑とのみありて年號を詳にせず。

かうだうあきのひかり
香道秋農光　三卷　大枝　流芳
香道に關する故實諸注意等を記せり。上卷香道具立物盤之圖。中卷中古組十品。下卷新組十品等を圖解し、附錄香志一卷には、流書なる香木の出所、香道調度の來源等を記せり。享保年中の作。
◉大枝流芳の傳は「貝盡浦の錦」の下にあり。

かうだうのきのたまみづ
香道軒乃玉水　二卷　大枝　流芳
香道の故實圖式等を記したるもの、上卷に當流新形香火道具圖式、新組香十品並に盤立物圖式。下卷に香道傳來の事、宴席不時の香の事、名香燒く事、香爐の灰あらためる事、香貯なく事、香携る事、旅香爐の製、志野三の道具の事、數紙の事、さし札の事、香屛風の事、二種の名香の辯、六十一種の名香の說、新燒組香の式等を記し、新六十種名香名寄並に小引、和香木名よせ並に小引等を附錄とす。元文元年丙辰(二三九六)霜月吉日作。
◉大枝流芳の傳は「貝盡浦の錦」の下にあり。

かうだうひでん
改正香道秘傳　四卷　大枝　流芳
古來書き傳へたる香道の奧祕書數部を訂正合卷したるもの。即ち雪月花集一卷、香合式一卷、宗温六十一種香名一卷、宗入香爐圖一卷、建部隆勝香之記一卷、十組香之記一卷、香之記一卷等なり。附錄二卷を「奧之栞」と名けて、右各書中の難解を說明し、且、香道に關する雜事を記して初心の人に便す。

元文四年己未(二三九九)出版す。
◉大枝流芳の傳は「貝盡浦の錦」の下にあり。

かうだんせう
江談抄　寫本五卷　大江　匡房
卷一には公事二十五條、攝關家事七箇條、佛神事十五條。卷二には雜事四十七條。卷三にも雜事七十四條。卷四には詩事百二十一條。卷五にも詩事七十一條あり。皆大江家の人々の談話を記しゝものなり。
◉大江匡房の傳記は「江家次第」の下にあり。

かうだんせうかうほん
江談抄校本　寫本二卷　荷田　在滿
江談抄を校訂して、間々略註を加へたるものなり。
◉荷田在滿の傳は「羽倉考」の下にあり。

かうぢぐわんねんだいじやうゑのき
康治元年大嘗會記　一卷　藤原　賴長
近衞天皇の康治元年壬戌(一八〇二)十一月十六日大嘗會を行はせらる。本書は其の詳細を記したるもの。「群書類從」卷九十四、公事部十六に收めたり
◉藤原賴長の傳記は「台記」の下に揭ぐ。

かうちじやうかのづ
高知城下之圖　寫本二折　竹內　重意
高知城下の圖は、文化九年壬申(二四七二)鄕正業の依賴に依て實見したるものを、天保十二年辛丑(二五〇一)自ら圖畫したりといふ。一折は附錄にして、單に當國格式順、御役場付、御門番衆、神祇祭禮佛閣會日、櫻馬場御定日等を記したり。著者竹內重意は香美郡韮生鄕太良丸の住人なりと。

かうづけこくし
上野國志　寫本一卷　近藤　守重
上野國建置、沿革、疆域、里程、形勝、風俗、關梁、城壘、鄕名、村里、山川、租稅、土產、古戰場、馬數、市日、溫泉、社寺、氏族、古蹟等を記す。寛政五年癸丑(二四五三)の自序に、友人淳岳翁といふものより、地理書を得、それを熟覽して、足らざるを補ひ、誤れるを正して、他日國史を作らん時に料にせんとて作り置ける由を云へり。
◉近藤守重の傳記は「右文故事」の下にあり。

かうづけこくし
上野國志　寫本十五册　林　義鄕
六國史以下國史、倭名抄、風土記、東鑑等より、上野國地誌に關する事實を抄錄したるもの。先づ十四郡を分ちて、郡每に鄕名、村名を標記し、一郡の歷史的事實を擧げ、また神祠寺院、城下、古城、舊蹟、名所、寶物、溫泉、古文書等を揭げて、古今の變遷等を考記せり。安永三年甲午(二四三四)の自序を附す。卷數に定めなく、十五册に寫傳せり。著者林義鄕は上野國眞田の農民なり。

かうづけこくしりやく
上野國志略　寫本二册　吉澤　好道
卷首に「舊聞傳上野國郡村故事」と題して、碓氷郡、利根郡、群馬郡、並に高崎の事を揭げ、境界、里程、石高、社寺、名所、舊蹟等を記す。分類秩序等なくして、隨筆樣に記さる。

かうづけさんぴかう
上野三碑考　寫本一卷
上野國なる多胡郡和銅碑、金井澤神龜碑、山名上村辛巳碑、の三古碑を考證說示したるもの。天保七年丙申(二四九六)十月二十三日の自序あれど、姓名を記さず。

かうづけたごごほりひでふ
上毛多胡郡碑帖　一卷
上野國多湖郡なる古碑を寫したるものなり。同碑は和銅四年辛亥(一三七一)の建立にかゝる。卷首に「辨官府上野國、片岡郡、綠野郡、甘樂郡、並三郡內三百戶、郡成給年成、多湖郡、和銅四年三月九日甲寅、宣左中辨正五位下多治比眞人、太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、右大臣正二位藤原尊」と記し、字體を論じ、また碑圖を揭ぐ。

かうづけのくにぐんきやうき
上野國郡境記　寫本二册
上野國各郡の村名石高を記すのみ。但「上野國郡分村名石高帳」の所載とは異同あり。卷末には十四郡の總高五十二萬五千二百二十一石三斗一升三合三勺、村數千百三十七箇村、外寺社領二百十四箇所、高五千三百三十、石七升六合と記せり。

かうづけのくにぐんわけそんめいこくだかちやう
上野國郡分村名石高帳　寫本一册
本書はもと「上野國十四郡村名石高帳」と題したり

きといふ。利根郡に九十五箇村、吾妻に七十九、碓氷に六十二、片岡に三、多湖に三十九、甘樂に百七十九、綠野に五十八、群馬に百八十六、那波に四十八、佐位に三十五、勢田に百三十、山田に五十四、邑樂に七十四、新田に八十村等を擧げて、石高、領主、地頭、寺社領等の別をも記せり。

かうづけのくにしんめいちやう
上野國神名帳　一卷
上野一國なる神社總て五百七十九座を郡別に記載したる神明帳なり。「群書類從」卷二十三に收む。

かうづけのくにぜんづ
上野國全圖　一折　村上　吾雄
上野一國の地圖にて山川社寺を色彩し、村名一千餘を擧ぐ。
◉村上吾雄のことは「南本所竪川邊圖」の下にあり

かうづけのくにたごほりむらむらめいさいしよ
上野國多湖郡村々明細書　寫本一卷
上野國多湖郡十三箇村の石高戶口數等を列記したるものなり。

かうづけのくににつたごほりむらむらめいさいしよ
上野國新田郡村々明細書　寫本一卷
上野國新田郡三箇村の石高戶口數等を記したるものなり。

かうづけのくににつたゆらおんかでんき
上野國新田由良御家傳記　寫本一卷
上野國新田由良の家傳を覺書したるものなり。其の系圖より始めて、諸記錄、諸選事等を記錄せり。別に「柿沼覺書」と題するものと同書なり。柿沼長門守筆記す。

かうづけのくにむらむらめいさいしよ
上野國村々明細書　寫本一卷
上野、下野、常陸、下總中の、村持寺持の神社を記したるもの。上野にては僅に山田郡二箇村、邑樂郡五村。新田郡、三箇村のみにして、只神社の大略を記すのみなれば「上野國村々明細書」の抄錄なるべし。

かうづけめいせきし
上野名蹟志　七卷　富田　永世
上野國總說より、國號名義、田畝租稅雜貢物、雜事、國造大守、守介、守護、貢馬牧名等より各郡別に郡の名義和名抄鄕名、神名帳神名、屯倉等を擧げ、村里山川等の名蹟を摘錄したるもの。嘉永六年癸丑〔二五一三〕出版し、明治十五年壬午〔二五四二〕又活刷に附したり。著者富田永世は上野國の人なり。

がうどうがくだうようしんしふ
鼇頭學道用心集　一卷　僧　道元
「永平初祖學道用心集」に精細なる頭註を施したるものなり。「洞山悟本大師學要」を附錄とす。明治十年丁丑〔二五三七〕出版す。
◉道元の傳記は「正法眼藏」の下にあり。

がうどうくじき
鼇頭舊事紀　十卷　度會　延佳
「舊事紀」に頭書校正したるものなり。著者の跋に曰く、「舊事本紀傳寫の誤あげて云ふべからず、亦後人の加ふところのものあり、予明曆年中よりこのかた、匪、異本をもとめて、讎校し、且、古事記、日本紀、及び其の他の古書に因て闕文を補ひ誤字を正して以て家藏とす」云々と。蓋し靈元天皇の延寶六年戊午〔二三三八〕十二月の跋なり。
◉度會延佳の傳は「伊勢大神宮神異記」の下にあり

がうどうこじき
鼇頭古事記　三卷　度會　延佳
「古事記」を補刪訂正したるものなり。靈元天皇の貞享四年丁卯〔二三四七〕二月なる校正者の跋に、「予多年善本を故家に求め、數部を得て讎校し、誤字を正し闕語を補ひ、衍文を删り訓點を加へて頗る以て是正す」云々とあり。
◉度會延佳の傳は「伊勢大神宮神異記」の下にあり

かうとうひやくゑい
江頭百詠　一卷　寺門　靜軒
著者の詩集。最後に自記の「靜軒居士誌碣誌」を附したり。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕に成る。小濱大海、村田敬所、鯉翁友山等の序、及び題詩あり。
◉寺門靜軒の傳は「江戶繁昌記」の下にあり。

がうどうむもんくわん
鼇頭無門關　一冊
無門和尙の公案四十八則に、本邦僧侶の首書を加へたるものなり。現在流布せるものは、寶曆二年壬申〔二四一二〕の刊行にかゝれり。

かうとめいかしせん
江都名家詩選　三卷　山崎　美成
江戶諸名家の詩を選集したること其の名の示すが如し。
◉山崎美成の傳記は「書家便覽」の下に揭げたり。

がうなのうたがたり
寄居歌談　五卷　近藤　芳樹
詠歌上調に關する事、文字に關する事、其の他歌法古歌等につきてあらゆる意見を記したるもの。天保十三年壬寅〔二五〇二〕にかける自序中に「此の寄居の庵にひとりゐて、心に浮ぶよしなし事をはじめ、國々のすき人たちのいひおこせたる歌や何やを書いやりすてんが惜(アタラ)しさに、今年よりと思ひ立ちてかきつゞくる寄居歌談、ものくるはしきすさびわざと、しりうごつ人もありなんかし」とあり。寄居庵の號は最初諸方を遊歷して一定の家居なかりしに取りしといふ。孝明天皇の元治元年甲子〔二五二四〕出版す。
◉近藤芳樹の傳記は「淫祀論」の下にあり。

かうにほんしよきくんたいい
校日本書紀訓大意　寫本一卷　源　昌
日本書紀の訓點の誤謬を正さんとて、其の趣意を發表したるもの。例するに、同書の漢籍の文法に倣ひたるものゆゑ、倭訓を施しがたきものあり、又字面には拘はらずして古言を施し添ふべきあり、又神代の二卷は殊更に序、亂れたるものなれば心の限り考へ訂して舊復すべしなど論述せり。光格天皇の文化九年壬申〔二四七二〕二月四日の記に係る著者源昌は鈴屋翁本居宣長の門人なり。

かうのうき
行嚢記　寫本十卷　櫻　錢喜
文化六年己巳〔二四六九〕九月十一日より、同十二年六月朔日に至る間に、武藏國中の諸名所、東海道筋の諸風景、兩野松島等の勝地などに出入して、其の經歷を細かに記したるものなり。各卷順路の地名を示し、大略を記し、往々景圖をも揭げたり。自序あり。著者櫻錢喜は江戶の人なれどいまだ其の詳傳を知りがたし。

かうのうき
江濃記　一卷
江州佐々木氏に關する記錄なり。佐々木兩家（六角、京極）由緖之事、六角京極合戰之事、尼子合戰之事、京極生害之事、雲州佐々木出來有事、淺井出身、野羅田合戰之事、土岐殿之事、永井が事、齋藤が事、土岐殿齋藤不和之事、道三最後之事等を記せり。「群書類從」卷三百八十七、合戰部第十九に收む。

かうのうせう
行嚢抄　寫本百十一冊　江間　氏親
道中の記にて西遊行嚢抄、陸西遊行嚢抄、海上行嚢抄、紫遊行嚢抄、東遊行嚢抄、南遊行嚢抄、越遊行嚢抄、神風行嚢抄等より成る。而して西遊は江戶より中仙道を經て攝州大阪に至り、中國九州まで海陸兩道の事を記し、舟路の方は、海上行嚢抄と名け、陸西遊は京西の岡通長州下の關までの陸路順を記し、次に海上は大阪川口より四國九州の船路、並に浦々船着の善惡を記し、紫遊は豐前小倉城下より九州の內諸城下の事を記し、東遊は京都より東海道を經て江戶に至るまでを記し、南遊は城州伏見より、南に赴き、巨椋堤を通り、長池玉水を歷て南都に至り、河內紀州勢州に出る道を記し、越遊は江州大津より、湖邊南北の兩道を經て越前に入り、加賀能登越中越後を經て信州淺間の麓追分の驛に至る道を記し、神風は勢州追分の宿より神戶城下阿濃津、松坂の城下を經て神路山に至り、又紀州路の事を記せり。其の收むるところは街衢の追分、大小道路、小經樵路、城下の順道間道、行程の遠近、村里、名所、舊蹟、社閣、故事、來歷、詩歌、紀行、嶮難要梱、地理の善惡、河渡の深淺、渉渡の大事、國郡界、領界支配所等を記せり。元祿九年丙子〔二三五六〕の自序あり。
◉江間氏親は飛驒の人にして、兵學家なり。此の書も軍用の爲なるよし記せり。

かうはうしせう
杲寶私鈔　十二卷　僧　杲寶
眞言宗の教義を述へたる漢文の隨筆にして、凡べて七十六箇條あり。毎條、眞言宗の經典の文、及び著者已前の諸祖の解釋を擧げ、更に著者の考究論議を附したり。今其の目次の一斑を擧ぐれば、結集者事、三密具不具事、四曼同體別體事、心法形色事、卽身成佛身心勝劣事等（首卷）を始め、顯密二戒同異事、心經顯密分別事、定性二乘囘心向大事、以天台所立三諦爲密教初門事、密教意許五性各別義然